
東 松 山 市

城 敷 遺 跡 Ⅱ

高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ
(第1分冊)

2 0 1 1

独立行政法人 都市再生機構
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 錢塚・城敷遺跡空中写真（合成）



1 城敷遺跡遠景



2 第4号溝跡第4地点出土須恵器大甕



1 城敷遺跡出土須恵器



2 第112号住居跡出土遺物

城敷遺跡の紹介

城敷遺跡は、東松山市南東部の水田の下に眠っていた遺跡です。発掘調査をしたところ、都幾川に運ばれた土砂によってつくられた、古い自然堤防という高まりの上に立地していたことがわかりました。

城敷遺跡は、古墳時代前期（約1,700年前）と古墳時代中期後半～古墳時代後期初頭（約1,500年前）の二つの時期に栄えたムラ跡です。このムラは、蛇行して流れる大溝の兩岸に営まれていました。大溝には、堰や護岸のような木組み施設を造り、水量や流れの方向をコントロールしていました。また水際に降りるための階段もみつけたことから、大溝の水を生活に取り込んでいた様子もわかりました。大溝の中からは、たくさんの土器と木製の農具や扉板などの建築部材が出土しました。これら木の道具が日常生活で使われていたことを伝えています。このほかに、お祭りに使う滑石の道具を作った工房跡や、近畿地方や東海地方で生産された貴重な初期の須恵器も多く発見されています。

序

埼玉県は、高次の都市機能と発達した交通網を備えた利便性の高い「都市の魅力」と、水と緑に恵まれた「田園の魅力」を併せ持っています。この特性を生かして、快適でゆとりとにぎわいのある生活が送れる都市の創造を目指し、都市基盤の整備と景観に配慮したまちづくりに取り組んでいます。独立行政法人都市再生機構による高坂駅東口第二地区特定土地区画整理事業「うらら花 高坂」では、「あふれる自然と都市機能が調和した、うららかな街」づくりがすすめられています。

事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として城敷遺跡^{しろしき}、銭塚遺跡^{ぜにつか}、反町遺跡^{そりまち}の3遺跡が知られております。これら埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関が慎重に協議した結果、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課(当時)の調整により、当事業団が独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社の委託を受けて実施いたしました。

城敷遺跡は、古墳時代を中心に栄えた集落遺跡です。遺跡の中を蛇行して流れる大溝に沿って、たくさんの住居跡や掘立柱建物跡などが発見され、数多くの土器や石製品・鉄製品・木製品が出土しました。木製の農具や容器の出土は、当時の人々が「木の道具」を日常生活で使っていたことを伝えています。また、重厚な扉板や建築部材も多くみられ、大規模な建物跡が存在したことがわかります。さらに古墳時代の土器では、近畿地方で焼かれ、この地に運ばれてきた貴重な須恵器の出土が特筆されます。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社、東松山市教育委員会並びに地元関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成23年8月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 藤野 龍 宏

例言

1. 本書は東松山市に所在する銭塚遺跡第2次・第3次、城敷遺跡第1次・第2次・第3次調査のうち、城敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。なお、城敷遺跡は「じょうしき」「しろしき」の二通りの呼称があり、第1次・第2次調査時は前者で呼称したため、略号を「JOSK」とした。その後、東松山市教育委員会との協議で「しろしき」と呼称することとなったため、本書では全てその呼称で統一した。
城敷遺跡第1次調査
城敷遺跡第1次（JOSK 1次）
埼玉県東松山市大字高坂347-1 他
平成15年5月14日付け 教文第2-12号
平成15年5月14日付け 教文第2-13号
銭塚遺跡第2次調査・城敷遺跡第2次調査
銭塚遺跡第2次（ZNDK 2次）・城敷遺跡第2次（JOSK 2次）
埼玉県東松山市大字高坂340-2 他
平成16年4月27日付け 教文第2-9号
銭塚遺跡第3次調査
銭塚遺跡第3次（ZNDK 3次）
埼玉県東松山市大字高坂307-1 他
平成17年4月11日付け 教文第2-2号
城敷遺跡第3次調査
城敷遺跡第3次（SRSK 3次）
埼玉県東松山市大字高坂361-2 他
平成20年8月22日付け 教文第1150-2号
3. 発掘調査は、高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。城敷遺跡第1次・第2次及び銭塚遺跡第2次・第3次は、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、都市基盤整

備公団（当時）の委託を受け、また城敷遺跡第3次は、埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、都市再生機構の委託を受け、それぞれ財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業
「高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査」（平成15～18年度）
「高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査委託」（平成20年度）
整理報告書作成事業
「高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査（整理）委託」（平成19～23年度）
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3の組織により実施した。
銭塚・城敷遺跡の発掘調査は、平成15～17年度・平成20年度の4カ年に実施した。
城敷遺跡第1次調査
平成15年4月8日～平成15年4月30日
平成15年8月1日～平成16年3月24日
担当者 伴瀬宗一・池田恵美子
銭塚遺跡第2次・城敷遺跡第2次調査
平成16年4月8日～平成17年3月31日
担当者 富田和夫・伴瀬・福田聖・菊地真・松本美佐子・池田
銭塚遺跡第3次調査
平成17年4月1日～平成18年3月31日
担当者 富田・大谷徹・山本靖・菊地
城敷遺跡第3次調査
平成20年9月16日～平成20年10月31日
担当者 岩瀬譲・竹田裕子
整理報告書作成事業は、平成19年4月9日から平成21年3月24日まで富田が、平成21年4

月8日から平成22年3月24日まで富田・山本が担当して実施し、銭塚遺跡第2次・第3次調査及び城敷遺跡第1次・第2次調査のうちZZグリッド以北の範囲について、事業団報告書第369集『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』を第1巻として刊行した。

平成22年4月8日から平成23年6月30日まで山本が担当して実施し、城敷遺跡第1次・第2次調査のうちAグリッド以南の範囲と、城敷遺跡第3次調査について事業団報告書第382集『城敷遺跡Ⅱ』(本書)を第2巻として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、城敷遺跡第1・2次・銭塚遺跡第2・3次は株式会社GIS関東に、城敷遺跡第3次は中央航業株式会社に委託した。

空中写真撮影は、城敷遺跡第1次は朝日航洋株式会社、城敷遺跡第2次・銭塚遺跡第2次・第3次は中央航業株式会社、城敷遺跡第3次は株式会社GIS関東に委託した。

7. 出土木製品の樹種同定(平成19年度)と放射性炭素年代測定・大型植物遺体同定・骨同定(平成20・21年度)はバリノサーヴェイ株式会社に、ウルシの赤外分光分析(平成20年度)は漆器文化財研究所に、放射性炭素年代測定(平成22年度)は株式会社加速器分析研究所に委託

した。

平成20年度の樹種同定は、独立行政法人森林総合研究所能城修一氏に依頼した。

巻頭図版(口絵)の遺物写真については、小川忠博氏に委託した。

8. 初期須恵器の型式・時期・産地等については、酒井清治氏に御指導を頂いた。
9. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は山本が行い、福田の協力を受けた。
10. 出土品の整理・図版作成は山本が行い、富田・瀧瀬芳之・松本の協力を受けた。
11. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、V-1を独立行政法人森林総合研究所能城修一氏、V-2をバリノサーヴェイ株式会社、V-3を株式会社加速器分析研究所、その他を山本が行った。
12. 本書の編集は山本が行った。
13. 本書にかかる諸資料は平成23年7月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
14. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。(敬称略、50音順)
- 東松山市教育委員会 飯塚武司 上原真人
金井塚良一 酒井清治 篠原祐一 能城修一
宮本長二郎 山田昌久

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

C-15グリッド北西杭の座標は、X=470.00m、Y=-38230.00m。北緯36°00′24.09″、東経140°15′38.40″である。（小数点以下第3位切捨て）

C-15グリッドの世界測地系による換算値はX=824.57m、Y=-38522.39mである。（小数点以下第3位切捨て）

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばR-8グリッド等と呼称した。

4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡
SA…柱穴列 SK…土壇 SD…溝跡・大溝跡
SX…性格不明遺構 Pit・P…小穴・柱穴

5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

全測図 1:300
遺構図 1:60
遺構図（溝跡） 1:80
遺構図（大溝跡） 1:120
遺構拡大図 1:30・1:30
土師器・須恵器・拓影図等 1:4
砥石など 1:3

管玉・石製模造品・紡錘車 1:2

鉄製品 1:2

小玉・白玉・白玉製作剥片 1:1

木製品農具等 1:4

木製品建築部材等 1:6

6. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

断面を黒塗りしたものは須恵器。また、彩色等が施された土器についてはその範囲に、木製品については炭化範囲に網を掛けて示した（赤彩10%・施軸20%・炭化範囲20%）。

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。

8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は、吉ヶ谷・土師器・須恵器・磁器・陶器と表記した。

・口径・器高・底径は、cm単位である。

・（ ）内の数値は推定値、それ以外の数値は計測値・現存値を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-雲母 B-片岩 C-角閃石 D-長石
E-石英 F-軽石 G-砂粒子 H-赤色
粒子 I-白色粒子 J-白色針状物質
K-黒色粒子 L-その他

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No、赤彩の有無、煤の付着、推定される須恵器産地、調整や整形の特徴などを記した。

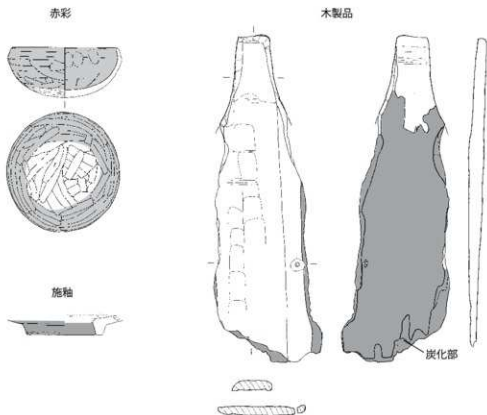
・石製品類の観察表については、長さ・幅・厚さをcm単位で、重さをg単位で表記した。なお、重さが0.1gに満たないものについては、計量が不能なため、0.0gと記入した。

9. 本文中の遺構所属時期については、古墳時代前期・中期等の表記以外に銭塚・城敷Ⅲ期、反

町編年Ⅱ-1等の記載がある。前者は、事業団報告書第369集「銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ」、後者は事業団報告書第380集「反町遺跡Ⅱ」に示した時期区分を使用した。

10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25000地形図、及び東松山市都市計画図1/2500を編集・使用した。

遺物図



遺構図



遺物・遺構図表現方法

目次

巻頭図版

城敷遺跡の紹介

序

例言

凡例

目次

(第1分冊)

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書の作成	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4
II 遺跡の立地と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	8
III 遺跡の概要	12
1. 銭塚・城敷・反町遺跡群の概要	12
2. 城敷遺跡の概要	16
IV 遺構と遺物	31
1. 竪穴住居跡	31
2. 掘立柱建物跡	219
3. 柱穴跡	238
4. 土壇	238
5. 溝跡	254
6. 大溝跡	266

(第2分冊)

7. その他の遺構と遺物	381
(1) 滑石製品集中地点	381
(2) 木田跡	418
(3) 性格不明遺構	418
(4) グリッドピット	422
(5) グリッド出土・表採遺物	422
V 自然科学分析	437
1. 銭塚・城敷遺跡出土木材の樹種	437
2. 城敷遺跡の自然科学分析	465
(1) 樹種同定	465
(2) 放射性炭素年代測定	473
(3) 大型植物遺体同定	475
(4) 骨同定	483
3. 城敷遺跡における放射性炭素年代	488
VI 調査のまとめ	492
1. 発掘調査の成果	492
2. 初期須恵器について	501
3. 滑石製品の製作について	508
4. 大溝と木製品の出土状況について	512

写真図版

挿 図 目 次

(第1分冊)

第1図	埼玉県の地形	6	第32図	第5号住居跡出土遺物(2)	49
第2図	東松山周辺の地形	7	第33図	第6号住居跡・出土遺物	50
第3図	早保低地の微地形と集落	7	第34図	第7号住居跡	52
第4図	周辺の遺跡	9	第35図	第7号住居跡出土遺物	53
第5図	銭塚・城敷・反町遺跡群の基本順序	12	第36図	第8号住居跡・出土遺物	62
第6図	銭塚・城敷・反町遺跡の調査区位置図	13	第37図	第9号住居跡	63
			第38図	第9号住居跡出土遺物	64
第7図	銭塚・城敷・反町遺跡のグリッド網図	14	第39図	第10号住居跡	65
			第40図	第10号住居跡出土遺物	66
第8図	銭塚遺跡・城敷遺跡全体図(1/2500)	17	第41図	第11号住居跡・出土遺物	67
			第42図	第12号住居跡	68
第9図	城敷遺跡全体図(1/1250)	18	第43図	第12号住居跡出土遺物(1)	69
第10図	城敷遺跡全測図(1)	19	第44図	第12号住居跡出土遺物(2)	70
第11図	城敷遺跡全測図(2)	20	第45図	第13号住居跡・出土遺物	73
第12図	城敷遺跡全測図(3)	21	第46図	第14号住居跡	74
第13図	城敷遺跡全測図(4)	22	第47図	第14号住居跡出土遺物	75
第14図	城敷遺跡全測図(5)	23	第48図	第15号住居跡	76
第15図	城敷遺跡全測図(6)	24	第49図	第15号住居跡カマド	77
第16図	城敷遺跡全測図(7)	25	第50図	第15号住居跡出土遺物	78
第17図	城敷遺跡全測図(8)	26	第51図	第16号住居跡	80
第18図	城敷遺跡全測図(9)	27	第52図	第16号住居跡出土遺物	81
第19図	城敷遺跡全測図(10)	28	第53図	第17号住居跡	82
第20図	城敷遺跡全測図(11)	29	第54図	第17号住居跡出土遺物	83
第21図	第1号住居跡	32	第55図	第18号住居跡	84
第22図	第1号住居跡出土遺物(1)	33	第56図	第18号住居跡出土遺物	85
第23図	第1号住居跡出土遺物(2)	34	第57図	第24・19号住居跡	86
第24図	第2号住居跡	36	第58図	第24号住居跡出土遺物	87
第25図	第2号住居跡出土遺物(1)	37	第59図	第20号住居跡カマド	87
第26図	第2号住居跡出土遺物(2)	38	第60図	第20号住居跡	88
第27図	第3号住居跡	43	第61図	第20号住居跡出土遺物	89
第28図	第3号住居跡出土遺物	45	第62図	第21号住居跡	91
第29図	第4号住居跡・出土遺物	46	第63図	第21号住居跡出土遺物	92
第30図	第5号住居跡	47	第64図	第22号住居跡	93
第31図	第5号住居跡出土遺物(1)	48	第65図	第22号住居跡出土遺物	94
			第66図	第23号住居跡	95

第67図	第23号住居跡カマド	96	第102図	第40・41・42号住居跡出土遺物	
第68図	第23号住居跡出土遺物	97			142
第69図	第25・26・27号住居跡	99	第103図	第43号住居跡・出土遺物	143
第70図	第27号住居跡掘り方	100	第104図	第44・45号住居跡	145
第71図	第25・27号住居跡出土遺物	101	第105図	第44号住居跡出土遺物	146
第72図	第28・29・30号住居跡(1)	102	第106図	第45号住居跡出土遺物	147
第73図	第28・29・30号住居跡(2)	103	第107図	第46号住居跡	148
第74図	第28号住居跡出土遺物	103	第108図	第46号住居跡出土遺物	149
第75図	第28・29・30号住居跡出土遺物	104	第109図	第47号住居跡(1)	150
第76図	第31号住居跡・出土遺物	106	第110図	第47号住居跡(2)	151
第77図	第32号住居跡・出土遺物	107	第111図	第47号住居跡出土遺物(1)	152
第78図	第34・33・36号住居跡(1)	108	第112図	第47号住居跡出土遺物(2)	153
第79図	第34・33・36号住居跡(2)	109	第113図	第48号住居跡	154
第80図	第34号住居跡出土遺物(1)	110	第114図	第48号住居跡出土遺物	155
第81図	第34号住居跡出土遺物(2)	111	第115図	第49・50号住居跡	156
第82図	第35号住居跡	113	第116図	第49号住居跡出土遺物	157
第83図	第35号住居跡カマド	114	第117図	第51号住居跡	159
第84図	第35号住居跡出土遺物(1)	115	第118図	第51号住居跡カマド	160
第85図	第35号住居跡出土遺物(2)	116	第119図	第51号住居跡出土遺物(1)	161
第86図	第37号住居跡(1)	118	第120図	第51号住居跡出土遺物(2)	162
第87図	第37号住居跡(2)	119	第121図	第52・115号住居跡	164
第88図	第37号住居跡カマドA	120	第122図	第52号住居跡出土遺物	165
第89図	第37号住居跡出土遺物(1)	122	第123図	第53号住居跡	166
第90図	第37号住居跡出土遺物(2)	123	第124図	第53号住居跡出土遺物	167
第91図	第37号住居跡出土遺物(3)	124	第125図	第54号住居跡	169
第92図	第37号住居跡出土遺物(4)	125	第126図	第54号住居跡出土遺物	170
第93図	第38・39号住居跡(1)	130	第127図	第55号住居跡	172
第94図	第38・39号住居跡(2)	131	第128図	第55号住居跡出土遺物	173
第95図	第38号住居跡カマド	132	第129図	第56・72号住居跡・出土遺物	174
第96図	第38・39号住居跡出土遺物(1)		第130図	第57号住居跡	175
		133	第131図	第58号住居跡	176
第97図	第38・39号住居跡出土遺物(2)		第132図	第58号住居跡出土遺物	176
		134	第133図	第59号住居跡・出土遺物	177
第98図	第42号住居跡	136	第134図	第60号住居跡	178
第99図	第42号住居跡出土遺物	138	第135図	第60号住居跡出土遺物	178
第100図	第40号住居跡・出土遺物	139	第136図	第61号住居跡	179
第101図	第41号住居跡	141	第137図	第62号住居跡	180

第138区	第62号住居跡出土遺物 (1)	181	第175区	第1号掘立柱建物跡・出土遺物	220
第139区	第62号住居跡出土遺物 (2)	182	第176区	第3号掘立柱建物跡	221
第140区	第63号住居跡	183	第177区	第3号掘立柱建物跡出土遺物	222
第141区	第63号住居跡出土遺物	183	第178区	第4号掘立柱建物跡出土遺物	222
第142区	第64号住居跡	184	第179区	第4号掘立柱建物跡	223
第143区	第64号住居跡出土遺物	185	第180区	第5号掘立柱建物跡	224
第144区	第65号住居跡	186	第181区	第6号掘立柱建物跡	225
第145区	第65号住居跡出土遺物	187	第182区	第7号掘立柱建物跡・第18・41号土 城 (1)	226
第146区	第66号住居跡	188	第183区	第7号掘立柱建物跡・第18・41号土 城 (2)	227
第147区	第66号住居跡出土遺物	189	第184区	第7号掘立柱建物跡・第41号土城出 土遺物	228
第148区	第67号住居跡	189	第185区	第8号掘立柱建物跡	230
第149区	第68号住居跡	191	第186区	第9号掘立柱建物跡	231
第150区	第68号住居跡出土遺物 (1)	192	第187区	第10号掘立柱建物跡	232
第151区	第68号住居跡出土遺物 (2)	193	第188区	第11号掘立柱建物跡	233
第152区	第68号住居跡出土遺物 (3)	194	第189区	第12号掘立柱建物跡・第23号土 城 (1)	234
第153区	第68号住居跡出土遺物 (4)	195	第190区	第12号掘立柱建物跡・第23号土 城 (2)	235
第154区	第69号住居跡出土遺物	197	第191区	第23号土城出土遺物	235
第155区	第69号住居跡	198	第192区	第16号掘立柱建物跡	236
第156区	第70号住居跡・出土遺物	199	第193区	第17号掘立柱建物跡	237
第157区	第71号住居跡・出土遺物	199	第194区	第1号柱穴列	238
第158区	第73号住居跡・出土遺物	200	第195区	土城 (1) 第9・43・10・8・4・3号土 城	239
第159区	第74号住居跡	201	第196区	土城 (2) 第2・7・1・6・5号土 城	241
第160区	第74号住居跡出土遺物	202	第197区	土城 (3) 第39・11・15号土城	242
第161区	第75号住居跡	204	第198区	土城 (4) 第22・25・24・17・26・14・12・ 13・19・20・21・28・29号土城	244
第162区	第75号住居跡出土遺物	205	第199区	土城 (5) 第42・27・40号土城	246
第163区	第77号住居跡・出土遺物	206	第200区	土城出土遺物 (1)	247
第164区	第108号住居跡	207	第201区	土城出土遺物 (2)	248
第165区	第108号住居跡出土遺物	208	第202区	土城出土遺物 (3)	249
第166区	第109号住居跡・出土遺物	209	第203区	土城出土遺物 (4)	250
第167区	第110号住居跡	210			
第168区	第110号住居跡出土遺物	210			
第169区	第111号住居跡・出土遺物	211			
第170区	第112号住居跡	213			
第171区	第112号住居跡出土遺物 (1)	214			
第172区	第112号住居跡出土遺物 (2)	215			
第173区	第113号住居跡・出土遺物	217			
第174区	第114号住居跡	218			

第204图	土城出土遗物 (5)	251			281
第205图	土城出土遗物 (6)	252	第229图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (7)	282
第206图	沟跡 (1) 第1·31号沟跡	255			
第207图	沟跡 (2) 第14·15·2·3号沟跡	257	第230图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (8)	283
第208图	沟跡 (3) 第8·9号沟跡	258			
第209图	沟跡 (4) 第8·32·6·7号沟跡	259	第231图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (9)	284
第210图	第7号沟跡出土遗物 (1)	260			
第211图	第7号沟跡出土遗物 (2)	261	第232图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (10)	285
第212图	第7号沟跡出土遗物 (3)	262			
第213图	沟跡 (5) 第5·33号沟跡	265	第233图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (11)	286
第214图	第1·5号沟跡出土遗物	266			
第215图	第4号沟跡地点配置图	267	第234图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (12)	294
第216图	第4号沟跡第4地点 (1)	268			
第217图	第4号沟跡第4地点 (2)	269	第235图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (13)	295
第218图	第4号沟跡第4地点遗物出土状况 (1)	271			
第219图	第4号沟跡第4地点遗物出土状况 (2)	272	第236图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (14)	297
第220图	第4号沟跡第4地点遗物出土状况 (3)	273			
第221图	第4号沟跡第4地点遗物出土状况 (4)	274	第237图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (15)	299
第222图	第4号沟跡第4地点遗物出土状况 (5)	275			
第223图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (1)	276	第238图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (16)	300
第224图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (2)	277			
第225图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (3)	278	第239图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (17)	302
第226图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (4)	279			
第227图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (5)	280	第240图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (18)	303
第228图	第4号沟跡第4地点出土遗物 (6)				
			第241图	第4号沟跡第5地点	305
			第242图	第4号沟跡第5地点遗物出土状况	306
			第243图	第4号沟跡第5地点出土遗物 (1)	307
			第244图	第4号沟跡第5地点出土遗物 (2)	308
			第245图	第4号沟跡第5地点出土遗物 (3)	309
			第246图	第4号沟跡第5地点出土遗物 (4)	312
			第247图	第4号沟跡第5地点出土遗物 (5)	

	313		341
第248图	第4号沟跡第5地点出土遺物(6)	第268图	第4号沟跡第6地点出土遺物(13)
	314		343
第249图	第4号沟跡第6地点(1)	第269图	第4号沟跡第6地点出土遺物(14)
第250图	第4号沟跡第6地点(2)	345
第251图	第4号沟跡第6地点(3)	第270图	第4号沟跡第6地点出土遺物(15)
第252图	第4号沟跡第6地点遺物出土狀況			346
	(1-1)	第271图	第4号沟跡第6地点出土遺物(16)
	320		348
第253图	第4号沟跡第6地点遺物出土狀況		第272图	第4号沟跡第6地点出土遺物(17)
	(1-2)	350
	321	第273图	第4号沟跡第6地点出土遺物(18)
第254图	第4号沟跡第6地点遺物出土狀況			352
	(2-1)	第274图	第4号沟跡第7地点(1)
	322		354
第255图	第4号沟跡第6地点遺物出土狀況		第275图	第4号沟跡第7地点(2)
	(2-2)	355
	323	第276图	第4号沟跡第7地点遺物出土狀況	
第256图	第4号沟跡第6地点出土遺物(1)		(1-1)
	324		356
第257图	第4号沟跡第6地点出土遺物(2)	第277图	第4号沟跡第7地点遺物出土狀況	
	325		(1-2)
第258图	第4号沟跡第6地点出土遺物(3)	357
	326	第278图	第4号沟跡第7地点遺物出土狀況	
第259图	第4号沟跡第6地点出土遺物(4)		(2-1)
	327		358
第260图	第4号沟跡第6地点出土遺物(5)	第279图	第4号沟跡第7地点遺物出土狀況	
	328		(2-2)
第261图	第4号沟跡第6地点出土遺物(6)	359
	329	第280图	第4号沟跡第7地点遺物出土狀況(3)
第262图	第4号沟跡第6地点出土遺物(7)	360
	334	第281图	第4号沟跡第7地点出土遺物(1)
第263图	第4号沟跡第6地点出土遺物(8)	361
	336	第282图	第4号沟跡第7地点出土遺物(2)
第264图	第4号沟跡第6地点出土遺物(9)	362
	337	第283图	第4号沟跡第7地点出土遺物(3)
第265图	第4号沟跡第6地点出土遺物(10)	363
	338	第284图	第4号沟跡第7地点出土遺物(4)
第266图	第4号沟跡第6地点出土遺物(11)	364
	340	第285图	第4号沟跡第7地点出土遺物(5)
第267图	第4号沟跡第6地点出土遺物(12)	366
	340	第286图	第4号沟跡第7地点出土遺物(6)
	340		367

第287図	第4号溝跡第7地点出土遺物(7)	368
第288図	第4号溝跡第7地点出土遺物(8)	370
第289図	第4号溝跡第7地点出土遺物(9)	372
第290図	第4号溝跡第7地点出土遺物(10)	373
第291図	第4号溝跡地点不明出土遺物(1)	375
第292図	第4号溝跡地点不明出土遺物(2)	376
第293図	第4号溝跡地点不明出土遺物(3)	377
第294図	第4号溝跡地点不明出土遺物(4)	379

(第2分冊)

第295図	第1号・第2号滑石製品集中地点とその周辺	382	第307図	第1号水田跡	419
第296図	第1号滑石製品集中地点	383	第308図	第1号性格不明遺構(1)	420
第297図	第1号滑石製品集中地点出土遺物(1)	384	第309図	第1号性格不明遺構(2)	421
第298図	第1号滑石製品集中地点出土遺物(2)	385	第310図	グリッドビット出土遺物	422
第299図	第1号滑石製品集中地点出土遺物(3)	386	第311図	グリッド出土・表採遺物(1)	423
第300図	第2号滑石製品集中地点(1)	402	第312図	グリッド出土・表採遺物(2)	425
第301図	第2号滑石製品集中地点(2)	403	第313図	グリッド出土・表採遺物(3)	426
第302図	第2号滑石製品集中地点出土遺物(1)	404	第314図	グリッド出土・表採遺物(4)	427
第303図	第2号滑石製品集中地点出土遺物(2)	405	第315図	グリッド出土・表採遺物(5)	428
第304図	第2号滑石製品集中地点出土遺物(3)	406	第316図	グリッド出土・表採遺物(6)	429
第305図	第2号滑石製品集中地点出土遺物(4)	407	第317図	グリッド出土・表採遺物(7)	430
第306図	第1号性格不明遺構出土遺物	418	第318図	グリッド出土・表採遺物(8)	431
			第319図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)	454
			第320図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)	455
			第321図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)	456
			第322図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(4)	457
			第323図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(5)	458
			第324図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(6)	459
			第325図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(7)	460
			第326図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(8)	461
			第327図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(9)	462
			第328図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(10)	463
			第329図	城敷遺跡出土木材の顕微鏡写真(11)	464
			第330図	城敷遺跡の木材(1)	470
			第331図	城敷遺跡の木材(2)	471
			第332図	城敷遺跡の木材(3)	472

第333図	城敷遺跡の木材(4) ……………	473	第343図	滑石剥片類の分類グラフ ……………	510
第334図	城敷遺跡の大型植物遺体(1) ……	481	第344図	第4号溝跡第4地点遺物出土状況 …	514
第335図	城敷遺跡の大型植物遺体(2) ……	482	第345図	第4号溝跡第2地点遺物出土状況 …	514
第336図	城敷遺跡の出土骨貝類(1) ……	485	第346図	第4号溝跡第1地点遺物出土状況 …	515
第337図	城敷遺跡の出土骨貝類(2) ……	486	第347図	第4号溝跡第3地点遺物出土状況 …	517
第338図	暦年較正年代グラフ ……………	489	第348図	第4号溝跡第5地点遺物出土状況 …	517
第339図	城敷遺跡Ⅱ集落変遷図 ……………	494	第349図	第4号溝跡第6地点遺物出土状況(1) ……………	518
第340図	城敷遺跡から出土した初期須恵器(1) 陶邑産 ……………	502	第350図	第4号溝跡第6地点遺物出土状況(2) ……………	519
第341図	城敷遺跡から出土した初期須恵器(2) ……………	503	第351図	第4号溝跡第7地点遺物出土状況 …	519
第342図	白玉製作工程復元図 ……………	509			

目 次

(第1分冊)

第1表	発掘調査の工程 ……………	3	第19表	第15号住居跡出土遺物観察表 ……	79
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表 ……	35	第20表	第15号住居跡出土滑石剥片一覽表 ……………	79
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表 ……	39-40	第21表	第16号住居跡出土遺物観察表 ……	81
第4表	第2号住居跡出土滑石剥片一覽表 ……………	40~43	第22表	第17号住居跡出土遺物観察表 ……	82
第5表	第3号住居跡出土遺物観察表 ……	44	第23表	第18号住居跡出土遺物観察表 ……	84
第6表	第4号住居跡出土遺物観察表 ……	46	第24表	第24号住居跡出土遺物観察表 ……	87
第7表	第5号住居跡出土遺物観察表 ……	49-50	第25表	第20号住居跡出土遺物観察表 ……	90
第8表	第6号住居跡出土遺物観察表 ……	51	第26表	第21号住居跡出土遺物観察表 ……	92
第9表	第7号住居跡出土遺物観察表 ……	54	第27表	第22号住居跡出土遺物観察表 ……	94
第10表	第7号住居跡出土滑石剥片一覽表 ……………	55~61	第28表	第23号住居跡出土遺物観察表 ……	98
第11表	第8号住居跡出土遺物観察表 ……	62	第29表	第25-27号住居跡出土遺物観察表 ……………	101
第12表	第9号住居跡出土遺物観察表 ……	64	第30表	第28号住居跡出土遺物観察表 ……	103
第13表	第10号住居跡出土遺物観察表 ……	65	第31表	第28・29・30号住居跡出土遺物観察表 ……………	105
第14表	第11号住居跡出土遺物観察表 ……	67	第32表	第31号住居跡出土遺物観察表 ……	106
第15表	第12号住居跡出土遺物観察表 ……	70	第33表	第32号住居跡出土遺物観察表 ……	107
第16表	第12号住居跡出土滑石剥片一覽表 ……………	71-72	第34表	第34号住居跡出土遺物観察表 ……	112
第17表	第13号住居跡出土遺物観察表 ……	73	第35表	第34号住居跡出土滑石剥片一覽表 ……………	112
第18表	第14号住居跡出土遺物観察表 ……	75	第36表	第35号住居跡出土遺物観察表 ……	116

第37表	第37号住居跡出土遺物觀察表 ……………125~127	第66表	第69号住居跡出土遺物觀察表 ……197
第38表	第37号住居跡出土滑石剝片一覽表 ……………127-128	第67表	第70号住居跡出土遺物觀察表 ……199
第39表	第38-39号住居跡出土遺物觀察表 ……………135	第68表	第71号住居跡出土遺物觀察表 ……199
第40表	第42号住居跡出土遺物觀察表 ……137	第69表	第73号住居跡出土遺物觀察表 ……200
第41表	第40号住居跡出土遺物觀察表 ……140	第70表	第74号住居跡出土遺物觀察表 ……203
第42表	第41号住居跡·第40·41·42号住居跡 出土遺物觀察表 ……142	第71表	第75号住居跡出土遺物觀察表 ……205
第43表	第43号住居跡出土遺物觀察表 ……143	第72表	第77号住居跡出土遺物觀察表 ……206
第44表	第44号住居跡出土遺物觀察表 ……147	第73表	第108号住居跡出土遺物觀察表 ……207
第45表	第45号住居跡出土遺物觀察表 ……147	第74表	第109号住居跡出土遺物觀察表 ……209
第46表	第46号住居跡出土遺物觀察表 ……149	第75表	第110号住居跡出土遺物觀察表 ……210
第47表	第47号住居跡出土遺物觀察表 ……………151-152	第76表	第111号住居跡出土遺物觀察表 ……212
第48表	第48号住居跡出土遺物觀察表 ……155	第77表	第112号住居跡出土遺物觀察表 ……216
第49表	第49号住居跡出土遺物觀察表 ……157	第78表	第113号住居跡出土遺物觀察表 ……217
第50表	第49号住居跡出土滑石剝片一覽表 ……………157	第79表	第1号掘立柱建物跡出土遺物觀察表 ……………219
第51表	第51号住居跡出土遺物觀察表 ……163	第80表	第3号掘立柱建物跡出土遺物觀察表 ……………222
第52表	第52号住居跡出土遺物觀察表 ……165	第81表	第4号掘立柱建物跡出土遺物觀察表 ……………222
第53表	第53号住居跡出土遺物觀察表 ……168	第82表	第41号土城出土遺物觀察表 ……227
第54表	第54号住居跡出土遺物觀察表 ……171	第83表	第23号土城出土遺物觀察表 ……235
第55表	第55号住居跡出土遺物觀察表 ……173	第84表	土城出土遺物觀察表 ……253-254
第56表	第56-72号住居跡出土遺物觀察表 ……………175	第85表	第7号溝跡出土遺物觀察表 ……263-264
第57表	第58号住居跡出土遺物觀察表 ……176	第86表	第5号溝跡出土遺物觀察表 ……266
第58表	第59号住居跡出土遺物觀察表 ……177	第87表	第4号溝跡第4地点出土遺物觀察表 ……………287~292
第59表	第60号住居跡出土遺物觀察表 ……178	第88表	第4号溝跡第5地点出土遺物觀察表 ……………310
第60表	第62号住居跡出土遺物觀察表 ……182	第89表	第4号溝跡第6地点出土遺物觀察表 ……………329~332
第61表	第63号住居跡出土遺物觀察表 ……183	第90表	第4号溝跡第7地点出土遺物觀察表 ……………364-365
第62表	第64号住居跡出土遺物觀察表 ……185	第91表	第4号溝跡地点不明出土遺物觀察表 ……………375
第63表	第65号住居跡出土遺物觀察表 ……188		
第64表	第66号住居跡出土遺物觀察表 ……189		
第65表	第68号住居跡出土遺物觀察表 ……………195~197	(第2分冊)	
		第92表	第1号滑石製品集中地点出土遺物觀察 表 ……387

第93表	第1号滑石製品集中地点出土石製品観察表	387~391	果	445~453	
第94表	第1号滑石製品集中地点出土滑石剥片一覧表	391~400	第102表	樹種同定結果	468
第95表	第2号滑石製品集中地点出土遺物観察表	408	第103表	放射線炭素年代測定結果	474
第96表	第2号滑石製品集中地点出土石製品観察表	408~412	第104表	暦年較正結果	474
第97表	第2号滑石製品集中地点出土滑石剥片一覧表	413~418	第105表	放射性炭素年代測定及び暦年較正結果	475
第98表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表	418	第106表	大型植物遺体同定結果	476
第99表	グリッドビット出土遺物観察表	422	第107表	検出分類群一覧	484
第100表	グリッド出土・表採遺物観察表	432~436	第108表	骨貝類同定結果	484
第101表	銭塚・城敷遺跡出土木材の樹種同定結果	495~497	第109表	イヌ右下顎骨計測値	484
			第110表	放射性炭素年代測定結果	490
			第111表	暦年較正結果	490
			第112表	城敷遺跡遺構時期区分一覧	495~497
			第113表	銭塚・城敷遺跡出土初期須恵器一覧表	504~507

写真図版目次

巻頭図版1

- 1 銭塚・城敷遺跡空中写真(合成)

巻頭図版2

- 1 城敷遺跡遠景
- 2 第4号溝跡第4地点出土須恵器大甕

巻頭図版3

- 1 城敷遺跡出土須恵器
- 2 第112号住居跡出土遺物

図版1

- 1 A・B-1~6グリッド調査区域近景(西から)
- 2 A・B-15~10グリッド調査区域近景(東から)
- 3 Aグリッド基本土層
- 4 E・F-5~10グリッド調査区域近景(西から)
- 5 E・F-10~15グリッド調査区域近景(西から)
- 6 E・F-10~3グリッド調査区域近景(東から)
- 7 E・F-11~3グリッド調査区域近景(東から)
- 8 E・F-14~10グリッド調査区域近景(東から)

図版2

- 1 E・F-15~10グリッド調査区域近景(東から)
- 2 E・F-18~16グリッド調査区域近景(東から)
- 3 G~I-10グリッド調査区域近景(北から)
- 4 K~Gグリッド調査区域近景(南から)
- 5 J-4~10グリッド調査区域近景(西から)
- 6 J-9~4グリッド調査区域近景(東から)
- 7 J列基本土層
- 8 N~Gグリッド調査区域近景(南から)

図版3

- 1 第3次調査区域空撮
- 2 第3次調査区域全景(西から)
- 3 第3次調査区域全景(南東から)
- 4 第1号住居跡
- 5 第1号住居跡遺物出土状況
- 6 第1号住居跡カマド
- 7 第2号住居跡遺物出土状況
- 8 第2号住居跡カマド

図版4

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 第3号住居跡 | 2 第25・26・27号住居跡 |
| 2 第3号住居跡遺物出土状況 | 3 第25号住居跡 |
| 3 第4号住居跡 | 4 第26号住居跡 |
| 4 第5号住居跡 | 5 第27号住居跡 |
| 5 第5号住居跡遺物出土状況 | 6 第28・29・30号住居跡 |
| 6 第5号住居跡石製模造品出土状況 | 7 第29号住居跡 |
| 7 第6号住居跡 | 8 第29号住居跡貯蔵穴 |
| 8 第7号住居跡 | 図版9 |
| 図版5 | 1 第29号住居跡伊 ^イ |
| 1 第8号住居跡 | 2 第30号住居跡 |
| 2 第9号住居跡 | 3 第31号住居跡 |
| 3 第9号住居跡貯蔵穴 | 4 第31号住居跡炭化物検出状況 |
| 4 第10号住居跡 | 5 第31号住居跡遺物出土状況 |
| 5 第12号住居跡 | 6 第32号住居跡 |
| 6 第13号住居跡 | 7 第33号住居跡 |
| 7 第14号住居跡 | 8 第34号住居跡 |
| 8 第14号住居跡炭化物検出状況 | 図版10 |
| 図版6 | 1 第34号住居跡カマド |
| 1 第15号住居跡 | 2 第35号住居跡 |
| 2 第15号住居跡カマド・炭化物検出状況 | 3 第35号住居跡炭化物検出状況 |
| 3 第15号住居跡カマド | 4 第35号住居跡カマド出土状況 |
| 4 第16号住居跡 | 5 第36号住居跡 |
| 5 第17号住居跡 | 6 第37号住居跡 (拡張後) |
| 6 第18号住居跡 | 7 第37号住居跡 (拡張前の柱穴) |
| 7 第19・24号住居跡 | 8 第37号住居跡遺物出土状況 (1) |
| 8 第24号住居跡 | 図版11 |
| 図版7 | 1 第37号住居跡遺物出土状況 (2) |
| 1 第20号住居跡遺物出土状況 | 2 第37号住居跡遺物出土状況 (3) |
| 2 第20号住居跡カマド | 3 第37号住居跡石製模造品剥片出土状況 |
| 3 第20号住居跡カマド遺物出土状況 | 4 第37号住居跡カマド |
| 4 第21号住居跡 | 5 第37号住居跡カマド遺物出土状況 |
| 5 第21号住居跡遺物出土状況 | 6 第37号住居跡ビット8柱根検出状況 |
| 6 第22号住居跡 | 7 第38・39号住居跡 |
| 7 第22号住居跡炭化物検出状況 | 8 第38号住居跡遺物出土状況 |
| 8 第23号住居跡カマド・炭化物検出状況 | 図版12 |
| 図版8 | 1 第38号住居跡カマド |
| 1 第23号住居跡カマド | 2 第40・41・42号住居跡 |

- 3 第42・51号住居跡
- 4 第42号住居跡カマド
- 5 第42号住居跡遺物出土状況
- 6 第40号住居跡貯蔵穴
- 7 第41号住居跡遺物出土状況 (1)
- 8 第41号住居跡遺物出土状況 (2)

図版13

- 1 第43号住居跡
- 2 第44・45号住居跡
- 3 第44・45号住居跡遺物出土状況
- 4 第44号住居跡カマド
- 5 第44号住居跡カマド遺物出土状況
- 6 第45号住居跡遺物出土状況
- 7 第46号住居跡
- 8 第46号住居跡炭化物検出状況

図版14

- 1 第46号住居跡遺物出土状況
- 2 第47住居跡
- 3 第47号住居跡遺物出土状況 (1)
- 4 第47号住居跡遺物出土状況 (2)
- 5 第48号住居跡炭化材分布状況
- 6 第49号住居跡
- 7 第49号住居跡遺物出土状況
- 8 第49号住居跡銅鏽出土状況

図版15

- 1 第49号住居跡カマド
- 2 第49号住居跡カマド遺物出土状況
- 3 第50号住居跡
- 4 第51号住居跡
- 5 第51号住居跡炭化物検出状況 (1)
- 6 第51号住居跡炭化物検出状況 (2)
- 7 第51号住居跡炭化物検出状況 (3)
- 8 第51号住居跡炭化物検出状況 (4)

図版16

- 1 第51号住居跡遺物出土状況
- 2 第51号住居跡土製支脚出土状況
- 3 第51号住居跡カマド

- 4 第51号住居跡カマド遺物出土状況 (1)
- 5 第51号住居跡カマド遺物出土状況 (2)
- 6 第51号住居跡貯蔵穴
- 7 第52号住居跡
- 8 第52号住居跡遺物出土状況

図版17

- 1 第53号住居跡
- 2 第53号住居跡遺物出土状況 (1)
- 3 第53号住居跡遺物出土状況 (2)
- 4 第54号住居跡
- 5 第54号住居跡須恵器出土状況
- 6 第54号住居跡カマド遺物出土状況 (1)
- 7 第54号住居跡カマド遺物出土状況 (2)
- 8 第54号住居跡カマド

図版18

- 1 第54号住居跡貯蔵穴
- 2 第55号住居跡
- 3 第55号住居跡遺物出土状況 (1)
- 4 第55号住居跡遺物出土状況 (2)
- 5 第55号住居跡骨出土状況
- 6 第56号住居跡
- 7 第72号住居跡
- 8 第57号住居跡

図版19

- 1 第58号住居跡
- 2 第58号住居跡炭化物検出状況
- 3 第60号住居跡
- 4 第60号住居跡遺物出土状況 (1)
- 5 第60号住居跡遺物出土状況 (2)
- 6 第62号住居跡
- 7 第62号住居跡遺物出土状況 (1)
- 8 第62号住居跡遺物出土状況 (2)

図版20

- 1 第62号住居跡遺物出土状況 (3)
- 2 第62号住居跡遺物出土状況 (4)
- 3 第62号住居跡遺物出土状況 (5)
- 4 第63号住居跡

- 5 第64号住居跡
- 6 第64号住居跡遺物出土状況
- 7 第64号住居跡炉
- 8 第65号住居跡

図版21

- 1 第65号住居跡遺物出土状況 (1)
- 2 第65号住居跡遺物出土状況 (2)
- 3 第65号住居跡炉
- 4 第66号住居跡遺物出土状況 (1)
- 5 第66号住居跡遺物出土状況 (2)
- 6 第66号住居跡遺物出土状況 (3)
- 7 第67号住居跡
- 8 第68号住居跡

図版22

- 1 第68号住居跡遺物出土状況 (1)
- 2 第68号住居跡遺物出土状況 (2)
- 3 第68号住居跡遺物出土状況 (3)
- 4 第69号住居跡
- 5 第69号住居跡遺物出土状況
- 6 第71号住居跡
- 7 第71号住居跡遺物出土状況
- 8 第73号住居跡

図版23

- 1 第74号住居跡
- 2 第74号住居跡遺物出土状況 (1)
- 3 第74号住居跡遺物出土状況 (2)
- 4 第75号住居跡
- 5 第75号住居跡炉
- 6 第77号住居跡
- 7 第108号住居跡カマド遺物出土状況
- 8 第108号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

図版24

- 1 第108号住居跡遺物出土状況
- 2 第109号住居跡
- 3 第109号住居跡炭化物出土状況
- 4 第110号住居跡
- 5 第110号住居跡遺物出土状況 (1)

- 6 第110号住居跡遺物出土状況 (2)
- 7 第110号住居跡遺物出土状況 (3)
- 8 第111号住居跡

図版25

- 1 第111号住居跡遺物出土状況
- 2 第111号住居跡貯蔵穴
- 3 第112号住居跡
- 4 第112号住居跡カマド
- 5 第112号住居跡カマド遺物出土状況 (1)
- 6 第112号住居跡カマド遺物出土状況 (2)
- 7 第112号住居跡カマド遺物出土状況 (3)
- 8 第112号住居跡遺物出土状況 (1)

図版26

- 1 第112号住居跡遺物出土状況 (2)
- 2 第112号住居跡遺物出土状況 (3)
- 3 第112号住居跡遺物出土状況 (4)
- 4 第112号住居跡遺物出土状況 (5)
- 5 第112号住居跡遺物出土状況 (6)
- 6 第113号住居跡
- 7 第113号住居跡遺物出土状況
- 8 第114号住居跡

図版27

- 1 第1号掘立柱建物跡
- 2 第3号掘立柱建物跡
- 3 第4号掘立柱建物跡
- 4 第4・5号掘立柱建物跡
- 5 第6号掘立柱建物跡
- 6 第7・8号掘立柱建物跡
- 7 第7号掘立柱建物跡・第41号土壇
- 8 第7号掘立柱建物跡 Pit19柱根

図版28

- 1 第41号土壇遺物出土状況 (1)
- 2 第41号土壇遺物出土状況 (2)
- 3 第41号土壇遺物出土状況 (3)
- 4 第9・10号掘立柱建物跡
- 5 第9号掘立柱建物跡
- 6 第11号掘立柱建物跡

7 第12号掘立柱建物跡・第23号土城

8 第23号土城

図版29

1 第1号柱穴列

2 第16号掘立柱建物跡

3 第17号掘立柱建物跡

4 第9号土城

5 第8号土城

6 第4号土城

7 第5号土城

8 第1号土城

図版30

1 第6号土城

2 第11号土城

3 第11号土城遺物出土状況

4 第15号土城確認状況

5 第15号土城

6 第22号土城

7 第17号土城

8 第14号土城

図版31

1 第12号土城

2 第13号土城

3 第19号土城

4 第20号土城

5 第21号土城

6 第21号土城遺物出土状況

7 第28号土城

8 第29号土城

図版32

1 第27号土城遺物出土状況

2 第40号土城

3 第8号溝跡・第74号住居跡

4 第6号溝跡

5 第7号溝跡遺物出土状況(1)

6 第7号溝跡遺物出土状況(2)

7 第7号溝跡遺物出土状況(3)

8 第7号溝跡遺物出土状況(4)

図版33

1 第7号溝跡遺物出土状況(5)

2 第32号溝跡

3 第4号溝跡第4地点(1)

4 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(1)

5 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(2)

6 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(3)

7 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(4)

8 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(5)

図版34

1 第4号溝跡第4地点(2)

2 第4号溝跡第4地点(3)

3 第4号溝跡第4地点(4)

4 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(6)

5 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(7)

6 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(8)

7 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(9)

8 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(10)

図版35

1 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(11)

2 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(12)

3 第4号溝跡第5地点(1)

4 第4号溝跡第5地点(2)

5 第4号溝跡第5地点(3)

6 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(1)

7 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(2)

8 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(3)

図版36

1 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(4)

2 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(5)

3 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(6)

4 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(7)

5 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(8)

6 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(9)

7 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(10)

8 第4号溝跡第5地点遺物出土状況(11)

图版37

- 1 第4号沟跡第5地点遺物出土狀況 (12)
- 2 第4号沟跡第5地点遺物出土狀況 (13)
- 3 第4号沟跡第6地点 (1)
- 4 第4号沟跡第6地点 (2)
- 5 第4号沟跡第6地点 (3)
- 6 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (1)
- 7 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (2)
- 8 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (3)

图版38

- 1 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (4)
- 2 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (5)
- 3 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (6)
- 4 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (7)
- 5 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (8)
- 6 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (9)
- 7 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (10)
- 8 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (11)

图版39

- 1 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (12)
- 2 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (13)
- 3 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (14)
- 4 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (15)
- 5 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (16)
- 6 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (17)
- 7 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (18)
- 8 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (19)

图版40

- 1 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (20)
- 2 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (21)
- 3 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (22)
- 4 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (23)
- 5 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (24)
- 6 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (25)
- 7 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (26)
- 8 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (27)

图版41

- 1 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (28)
- 2 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (29)
- 3 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (30)
- 4 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (31)
- 5 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (32)
- 6 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (33)
- 7 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (34)
- 8 第4号沟跡第6地点遺物出土狀況 (35)

图版42

- 1 第4号沟跡第7地点 (1)
- 2 第4号沟跡第7地点 (2)
- 3 第4号沟跡第7地点 (3)
- 4 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (1)
- 5 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (2)
- 6 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (3)
- 7 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (4)
- 8 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (5)

图版43

- 1 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (6)
- 2 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (7)
- 3 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (8)
- 4 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (9)
- 5 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (10)
- 6 第4号沟跡第7地点遺物出土狀況 (11)
- 7 第1号滑石製品集中地点 (1)
- 8 第1号滑石製品集中地点 (2)

图版44

- 1 第1号滑石製品集中地点 (3)
- 2 第1号滑石製品集中地点 (4)
- 3 第1号滑石製品集中地点 (5)
- 4 第2号滑石製品集中地点 (1)
- 5 第2号滑石製品集中地点 (2)
- 6 第2号滑石製品集中地点 (3)
- 7 第2号滑石製品集中地点 (4)
- 8 第1号水田跡

图版45

- 1 第1号住居跡 (第22图1)

- 2 第1号住居跡 (第22图2)
- 3 第1号住居跡 (第22图4)
- 4 第1号住居跡 (第22图7)
- 5 第1号住居跡 (第22图8)
- 6 第1号住居跡 (第22图9)

图版46

- 1 第1号住居跡 (第22图10)
- 2 第1号住居跡 (第22图11)
- 3 第1号住居跡 (第22图12)
- 4 第1号住居跡 (第22图13)
- 5 第1号住居跡 (第22图18)
- 6 第1号住居跡 (第22图21)

图版47

- 1 第1号住居跡 (第23图22)
- 2 第1号住居跡 (第23图23)
- 3 第1号住居跡 (第23图24)
- 4 第1号住居跡 (第23图27)
- 5 第1号住居跡 (第23图28)
- 6 第1号住居跡 (第23图29)

图版48

- 1 第1号住居跡 (第23图30)
- 2 第2号住居跡 (第25图1)
- 3 第2号住居跡 (第25图2)
- 4 第2号住居跡 (第25图4)
- 5 第2号住居跡 (第25图6)
- 6 第2号住居跡 (第25图7)
- 7 第2号住居跡 (第25图10)
- 8 第2号住居跡 (第25图11)

图版49

- 1 第2号住居跡 (第26图17)
- 2 第2号住居跡 (第26图18)
- 3 第3号住居跡 (第28图1)
- 4 第3号住居跡 (第28图2)
- 5 第3号住居跡 (第28图4)
- 6 第3号住居跡 (第28图7)
- 7 第3号住居跡 (第28图8)

图版50

- 1 第3号住居跡 (第28图10)
- 2 第4号住居跡 (第29图1)
- 3 第4号住居跡 (第29图2)
- 4 第5号住居跡 (第31图1)
- 5 第5号住居跡 (第31图5)
- 6 第5号住居跡 (第31图6)

图版51

- 1 第5号住居跡 (第31图10)
- 2 第5号住居跡 (第31图11)
- 3 第5号住居跡 (第31图12)
- 4 第5号住居跡 (第31图14)
- 5 第5号住居跡 (第31图15)
- 6 第5号住居跡 (第31图17)
- 7 第5号住居跡 (第31图18)

图版52

- 1 第5号住居跡 (第31图19)
- 2 第5号住居跡 (第32图39)
- 3 第5号住居跡 (第32图40)
- 4 第7号住居跡 (第35图1)
- 5 第7号住居跡 (第35图3)
- 6 第8号住居跡 (第36图1)
- 7 第8号住居跡 (第36图3)
- 8 第9号住居跡 (第38图1)

图版53

- 1 第9号住居跡 (第38图3)
- 2 第9号住居跡 (第38图4)
- 3 第9号住居跡 (第38图5)
- 4 第9号住居跡 (第38图6)
- 5 第9号住居跡 (第38图7)
- 6 第10号住居跡 (第40图1)
- 7 第10号住居跡 (第40图3)

图版54

- 1 第10号住居跡 (第40图4)
- 2 第10号住居跡 (第40图6)
- 3 第10号住居跡 (第40图8)
- 4 第10号住居跡 (第40图9)
- 5 第11号住居跡 (第41图1)

6 第11号住居跡 (第41图3)
图版55

- 1 第12号住居跡 (第43图1)
- 2 第12号住居跡 (第43图2)
- 3 第12号住居跡 (第43图4)
- 4 第12号住居跡 (第43图6)
- 5 第12号住居跡 (第43图7)
- 6 第12号住居跡 (第43图17)
- 7 第12号住居跡 (第43图20)

图版56

- 1 第12号住居跡 (第43图23)
- 2 第12号住居跡 (第43图25)
- 3 第12号住居跡 (第43图27)
- 4 第13号住居跡 (第45图1)
- 5 第14号住居跡 (第47图1)

图版57

- 1 第15号住居跡 (第50图1)
- 2 第15号住居跡 (第50图4)
- 3 第15号住居跡 (第50图5)
- 4 第15号住居跡 (第50图6)
- 5 第15号住居跡 (第50图7)
- 6 第15号住居跡 (第50图9)

图版58

- 1 第15号住居跡 (第50图10)
- 2 第15号住居跡 (第50图11)
- 3 第15号住居跡 (第50图14)
- 4 第15号住居跡 (第50图17)
- 5 第16号住居跡 (第52图4)
- 6 第16号住居跡 (第52图5)

图版59

- 1 第17号住居跡 (第54图1)
- 2 第17号住居跡 (第54图2)
- 3 第17号住居跡 (第54图5)
- 4 第17号住居跡 (第54图7)
- 5 第17号住居跡 (第54图9)
- 6 第17号住居跡 (第54图10)
- 7 第17号住居跡 (第54图11)

8 第17号住居跡 (第54图13)
图版60

- 1 第18号住居跡 (第56图1)
- 2 第18号住居跡 (第56图2)
- 3 第18号住居跡 (第56图3)
- 4 第18号住居跡 (第56图5)
- 5 第18号住居跡 (第56图6)
- 6 第20号住居跡 (第61图1)

图版61

- 1 第20号住居跡 (第61图6)
- 2 第20号住居跡 (第61图7)
- 3 第20号住居跡 (第61图8)
- 4 第20号住居跡 (第60图9)
- 5 第20号住居跡 (第61图10)
- 6 第20号住居跡 (第61图11)
- 7 第20号住居跡 (第61图12)

图版62

- 1 第20号住居跡 (第61图13)
- 2 第20号住居跡 (第61图14)
- 3 第21号住居跡 (第63图1)
- 4 第21号住居跡 (第63图10)
- 5 第21号住居跡 (第63图11)
- 6 第22号住居跡 (第65图1)

图版63

- 1 第22号住居跡 (第65图9)
- 2 第22号住居跡 (第65图10)
- 3 第23号住居跡 (第68图2)
- 4 第23号住居跡 (第68图1)
- 5 第23号住居跡 (第68图4)

图版64

- 1 第23号住居跡 (第68图3)
- 2 第23号住居跡 (第68图6)
- 3 第23号住居跡 (第68图7)
- 4 第23号住居跡 (第68图8)
- 5 第23号住居跡 (第68图9)
- 6 第23号住居跡 (第68图10)

图版65

- 1 第27号住居跡 (第71图4)
- 2 第27号住居跡 (第71图5)
- 3 第28号住居跡 (第74图1)
- 4 第28·29号住居跡 (第75图18)
- 5 第29号住居跡 (第75图8)
- 6 第30号住居跡 (第75图10)
- 7 第31号住居跡 (第76图1)
- 8 第32号住居跡 (第77图1)

图版66

- 1 第32号住居跡 (第77图2)
- 2 第32号住居跡 (第77图3)
- 3 第34号住居跡 (第80图1)
- 4 第34号住居跡 (第80图2)
- 5 第34号住居跡 (第80图3)
- 6 第34号住居跡 (第80图5)
- 7 第34号住居跡 (第80图6)
- 8 第34号住居跡 (第80图7)
- 9 第34号住居跡 (第80图8)

图版67

- 1 第34号住居跡 (第80图9)
- 2 第34号住居跡 (第80图10)
- 3 第34号住居跡 (第80图11)
- 4 第34号住居跡 (第80图12)
- 5 第34号住居跡 (第80图13)
- 6 第34号住居跡 (第80图15)
- 7 第34号住居跡 (第80图16)
- 8 第34号住居跡 (第80图18)
- 9 第34号住居跡 (第80图20)

图版68

- 1 第34号住居跡 (第80图21)
- 2 第34号住居跡 (第80图22)
- 3 第34号住居跡 (第80图23)
- 4 第34号住居跡 (第81图32)
- 5 第34号住居跡 (第80图26)
- 6 第34号住居跡 (第81图29)
- 7 第35号住居跡 (第84图2)

图版69

- 1 第35号住居跡 (第84图1)
- 2 第35号住居跡 (第84图9)
- 3 第35号住居跡 (第84图16)
- 4 第35号住居跡 (第84图4)
- 5 第35号住居跡 (第84图6)
- 6 第35号住居跡 (第84图17)
- 7 第35号住居跡 (第84图19)

图版70

- 1 第35号住居跡 (第84图20)
- 2 第35号住居跡 (第85图21)
- 3 第35号住居跡 (第85图22)
- 4 第35号住居跡 (第85图24)
- 5 第35号住居跡 (第85图25)

图版71

- 1 第37号住居跡 (第89图1)
- 2 第37号住居跡 (第89图2)
- 3 第37号住居跡 (第89图4)
- 4 第37号住居跡 (第89图6)
- 5 第37号住居跡 (第89图8)
- 6 第37号住居跡 (第89图9)
- 7 第37号住居跡 (第89图11)
- 8 第37号住居跡 (第89图12)

图版72

- 1 第37号住居跡 (第89图13)
- 2 第37号住居跡 (第89图14)
- 3 第37号住居跡 (第89图16)
- 4 第37号住居跡 (第89图17)
- 5 第37号住居跡 (第89图18)
- 6 第37号住居跡 (第89图15)
- 7 第37号住居跡 (第89图19)
- 8 第37号住居跡 (第89图20)

图版73

- 1 第37号住居跡 (第89图24)
- 2 第37号住居跡 (第90图40)
- 3 第37号住居跡 (第90图41)
- 4 第37号住居跡 (第90图44)
- 5 第37号住居跡 (第91图54)

6 第37号住居跡 (第91图55)
图版74

- 1 第37号住居跡 (第91图57)
- 2 第37号住居跡 (第91图58)
- 3 第37号住居跡 (第91图59)
- 4 第37号住居跡 (第91图60)
- 5 第37号住居跡 (第92图77)
- 6 第37号住居跡 (第92图78)
- 7 第37号住居跡 (第92图79)

图版75

- 1 第37号住居跡 (第92图61)
- 2 第37号住居跡 (第92图62)
- 3 第37号住居跡 (第92图80)
- 4 第38号住居跡 (第96图1)
- 5 第38号住居跡 (第96图3)
- 6 第38号住居跡 (第96图2)
- 7 第38号住居跡 (第96图4)
- 8 第38号住居跡 (第96图5)

图版76

- 1 第38号住居跡 (第96图7)
- 2 第38号住居跡 (第96图10)
- 3 第38号住居跡 (第96图15)
- 4 第38号住居跡 (第96图11)
- 5 第38号住居跡 (第96图16)

图版77

- 1 第38号住居跡 (第96图17)
- 2 第38号住居跡 (第97图19)
- 3 第38号住居跡 (第97图21)
- 4 第38号住居跡 (第97图20)

图版78

- 1 第38号住居跡 (第97图18)
- 2 第38号住居跡 (第97图24)
- 3 第42号住居跡 (第99图1)
- 4 第42号住居跡 (第99图2)
- 5 第42号住居跡 (第99图3)

图版79

- 1 第42号住居跡 (第99图7)
- 2 第42号住居跡 (第99图8)
- 3 第40号住居跡 (第100图2)
- 4 第42号住居跡 (第99图10)
- 5 第40号住居跡 (第100图1)

图版80

- 1 第42号住居跡 (第99图11)
- 2 第40号住居跡 (第100图3)
- 3 第41号住居跡 (第102图1)
- 4 第41号住居跡 (第102图4)
- 5 第41号住居跡 (第102图7)
- 6 第41号住居跡 (第102图8)

图版81

- 1 第40·41·42号住居跡 (第102图9)
- 2 第43号住居跡 (第103图1)
- 3 第44号住居跡 (第105图5)
- 4 第44号住居跡 (第105图1)
- 5 第44号住居跡 (第105图6)
- 6 第44号住居跡 (第105图8)

图版82

- 1 第44号住居跡 (第105图11)
- 2 第44号住居跡 (第105图12)
- 3 第45号住居跡 (第106图2)
- 4 第45号住居跡 (第106图3)

图版83

- 1 第45号住居跡 (第106图4)
- 2 第46号住居跡 (第108图1)
- 3 第47号住居跡 (第111图1)
- 4 第47号住居跡 (第111图2)
- 5 第47号住居跡 (第111图4)
- 6 第47号住居跡 (第111图5)
- 7 第47号住居跡 (第111图6)
- 8 第47号住居跡 (第111图13)

图版84

- 1 第47号住居跡 (第111图7)
- 2 第47号住居跡 (第111图8)
- 3 第47号住居跡 (第111图9)

4 第47号住居跡 (第111図10)

5 第47号住居跡 (第111図11)

図版85

1 第47号住居跡 (第111図12)

2 第47号住居跡 (第112図23)

3 第47号住居跡 (第112図22)

4 第48号住居跡 (第114図1)

5 第48号住居跡 (第114図4)

図版86

1 第48号住居跡 (第114図5)

2 第48号住居跡 (第114図9)

3 第48号住居跡 (第114図11)

4 第48号住居跡 (第114図12)

5 第48号住居跡 (第114図13)

6 第49号住居跡 (第116図3)

7 第49号住居跡 (第116図7)

8 第49号住居跡 (第116図8)

9 第49号住居跡 (第116図6)

図版87

1 第51号住居跡 (第119図7)

2 第51号住居跡 (第119図8)

3 第51号住居跡 (第119図15)

4 第51号住居跡 (第119図17)

5 第51号住居跡 (第119図5)

6 第51号住居跡 (第119図10)

7 第51号住居跡 (第120図31)

図版88

1 第51号住居跡 (第119図23)

2 第51号住居跡 (第119図24)

3 第51号住居跡 (第120図33)

図版89

1 第52号住居跡 (第122図10)

2 第52号住居跡 (第122図11)

3 第53号住居跡 (第124図1)

4 第53号住居跡 (第124図3)

5 第53号住居跡 (第124図4)

6 第53号住居跡 (第124図5)

7 第53号住居跡 (第124図9)

図版90

1 第53号住居跡 (第124図21)

2 第53号住居跡 (第124図23)

3 第54号住居跡 (第126図1)

4 第54号住居跡 (第126図2)

5 第54号住居跡 (第126図3)

6 第54号住居跡 (第126図4)

7 第54号住居跡 (第126図5)

図版91

1 第54号住居跡 (第126図6)

2 第54号住居跡 (第126図8)

3 第54号住居跡 (第126図12)

4 第54号住居跡 (第126図13)

5 第54号住居跡 (第126図15)

6 第54号住居跡 (第126図17)

図版92

1 第55号住居跡 (第128図2)

2 第55号住居跡 (第128図3)

3 第55号住居跡 (第128図5)

4 第55号住居跡 (第128図17)

5 第55号住居跡 (第128図16)

6 第59号住居跡 (第133図3)

7 第60号住居跡 (第135図1)

図版93

1 第60号住居跡 (第135図5)

2 第62号住居跡 (第138図1)

3 第62号住居跡 (第138図2)

4 第62号住居跡 (第138図4)

5 第62号住居跡 (第138図3)

6 第62号住居跡 (第138図5)

図版94

1 第62号住居跡 (第138図7)

2 第62号住居跡 (第138図9)

3 第62号住居跡 (第138図10)

4 第62号住居跡 (第138図12)

図版95

- 1 第62号住居跡 (第138图13)
- 2 第62号住居跡 (第138图14)
- 3 第62号住居跡 (第138图15)
- 4 第64号住居跡 (第143图1)
- 5 第64号住居跡 (第143图4)
- 6 第64号住居跡 (第143图5)

图版96

- 1 第65号住居跡 (第145图1)
- 2 第65号住居跡 (第145图2)
- 3 第65号住居跡 (第145图6)
- 4 第65号住居跡 (第145图14·15)
- 5 第65号住居跡 (第145图8~11)
- 6 第65号住居跡 (第145图12·13)

图版97

- 1 第66号住居跡 (第147图1)
- 2 第66号住居跡 (第147图5)
- 3 第68号住居跡 (第150图1)
- 4 第68号住居跡 (第150图2)
- 5 第68号住居跡 (第150图3)
- 6 第68号住居跡 (第151图40)

图版98

- 1 第68号住居跡 (第151图64)
- 2 第68号住居跡 (第151图67)
- 3 第68号住居跡 (第151图68)
- 4 第68号住居跡 (第151图69)
- 5 第68号住居跡 (第151图70)
- 6 第68号住居跡 (第152图73)
- 7 第68号住居跡 (第152图74)
- 8 第68号住居跡 (第152图80)

图版99

- 1 第68号住居跡 (第152图81)
- 2 第68号住居跡 (第152图84)
- 3 第68号住居跡 (第152图89)
- 4 第68号住居跡 (第152图96)
- 5 第68号住居跡 (第152图97)
- 6 第68号住居跡 (第152图98)
- 7 第73号住居跡 (第158图1)

- 8 第74号住居跡 (第160图5)
- 图版100

- 1 第74号住居跡 (第160图1)
- 2 第74号住居跡 (第160图7)
- 3 第74号住居跡 (第160图9)
- 4 第74号住居跡 (第160图10)
- 5 第75号住居跡 (第162图3)
- 6 第108号住居跡 (第165图3)

图版101

- 1 第108号住居跡 (第165图4)
- 2 第108号住居跡 (第165图5)
- 3 第108号住居跡 (第165图6)
- 4 第108号住居跡 (第165图7)
- 5 第108号住居跡 (第165图8)
- 6 第109号住居跡 (第166图1)
- 7 第109号住居跡 (第166图2)

图版102

- 1 第109号住居跡 (第166图3)
- 2 第109号住居跡 (第166图4)
- 3 第110号住居跡 (第168图3)
- 4 第111号住居跡 (第169图1)
- 5 第111号住居跡 (第169图3)
- 6 第112号住居跡 (第171图8)

图版103

- 1 第112号住居跡 (第171图1)
- 2 第112号住居跡 (第171图2)
- 3 第112号住居跡 (第171图3)
- 4 第112号住居跡 (第171图4)
- 5 第112号住居跡 (第171图9)
- 6 第112号住居跡 (第171图10)
- 7 第112号住居跡 (第171图11)
- 8 第112号住居跡 (第171图12)

图版104

- 1 第112号住居跡 (第171图15)
- 2 第112号住居跡 (第171图16)
- 3 第112号住居跡 (第171图17)
- 4 第112号住居跡 (第171图18)

5 第112号住居跡 (第171図19)

6 第112号住居跡 (第171図20)

7 第112号住居跡 (第171図21)

8 第112号住居跡 (第171図22)

図版105

1 第112号住居跡 (第171図23)

2 第112号住居跡 (第171図24)

3 第112号住居跡 (第171図25)

4 第112号住居跡 (第171図26)

5 第112号住居跡 (第172図27)

6 第112号住居跡 (第172図28)

7 第112号住居跡 (第172図31)

図版106

1 第112号住居跡 (第172図33)

2 第113号住居跡 (第173図3)

3 第112号住居跡 (第172図34)

4 第113号住居跡 (第173図2)

5 第1号住居跡 (第23図31)

第2号住居跡 (第26図19~71)

図版107

1 第7号住居跡 (第35図4~53)

第12号住居跡 (第44図34~41)

第14号住居跡 (第47図2~15)

第15号住居跡 (第50図15~16)

第18号住居跡 (第56図8)

第34号住居跡 (第81図33~35)

第37号住居跡 (第92図63~76)

第40号住居跡 (第100図7~8)

第42号住居跡 (第99図12)

第48号住居跡 (第114図14~15)

第49号住居跡 (第116図9~10)

第51号住居跡 (第120図34~36)

2 第3号掘立柱建物跡 (第177図2)

3 第7号掘立柱建物跡 (第184図2)

4 第7号掘立柱建物跡 (第184図1)

図版108

1 第41号土壇 (第184図3)

2 第41号土壇 (第184図4)

3 第41号土壇 (第184図5)

4 第41号土壇 (第184図7)

5 第41号土壇 (第184図11)

6 第41号土壇 (第184図12)

図版109

1 第23号土壇 (第191図1)

2 第8号土壇 (第200図3)

3 第8号土壇 (第200図4)

4 第8号土壇 (第200図5)

図版110

1 第8号土壇 (第200図2)

2 第11号土壇 (第201図9)

3 第11号土壇 (第201図10)

4 第11号土壇 (第201図11~14)

5 第11号土壇 (第201図15~19)

6 第11号土壇 (第201図20)

図版111

1 第11号土壇 (第202図24)

2 第11号土壇 (第202図25)

3 第11号土壇 (第202図26)

4 第11号土壇 (第202図37)

図版112

1 第11号土壇 (第202図22)

2 第11号土壇 (第202図28)

3 第11号土壇 (第202図31)

4 第11号土壇 (第203図46)

5 第11号土壇 (第203図47)

6 第11号土壇 (第203図48)

7 第11号土壇 (第203図49)

8 第15号土壇 (第203図50)

9 第15号土壇 (第203図51)

図版113

1 第15号土壇 (第203図53)

2 第15号土壇 (第203図56)

3 第15号土壇 (第203図58)

4 第25号土壇 (第203図59)

5 第19号土壤 (第204图62)

6 第19号土壤 (第204图65)

7 第19号土壤 (第204图66)

图版114

1 第20号土壤 (第204图74)

2 第20号土壤 (第204图75)

3 第20号土壤 (第204图76)

4 第20号土壤 (第204图80)

5 第20号土壤 (第204图83)

6 第20号土壤 (第204图84)

7 第20号土壤 (第205图85)

图版115

1 第27号土壤 (第205图86)

2 第1号满迹 (第214图1)

3 第1号满迹 (第214图2)

4 第7号满迹 (第210图1)

5 第7号满迹 (第210图3)

6 第7号满迹 (第210图4)

7 第7号满迹 (第210图5)

8 第7号满迹 (第210图7)

9 第7号满迹 (第210图10)

图版116

1 第7号满迹 (第210图14)

2 第7号满迹 (第210图15)

3 第7号满迹 (第211图19)

4 第7号满迹 (第211图22)

5 第7号满迹 (第211图23)

6 第7号满迹 (第211图25)

图版117

1 第7号满迹 (第212图42)

2 第7号满迹 (第212图66)

3 第4号满迹第4地点 (第223图1)

4 第4号满迹第4地点 (第223图2)

5 第4号满迹第4地点 (第223图3)

6 第4号满迹第4地点 (第223图4)

7 第4号满迹第4地点 (第223图5)

8 第4号满迹第4地点 (第223图11)

图版118

1 第4号满迹第4地点 (第223图12)

2 第4号满迹第4地点 (第223图13)

3 第4号满迹第4地点 (第223图14)

4 第4号满迹第4地点 (第223图17)

5 第4号满迹第4地点 (第223图21)

6 第4号满迹第4地点 (第223图22)

7 第4号满迹第4地点 (第223图32)

图版119

1 第4号满迹第4地点 (第223图27)

2 第4号满迹第4地点 (第223图33)

3 第4号满迹第4地点 (第223图34)

4 第4号满迹第4地点 (第224图36)

5 第4号满迹第4地点 (第224图38)

图版120

1 第4号满迹第4地点 (第225图54)

2 第4号满迹第4地点 (第225图51)

3 第4号满迹第4地点 (第225图53)

4 第4号满迹第4地点 (第225图52)

图版121

1 第4号满迹第4地点 (第225图55~61)

2 第4号满迹第4地点 (第225图62~65)

3 第4号满迹第4地点 (第226图66~67)

4 第4号满迹第4地点 (第226图68~72)

图版122

1 第4号满迹第4地点 (第226图73~77)

2 第4号满迹第4地点 (第226图78~79)

3 第4号满迹第4地点 (第227图81)

4 第4号满迹第4地点 (第227图83)

图版123

1 第4号满迹第4地点 (第227图84)

2 第4号满迹第4地点 (第227图85)

3 第4号满迹第4地点 (第227图88)

4 第4号满迹第4地点 (第227图86)

5 第4号满迹第4地点 (第227图89)

6 第4号满迹第4地点 (第227图90)

图版124

- 1 第4号沟跡第4地点 (第227图94)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第227图101)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第227图108)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第227图104)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第227图107)
- 6 第4号沟跡第4地点 (第227图109)

图版125

- 1 第4号沟跡第4地点 (第227图110)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第227图112)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第228图116)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第228图117)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第228图118)

图版126

- 1 第4号沟跡第4地点 (第228图119)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第228图120)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第228图121)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第228图122)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第228图123)
- 6 第4号沟跡第4地点 (第228图129)

图版127

- 1 第4号沟跡第4地点 (第228图124)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第228图125)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第228图126)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第228图127)

图版128

- 1 第4号沟跡第4地点 (第228图128)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第228图130)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第228图133)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第228图131)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第228图136)
- 6 第4号沟跡第4地点 (第229图139)

图版129

- 1 第4号沟跡第4地点 (第228图135)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第228图137)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第229图140)

图版130

- 1 第4号沟跡第4地点 (第229图141)

- 2 第4号沟跡第4地点 (第229图142)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第229图143)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第229图144)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第229图145)
- 6 第4号沟跡第4地点 (第229图146)
- 7 第4号沟跡第4地点 (第229图147)
- 8 第4号沟跡第4地点 (第229图150)

图版131

- 1 第4号沟跡第4地点 (第229图151)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第229图152)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第229图153)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第229图154)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第229图155)
- 6 第4号沟跡第4地点 (第229图169)

图版132

- 1 第4号沟跡第4地点 (第230图175)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第230图176)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第230图184)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第230图185)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第230图186)
- 6 第4号沟跡第4地点 (第230图187)
- 7 第4号沟跡第4地点 (第230图188)
- 8 第4号沟跡第4地点 (第230图189)

图版133

- 1 第4号沟跡第4地点 (第230图190)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第230图192)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第230图193)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第230图194)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第230图196)
- 6 第4号沟跡第4地点 (第230图197)
- 7 第4号沟跡第4地点 (第231图201)

图版134

- 1 第4号沟跡第4地点 (第231图202)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第231图205)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第231图206)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第231图207)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第232图226)

6 第4号满跡第4地点 (第232图229)
图版135

1 第4号满跡第4地点 (第232图230)
2 第4号满跡第4地点 (第232图231)
3 第4号满跡第4地点 (第232图232)
4 第4号满跡第4地点 (第233图233)
5 第4号满跡第4地点 (第233图234)
6 第4号满跡第5地点 (第243图1)
7 第4号满跡第5地点 (第243图3)

图版136

1 第4号满跡第5地点 (第243图4)
2 第4号满跡第5地点 (第243图5)
3 第4号满跡第5地点 (第243图6)
4 第4号满跡第5地点 (第243图7)
5 第4号满跡第5地点 (第243图18)
6 第4号满跡第5地点 (第244图27)
7 第4号满跡第5地点 (第244图31)

图版137

1 第4号满跡第5地点 (第244图32)
2 第4号满跡第5地点 (第244图34)
3 第4号满跡第5地点 (第244图35)
4 第4号满跡第5地点 (第244图44)
5 第4号满跡第5地点 (第245图49)
6 第4号满跡第5地点 (第245图50)
7 第4号满跡第5地点 (第245图51)
8 第4号满跡第6地点 (第256图1)

图版138

1 第4号满跡第6地点 (第256图2)
2 第4号满跡第6地点 (第256图3)
3 第4号满跡第6地点 (第256图4)
4 第4号满跡第6地点 (第256图5)
5 第4号满跡第6地点 (第256图6)
6 第4号满跡第6地点 (第256图8)
7 第4号满跡第6地点 (第256图13)

图版139

1 第4号满跡第6地点 (第256图7)
2 第4号满跡第6地点 (第256图16)

3 第4号满跡第6地点 (第256图17)
4 第4号满跡第6地点 (第256图18)

图版140

1 第4号满跡第6地点 (第256图19)
2 第4号满跡第6地点 (第256图20)
3 第4号满跡第6地点 (第256图21)
4 第4号满跡第6地点 (第256图22)

图版141

1 第4号满跡第6地点 (第256图23)
2 第4号满跡第6地点 (第256图27)
3 第4号满跡第6地点 (第256图29)
4 第4号满跡第6地点 (第257图34)
5 第4号满跡第6地点 (第257图35)
6 第4号满跡第6地点 (第257图36)
7 第4号满跡第6地点 (第257图39)
8 第4号满跡第6地点 (第257图40)
9 第4号满跡第6地点 (第257图44)

图版142

1 第4号满跡第6地点 (第257图46)
2 第4号满跡第6地点 (第257图48)
3 第4号满跡第6地点 (第257图49)
4 第4号满跡第6地点 (第257图50)
5 第4号满跡第6地点 (第258图58)
6 第4号满跡第6地点 (第258图79)

图版143

1 第4号满跡第6地点 (第258图80)
2 第4号满跡第6地点 (第258图81)
3 第4号满跡第6地点 (第258图82)
4 第4号满跡第6地点 (第258图83)
5 第4号满跡第6地点 (第258图84)
6 第4号满跡第6地点 (第258图85)
7 第4号满跡第6地点 (第258图86)
8 第4号满跡第6地点 (第258图87)
9 第4号满跡第6地点 (第258图90)

图版144

1 第4号满跡第6地点 (第258图88)
2 第4号满跡第6地点 (第258图91)

3 第4号沟跡第6地点 (第258图92)

4 第4号沟跡第6地点 (第259图93)

5 第4号沟跡第6地点 (第259图94)

6 第4号沟跡第6地点 (第259图96)

图版145

1 第4号沟跡第6地点 (第259图97)

2 第4号沟跡第6地点 (第259图99)

3 第4号沟跡第6地点 (第259图100)

4 第4号沟跡第6地点 (第260图106)

5 第4号沟跡第6地点 (第260图107)

6 第4号沟跡第6地点 (第260图111)

图版146

1 第4号沟跡第6地点 (第260图114)

2 第4号沟跡第6地点 (第260图113)

3 第4号沟跡第6地点 (第260图120)

4 第4号沟跡第6地点 (第260图121)

5 第4号沟跡第6地点 (第261图133)

6 第4号沟跡第6地点 (第261图134)

7 第4号沟跡第6地点 (第261图135)

图版147

1 第4号沟跡第6地点 (第261图136)

2 第4号沟跡第6地点 (第261图137)

3 第4号沟跡第6地点 (第261图138)

4 第4号沟跡第6地点 (第261图139)

5 第4号沟跡第6地点 (第261图140)

6 第4号沟跡第6地点 (第261图141)

7 第4号沟跡第6地点 (第261图142)

8 第4号沟跡第6地点 (第261图143)

9 第4号沟跡第6地点 (第261图144)

10 第4号沟跡第6地点 (第261图145)

图版148

1 第4号沟跡第6地点 (第261图146)

2 第4号沟跡第6地点 (第261图147)

3 第4号沟跡第6地点 (第261图148)

4 第4号沟跡第7地点 (第281图1)

5 第4号沟跡第7地点 (第281图2)

6 第4号沟跡第7地点 (第281图3)

图版149

1 第4号沟跡第7地点 (第281图4)

2 第4号沟跡第7地点 (第281图5)

3 第4号沟跡第7地点 (第281图6)

4 第4号沟跡第7地点 (第281图7)

图版150

1 第4号沟跡第7地点 (第281图8)

2 第4号沟跡第7地点 (第281图15)

3 第4号沟跡第7地点 (第281图17)

4 第4号沟跡第7地点 (第281图16)

5 第4号沟跡第7地点 (第281图21)

6 第4号沟跡第7地点 (第281图22)

7 第4号沟跡第7地点 (第282图26)

图版151

1 第4号沟跡第7地点 (第282图27)

2 第4号沟跡第7地点 (第282图28)

3 第4号沟跡第7地点 (第283图36~40)

4 第4号沟跡第7地点 (第283图34)

5 第4号沟跡第7地点 (第283图35)

6 第4号沟跡第7地点 (第283图41~48)

图版152

1 第4号沟跡第7地点 (第284图49)

2 第4号沟跡第7地点 (第284图51)

3 第4号沟跡第7地点 (第284图50·52)

4 第4号沟跡地点不明 (第291图3)

5 第1号滑石製品集中地点 (第297图6)

6 第1号滑石製品集中地点 (第297图10)

7 第1号滑石製品集中地点 (第297图11)

图版153

1 第1号滑石製品集中地点 (第297图8)

2 第1号滑石製品集中地点 (第297图7)

3 第1号滑石製品集中地点 (第297图15)

4 第1号滑石製品集中地点 (第297图9)

5 第1号滑石製品集中地点 (第297图13)

6 第1号滑石製品集中地点 (第297图14)

7 第1号滑石製品集中地点 (第297图17)

8 第1号滑石製品集中地点 (第297图18)

- 9 第1号滑石製品集中地点 (第297図19)
- 10 第1号滑石製品集中地点 (第297図20)
- 11 第1号滑石製品集中地点 (第297図22)
- 12 第1号滑石製品集中地点 (第297図23)

図版154

- 1 第1号滑石製品集中地点 (第297図21)
- 2 第1号滑石製品集中地点 (第297図24)
- 3 第1号滑石製品集中地点 (第297図25)
- 4 第1号滑石製品集中地点 (第297~299図
28~269)
- 5 第2号滑石製品集中地点 (第302図2)
- 6 第2号滑石製品集中地点 (第302図3)

図版155

- 1 第2号滑石製品集中地点 (第302図6)
- 2 第2号滑石製品集中地点 (第302図7)
- 3 第2号滑石製品集中地点 (第302図8)
- 4 第2号滑石製品集中地点 (第302図11)
- 5 第2号滑石製品集中地点 (第302図12)
- 6 第2号滑石製品集中地点 (第302図19)
- 7 第2号滑石製品集中地点 (第302図20)
- 8 第2号滑石製品集中地点 (第302図21)
- 9 第2号滑石製品集中地点 (第302図22)

図版156

- 1 第2号滑石製品集中地点 (第302図23)
- 2 第2号滑石製品集中地点 (第302図24)
- 3 第2号滑石製品集中地点 (第302図25)
- 4 第2号滑石製品集中地点 (第302図26)
- 5 第2号滑石製品集中地点 (第303図27)
- 6 第2号滑石製品集中地点 (第303図28)
- 7 第2号滑石製品集中地点 (第303図29)

図版157

- 1 第2号滑石製品集中地点 (第303図30)
- 2 第2号滑石製品集中地点 (第303図31)
- 3 第2号滑石製品集中地点 (第303図32)
- 4 第2号滑石製品集中地点 (第303図33)
- 5 第2号滑石製品集中地点 (第303図34)
- 6 第2号滑石製品集中地点 (第303図35)

- 7 第2号滑石製品集中地点 (第303図36)
- 8 第2号滑石製品集中地点 (第303図37)
- 9 第2号滑石製品集中地点 (第303図39)

図版158

- 1 第2号滑石製品集中地点 (第303図38)
- 2 第2号滑石製品集中地点 (第303図40)
- 3 第2号滑石製品集中地点 (第303図41)
- 4 第2号滑石製品集中地点 (第303図42)
- 5 第2号滑石製品集中地点 (第303図43)
- 6 第2号滑石製品集中地点 (第303図44)
- 7 第2号滑石製品集中地点 (第303図45)
- 8 第2号滑石製品集中地点 (第303図48)
- 9 第2号滑石製品集中地点 (第303図49)
- 10 第2号滑石製品集中地点 (第303図50)
- 11 第2号滑石製品集中地点 (第303図51)
- 12 第2号滑石製品集中地点 (第303図52)
- 13 第2号滑石製品集中地点 (第303図53)

図版159

- 1 第2号滑石製品集中地点 (第303図54)
- 2 第2号滑石製品集中地点 (第303図55)
- 3 第2号滑石製品集中地点 (第303図56)
- 4 第2号滑石製品集中地点 (第303図57)
- 5 第2号滑石製品集中地点 (第303図58)
- 6 第2号滑石製品集中地点 (第303図59)
- 7 第2号滑石製品集中地点 (第303図61)
- 8 第2号滑石製品集中地点 (第303図62)
- 9 第2号滑石製品集中地点 (第303図63)
- 10 第2号滑石製品集中地点 (第304・305図64~
272)

図版160

- 1 第1号性格不明遺構 (第306図1)
- 2 グリッドビット (第310図1)
- 3 グリッドビット (第310図2)
- 4 グリッド (第311図1)
- 5 グリッド (第311図2)
- 6 グリッド (第311図3)
- 7 グリッド (第311図4)

8 グリッド (第311図5～8)

図版161

- 1 グリッド (第311図21)
- 2 グリッド (第311図24)
- 3 グリッド (第311図29)
- 4 グリッド (第312図38)
- 5 グリッド (第312図39)
- 6 グリッド (第312図40)

図版162

- 1 グリッド (第312図44)
- 2 グリッド (第312図45)
- 3 グリッド (第313図46)
- 4 グリッド (第313図49)
- 5 グリッド (第313図51)
- 6 グリッド (第313図52)
- 7 グリッド (第313図61)
- 8 グリッド (第313図65)
- 9 グリッド (第313図67)
- 10 グリッド (第313図68)

図版163

- 1 グリッド (第313図62)
- 2 グリッド (第314図74)
- 3 グリッド (第314図81)
- 4 グリッド (第314図83)
- 5 グリッド (第314図85・86)
- 6 グリッド (第314図87)
- 7 グリッド (第314図89)

図版164

- 1 グリッド (第314図90)
- 2 グリッド (第314図91)
- 3 グリッド (第314図92)
- 4 グリッド (第314図93)
- 5 グリッド (第315図99)
- 6 グリッド (第315図101)
- 7 グリッド (第315図102)

図版165

- 1 グリッド (第315図103)

2 グリッド (第315図106)

3 グリッド (第315図114)

4 グリッド (第315図107)

5 グリッド (第315図111)

6 グリッド (第316図119)

7 グリッド (第316図120)

8 グリッド (第316図121)

図版166

1 グリッド (第317図123～129)

2 グリッド (第317図130～135)

3 グリッド (第317図136～146)

4 グリッド (第317図147～150)

図版167

1 B区 (第318図152)

2 B区 (第318図153)

3 B区 (第318図154)

4 B区 (第318図157)

5 B区 (第318図160)

6 B区 (第318図161)

7 表採 (第318図164)

図版168

1 第4号溝跡第4地点 (第234図235)

2 第4号溝跡第4地点 (第234図236)

3 第4号溝跡第4地点 (第234図237)

4 第4号溝跡第4地点 (第234図238)

5 第4号溝跡第4地点 (第237図251)

図版169

1 第4号溝跡第4地点 (第234図239)

2 第4号溝跡第4地点 (第234図240)

3 第4号溝跡第4地点 (第235図241)

図版170

1 第4号溝跡第4地点 (第235図242)

2 第4号溝跡第4地点 (第235図243)

3 第4号溝跡第4地点 (第235図244)

図版171

1 第4号溝跡第4地点 (第236図245)

2 第4号溝跡第4地点 (第236図247)

图版172

- 1 第4号沟跡第4地点 (第236图246)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第237图254)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第238图255)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第236图248)

图版173

- 1 第4号沟跡第4地点 (第237图249)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第237图250)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第237图253)

图版174

- 1 第4号沟跡第4地点 (第237图252)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第239图261)

图版175

- 1 第4号沟跡第4地点 (第238图256)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第239图266)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第239图262)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第239图263)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第240图270)

图版176

- 1 第4号沟跡第4地点 (第238图257)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第238图257) 扩大
- 3 第4号沟跡第4地点 (第239图264)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第240图269)

图版177

- 1 第4号沟跡第4地点 (第238图258)

图版178

- 1 第4号沟跡第4地点 (第239图259)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第239图260)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第239图265)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第239图267)
- 5 第4号沟跡第4地点 (第240图272)

图版179

- 1 第4号沟跡第4地点 (第239图268)
- 2 第4号沟跡第4地点 (第240图274)
- 3 第4号沟跡第4地点 (第240图271)
- 4 第4号沟跡第4地点 (第240图273)

图版180

- 1 第4号沟跡第5地点 (第246图52)
- 2 第4号沟跡第5地点 (第246图53)

图版181

- 1 第4号沟跡第5地点 (第247图54)
- 2 第4号沟跡第5地点 (第247图55)
- 3 第4号沟跡第5地点 (第248图64)
- 4 第4号沟跡第5地点 (第247图57)
- 5 第4号沟跡第5地点 (第247图58)

图版182

- 1 第4号沟跡第5地点 (第247图56)
- 2 第4号沟跡第5地点 (第248图63)
- 3 第4号沟跡第5地点 (第248图65)
- 4 第4号沟跡第5地点 (第248图61)

图版183

- 1 第4号沟跡第5地点 (第248图59)
- 2 第4号沟跡第5地点 (第248图60)

图版184

- 1 第4号沟跡第5地点 (第248图62)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第262图151)
- 3 第4号沟跡第6地点 (第262图153)
- 4 第4号沟跡第6地点 (第262图154)
- 5 第4号沟跡第6地点 (第262图156)

图版185

- 1 第4号沟跡第6地点 (第262图149)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第262图150)
- 3 第4号沟跡第6地点 (第262图155)
- 4 第4号沟跡第6地点 (第263图158)

图版186

- 1 第4号沟跡第6地点 (第263图159)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第267图171)
- 3 第4号沟跡第6地点 (第264图161)
- 4 第4号沟跡第6地点 (第267图172)

图版187

- 1 第4号沟跡第6地点 (第263图160)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第265图163)
- 3 第4号沟跡第6地点 (第266图164)
- 4 第4号沟跡第6地点 (第266图167)

图版188

- 1 第4号沟跡第6地点 (第263图157)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第265图162)
- 3 第4号沟跡第6地点 (第267图169)

图版189

- 1 第4号沟跡第6地点 (第266图165)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第266图166)

图版190

- 1 第4号沟跡第6地点 (第267图168)

图版191

- 1 第4号沟跡第6地点 (第267图170)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第267图173)
- 3 第4号沟跡第6地点 (第268图176)
- 4 第4号沟跡第6地点 (第267图174)
- 5 第4号沟跡第6地点 (第271图190)

图版192

- 1 第4号沟跡第6地点 (第268图175)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第269图179)

图版193

- 1 第4号沟跡第6地点 (第269图180)

图版194

- 1 第4号沟跡第6地点 (第270图181)

图版195

- 1 第4号沟跡第6地点 (第270图181) 扩大

图版196

- 1 第4号沟跡第6地点 (第268图177)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第271图186)
- 3 第4号沟跡第6地点 (第268图178)
- 4 第4号沟跡第6地点 (第271图187)
- 5 第4号沟跡第6地点 (第270图182)

图版197

- 1 第4号沟跡第6地点 (第271图183)
- 2 第4号沟跡第6地点 (第271图188)
- 3 第4号沟跡第6地点 (第271图184)
- 4 第4号沟跡第6地点 (第271图189)

图版198

- 1 第4号沟跡第6地点 (第271图192)

- 2 第4号沟跡第6地点 (第272图197)

- 3 第4号沟跡第6地点 (第271图191)

- 4 第4号沟跡第6地点 (第272图198)

- 5 第4号沟跡第6地点 (第272图201)

图版199

- 1 第4号沟跡第6地点 (第271图193)

- 2 第4号沟跡第6地点 (第272图199)

- 3 第4号沟跡第6地点 (第272图194)

- 4 第4号沟跡第6地点 (第272图206)

图版200

- 1 第4号沟跡第6地点 (第272图195)

- 2 第4号沟跡第6地点 (第272图203)

- 3 第4号沟跡第6地点 (第272图204)

- 4 第4号沟跡第6地点 (第272图200)

- 5 第4号沟跡第6地点 (第272图205)

图版201

- 1 第4号沟跡第6地点 (第273图207)

- 2 第4号沟跡第6地点 (第272图202)

- 3 第4号沟跡第6地点 (第272图196)

- 4 第4号沟跡第6地点 (第273图208)

- 5 第4号沟跡第7地点 (第285图53)

图版202

- 1 第4号沟跡第7地点 (第285图54)

- 2 第4号沟跡第7地点 (第285图55)

- 3 第4号沟跡第7地点 (第285图56)

- 4 第4号沟跡第7地点 (第285图57)

- 5 第4号沟跡第7地点 (第286图60)

图版203

- 1 第4号沟跡第7地点 (第285图58)

- 2 第4号沟跡第7地点 (第286图62)

图版204

- 1 第4号沟跡第7地点 (第286图61)

- 2 第4号沟跡第7地点 (第286图63)

- 3 第4号沟跡第7地点 (第288图68)

图版205

- 1 第4号沟跡第7地点 (第286图59)

- 2 第4号沟跡第7地点 (第290图82)

- 3 第4号沟跡第7地点 (第290图83) 图版206
- 1 第4号沟跡第7地点 (第287图64) 图版207
- 1 第4号沟跡第7地点 (第288图65) 图版208
- 1 第4号沟跡第7地点 (第288图65) 扩大 图版209
- 1 第4号沟跡第7地点 (第288图66)
- 2 第4号沟跡第7地点 (第289图71)
- 3 第4号沟跡第7地点 (第289图69)
- 4 第4号沟跡第7地点 (第290图77) 图版210
- 1 第4号沟跡第7地点 (第289图70)
- 2 第4号沟跡第7地点 (第288图67)
- 3 第4号沟跡第7地点 (第290图73)
- 4 第4号沟跡第7地点 (第290图75)
- 5 第4号沟跡第7地点 (第290图78) 图版211
- 1 第4号沟跡第7地点 (第290图74)
- 2 第4号沟跡第7地点 (第289图72)
- 3 第4号沟跡第7地点 (第290图79)
- 4 第4号沟跡第7地点 (第290图76)
- 5 第4号沟跡第7地点 (第290图80)
- 6 第4号沟跡第7地点 (第290图81) 图版212
- 1 第4号沟跡地点不明 (第292图5)
- 2 第4号沟跡地点不明 (第292图7)
- 3 第4号沟跡地点不明 (第294图18)
- 4 第4号沟跡地点不明 (第292图6)
- 5 第4号沟跡地点不明 (第293图15)
- 6 第4号沟跡地点不明 (第292图8) 图版213
- 1 第4号沟跡地点不明 (第292图9)
- 2 第4号沟跡地点不明 (第293图12)
- 3 第4号沟跡地点不明 (第292图10) 图版214
- 1 第4号沟跡地点不明 (第293图16)
- 2 第4号沟跡地点不明 (第294图19)
- 3 第4号沟跡地点不明 (第294图24)
- 4 第4号沟跡地点不明 (第293图14) 图版215
- 1 第4号沟跡地点不明 (第292图11)
- 2 第4号沟跡地点不明 (第294图22)
- 3 第4号沟跡地点不明 (第293图17)
- 4 第4号沟跡地点不明 (第293图13) 图版216
- 1 第4号沟跡地点不明 (第294图20)
- 2 第4号沟跡地点不明 (第294图21)
- 3 第4号沟跡地点不明 (第294图23) 图版217
- 1 第4号沟跡第2地点 (多孔菌科子实体)
- 2 第4号沟跡第4地点 (多孔菌科子实体)
- 3 第4号沟跡第4地点 (多孔菌科子实体)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県教育委員会（以下「県教委」）では、都市基盤整備公団埼玉地域支社（当時・以下「公団」/現独立行政法人都市再生機構・以下「都市機構」）が東松山市高坂地区で行う高坂駅東口第二地区特定土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財の保護について、平成13年度より協議を重ね、調整を図ってきた。

区画整理事業地内の埋蔵文化財については、公団埼玉地域支社都市整備部長（当時）より、平成13年11月7日付けさ24-24号で「埋蔵文化財の所在及び取り扱い」について照会があった。

当時、この事業予定地では周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されていなかったため、県教委では平成13年12月及び平成14年1月に確認調査を実施し、平成14年2月7日付け教文第1459号で、埋蔵文化財の所在と取り扱いについて回答した。

これを基に協議を重ねたが、より厳密な埋蔵文化財の所在状況を把握する必要が出てきたため、平成14年8月と11月に確認調査を追加実施した。その結果は、平成14年11月25日付け教文第1169号で詳細な回答を行った。これらの確認調査によって、事業地内には銭塚遺跡（No34-369）・城敷遺跡（No34-370）・反町遺跡（No34-371）の3遺跡が所在し、工事に先立ち、記録保存の発掘調査を実施すべき遺構が所在していることが確認された。

このため、発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」）が実施機関としてあたることとし、事業団、公団、文化財保護課（当時）の三者により調査方法、期間、経費などについて協議し、最終的には、平成15年3月31日付けで「高坂駅東口第二地区埋蔵文化財に関する協定書」を公団埼玉地域支社長（当時）、県教委教育長、事業団理事長の三者で締結した。

発掘調査は3次に分けて実施された。

第1次調査（平成15年4月8日～4月30日、8月1日～平成16年3月24日）

文化財保護法第57条の3（当時）の規定による埋蔵文化財発掘通知は公団埼玉地域支社長（当時）から平成15年4月1日付けさ24-5号で提出され、これに対する県教委教育長からの勧告は平成15年5月14日付け教文第4-71号で行われた。

文化財保護法第57条（当時）の規定による事業団からの発掘調査届に対する県教委教育長からの指示は平成15年5月14日付け教文第2-12号、平成15年5月14日付け教文第2-13号で通知した。

第2次調査（平成16年4月8日～平成18年3月31日）

文化財保護法第57条の3（当時）の規定による埋蔵文化財発掘通知は公団埼玉地域支社長（当時）から平成16年3月30日付けさ24-31号で提出され、これに対する県教委教育長からの勧告は平成16年4月19日付け教文第4-14号で行われた。

文化財保護法第57条（当時）の規定による事業団からの発掘調査届に対する県教委教育長からの指示は平成16年4月27日付け教文第2-9号で通知した。

第3次調査（平成20年9月16日～10月31日）

文化財保護法第94条による埋蔵文化財発掘通知は都市機構埼玉地域支社長から平成20年9月2日付けさ53-15号で提出され、これに対する勧告は県教委教育長から平成20年9月10日付け教文第4-518号で行われた。

文化財保護法第92条の規定による事業団からの発掘調査届に対する県教委教育長からの指示は、平成20年9月26日付け教文第2-48号で行われた。

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

銭塚・城敷遺跡の発掘調査は、高坂駅東口第二特定土地区画整理事業に先立ち、平成15年度に城敷遺跡第1次調査、平成16年度に城敷遺跡第2次・銭塚遺跡第2次調査、平成17年度に銭塚遺跡第3次調査、平成20年度に城敷遺跡第3次調査を実施した。

事業地内には、銭塚・城敷遺跡のほか反町遺跡が所在する。両遺跡とともに一連の発掘調査として、平成17・18年度に反町遺跡第1・2次調査、平成20・21年度に反町遺跡第4・5次調査を実施した(第1表)。

城敷遺跡第1次調査は、平成15年4月8日から平成15年4月30日、平成15年8月1日から平成16年3月24日まで実施した。調査面積は7,000㎡である。

銭塚遺跡第2次調査・城敷遺跡第2次調査は、平成16年4月8日から平成17年3月31日まで、2遺跡を一体として発掘調査にあたった。調査面積は12,700㎡である。

銭塚遺跡第3次調査は、平成17年4月1日から平成18年3月31日まで、反町遺跡第1次調査と併行して実施した。調査面積は2,000㎡である。平成15～17年度における調査面積の合計は、21,700㎡である。

なお、上記3ヵ年の発掘調査の経過については、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第369集『銭塚Ⅱ/城敷Ⅰ』(既報告)によって詳述しているため、割愛する。

城敷遺跡第3次調査は、平成20年9月16日から平成20年10月31日まで実施した。調査面積は600㎡である。

9月中旬までに発掘調査届等の事務手続きを完了後直ちに、重機を使用して遺構確認面までの表土の除去を開始した。併行して、事務所設置等を

行った。

表土が終了した箇所から、順次、補助員による遺構確認作業に着手し、遺構精査も実施した。

10月初旬に基準点測量委託作業を行った。これを基に、精査した遺構の断面図・平面図等の作成に着手し、遺構写真を撮影した。10月28日に空中写真撮影を実施し、発掘調査を終了した。

また、10月末に事務所撤去・実績報告書作成や発見届・保管証提出等の事務処理を行い完了した。

なお、銭塚遺跡第2次・第3次、城敷遺跡第1次・第2次・第3次における調査面積の合計は、22,300㎡である。

(2) 整理・報告書の作成

銭塚遺跡第2・3次、城敷遺跡第1・2次調査にかかる整理・報告書作成事業は、当初の計画では平成19年度から4ヶ年計画で実施し、平成21年度(第369集『銭塚Ⅱ/城敷Ⅰ』)と平成22年度の2期に分けて報告書を刊行する予定であった。しかし、平成20年度に城敷遺跡第3次調査が実施されたため、この整理・報告書作成事業を平成23年度に継続して実施し、報告書は平成22年度刊行分と合わせて平成23年度に刊行することになった(本報告)。

本報告に関わる整理事業は、平成21年4月8日から平成22年3月24日、平成22年4月8日から平成23年3月31日、平成23年4月8日から平成23年6月30日まで実施した。

遺物の整理は、水洗・注記作業を行った後、遺構や出土地点ごとに接合し、石膏を用いて補強・復元した。

接合・復元した遺物は、遺構や出土地点ごとに実測を行い、図化した。実測は、三次元座標実測機・写真実測機を用いて描いた素図を基に、補正を行いながら遺物実測図を作成した。実測図には、遺物の計測値・胎土・焼成具合・色調・残存率・

特徴などを記載した。この各項目のデータを基に、遺物観察表観察表を作成した。

遺物実測図は、製図ペンでトレース（墨入れ）を行い、遺物図版作成の原因とした。また実測図で表現できない部分など必要に応じて、拓影を採った。

完成した遺物トレース図と拓本はスキャナでパソコンに取り込み、印刷用図版作成のためにデジタル・データ化した。併行して、遺物実測図を縮小コピーし、遺構や出土地点ごとに版面のレイアウトを行った。これを図版下図として、スキャニングした遺物図のデジタル・データを編集し、遺物番号・スケール等の貼り込みと網掛け作業を行い、印刷用の遺物挿図版下データを作成した。

また、復元した遺物は、個別にデジタル写真撮影を行った。撮影したデータはパソコンに取り込んで遺構や出土地点ごとに整理し、編集ソフトでトリミング・版組み・キャプション入力等の編集を行い、遺物写真図版の版下データを作成した。

遺構の整理は、発掘調査で作成された平面図・

土層断面図・遺物出土状況図を遺構ごとに修正・編集し、第二原因図を作成した。第二原因図は、スキャナでパソコンに取り込み、描画ソフトでデジタルトレース作業と、スクリーン・諸記号や土層断面図の堆積土の特徴を説明した土層説明文を組み込む編集作業を行い、印刷用の遺構挿図版下データを作成した。

遺構写真は、発掘調査で撮影されたものの中から選択した。フィルム撮影されたものについては、スキャニングを行ってデジタル・データ化した。このデータは、遺物写真と同様に、編集ソフトを用いて、遺構写真図版用の版下データを作成した。

作成した遺構・遺物のデータをもとに、報告文を執筆した。これと遺構・遺物の挿図と写真図版、遺物観察表などを組み合わせる割付を作成した。完了後印刷業者を選定し入稿し、校正を3回行い、平成23年8月下旬に報告書を刊行した。

また、校正と並行して、図面類・写真類・遺物・データ類、委託成果を整理し、報告書との対照を可能にした上で収納した。

第1表 発掘調査の工程

		平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
発掘調査	城敷第1次	■								
	城敷第2次		■							
	城敷第3次						■			
	銭塚第2次		■							
	銭塚第3次			■						
	反町第1次				■					
	反町第2次					■				
反町第4次						■				
反町第5次								■		
整理報告書作成	銭塚・城敷							銭塚Ⅱ/城敷Ⅰ (第369集)	城敷Ⅱ (第382集) (本報告)	
	反町							反町Ⅰ (第361集)	反町Ⅲ	

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成15年度（発掘調査 城敷遺跡第1次）		調査部	
理 事 長	桐 川 卓 雄	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
常務理事兼管理部長	中 村 英 樹	調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
管理部		主 席 調 査 員（調査第二担当）	劍 持 和 夫
管 理 部 副 部 長	村 田 健 二	統 括 調 査 員	伴 瀬 宗 一
主 席	田 中 由 夫	調 査 員	池 田 恵 美 子
平成16年度（発掘調査 城敷遺跡第2次・銭塚遺跡第2次）		調査部	
理 事 長	福 田 陽 充	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
常務理事兼管理部長	中 村 英 樹	調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
管理部		主 席 調 査 員（調査第二担当）	劍 持 和 夫
管 理 部 副 部 長	村 田 健 二	統 括 調 査 員	富 田 和 夫
主 席	田 中 由 夫	統 括 調 査 員	伴 瀬 宗 一
		主 任 調 査 員	福 田 聖
		調 査 員	菊 地 真
		調 査 員	松 本 美 佐 子
		調 査 員	池 田 恵 美 子
平成17年度（発掘調査 銭塚遺跡第3次）		調査部	
理 事 長	福 田 陽 充	調 査 部 長	今 泉 泰 之
常務理事兼管理部長	保 永 清 光	調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
管理部		主 席 調 査 員（調査第二担当）	劍 持 和 夫
管 理 部 副 部 長	村 田 健 二	統 括 調 査 員	富 田 和 夫
主 席	高 橋 義 和	統 括 調 査 員	大 谷 徹
		統 括 調 査 員	山 本 靖
		調 査 員	菊 地 真
平成20年度（発掘調査 城敷遺跡第3次）		調査部	
理 事 長	刈 部 博	調 査 部 長	村 田 健 二
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総務部		調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	主 査	岩 瀬 譲
総 務 課 長	松 盛 孝	主 事	竹 田 裕 子

平成19年度（報告書作成）

理事 長	刘 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総務部 副部長	昼 間 孝 志	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
総務課 長	松 盛 孝		

平成20年度（報告書作成）

理事 長	刘 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総務部 副部長	昼 間 孝 志	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
総務課 長	松 盛 孝		

平成21年度（報告書作成）

理事 長	刘 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美 代 子
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総務部 副部長	昼 間 孝 志	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
総務課 長	田 中 雅 人	主 査	山 本 靖

平成22年度（報告書作成）

理事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美 代 子
総務部		調 査 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総務部 副部長	金 子 直 行	調 査 監 兼 整 理 第 一 課 長	鯛 持 和 夫
総務課 長	田 中 雅 人	主 査	山 本 靖

平成23年度（報告書作成）

理事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	小 野 美 代 子
総務部		調 査 部 副 部 長	鯛 持 和 夫
総務部 副部長	金 子 直 行	整 理 第 二 課 長	赤 熊 浩 一
総務課 長	矢 島 将 和	主 査	山 本 靖

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

銭塚・城敷遺跡は、埼玉県ほぼ中央地点にあたる東松山市大字高坂に所在する。東武東上線高坂駅の東方約2kmに位置し、現在の遺跡周辺は水田と屋敷林に囲まれた宅地になっている。

埼玉県は、秩父山地を中心とする山地と、それに連なる台地・丘陵からなる西部地域、荒川低地を中心とする日本最大の平野である関東平野の多くを占める東部地域に三分される（第1図）。銭塚・城敷遺跡は、台地・丘陵と平野の接点に位置し、北側の東松山台地、南側の高坂台地を臨む都幾川右岸の低地に立地する。この低地は県東部に広がる低地に繋がっていく。

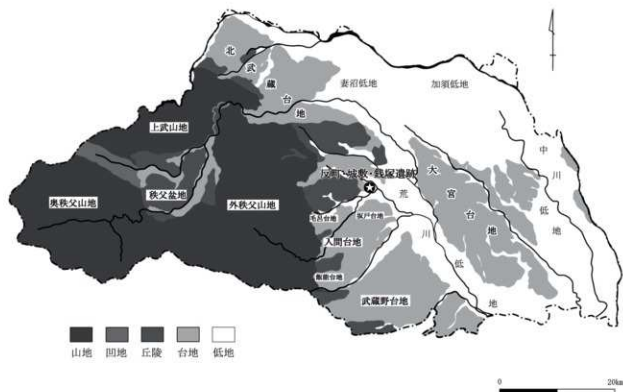
埼玉県では、地形上の特性から、西部の山地・丘陵を源流とする河川が発達し、国内最大の流域面積を誇る。県北部の利根川とその支流、県東

部、県南部の荒川とその支流域に概ね分割され、それぞれの流下によって現在の地形が形成されている。

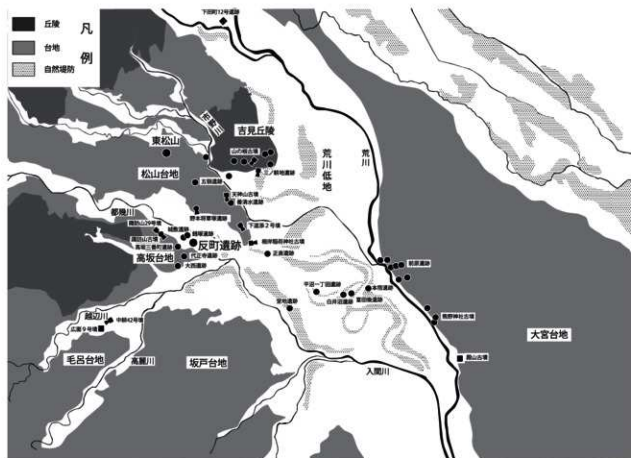
埼玉県中央部には、北側の比企丘陵と南側の岩殿丘陵が半島状に突き出している。丘陵は市野川・都幾川・越辺川による開析が進み、比企丘陵の東側には独立残丘の吉見丘陵がある。また、市野川と都幾川に挟まれて東松山台地が、都幾川と越辺川に挟まれて高坂台地が存在する（第2図）。

松山台地は都幾川などによる扇状地形で、武蔵嵐山の管生から東松山市根岸まで東西に伸びる。また、市野川・都幾川の両河川沿いには、河岸段丘が形成されている。標高は、現在の東松山市街で約40m、突端の根岸で約20mを測る。

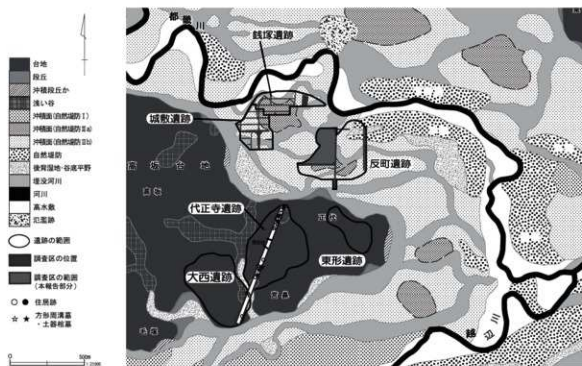
高坂台地は岩殿丘陵の東側に続く小規模な台地



第1図 埼玉県の地形



第2図 東松山周辺の地形



第3図 早俣低地の微地形と集落

で、東松山台地と同様の扇状地形である。眼下には都幾川が流れ、下流域の沖積低地に形成された自然堤防上には集落が分布する。

銭塚・城敷遺跡は都幾川右岸の早俣低地に位置する。この低地には、現在の集落が営まれている自然堤防と、沖積面下に埋没した過去の自然堤防

が存在し、本事業に伴う銭塚・城敷遺跡と反町遺跡は埋没した自然堤防上に立地している(第3図)。また、発掘調査によって複数の河川跡が検出されたことから、複雑な流路の変遷と自然堤防の形成が考えられる。さらに、これらの自然環境に応じながら、集落が営まれていたことが推定される。

2. 歴史的環境

銭塚・城敷遺跡及び反町遺跡の歴史的環境については、既刊の報告書「銭塚Ⅱ/城敷Ⅰ」(第369集)「反町遺跡Ⅰ」(第361集)及び「反町遺跡Ⅱ」(第380集)「西浦/野木氏館跡/山王裏/銭塚」(第340集)において詳細に述べられている。そこで、本書に掲載した遺構と同時期の古墳時代の歴史的環境について概要を記す。

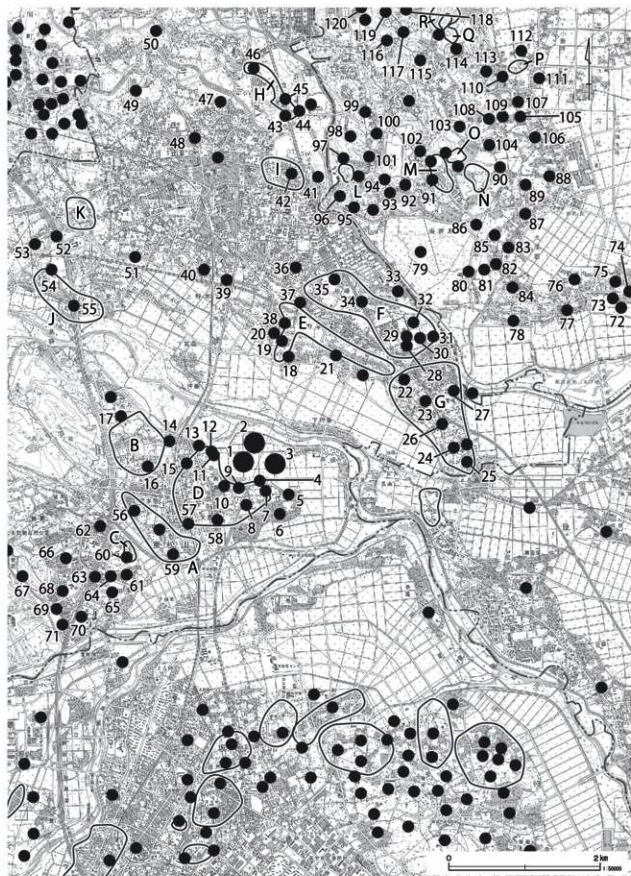
古墳時代前期

前代の弥生時代後期後半の比企地域・東松山市域には、吉ヶ谷式土器を主に出土する集落が展開

する。しかし、早俣低地に立地する城敷遺跡(第4図1)・反町遺跡(3)では、吉ヶ谷系の土器は出土するが遺構は未検出である。古墳時代になると、吉ヶ谷式とは型式的に連続関係がない五領式土器が展開し、遺跡数が急激に増加する。城敷遺跡と反町遺跡でも、広い範囲にわたって遺構が分布している。

南側の高坂台地上には、代正寺遺跡(8)・大西遺跡(58、弥生時代中期から継続する長期継続型集落)・下寺前遺跡(57)・小代氏館跡(6)など

東松山市	31 鷺神社裏遺跡	62 舞合遺跡	92 久米田遺跡	古墳群
1 城敷遺跡	32 天神山古墳	63 大塚原遺跡	93 大行山遺跡	A 毛塚古墳群
2 銭塚遺跡	33 神城遺跡	64 田本山遺跡	94 塚中塚遺跡	B 湖山山古墳群
3 反町遺跡	34 権現塚古墳	65 坂本遺跡	95 萩山古墳	C 坂山古墳群
4 折本遺跡	35 見入遺跡	66 朝平遺跡	96 松山城跡	D 高岡古墳群
5 東形遺跡	36 玉領遺跡	67 物見山遺跡	97 七耕地遺跡	E 野木古墳群
6 小代氏館跡	37 山王裏遺跡	68 緑山遺跡	98 十五耕地遺跡	F 新岡古墳群
7 駒方遺跡	38 上川入遺跡	69 児沢遺跡	99 二十二耕地遺跡	G 古瀬古墳群
8 代正寺遺跡	39 鶴田・龍田遺跡	70 立野遺跡	100 十二耕地遺跡	H 岩倉古墳群
9 高塚神社南遺跡	40 上杉本遺跡	71 駒橋遺跡	101 十耕地遺跡	I 下松古墳群
10 高塚三番町遺跡	41 今藤本遺跡	吉見町	102 日野山遺跡	J 樹田古墳群
11 高塚二番町遺跡	42 観音寺遺跡	72 金蔵院裏遺跡	103 和名堂跡群	K 青島古墳群
12 高塚氏館跡	43 岩巻遺跡	73 観音寺遺跡/大申遺跡	104 和名堂跡	L 吉見百穴穴穴墓群
13 高岡一番町遺跡	44 八幡遺跡	74 赤城裏遺跡	105 御所遺跡	M 久米田古墳群
14 上段原遺跡	45 向台遺跡	75 大申戸遺跡	106 湯津遺跡	N 山の根古墳群
15 高塚二番町西遺跡	46 聖天台遺跡	76 善馬遺跡	107 原籠前跡	O 三塚古墳群
16 大門遺跡	47 東耕地遺跡	77 河川遺跡	108 丸山遺跡	P 御所古墳群
17 月丘遺跡	48 前山遺跡	78 江藤遺跡	109 高神遺跡	Q 新山山古墳群
18 野木軍塚古墳	49 中耕地遺跡	79 西吉見冬里遺跡	110 稲荷前遺跡	R 田原穴穴墓群
19 野木氏館跡	50 面原遺跡	80 江口遺跡	111 天神前C遺跡	
20 西浦遺跡	51 沢ノ上遺跡	81 西岡ノ田遺跡	112 外宮遺跡	
21 東園在家遺跡	52 青島跡	82 南岡ノ田遺跡	113 坂東遺跡	
22 古高海道遺跡	53 岩の上遺跡	83 倉敷遺跡	114 入道原遺跡	
23 下道原遺跡	54 藤子山遺跡	84 志久遺跡	115 四十一耕地遺跡	
24 天神原遺跡	55 柳川遺跡	85 北岡ノ田遺跡	116 八ノ谷遺跡	
25 根中稲荷神社古墳	56 内手遺跡	86 三ノ耕地遺跡	117 三十七耕地遺跡	
26 古瀬稲荷裏遺跡	57 下寺前遺跡	87 能成遺跡	118 五ノ谷遺跡	
27 下山遺跡	58 大西遺跡	88 下遺跡	119 四ノ谷遺跡	
28 おくま山古墳	59 杉の木遺跡	89 原遺跡	120 七ノ谷遺跡	
29 聖塚遺跡	60 坂山宮跡群	90 合田遺跡		
30 香清水遺跡	61 宮本遺跡	91 和名遺跡		



第4図 周辺の遺跡

に集落・墓域が営まれている。また、吉ヶ谷式が集中した物見山丘陵から高坂台地にかけては、根平遺跡(66)、駒堀遺跡(71)、桜山古墳群(C)が発掘されている。さらに、高坂三番町遺跡(10・未報告)からは、東海地域からの搬入品である大塚式壺を用いた土器棺墓が輸出されている。城敷遺跡でも、遺構は伴わないが大塚式壺片14点が一括採集されている。

都幾川を挟んだ対岸の松山台地には、五領遺跡(36)・古東根岸裏・下道添遺跡(26・23)・番清水遺跡(30)などの大規模集落が存在し、畿内系・東海系・山陰系・北陸系などの所謂外来土器が多数出土している。一方では、弥生時代から継続する西浦遺跡(20)・観音寺遺跡(42)・岩鼻遺跡(43)や、小規模集落の鶴田・籠田遺跡(39)・附川遺跡(55)などもあり、遺跡のあり方に複雑な様相がみられる。

また、これまでに遺跡のなかった自然堤防上にも数多くの遺跡が展開するようになり、市野川流域には原遺跡(89)・下遺跡(88)・西吉見条里遺跡(77)・三ノ耕地遺跡(86)などが挙げられる。都幾川を流下した荒川低地にも尾崎遺跡・元宿遺跡・富田後遺跡・白井沼遺跡・平沼一丁田遺跡・堂地遺跡などがあり、特に建物跡の外側に溝を巡らせた周溝遺構の発見は、検出例のない早侯低地とは対照的である。さらに、正直玉作遺跡は、玉作工房が発見された反町遺跡や、滑石製品の製作が推定される城敷遺跡との関連から特筆される。

出現期古墳

銭塚・城敷遺跡の周辺には、出現期古墳が多く分布することでも知られている。

早侯低地を臨む高坂台地では、諏訪山古墳群(B)が造営されている。諏訪山29号墳(前方後方墳・53m)はこの地域最古の古墳で、諏訪山古墳(前方後円墳・63m)・諏訪山33号墳(円墳・B種ヨコハケ埴輪)と盟土墳が継続する。高坂台地上の古墳時代集落や、早侯低地の城敷遺跡・反

町遺跡との関係が目される。

松山台地には天神山古墳(32・前方後方墳・57m)・根岸稲荷神社古墳(25・前方後方墳・25m)・下道添2号墳が、吉見丘陵には山の根古墳(N・前方後方墳・54.8m)などがある。このように、出現期古墳は台地・丘陵上から流域の低地を睥睨する位置に築造されている。また都幾川の対岸には野本將軍塚古墳(18・前方後円墳・115m)が所在するが、築造年代はこの地域の古墳時代史の大きな問題として残されている。4世紀代(甘粕1976)、5世紀中葉から後葉(坂本1990)、5世紀後半から6世紀初頭(金井塚1979)との見解が示されている。至近の位置関係から、銭塚・城敷遺跡、反町遺跡とは無縁の古墳ではあり得ず、発掘調査成果は野本將軍塚古墳の築造時期に対する問題提起となる。

古墳時代中期

城敷遺跡の集落は、古墳時代前期終末段階に一旦は衰退したが、中期の5世紀前半代から再び活発となり、6世紀前半までに大集落へと成長する。しかし、6世紀後半に再び集落が衰退し、これと連動し、銭塚遺跡では7世紀頃から集落が形成される。銭塚・城敷遺跡の集落動向と連動し、古墳時代前期まで隆盛を極めた反町遺跡の集落は衰退し、前方後円墳を主墳とする大小の円墳で構成された初期群集墳が形成される。

銭塚・城敷遺跡の近隣には、この時期の大規模集落の調査例がなく、玉太岡遺跡(住居跡1)・大西遺跡(住居跡1)・久米田遺跡(92・住居跡6)など点的な分布である。

古墳時代後期

古墳時代後期になると、銭塚・城敷遺跡の周辺では、再び集落の形成が活発となる。

高坂台地上には、大西遺跡・下寺前遺跡・大門遺跡(16)などの集落遺跡が展開する。このうち、下寺前遺跡の第2号住居跡から初期須恵器(有蓋高坏・埴)が出土し、同時期の須恵器を多量に出

土する城敷遺跡との関連が目される。また比企丘陵上には、須恵器生産との関連が推定される舞台遺跡(62)、先駆的にカマドが導入された駒堀遺跡などがある。さらに、松山台地・吉見丘陵上にも、古吉海道遺跡(22)、籠田遺跡、古凍根岸裏遺跡、番清水遺跡、観音寺遺跡、笹塚遺跡(29)、玉太岡遺跡などの集落遺跡が展開する。

古墳時代後期の活発な集落展開とともに、数多くの後期古墳群が造営されている。

高坂台地には、高坂古墳群(D)・毛塚古墳群(A)のほか、諏訪山古墳群は前期から継続して営まれている。また松山台地の野本古墳群(E)・古凍古墳群(G)・柏崎古墳群(F)と下松古墳群(I)・三千塚古墳群、吉見丘陵の久米田古墳群(M)・吉見百穴(L)・黒岩横穴墓群(R)など、

枚挙に暇がない。

さらに、埴輪や須恵器の窯業生産も開始され、高坂台地に接する比企丘陵の桜山窯跡群(60)では埴輪窯跡17基と県内最古段階の須恵器窯跡2基(6世紀前半・MT15併行期か)が発見されている。また、根平遺跡・舞台遺跡・立野遺跡(70)など古墳時代の須恵器生産遺跡が集中する。吉見丘陵でも、和名窯跡群(103)から4基の埴輪窯跡が検出されている。

このような、古墳・古墳群の夥しい数や窯業生産の開始などの動向に対し、既発見の集落遺跡は少なく感じられる。今後は、城敷・銭塚遺跡や反町遺跡のような都幾川や市ノ川流域の沖積地微高地上に形成された遺跡の発見に注意する必要がある。

III 遺跡の概要

1. 銭塚・城敷・反町遺跡群の概要

(1) 基本層序

高坂駅東口第二土地区画整理事業地は、東松山市大字高坂地内に位置する。事業地内には銭塚遺跡・城敷遺跡・反町遺跡が存在する。3遺跡とも都幾川の乱流によって形成された、右岸の埋没自然堤防上に立地する。3遺跡は、相互に関連をもちながら営まれた遺跡群である。

銭塚・城敷・反町遺跡群では、遺構の検出面が灰褐色のシルトもしくは砂質である。また、埋土も同様の土質であり、遺構確認は困難を極めた。

3遺跡の基本土層（第5図）は、I層：現代の耕作土、II・III層：中世～近世の水田土壌層、IV層：古代の遺物包含層、V層：古墳時代の地山、VI層：弥生～古墳時代の漸移層、VII層：弥生時代の地山、VIII層：粘土層という構成である。地点によって堆積環境が異なることから、色調・含有物・土質も違っている。概ね、城敷・銭塚遺跡がシルト質で、反町遺跡は砂質である。

古墳時代の遺構検出面の標高は、城敷遺跡西側付近が19.2m前後、銭塚遺跡中央部付近が18.6m前後、反町遺跡中央部付近が18.0m前後である。都幾川下流方向の東方に向かって、徐々に下っていく地形である。

銭塚・城敷・反町遺跡群の南側に接する高坂台地とは、6～7mの比高差がある。また、都幾川を挟んだ対岸の松山台地縁辺の段丘面とは3～4m、松山台地上とは10m近い比高差が存在する。

(2) 遺構の概要

銭塚・城敷・反町遺跡群から検出された遺構の概要は、以下のとおりである。

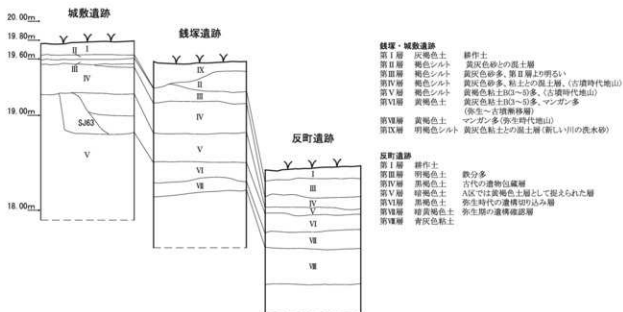
銭塚遺跡（第1次調査）

竪穴住居跡1軒（平安）

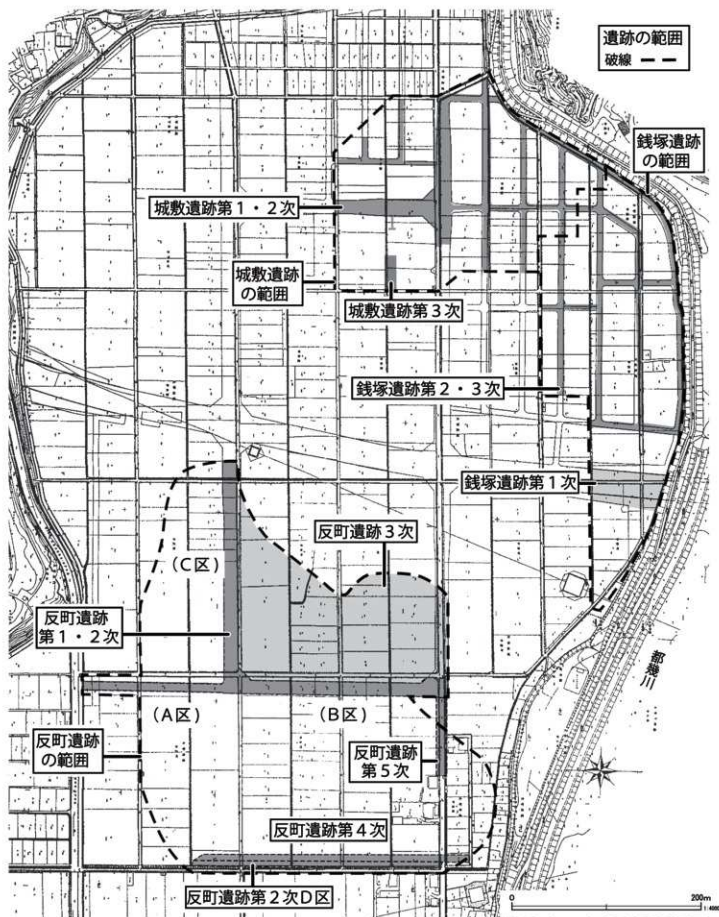
溝跡10条（平安・中世）

土壇19基（中世他）

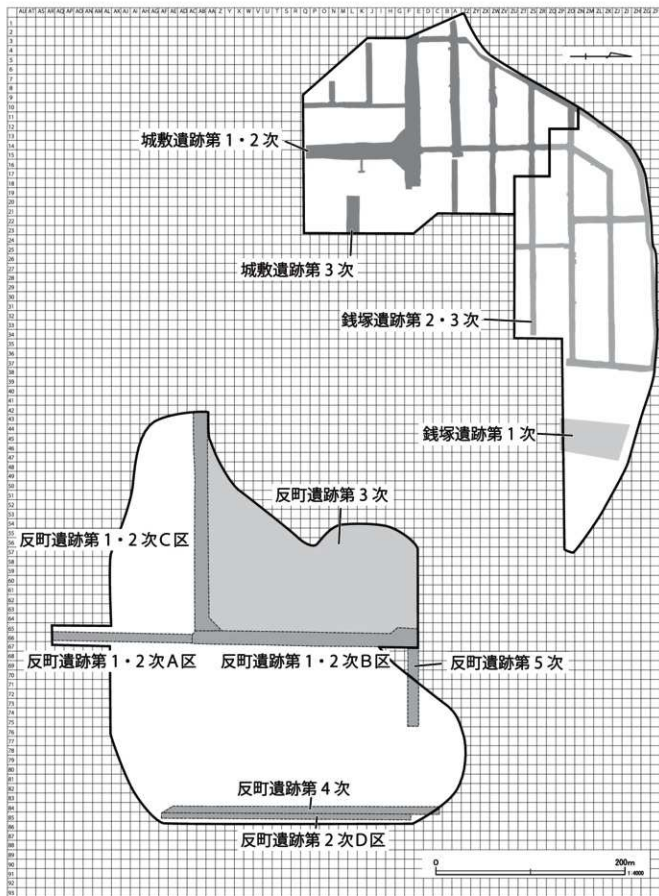
ピット多数



第5図 城敷・銭塚・反町遺跡群の基本層序



第6図 銭塚・城敷・反町遺跡の調査区位置図



第7図 銭塚・城敷・反町遺跡のグリッド網図

銭塚遺跡（第2次・第3次調査）

竪穴住居跡62軒（古墳・奈良・平安）
掘立柱建物跡19棟（古墳・奈良・平安）
ビット列1条
土壇35基
土器棺墓1基
井戸跡7基
溝跡38条
畠跡1箇所
堤防状遺構1箇所
ビット多数

城敷遺跡（第1次・第2次調査）（本書報告）

竪穴住居跡108軒（本書77軒報告）
掘立柱建物跡14棟（本書11棟報告）
土壇40基（本書31基報告）
大溝跡1条7地点（本書4地点報告）
溝跡30条（本書11条報告）
ビット多数

城敷遺跡（第3次調査）（本書報告）

竪穴住居跡7軒
掘立柱建物跡2棟
土壇1基
溝跡1条
ビット5基

反町遺跡（第1次・第2次調査）

竪穴住居跡117軒
方形周溝墓7基
古墳12基
土壇61基
土器棺墓2基
大溝跡（河川跡）5条
溝跡68条

反町遺跡（第3次調査）

竪穴住居跡181軒（弥生・古墳・奈良・平安）
古墳16基
土壇10基（古墳）
溝跡10条（古墳・近世）

竊跡1基（古墳）

河川跡2条（古墳）

反町遺跡（第4次調査）

竪穴住居跡5軒
方形周溝墓3基
土壇8基
大溝跡1条
溝跡17条

反町遺跡（第5次調査）

竪穴住居跡41軒
古墳跡1基
土壇4基
溝跡6条

（3）銭塚・城敷・反町遺跡群の動態

銭塚・城敷遺跡と反町遺跡から成る遺跡群の成立期は、弥生時代中期後半である。遺跡群東部に位置する反町遺跡の南城から竪穴住居跡と溝跡が検出され、安定的な集落が形成される。しかし、弥生時代後期初頭には、方形周溝墓と土器棺墓から構成される墓域となる。一方、集落域はこの墓域の西側に移動し、集落の移動を具体的に示す事例に位置づけられる。この時期の銭塚遺跡では、土器棺墓が1基検出されている。反町遺跡と同様に、周辺に方形周溝墓の存在が予想される。当然のことながら、集落の存在も予想され、遺跡群の中に複数の集落が形成されていたことが想定できる。

弥生時代後期後半の集落は不明である。しかし、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭（五領期）になると、城敷遺跡・反町遺跡に集落が営まれている。特に、反町遺跡第1～3次調査区には200軒を超える住居跡が発見され、当地域でもかなり有力な在地勢力の基盤となっていた可能性が考えられる。この時期の墓域として、反町遺跡の南城と東端部から方形周溝墓が検出されており、集落域の周囲に墓域を形成したことが判明している。また、銭塚遺跡では堤防状遺構などが発見されてい

ることから、同時期の集落を予想させる。

反町遺跡・城敷遺跡の古墳時代前期集落は、古墳時代中期になると縮小に向かう。反町遺跡第3次調査では、洪水層と考えられる堆積層が河川跡から確認されており、集落の動向に自然災害が大きく影響していたことが考えられる。今後の発掘調査においては、当時の自然環境の把握も重要な調査視点となる。

古墳時代中期後半から後期初頭（和泉期終末から鬼高期初頭）頃になると、集落構成が大きく変わる。反町遺跡は墓域に転化し、前方後円墳を中核とした初期群集墳の造営が開始される。集落は、城敷遺跡を中心に再形成され、その後銭塚遺跡へと拡散していく。遺跡群の中では、城敷・銭塚遺跡＝集落、反町遺跡＝墓域という対応関係が成立している。また、古墳群の造営については、遺跡群の南西側に位置する高坂台地上の古墳群の動向も考慮する必要がある。

城敷遺跡の集落は、古墳時代後期の6世紀後半になると、再び縮小・消滅へと向かう。これに対応して、城敷遺跡北側に接する銭塚遺跡では、古墳時代中期末から後期初頭頃に集落が成立し、7世紀を経て、8・9世紀に至るまで集落が維持され続けている。現象的には、城敷遺跡から銭塚遺跡へ集落域が移動したと捉えることもできる。

では、城敷遺跡から銭塚遺跡へ集落域が移動した要因は何か。銭塚・城敷・反町遺跡群において、その動向を左右していたのは「大溝跡（河川流路）」である。城敷遺跡・反町遺跡でも、集落のなかを蛇行しながら流れていた大溝跡が発見されている。

2. 城敷遺跡の概要

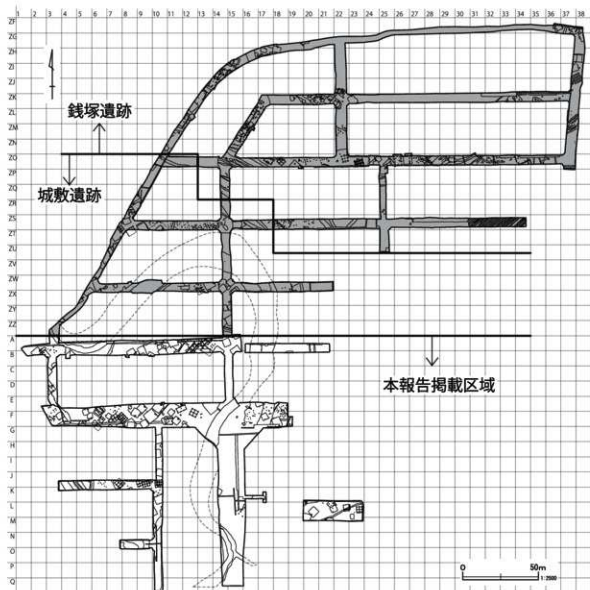
城敷遺跡は、遺跡群のなかで最も西側に位置し、背後には高坂台地が広がっている。遺跡の北側に接する銭塚遺跡とは明瞭な境がなく、本来ならば、同一の遺跡として捉えられるものである。両遺跡の境は、発見された遺構の位置関係等を勘案しな

大溝の中からは、堰の跡、護岸や川幅を広げたテラス状施設、そして河川の岸に昇降するための階段状施設、祭祀の場など、大溝の流路をコントロールしながら生活した痕跡が多数発見されている。にもかかわらず、大溝は流路の変更と水位の変化などが発生していたようで、このような自然環境の変化に集落の消長は連動していたのであろう。このような状況に対応して、集落域が城敷遺跡から銭塚遺跡へと移動していった背景を想定することも許されるのではないかと。

反町遺跡の奈良・平安時代集落域は、遺跡北端部にほぼ限定される。銭塚・城敷・反町遺跡群でも標高が高位な銭塚遺跡と反町遺跡北端部が集落域として機能する。銭塚遺跡では中世の井戸跡や区画溝が発見されており、中世後期頃までは居住域として機能していたようである。反町遺跡の下限年代は不明確であるが、北端部から板石塔婆が発見され、大溝跡からは中世の遺物も出土していることから、同様に中世まで降るものと予想される。

一方、遺跡群南半の城敷遺跡と反町遺跡の大部分は、非居住域＝おそらくは水田化していく。当該地区は「高坂条里」としても知られてきた。発掘調査では条里水田が検出されていないが、城敷遺跡の土層断面観察からは、古墳時代集落衰退後、水田土壌が形成されたことが推定できる。城敷遺跡と反町遺跡の大部分は、遅くとも律令期以降には生産域として土地利用され、現代まで居住域として復活することはなかったようである。

がら、『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』（第369集）において、便宜的にZOライン→ZO-13グリッド→ZR-13グリッド→ZR-18グリッド→ZU-18グリッド→ZU-38グリッドという階段状の線引きを設け、この分割線よりも北側を銭塚遺跡、南側を城敷遺

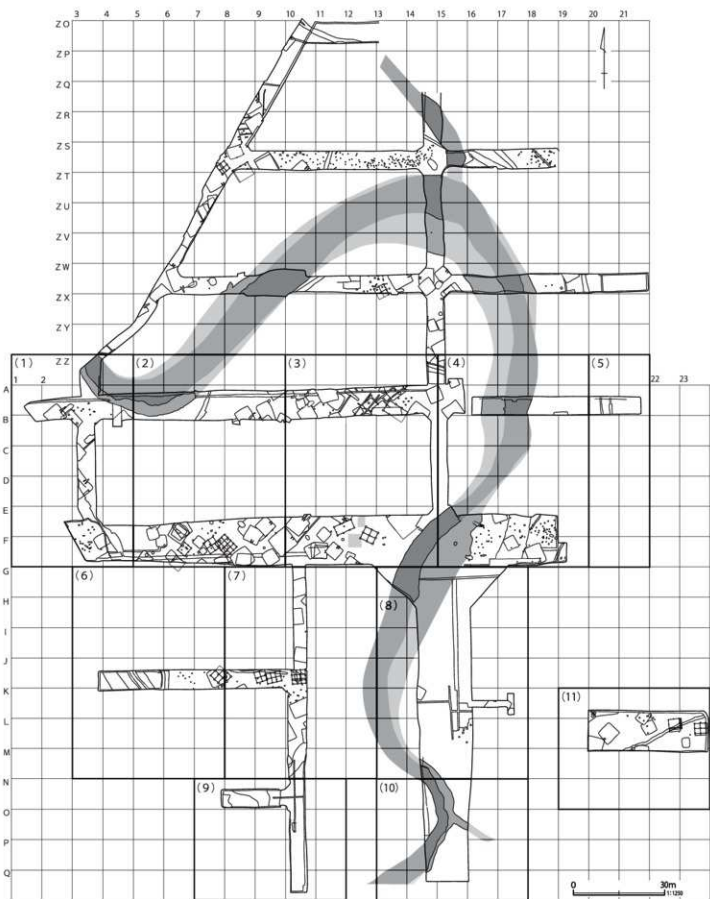


第8図 銭塚遺跡・城敷遺跡全体図 (1/2500)

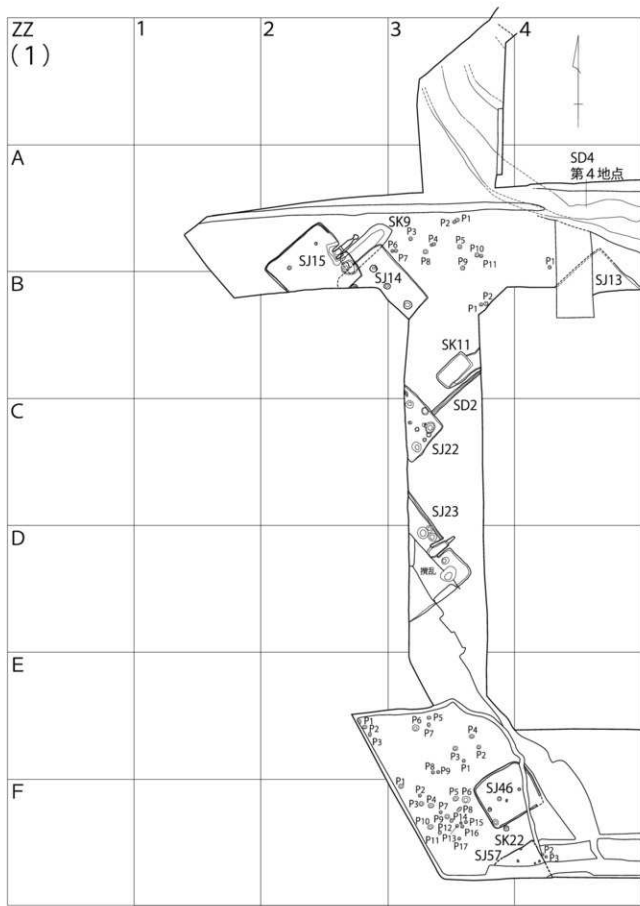
跡とした。発見された遺構としては、城敷遺跡第18号溝跡～第10号溝跡（既報告）が概ね境にあたる。しかし、遺跡・集落を明確に分割できるほどの規模をもっていない。そのため、無理に銭塚遺跡と城敷遺跡に分割するよりも、むしろ、同一の銭塚・城敷遺跡として捉えた方が遺跡の本質を理解しやすい。また、東方約500mには反町遺跡が所在するが、これも銭塚・城敷遺跡と直接的に関連していた遺跡といえる。銭塚・城敷遺跡と反町遺跡の3遺跡を一体の遺跡群と捉えることが、発掘調査の成果を有効に活用するための第一歩とな

る。

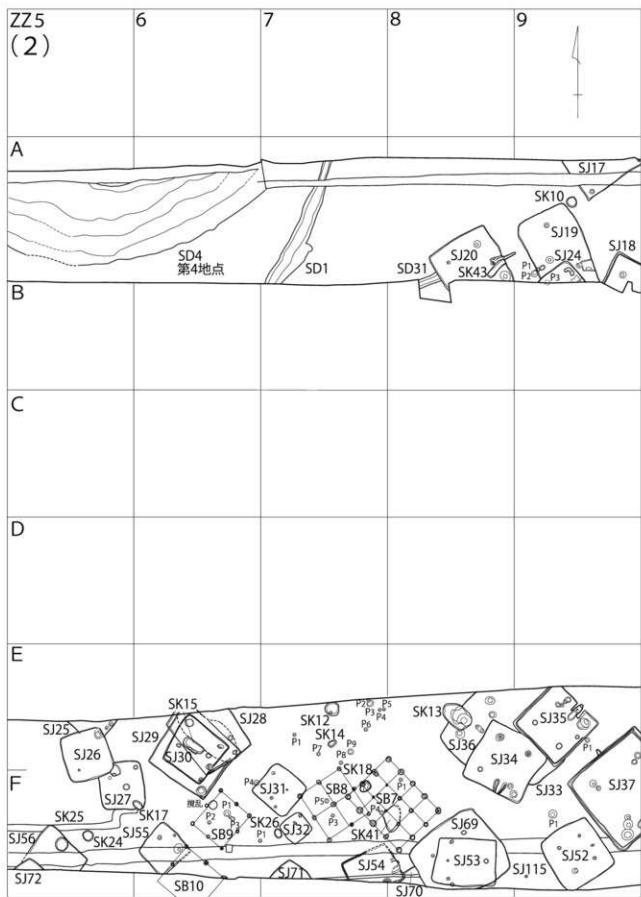
城敷遺跡は、3次に亘る発掘調査が実施された。検出された遺構の総数は、竪穴住居跡115軒・掘立柱建物跡は16棟・柱穴列1列・土壇42基・溝跡32条・大溝跡1条7地点・滑石製品集中地点2箇所・水田跡1箇所・性格不明遺構1箇所・ピット多数である。このうち、Aグリッドライン以北に位置する竪穴住居跡31軒・掘立柱建物跡3棟・土壇9基・溝跡21条・大溝跡1条（3地点）については、「銭塚Ⅱ/城敷Ⅰ」（第369集）で報告済みである。本書では、Aグリッドライン以南



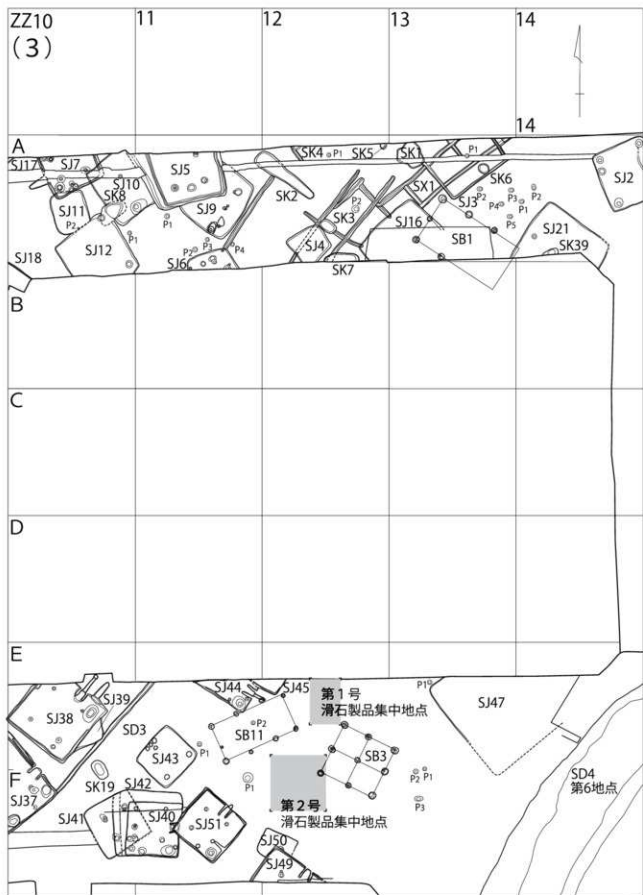
第9図 城散遺跡全体図 (1/1250)



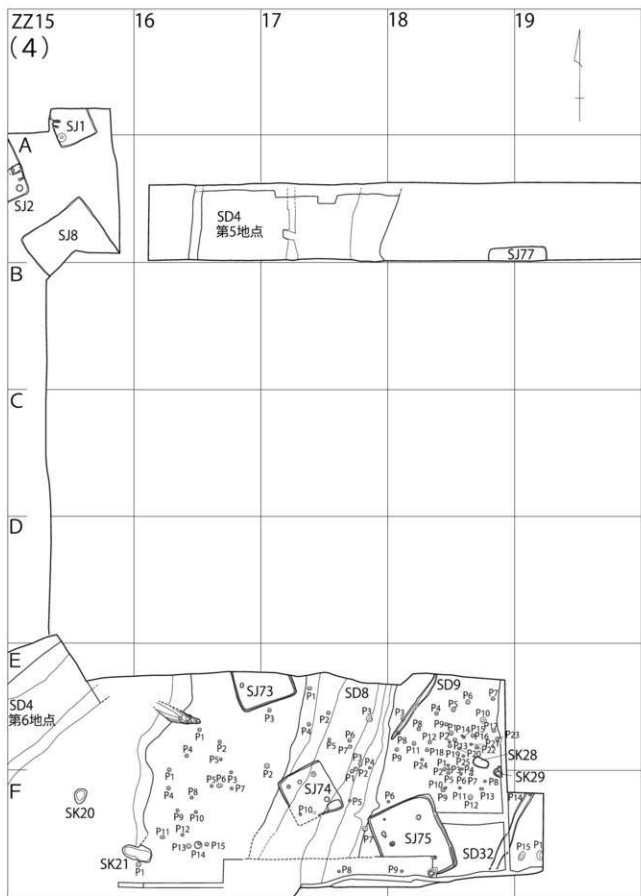
第10図 城敷遺跡全圖 (1)



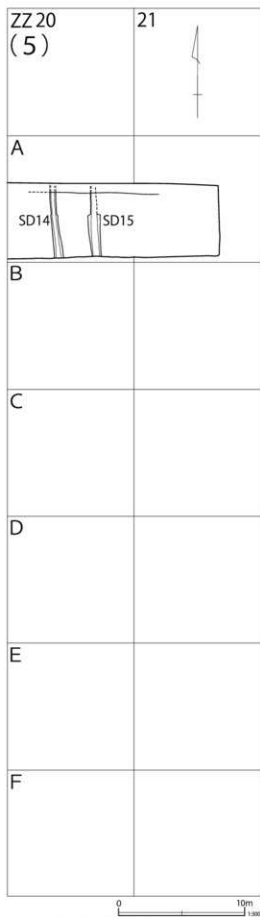
第11图 城墩遺跡全圖(2)



第12図 城敷遺跡全圖 (3)



第13図 城敷遺跡全圖(4)



第14図 城敷遺跡全測図(5)

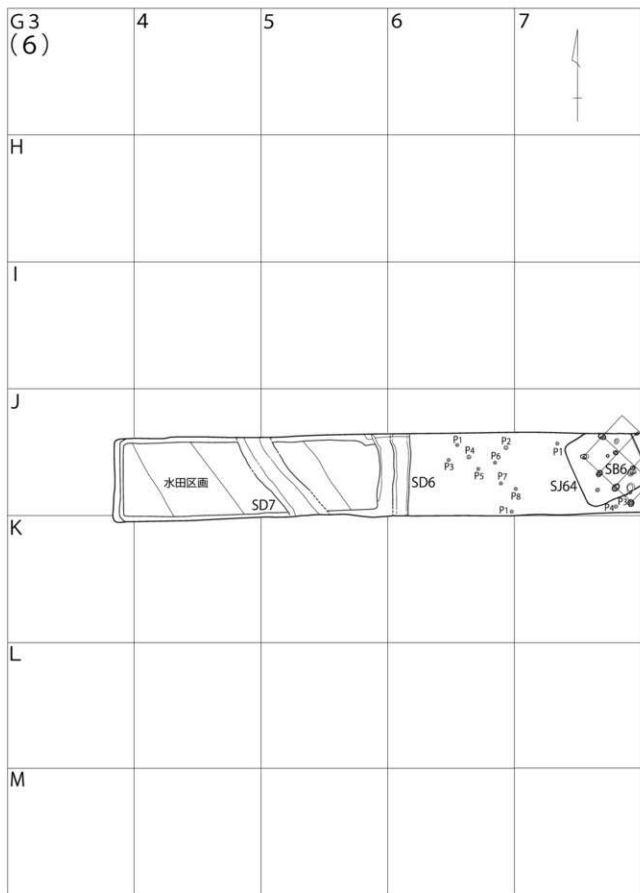
に位置する竪穴住居跡84軒(第1~75・77・108~115号住居跡)・掘立柱建物跡13棟(第1・3~12・16・17号掘立柱建物跡)・柱穴列1列(第1号柱穴列)・土城32基(第1~15・17~29・39~42号土城)・11条(第1~3・5~9・31~33号溝跡)・大溝跡1条4地点・滑石製品集中地点2箇所・水田跡1箇所・性格不明遺構1箇所等について報告する(第8~20図)。

城敷遺跡では、集落の経営期に第4号溝跡として調査を実施した大溝跡が、集落域のなかを蛇行して流れていた。そのため、竪穴住居跡を初めとする各遺構の分布域が三分割されている。この大溝跡は、本来は自然河道と思われる。当時の人々は、間近まで迫っていた河川に対し、昇降施設や堰・テラスなどを設けて、生活に取り入れている。このように、河川が集落と一体となって機能していたことは確実である。城敷遺跡はこの河川の周囲3箇所に営まれた集落跡であり、一つの集落が河川によって分断されてしまった訳ではない。

第4号溝跡の北側には、第87~94・97~106号住居跡の17軒と、第14・15号掘立柱建物跡等が存在する。また、同一遺跡の銭塚遺跡もこの地域に該当する。

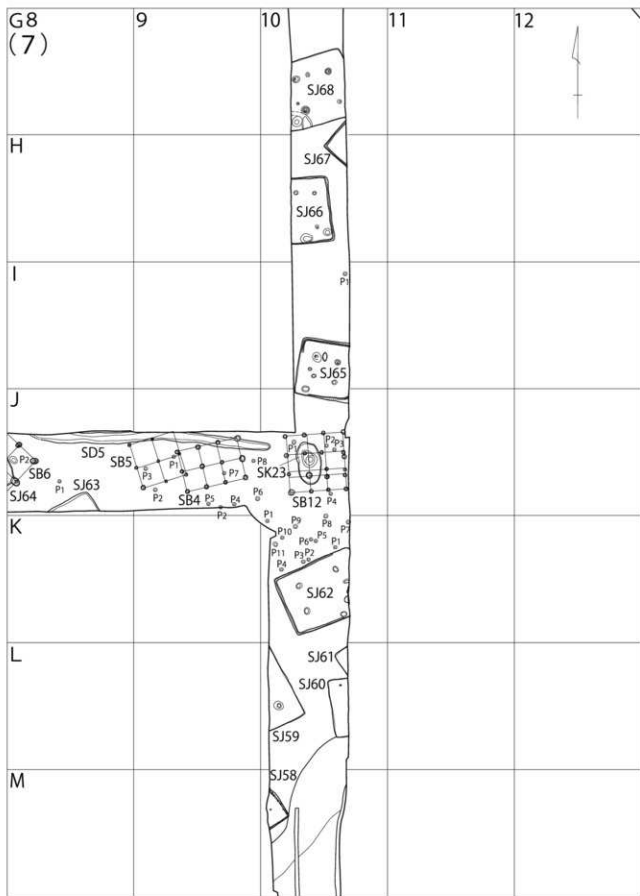
第4号溝跡の南西側には、82軒の竪穴住居跡群と12棟の掘立柱建物跡等がある。M-10グリッドに位置する第58号住居跡を集落の南限とし、10~20軒程度の竪穴住居跡が密集する傾向が窺われる。その間隙には、住居跡との重複を避けるように、掘立柱建物跡が建てられている。掘立柱建物跡も数棟ごとに4つの分布域に分かれている。このような住居跡と掘立柱建物跡の分布状況は、両遺構の同時性を示している。

第4号溝跡の東側にも遺構が分布する。竪穴住居跡15軒と、掘立柱建物跡2棟・柱穴列1列等である。他の分布域と比べると、分散とした遺構分布である。しかし、第4号溝跡第6地点に設置された昇降施設は東側を向いており、検出数は少な

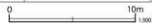


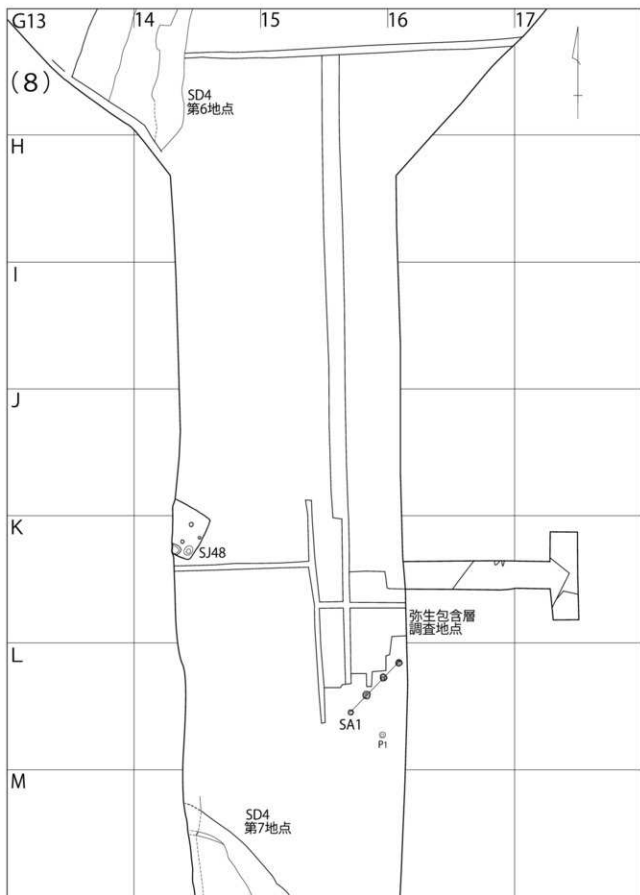
第15図 城敷遺跡全測図(6)



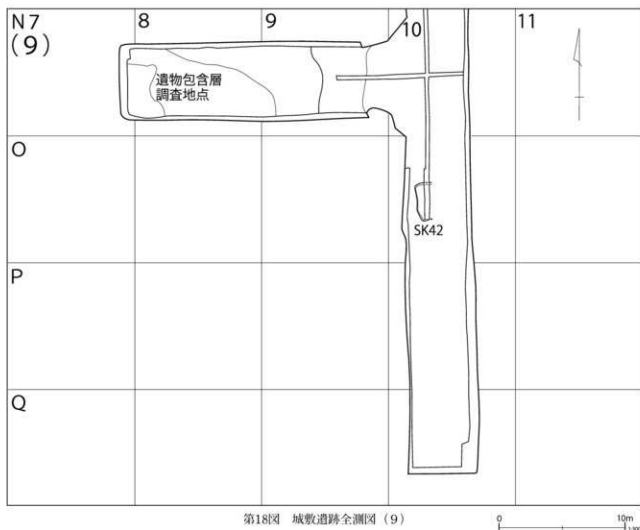


第16図 城敷遺跡全測図(7)





第17図 城敷遺跡全測図(8)



第18図 城敷遺跡全測図(9)

いが、土木事業を支えた相応の遺構群が存在していたものと推定される。

城敷遺跡のなかで最も古い遺構は、第11号住居跡である。遺物量は少ないが、弥生時代終末期の吉ヶ谷系の甕と碧玉製の管玉が出土している。

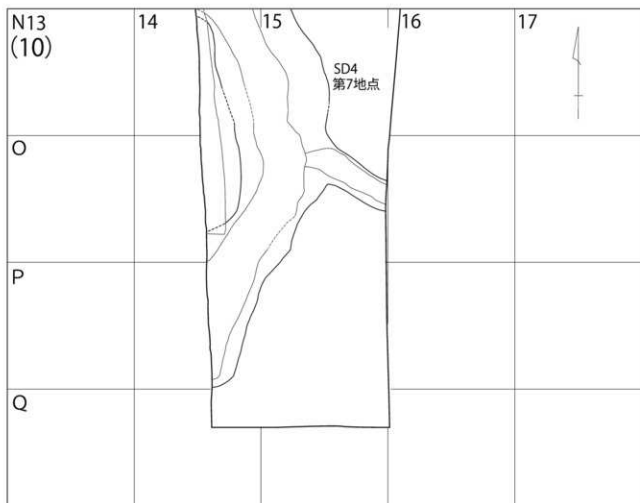
本格的な集落形成は、古墳時代前期（五領期）から開始される。27軒の竪穴住居跡が該当し、1軒を除き、ほかは第4号溝跡の南西分布域に位置している。第4号溝跡第5地点からは、古墳時代前期の土器群が数多く出土していることから、既にこの時期には流れていた可能性が高い。また、この集落の南西側の境界として、第7号溝跡が堀削されている。

この時期、東方の反町遺跡では一大集落が形成され、周囲に墓域も備えている。ところが、反町

遺跡集落は河川の氾濫に襲われ、縮小化する。これと軌を一にして、集落形成が始まったばかりの城敷遺跡も、途絶えてしまう。城敷遺跡では洪水に見舞われた痕跡はみられないが、直近の反町遺跡が被災した光景を想定すると、居住に適さない地に陥ってしまった状況が想像される。

古墳時代中期後半になると、城敷遺跡集落が再開される。当初は、古墳時代前期集落が形成された第4号溝跡の南西分布域に7軒の竪穴住居跡が再出現する。このうち、第12号住居跡からは滑石製白玉の製作途上の工成品・剥片が多数出土し、工房跡と推定される。

そして新たに、第4号溝跡の東側分布域にも2軒の竪穴住居跡が建てられている。これらの竪穴住居跡からやや遅れて、第4号溝跡の北側分布域



第19回 城敷遺跡全測図 (10)



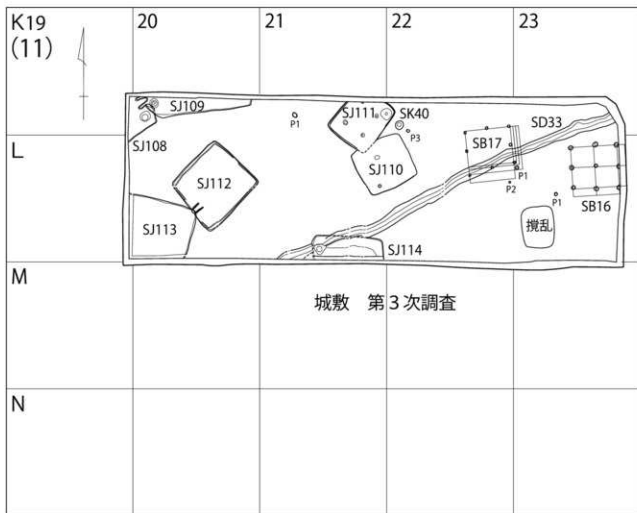
にも2軒の竪穴住居跡が構築される。このうち1軒には既にカマドが出現している。

中期後半新段階になると、竪穴住居跡の分布も広がる。北側分布域では、4軒の竪穴住居跡と1棟の掘立柱建物跡が検出されている。このうち第91号住居跡は、滑石製白玉製作工房跡と推定される。一方、南西分布域には5軒の竪穴住居跡が発見され、第37号住居跡が滑石製白玉製作工房跡である。厨房施設には、炉とカマドが共存する。

このほかに、中期後半段階の竪穴住居跡5軒も存在する。また、共存する土器群から、この時期に推定される2箇所の滑石製品集中地点がある。ここからは、剣形品・有孔円板・白玉等の製品とともに、滑石製の白玉製作途上の工程品・剥片が多量に出土している。

古墳時代後期初頭になると、集落形成はピークを迎える。古段階の竪穴住居跡の軒数は、北側分布域では7軒、南西分布域では19軒、東側分布域では4軒を数える。特に、南西分布域では、滑石製白玉製作工房跡と推定される第2・7・34・49号住居跡も含まれている。厨房施設は、完全にカマドに転換され、これに対応して甕の長胴化が普遍的になる。また、中期後半新段階から後期初頭古段階には、掘立柱建物跡が15棟も構築されている。

後期初頭新段階になると、竪穴住居跡は北側分布域に5軒、南西分布域に6軒を数える。前段階と比べると、南西分布域の下降傾向は激しいが、第15号住居跡では依然として滑石製白玉の製作が続けられている。



第20図 城敷遺跡全測図 (11)



これ以降は、第18号住居跡を最後に集落が再び途絶えてしまう。そして、集落の中心は北側の銭塚遺跡へと移っていく。

集落形成が終了した城敷遺跡には、土層断面観察から水田土壌の形成されたことが推定される。その一端が、J・K-3～5グリッドで検出された水田跡である。この水田跡と重複する第7号溝跡最上層から奈良～平安時代の土器群が出土しており、この時期までには水田に転化され、現代まで居住域として復活することはなかった。

このように、城敷遺跡は概観されるが、特筆すべき遺構・遺物の発見もあった。

ひとつは、大溝跡の第4号溝跡である。城敷遺跡の発掘調査では、7地点で検出されている。本来は自然河川であるが、当時の人々によって人工

的に管理されていた痕跡が随所に残されている。例えば、既報告の第2地点では、大溝跡に昇降するための階段状遺構や、流れに直交する横木列（堰状施設）、その下流に流れに平行する木列（護岸施設）が築かれていた。同様の施設は、本報告の第6地点でも確認されている。また、川幅の拡張と昇降の負担軽減を目的としたと推定されるテラス部や、川の流れに沿って長尺の木材を並べた護岸設備が各地点で確認されている。これらの諸施設によって流路・水量・水位をコントロールしながら、河川を生活に取り入れるとともに、居住域を水害から守っていたものと推測される。

大溝跡から多量に出土した土器群の大半は、古墳時代中期後半から後期初頭のものである。古墳時代前期に自然災害によって居住不適となった地

に再び集落を営むにあたって、河川を管理する術をもって臨んだものと想定される。ところが、本流流路の変更によるものか、この大溝跡は埋没を始める。第1地点最上層から出土した須恵器長頸瓶・蓋や土師器北武藏型暗文環などから、7世紀後半～8世紀初頭頃にはほぼ埋没している。このような過程の中で河川の水量は減少し、やがて集落の人々の生活を賄うことができなくなり、北側の銭塚遺跡へと集落が移動していったことが想像される。

大溝跡からは多量の本木が出土し、相当数の加工材や杭などが含まれている。これらの多くは、堰状施設や護岸施設等の構築部材として再利用されたものが多い。そのため、農具や容器などの生活に直結する道具類よりも、長尺・大型の建築部材が多い。また、陶邑産や東海産の古墳時代の初期須恵器が多く発見されていることは注目される。第3地点からは、樽形甕（TK83＝TK73併行段階）が故意に破碎して撒いたような状態で出土している。本報告では、第4地点から、陶邑産の5世紀中葉から後半代（～TK23・TK47）の坏H蓋・坏H身・無蓋高坏・大甕と、東海産の無蓋高坏（TK23併行）、在地産と推定される高坏（TK47併行）が検出している。第6地点では陶邑産の坏H蓋・坏H身、第7地点では東海産の甕（5世紀後半代）がある。

次に注目されるのは、古墳時代の掘立柱建物跡である。竪穴住居跡の間隙に、合計16棟が確認されている。また、竪穴住居跡が希薄なJ-7～10グリッドには4棟の掘立柱建物跡が位置するが、周囲には組み合わせが把握できなかった多数のピ

ットが分布しており、掘立柱建物跡が集中する地区となる可能性を秘めている。いずれにしても、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の両者が互いに意識された分布状況は、両遺構の同時性を示している。これらの掘立柱建物跡には、倉庫としての機能が想定される。そして多数の倉庫の存在は、多量の動産を蓄積する富裕なムラを想像させる。

第4号溝跡第6地点西岸の第3・11号掘立柱建物跡の付近には、2箇所の滑石製品集中地点がある。共存する土器群から、古墳時代中期後半に推定される。ここからは、製品以外にも滑石製の白玉製作上の工程品・剥片が多量に出土している。また、集落内では各段階ごとに数軒の滑石製品の工房跡が発見されている。よって、古墳時代中期後半から後期初頭の城敷遺跡の集落内では、常に滑石製の祭祀具が作り続けられていたことになる。

これらの祭祀具に関連して、大溝跡からは建物の開口部材の扉板や楣・蹴放し等が発見されており、これらを必要とする特殊な建造物の存在を示している。そのひとつとして、祭祀具を収納していた倉庫も候補となる。また、大溝跡から、当時は大変な貴重品だった陶邑産・東海産の須恵器が多く発見され、さらに第5号地点の岸辺には袋状鉄斧と壺2点が並べて置かれていた。このような状況から、滑石製品や須恵器を祭祀具とした河川を対象とした儀式が執り行われていたことは、想像に難くない。つまり、古墳時代中期後半の集落の再開には、「河川を管理する術」と「祈り」を携えながら経営にあっていた様子が窺われるのである。

IV 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

城敷遺跡第1次・第2次・第3次調査では、合計115軒の竪穴住居跡が発見されている。このなかで、調査区北半部のZO～ZZグリッドに位置する31軒の竪穴住居跡（第76・78～107号住居跡）については、「銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ」（第369集）で報告済みである。よって本報告では、調査区南半部のA～Qグリッドに所在する84軒（第1～75・77・108～115住居跡）について報告する。

第1号住居跡（第21図）

ZZ・A-15グリッドに位置し、北東隅が調査区域外にある。住居跡中央付近には床面直上から覆土最上層に至るまで復元率の高い土器が集中し、住居跡の桁梁材や垂木材・屋根材等と思われる多量の炭化した建築部材が出土した状況から、焼失住居と推定される。

平面形態は、東西方向に長軸をもつ長方形である。長軸長3.30m、短軸長2.30～2.42mを測り、長軸方位N-114°-Wを指す。確認面からの深さは0.23mほどである。

カマドは、北東隅に付設されたコーナーカマドである。住居長軸とは異なるN-84°-Wの方向に主軸をもつ。燃焼部と両脇の袖部が検出され、煙道部は確認されていない。燃焼部は住居床面よりも若干掘り窪め、手前半部には再び灰黄褐色土（f・g層）を貼りつけて底上げし、奥半部は掘り窪められたまま用いられる。底面は奥壁付近であり、奥壁自体は大きくオーバーハングする。火床面には炭化物が広がり、支脚には倒立させた高坏（10）が転用されている。支脚の周囲には炭化物が厚く堆積し（e層）、上層には天井内壁の残骸の焼土塊（d層）がみられる。また上層に堆積する灰黄褐色土（a・b層）は、カマドの天井部が崩落した層と想定される。内法規模は主軸長0.66

m×幅0.30mである。袖部は地山が掘り残され、上半部が住居跡の内方に張り出していると把握されている。しかし、燃焼部の奥壁は住居コーナー頂部と合致すること、カマド横断面c層がカマド天井部土層と酷似したカマド構築土層と判断されることから、長方形の住居跡掘り方隅に袖部土台から造り付けられたカマドと推定される。

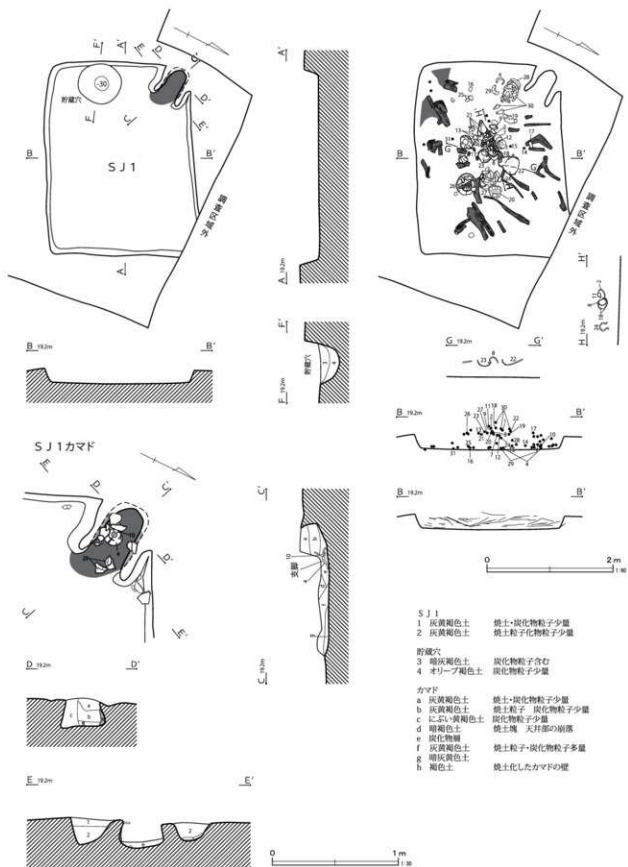
貯蔵穴は、カマド南側の南西コーナー付近に壁際に付設されている。長軸0.67m×短軸0.65m×床面からの深さ0.32mの円形で、床面の狭い半球状の掘り方をもつ。南側には炭化材と炭化物の広がりが見られるが、貯蔵穴との直接的な関係は明確ではない。

主柱穴・壁溝は検出されていない。

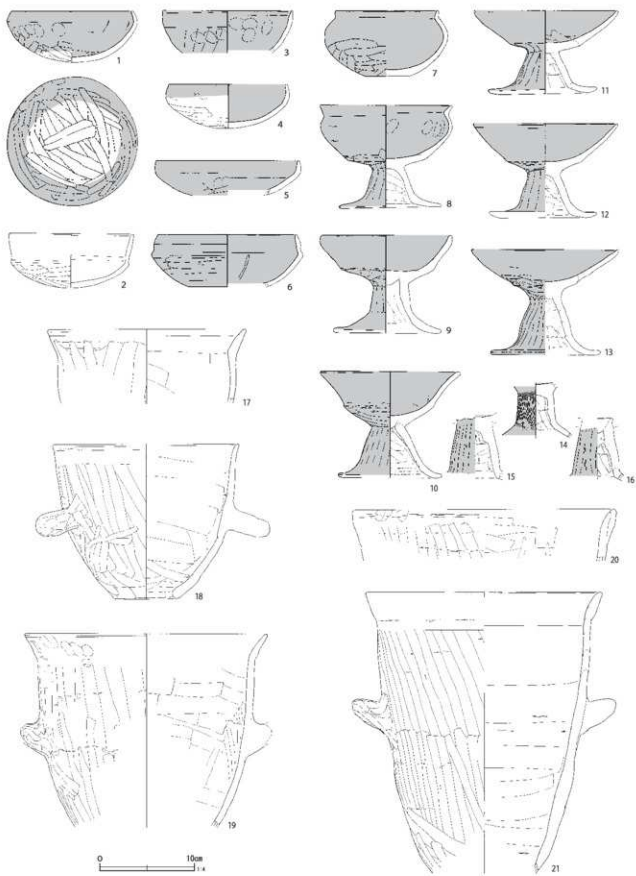
遺物は、住居跡の中央部とカマドから集中的に出土している。垂直方向では、中央部から出土した一群は焼失炭化材と入り乱れたような状況で、壁際では床面直上から出土している。

坏類には内湾口縁・坏身模倣・口縁部が外反する鉢タイプのものがあり、赤彩される。これに北武蔵型坏蓋模倣が加わる。高坏は有稜坏屈折脚で、1点碗が載るタイプが含まれる。鉢は半球状のものである。甌は大・中・小の3種が揃い、いずれにも把手が付く。甕には長胴化傾向が現れているが、未だ膨らみが強く、なかには球胴形のものも含まれる。また小型甕もある。壺の口縁には退化した段が残る。器形や器種組成等の特徴から、銭塚・城敷IV期古段階に相当する。

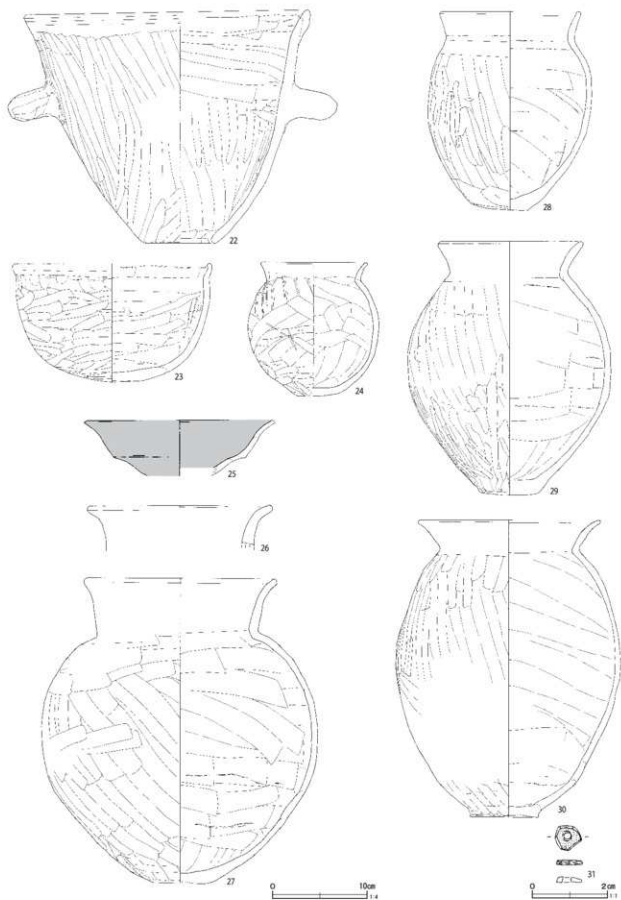
31は滑石製白玉の未成品で、穿孔後の研磨途上品である。遺物集中区南辺の床面直上から出土している。大きさは、長さ0.64cm×幅0.59cm×厚さ0.15cm・重さ0.1gである（No40／図版106-5）。未成品であるが、住居跡内から同様の遺物がなく、



第21図 第1号住居跡



第22图 第1号住居跡出土物(1)



第23图 第1号住居跡出土遺物(2)

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表(第22・23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	環	12.8	5.4		ABCEHIJ	95	普通	にぶ・橙	内埴口縁丸底 赤彩 二次的被熱	No16	45-1
2	土師器	環	12.9	5.8		ACHIJ	95	良好	橙	北武蔵型坏蓋模倣	No8	45-2
3	土師器	環	(13.6)	4.5		ACEHIK	20	普通	にぶ・橙	内埴口縁 赤彩		
4	土師器	環	12.4	4.7		ABC IJK	70	普通	にぶ・黄緑	内埴口縁丸底 赤彩 (外面範囲不明瞭)	No30・カマドNo9	45-3
5	土師器	環	(15.0)	3.7		ACH IJK	10	普通	にぶ・橙	内埴口縁 赤彩		
6	土師器	環	(16.4)	5.6		ACEHIK	10	普通	赤	坏身模倣 赤彩 暗文状の刺線痕		
7	土師器	椀	10.7	6.0	4.8	CEHI	95	普通	にぶ・橙	外反口縁斜タイプ 平底 赤彩	No15	45-4
8	土師器	高環	13.8	10.9	10.8	ACEH	95	良好	橙	椀+屈折脚 赤彩 支脚転用痕	No5-7	45-5
9	土師器	高環	13.6	10.3	10.8	EHIJK	80	普通	橙	有稜坏屈折脚 赤彩 二次的被熱	No14	45-6
10	土師器	高環	14.5	11.3	9.6 最大径(11.4) 最大径(0.9)	ABCEHIK	90	普通	にぶ・橙	転用支脚 有稜坏屈折脚 赤彩 カマドNo9		46-1
11	土師器	高環	15.2	8.8	11.5	ABCDEHIJ	85	普通	赤	有稜坏屈折脚 赤彩 二次的被熱	No7	46-2
12	土師器	高環	15.0	10.0	11.4	ACEHJ	100	良好	にぶ・橙	有稜坏屈折脚 赤彩	No17	46-3
13	土師器	高環	15.4	11.2	(11.6)	CEHIK	80	普通	にぶ・橙	有稜坏屈折脚 赤彩	No10	46-4
14	土師器	高環		5.9		CEI	70	普通	にぶ・黄	屈折脚 外面赤彩 二次的被熱	No32	
15	土師器	高環		6.9		ACH IJK	80	普通	橙	屈折脚 外面赤彩	No33	
16	土師器	高環		6.7		ACE I K	80	普通	にぶ・橙	屈折脚 外面赤彩 外面二次的被熱	No24	
17	土師器	甌	(20.6)	7.9		CEHI	25	普通	にぶ・黄緑	No20		
18	土師器	甌	19.4	16.5	6.3	CDEHIJ	90	普通	橙	把手が相対位置からずれる	No6	46-5
19	土師器	甌	(25.4)	20.4		CEHIK	40	普通	にぶ・赤黒	把手付	No18	
20	土師器	甌	(27.2)	5.6		CDHIJK	20	普通	にぶ・黄緑	外面二次的被熱	No2	
21	土師器	甌	(24.4)	30.0		ABCEHIJK	35	普通	にぶ・橙	把手付	No11	46-6
22	土師器	甌	(30.2)	24.0	7.6	CEHIJ	40	普通	橙	把手付 口縁精肉	No4	47-1
23	土師器	鉢	(20.4)	12.5		ABCEHIJK	40	普通	にぶ・黄緑	口縁端部内埴 二次的被熱 煤付着	No9	47-2
24	土師器	小型甌	11.0	14.2	4.3	CEH	100	普通	にぶ・橙	二次的被熱 内面下半に付着物	No3	47-3
25	土師器	甌	(19.4)	6.1		ACEHIK	10	普通	灰黄緑	有段口縁 赤彩	No23	
26	土師器	甌	(19.0)	4.8		ACEHIK	30	普通	にぶ・橙	煮沸痕顕著	No1	
27	土師器	甌	(19.6)	32.3	(5.9)	ACEHIK	90	普通	にぶ・橙	球形形 煮沸痕	No2	47-4
28	土師器	甌	14.6	20.9	5.8	ABDH I K	90	普通	橙	長期化出現 煮沸痕 煤付着	No31	47-5
29	土師器	甌	15.0	26.7	6.0	ACEHIK	95	普通	にぶ・黄緑	長期化出現 煮沸痕 煤付着	No30・カマドNo6-7	47-6
30	土師器	甌	(18.8)	31.6	(7.1)	CDEHI	70	普通	黒褐	長期化出現 煮沸痕	No21-22-29	48-1

住居内に関連する設備も確認されていないため、住居内での製作を推定する根拠はない。

第2号住居跡(第24図)

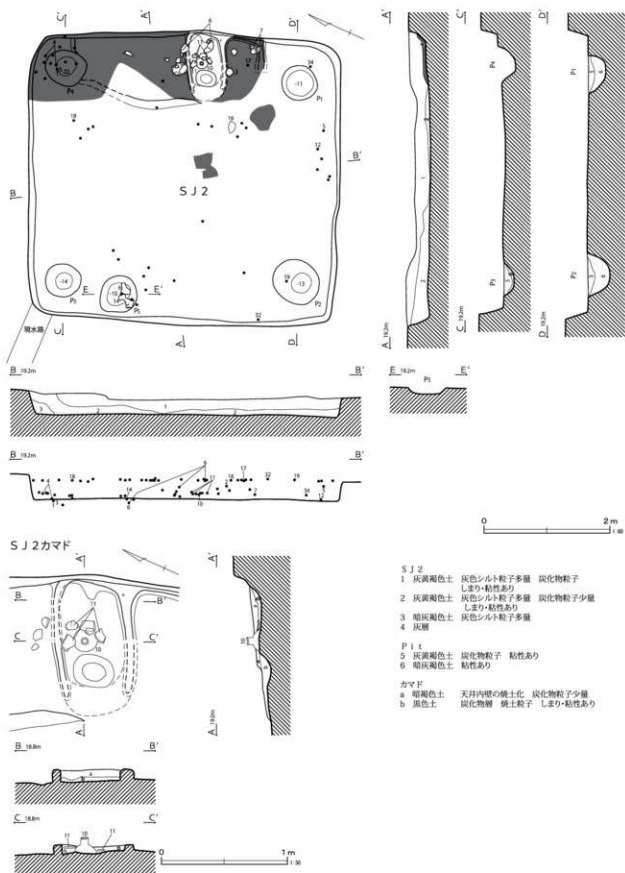
A-14・15グリッドに位置する。重複する遺構はないが、東側に位置する第1号住居跡とは方向がほぼ一致する。

平面形態は方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長4.67m、南北幅4.90mを測り、主軸方位はN-66°-Eを指す。確認面からの深さは0.34mほどで、覆土は北西の壁際から埋没した自然堆積である。

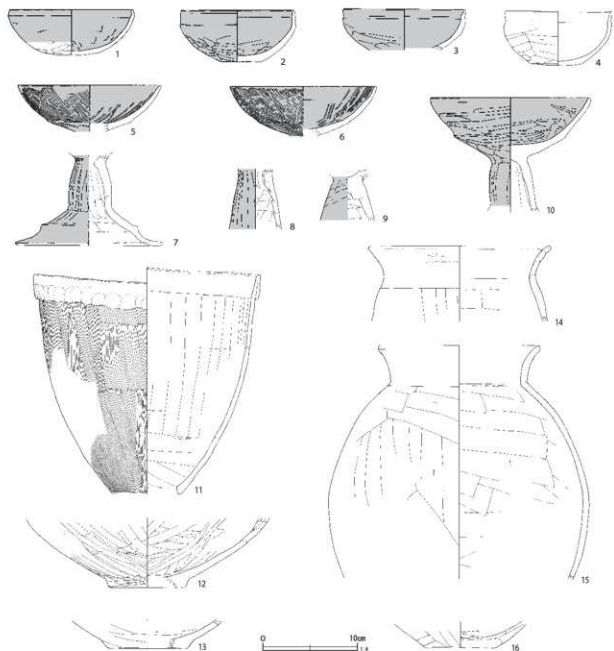
主柱穴4本の住居で、Pit1~Pit4が相当する。すべての主柱穴が住居跡の四隅に配置されている。主柱穴の規模は、径0.54~0.71m、床面からの深さ0.11~0.14mである。柱間距離は、主軸方向

Pit4-Pit3=3.42m・Pit1-Pit2=3.52m、南北方向Pit4-Pit1=3.75m、Pit3-Pit2=3.72mを測る。土層断面では柱痕がみられず、床面下らの深さも浅い。

カマドは、燃焼部が検出され、煙道部は不明である。住居壁の内側に形成された燃焼部の奥壁は住居壁と一致する。袖は残存状態が悪く、地山が掘り残されたものか、造り付けられたものかは不明である。燃焼部の中央には、倒立させた高環(10)を支脚として転用している。支脚の前には浅い掘り込みがみられ、炭化物層が形成されている。規模は、推定長2.15m、現存幅1.28~1.35m、内法幅0.80~0.88mを測る。カマド南側から、左側の北東隅にかけて、幅1mほどの帯状に炭化物が堆積している。



第24図 第2号住居跡



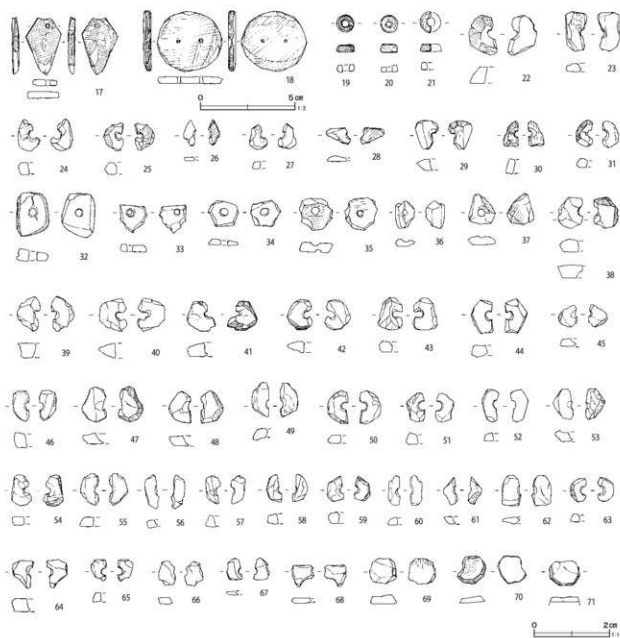
第25図 第2号住居跡出土遺物(1)

貯蔵穴・壁溝は検出されていない。主柱穴 Pit3 南側の壁際から、Pit5が発見されている。径0.62 m・床面からの深さ0.38mの規模をもつ。位置関係から、出入口部に関連した機能が想定されるが、貯蔵穴であった可能性も否めない。

遺物は、カマドと周辺部、北東隅の Pit4・西壁際の Pit5付近から出土している。垂直方向には、床面直上付近の一群と、覆土上層の一群（石製品を含む）に他別される。また、カマド付近を中心

に滑石製の白玉と製作途上の工程品・剥片が出土している。

坏類には赤彩された内端口縁・内斜口縁・坏身模倣と外反口縁鉢タイプ、高坏は有稜坏の有段坏・屈折脚である。甕には長胴化が出現したものと胴部に張りが残るものがある。甕は折り返し口縁で、須恵器模倣は出現していない。模倣坏の未定量・長脚高坏と胴張り甕の残存等の器形・器種組成から、錢塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。



第26図 第2号住居跡出土遺物(2)

17は、滑石製剣形品である。カマドの右側の炭化物層から出土している。上端および先端を欠損し、現存長2.960×短1.730×厚さ0.320cm・重さ2.8gである。側面が直線的な菱形を呈し、鏝の表現もなく平面的である。上半部の中心よりも外側によった位置に小円孔1が穿孔されている。

18は、滑石製有孔円板である。北東部の覆土上層から出土している。中央付近に小円孔2が穿孔され、横方向に僅かに長い楕円形となる。長3.420

×短3.120×厚さ0.380cm、重さ8.0gである。

19～21は白玉の製品である。19・32は南西隅のPit2及び周辺から出土している。22～31は穿孔後の研磨段階での破損品で、上下両面もしくは片面に研磨痕がみられる。32～34は穿孔工程品、35～37は未貫通の穿孔工程品である。38～68は穿孔時の破損品である。38～51の側面部にはケズリ・研磨痕がみられ、52～68は側面部に研磨痕がみられない。これは形制段階の整形方法の差によ

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第25・26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(13.0)	4.9		BEHJK	70	普通	に染・橙	内端口縁丸底 内面・外面赤彩 No44		48-2
2	土師器	坏	(11.9)	5.4	4.3	EHIJ	50	普通	外一赤 内一黒	坏身模倣 平底 赤彩 No32-36		48-3
3	土師器	坏	(12.9)	4.3		ACEIJK	15	普通	明赤褐	赤彩 No44		
4	土師器	坏	11.3	5.7	5.3	AHIK	95	普通	に染・橙	外反口縁鉢タイプ 平底 二次的被熱 No40・44・45		48-4
5	土師器	高坏	(15.2)	4.9		AHEIJK	30	普通	に染・黄橙	有残坏 赤彩 No31		
6	土師器	高坏	15.5	5.3		CEHIJ	85	普通	に染・橙	赤彩 No37-52・53		48-5
7	土師器	高坏		9.5	最大径 15.7	ABEHIK	80	普通	橙	有段脚 外面赤彩 No34		48-6
8	土師器	高坏		6.4		ACEHIK	30	普通	に染・黄橙	外面赤彩?		
9	土師器	高坏		5.4		EHI	60	普通	に染・黄橙	外面赤彩		
10	土師器	高坏		12.0		ACEHIJ	95	普通	橙	転用支脚 赤彩 カマドNo9		48-7
11	土師器	瓶	(23.8)	24.2	(6.8)	ACHIJK	25	普通	に染・黄橙	折り返し口縁 二次的被熱 No35・カマドNo4・5・8		48-8
12	土師器	壺		7.3	(8.0)	ADEHIJ	20	普通	に染・橙	成形時乾燥面での欠損 No30		
13	土師器	壺		3.1	(8.4)	ACEHIJK	25	普通	に染・橙	内面に黒色の付着物 カマド西側		
14	土師器	甕	(19.0)	8.0		CDEHI	30	普通	橙	長胴化 煮沸痕 煤付着 No54		
15	土師器	甕	(17.0)	24.9		EHI	30	普通	に染・橙	胴部に丸み 二次的被熱		
16	土師器	壺		2.8	7.4	ABEHIK	70	普通	に染・黄橙	二次被熱 底部へラケズリ No21		
番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	状態		出土位置 / 備考		図版	
17	滑石	劍形	2.960	1.730	0.320	2.8			No56	穿孔あり	49-1	
18	滑石	有孔円板	3.420	3.120	0.380	8.0			No14	2ヶ所穿孔あり	49-2	
19	滑石	白玉	0.480	0.470	0.170	0.0	完成品		No1		106-5	
20	滑石	白玉	0.485	0.482	0.209	0.1	完成品				106-5	
21	滑石	白玉	0.538	0.277	0.188	0.0	完成品		カマド	半分欠損	106-5	
22	滑石	白玉	0.971	0.639	0.435	0.4	穿孔後破損品				106-5	
23	滑石	白玉	1.042	0.423	0.197	0.2	穿孔後破損品				106-5	
24	滑石	白玉	0.768	0.451	0.360	0.2	穿孔後破損品				106-5	
25	滑石	白玉	0.661	0.476	0.269	0.1	穿孔後破損品				106-5	
26	滑石	白玉	0.712	0.310	0.135	0.0	穿孔後破損品				106-5	
27	滑石	白玉	0.621	0.253	0.161	0.0	穿孔後破損品		カマド		106-5	
28	滑石	白玉	0.665	0.275	0.155	0.0	穿孔後破損品				106-5	
29	滑石	白玉	0.736	0.591	0.283	0.1	穿孔後破損品				106-5	
30	滑石	白玉	0.672	0.412	0.396	0.1	穿孔後破損品				106-5	
31	滑石	白玉	0.678	0.428	0.218	0.0	穿孔後破損品		カマド		106-5	
32	滑石	白玉	1.200	0.810	0.340	0.6	穿孔工用品		No2		106-5	
33	滑石	白玉	0.776	0.730	0.179	0.1	穿孔工用品				106-5	
34	滑石	白玉	0.770	0.680	0.160	0.1	穿孔工用品		No36		106-5	
35	滑石	白玉	0.865	0.764	0.293	0.3	穿孔工用品			穿孔途中(両面穿孔)	106-5	
36	滑石	白玉	0.750	0.412	0.227	0.1	穿孔工用品			穿孔途中(片面穿孔)	106-5	
37	滑石	白玉	0.814	0.635	0.320	0.2	穿孔工用品				106-5	
38	滑石	白玉	0.856	0.598	0.357	0.3	穿孔時破損品		カマド	2ヶ所穿孔?	106-5	
39	滑石	白玉	0.904	0.610	0.384	0.2	穿孔時破損品		カマド		106-5	
40	滑石	白玉	0.842	0.489	0.424	0.3	穿孔時破損品				106-5	
41	滑石	白玉	0.810	0.645	0.424	0.0	穿孔時破損品		カマド		106-5	
42	滑石	白玉	0.795	0.607	0.269	0.2	穿孔時破損品		カマド		106-5	
43	滑石	白玉	0.783	0.631	0.275	0.2	穿孔時破損品		カマド		106-5	
44	滑石	白玉	0.907	0.583	0.289	0.2	穿孔時破損品				106-5	
45	滑石	白玉	0.551	0.480	0.211	0.1	穿孔時破損品				106-5	
46	滑石	白玉	0.777	0.342	0.396	0.2	穿孔時破損品				106-5	
47	滑石	白玉	0.905	0.613	0.392	0.3	穿孔時破損品		カマド		106-5	
48	滑石	白玉	0.805	0.581	0.254	0.2	穿孔時破損品				106-5	
49	滑石	白玉	0.892	0.465	0.319	0.2	穿孔時破損品				106-5	
50	滑石	白玉	0.828	0.386	0.262	0.2	穿孔時破損品				106-5	
51	滑石	白玉	0.785	0.300	0.289	0.1	穿孔時破損品				106-5	

番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	状態	出土位置/備考	図版
52	滑石	白玉	0.855	0.465	0.235	0.1	穿孔時破損品		106-5
53	滑石	白玉	0.849	0.466	0.277	0.1	穿孔時破損品	カマド	106-5
54	滑石	白玉	0.786	0.485	0.335	0.2	穿孔時破損品		106-5
55	滑石	白玉	0.804	0.473	0.216	0.1	穿孔時破損品		106-5
56	滑石	白玉	0.794	0.387	0.179	0.1	穿孔時破損品		106-5
57	滑石	白玉	0.708	0.368	0.252	0.1	穿孔時破損品		106-5
58	滑石	白玉	0.735	0.307	0.239	0.1	穿孔時破損品	カマド	106-5
59	滑石	白玉	0.626	0.408	0.230	0.1	穿孔時破損品	カマド	106-5
60	滑石	白玉	0.801	0.319	0.187	0.0	穿孔時破損品		106-5
61	滑石	白玉	0.688	0.285	0.218	0.0	穿孔時破損品	カマド	106-5
62	滑石	白玉	0.808	0.483	0.158	0.1	穿孔時破損品	カマド	106-5
63	滑石	白玉	0.608	0.390	0.210	0.1	穿孔時破損品	カマド	106-5
64	滑石	白玉	0.781	0.471	0.379	0.2	穿孔時破損品	カマド	106-5
65	滑石	白玉	0.608	0.386	0.231	0.1	穿孔時破損品	カマド	106-5
66	滑石	白玉	0.643	0.469	0.180	0.0	穿孔時破損品	カマド	106-5
67	滑石	白玉	0.570	0.395	0.104	0.0	穿孔時破損品		106-5
68	滑石	白玉	0.705	0.624	0.131	0.0	穿孔時破損品		106-5
69	滑石	白玉	0.681	0.665	0.246	0.2	切削工程品	カマド 未穿孔	106-5
70	滑石	白玉	0.781	0.666	0.185	0.1	切削工程品	カマド 未穿孔	106-5
71	滑石	白玉	0.808	0.661	0.135	0.1	切削工程品	カマド 未穿孔	106-5

第4表 第2号住居跡出土滑石剥片一覧表

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
13	形割剥片	1.791	0.972	0.312	0.7		50	形割剥片	0.677	0.343	0.044	0.0	
14	形割剥片	1.629	0.607	0.453	0.6		51	形割剥片	0.639	0.502	0.142	0.0	
15	形割剥片	1.311	0.674	0.333	0.3		52	形割剥片	0.765	0.316	0.101	0.0	
16	形割剥片	1.337	0.722	0.199	0.2		53	形割剥片	0.735	0.408	0.080	0.0	
17	形割剥片	1.224	0.606	0.360	0.2		54	形割剥片	0.514	0.449	0.092	0.0	
18	形割剥片	1.143	0.496	0.326	0.2		55	形割剥片	0.742	0.398	0.085	0.0	
19	形割剥片	0.790	0.729	0.237	0.2		56	形割剥片	0.387	0.294	0.119	0.0	
20	形割剥片	1.138	0.636	0.271	0.2		57	形割剥片	0.575	0.431	0.140	0.0	
21	形割剥片	0.975	0.571	0.197	0.2		58	形割剥片	0.474	0.304	0.008	0.0	
22	形割剥片	1.199	0.542	0.169	0.1		80	形割剥片	1.334	0.777	0.320	0.4	カマド
23	形割剥片	1.003	0.614	0.169	0.1		81	形割剥片	0.881	0.598	0.270	0.2	カマド
24	形割剥片	0.929	0.608	0.199	0.2		82	形割剥片	1.082	0.668	0.258	0.2	カマド
25	形割剥片	0.987	0.436	0.231	0.1		83	形割剥片	1.012	0.580	0.296	0.2	カマド
26	形割剥片	0.691	0.475	0.266	0.1		84	形割剥片	1.678	0.448	0.235	0.3	カマド
27	形割剥片	1.054	0.493	0.149	0.1		85	形割剥片	0.891	0.605	0.329	0.3	カマド
28	形割剥片	0.831	0.496	0.258	0.2		86	形割剥片	1.224	0.406	0.315	0.3	カマド
29	形割剥片	0.750	0.447	0.203	0.1		87	形割剥片	1.557	0.655	0.265	0.4	カマド
30	形割剥片	0.626	0.436	0.265	0.1		88	形割剥片	1.112	0.490	0.186	0.3	カマド
31	形割剥片	0.665	0.393	0.221	0.1		89	形割剥片	1.314	0.606	0.329	0.4	カマド
32	形割剥片	0.530	0.460	0.263	0.1		90	形割剥片	1.037	0.684	0.370	0.3	カマド
34	形割剥片	0.697	0.357	0.169	0.1		92	形割剥片	0.987	0.603	0.333	0.2	カマド
35	形割剥片	0.712	0.381	0.186	0.1		93	形割剥片	1.323	0.587	0.141	0.1	カマド
36	切削剥片	0.482	0.474	0.168	0.0		94	形割剥片	1.275	0.582	0.202	0.2	カマド
38	切削剥片	0.707	0.358	0.188	0.0		95	形割剥片	0.908	0.586	0.253	0.2	カマド
39	切削剥片	0.479	0.384	0.155	0.0		96	形割剥片	1.295	0.902	0.252	0.3	カマド
41	切削剥片	0.635	0.310	0.145	0.0		97	形割剥片	1.303	0.432	0.178	0.1	カマド
42	切削剥片	0.372	0.332	0.185	0.0		98	形割剥片	1.352	0.765	0.348	0.4	カマド
43	切削剥片	0.568	0.347	0.180	0.0		99	形割剥片	1.135	0.444	0.212	0.1	カマド
44	切削剥片	0.480	0.403	0.113	0.0		100	形割剥片	1.048	0.555	0.233	0.2	カマド
45	切削剥片	0.418	0.254	0.070	0.0		101	形割剥片	1.061	0.720	0.225	0.2	カマド
46	切削剥片	0.382	0.309	0.101	0.0		102	形割剥片	0.895	0.695	0.218	0.2	カマド
47	切削剥片	0.359	0.287	0.142	0.0		103	形割剥片	1.448	0.602	0.250	0.3	カマド
48	切削剥片	0.466	0.335	0.082	0.0		104	形割剥片	1.334	0.602	0.354	0.2	カマド
49	切削剥片	0.381	0.304	0.093	0.0		105	形割剥片	0.727	0.521	0.278	0.2	カマド

番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
106	形割剥片	0.949	0.817	0.348	0.4	カマド	165	切削剥片	0.748	0.433	0.112	0.0	カマド
107	形割剥片	1.622	0.756	0.355	0.5	カマド	166	切削剥片	0.546	0.417	0.132	0.0	カマド
108	形割剥片	1.240	0.630	0.292	0.2	カマド	167	切削剥片	0.633	0.569	0.102	0.0	カマド
109	形割剥片	1.078	0.612	0.256	0.2	カマド	168	切削剥片	0.474	0.461	0.135	0.0	カマド
110	形割剥片	1.155	0.767	0.261	0.3	カマド	169	切削剥片	0.723	0.253	0.129	0.0	カマド
111	形割剥片	0.875	0.419	0.174	0.1	カマド	170	切削剥片	0.704	0.277	0.149	0.0	カマド
112	形割剥片	0.875	0.469	0.296	0.2	カマド	171	切削剥片	0.550	0.419	0.084	0.0	カマド
113	形割剥片	0.747	0.608	0.470	0.2	カマド	172	切削剥片	0.566	0.373	0.084	0.0	カマド
114	形割剥片	0.777	0.480	0.291	0.2	カマド	173	切削剥片	0.660	0.487	0.136	0.0	カマド
115	形割剥片	0.911	0.403	0.201	0.1	カマド	174	切削剥片	0.723	0.287	0.112	0.0	カマド
116	形割剥片	1.092	0.383	0.209	0.1	カマド	175	切削剥片	0.641	0.628	0.158	0.0	カマド
117	形割剥片	0.902	0.723	0.303	0.2	カマド	176	切削剥片	0.749	0.538	0.095	0.0	カマド
118	形割剥片	0.841	0.349	0.181	0.1	カマド	177	切削剥片	0.846	0.328	0.162	0.0	カマド
119	形割剥片	0.830	0.445	0.236	0.1	カマド	178	切削剥片	0.505	0.472	0.182	0.0	カマド
120	形割剥片	0.744	0.491	0.270	0.1	カマド	181	形割剥片	1.260	0.643	0.293	0.3	
121	形割剥片	0.681	0.470	0.254	0.1	カマド	182	切削剥片	0.653	0.377	0.138	0.0	
122	形割剥片	0.847	0.609	0.294	0.2	カマド	183	形割剥片	0.850	0.472	0.214	0.1	
123	形割剥片	0.772	0.597	0.168	0.1	カマド	184	形割剥片	1.039	0.553	0.212	0.1	
124	切削工程品	0.812	0.695	0.219	0.2	カマド	185	形割剥片	0.905	0.728	0.247	0.2	
125	切削剥片	0.669	0.311	0.159	0.0	カマド	186	切削剥片	0.580	0.540	0.122	0.0	
126	形割剥片	0.896	0.452	0.192	0.1	カマド	187	切削剥片	0.391	0.343	0.159	0.0	
127	形割剥片	0.882	0.553	0.256	0.2	カマド	188	切削剥片	0.439	0.315	0.198	0.0	
128	切削剥片	0.894	0.576	0.177	0.0	カマド	189	切削剥片	0.558	0.347	0.097	0.0	
129	切削工程品	0.627	0.576	0.214	0.1	カマド	190	切削剥片	0.496	0.343	0.121	0.0	
130	切削剥片	0.623	0.269	0.170	0.0	カマド	191	切削剥片	0.444	0.281	0.195	0.0	
131	形割剥片	0.976	0.551	0.263	0.2	カマド	192	切削剥片	0.478	0.284	0.126	0.0	
132	形割剥片	0.663	0.583	0.266	0.1	カマド	193	切削剥片	0.529	0.372	0.098	0.0	
133	切削剥片	0.583	0.334	0.280	0.0	カマド	194	切削剥片	0.680	0.324	0.067	0.0	
134	形割剥片	1.087	0.355	0.234	0.1	カマド	195	切削剥片	0.511	0.368	0.134	0.0	
135	形割剥片	0.827	0.304	0.279	0.1	カマド	196	切削剥片	0.349	0.277	0.162	0.0	
136	切削剥片	0.663	0.382	0.200	0.0	カマド	197	切削剥片	0.462	0.324	0.098	0.0	
137	形割剥片	0.833	0.454	0.237	0.1	カマド	198	形割剥片	0.858	0.504	0.299	0.2	
138	形割剥片	1.006	0.703	0.186	0.2	カマド	199	形割剥片	1.041	0.801	0.217	0.2	
139	形割剥片	1.000	0.662	0.211	0.2	カマド	200	切削工程品	1.069	0.817	0.293	0.3	
140	形割剥片	0.998	0.527	0.202	0.1	カマド	201	形割剥片	1.142	0.451	0.202	0.2	
142	形割剥片	0.686	0.471	0.253	0.1	カマド	202	切削剥片	1.005	0.397	0.135	0.0	
143	形割剥片	0.435	0.414	0.225	0.1	カマド	203	形割剥片	1.170	0.937	0.264	0.4	
144	切削剥片	0.465	0.392	0.185	0.0	カマド	204	形割剥片	1.069	0.781	0.224	0.2	
145	切削剥片	1.247	0.301	0.097	0.0	カマド	205	形割剥片	1.242	0.904	0.241	0.4	
146	形割剥片	0.713	0.485	0.245	0.1	カマド	206	形割剥片	0.932	0.728	0.236	0.2	
147	切削剥片	0.739	0.420	0.179	0.0	カマド	207	形割剥片	1.233	0.696	0.306	0.3	
148	形割剥片	0.672	0.398	0.272	0.1	カマド	208	切削剥片	0.625	0.298	0.150	0.0	
149	形割剥片	1.046	0.524	0.201	0.2	カマド	209	形割剥片	1.009	0.761	0.272	0.3	
150	形割剥片	0.883	0.540	0.159	0.2	カマド	210	切削剥片	0.451	0.372	0.191	0.0	
151	切削剥片	0.521	0.368	0.139	0.0	カマド	211	切削剥片	0.411	0.264	0.216	0.0	
152	形割剥片	0.852	0.371	0.210	0.1	カマド	212	切削剥片	0.550	0.330	0.103	0.0	
153	形割剥片	0.676	0.385	0.237	0.1	カマド	213	切削剥片	0.527	0.318	0.109	0.0	
154	形割剥片	0.813	0.499	0.226	0.1	カマド	214	切削剥片	0.563	0.198	0.184	0.0	
155	切削剥片	0.734	0.263	0.141	0.0	カマド	215	切削剥片	0.362	0.342	0.099	0.0	
156	切削剥片	0.640	0.401	0.145	0.0	カマド	216	切削剥片	0.563	0.297	0.118	0.0	
157	形割剥片	0.922	0.438	0.123	0.1	カマド	217	切削剥片	0.294	0.274	0.155	0.0	
158	形割剥片	0.919	0.516	0.157	0.1	カマド	219	切削剥片	0.307	0.270	0.137	0.0	
159	切削剥片	0.740	0.364	0.172	0.0	カマド	220	切削剥片	0.645	0.529	0.106	0.0	
160	形割剥片	0.982	0.476	0.176	0.1	カマド	221	形割剥片	0.759	0.597	0.250	0.1	
161	切削剥片	0.741	0.568	0.144	0.0	カマド	222	切削剥片	0.407	0.349	0.116	0.0	
162	切削剥片	0.706	0.478	0.162	0.0	カマド	223	切削剥片	0.626	0.270	0.122	0.0	
163	形割剥片	0.662	0.498	0.157	0.1	カマド	224	切削剥片	0.588	0.314	0.108	0.0	
164	形割剥片	0.810	0.419	0.162	0.1	カマド	225	切削剥片	0.455	0.443	0.137	0.0	

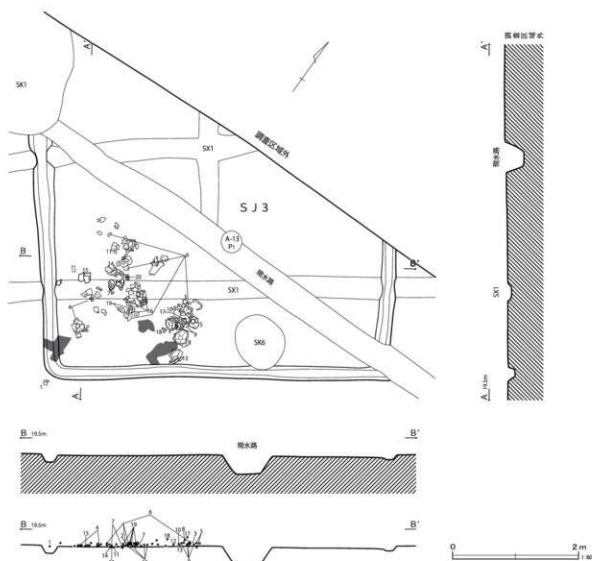
番号	器械 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	番号	器械 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
226	形削削片	0.718	0.427	0.151	0.1		287	切削削片	0.501	0.234	0.140	0.0	
227	切削削片	0.556	0.430	0.138	0.0		288	切削削片	0.615	0.476	0.173	0.0	
228	切削削片	0.446	0.332	0.215	0.0		289	切削削片	0.432	0.366	0.107	0.0	
229	切削削片	0.585	0.359	0.211	0.0		290	切削削片	0.461	0.305	0.118	0.0	
230	切削削片	0.598	0.341	0.245	0.0		292	切削削片	0.656	0.413	0.119	0.0	
231	形削削片	0.759	0.332	0.217	0.1		293	切削削片	0.436	0.304	0.065	0.0	
232	切削削片	0.519	0.395	0.228	0.0		294	切削削片	0.566	0.372	0.183	0.0	
233	切削削片	0.474	0.250	0.199	0.0		295	形削削片	0.771	0.620	0.279	0.1	
234	形削削片	0.651	0.485	0.182	0.1		296	形削削片	0.803	0.687	0.175	0.2	
235	切削削片	0.820	0.372	0.149	0.0		297	切削削片	0.403	0.367	0.097	0.0	
236	切削削片	0.734	0.444	0.089	0.0		298	切削削片	0.575	0.430	0.073	0.0	
237	形削削片	0.717	0.431	0.096	0.1		299	切削削片	0.709	0.424	0.148	0.0	
238	形削削片	0.710	0.582	0.307	0.2		300	形削削片	0.712	0.437	0.232	0.1	
239	形削削片	0.675	0.409	0.289	0.1		301	切削削片	0.699	0.423	0.108	0.0	
240	形削削片	0.911	0.476	0.252	0.2		303	切削削片	0.462	0.312	0.262	0.0	
241	切削削片	0.654	0.366	0.147	0.0		304	切削削片	0.370	0.355	0.295	0.0	
242	切削削片	0.774	0.401	0.129	0.0		305	切削削片	0.427	0.322	0.225	0.0	
243	形削削片	0.762	0.419	0.235	0.2		306	切削削片	0.732	0.508	0.139	0.0	
244	形削削片	0.783	0.695	0.168	0.2		307	切削削片	0.534	0.428	0.113	0.0	
245	切削削片	0.495	0.388	0.135	0.0		308	切削削片	0.815	0.328	0.125	0.0	
246	切削削片	0.576	0.447	0.170	0.0		309	切削削片	0.609	0.467	0.143	0.0	
247	切削削片	0.755	0.456	0.143	0.0		310	切削削片	0.426	0.350	0.081	0.0	
248	形削削片	1.187	0.278	0.188	0.1		311	形削削片	0.624	0.455	0.229	0.1	
249	切削削片	0.570	0.493	0.093	0.0		312	切削削片	0.649	0.364	0.304	0.0	
250	切削削片	0.445	0.398	0.162	0.0		313	切削削片	0.391	0.367	0.195	0.0	
251	切削削片	0.707	0.412	0.129	0.0		314	切削削片	0.707	0.414	0.104	0.0	
252	切削削片	0.736	0.385	0.114	0.0		315	切削削片	0.640	0.340	0.090	0.0	
253	切削削片	0.361	0.342	0.125	0.0		316	形削削片	1.509	0.500	0.274	0.3	
254	形削削片	0.627	0.342	0.302	0.1		317	形削削片	1.146	0.671	0.247	0.2	
255	切削削片	0.640	0.344	0.182	0.0		319	切削削片	0.445	0.230	0.157	0.0	
256	切削削片	0.603	0.315	0.190	0.0		320	切削削片	0.706	0.521	0.177	0.0	
257	切削削片	0.499	0.371	0.189	0.0		321	形削削片	1.486	0.492	0.260	0.2	
258	形削削片	0.900	0.686	0.300	0.2		322	形削削片	0.757	0.454	0.203	0.1	
259	切削削片	0.466	0.283	0.196	0.0		323	形削削片	0.565	0.340	0.221	0.1	
260	形削削片	1.168	0.955	0.212	0.4		324	形削削片	0.770	0.531	0.137	0.1	
261	形削削片	1.153	0.864	0.284	0.5		325	形削削片	0.973	0.437	0.221	0.1	
263	切削削片	0.413	0.342	0.108	0.0		326	切削 工程品	0.822	0.606	0.180	0.1	
264	切削削片	0.604	0.359	0.155	0.0		327	形削削片	0.702	0.513	0.190	0.1	
265	形削削片	0.819	0.399	0.166	0.1		328	形削削片	0.951	0.691	0.321	0.2	
266	形削削片	1.390	0.719	0.214	0.3		329	形削削片	1.053	0.355	0.219	0.1	
267	形削削片	0.708	0.557	0.146	0.1		330	形削削片	0.952	0.543	0.231	0.2	
268	形削削片	0.692	0.387	0.305	0.1		331	切削削片	0.555	0.311	0.164	0.0	
270	切削削片	0.689	0.329	0.190	0.0		332	形削削片	0.709	0.557	0.113	0.1	
271	形削削片	0.728	0.528	0.309	0.1		333	形削削片	0.568	0.512	0.176	0.1	
272	切削削片	0.489	0.414	0.231	0.0		334	切削削片	1.007	0.279	0.223	0.0	
273	切削削片	0.639	0.444	0.129	0.0		335	切削削片	0.602	0.296	0.098	0.0	
274	切削削片	0.787	0.386	0.182	0.0		336	切削削片	0.506	0.359	0.229	0.0	
275	切削削片	0.608	0.466	0.116	0.0		337	形削削片	0.893	0.344	0.268	0.1	
276	形削削片	0.845	0.507	0.266	0.1		338	切削削片	0.717	0.292	0.082	0.0	
278	切削削片	0.683	0.406	0.152	0.0		339	切削削片	0.581	0.303	0.112	0.0	
279	切削削片	0.656	0.394	0.140	0.0		340	形削削片	0.879	0.492	0.130	0.1	
280	切削削片	0.442	0.418	0.187	0.0		341	切削削片	0.476	0.360	0.148	0.0	
281	形削削片	0.597	0.410	0.226	0.1		342	切削削片	0.576	0.364	0.119	0.0	
282	切削削片	0.690	0.460	0.127	0.0		343	切削削片	0.760	0.414	0.139	0.0	
283	切削削片	0.507	0.333	0.119	0.0		344	切削削片	0.679	0.250	0.115	0.0	
284	切削削片	0.394	0.358	0.147	0.0		345	切削削片	0.479	0.259	0.190	0.0	
285	切削削片	0.517	0.402	0.169	0.0		346	形削削片	0.848	0.430	0.143	0.1	
286	切削削片	0.620	0.399	0.148	0.0		347	切削削片	0.596	0.304	0.182	0.0	

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
349	切削剥片	0.503	0.369	0.245	0.0		378	切削剥片	0.845	0.433	0.129	0.0	
350	切削剥片	0.540	0.370	0.110	0.0		380	形削剥片	0.877	0.464	0.346	0.1	
351	切削剥片	0.606	0.250	0.188	0.0		381	形削剥片	0.661	0.562	0.133	0.1	
352	切削剥片	0.464	0.319	0.126	0.0		383	形削剥片	0.728	0.318	0.264	0.1	
353	切削剥片	0.450	0.294	0.131	0.0		384	切削剥片	0.458	0.452	0.128	0.0	
354	切削剥片	0.494	0.294	0.207	0.0		385	形削剥片	0.897	0.368	0.157	0.1	
355	切削剥片	0.701	0.347	0.179	0.0		386	切削工程品	0.661	0.597	0.168	0.1	
372	切削剥片	0.636	0.324	0.233	0.0		387	切削剥片	0.790	0.455	0.107	0.0	
374	形削剥片	1.219	0.496	0.236	0.2		388	形削剥片	0.615	0.445	0.276	0.1	
375	切削工程品	0.681	0.622	0.212	0.2		390	切削工程品	0.525	0.389	0.279	0.1	
376	切削剥片	0.915	0.424	0.136	0.0		391	切削剥片	0.449	0.405	0.108	0.0	
377	形削剥片	0.874	0.375	0.168	0.1								

るもので、石材を打ち欠くだけではなく、途中段階にもケズリ・研磨などの手法を用いて形状を整えていたことを示す。69～71は切削工程品で、

穿孔前の状態である。

このほかに滑石製品の製作途上の剥片が323点出土している(第4表)。残存する大きさ・形状等



第27図 第3号住居跡

から、白玉製作工程の形制剥片・切削工程品・切削剥片に分類した。これらの遺物から、白玉製作にかかる工房機能が推定されるが、製作に伴う施設や工具等は発見されていない。

第3号住居跡 (第27図)

A-13グリッドに位置し、削平によって掘り込みを持たない住居跡である。コの字に巡る壁溝が検出され、北半部は調査区域外にある。重複する第1・6号土壇と第1号性格不明遺構との新旧関係は明確ではない。

検出された壁溝から、平面形態は方形である。東西長5.58mを測り、交差する南北長は5.46mが現存する。現存規模や形状等から南北に長軸を有する長方形となる可能性が高い。南北軸方位はN-35°-Wを指す。

残存状態が劣悪なため、主柱穴・炉・貯蔵穴は発見されていない。壁溝は、幅0.18~0.33m、床面からの深さ0.05~0.10mほどである。

遺物は、南西隅付近の床面直上に集中している。S字口縁甕・単口縁台付甕・有段口縁壺・小型丸底埴・柱状脚高坏が一括して出土している。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-2に相当する。

第4号住居跡 (第29図)

A・B-12グリッド位置し、南西隅が調査区域外にある。第3号土壇・第1号性格不明遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は、東辺と西辺が平行する台形である。東辺2.17m、西辺推定3m、東西長2.90mを測り、南北軸方位はN-35°-Wを指す。確認面からの深さは0.11~0.13mほどで、覆土は自然堆積である。

主柱穴・厨房施設・貯蔵穴・壁溝等の諸施設は検出されていない。

遺物は、出土量が少ない。小型埴と長嗣化が進んだ甕が出土している。銭塚・城敷Ⅳ期新段階に相当すると思われる。

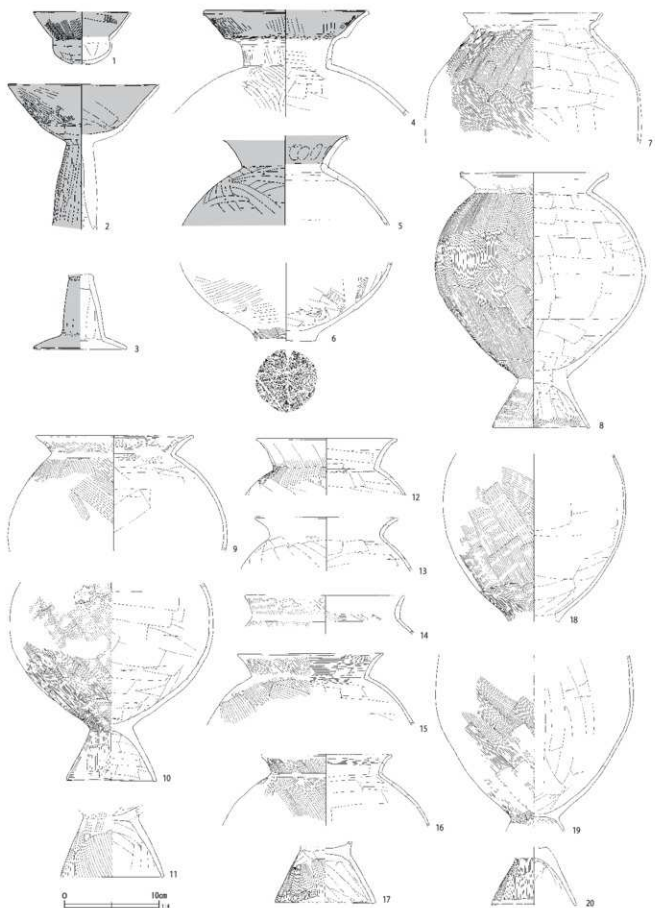
第5号住居跡 (第30図)

A-10・11グリッドに位置し、北側約1/3が調査区域外にある。重複する第9・10号住居跡よりも新しい。

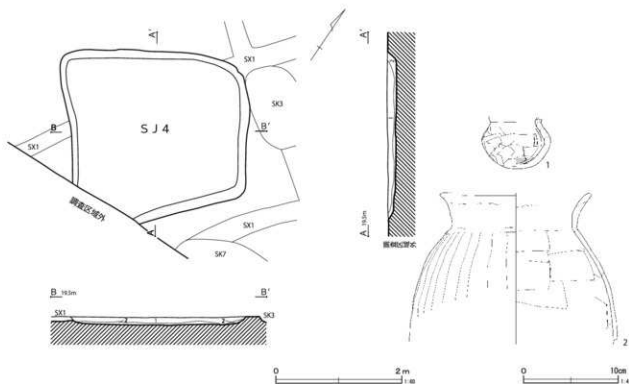
平面形態は方形であるが、壁溝が企画性の高い方形を呈しているのに対し、西壁の上辺は方向を違え、台形状のプランを示している。そのため、西辺には壁溝と壁の立ち上がりの間に0.28~0.85

第5表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	埴	(10.2)	5.5	(2.0)	CEH	30	普通	にぶい橙	外面赤彩 No.57		49-3
2	土師器	高坏	16.1	15.3		ACEH	70	普通	橙	有縁坏柱状脚 赤彩 No.30		49-4
3	土師器	高坏		8.0	9.7	AEHJK	70	普通	橙	屈折脚 外面赤彩 支脚転用痕 No.8		
4	土師器	甕	17.4	11.3		A E H I J	60	普通	橙	有段口縁 口縁部赤彩 No.49-56		49-5
5	土師器	甕		9.6		A E H I K	60	普通	にぶい黄橙	赤彩 二次的被熱 No.10-61		
6	土師器	甕		8.4	6.4	EHI	40	普通	明黄褐	底部木葉痕 No.9-26-30-36-39		
7	土師器	台付甕	14.6	13.9		ABCEHIJ	30	普通	にぶい橙	S字状口縁 覆付着 No.25-42-43-44		49-6
8	土師器	台付甕	15.8	27.2	10.2	ACEHIK	60	普通	にぶい橙	口唇部直立側面凹線 外面覆付着 No.2		49-7
9	土師器	台付甕	16.5	12.3		A E H I J	40	普通	灰褐	単口縁 煮沸痕 No.9-10-58-59-60-61		
10	土師器	台付甕	(9.4)	21.2		EJ	60	普通	にぶい橙	煮沸痕 No.5-9		50-1
11	土師器	台付甕		6.5	11.1	A C H I J K	80	普通	にぶい黄橙	煮沸痕 No.37		
12	土師器	台付甕	14.8	6.0		A C H I	60	普通	橙	単口縁 煮沸痕 No.4		
13	土師器	台付甕	15.0	5.8		DH I	40	普通	にぶい橙	単口縁 煮沸痕 No.1		
14	土師器	台付甕	168.0	4.1		C H I J K	70	普通	にぶい黄橙	単口縁 No.42		
15	土師器	台付甕	(15.4)	7.6		A C E H I J	20	普通	にぶい黄橙	単口縁 煮沸痕 No.47-49		
16	土師器	台付甕	(13.7)	7.6		A E H I J K	20	普通	褐灰	単口縁 煮沸痕 No.17-19-22		
17	土師器	台付甕		6.5	10.8	C E H I K	95	普通	にぶい橙	煮沸痕 No.6		
18	土師器	台付甕		17.7		A D E H I K	60	普通	にぶい橙	煮沸痕 No.3-4-5		
19	土師器	台付甕		18.7		B C H I	25	普通	橙	煮沸痕 No.20-23-24-27-28		
20	土師器	台付甕		6.2	9.0	A C E H I	90	普通	にぶい黄橙	煮沸痕 No.42		



第28图 第3号住居跡出土遺物



SJ4
 1 灰黄褐色土 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
 2 灰黄褐色土 灰色シルトブロック多量 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり

第29図 第4号住居跡・出土遺物

第6表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	小型埴	15.4	1.7		C E H I	50	普通	赤彩?			50-2
2	土師器	甕	15.5	15.1		A C E I K	80	良好	赤彩? 長胴状	煮海痕 煤付着	No17	50-3

mほどのテラス部が形成されている。規模は、東西長5.6～6.7m、検出された南北長3.5～5.0mを測り、南北軸方位N-11°-Wを指す。確認面からの深さは0.33～0.14mほどである。覆土は自然堆積で、最上層の1層の下半には、炭化物が薄い層を形成している。また、土層断面では、大地震に伴う噴砂痕が確認されている。

主柱穴4本の住居で、このうちPit1・Pit2・Pit3の3本が検出されている。主柱穴の規模は、径0.40～0.57m、床面からの深さ0.30～0.40mである。土層断面では確認されていないが、Pit1・Pit3中央付近には深く掘りこまれた柱痕がみられる。また、Pit2の床面にも柱材底面が当たっていた痕跡が確認されている。柱間距離は南北方向(Pit3-Pit2) 2.45m、東西方向(Pit1-Pit2)

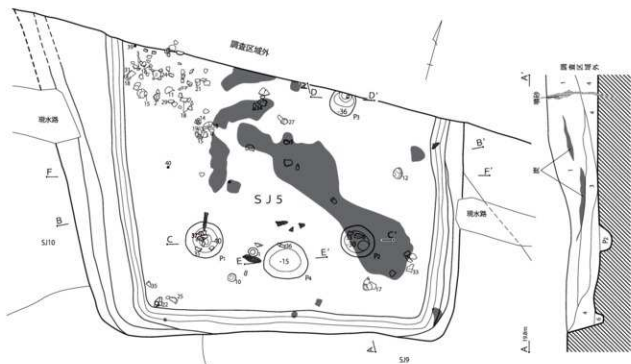
2.50mと、近似する数値を示す。この柱間距離から推定される位置も発掘範囲に含まれているが、残る主柱穴は検出されていない。

カマド・貯蔵穴は発見されていない。

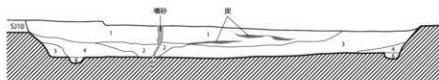
Pit4は、主柱穴Pit1とPit2に扶まれた南壁際に位置する。南北0.57m・東西0.70m、床面からの深さ0.15mで、主柱穴と比べて、平面形は大きいが浅い。位置的な要素から、出入り口施設に伴うピットの可能性が高い。

壁溝は、検出された壁に沿って全周するが、西辺では壁立ち上がりとの間にテラス部が生じている。幅0.25～0.47m、床面からの深さ0.09～0.14mほどである。

遺物は、1層及び3層上部の覆土上半から出土したものが大半である。一部、南西隅付近では床



B 10m



C 10m



D 10m



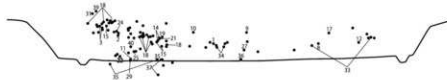
D'

E 10m



E'

F 10m



S J 5

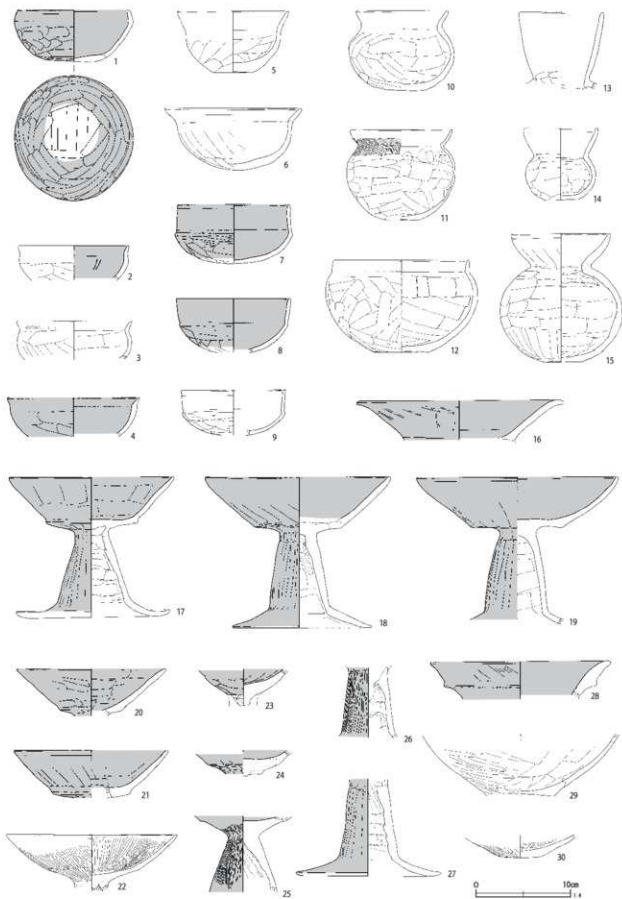
- | | |
|-----------|--------------------------|
| 1 灰黄褐色土 | 灰色シルト・炭化物粒子少量 |
| 2 に近い黄褐色土 | 粘土粒子少量 炭化物粒子多量 |
| 3 灰黄褐色土 | 灰色シルトブロック・粘土粒子少量 炭化物粒子多量 |
| 4 暗灰黄色土 | 灰色シルトブロック多量 炭化物粒子少量 |
| 5 暗灰黄色土 | 灰色シルトブロック多量 粘土・炭化物粒子少量 |
| 6 暗灰黄褐色土 | 粘性あり |

ピット

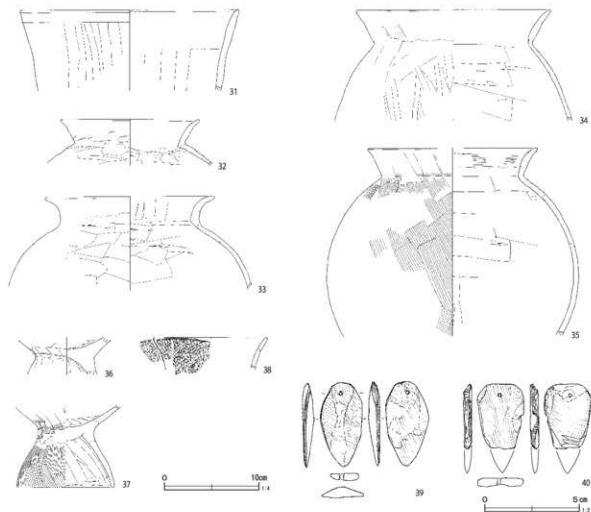
- | | |
|-----------|----------------------------|
| 7 灰黄褐色土 | 灰色シルトブロック多量 粘土粒子少量 炭化物粒子多量 |
| 8 オリーブ褐色土 | 灰色シルトブロック 砂 |
| 9 暗灰黄褐色土 | 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量 |



第30図 第5号住居跡



第31图 第5号住居跡出土遺物(1)

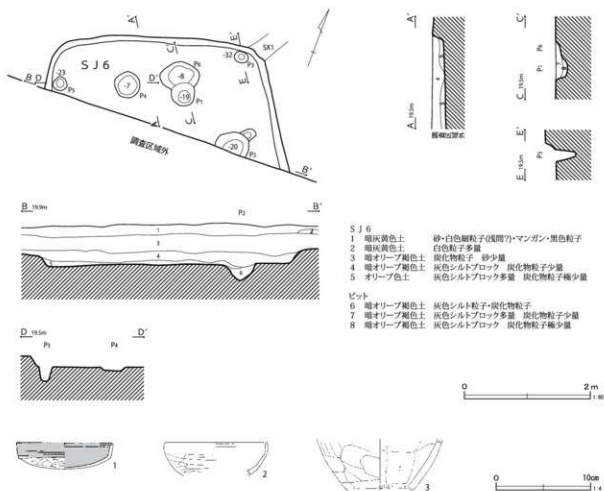


第32図 第5号住居跡出土遺物(2)

第7表 第5号住居跡出土遺物観察表(第31・32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	11.8	5.4		A E H I J K	100	普通	橙	直口縁 二次的被熱		50-4
2	土師器	椀	(11.8)	3.7		A E H I K	15	普通	にぶ・黄橙	平底 No64		
3	土師器	椀	(12.2)	4.0		E H I J	15	普通	橙	平底 No44-66		
4	土師器	坏	(14.0)	4.1		A E H I K	20	普通	浅黄橙	赤彩 A9~12Gr		
5	土師器	椀	(11.8)	6.5	4.2	CHI	30	普通	橙	有椀坏屈折脚 赤彩 支脚転用痕 No1	50-5	
6	土師器	椀	(14.4)	6.5		A D E H I	30	普通	橙	有椀坏屈折脚 赤彩 支脚転用痕 No18-49-54-56-60-63	50-6	
7	土師器	坏	(11.8)	6.2		E H I J	30	普通	橙	有椀坏屈折脚 赤彩 支脚転用痕 No63-A9~12Gr		
8	土師器	坏	(12.0)	4.7		EH	30	良好	にぶ・黄橙	有椀坏 赤彩 二次的被熱		
9	土師器	坏	(11.2)	4.8		A C D H I	30	普通	橙	有椀坏 赤彩 二次的被熱 No82		
10	土師器	鉢	9.7	8.4		C E H I K	90	普通	にぶ・黄橙	有椀坏 二次的被熱 No34		
11	土師器	鉢	10.9	9.5	3.5	A E H I K	80	良好	にぶ・黄橙	有椀坏 外面赤彩		51-1
12	土師器	鉢	14.4	9.7	5.9	A B C E H I K	100	普通	にぶ・黄橙	有椀坏 赤彩か No59		51-2
13	土師器	埴	(8.8)	8.1		H I J	15	普通	橙	有椀坏 赤彩 No31		51-3
14	土師器	埴	7.6	7.6	3.6	A B E H I K	75	普通	にぶ・黄橙	外面赤彩 1/3程が二次的被熱 No20		51-4
15	土師器	埴	(10.4)	13.5	4.2	A H I K	60.0	普通	にぶ・黄橙	屈折脚 外面赤彩 No9		51-5
16	土師器	高坏	(21.1)	4.3		H J	30	普通	にぶ・黄橙	有段口縁 赤彩		
17	土師器	高坏	17.4	14.9	最大径 16.4	E H I K	80	普通	橙	底部ヘラケズリ No87		51-6
18	土師器	高坏	(19.6)	16.0	最大径 14.8	A C D E I J	50	普通	にぶ・黄橙	底部ヘラケズリ		51-7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
19	土師器	高坏	(21.2)	15.6		E H I	70	普通	橙	No.38		52-1
20	土師器	高坏	(15.8)	5.0		E H I	10	普通	赤	単口縁 二次的被熱	Pit1No.4	
21	土師器	高坏	(16.4)	5.0		A C D E H I J	25	普通	にぶ+橙	単口縁 No.3-21		
22	土師器	高坏	(8.1)	6.0		A C E H I K	30	普通	赤	単口縁 二次的被熱	煤付着 No.10	
23	土師器	高坏		3.9		A E H I J K	50	普通	にぶ+黄橙	単口縁 二次的被熱	No.37-Pit1No.1	
24	土師器	高坏		2.7		C E H I K	70	普通	にぶ+赤褐	二次的被熱	No.26	
25	土師器	高坏		7.0		A C E H I K	70	良好	橙	二次的被熱	煤付着 Pit1No.4	
26	土師器	高坏		7.5		E H J	90	普通	にぶ+黄橙	支脚転用痕	赤彩	
27	土師器	高坏		10.2	最大径 15.5	E H I J K	70	普通	にぶ+橙	赤彩	No.9	
28	土師器	壺	(19.0)	4.0		D E H I K	10	普通	明赤褐	有段口縁 赤彩不明瞭		
29	土師器	壺		6.6	7.0	A B D E H I	45	普通	にぶ+橙	底部ヘラケズリ	No.87	
30	土師器	壺		2.4	6.0	A C E H I K	70	普通	黒褐			
31	土師器	瓶	(23.0)	8.6		E H J	5	普通	にぶ+黄橙	器面風化	No.38	
32	土師器	甕	(14.6)	4.9		A B C E	30	普通	橙	煮沸痕	Pit1No.4	
33	土師器	甕	(17.7)	10.0		A C D H I	20	普通	橙	No.3-21		
34	土師器	甕	(20.4)	11.8		D E H	20	普通	にぶ+黄橙	煮沸痕	煤付着 No.10	
35	土師器	甕	(17.8)	19.9		A B C E H I K	15	普通	にぶ+黄橙	煮沸痕	Pit1No.1-37	
36	土師器	台付甕		4.0		A C D E H I	85	普通	橙	煮沸痕	No.26	
37	土師器	台付甕		8.6		A C E H I K	60	普通	にぶ+橙	煮沸痕	煤付着 Pit1No.4	
38	古ヶ谷	甕	(12.0)	3.4		A H I K	5		にぶ+橙	単節 LR		



第33図 第6号住居跡・出土遺物

第8表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	10.2	2.8		A H I K	30	普通	明赤褐色	比企型B系列 赤彩	Pit1	
2	土師器	坏	(10.8)	3.5		C E H I K	20	普通	橙	内壇口縁	SJ6-SK1	
3	土師器	瓶		5.4	(7.0)	A C E G H I	10	普通	にぶい黄	単孔式	SJ6-SK1	

面直上から出土している。

坏類は坏身模倣の平底・内斜口縁・外反口縁鉢タイプ・坏蓋模倣があり、多くは赤彩されている。高坏は有稜坏軀折脚で、坏部の稜はしっかりとしている。小型容器には、小型甕を扁平化したような鉢・口縁部が外反する半球形の鉢・平底の罎・長頸小型壺がある。壺の口縁部には退化した段が残り、甕には長胴化の兆しはみられない。これらの器形や器種組成等から、銭塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。

39・40は滑石製剣形品である。いずれも遺物が集中する北西部の北端・南端からそれぞれ出土している。

39は菱形を呈し、片面に鑄が表現された片平鑄である。大きさは、長さ4.47cm×幅2.19cm×厚さ0.50cm、重さ6.0gである。(No14/図版52-2)

40は先端部を欠損する。逆三角形を呈し、鑄の表現もなく平滑である。大きさは、現存長3.43cm×幅2.46cm×厚さ0.41cm、重さ6.6gである。(No19/図版52-3)

第6号住居跡 (第33図)

A・B-11グリッドに位置する。北側約1/3の検出で、南側は調査区域外にある。第1号性格不明遺構と重複する。

平面形態は、北から南へ広がる台形と推定される。東西長3.35～4.05m、南北軸方位はN-19°-Wを指す。南北方向には0.90～1.78mが検出され、確認面からの深さは0.18～0.22mほどで、覆土は自然堆積である。

ピットは6本検出されているが、Pit2が主柱穴に相当すると思われる。径0.52m・床面からの深さ0.07～0.18mほどである。Pit1・Pit4・Pit6も平面規模では主柱穴の候補となるが、配置や床面

からの深さなどから肯定できない。規模は小さいが深さをもつ、西壁際のPit5(径0.22m・床面からの深さ0.23m)、北東隅のPit3(径0.20m×床面からの深さ0.31m)は、用途が不明である。

カマド・炉などの厨房施設、貯蔵穴・壁溝はみつかっていない。

遺物は、きわめて少ない。1は須恵器坏蓋模倣+口唇部内面沈線の特徴とする比企型坏B系列、2は内壇口縁、3は単孔式の瓶である。概ね銭塚・城敷Ⅳ期に相当すると思われる。

第7号住居跡 (第34図)

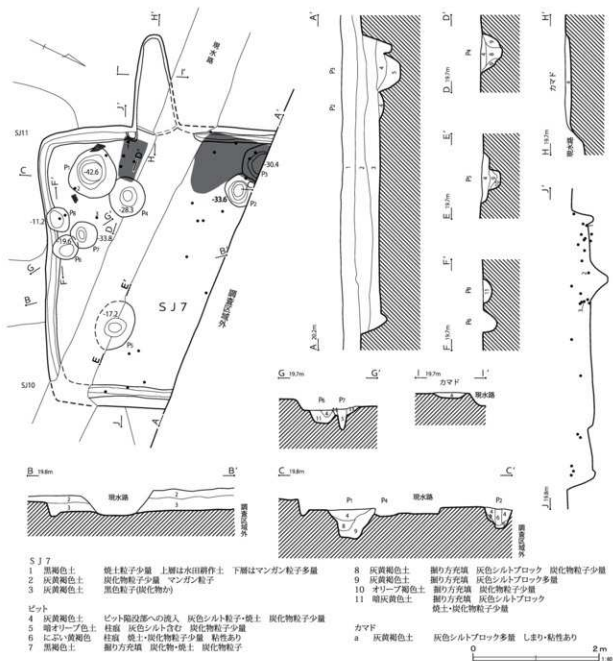
住居跡が密集するA-10グリッドに位置し、北半部が調査区域外にある。重複する第10・11号住居跡よりも新しい。

平面形態は東西方向に長軸をもつ方形で、カマドを西壁に付設する。主軸長4.47mを測り、検出された最大南北長3.65mである。主軸方位N-116°-Wを指す。確認面からの深さは0.21mほどで、覆土は自然堆積である。

主柱穴4本の住居で、このうちPit2・Pit4・Pit5の3本が検出され、残り1本は調査区域外に位置する。主柱穴の規模は、径0.53～0.80m・床面からの深さ0.28～0.33mである。Pit2・Pit4からは柱痕が確認されている。柱間距離は、主軸方向Pit4-Pit5=2.10m、南北方向Pit2-Pit4=1.85mで、主軸方向に長い長方形に配置されている。

カマドは北半部が現代の水路によって削平され、燃焼部の残存状態がきわめて悪い。燃焼部が住居内にあり、煙道部が外方に延びる形態である。煙道部は幅0.55m以上、長さ1.62mと規模は大きい。確認面からの深さは0.09mと浅い。カマドの両脇には炭化物が広がっている。

貯蔵穴は、他のピットに比べて規模が大きな、



第34図 第7号住居跡

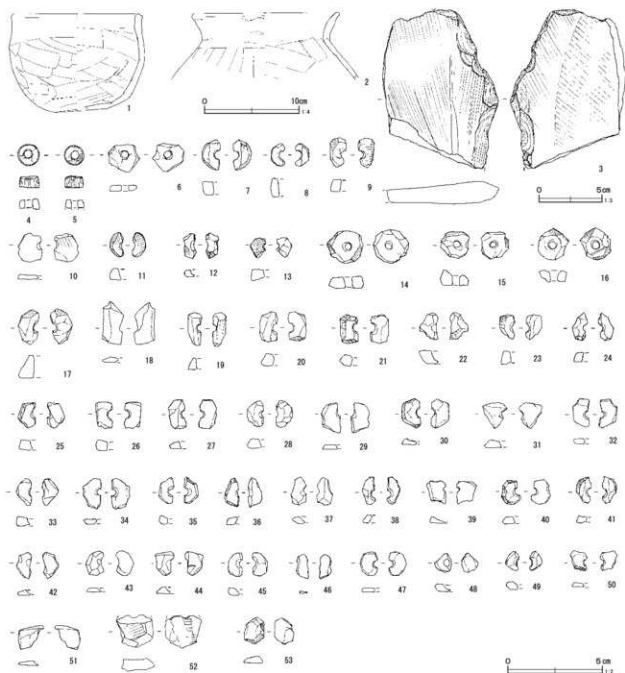
カマド両脇の Pit1 (径0.76m・床面からの深さ0.42m) と Pit3 (径0.65m・床面からの深さ0.30m) が候補となる。しかし、主柱穴 Pit4・Pit2の外側に接した住居跡の対向する隅に位置すること、主柱穴 Pit5 と同規模であることなどから、住居の拡張に伴う柱穴の可能性も考えられる。

壁溝は、検出された壁に沿って全周する。幅0.13~0.22m、床面からの深さ0.03~0.07mほど

である。

遺物は少なく、鉢1点と胴部に丸みが残る甕1点、砥石1点が図示し得た。少ない資料から時期を断定することは困難であるが、カマドが付設された住居であり、銭塚・城敷IV期古段階に相当すると思われる。

3の砥石には、右側面部に打撃痕が残り、適度な大きさに加工した痕跡と推定される。長さ



第35図 第7号住居跡出土遺物

12.45cm・幅9.20cm・厚さ1.85cm、重さ266.2g、
石材は緑泥片岩である。

このほかに、滑石製の白玉と製作途上の工程
品・剥片が793点出土している。

4・5は製品、6～13は穿孔後の破損品で、穿孔
後に片面・もしくは両面に研磨痕がみられる。14
～16は穿孔工程品で、仕上げ研磨前に廃棄された

ものである。17～53は穿孔時の破損品で、側面部
に形削段階のケズリ痕が残るものが含まれている。

製作途上の剥片は、残存する大きさ・形状等か
ら、白玉製作工程の形削剥片・切削工程品・切削
剥片に分類した（第10表）。

これらの遺物から、製作にかかる工房機能が推
定される。関連施設として、南壁際にごく密集する径

第9表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	鉢	13.4	10.2	(5.7)	A C D E H I	75	普通	橙	二次の焼熟 №18		52-4
2	土師器	甕	15.3	7.2		E H I J	70	普通	仁色・黄緑	単口径 №23・27		
番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	状態			出土位置 / 備考		図版
3	緑泥片岩	砥石	12.450	9.200	1.850	266.2				No.22		52-5
4	滑石	白玉	0.570	0.550	0.250	0.1	完成品			一括		107-1
5	滑石	白玉	0.528	0.517	0.302	0.1	完成品			裏面半分欠損		107-1
6	滑石	白玉	0.777	0.740	0.202	0.2	未完成品					107-1
7	滑石	白玉	0.744	0.388	0.445	0.2	製作時破損品					107-1
8	滑石	白玉	0.577	0.296	0.495	0.1	製作時破損品					107-1
9	滑石	白玉	0.745	0.231	0.324	0.1	製作時破損品			Pi8		107-1
10	滑石	白玉	0.747	0.594	0.111	0.1	製作時破損品					107-1
11	滑石	白玉	0.623	0.304	0.332	0.1	製作時破損品					107-1
12	滑石	白玉	0.627	0.342	0.189	0.0	製作時破損品					107-1
13	滑石	白玉	0.658	0.399	0.336	0.1	製作時破損品					107-1
14	滑石	白玉	0.952	0.843	0.328	0.4	穿孔工程品			Pi8		107-1
15	滑石	白玉	0.768	0.644	0.432	0.2	穿孔工程品			Pi8		107-1
16	滑石	白玉	0.814	0.743	0.289	0.2	穿孔工程品					107-1
17	滑石	白玉	0.839	0.541	0.478	0.3	穿孔時破損品					107-1
18	滑石	白玉	1.108	0.437	0.149	0.1	穿孔時破損品					107-1
19	滑石	白玉	0.877	0.346	0.304	0.2	穿孔時破損品			Pi8		107-1
20	滑石	白玉	0.792	0.464	0.321	0.2	穿孔時破損品					107-1
21	滑石	白玉	0.691	0.447	0.298	0.2	穿孔時破損品					107-1
22	滑石	白玉	0.672	0.527	0.354	0.1	穿孔時破損品					107-1
23	滑石	白玉	0.662	0.312	0.365	0.1	穿孔時破損品					107-1
24	滑石	白玉	0.703	0.322	0.302	0.1	穿孔時破損品					107-1
25	滑石	白玉	0.683	0.493	0.258	0.1	穿孔時破損品					107-1
26	滑石	白玉	0.668	0.429	0.289	0.1	穿孔時破損品					107-1
27	滑石	白玉	0.761	0.392	0.210	0.1	穿孔時破損品					107-1
28	滑石	白玉	0.683	0.439	0.266	0.1	穿孔時破損品					107-1
29	滑石	白玉	0.798	0.438	0.139	0.1	穿孔時破損品					107-1
30	滑石	白玉	0.719	0.490	0.158	0.1	穿孔時破損品					107-1
31	滑石	白玉	0.717	0.575	0.197	0.1	穿孔時破損品					107-1
32	滑石	白玉	0.761	0.404	0.147	0.1	穿孔時破損品					107-1
33	滑石	白玉	0.663	0.361	0.219	0.1	穿孔時破損品					107-1
34	滑石	白玉	0.786	0.365	0.131	0.1	穿孔時破損品			Pi8		107-1
35	滑石	白玉	0.675	0.401	0.193	0.0	穿孔時破損品					107-1
36	滑石	白玉	0.725	0.281	0.239	0.1	穿孔時破損品			Pi8		107-1
37	滑石	白玉	0.678	0.296	0.155	0.0	穿孔時破損品					107-1
38	滑石	白玉	0.709	0.211	0.193	0.1	穿孔時破損品			Pi8		107-1
39	滑石	白玉	0.563	0.423	0.153	0.1	穿孔時破損品					107-1
40	滑石	白玉	0.652	0.332	0.180	0.1	穿孔時破損品			Pi8		107-1
41	滑石	白玉	0.668	0.408	0.158	0.0	穿孔時破損品			Pi8		107-1
42	滑石	白玉	0.642	0.347	0.139	0.0	穿孔時破損品			Pi8		107-1
43	滑石	白玉	0.613	0.344	0.104	0.0	穿孔時破損品					107-1
44	滑石	白玉	0.598	0.472	0.175	0.1	穿孔時破損品			Pi8		107-1
45	滑石	白玉	0.641	0.314	0.196	0.0	穿孔時破損品			Pi8		107-1
46	滑石	白玉	0.617	0.291	0.096	0.0	穿孔時破損品			Pi8		107-1
47	滑石	白玉	0.599	0.345	0.102	0.0	穿孔時破損品			Pi8		107-1
48	滑石	白玉	0.509	0.442	0.223	0.0	穿孔時破損品			Pi8		107-1
49	滑石	白玉	0.501	0.310	0.241	0.0	穿孔時破損品			Pi8		107-1
50	滑石	白玉	0.431	0.415	0.105	0.0	穿孔時破損品					107-1
51	滑石	白玉	0.567	0.469	0.190	0.0	穿孔時破損品			Pi8		107-1
52	滑石	白玉	0.915	0.779	0.305	0.4	切削工程品					107-1
53	滑石	白玉	0.683	0.523	0.149	0.0	切削工程品					107-1

第10表 第7号住居跡出土滑石剥片一覽表

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
3	切削剥片	0.699	0.458	0.166	0.0	Pit8	62	形剥剥片	0.883	0.617	0.275	0.2	Pit8
4	形剥剥片	0.596	0.364	0.222	0.1	Pit8	63	形剥剥片	0.957	0.549	0.374	0.2	Pit8
5	切削剥片	0.433	0.299	0.202	0.0	Pit8	64	形剥剥片	0.979	0.684	0.204	0.2	Pit8
6	形剥剥片	0.895	0.531	0.195	0.2	Pit8	66	形剥剥片	1.019	0.756	0.153	0.1	Pit8
7	形剥剥片	0.960	0.581	0.185	0.2	Pit8	67	切削工製品	0.732	0.519	0.138	0.1	Pit8
8	切削工製品	0.727	0.585	0.210	0.1	Pit8	68	形剥剥片	0.766	0.555	0.143	0.1	Pit8
9	切削剥片	0.678	0.331	0.208	0.0	Pit8	69	形剥剥片	1.132	0.679	0.203	0.2	Pit8
10	形剥剥片	0.625	0.382	0.212	0.1	Pit8	71	形剥剥片	0.619	0.543	0.226	0.1	Pit8
12	形剥剥片	0.748	0.460	0.259	0.1	Pit8	72	切削工製品	0.695	0.406	0.355	0.1	Pit8
13	形剥剥片	1.247	0.736	0.207	0.3	Pit8	73	切削工製品	0.815	0.542	0.302	0.2	Pit8
14	形剥剥片	0.664	0.357	0.197	0.1	Pit8	74	切削剥片	0.541	0.346	0.146	0.0	Pit8
15	形剥剥片	0.564	0.523	0.169	0.1	Pit8	76	切削剥片	0.596	0.350	0.136	0.0	Pit8
16	切削剥片	0.672	0.407	0.091	0.0	Pit8	77	形剥剥片	0.887	0.433	0.341	0.2	Pit8
17	形剥剥片	0.713	0.420	0.248	0.1	Pit8	78	形剥剥片	0.658	0.491	0.227	0.1	Pit8
19	形剥剥片	0.814	0.393	0.175	0.1	Pit8	79	切削剥片	0.473	0.380	0.141	0.0	Pit8
20	形剥剥片	0.736	0.548	0.207	0.1	Pit8	80	切削剥片	0.737	0.362	0.189	0.0	Pit8
21	切削剥片	0.497	0.442	0.170	0.0	Pit8	81	切削剥片	0.483	0.356	0.273	0.0	Pit8
22	切削剥片	0.589	0.413	0.095	0.0	Pit8	82	切削剥片	0.541	0.532	0.113	0.0	Pit8
23	形剥剥片	0.684	0.496	0.238	0.1	Pit8	83	形剥剥片	0.601	0.460	0.290	0.1	Pit8
24	形剥剥片	0.870	0.335	0.335	0.2	Pit8	84	形剥剥片	0.640	0.542	0.351	0.2	Pit8
25	切削剥片	0.404	0.394	0.148	0.0	Pit8	85	切削剥片	0.557	0.317	0.135	0.0	Pit8
26	切削剥片	0.735	0.448	0.147	0.0	Pit8	86	切削剥片	0.366	0.361	0.107	0.0	Pit8
27	形剥剥片	0.558	0.313	0.265	0.1	Pit8	87	形剥剥片	0.941	0.651	0.402	0.3	Pit8
28	形剥剥片	1.072	0.746	0.236	0.2	Pit8	88	切削剥片	0.529	0.409	0.180	0.0	Pit8
29	切削剥片	0.548	0.517	0.106	0.0	Pit8	89	形剥剥片	0.710	0.549	0.274	0.2	Pit8
30	形剥剥片	0.855	0.502	0.188	0.1	Pit8	90	切削工製品	0.761	0.284	0.176	0.1	Pit8
31	形剥剥片	0.665	0.588	0.183	0.1	Pit8	91	切削剥片	0.449	0.314	0.141	0.0	Pit8
33	切削剥片	0.624	0.374	0.178	0.0	Pit8	92	形剥剥片	1.120	0.558	0.336	0.3	Pit8
34	切削剥片	0.557	0.331	0.103	0.0	Pit8	93	形剥剥片	0.914	0.629	0.184	0.1	Pit8
35	形剥剥片	0.580	0.496	0.252	0.1	Pit8	94	切削工製品	0.817	0.407	0.263	0.1	Pit8
36	切削剥片	0.517	0.300	0.188	0.0	Pit8	95	切削工製品	0.985	0.388	0.310	0.1	Pit8
37	切削剥片	0.463	0.387	0.139	0.0	Pit8	96	形剥剥片	0.938	0.522	0.194	0.2	Pit8
38	切削剥片	0.586	0.311	0.215	0.0	Pit8	97	形剥剥片	0.715	0.426	0.160	0.1	Pit8
39	切削剥片	0.630	0.350	0.134	0.0	Pit8	98	切削剥片	0.459	0.429	0.131	0.0	Pit8
40	形剥剥片	1.070	0.731	0.348	0.3	Pit8	99	形剥剥片	0.702	0.391	0.221	0.1	Pit8
41	形剥剥片	0.497	0.423	0.279	0.1	Pit8	100	形剥剥片	0.649	0.525	0.154	0.1	Pit8
42	切削剥片	0.704	0.401	0.159	0.0	Pit8	101	切削工製品	1.231	0.770	0.323	0.6	Pit8
43	切削剥片	0.601	0.383	0.143	0.0	Pit8	102	形剥剥片	0.956	0.431	0.290	0.1	Pit8
44	形剥剥片	0.892	0.561	0.169	0.1	Pit8	103	切削剥片	0.460	0.272	0.238	0.0	Pit8
45	形剥剥片	0.606	0.423	0.244	0.1	Pit8	104	切削剥片	0.301	0.270	0.143	0.0	Pit8
46	切削剥片	0.523	0.430	0.080	0.0	Pit8	105	形剥剥片	0.698	0.412	0.277	0.1	Pit8
47	形剥剥片	1.002	0.406	0.278	0.2	Pit8	106	切削剥片	0.492	0.333	0.128	0.0	Pit8
48	形剥剥片	1.394	0.316	0.151	0.1	Pit8	107	形剥剥片	0.683	0.663	0.162	0.1	Pit8
49	切削剥片	0.475	0.429	0.206	0.0	Pit8	108	形剥剥片	0.580	0.526	0.447	0.2	Pit8
50	形剥剥片	0.614	0.477	0.284	0.1	Pit8	110	切削剥片	0.600	0.355	0.196	0.0	Pit8
51	切削剥片	0.619	0.343	0.180	0.0	Pit8	111	切削剥片	0.676	0.414	0.126	0.0	Pit8
52	切削剥片	0.533	0.383	0.139	0.0	Pit8	112	切削剥片	0.599	0.350	0.112	0.0	Pit8
53	形剥剥片	0.680	0.399	0.260	0.1	Pit8	113	切削剥片	0.503	0.388	0.087	0.0	Pit8
54	切削剥片	0.705	0.547	0.129	0.0	Pit8	114	切削剥片	0.543	0.335	0.181	0.0	Pit8
55	切削剥片	0.703	0.456	0.137	0.0	Pit8	115	切削剥片	0.593	0.349	0.148	0.0	Pit8
56	形剥剥片	1.017	0.414	0.186	0.1	Pit8	116	切削剥片	0.442	0.441	0.076	0.0	Pit8
57	形剥剥片	0.706	0.567	0.112	0.1	Pit8	117	切削剥片	0.417	0.336	0.209	0.0	Pit8
58	形剥剥片	1.647	0.925	0.368	0.7	Pit8	118	切削剥片	0.599	0.518	0.186	0.0	Pit8
59	形剥剥片	1.591	0.642	0.284	0.4	Pit8	119	切削剥片	0.596	0.329	0.184	0.0	Pit8
60	形剥剥片	1.508	0.440	0.319	0.3	Pit8	120	形剥剥片	0.589	0.479	0.313	0.1	Pit8
61	形剥剥片	0.778	0.430	0.243	0.1	Pit8	121	切削工製品	0.621	0.380	0.145	0.0	Pit8

番号	器械 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	番号	器械 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
122	切削剥片	0.627	0.449	0.171	0.0	Pin8	191	切削剥片	0.528	0.323	0.242	0.0	Pin8
123	切削剥片	0.668	0.365	0.230	0.0	Pin8	192	切削剥片	0.847	0.271	0.104	0.0	Pin8
124	切削剥片	0.629	0.361	0.166	0.0	Pin8	193	切削剥片	0.700	0.376	0.160	0.0	Pin8
125	切削剥片	0.458	0.316	0.179	0.0	Pin8	194	切削剥片	0.530	0.434	0.218	0.0	Pin8
126	切削剥片	0.515	0.285	0.111	0.0	Pin8	195	切削剥片	0.435	0.338	0.132	0.0	Pin8
127	切削剥片	0.500	0.428	0.918	0.0	Pin8	196	切削剥片	0.858	0.383	0.149	0.0	Pin8
128	形割剥片	0.655	0.451	0.221	0.1	Pin8	197	切削剥片	0.502	0.415	0.063	0.0	Pin8
129	切削剥片	0.536	0.479	0.096	0.0	Pin8	198	切削剥片	0.424	0.310	0.097	0.0	Pin8
130	切削 工程品	0.807	0.584	0.209	0.1	Pin8	204	切削剥片	0.335	0.323	0.062	0.0	Pin8
131	形割剥片	1.290	0.521	0.182	0.2	Pin8	206	切削 工程品	0.754	0.612	0.157	0.1	Pin8
132	切削剥片	0.704	0.331	0.169	0.0	Pin8	207	切削剥片	0.355	0.271	0.160	0.0	Pin8
133	形割剥片	0.832	0.626	0.251	0.2	Pin8	208	切削剥片	0.415	0.278	0.248	0.0	Pin8
134	形割剥片	0.925	0.672	0.293	0.2	Pin8	209	切削剥片	0.280	0.247	0.136	0.0	Pin8
137	形割剥片	1.113	0.644	0.336	0.4	Pin8	210	切削剥片	1.070	0.594	0.072	0.0	Pin8
138	形割剥片	0.676	0.546	0.294	0.1	Pin8	211	切削剥片	0.449	0.338	0.108	0.0	Pin8
139	形割剥片	0.699	0.483	0.203	0.1	Pin8	212	切削剥片	0.435	0.384	0.125	0.0	Pin8
142	切削剥片	0.530	0.380	0.167	0.0	Pin8	214	形割剥片	1.062	0.838	0.156	0.2	Pin8
143	切削 工程品	0.725	0.661	0.267	0.2	Pin8	215	切削剥片	0.534	0.328	0.162	0.0	Pin8
145	切削剥片	0.487	0.406	0.140	0.0	Pin8	218	形割剥片	1.098	0.791	0.445	0.5	Pin8
146	形割剥片	0.757	0.479	0.174	0.1	Pin8	219	切削剥片	0.437	0.398	0.086	0.0	Pin8
148	形割剥片	0.536	0.410	0.250	0.1	Pin8	220	切削剥片	0.448	0.284	0.103	0.0	Pin8
149	切削剥片	0.525	0.401	0.133	0.0	Pin8	221	切削剥片	0.514	0.307	0.135	0.0	Pin8
151	切削剥片	0.703	0.592	0.126	0.0	Pin8	222	形割剥片	0.515	0.328	0.227	0.1	Pin8
152	形割剥片	0.821	0.520	0.170	0.1	Pin8	223	切削剥片	0.646	0.340	0.144	0.0	Pin8
154	形割剥片	0.771	0.420	0.200	0.1	Pin8	224	切削剥片	0.605	0.322	0.105	0.0	Pin8
155	形割剥片	0.568	0.438	0.217	0.1	Pin8	225	切削剥片	0.488	0.421	0.165	0.0	Pin8
156	切削 工程品	0.696	0.681	0.299	0.2	Pin8	226	切削 工程品	0.403	0.355	0.149	0.0	Pin8
157	切削剥片	0.521	0.381	0.117	0.0	Pin8	227	形割剥片	0.913	0.531	0.214	0.1	Pin8
161	切削剥片	0.590	0.373	0.148	0.0	Pin8	229	形割剥片	0.956	0.661	0.211	0.2	Pin8
162	切削剥片	0.466	0.327	0.153	0.0	Pin8	230	切削剥片	0.538	0.317	0.080	0.0	Pin8
163	切削剥片	0.636	0.473	0.087	0.0	Pin8	231	形割剥片	0.524	0.284	0.156	0.1	Pin8
164	切削剥片	0.526	0.368	0.108	0.0	Pin8	232	形割剥片	1.380	0.747	0.182	0.4	Pin8
165	切削剥片	0.544	0.369	0.182	0.0	Pin8	233	切削剥片	0.534	0.303	0.083	0.0	Pin8
166	切削剥片	0.514	0.384	0.084	0.0	Pin8	234	切削剥片	0.343	0.247	0.283	0.0	Pin8
167	切削剥片	0.627	0.336	0.120	0.0	Pin8	235	切削剥片	0.423	0.325	0.082	0.0	Pin8
168	形割剥片	1.495	0.444	0.138	0.1	Pin8	236	形割剥片	0.756	0.348	0.090	0.1	Pin8
169	形割剥片	0.682	0.428	0.250	0.1	Pin8	237	切削剥片	0.441	0.226	0.197	0.0	Pin8
170	形割剥片	1.720	0.937	0.188	0.4	Pin8	238	形割剥片	0.818	0.313	0.199	0.1	Pin8
172	切削剥片	0.490	0.408	0.137	0.0	Pin8	239	切削剥片	0.347	0.283	0.182	0.0	Pin8
173	切削剥片	0.520	0.326	0.204	0.0	Pin8	240	切削剥片	0.581	0.546	0.144	0.0	Pin8
174	形割剥片	0.732	0.480	0.217	0.1	Pin8	241	切削剥片	0.448	0.425	0.085	0.0	Pin8
175	切削剥片	0.514	0.287	0.125	0.0	Pin8	242	切削剥片	0.582	0.256	0.182	0.0	Pin8
176	切削剥片	0.597	0.274	0.214	0.0	Pin8	243	切削剥片	0.602	0.311	0.231	0.0	Pin8
177	切削剥片	0.712	0.373	0.126	0.0	Pin8	244	形割剥片	1.474	0.480	0.205	0.2	Pin8
178	切削剥片	0.417	0.416	0.130	0.0	Pin8	245	切削剥片	0.470	0.305	0.158	0.0	Pin8
179	切削剥片	0.670	0.391	0.088	0.0	Pin8	246	切削剥片	0.521	0.341	0.135	0.0	Pin8
180	切削剥片	0.576	0.395	0.119	0.0	Pin8	247	切削剥片	0.865	0.328	0.126	0.0	Pin8
181	切削剥片	0.510	0.400	0.127	0.0	Pin8	248	切削剥片	0.419	0.396	0.142	0.0	Pin8
182	切削剥片	0.591	0.315	0.143	0.0	Pin8	249	切削 工程品	0.726	0.623	0.181	0.1	Pin8
183	切削剥片	0.326	0.242	0.171	0.0	Pin8	250	切削剥片	0.524	0.372	0.142	0.0	Pin8
184	切削剥片	0.524	0.322	0.105	0.0	Pin8	268	形割剥片	1.712	0.768	0.258	0.3	Pin8
185	切削 工程品	0.371	0.297	0.209	0.0	Pin8	269	切削 工程品	1.070	0.439	0.456	0.3	Pin8
186	切削剥片	0.492	0.360	0.206	0.0	Pin8	276	切削 工程品	0.696	0.663	0.145	0.1	Pin8
187	切削剥片	0.457	0.394	0.215	0.0	Pin8	277	切削剥片	0.425	0.295	0.145	0.0	Pin8
188	切削剥片	0.544	0.299	0.159	0.0	Pin8	279	切削剥片	0.754	0.268	0.143	0.0	Pin8
189	切削 工程品	0.496	0.339	0.180	0.0	Pin8	282	切削剥片	0.376	0.361	0.186	0.0	Pin8
190	切削剥片	0.504	0.314	0.185	0.0	Pin8	283	切削剥片	0.462	0.313	0.148	0.0	Pin8

番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
284	切削剥片	0.537	0.477	0.101	0.0		341	切削剥片	0.484	0.443	0.147	0.0	
285	切削剥片	0.415	0.330	0.073	0.0		342	切削 工程品	0.805	0.535	0.269	0.2	
286	切削剥片	0.540	0.357	0.177	0.0		343	切削剥片	0.618	0.396	0.257	0.0	
287	切削剥片	0.520	0.375	0.220	0.0		344	切削剥片	0.573	0.389	0.126	0.0	
288	切削剥片	0.480	0.416	0.175	0.0		345	形削剥片	0.584	0.379	0.294	0.1	
289	切削剥片	0.386	0.374	0.106	0.0		346	切削剥片	1.010	0.510	0.145	0.0	
290	形削剥片	0.716	0.533	0.187	0.1		347	形削剥片	0.582	0.512	0.239	0.1	
291	切削剥片	0.608	0.239	0.162	0.0		348	切削剥片	0.555	0.290	0.260	0.0	
292	切削剥片	0.565	0.375	0.102	0.0		349	形削剥片	0.736	0.444	0.219	0.1	
293	切削剥片	0.531	0.237	0.253	0.0		350	切削剥片	0.691	0.346	0.195	0.0	
294	形削剥片	0.738	0.609	0.122	0.1		351	切削剥片	0.703	0.374	0.133	0.0	
295	切削剥片	0.762	0.473	0.126	0.0		352	切削剥片	0.677	0.288	0.223	0.0	
296	切削剥片	0.538	0.375	0.128	0.0		353	切削剥片	0.371	0.307	0.089	0.0	
297	切削 工程品	0.571	0.401	0.185	0.0		354	切削剥片	0.574	0.470	0.287	0.0	
298	切削剥片	0.605	0.383	0.111	0.0		355	形削剥片	0.807	0.374	0.252	0.1	
299	切削剥片	0.358	0.314	0.107	0.0		356	形削剥片	0.831	0.383	0.264	0.1	
300	切削剥片	0.524	0.435	0.093	0.0		357	形削剥片	0.815	0.354	0.185	0.1	
301	切削剥片	0.480	0.410	0.263	0.0		358	切削剥片	0.535	0.270	0.210	0.0	
302	切削剥片	0.462	0.325	0.156	0.0		359	切削剥片	0.477	0.288	0.086	0.0	
303	切削 工程品	0.600	0.401	0.196	0.1		360	切削剥片	0.641	0.255	0.082	0.0	
304	形削剥片	0.559	0.455	0.233	0.1		361	切削剥片	0.642	0.312	0.156	0.0	
305	切削剥片	0.569	0.297	0.263	0.0		362	切削剥片	0.739	0.387	0.142	0.0	
306	形削剥片	0.719	0.385	0.363	0.1		363	切削 工程品	0.473	0.339	0.158	0.0	
307	切削剥片	0.502	0.380	0.913	0.0		364	切削剥片	0.365	0.305	0.151	0.0	
308	切削剥片	0.392	0.330	0.090	0.0		365	切削剥片	0.450	0.349	0.190	0.0	
309	切削剥片	0.606	0.338	0.225	0.0		366	切削剥片	0.522	0.313	0.076	0.0	
310	切削剥片	0.515	0.360	0.148	0.0		367	切削剥片	0.415	0.319	0.103	0.0	
311	切削剥片	0.573	0.385	0.228	0.0		368	切削剥片	0.608	0.523	0.144	0.0	
312	形削剥片	0.880	0.382	0.228	0.1		369	切削剥片	0.666	0.418	0.074	0.0	
313	切削剥片	0.435	0.385	0.097	0.0		370	切削 工程品	0.536	0.406	0.123	0.0	
314	形削剥片	0.721	0.437	0.249	0.1		371	切削剥片	0.453	0.352	0.121	0.0	
315	切削剥片	0.450	0.290	0.262	0.0		372	切削 工程品	0.625	0.468	0.191	0.1	
316	切削剥片	0.563	0.557	0.128	0.0		373	形削剥片	0.769	0.483	0.186	0.1	
317	切削 工程品	0.614	0.613	0.226	0.1		374	形削剥片	0.519	0.404	0.148	0.1	
318	形削剥片	0.930	0.836	0.241	0.2		375	切削剥片	0.467	0.339	0.099	0.0	
319	形削剥片	0.750	0.348	0.263	0.1		376	形削剥片	0.633	0.572	0.232	0.1	
320	切削剥片	0.615	0.451	0.088	0.0		377	形削剥片	1.164	0.548	0.206	0.1	
321	切削剥片	0.613	0.333	0.164	0.0		378	切削剥片	0.709	0.541	0.150	0.0	
322	切削剥片	0.561	0.454	0.202	0.0		379	切削剥片	0.627	0.388	0.102	0.0	
323	形削剥片	0.859	0.601	0.145	0.1		380	切削剥片	0.692	0.329	0.122	0.0	
324	切削剥片	0.769	0.476	0.160	0.0		381	切削剥片	0.501	0.459	0.143	0.0	
325	切削剥片	0.614	0.385	0.195	0.0		382	切削剥片	0.729	0.390	0.141	0.0	
326	切削剥片	0.512	0.428	0.128	0.0		383	切削剥片	0.599	0.511	0.117	0.0	
327	切削剥片	0.736	0.331	0.092	0.0		384	切削剥片	0.546	0.417	0.129	0.0	
328	切削剥片	0.761	0.410	0.145	0.0		385	切削剥片	0.689	0.274	0.091	0.0	
329	形削剥片	0.671	0.545	0.184	0.1		387	切削剥片	0.403	0.338	0.213	0.0	
330	形削剥片	0.538	0.467	0.251	0.1		388	切削剥片	0.489	0.394	0.191	0.0	
331	形削剥片	1.275	0.294	0.152	0.1		389	切削剥片	0.417	0.414	0.190	0.0	
332	切削剥片	0.452	0.342	0.200	0.0		390	切削剥片	0.692	0.354	0.135	0.0	
333	切削剥片	0.603	0.347	0.134	0.0		392	切削剥片	0.428	0.360	0.140	0.0	
334	切削 工程品	0.742	0.574	0.169	0.1		393	切削剥片	0.512	0.509	0.204	0.0	
335	形削剥片	0.616	0.403	0.131	0.1		394	切削剥片	0.715	0.293	0.132	0.0	
336	形削剥片	0.695	0.551	0.261	0.1		395	切削剥片	0.562	0.445	0.084	0.0	
337	切削剥片	0.498	0.327	0.072	0.0		396	切削剥片	0.751	0.442	0.113	0.0	
338	切削剥片	0.613	0.378	0.106	0.0		397	切削剥片	0.447	0.363	0.155	0.0	
339	形削剥片	0.609	0.417	0.225	0.1		398	切削剥片	0.431	0.255	0.182	0.0	
340	切削剥片	0.350	0.229	0.170	0.0		399	切削剥片	0.476	0.428	0.073	0.0	

番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
401	切削剥片	0.455	0.358	0.131	0.0		458	切削剥片	0.389	0.357	0.093	0.0	
402	切削剥片	0.492	0.401	0.092	0.0		459	切削剥片	0.452	0.403	0.105	0.0	
403	切削剥片	0.533	0.415	0.229	0.0		460	切削剥片	0.440	0.362	0.128	0.0	
404	切削剥片	0.423	0.354	0.200	0.0		462	切削剥片	0.797	0.284	0.120	0.0	
405	切削剥片	0.399	0.384	0.165	0.0		463	切削剥片	0.566	0.338	0.107	0.0	
406	切削剥片	0.852	0.461	0.137	0.0		464	切削剥片	0.534	0.293	0.168	0.0	
407	切削剥片	0.401	0.373	0.200	0.0		465	切削剥片	0.583	0.388	0.198	0.0	
408	切削剥片	0.422	0.376	0.244	0.0		466	切削剥片	0.786	0.384	0.114	0.0	
409	切削剥片	0.532	0.316	0.179	0.0		467	切削剥片	0.631	0.304	0.154	0.0	
410	切削剥片	0.526	0.420	0.160	0.0		468	切削剥片	0.653	0.384	0.139	0.0	
411	切削剥片	0.752	0.685	0.209	0.2		469	切削剥片	0.663	0.373	0.115	0.0	
412	形剥剥片	0.673	0.645	0.237	0.1		470	切削剥片	0.599	0.418	0.200	0.0	
413	切削剥片	0.591	0.342	0.170	0.0		471	形剥剥片	1.038	0.846	0.342	0.3	
414	切削剥片	0.460	0.396	0.118	0.0		472	形剥剥片	0.707	0.694	0.327	0.2	
415	切削剥片	0.438	0.411	0.206	0.0		473	形剥剥片	1.344	0.889	0.123	0.2	
416	切削剥片	0.572	0.339	0.125	0.0		474	形剥剥片	0.975	0.867	0.209	0.2	
417	切削剥片	0.797	0.378	0.141	0.0		475	切削剥片	0.605	0.269	0.205	0.0	
418	切削剥片	0.745	0.459	0.090	0.0		476	切削剥片	0.397	0.386	0.107	0.0	
419	切削剥片	0.557	0.476	0.155	0.0		477	切削剥片	0.424	0.359	0.071	0.0	
420	形剥剥片	1.044	0.529	0.256	0.2		478	切削剥片	0.451	0.203	0.255	0.0	
421	切削剥片	0.703	0.295	0.184	0.0		479	切削剥片	0.614	0.288	0.138	0.0	
422	切削剥片	0.636	0.264	0.126	0.0		480	切削剥片	0.430	0.252	0.097	0.0	
423	形剥剥片	0.766	0.453	0.175	0.1		481	形剥剥片	0.590	0.563	0.152	0.1	
424	形剥剥片	0.798	0.416	0.185	0.1		482	形剥剥片	0.646	0.472	0.165	0.1	
425	切削剥片	0.656	0.205	0.145	0.0		483	切削剥片	0.568	0.312	0.054	0.0	
426	切削剥片	0.364	0.341	0.136	0.0		484	形剥剥片	0.662	0.527	0.193	0.1	
427	切削剥片	0.482	0.337	0.139	0.0		485	形剥剥片	0.562	0.403	0.247	0.1	
428	切削剥片	0.534	0.374	0.066	0.0		486	切削剥片	0.518	0.281	0.105	0.0	
429	切削剥片	0.364	0.339	0.050	0.0		487	切削剥片	0.294	0.273	0.129	0.0	
430	切削剥片	0.515	0.279	0.104	0.0		488	切削剥片	0.583	0.287	0.158	0.0	
431	切削剥片	0.924	0.247	0.097	0.0		489	切削剥片	0.452	0.382	0.135	0.0	
432	切削剥片	0.453	0.273	0.187	0.0		490	切削剥片	0.556	0.332	0.186	0.0	
433	形剥剥片	0.957	0.325	0.199	0.1		491	形剥剥片	0.770	0.766	0.353	0.3	
434	切削剥片	0.332	0.253	0.079	0.0		492	形剥剥片	0.997	0.516	0.209	0.2	
435	切削剥片	0.453	0.246	0.140	0.0		493	形剥剥片	0.972	0.691	0.257	0.2	
436	切削剥片	0.704	0.484	0.102	0.0		494	切削剥片	0.708	0.411	0.090	0.0	
437	切削剥片	0.528	0.223	0.210	0.0		496	切削剥片	0.727	0.344	0.100	0.0	
438	切削剥片	0.627	0.292	0.101	0.0		497	形剥剥片	0.749	0.617	0.303	0.1	
439	切削剥片	0.592	0.405	0.167	0.0		498	切削剥片	0.491	0.434	0.121	0.0	
440	切削剥片	0.649	0.308	0.188	0.0		499	切削剥片	0.643	0.313	0.186	0.0	
441	切削剥片	0.592	0.319	0.128	0.0		500	形剥剥片	0.993	0.599	0.222	0.2	
442	切削剥片	0.703	0.259	0.131	0.0		501	形剥剥片	0.809	0.470	0.107	0.1	
443	切削剥片	0.737	0.276	0.205	0.0		502	切削剥片	0.655	0.241	0.101	0.0	
444	切削剥片	0.630	0.331	0.123	0.0		503	形剥剥片	0.884	0.388	0.230	0.1	
445	形剥剥片	0.616	0.320	0.259	0.1		504	形剥剥片	0.842	0.503	0.209	0.1	
446	切削剥片	0.367	0.196	0.185	0.0		505	切削剥片	0.463	0.295	0.103	0.0	
447	切削剥片	0.563	0.369	0.186	0.0		506	形剥剥片	0.903	0.699	0.259	0.2	
448	切削剥片	0.547	0.431	0.201	0.0		507	形剥剥片	0.601	0.529	0.235	0.1	
449	切削剥片	0.403	0.354	0.090	0.0		508	形剥剥片	1.567	1.018	0.252	0.4	
450	切削剥片	0.508	0.460	0.131	0.0		509	形剥剥片	1.169	1.001	0.325	0.3	
451	切削剥片	0.643	0.304	0.160	0.0		510	形剥剥片	0.649	0.527	0.216	0.1	
452	切削剥片	0.660	0.408	0.139	0.0		511	切削剥片	0.802	0.611	0.368	0.2	
453	切削剥片	0.371	0.359	0.084	0.0		512	切削剥片	0.413	0.382	0.120	0.0	
454	切削剥片	0.521	0.326	0.073	0.0		513	切削剥片	0.666	0.507	0.140	0.0	
455	切削剥片	0.474	0.443	0.106	0.0		514	切削剥片	0.528	0.391	0.219	0.0	
456	切削剥片	0.436	0.359	0.186	0.0		515	切削剥片	0.791	0.532	0.304	0.2	
457	切削剥片	0.602	0.352	0.202	0.0		516	切削剥片	0.465	0.354	0.213	0.0	

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
517	切削剥片	0.962	0.349	0.161	0.0		575	形剥剥片	0.972	0.464	0.395	0.3	
518	形剥剥片	1.221	0.813	0.405	0.5		576	形剥剥片	0.664	0.590	0.169	0.1	
519	形剥剥片	1.166	0.774	0.165	0.2		577	切削剥片	0.800	0.336	0.160	0.0	
520	切削剥片	0.405	0.381	0.205	0.0		579	切削剥片	0.637	0.432	0.128	0.0	
521	形剥剥片	0.786	0.434	0.207	0.1		580	切削剥片	0.641	0.605	0.185	0.0	
522	形剥剥片	0.853	0.777	0.129	0.1		581	切削剥片	0.478	0.341	0.206	0.0	
523	形剥剥片	0.875	0.779	0.232	0.2		582	形剥剥片	1.097	0.562	0.369	0.2	
524	切削工程品	0.527	0.394	0.260	0.0		583	形剥剥片	0.721	0.477	0.261	0.1	
525	切削剥片	0.768	0.599	0.099	0.0		584	形剥剥片	0.932	0.668	0.300	0.3	
526	形剥剥片	0.703	0.539	0.261	0.1		585	形剥剥片	0.966	0.701	0.315	0.3	
527	形剥剥片	0.594	0.521	0.144	0.1		586	形剥剥片	1.184	0.603	0.224	0.2	
528	形剥剥片	0.778	0.530	0.320	0.2		588	切削工程品	0.850	0.524	0.122	0.1	
529	形剥剥片	0.715	0.491	0.218	0.1		589	形剥剥片	1.257	0.678	0.271	0.2	
530	形剥剥片	0.942	0.907	0.178	0.2		590	形剥剥片	1.120	0.684	0.233	0.2	
531	形剥剥片	1.281	0.502	0.298	0.3		591	形剥剥片	1.228	0.732	0.116	0.2	
532	切削工程品	0.732	0.679	0.197	0.2		592	形剥剥片	1.084	0.808	0.215	0.2	
533	形剥剥片	0.821	0.550	0.175	0.1		593	形剥剥片	1.368	0.956	0.256	0.4	
534	形剥剥片	0.973	0.707	0.305	0.3		594	切削剥片	0.653	0.262	0.217	0.0	
535	切削工程品	0.857	0.728	0.322	0.2		595	切削剥片	0.519	0.408	0.093	0.0	
536	切削工程品	0.600	0.541	0.245	0.1		596	切削剥片	0.402	0.254	0.152	0.0	
537	形剥剥片	0.956	0.886	0.280	0.2		597	切削剥片	0.481	0.404	0.129	0.0	
538	切削工程品	0.800	0.682	0.201	0.2		598	切削工程品	0.573	0.437	0.279	0.0	
539	形剥剥片	1.023	0.654	0.163	0.1		599	切削剥片	0.524	0.344	0.106	0.0	
540	形剥剥片	0.901	0.762	0.288	0.3		600	切削剥片	0.594	0.303	0.118	0.0	
541	形剥剥片	1.079	0.381	0.219	0.1		601	切削剥片	0.506	0.505	0.099	0.0	
542	形剥剥片	1.010	0.626	0.241	0.2		602	切削工程品	0.618	0.426	0.161	0.0	
543	形剥剥片	0.857	0.529	0.272	0.2		603	切削剥片	0.474	0.305	0.057	0.0	
544	切削剥片	0.569	0.427	0.136	0.0		604	切削剥片	0.489	0.291	0.133	0.0	
545	形剥剥片	1.193	0.647	0.257	0.2		605	切削剥片	0.493	0.278	0.253	0.0	
546	形剥剥片	1.282	0.427	0.221	0.2		606	切削剥片	0.442	0.382	0.086	0.0	
547	切削剥片	0.579	0.504	0.113	0.0		607	切削剥片	0.429	0.407	0.111	0.0	
548	切削剥片	0.594	0.336	0.208	0.0		608	切削剥片	0.400	0.281	0.208	0.0	
549	切削工程品	0.920	0.678	0.222	0.2		609	形剥剥片	0.630	0.396	0.125	0.1	
550	切削剥片	0.735	0.360	0.071	0.0		610	切削剥片	0.644	0.324	0.176	0.0	
551	切削剥片	0.641	0.372	0.131	0.0		611	切削剥片	0.497	0.467	0.146	0.0	
552	切削工程品	1.162	0.489	0.200	0.1		612	切削剥片	0.418	0.336	0.147	0.0	
553	形剥剥片	0.909	0.647	0.147	0.1		613	切削剥片	0.474	0.473	0.131	0.0	
554	切削剥片	0.500	0.344	0.129	0.0		614	切削剥片	0.366	0.356	0.209	0.0	
556	切削剥片	0.913	0.354	0.227	0.0		615	切削剥片	0.741	0.296	0.173	0.0	
557	切削剥片	0.522	0.369	0.201	0.0		616	切削剥片	0.600	0.342	0.204	0.0	
558	切削剥片	1.002	0.434	0.115	0.0		617	形剥剥片	0.722	0.620	0.238	0.1	
559	切削剥片	0.457	0.338	0.127	0.0		618	切削剥片	0.672	0.399	0.198	0.0	
560	切削剥片	0.582	0.527	0.157	0.0		619	切削剥片	0.568	0.555	0.116	0.0	
561	切削工程品	0.784	0.777	0.250	0.2		620	切削剥片	0.313	0.291	0.223	0.0	
562	切削剥片	0.932	0.524	0.162	0.0		621	切削剥片	0.592	0.309	0.123	0.0	
563	形剥剥片	0.787	0.617	0.200	0.1		622	切削剥片	0.404	0.378	0.097	0.0	
564	切削剥片	0.485	0.424	0.198	0.0		623	形剥剥片	0.666	0.493	0.177	0.1	
565	切削剥片	0.492	0.429	0.159	0.0		624	切削剥片	0.439	0.325	0.175	0.0	
566	切削剥片	0.398	0.335	0.174	0.0		625	切削剥片	0.523	0.279	0.078	0.0	
567	切削剥片	0.383	0.276	0.198	0.0		626	切削剥片	0.445	0.413	0.135	0.0	
568	切削工程品	1.023	0.795	0.210	0.3		627	形剥剥片	1.099	0.651	0.223	0.3	
569	切削剥片	0.593	0.335	0.155	0.0		628	切削剥片	0.465	0.383	0.101	0.0	
570	形剥剥片	1.006	0.637	0.141	0.1		629	切削剥片	0.617	0.382	0.076	0.0	
571	切削剥片	0.535	0.309	0.135	0.0		630	切削剥片	0.503	0.390	0.077	0.0	
572	形剥剥片	0.813	0.689	0.096	0.1		631	切削工程品	0.529	0.450	0.302	0.1	
573	形剥剥片	1.139	0.751	0.181	0.2		632	切削剥片	0.499	0.400	0.229	0.0	
574	形剥剥片	0.974	0.634	0.248	0.2		633	切削剥片	0.345	0.294	0.230	0.0	

番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
634	切削副片	0.466	0.346	0.102	0.0		692	形割副片	1.829	1.009	0.545	1.0	
635	形割副片	1.612	0.626	0.246	0.4		693	形割副片	0.719	0.586	0.156	0.2	
636	切削副片	0.660	0.353	0.218	0.0		694	形割副片	0.687	0.585	0.203	0.1	
637	切削副片	0.378	0.373	0.175	0.0		695	切削副片	0.648	0.249	0.126	0.0	
638	切削副片	0.441	0.251	0.161	0.0		696	形割副片	1.147	0.425	0.248	0.2	
639	切削副片	0.440	0.273	0.174	0.0		697	形割副片	0.764	0.406	0.197	0.1	
640	切削副片	0.621	0.381	0.191	0.0		698	形割副片	0.682	0.477	0.219	0.1	
641	切削副片	0.738	0.384	0.074	0.0		699	形割副片	0.872	0.849	0.197	0.2	
642	切削副片	0.388	0.341	0.100	0.0		700	切削副片	0.700	0.209	0.114	0.0	
643	切削副片	0.393	0.320	0.134	0.0		701	切削工程品	0.716	0.485	0.332	0.2	
644	切削副片	0.631	0.279	0.182	0.0		702	形割副片	0.668	0.378	0.261	0.1	
645	切削副片	0.535	0.322	0.123	0.0		703	形割副片	0.761	0.428	0.190	0.1	
646	切削工程品	0.620	0.326	0.164	0.0		704	切削工程品	0.735	0.566	0.131	0.0	
647	切削副片	0.408	0.356	0.068	0.0		705	形割副片	0.642	0.415	0.282	0.1	
648	形割副片	0.884	0.370	0.190	0.1		706	切削副片	0.486	0.286	0.136	0.0	
649	形割副片	0.686	0.572	0.159	0.1		707	切削工程品	0.793	0.309	0.234	0.1	
650	切削副片	0.553	0.280	0.155	0.0		708	形割副片	0.904	0.551	0.221	0.2	
651	形割副片	0.856	0.327	0.194	0.1		709	形割副片	0.898	0.426	0.162	0.1	
652	切削工程品	0.652	0.327	0.281	0.0		710	形割副片	1.096	0.772	0.283	0.3	
653	形割副片	0.639	0.315	0.276	0.1		711	切削副片	0.721	0.240	0.137	0.0	
654	切削副片	0.588	0.484	0.088	0.0		712	形割副片	0.948	0.691	0.210	0.2	
655	切削副片	0.492	0.337	0.283	0.0		713	形割副片	0.832	0.451	0.136	0.1	
656	形割副片	1.192	0.514	0.228	0.2		714	切削副片	0.464	0.409	0.131	0.0	
657	切削副片	0.405	0.245	0.191	0.0		715	形割副片	0.970	0.903	0.291	0.4	
658	切削工程品	0.735	0.613	0.288	0.2		716	切削副片	0.381	0.261	0.121	0.0	
659	切削工程品	1.617	0.596	0.174	0.3		717	切削副片	0.436	0.408	0.268	0.0	
660	切削副片	0.632	0.344	0.129	0.0		718	形割副片	0.756	0.442	0.156	0.1	
661	切削副片	0.417	0.284	0.165	0.0		719	形割副片	0.926	0.730	0.323	0.3	
662	切削副片	0.510	0.430	0.313	0.0		720	切削副片	0.465	0.242	0.329	0.0	
663	形割副片	0.915	0.436	0.196	0.1		721	切削副片	0.421	0.262	0.222	0.0	
664	切削副片	0.500	0.411	0.115	0.0		722	形割副片	1.183	0.621	0.379	0.4	
665	切削工程品	0.940	0.468	0.179	0.1		723	切削工程品	1.032	0.632	0.182	0.3	
666	切削副片	0.579	0.337	0.152	0.0		724	切削副片	0.916	0.454	0.127	0.0	
667	切削副片	0.339	0.242	0.078	0.0		725	形割副片	0.823	0.691	0.252	0.2	
668	切削副片	0.612	0.321	0.110	0.0		726	切削工程品	0.811	0.519	0.265	0.2	
669	切削副片	0.523	0.330	0.177	0.0		727	形割副片	0.878	0.511	0.208	0.1	
670	切削副片	0.559	0.291	0.164	0.0		728	切削副片	0.560	0.386	0.190	0.0	
671	切削工程品	0.604	0.301	0.161	0.0		729	切削副片	0.508	0.354	0.144	0.0	
672	切削副片	0.466	0.237	0.115	0.0		730	形割副片	1.156	0.806	0.463	0.7	
673	切削副片	0.559	0.337	0.154	0.0		731	形割副片	1.292	0.883	0.358	0.5	
674	切削副片	0.620	0.387	0.238	0.0		732	切削副片	0.686	0.366	0.168	0.0	
675	切削副片	0.560	0.407	0.280	0.0		733	形割副片	1.263	0.568	0.139	0.2	
676	切削副片	0.490	0.305	0.168	0.0		734	切削副片	0.488	0.369	0.193	0.0	
677	形割副片	0.830	0.499	0.204	0.1		735	形割副片	0.866	0.502	0.293	0.2	
678	形割副片	0.792	0.493	0.185	0.1		736	切削副片	0.496	0.371	0.062	0.0	
679	切削副片	0.798	0.387	0.175	0.0		737	形割副片	0.453	0.424	0.267	0.1	
680	形割副片	0.620	0.519	0.200	0.1		739	切削副片	0.606	0.274	0.150	0.0	
681	切削副片	0.480	0.409	0.177	0.0		740	切削副片	0.393	0.384	0.144	0.0	
682	形割副片	0.657	0.460	0.165	0.1		741	形割副片	0.740	0.548	0.176	0.1	
683	切削副片	0.462	0.414	0.142	0.0		742	切削副片	0.661	0.262	0.171	0.0	
684	切削副片	0.697	0.310	0.110	0.0		743	切削副片	0.501	0.377	0.226	0.0	
685	切削副片	0.418	0.383	0.088	0.0		744	切削副片	0.569	0.293	0.229	0.0	
686	切削副片	0.441	0.340	0.157	0.0		745	形割副片	0.607	0.566	0.165	0.1	
688	切削副片	0.306	0.262	0.091	0.0		746	切削副片	0.558	0.293	0.075	0.0	
689	形割副片	0.685	0.422	0.148	0.1		747	切削工程品	0.777	0.729	0.257	0.2	
690	形割副片	0.510	0.438	0.238	0.1		748	切削副片	0.644	0.386	0.119	0.0	
691	形割副片	0.754	0.634	0.182	0.1		749	切削工程品	0.510	0.356	0.153	0.0	

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
750	切削剥片	0.494	0.432	0.125	0.0		781	形削剥片	1.035	0.320	0.182	0.1	
751	切削剥片	0.514	0.254	0.251	0.0		782	切削剥片	0.360	0.275	0.240	0.0	
752	切削剥片	0.638	0.485	0.155	0.0		783	切削剥片	0.660	0.393	0.167	0.0	
753	切削剥片	0.565	0.391	0.115	0.0		784	切削剥片	0.610	0.412	0.224	0.0	
754	切削剥片	0.664	0.414	0.103	0.0		785	切削剥片	0.707	0.308	0.165	0.0	
755	形削剥片	1.037	0.909	0.254	0.3		786	形削剥片	0.731	0.709	0.193	0.1	
756	形削剥片	0.893	0.882	0.168	0.2		787	形削剥片	1.124	0.598	0.270	0.3	
757	形削剥片	0.551	0.412	0.205	0.1		788	形削剥片	1.253	0.986	0.342	0.3	
758	形削剥片	0.818	0.434	0.235	0.1		789	切削剥片	0.590	0.323	0.217	0.0	
759	形削剥片	0.809	0.541	0.194	0.1		790	形削剥片	0.726	0.566	0.338	0.2	
760	切削剥片	0.513	0.500	0.224	0.0		791	切削剥片	0.588	0.312	0.162	0.0	
761	形削剥片	0.941	0.564	0.196	0.1		792	形削剥片	1.153	0.590	0.303	0.2	
762	切削剥片	0.543	0.449	0.097	0.0		793	切削剥片	0.537	0.290	0.198	0.0	
763	切削剥片	0.538	0.292	0.181	0.0		794	切削剥片	0.513	0.393	0.158	0.0	
764	切削剥片	0.686	0.554	0.197	0.1		795	形削剥片	1.305	0.808	0.308	0.3	
765	切削剥片	0.437	0.344	0.304	0.0		796	形削剥片	1.068	0.407	0.211	0.1	
766	切削剥片	0.499	0.302	0.229	0.0		797	形削剥片	1.079	0.594	0.284	0.2	
767	切削剥片	0.720	0.404	0.184	0.0		798	形削剥片	0.609	0.567	0.230	0.1	
768	切削剥片	0.576	0.424	0.168	0.0		799	形削剥片	0.906	0.542	0.153	0.1	
769	形削剥片	0.879	0.586	0.144	0.1		800	切削剥片	1.856	0.930	0.352	0.5	
770	形削剥片	0.783	0.496	0.227	0.1		801	切削剥片	0.878	0.436	0.165	0.0	
771	切削剥片	0.760	0.339	0.342	0.1		802	切削剥片	0.530	0.391	0.167	0.0	
772	切削剥片	0.478	0.367	0.194	0.0		803	切削剥片	0.612	0.264	0.129	0.0	
773	形削剥片	0.741	0.384	0.240	0.1		804	切削剥片	0.980	0.351	0.141	0.0	
774	切削剥片	0.862	0.425	0.146	0.0		805	形削剥片	1.182	0.579	0.221	0.1	
775	切削剥片	0.631	0.321	0.090	0.0		806	切削剥片	0.857	0.658	0.300	0.2	
776	切削剥片	0.766	0.525	0.086	0.0		807	切削剥片	0.394	0.392	0.202	0.0	
777	切削剥片	0.723	0.410	0.161	0.0		808	切削剥片	0.430	0.257	0.218	0.0	
778	切削剥片	0.704	0.323	0.248	0.0		809	切削剥片	0.371	0.345	0.179	0.0	
779	切削剥片	0.513	0.460	0.081	0.0		810	切削剥片	0.492	0.452	0.181	0.0	
780	形削剥片	0.697	0.617	0.224	0.1								

0.35~0.40m、床面からの深さ0.11~0.33mほどの小さな Pit6・Pit7・Pit8 に玉作りに伴うロクロビットなどの機能が想定される。これらのビットに近接して3の砥石が出土しているが、穿孔具など玉作りを実態づける遺物は出土していない。

第8号住居跡 (第36図)

A・B-15グリッドに位置し、南半部は調査区域外にある。

平面形態は方形で、東西6.07m、東西軸方位はN-53°-Eを指す。南北長は最大5.38mを測る。確認面からの深さは0.15mmと深い。覆土は自然堆積で、最下層には炭化物が多く含まれている。

主柱穴やカマド・炉などの厨房施設、貯蔵穴・壁溝などの諸施設は確認されていない。

遺物は出土量が少ないが、概ね床面直上付近からの出土している。坏類には、外反口縁・内嚙口

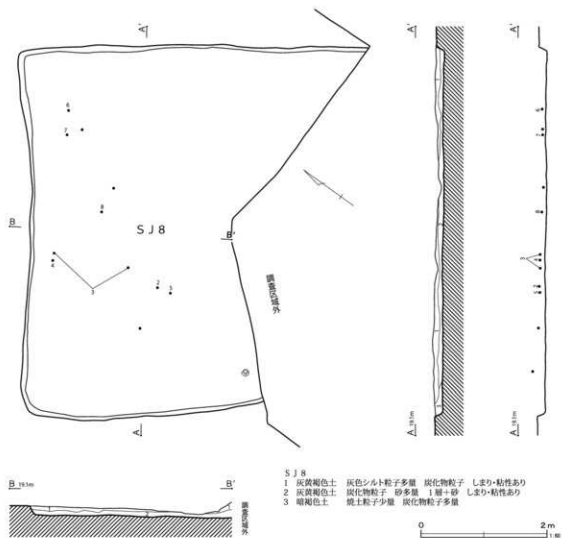
縁・坏身模倣がある。高坏は外反口縁の腕が載せられたもの、台部の低い小型の台付甕も含まれている。坏類の器形等から、銭塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。

第9号住居跡 (第37図)

A-11グリッドに位置し、重複する第5号住居跡よりも古い。

平面形態は方形であるが、検出された各辺は若干丸みをもつ。南北長5.60m、南北軸方位はN-32°-Eを指す。東西方向には4.2mが検出され、確認面からの深さは0.16~0.20mを測る。覆土は自然堆積で、壁際から堆積した様子が看取できる。床面に炭化物が広がり、南壁に沿って炭化した木材も検出されていることから、積極的にではないが、焼失住居であった可能性を記しておく。

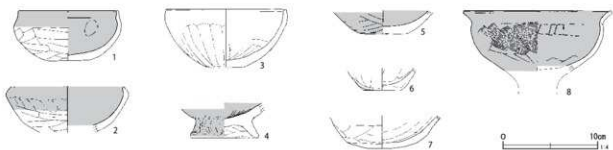
主柱穴は不明である。Pit1 (径0.57m・床面か



SJB

- 1 灰黄褐色土 灰色シルト粒子多量 炭化物粒子 しまり・粘性あり
 2 灰黄褐色土 炭化物粒子 砂多量 1層+砂 しまり・粘性あり
 3 暗褐色土 焼土粒子少量 炭化物粒子多量

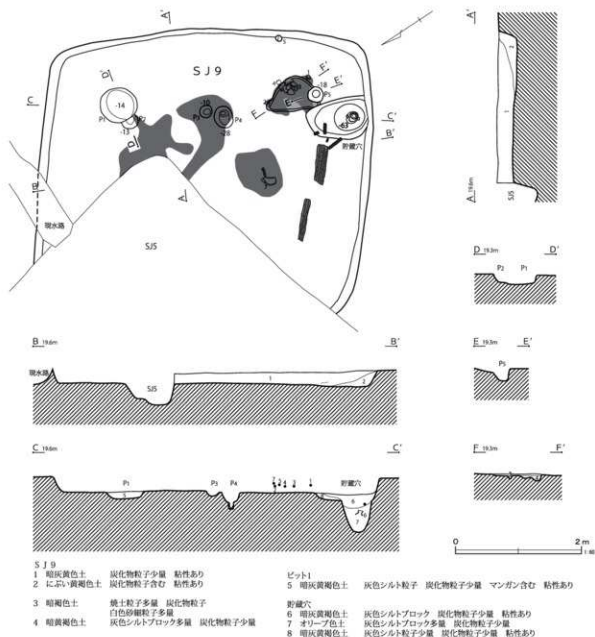
0 2m



第36図 第8号住居跡・出土遺物

第11表 第8号住居跡出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	10.6	5.3	4.5	ABCDEHI	90	普通	にぶ・橙	外反口縁 平底 赤彩		52-6
2	土師器	坏	(12.0)	4.8		ACDHIK	20	普通	橙	坏身模倣 赤彩 No.3		
3	土師器	椀	(12.5)	6.1	4.0	CEHIK	70	普通	橙	内堀口縁 平底 No.4-6		52-7
4	土師器	台付椀		3.7	7.1	AHIK	80	普通	にぶ・橙	赤彩 内面放射状暗文 No.7		
5	土師器	鉢		2.5	5.1	A EHIK	45	普通	にぶ・橙	平底 赤彩 No.2		
6	土師器	鉢		2.3	4.0	A D EHI	50	普通	明赤褐	平底 二次的被熱 No.11		
7	土師器	鉢		3.5	(7.7)	A C EHI	70	普通	にぶ・橙	底部ヘラ削り 二次的被熱 No.10		
8	土師器	高坏	(15.6)	6.4		A C E I K	20	普通	にぶ・橙	椀 赤彩 No.5		



第37図 第9号住居跡

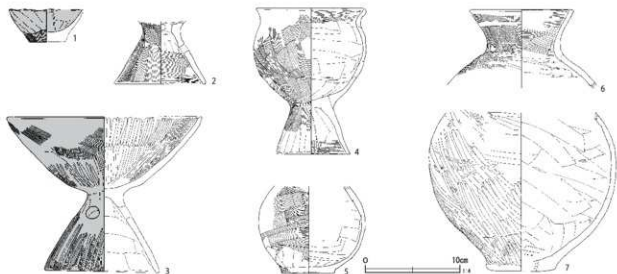
らの深さ0.14m) が候補となるが、対応する他のピットがない。また Pit2・Pit3か Pit4・Pit5 も候補となるが、径0.20~0.35m・床面からの深さ0.10m~0.28mと主柱穴としては心もとない規模である。

炉は確認されていないが、南東隅付近から長径0.86m×短径0.57m×床面からの深さ0.02~0.12mの範囲に焼土と炭化物の集中がみられ、地床炉の可能性はある。しかし、きわめて壁によった位置

状況から、炉としても副次的なものと推定される。

貯蔵穴は、南壁際に付設されている。調査時には Pit6 としたが、形状・規模・炉と推定される焼土・炭化物集中地点との位置関係から、貯蔵穴と推定した。上面が広く浅く、南半部が深く掘り込まれた形状をしている。長径0.96m×短径0.71m×床面からの深さ0.63mを測る。内部から壺上半(6) が出土している。

壁溝は、検出されていない。



第38図 第9号住居跡出土遺物

第12表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	小型鉢	8.0	3.4	3.8	CEHIK	95	普通	にぶい黄緑	直口縁 平底 赤彩 No2		52-8
2	土師器	器台		6.7	9.7	ACEHIJK	80	普通	にぶい橙	受部孔がずれる 脚部円孔3 二次的被熱 No3		
3	土師器	高坏	20.6	16.4	11.7	EHI	90	普通	にぶい橙	大型 脚円孔3 赤彩 二次的被熱 No1		53-1
4	土師器	小型台付甕 (11.4)		15.4	7.6	EHIJ	70	普通	橙	単口縁 煮沸痕 煤付着 No4-A11Gr.No11		53-2
5	土師器	小型壺		9.2	5.7	ADEHIJ	30	普通	にぶい橙	平底 No5		53-3
6	土師器	壺	(10.6)	8.3		ABEHIJK	80	普通	橙	単口縁 二次的被熱 貯蔵穴No1		53-4
7	土師器	壺		16.7	7.2	ACIK	40	普通	にぶい黄緑	二次的被熱 No6		53-5

遺物は出土量が少なく、床面から僅かに浮いた状態で検出されたものが多い。焼土・炭化物の集中地点から大型坏+ハの字脚の高坏(3)・小型台付甕(4)、住居中央部から壺(7)、東壁際から小型壺(5)が出土している。銭塚・城教Ⅱ期、反町Ⅱ-1期に相当すると思われる。

第10号住居跡 (第39図)

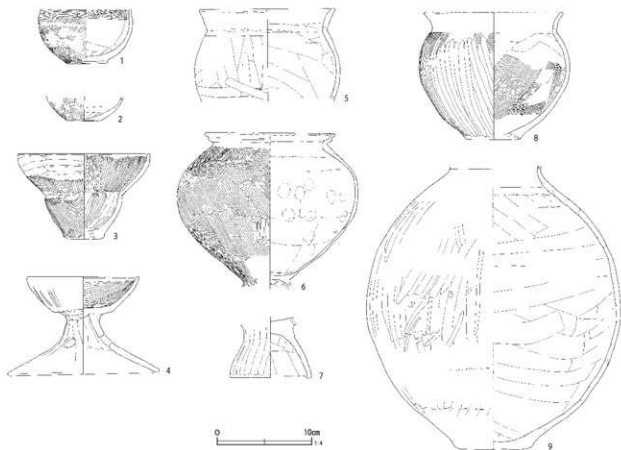
A-10・11グリッドに位置する。北東部が調査区域外にあり、現代水路によって一部が削平されていた。東半部が第5号住居跡、北東隅付近が第7号住居跡、南西隅付近が第8号土壌と重複し、これらの遺構はすべて、第10号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、主軸長5.14m、主軸方位はN-35°-Eである。第5号住居跡に削平された東西幅は3.45mが現存し、およそ4~5mほどの

正方形に近い平面形態と推定される。確認面からの深さは0.22~0.27mである。覆土の堆積状況の観察からは、壁際から埋没していった自然堆積した様子が看取できる。

厨房施設は地床がで、中央からやや北側に寄った位置にある。上半部は現代水路によって攪乱されているが、床面付近に火床面が検出されている。火床面は、径0.32~0.33mほどの円形範囲が焼土化し、火床面下0.05mほどまで焼土化が達している。恒常的に火処として使用されていたことが推測される。

貯蔵穴は、炉に対向する南壁に沿って付設されている。平面形態は壁に沿った方向に長軸をもつ鶏卵形である。長軸1.38m×短軸0.91m、床面からの深さ0.36mを測る。断面形は逆台形状で、底面の平坦部は狭い。覆土の上層部には板状の木材



第40図 第10号住居跡出土遺物

から、まとめて出土している。北壁際の一帯は供膳具の椀(1・2)・高環(4)と煮沸具の台付甕(5)がある。貯蔵穴付近では貯蔵具の壺(9)であり、貯蔵穴を付加する貯蔵容器として用いられていたものであろう。高環は東海西部系の小型高環、胴部上半部に最大径を有するS字口縁台付甕などから、銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-3段階に相当するものと思われる。

第11号住居跡 (第41図)

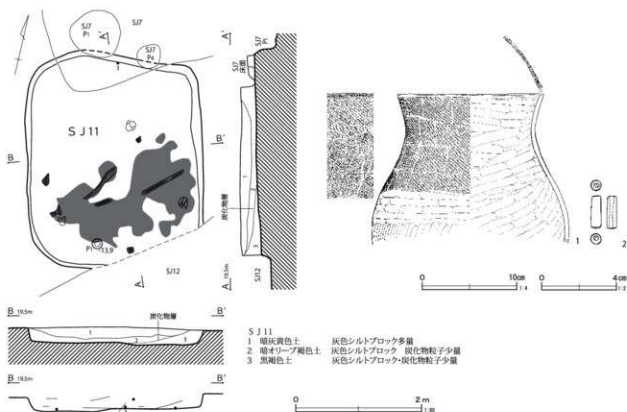
A-10グリッドに位置し、重複する第7・12号住居跡よりも古い。

平面形態は方形で、隅の丸みが強い。長軸長3.50m・短軸長2.78mを測る。長軸方位はN-13°-Wを指す。確認面からの深さは0.23~0.25mで、比較的深い。覆土は自然堆積で、2層と3層の層間に薄い炭化物層が形成されている。また

点数は少ないが、炭化した木材が床直付近から検出されている。

主柱穴や炉・カマドの厨房施設、貯蔵穴・壁溝等の諸施設は確認されていない。唯一、南壁付近から Pit1 がみついている。径0.15m×床面からの深さ0.139mほどの小規模なものである。用途は不明であるが、壁際という位置関係から、出入口に関わる機能が想定される。

遺物は、極めて少ない。1は吉ヶ谷系の甕で、外面は丁寧なナデによって整形した後、口唇部から胴部上半まで丁寧にナデ整形した後、単節RLが隙間を空けることなく4段、反時計回りに上から下へ施文される。原体の端部は他縛されている。また、口唇上半部には縄文原体を斜めに押し当てた痕跡が確認できる。内面は丁寧なナデによって仕上げられている。反町Ⅰ-5段階に相当する。



第41図 第11号住居跡・出土遺物

第14表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	古ッ谷	甕	(15.2)	15.9		E G	40	良好	暗褐色	口縁部～胴部上半に単節RL、口縁部端縄文原体押圧	54-5	

2は碧玉製の管玉である。北壁際の床面直上から出土した。長さ1.68cm・幅0.49～0.53cm、重さ0.8gを測る。両面穿孔され、孔径0.28～0.30cmである。(No.4/図版54-6)

第12号住居跡 (第42図)

A-10・11グリッドに位置し、南西隅付近は調査区域外にある。第11号住居跡・第8号土塼と重複する。覆土の堆積状況や出土遺物の特徴から、第11号住居跡よりも新しく、第8号土塼よりも先行する。

平面形態は方形で、南北長5.57m、東西長5.12m測り、南北軸方位はN-22°-Wを指す。確認面からの深さは0.38～0.42mほどである。覆土は自然堆積で、壁際から埋没していった状況が観察できる。

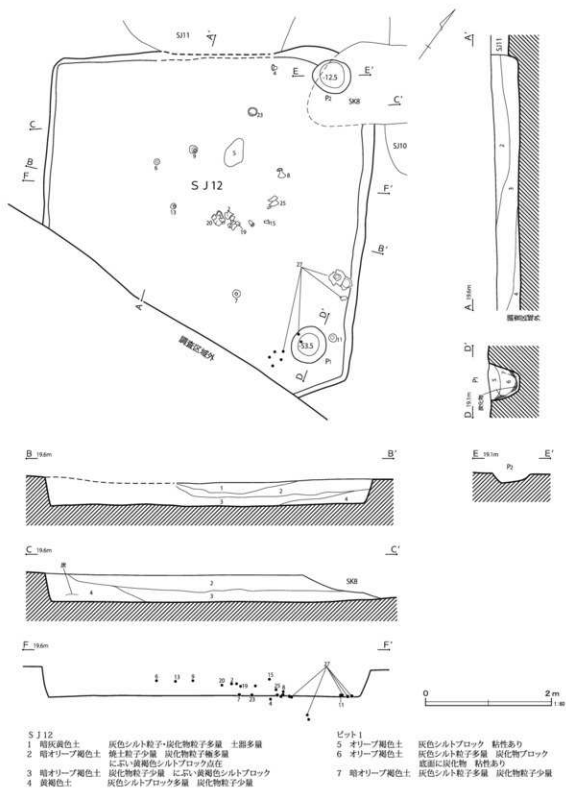
北東隅と南東隅からピットが検出されている。

位置的な条件から、主柱穴の可能性はある。規模は南側のPit1が長径0.60m・短径0.55m・床面からの深さ0.53mで、床面・壁面際には炭化物が薄く堆積している。一方、北側のPit2は長径0.60m・短径0.53m・床面からの深さ0.12mである。平面規模同等であるが、床面からの深さが異なる。また、これらに対応する北西隅にピットが検出されていない。

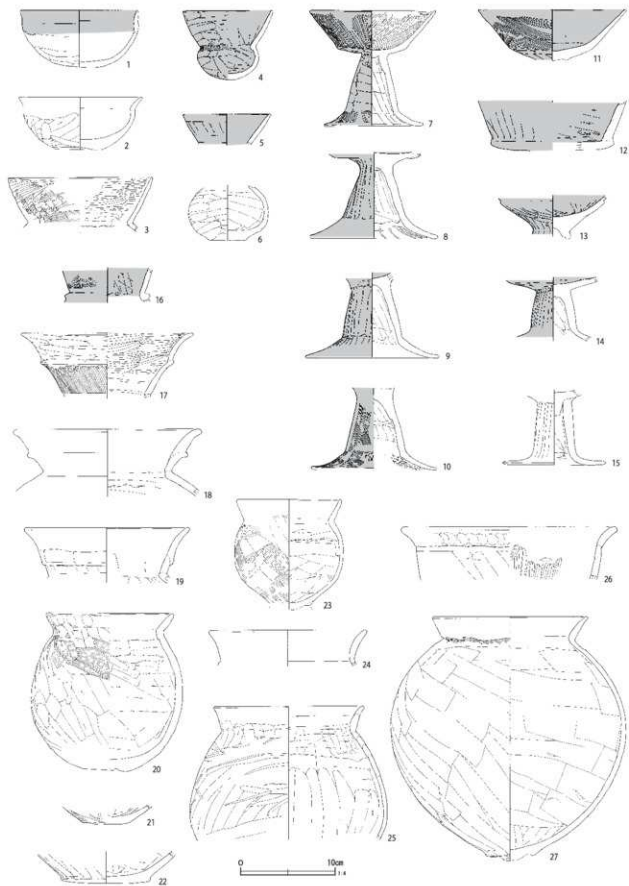
炉・貯蔵穴・壁溝等の施設はみつからない。

遺物の分布は、床面からやや浮いた状態の住居中央部と、床面直上の南東隅のPit1付近に分割される。

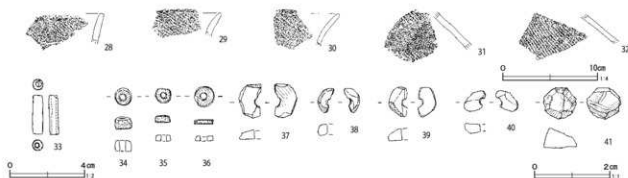
環類は口縁部が小さく外反する鉢タイプのもので、身が深い。小型丸底壺や有段口縁壺が残存する。有段丸曲脚の高環は、稜部がしっかりとしたもので、供膳具の主体となっている。甕には長



第42図 第12号住居跡



第43图 第12号住居跡出土遺物 (1)



第44図 第12号住居跡出土遺物(2)

第15表 第12号住居跡出土遺物観察表(第43・44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	椀	12.4	6.0		ACEIJK	60	普通	橙	外反口縁 平底化 赤彩 二次の被熱		55-1
2	土師器	椀	13.2	5.5	5.0	ACDEHIJ	80	普通	橙	外反口縁 二次の被熱 №13		55-2
3	土師器	壺	(15.2)	5.9		ACEHI	10	普通	にじみ・橙	赤彩?		
4	土師器	埴	(9.4)	7.3		ACEHIK	90	普通	橙	外面二次の被熱 №9		55-3
5	土師器	埴	9.2	3.3		EHI	60	普通	浅黄橙	赤彩		
6	土師器	埴		5.8	4.0	ABCEHIJ	90	普通	橙	赤彩? №1		55-4
7	土師器	高坏	(13.3)	12.2	10.3	ACEHIK	70	普通	橙	有稜坏屈折脚 赤彩 支脚転用痕 №16-Pit1		55-5
8	土師器	高坏		9.1	13.6	ACEHIK	75	普通	橙	有稜坏屈折脚 外面赤彩 放射状の線刻 №7-A10 Gr №8		
9	土師器	高坏		9.8	14.0	CEH	80	普通	橙	屈折脚 外面赤彩 支脚転用痕 №3-A9~12Gr		
10	土師器	高坏		8.7	13.4	EHIJ	40	普通	橙	屈折脚 外面赤彩 SK8と接合		
11	土師器	高坏	15.8	5.4		ABCHI	95	普通	橙	有稜坏 赤彩 支脚転用痕 №22		
12	土師器	高坏		5.2		CEIJK	10	普通	にじみ・橙	有稜坏 赤彩		
13	土師器	高坏		4.4		ACEHIK	90	普通	明赤褐	有稜坏 赤彩 №2		
14	土師器	高坏		6.7		ACEHIJ	70	普通	明赤褐	有稜坏屈折脚 外面赤彩		
15	土師器	高坏		8.0	(10.3)	ACHI	50	普通	浅黄橙	屈折脚 №4		
16	土師器	壺		3.7		AEHIK	10	普通	にじみ・橙	頸部突帯 赤彩 A9~12Gr一括		
17	土師器	壺	(18.1)	7.1		AEH	30	普通	橙	有段口縁(擬口縁状)		55-6
18	土師器	壺	(19.5)	7.2		ACDEHI	20	普通	明赤褐	有段口縁(擬口縁状) 二次の被熱 A9~12Gr		
19	土師器	壺	17.4	5.9		ACDEHIJ	80	普通	橙	有段口縁 二次の被熱 №15		
20	土師器	小型罌	13.1	16.6	4.8	ABDEHIJK	80	普通	にじみ・赤褐	単口縁 平底 二次の被熱 №12-13		55-7
21	土師器	罌		2.0	5.0	ACEHIK	80	普通	にじみ・黄橙	平底 煮沸痕		
22	土師器	罌		3.4	9.4	EHI	50	普通	橙	平底 煮沸痕		
23	土師器	小型台付罌	(11.0)	11.6		ABCEHI	45	普通	にじみ・橙	台部欠損 煮沸痕 №8		56-1
24	土師器	罌	16.2	3.8		ACEHIJK	60	普通	にじみ・橙	単口縁		
25	土師器	罌	(15.6)	14.2		BCEHIK	40	普通	にじみ・橙	単口縁 煮沸痕 煤付着 №6		56-2
26	土師器	甗	(22.5)	5.6		AEH	10	普通	橙	口縁部外反 器頭正痕		
27	土師器	台付罌	16.2	26.2		EH	40	普通	にじみ・黄橙	単口縁 台部欠損 煮沸痕 №10-11-16-17 Pit1№1		56-3
28	吉ヶ谷	罌		3.2		EHI	5	普通	浅黄橙	単節 RL		
29	吉ヶ谷	罌		2.5		AEHK	5	普通	にじみ・褐	単節 RL		
30	吉ヶ谷	罌		3.5		AHK	5	普通	にじみ・褐	単節 RL		
31	吉ヶ谷	壺		5.2		CE	5	普通	浅黄橙	単節 RL		
32	吉ヶ谷	壺		3.7		AEH	5	普通	浅黄橙	単節 RL		
番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)		状態		出土位置/備考	図版	
33	滑石	管玉	2.120	0.550	0.550	0.9		完成品			107-1	
34	滑石	白玉	0.448	0.442	0.329	0.1		完成品			107-1	
35	滑石	白玉	0.432	0.401	0.190	0.0		完成品			107-1	
36	滑石	白玉	0.542	0.541	0.117	0.1		完成品		正面左下欠損	107-1	
37	滑石	白玉	0.916	0.578	0.235	0.2		穿孔時破損品			107-1	
38	滑石	白玉	0.680	0.347	0.315	0.1		穿孔時破損品			107-1	
39	滑石	白玉	0.783	0.463	0.316	0.2		穿孔時破損品			107-1	
40	滑石	白玉	0.668	0.398	0.323	0.1		穿孔時破損品			107-1	
41	滑石	白玉	0.850	0.810	0.480	0.5		切削工程品		一括 未穿孔	107-1	

第16表 第12号住居跡出土滑石剥片一覽表

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
3	切削工程品	0.780	0.640	0.180	0.1	一括	64	形剥剥片	0.796	0.563	0.265	0.2	
4	形剥剥片	1.021	0.793	0.268	0.3		65	形剥剥片	0.765	0.580	0.261	0.1	
5	形剥剥片	0.886	0.542	0.340	0.2		67	形剥剥片	0.939	0.488	0.157	0.1	
6	形剥剥片	0.946	0.589	0.239	0.2		68	形剥剥片	0.859	0.805	0.293	0.2	
7	形剥剥片	2.251	0.665	0.336	0.4		69	形剥剥片	0.825	0.546	0.160	0.1	
8	切削工程品	0.831	0.726	0.237	0.3		70	形剥剥片	0.801	0.554	0.237	0.1	
9	切削剥片	0.383	0.313	0.103	0.0		71	形剥剥片	0.834	0.518	0.216	0.1	
10	切削剥片	0.324	0.239	0.065	0.0		72	形剥剥片	0.952	0.582	0.186	0.1	
11	形剥剥片	1.345	0.645	0.220	0.3		73	形剥剥片	0.623	0.568	0.266	0.1	
12	切削剥片	0.682	0.413	0.176	0.0		74	形剥剥片	1.087	0.477	0.290	0.2	
13	切削剥片	0.520	0.330	0.158	0.0		75	形剥剥片	0.787	0.610	0.184	0.1	
14	形剥剥片	0.977	0.640	0.306	0.2		76	形剥剥片	0.710	0.387	0.182	0.1	
15	形剥剥片	1.538	0.535	0.420	0.5		77	切削剥片	0.632	0.437	0.192	0.0	
16	形剥剥片	0.751	0.595	0.187	0.1		78	形剥剥片	1.013	0.657	0.121	0.1	
17	形剥剥片	0.741	0.496	0.178	0.2		79	切削工程品	0.891	0.784	0.437	0.3	
18	切削剥片	0.492	0.223	0.168	0.0		80	形剥剥片	0.733	0.368	0.245	0.1	
19	切削剥片	0.928	0.375	0.148	0.0		81	切削剥片	0.963	0.563	0.117	0.0	
20	形剥剥片	0.573	0.442	0.198	0.1		82	形剥剥片	0.690	0.415	0.238	0.1	
21	形剥剥片	0.776	0.433	0.207	0.1		83	形剥剥片	0.805	0.789	0.301	0.3	
22	切削剥片	0.455	0.446	0.150	0.0		84	切削剥片	0.563	0.502	0.061	0.0	
23	形剥剥片	0.782	0.412	0.136	0.1		85	形剥剥片	0.708	0.691	0.372	0.2	
25	切削剥片	0.459	0.405	0.092	0.0		86	切削剥片	0.548	0.409	0.094	0.0	
26	形剥剥片	0.957	0.625	0.366	0.3		87	切削剥片	0.399	0.285	0.101	0.0	
27	形剥剥片	1.064	0.619	0.122	0.2		88	切削剥片	0.643	0.449	0.177	0.0	
28	形剥剥片	0.946	0.524	0.237	0.1		89	切削剥片	0.505	0.446	0.114	0.0	
29	形剥剥片	1.014	0.844	0.232	0.2		90	切削剥片	0.517	0.331	0.226	0.0	
30	切削工程品	0.964	0.744	0.247	0.3		91	切削剥片	0.583	0.434	0.086	0.0	
31	形剥剥片	0.740	0.523	0.162	0.1		92	切削剥片	0.507	0.291	0.100	0.0	
32	形剥剥片	0.762	0.680	0.335	0.3		93	切削剥片	0.418	0.327	0.121	0.0	
33	形剥剥片	0.691	0.577	0.244	0.2		94	形剥剥片	0.659	0.442	0.284	0.1	
34	形剥剥片	0.936	0.758	0.182	0.2		95	形剥剥片	0.652	0.552	0.215	0.1	
35	切削工程品	0.646	0.621	0.318	0.2		96	切削剥片	0.589	0.461	0.145	0.0	
36	形剥剥片	0.978	0.719	0.265	0.3		97	形剥剥片	1.393	1.001	0.543	1.0	
37	切削剥片	0.518	0.226	0.259	0.0		98	切削剥片	0.510	0.367	0.130	0.0	
38	切削剥片	0.559	0.446	0.151	0.0		99	切削剥片	0.471	0.289	0.137	0.0	
40	切削剥片	0.647	0.335	0.114	0.0		100	形剥剥片	0.743	0.551	0.162	0.1	
41	切削剥片	0.411	0.276	0.303	0.0		101	切削剥片	0.460	0.400	0.171	0.0	
42	切削剥片	0.528	0.254	0.077	0.0		102	形剥剥片	0.859	0.623	0.165	0.1	
45	切削剥片	0.588	0.428	0.174	0.0		103	切削剥片	0.400	0.239	0.097	0.0	
46	切削剥片	0.567	0.399	0.080	0.0		104	切削剥片	0.930	0.304	0.192	0.0	
47	切削剥片	0.570	0.382	0.181	0.0		105	切削剥片	0.566	0.412	0.139	0.0	
48	形剥剥片	0.542	0.454	0.192	0.1		106	切削工程品	0.870	0.621	0.447	0.4	
50	切削剥片	0.565	0.421	0.138	0.0		107	切削剥片	0.610	0.358	0.220	0.0	
51	切削剥片	0.556	0.402	0.150	0.0		108	切削剥片	0.579	0.476	0.157	0.0	
52	形剥剥片	0.794	0.375	0.182	0.1		109	切削剥片	0.735	0.390	0.098	0.0	
53	形剥剥片	0.577	0.460	0.225	0.1		110	切削剥片	0.500	0.312	0.082	0.0	
54	形剥剥片	0.930	0.619	0.082	0.1		111	切削剥片	0.583	0.489	0.156	0.0	
55	切削剥片	0.614	0.575	0.134	0.0		112	切削剥片	0.479	0.344	0.113	0.0	
56	形剥剥片	0.814	0.547	0.274	0.2		113	形剥剥片	0.719	0.455	0.303	0.1	
57	切削剥片	0.447	0.321	0.098	0.0		115	形剥剥片	0.862	0.687	0.086	0.1	
58	形剥剥片	0.658	0.480	0.175	0.1		116	形剥剥片	0.916	0.685	0.181	0.2	
59	切削剥片	0.468	0.438	0.073	0.0		117	形剥剥片	0.800	0.720	0.213	0.1	
60	形剥剥片	1.515	0.724	0.279	0.4		120	形剥剥片	1.199	0.618	0.158	0.2	
61	形剥剥片	0.729	0.399	0.319	0.1		121	切削剥片	0.504	0.390	0.211	0.0	
62	形剥剥片	1.215	0.779	0.331	0.3		122	切削剥片	0.674	0.378	0.106	0.0	
63	形剥剥片	0.868	0.812	0.316	0.3		123	切削剥片	0.484	0.329	0.121	0.0	

番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
124	切削剥片	0.754	0.422	0.163	0.0		139	形割剥片	0.810	0.580	0.215	0.1	
125	切削剥片	0.439	0.432	0.162	0.0		140	切削剥片	0.490	0.304	0.157	0.0	
126	切削剥片	0.668	0.257	0.176	0.0		142	形割剥片	0.672	0.632	0.164	0.1	
127	切削剥片	0.594	0.346	0.090	0.0		143	形割剥片	1.090	1.089	0.311	0.6	
128	切削剥片	0.550	0.366	0.145	0.0		144	切削剥片	0.449	0.322	0.068	0.0	
129	切削剥片	0.507	0.316	0.106	0.0		145	形割剥片	0.846	0.486	0.197	0.1	
130	切削剥片	0.457	0.325	0.094	0.0		146	切削剥片	0.407	0.296	0.074	0.0	
131	切削剥片	0.629	0.215	0.120	0.0		147	形割剥片	0.864	0.646	0.147	0.1	
132	切削剥片	0.447	0.336	0.206	0.0		149	形割剥片	1.339	1.014	0.264	0.5	
133	切削剥片	0.451	0.367	0.116	0.0		151	切削剥片	0.710	0.420	0.052	0.0	
134	切削剥片	0.389	0.389	0.171	0.0		152	切削剥片	0.463	0.434	0.116	0.0	
135	切削剥片	0.521	0.214	0.147	0.0		153	切削剥片	0.637	0.328	0.114	0.0	
136	切削剥片	0.481	0.325	0.237	0.0		154	切削剥片	0.499	0.345	0.195	0.0	
138	形割剥片	0.898	0.451	0.179	0.1								

胴化はみられず、小型品・大型品ともに台付装を含む。また吉ヶ谷系の破片も数点出土している。これらの要素から、銭塚・城敷Ⅲ期古段階に相当する。

33は滑石製の管玉である。長さ2.12cm・幅0.55cm、重さ0.9gを測る。両面穿孔が行われ、孔径は0.28cmである。

34～36は滑石製の白玉、37～41は製作段階の破損品である。37は穿孔後の破損品で、片面に研磨痕がみられる。38～40は穿孔時の破損品で、38・39の側面には形割り段階での加工痕が残る。41は穿孔前の切削工程品である。

このほかに滑石製品の製作途上の剥片が139点出土している(第16表)。残存する大きさ・形状等から、白玉製作工程の形割剥片・切削工程品・切削剥片に分類した。これらの遺物から、白玉製作にかかる工房機能が推定されるが、製作に伴う施設や工具等は発見されていない。

第13号住居跡 (第45図)

A-4・B-4・5グリッドに位置し、北側の直近には第4号溝跡(大溝)が流れる。南半部が調査区域外にあり、また確認調査のトレンチによって削平されているため、残存状態が極めて悪い。検出されたのは北東壁・北西壁の一部である。

平面形態は方形と推定され、検出された北東壁から一辺4.4m以上の住居跡となる。北東壁の方位はN-46°-Wを指す。確認面からの深さは

0.12～0.25mを測る。

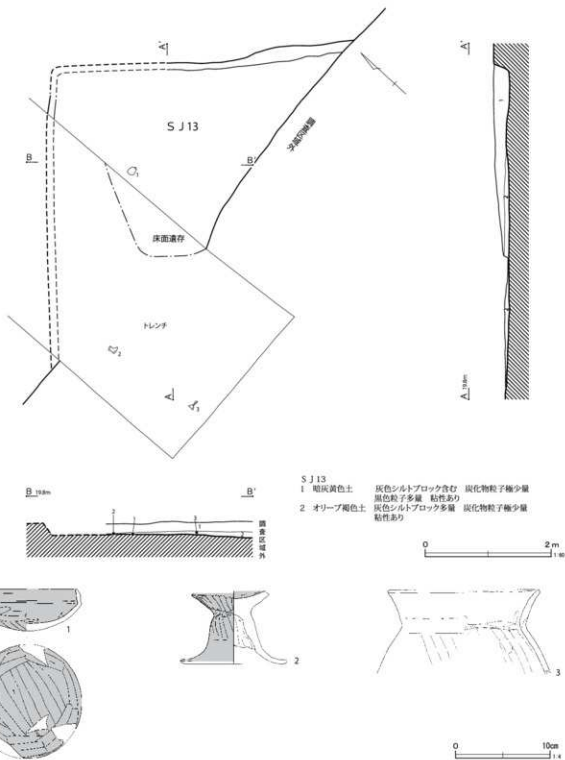
主柱穴・カマド・貯蔵穴・壁溝等の諸施設は確認されていない。遺物は赤彩された坏身模倣坏・有稜坏屈折脚高坏・長胴化がみられる甕が出土しており、銭塚・城敷Ⅳ期新段階に相当する。遺物の時期からはカマドが用いられている住居と推定され、確認調査によって削平された北西壁に付設されていた可能性が高い。

第14号住居跡 (第46図)

A・B-2・3グリッドに位置し、南西半部は調査区域外にある。出土遺物や覆土の堆積状況から、第14号住居跡よりも重複する第15号住居跡が新しく、第9号土壌は古い。

平面形態は方形で、一辺6.15mを測り、検出された北東壁の方位はN-40°-Wを指す。確認面からの深さは0.28～0.30mで、覆土は自然堆積である。床面には北西壁に沿って幅0.6mほど焼土が広がり、さらに住居の中央に向かって炭化物が広がっている。

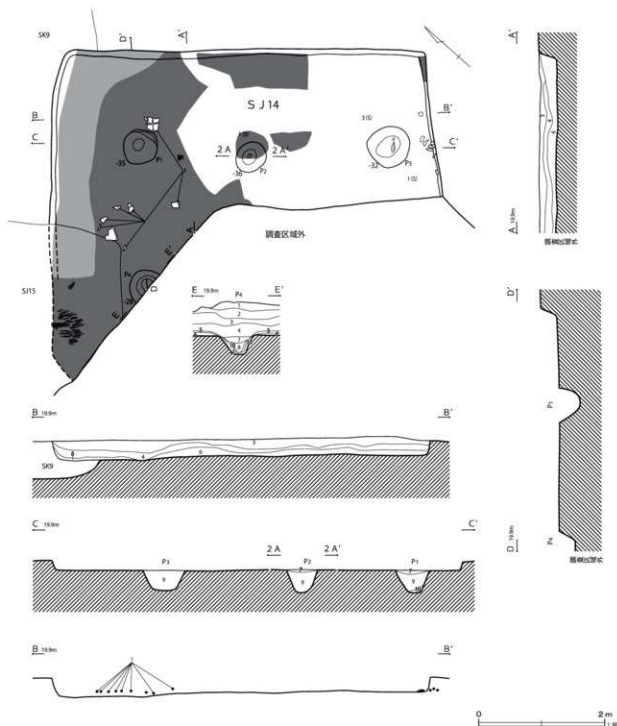
主柱穴は、第2号掘立建物跡として調査した4本のピットが相当する。本来は6本主柱穴の住居で、残る2本は調査区域外に位置する。平面規模は隅に位置するPit1・Pit3・Pit4が径0.6～0.66m、中間に位置するPit2は0.48mである。柱間距離は、南北方向のPit1-Pit2=1.80m、Pit2-Pit3=2.25m、東西方向のPit1-Pit4=2.25mを計測する。床面からの深さは0.28～0.36mほど



第45図 第13号住居跡・出土遺物

第17表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	10.4	4.4		A E H I K	80	普通	赤	坏身模倣 赤彩 No.1		56-4
2	土師器	高坏		7.7	11.3	A E H I K	80	普通	にぶ+橙 (有稜坏) 屈折脚 赤彩	No.2		
3	土師器	甕	(15.8)	9.0		A C D H I	20	普通	にぶ+橙	単口縁 煤付着	No.3	



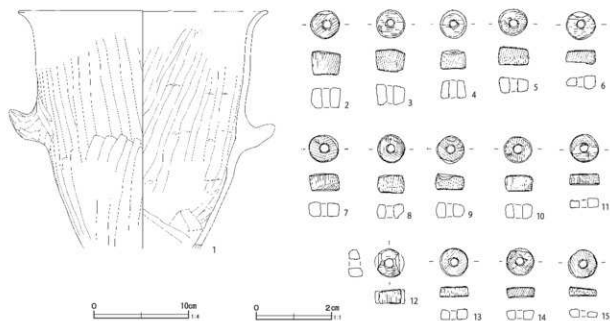
S J 14

- 1 新作土
 2 暗オリーブ褐色土 マンガン粒子 炭化物粒子・白色粒子少量
 3 黒褐色土 しまり・粘性あり
 マンガン粒子 灰色シルトブロック 白色粒子少量
 4 黒褐色土 しまり・粘性あり
 灰色シルトブロック多量 炭化物粒子小量
 5 黒色土 しまり・粘性あり
 炭化物粒子多量
 6 黄灰色土 黏床 灰色シルトブロック多量 焼土・炭化物粒子少量
 しまり・粘性あり

ビット1-4

- 7 黒褐色土 柱抜き取り前の埋没土 しまり・粘性あり
 柱抜き取り後の埋没土 灰色シルト粒子・炭化物粒子少量
 8 オリーブ黒色土 しまり・粘性あり
 9 オリーブ黒色土 しまり・粘性あり
 10 黒色土 柱廻り方の充填土 炭 炭化物粒子多量
 11 オリーブ黒色 灰色シルト粒子・炭化物粒子多量 しまり・粘性あり

第46図 第14号住居跡



第47図 第14号住居跡出土遺物

第18表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	甕	(25.8)	25.6		E H I	60	普通	浅黄橙	把手付	No1-3-4-5-6-7-8-9	56-5
番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	状態				出土位置 / 備考	図版
2	滑石	白玉	0.760	0.720	0.630	0.6	完成品			Pit1		107-1
3	滑石	白玉	0.720	0.680	0.610	0.5	完成品			Pit1		107-1
4	滑石	白玉	0.730	0.710	0.480	0.4	完成品			Pit1		107-1
5	滑石	白玉	0.720	0.650	0.490	0.4	完成品			Pit1		107-1
6	滑石	白玉	0.740	0.700	0.360	0.3	完成品			Pit1	正面上部欠損	107-1
7	滑石	白玉	0.750	0.720	0.480	0.5	完成品			Pit1		107-1
8	滑石	白玉	0.750	0.660	0.450	0.4	完成品			Pit1		107-1
9	滑石	白玉	0.730	0.710	0.440	0.4	完成品			Pit1		107-1
10	滑石	白玉	0.730	0.680	0.410	0.4	完成品			Pit1	裏面上部欠損	107-1
11	滑石	白玉	0.760	0.730	0.320	0.3	完成品			Pit1	裏面右上欠損	107-1
12	滑石	白玉	0.780	0.560	0.390	0.2	完成品			Pit1	左右側面欠損	107-1
13	滑石	白玉	0.740	0.730	0.280	0.3	完成品			Pit1		107-1
14	滑石	白玉	0.710	0.640	0.300	0.2	完成品			Pit1		107-1
15	滑石	白玉	0.740	0.730	0.210	0.2	完成品			Pit1		107-1

である。住居廃絶時に柱は抜き取られ、柱痕は確認されていない。底面付近には、意図的に埋没された炭化物層が形成されている。

カマド・炉などの厨房施設、貯蔵穴・壁溝等は検出されていない。

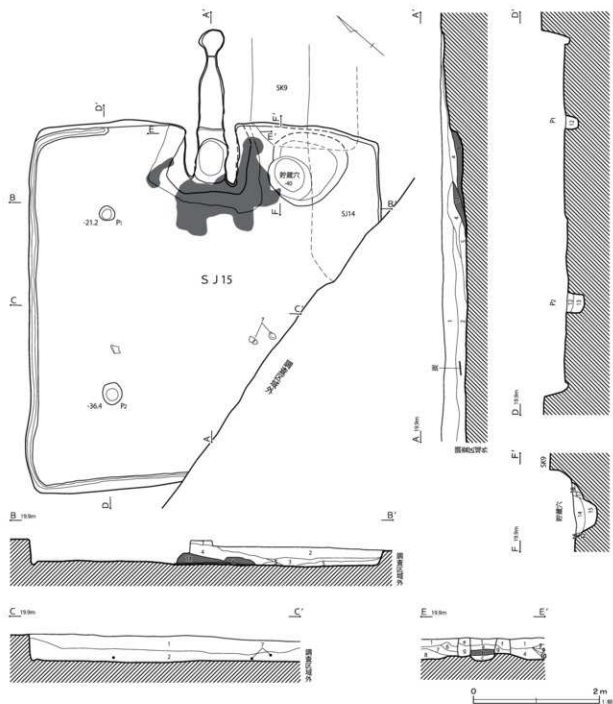
遺物は北半部に散在した状態で、把手付の甕が出土している。銭塚・城敷IV期に相当するものと思われる。また、Pit1から白玉が14点まとめて出土している。いずれも完成品で、製作途上の

破損品は含まれていない。

第15号住居跡 (第48・49図)

A・B-2グリッドに位置し、南側約1/3が調査区域外にある。覆土の堆積状況や出土した遺物から、重複する第14号住居跡・第9号土壇よりも新しい。

平面形態は方形で、カマドを北東壁の中央付近に付設する。主軸長5.87m・幅5.57mを測り、主軸方位N-49°-Eを指す。確認面からの深さは



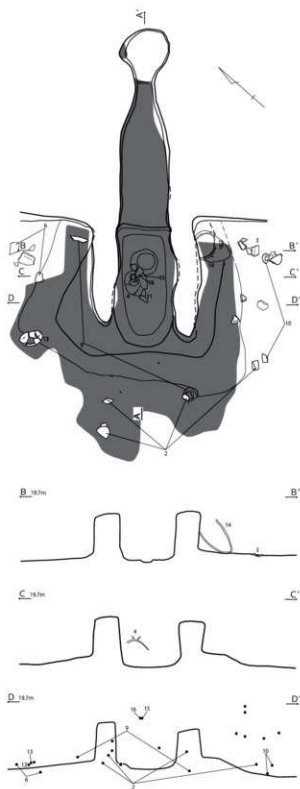
第48図 第15号住居跡

0.35～0.43mほどで、覆土は自然堆積である。

主柱穴4本の住居で、このうちPit1・Pit2の2本が検出されている。対応する2本のうちの1本は調査区域外にあるが、残る1本は検出されていない。主柱穴の規模は、Pit1が長径0.25m×短径0.22m×床面からの深さ0.21m、Pit2が長径0.35

m×短径0.30m×床面からの深さ0.36mで、規模が小さい。柱間距離は、2.85mを測る。

カマドは地山掘り残しの袖を芯として構築されている。燃焼部が住居壁の内側に位置し、ここから煙道部が外方に延びて、先端には円形の煙出しが設けられている。主軸方向2.56mを測る。燃焼



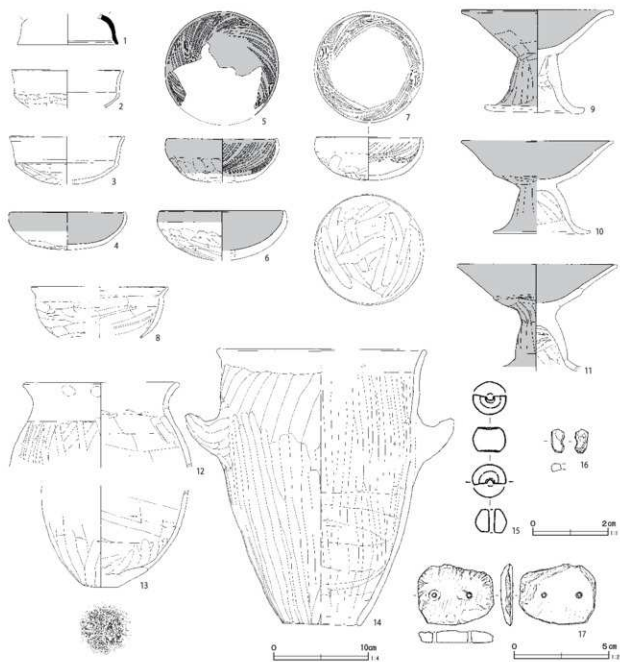
- S J 15
- | | |
|-------------|----------------------------|
| 1 黒褐色土 | 灰色シルトブロック多量 炭化物粒子少量 粘性あり |
| 2 暗オリーブ褐色土 | 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量 |
| 3 暗灰黄色土 | 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |
| 4 黒褐色土 | 灰色シルトブロックむ 炭土粒子少量 |
| 5 灰色土 | 灰色シルトブロック少量 しまりあり |
| 6 オリーブ褐色土 | 地山に似ている しまりあり |
| 7 黒褐色土 | しまり・粘性あり |
| 8 暗灰黄色土 | 砂少量 |
| 9 黒褐色土 | 灰色シルト粒子少量 しまり・粘性あり |
| 10 暗オリーブ褐色土 | 灰色シルトブロック しまりあり |
| 11 黒色土 | 炭化物・炭化物粒子多量 |
- ピット1・2
- | | |
|----------|--------------------|
| 12 暗灰黄色土 | 灰色シルトブロック しまり・粘性あり |
| 13 灰黄褐色土 | 粘性あり |
- 貯蔵穴
- | | |
|------------|-----------------|
| 14 オリーブ黒色土 | 灰色シルト粒子多量 しまりあり |
| 15 灰色土 | しまりあり |
| 16 オリーブ黒色土 | 灰色シルト粒子多量 しまりあり |
| 17 灰オリーブ色土 | しまり・粘性あり |
- カマド
- | | |
|------------|---------------------------------------|
| a 暗灰黄色土 | 天井部崩落 内壁焼土化 炭土粒子多量
炭化物粒子少量 下部に焼土集積 |
| b 黒色土 | 炭屑 炭化物粒子少量 |
| c 暗オリーブ褐色土 | 薪の方向端 しまり・粘性あり |
| d 暗オリーブ灰色土 | 炭化物 しまり・粘性あり |
| e オリーブ黒色土 | 袖部 灰色シルトブロック少量 しまり・粘性あり |
| f 灰オリーブ色土 | 袖部 しまり・粘性あり |
| g 灰オリーブ色土 | 袖部 砂含む しまりあり |



第49図 第15号住居跡カマド

部は一度0.1mほど掘り窪めてc層を貼り直している。奥には径0.2m・深さ0.1mのピットが掘り込まれている。奥壁は住居壁の延長上とほぼ一致

し、垂直に立ち上がって、浅い煙道部へ続いていく。燃焼部の中央には脚裾部が破損した高坏(11)を倒立させて支脚に転用している。火床面直上に



第50図 第15号住居跡出土土遺物

は灰層が堆積し、その上面には内壁の焼土化が著しい崩落した天井部が載る。また、袖部内壁の焼土化も顕著である。燃烧部の規模は、内法で奥行き0.88m・幅0.48mである。また、カマド内及び前面部・両脇部の広い範囲に亘って炭化物が厚く堆積していた（図版6-2）。

貯蔵穴は、カマド右側の東隅に付設されている。

長径1.45m×短径1.25m×床面からの深さ0.12mの浅いテラス状の掘込みの西側に、0.76m×0.62m×床面からの深さ0.40mのピット状の掘込みをもつ。

壁溝は、カマド北側の北東壁北隅付近から北西壁を経て、南西壁まで巡っている。幅0.08～0.21m、床面からの深さ0.05～0.07mほどである。

第19表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	蓋	10.6	3.3		IK	40	良好	灰～黒灰	蓋蓋か? 東海西部産か		57-1
2	土師器	坏	(11.9)	4.0		ACHIK	40	普通	橙	北武蔵型坏蓋模倣 外面二次的被熱 カマF№8・9-10		
3	土師器	坏	(12.2)	5.0		CDHIK	25	普通	にぶい橙	北武蔵型坏蓋模倣 二次的被熱 カマF№21		
4	土師器	坏	(12.2)	4.0		AHI	45	普通	にぶい黄橙	内増口縁 平底化意識 二次的被熱 カマF№25		57-2
5	土師器	坏	11.6	4.6		CHK	60	普通	橙	内増口縁 赤彩 暗文 SK9と接合		57-3
6	土師器	坏	13.2	5.2		AHEIK	40	良好	にぶい橙	内増口縁 赤彩 二次的被熱 カマF№15-17		57-4
7	土師器	坏	11.0	4.6		ACHIK	95	普通	橙	内増口縁 暗文 №2-3		57-5
8	土師器	輪	(14.6)	5.4		CDEHI	20	普通	橙	外反口縁		
9	土師器	高坏	15.8	10.8	8.6	CEH	70	普通	にぶい橙	有稜坏屈折脚(稜退化) 赤彩 支脚転用痕 カマF№19-24		57-6
10	土師器	高坏	16.0	9.8	10.1	CHK	70	普通	にぶい橙	有稜坏屈折脚 支脚転用痕 カマF№22-23		58-1
11	土師器	高坏	(6.8)	11.2		ACEHIK	85	普通	にぶい黄橙	転用支脚 有稜坏屈折脚 赤彩 カマF№25		58-2
12	土師器	甕	(16.0)	9.2		ACEHIK	25	良好	褐灰	単口縁 長胴化 煮沸痕 カマF№16		
13	土師器	甕	10.3	3.7		CHK	70	普通	橙	長胴化 煮沸痕 覆付着 底部本草痕 カマF№11		
14	土師器	甕	21.8	29.3	8.2	CEHIK	95	普通	浅黄橙～にぶい赤褐	把手付 煮沸痕顕著 カマF№26		58-3

第20表 第15号住居跡出土滑石剥片一覧表

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
4	形剥片	1.585	0.916	0.356	0.6	カマF№1	31	形剥片	0.846	0.598	0.262	0.2	カマF№1
5	形剥片	0.862	0.844	0.278	0.3	カマF№1	32	形剥片	0.711	0.385	0.144	0.0	カマF№1
6	形剥片	0.828	0.488	0.164	0.1	カマF№1	33	形剥片	0.415	0.375	0.086	0.0	カマF№1
7	形剥片	1.268	0.462	0.275	0.2	カマF№1	34	形剥片	0.420	0.378	0.225	0.0	カマF№1
8	切削工程品	0.550	0.416	0.196	0.0	カマF№1	36	形剥片	0.843	0.812	0.309	0.4	カマF№1
9	形剥片	1.031	0.792	0.173	0.2	カマF№1	38	形剥片	0.853	0.493	0.153	0.1	カマF№1
10	切削片	0.610	0.381	0.142	0.0	カマF№1	39	形剥片	0.605	0.526	0.146	0.1	カマF№1
11	切削片	0.527	0.404	0.132	0.0	カマF№1	41	切削片	0.596	0.507	0.158	0.0	カマF№1
12	切削片	0.584	0.351	0.173	0.0	カマF№1	42	切削片	0.780	0.452	0.167	0.0	カマF№1
13	形剥片	0.850	0.648	0.157	0.1	カマF№1	43	切削片	0.622	0.425	0.221	0.0	カマF№1
14	切削片	0.772	0.290	0.178	0.0	カマF№1	44	切削工程品	0.730	0.526	0.227	0.1	カマF№1
15	切削工程品	0.880	0.683	0.372	0.3	カマF№1	46	形剥片	0.858	0.505	0.190	0.1	カマF№1
16	切削片	0.592	0.192	0.169	0.0	カマF№1	47	切削片	0.372	0.283	0.128	0.0	カマF№1
17	切削片	0.321	0.310	0.111	0.0	カマF№1	48	形剥片	0.841	0.413	0.203	0.1	カマF№1
18	切削片	0.527	0.342	0.110	0.0	カマF№1	49	形剥片	1.106	0.405	0.199	0.2	カマF№1
19	切削片	0.615	0.395	0.094	0.0	カマF№1	50	切削片	0.696	0.465	0.186	0.0	カマF№1
20	形剥片	0.720	0.541	0.147	0.1	カマF№1	51	切削片	0.592	0.500	0.135	0.0	カマF№1
21	切削片	0.658	0.286	0.205	0.0	カマF№1	52	形剥片	0.920	0.382	0.187	0.1	カマF№1
22	形剥片	1.115	0.652	0.213	0.2	カマF№1	53	切削工程品	0.914	0.547	0.257	0.2	カマF№1
23	形剥片	0.963	0.622	0.118	0.1	カマF№1	54	切削工程品	0.752	0.560	0.231	0.1	カマF№1
24	切削工程品	1.266	0.329	0.287	0.3	カマF№1	55	形剥片	0.573	0.419	0.185	0.1	カマF№1
25	切削工程品	0.631	0.593	0.199	0.1	カマF№1	57	切削片	0.396	0.223	0.175	0.0	カマF№1
26	形剥片	0.595	0.489	0.186	0.1	カマF№1	58	切削片	0.437	0.305	0.159	0.0	カマF№1
29	形剥片	1.661	0.575	0.386	0.4	カマF№1	59	形剥片	0.717	0.602	0.299	0.2	カマF№1
30	形剥片	1.040	0.599	0.248	0.2	カマF№1							

遺物はカマド周辺に集中し、須恵器やガラス製丸玉・滑石製白玉等も出土している。

1は須恵器の蓋である。大きさや形状から坏の蓋ではなく、特殊な器種の蓋である可能性が高い。胎土の特徴から東海西部産の須恵器と推定される。

これと共伴する2～8は土師器の坏類で、内膊

口縁(赤彩・内面暗文)・外反口縁鉢タイプ・北武蔵型坏蓋模倣がある。9～11は有稜坏屈折脚の高坏で、裾広がり・短脚化がみられる。12・13の甕は長胴化がみられ、14の甕は須恵器模倣の把手付である。土師器は銭塚・城敷Ⅳ期新段階に相当することから、1の須恵器蓋は5世紀末までの所産

と考えられる。

15は、ガラス製の丸玉で、カマド内から出土した。径0.85cm、厚さ0.60cm、孔径0.18cm、重さ0.4gである。(カマドNa1/図版107-1)

16は滑石製白玉の製作途上の破損品である。穿孔後に片面に研磨が施された段階で破損したものである。長さ0.602cm・幅0.293cm・厚さ0.218cm、重さ0.1g未満である。(カマドNa1/図版107-1)

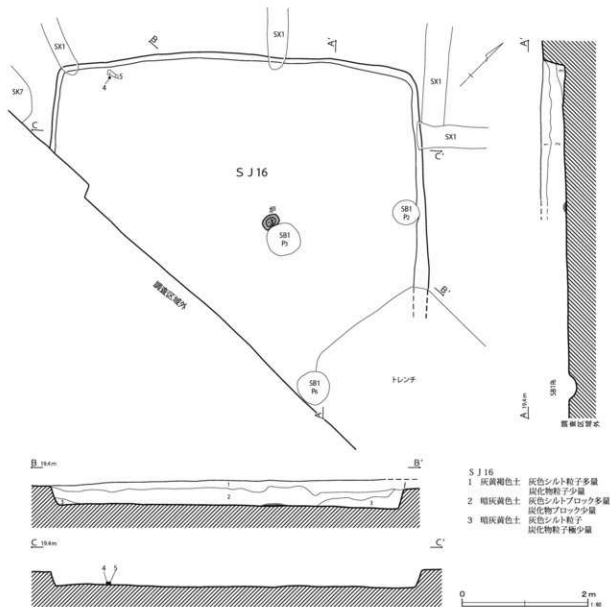
17は、滑石製の有孔円板である。周辺部の欠損が多く、台形を呈している。中央に小円孔2が穿

たれている。長径4.03cm×短径2.35cm×厚さ0.61cm、重さ12.9gである。(図版58-4)

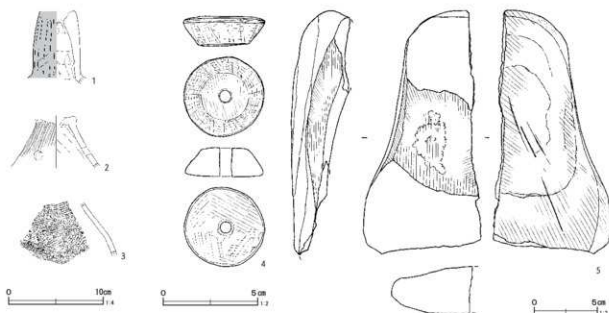
このほかに滑石製品の製作途上の剥片が49点出土している(第20表)。残存する大きさ・形状等から、白玉製作工程の形削剥片・切削工程品・切削剥片に分類した。これらの遺物から、白玉製作にかかる工房機能が推定されるが、製作に伴う施設や工具等は発見されていない。

第16号住居跡 (第51図)

A・B-12・13グリッドに位置する。南半部は調査区域外にあり、東部の壁付近はトレンチによる



第51図 第16号住居跡



第52図 第16号住居跡出土遺物

第21表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏		7.6		A C E H I	80	普通	橙	外面赤彩		
2	土師器	器台		5.5		C E H I K	40	普通	にぶい橙	器面風化 赤彩不明瞭 凹孔3		
3	吉ヶ谷	壺		5.9		A H I J K	5	普通	にぶい橙	単節 LR 赤彩		

って削平されている。重複する第1号掘立柱建物跡・第1号性格不明遺構よりも古い。

平面形態は方形で、主軸長は5.73mが検出されている。幅5.87m、主軸方位はN-42°-Wを指す。確認面からの深さは0.35~0.36mである。覆土は自然堆積で、壁際から堆積した様子が看取できる。

炉は地床炉で、住居の中心から北西壁方向へ僅かに寄って位置する。火床面は径0.28mの円形範囲が焼土化し、火床面下には深さ0.03mほどの浅い掘り込みがみられる。

主柱穴・貯蔵穴・壁溝等の施設は検出されていない。

出土した遺物は少ない。銭塚・城敷Ⅲ期~Ⅳ期の有残坏屈折脚高坏の脚部と銭塚・城敷Ⅱ期の器台の脚部、吉ヶ谷壺片が各1点ずつで、時期特定は困難である。

4は滑石製紡錘車である。北西壁際の床面直上から出土している。上径2.5cm・下径4.23cm・厚

さ1.57cm・孔径0.59cm、重さ40.7gである。(No1/図版58-5)

5は砥石で、北西壁際の床面直上から出土している。大型品で、上下両面に使用痕がみられる。長さ19.10cm・幅9.35cm・厚さ4.70cm、重さ858.6gを測る。石材は緑泥片岩である。(No1/図版58-6)

第17号住居跡 (第53図)

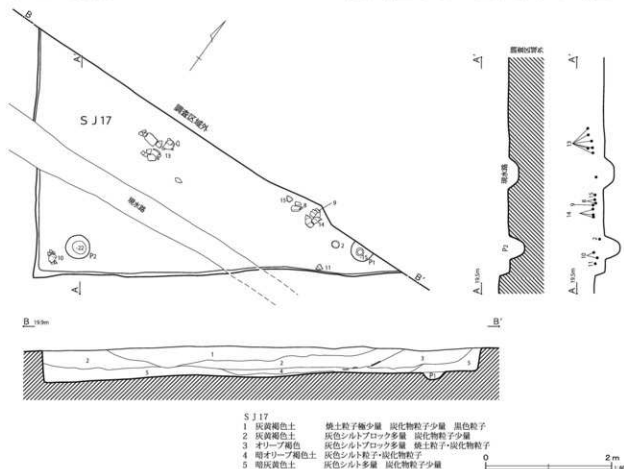
A-9グリッドに位置し、一部現水路によって削平されている。北側の1/2以上が、調査区域外にある。そのため、方形の平面形態の南隅付近のみの検出である。南北長3.87m・東西長5.60mが検出され、南北軸の方位はN-35°-Wを指す。確認面からの深さは0.17~0.53mほどで、覆土は自然堆積である。土層の観察から、壁際から埋没が始まり、最後に中央部が埋まるレンズ状の堆積状況が把握できる。

ピットは、南東の調査区域外との境界付近のPit1と南西隅のPit2が検出されている。規模は、

Pit1が径0.32m×床面からの深さ0.15m、Pit2が径0.38m×床面からの深さ0.22mと近似する。このほかにピットは検出されていないことから、四隅に支柱穴をもつ住居と推定される。柱間距離は、4.40mを測る。

このほかに、カマド・貯蔵穴・壁溝等の諸施設は検出されていない。出土した遺物の特徴から、調査区域外にカマドが付設されているものと思われる。

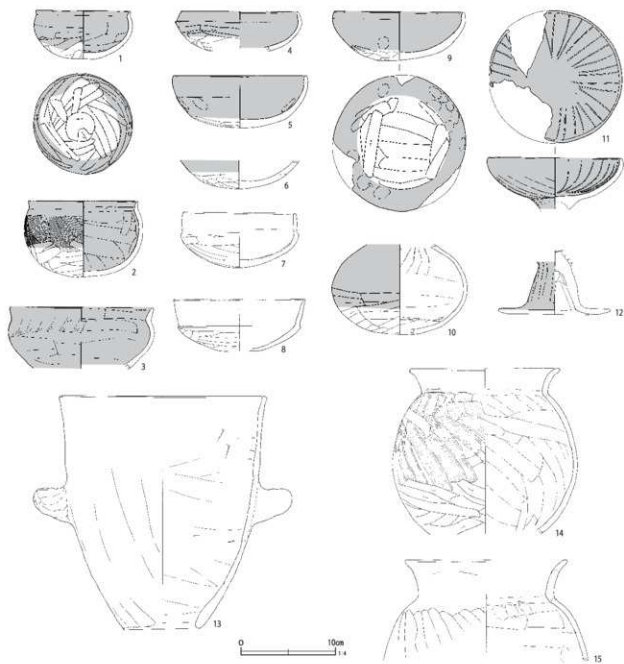
遺物は出土量が多いが、覆土中層からの出土が



第53図 第17号住居跡

第22表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	内縁口縁	平底	備考	出土位置	図版	
1	土師器	椀	10.0	5.1	3.0	ACEHI	90	普通	にじみ椀	内斜口縁	平底	赤彩		59-1	
2	土師器	椀	11.6	8.0		CEHIK	95	普通	椀	口縁外反	丸底	赤彩 No1		59-2	
3	土師器	椀	(15.2)	6.5		ACEHI	45	普通	明赤褐	口縁外反	赤彩	二次の被熱			
4	土師器	坏	(12.3)	4.2		A E H I K	10	普通	明褐色	坏身模倣	赤彩				
5	土師器	坏	(14.0)	5.5		CEHI	40	普通	にじみ椀	内増口縁	赤彩	二次の被熱	No4	59-3	
6	土師器	坏	(11.8)	5.8		CEHIK	80	不良	椀	坏蓋模倣	風化顯著				
7	土師器	坏	(13.8)	5.1		CEHIJ	20	普通	椀	北武蔵型	環蓋模倣			59-4	
8	土師器	坏	13.6	5.1		ACEHIJK	70	良好	にじみ椀	内増口縁	赤彩	二次の被熱	No4-5		
9	土師器	埴		3.0		ACEHIK	70	普通	にじみ椀	外面赤彩	二次の被熱	風化顯著	No3	59-5	
10	土師器	埴		9.5		A C H I K	70	普通	にじみ椀	外面赤彩	No9			59-6	
11	土師器	高坏	14.0	5.5		CEHI	70	普通	椀	内増口縁	环蓋模倣	高坏	赤彩	放射状暗文 No2	59-7
12	土師器	高坏		6.7	(12.0)	EHI	60	普通	にじみ赤濁	屈折脚	外面赤彩	支脚転用痕			
13	土師器	瓶	(21.2)	24.7	8.0	CEHIK	60	普通	椀	把手付	煮沸痕顯著	No7-8		59-8	
14	土師器	甕	(15.6)	17.5		ACEHIK	25	普通	にじみ椀	球形形	単口縁	煮沸痕	覆付着	No3	
15	土師器	甕	(17.0)	10.8		ACEHIJ	25	普通	にじみ椀	長胴化出現	単口縁	煮沸痕	No5		



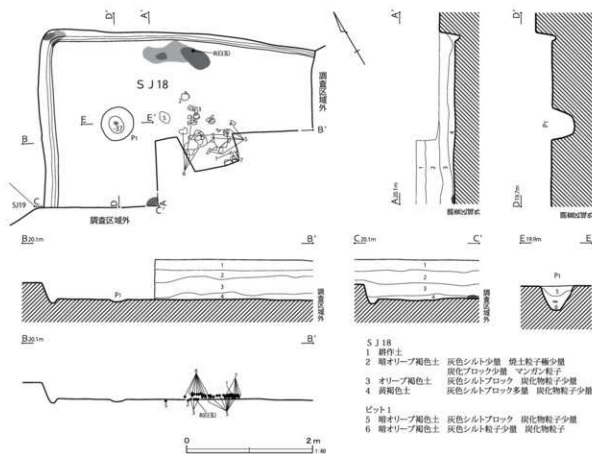
第54図 第17号住居跡出土遺物

大半である。坏類には、赤彩された内斜口縁・内罎口縁・坏身模倣・外反口縁鉢鈿タイプと、無赤彩の北武蔵型坏蓋模倣がある。高坏は屈折脚で、碗が載る。内面には放射状の暗文が残る。罎は赤彩された扁平化した球胴形、甕は胴の張りが強いながらも、長胴化の兆しが見られる。甗は須恵器模倣で、把手が付く。器形や器種組成等の特徴から、銭塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。

第18号住居跡 (第55図)

A-9・B-9・10グリッドに位置する。平面形態が方形の住居跡の北西隅付近のみの検出である。ほかは調査区域外にある。

南北長2.86m・東西長4.31mが検出され、南北軸の方位はN-33°-Eを指す。確認面からの深さは0.24mほどで、覆土は自然堆積である。北西隅・北壁際・住居跡中央付近など点々と、焼土・



第55図 第18号住居跡

炭化物の堆積がみられる。

発見された Pit1 は主柱穴で、長径0.53m × 短径0.51m × 床面からの深さ0.37m と、しっかりとした規模をもつ。壁溝は、検出された壁に沿って全周する。幅0.10～0.24m、床面からの深さ0.14～0.34m ほどである。

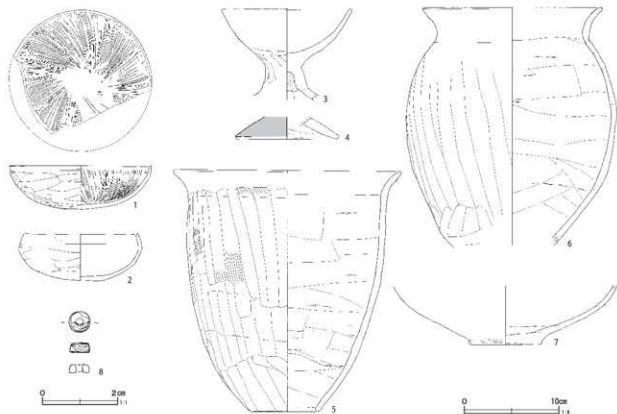
遺物は、中央部の床面直上付近に集中し、8 は北壁際から出土した滑石製の白玉 (8) が出土し

ている。坏身模倣坏、坏部の稜が退化した屈折短脚の高坏、長胴化しているが未だ胴部の張りを残す甕、単孔式の把手が付かない甕である。これらの遺物は銭塚・城敷IV期新段階の最新段階に相当し、北武蔵型の暗文坏が流入している。

8 の白玉は片面穿孔で、長さ0.54cm・幅0.53cm・厚さ0.23cm・孔径0.2cm、重さ0.1g である。(No7/図版107-1)

第23表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(14.9)	5.5		CEIK	60	普通	橙	北武蔵型暗文坏 No25		60-1
2	土師器	坏	12.0	5.0		DEHIK	80	普通	橙	坏身模倣 二次的被熱 No4		60-2
3	土師器	高坏	(13.6)	9.6		A E H I K	50	良好	に赤赤周	有稜坏屈折脚(稜退化) 二次的被熱 No5		60-3
4	土師器	高坏		2.3	(10.6)	CEHIK	40	普通	明赤褐色	屈折脚 外面赤彩? 二次的被熱による炭化 Pit1		
5	土師器	甕	23.6	25.8	(7.1)	ABCEGHIK	75	普通	橙	把手無 煮沸痕顕著 片岩多 No1-2-8-9-10-13-18-22-23-24-27-28-29		60-4
6	土師器	甕	18.5	25.4		A E G I K	70	普通	明赤褐色	長胴化 煮沸痕顕著 No5-6-14-15-16-18-19-20-21		60-5
7	土師器	壺		6.3	7.7	A C E H I K	60	普通	明赤褐色	(球胴形) 二次的被熱顕著 底部へラケズリ No26-27-28-29-30		



第56図 第18号住居跡出土遺物

第24・19号住居跡 (第57図)

第24・19号住居跡は、重複する2軒の住居跡である。覆土の堆積状況から、第24号住居跡の方が新しい。

第24号住居跡は、B-9グリッドに位置する。北西隅を中心とした一部のみの検出で、南側の大半が調査区域外にある。一部をB-9グリッドPit3によって壊されている。

平面形態は方形で、南北長1.93m、東西長2.58mを測り、南北軸の方位はN-37°-Wを指す。確認面からの深さは0.32mほどで、覆土は自然堆積である。また、東壁に沿った2ヶ所に、炭化物が薄く堆積する。

主柱穴・厨房施設・貯蔵穴・壁溝等の諸施設は検出されていない。出土遺物も少なく、甗1点が図示し得たのみで、時期の特定は困難である。

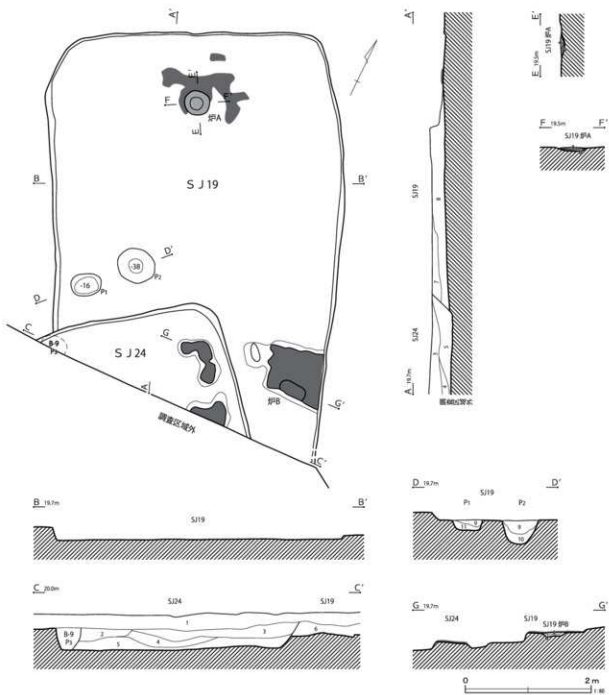
第19号住居跡はA・B-9グリッドに位置する。平面形態は、長軸を南北にもつ長方形である。主

軸長6.86mが検出され、東西幅4.60mを測る。主軸方位はN-27°-Wを指す。確認面からの深さは0.22mほどである。覆土には灰色シルト粒子・ブロックを多量に含むことから、人為的に埋め戻されている可能性がある。

ピットは、Pit1・Pit2の2本のみが見ついている。しかし、西壁際に寄った位置に不規則に並び、主柱穴には成り得ない。Pit1は長径0.48m×短径0.25m×床面からの深さ0.16m、Pit2は長径0.61m×短径0.53m×床面からの深さ0.38mである。

炉Aは住居跡本来のもので、北壁側へ著しく寄って位置する。長径0.40m×短径0.38mの範囲が焼土化し、床面からの深さ0.07mほどの浅い掘込みがみられる。周囲には炭化物が広がっている。

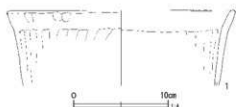
炉Bは東壁際南半部に位置し、南北0.8m×東西0.9mの範囲に炭化物が広がる。調査所見では「所在不明の地床炉」と記録されているもので、合



- S J 24**
- 1 堀オリーブ褐色土 灰色シルト少量 焼土粒子極少量 炭化物粒子少量
マンガン粒子
 - 2 暗灰黄色土 灰色シルトブロック多量 焼土・炭化物粒子少量
 - 3 灰黄褐色土 灰色シルト粒子 焼土・炭化物粒子極少量
 - 4 暗灰黄色土 灰色シルト粒子多量
 - 5 暗灰黄色土 灰色シルトブロック・炭化物粒子
- S J 19**
- 6 オリーブ褐色土 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量
 - 7 堀オリーブ褐色土 灰色シルト粒子多量
 - 8 暗灰黄色土 灰色シルトブロック多量

- S J 19 ビット1・2**
- 9 堀オリーブ褐色土 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量
 - 10 暗灰黄色土 灰色シルト粒子・炭化物粒子少量
 - 11 黄褐色土 灰色シルトブロック多量 地山か
- S J 19 9PA**
- a 暗赤褐色土 焼土 壁くつきしまっている 粘性あり
 - b 暗褐色土 地山への漸移層
- S J 19 9PB**
- c 暗褐色土 壁くつきしまっている
 - d 褐色土 地山への漸移層 同時に炭が広がる

第57図 第24・19号住居跡



第58図 第24号住居跡出土遺物

第24表 第24号住居跡出土遺物観察表 (第58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	甌	(24.0)	8.0		E H I K	30	普通	浅黄橙			

第20号住居跡 (第59・60図)

A・B-8グリッドに位置し、南側1/3ほどが調査区域外にある。第43号土壌によってカマドの一部が壊され、重複する第31号溝跡との新旧関係は不明である。

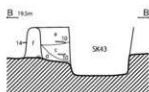
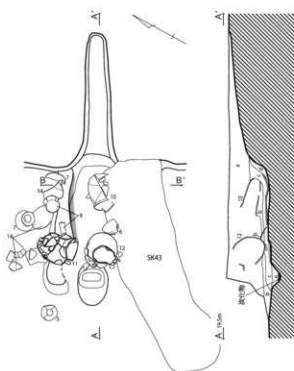
平面形態は方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長5.34mを測り、南北幅4.38mが検出されている。主軸方位はN-56°-Eを指す。確認面からの深さは0.29~0.34mほどで壁際から埋まり始め、最終的に中央付近が埋没するレンズ状堆積が観察できる。また、住居跡中央部の床面に薄い炭化物の堆積が認められる。

主柱穴4本の住居で、主軸方向に並ぶPit1・Pit2の2本が検出されている。対応する残りの2本は調査区域外にある。Pit1は長径0.27m×短径0.26m×床面からの深さ0.34m、Pit2は長径0.56m×短径0.55m×床面からの深さ0.36mで、平面規模が異なる。柱間距離は、約2.7mである。Pit2からこの距離を南北方向に振ると、カマド前面の第40号土壌先端付近に当たることから、住居跡の形態は横幅の広い長方形と推定される。

カマドは造り付けられたもので、燃焼部が住居壁の内側に位置し、奥壁がわずかに外方へ広がる。ここから煙道部が伸び、主軸方向の長さ2.08mを測る。燃焼部の入り口部分には、奥行0.32m×幅0.23m×深さ0.06mのピットが掘り込まれている。住居の床面と比較すると、燃焼部火床面はわずかに凹む。燃焼部奥壁は高さ0.15mほど立ち上がり、

致する他の遺構が無いことから、第19号住居跡の炉として報告する。著しい焼土化はみられず、いずれにしても、副次的な火処と推測される。

貯蔵穴・壁溝は検出されていない。また出土遺物もなく、時期推定はできない。

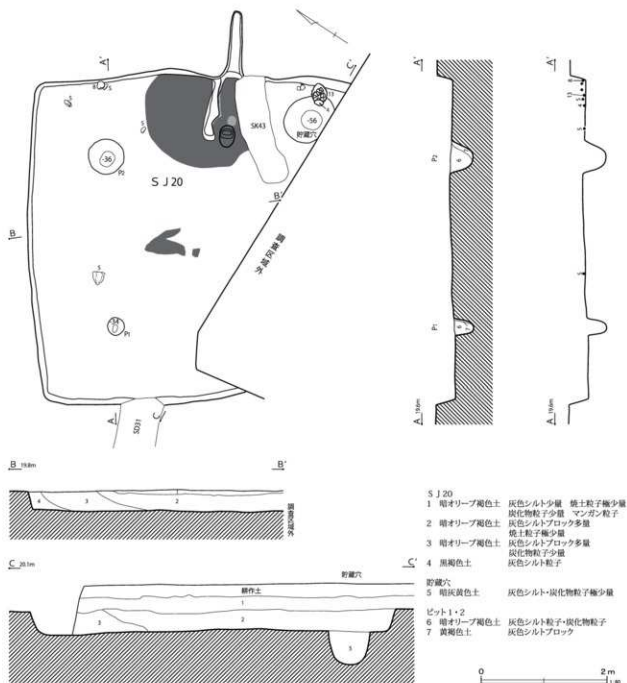


S J 20 カマド

- a 暗オリーブ褐色土 灰色シルトブロック 焼土粒子・炭化物粒子少量
- b 黒褐色土 炭化物層 焼土粒子
- c 暗褐色土 焼土粒子多量 炭化物
- d 黒褐色土 炭化物層 焼土粒子
- e 暗灰黄色土 炭化物粒子少量
- f 暗灰黄色土 焼部 マンガン粒子少量



第59図 第20号住居跡カマド

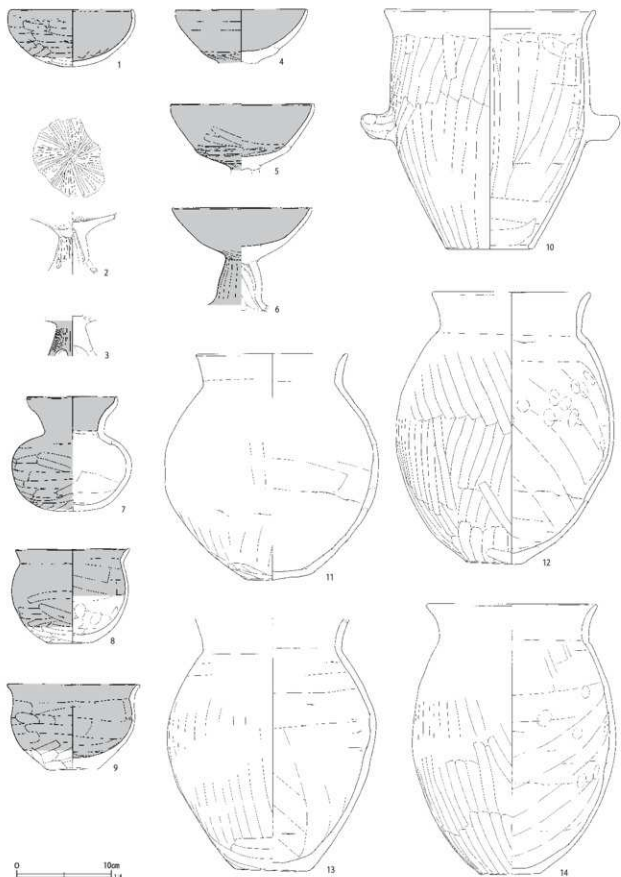


第60図 第20号住居跡

煙道部は先端に向かって上っていく。燃焼部は長さ1.20m×幅0.35m以上の楕円形を呈している。煙道部は長さ0.88m幅0.18~0.24mである。暗灰黄褐色土が積み上げられた袖部は、内側の焼土化が顕著である。燃焼部内に堆積したc層は天井部が崩落した土層で、内壁が焼土化している。直下には炭化物層(d層)が形成されている。火床面

は、入り口部ピットのすぐ奥の焼土化が顕著である。カマドの架け口部付近から、甕(12)と甌(10)が出土している。また、カマド周辺部には炭化物の堆積が広がり、左袖に沿って壺・鉢・甕(7・9・11・14)などが集中している。

貯蔵穴はカマド右側に付設され、一部が調査区域外にある。長軸0.83m×短軸0.63m以上の楕円



第61图 第20号住居跡出土遺物

第25表 第20号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	12.8	6.0		ACEHIK	95	普通	にぶい煙	内罎口縁 赤彩 外面二次的被熱	カマFNo13	60-6
2	土師器	高坏		7.2		A E H I K	70	普通	にぶい煙	円孔3 放射状暗文 赤彩不明 支脚転用痕		
3	土師器	高坏		4.3		A E I J K	80	良好	にぶい黄煙	円孔3 外面赤彩		
4	土師器	高坏	14.0	5.4		A E H I K	90	良好	にぶい煙	有稜环 赤彩? 風化顕著 No4		
5	土師器	高坏	15.0	6.0		A C E I K	95	普通	にぶい赤煙	有稜环 赤彩 二次的被熱 カマFNo4		
6	土師器	高坏	14.8	11.0		ABDEHIK	70	不良	にぶい煙	転用支脚 有稜环 赤彩 カマFNo3		61-1
7	土師器	小型壺	9.3	12.1		ABDEHIK	100	普通	にぶい煙	口縁部先端内縁 赤彩 二次的被熱 カマFNo9		61-2
8	土師器	鉢	11.9	9.9		A E H I K	90	良好	灰黄褐	口縁部外反 二次的被熱 No1		61-3
9	土師器	鉢	13.8	9.1	5.2	C E H I K L	80	普通	赤褐	口縁部外反 赤彩 二次的被熱顕著 カマFNo8-11		61-4
10	土師器	瓶	(22.0)	25.4	(8.8)	C E H I K	40	普通	にぶい黄煙	把手付 煮沸痕顕著 カマFNo1		61-5
11	土師器	甕	15.8	23.8	7.0	A C E H I K	90	良好	にぶい煙	球胴形 煮沸痕顕著 カマFNo7		61-6
12	土師器	甕	(16.4)	28.9	5.8	A C E H I K	80	普通	にぶい煙	長胴化出現 煮沸痕 煤付者 底部ヘラケズリ カマFNo2		61-7
13	土師器	甕		26.7	8.0	A C E H I J K	50	不良	にぶい黄煙	長胴化出現 煮沸痕 底部ヘラケズリ No3		62-1
14	土師器	甕	17.6	28.8	6.3	C E H I K	60	普通	煙	長胴化出現 煮沸痕 底部ヘラケズリ カマFNo2-5-6-10-12-14		62-2

形で、床面からの深さ0.56mを測る。貯蔵穴と東壁との間から、高坏の坏部と甕(4・13)が出土している。この高坏の坏部は、甕の蓋として用いられていた可能性がある。

壁溝は、検出されていない。

遺物には、坏類に模倣坏が含まれない。赤彩された内罎口縁環と身の深い有稜坏屈折脚高坏、長胴化の兆しもみられるが依然として球胴形の胴部をもつ甕、須恵器模倣の把手付瓶等がある。銭塚・城敷Ⅲ期新段階を中心としてⅣ期古段階にかかる頃に相当するものと思われる。

第21号住居跡 (第62図)

A・B-13・14グリッドに位置し、南半部は調査区域外にある。覆土の堆積状況から、重複する第39号土壌が新しい。

平面形態は方形である。東西長6.43mを測り、南北長5.36mが検出されている。南北軸方位はN-37°-Eを指す。確認面からの深さは0.48mである。覆土は自然堆積で、壁際から堆積した様子が看取できる。また、大地震に伴う噴砂痕も確認されている。さらに、北壁際付近には炭化物の広がり認められる。

西壁際にピットがある。規模は、長径0.42m×短径0.39m×床面からの深さ0.15mである。位置的条件から主柱穴とは考えられず、出入り口施設

等に関わる可能性がある。

主柱穴・炉・貯蔵穴・壁溝等の諸施設は検出されていない。

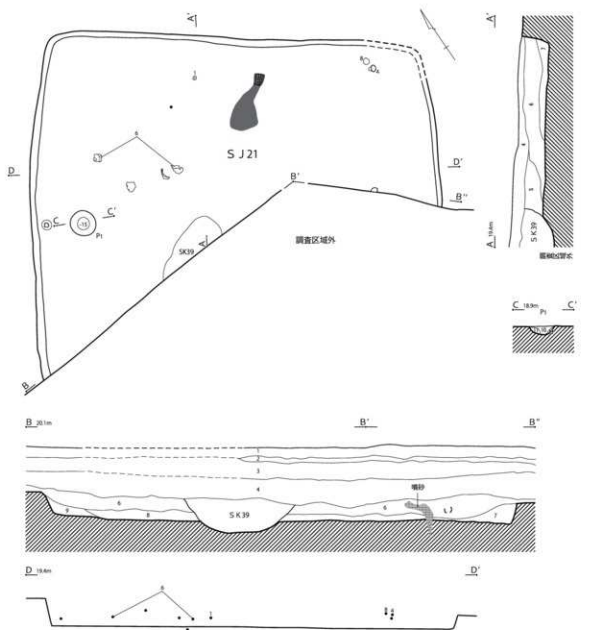
遺物は覆土中層から出土し、量も少ない。小型の鉢・高坏(?)、刻み口縁と単口縁の台付甕、吉ヶ谷系の壺が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-1に想定される。

第22号住居跡 (第64図)

B・C-3グリッドに位置し、西半部が調査区域外にある。重複する第2号溝跡との重複関係は不明である。また、南端が攪乱によって壊されている。

平面形態は方形である。北東方向に4.30m、南東方向に3.84mが検出され、北東壁の方位はN-43°-Wを指す。確認面からの深さは0.23~0.33mである。床面直上には炭化物層が形成され、炭化した木材も堆積している。床面にはオリブ黄色土で貼床が施されている。炭化した木材は住居の構造材と考えられることから、焼失住居と推定される。しかし、通常の焼失住居例と比較すると、出土した遺物量が少なく、住居を廃棄する段階で焼却した可能性も想定できる。

ピットが6本検出されているが、このうちPit2が主柱穴である。長径0.42m×短径0.31mと規模は小さいが、柱材の根本部分が残っている(9・



S J 21

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 | 耕作土 |
| 2 | 浅間Aか |
| 3 | 暗灰黄色土 砂 白色細粒子(浅間A) 小マンガン 黒色粒子 |
| 4 | 暗オリーブ褐色土 炭化物粒子 砂少量 土器 |
| 5 | 暗オリーブ褐色土 灰色シルトブロック多量 炭化物粒子 |
| 6 | オリーブ褐色土 灰色シルトブロック・砂 |
| 7 | オリーブ褐色土 灰色シルト粒子 |
| 8 | 暗灰黄色土 炭化物粒子・砂少量 |
| 9 | 暗灰黄色土 焼土粒子少量 砂 |

ピット1

- | | |
|----|-------------------------------------|
| 10 | 暗オリーブ褐色土 炭化物粒子少量 暗オリーブシルトブロック多量 砂土床 |
| 11 | 暗灰黄色土 灰色シルトブロック多量 砂 |

0 2m 1m

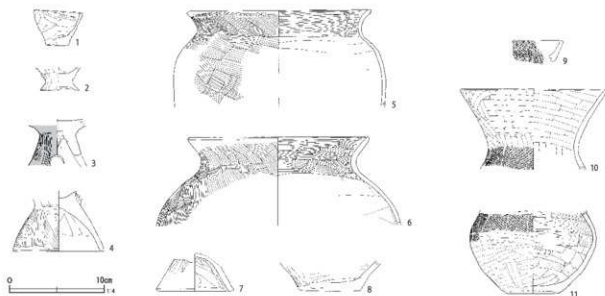
第62図 第21号住居跡

10)。最下端は床面から1.10mの深さを測る。

北東壁際の Pit3は他のピットよりも平面規模が大きく、長径0.61m×短径0.57m×床面からの深さ0.23mである。出入り口施設に伴う機能が想

定される。

ほか4本は用途不明である。Pit1は貼床を掘り込んでいる。Pit4・Pit1・Pit5が住居軸に沿って一列に並び、Pit5・Pit6が南東壁際に並ん



第63図 第21号住居跡出土遺物

第26表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	小型鉢	4.9	3.6	2.9	A E H I J K	100	普通	にぶい黄緑	二次被熱 No3		62-3
2	土師器	小型高坏		2.4	4.2	C I K	80	普通	にぶい褐	高坏? 二次被熱 底部不整形		
3	土師器	高坏		5.0		C D E H I J	75	普通	橙	円孔4 赤彩不明		
4	土師器	台付甕		6.4	9.6	A B E H I K	90	普通	橙	台部 煮沸痕 器面風化顕著 No1		
5	土師器	台付甕	19.6	10.3		E H J	50	不良	にぶい黄緑	短口鉢 煮沸痕		
6	土師器	台付甕	18.9	9.4		A C E I K	40	普通	灰黄褐	単口鉢 No47		
7	土師器	台付甕		4.0	(7.2)	A C H I J K	60	普通	灰黄	柄取部に人為的な整形痕 (小型容器に転用?)		
8	吉ヶ谷	甕		3.2	6.6	A C D E H I J	70	普通	にぶい橙	底部ヘラズリ No2		
9	吉ヶ谷	甕		2.2		C I J K		普通	にぶい黄緑	単節R.L. 赤彩		
10	吉ヶ谷	甕	(15.3)	8.5		A E G H	20	不良	黄橙	肩部に単節LR施文 口縁部の二次的被熱顕著		62-4
11	吉ヶ谷	甕		8.3	(5.6)	G I	50	良好	赤褐	胴部上半に単節R.L施文 外面の縄文施文部より下に赤彩 底面剥離		62-5

で位置する。規模は、径0.3~0.4m・床面からの深さ0.1~0.3mである。

また、ピットよりも平面規模が大きく、浅い土城状の掘り込み4基が確認されている。南東壁際のSK1は、長径0.82m×短径0.70m×床面からの深さ0.23mである。土層の観察から、貼床層下からの掘り込みが確認されている。東隅のSK2は、長径0.97m×短径0.86m×床面からの深さ0.21mの規模をもつ。位置的な条件を考えると、貯蔵穴の可能性が高い。北部のSK3は、長径0.62m×短径0.59m×床面からの深さ0.18mを測る。土層による掘り込み面の確認はされていないが、位置的な共通点から、SK1と同様に貼床層下

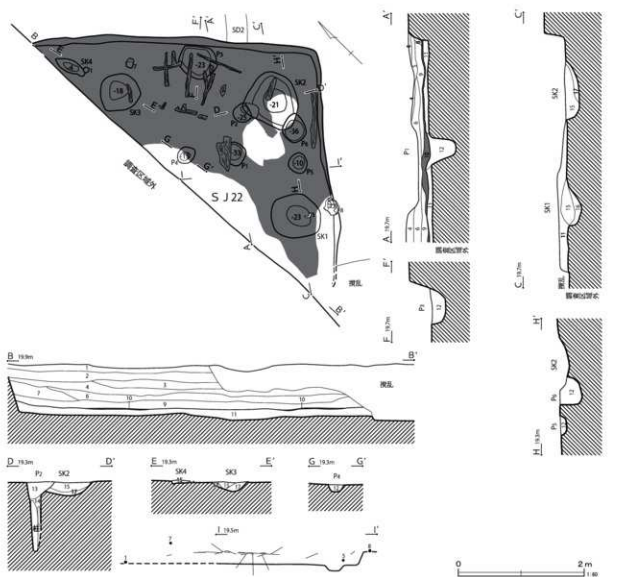
の土城の可能性が高い。さらにSK3の北側にSK4があるが、長径0.51m×短径0.21m×床面からの深さ0.04mほどの規模で、不整形の用途不明な浅い掘り込みである。

カマド・壁溝等はみつからない。

遺物は、炭化材が堆積する床面直上付近から出土している。赤彩された坏身模倣の坏・有稜坏の高坏・ハケ痕が残る甕と長胴化の兆しがみられる甕がある。銭塚・城敷IV期古段階に相当する。

9・10は、Pit2から検出された。

9は柱根で、上方は立ち腐れたものと推定される。芯持ちの丸太材で、表面的な加工は施されておらず、一部表皮が残存する。現存長36.6cm、幅



S J 22

- 1 新作土
- 2 暗オリーブ褐色土 マンガン粒子 しまりあり
- 3 黒褐色土 マンガン粒子少量 しまりあり
- 4 暗オリーブ褐色土 灰色シルト粒子 しまりあり
- 5 オリーブ黒色土 炭化物粒子・焼土粒子
- 6 灰色土 灰色シルト・焼土粒子・炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
- 7 オリーブ褐色土 灰色シルト・焼土粒子・炭化物粒子少量 しまりあり
- 8 にぶい黄褐色土 焼土 炭化物粒子多量 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
- 9 黄灰色土 焼土粒子・炭化物粒子 しまり・粘性あり
- 10 黒色土 炭化物粒子多量 焼土粒子少量
- 11 オリーブ黄色土 磁床 灰色シルトブロック炭化物粒子少量 焼土粒子・炭化物粒子少量 しまり・粘性あり

ビット1-3-4-5-6

- 12 灰オリーブ色土 炭化物粒子多量 焼土粒子少量 しまり・粘性あり

ビット2

- 13 黒褐色土 柱抜き取り痕 灰色シルト極少量 しまり・粘性あり
- 14 柱痕

SK 1-4

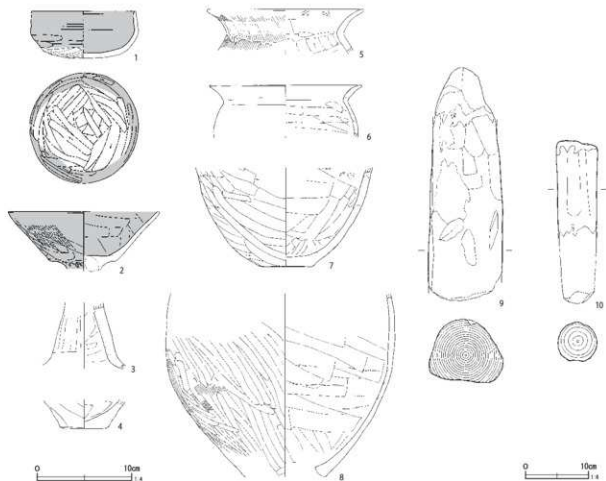
- 15 灰色土 灰色シルト少量 しまり・粘性あり
- 16 オリーブ黒色土 しまり・粘性あり
- 17 灰色土 灰色シルト少量 焼土・炭化物粒子含む しまり・粘性あり

第64図 第22号住居跡

11.7cm、厚さ10.2cmである。樹種はエゴノキ属である。(ST2-420)

10は主柱材の9を固定させる根絡材として用いられた木製品である。芯持丸木材のため、建築

部材等が転用されていると思われる。上下端の二次的に切断痕から、長さを整えて再利用されている。現存長26.1cm、幅6.1cm、厚さ6.3cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(ST2-348)



第65図 第22号住居跡出土遺物

第27表 第22号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	11.0	4.9		E H I J K	100	普通	にぶい橙	坏身模倣 赤彩	SK4No3	62-6
2	土師器	高坏	16.0	6.3		E H I K	70	普通	にぶい黄橙	有稜坏 赤彩 支脚転用痕	SK1	
3	土師器	高坏		7.0		A C E H I	50	普通	橙	(屈折脚)		
4	土師器	甕		3.1	(5.0)	A C E K	50	普通	にぶい褐	煮沸痕顯著		
5	土師器	甕	(16.6)	4.2		D E H	30	普通	橙	煮沸痕 外面煤付着	No2	
6	土師器	甕	(15.8)	5.6		A C H I K	20	普通	橙	煮沸痕	SK1	
7	土師器	甕		10.5	5.6	A C E H I	35	普通	にぶい黄橙	長胴化	煮沸痕 No1	
8	土師器	甕		19.3		B E H I K	60	普通	にぶい赤褐	長胴化出現	煮沸痕 No4	

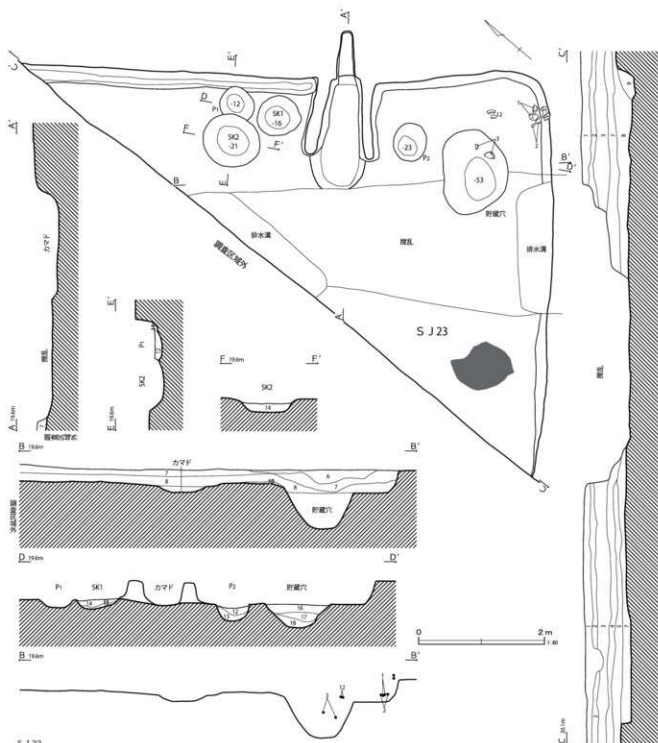
第23号住居跡 (第66・67図)

C・D-3グリッドに位置し、東半部が調査区域外にある。一部は攪乱によって削平されている。

平面形態は方形で、カマドを東壁に付設する。大型の住居跡で、主軸長6.4m・幅8.2mが検出されている。主軸方位はN-53°-Eを指し、確認面からの深さは0.21~0.37mほどである。覆土は自然堆積である。

カマドは粘性の強い灰色土によって造り付けら

れている。まず、カマド位置を浅く掘り窪めて、燃焼部の床面を貼り直し、その両側に袖を積み上げていく。燃焼部は長楕円形を呈し、先端部が攪乱によって壊されている。奥壁は住居跡壁が転用され、浅い煙道部が延びる。燃焼部・煙道部の床面直上には炭化物層 (e層) が形成され、その上には崩落した天井部 (c・d層) が堆積している。天井部内壁・袖部内壁に顕著な焼土化はみられない。焚き口部付近には二次的な被熱を受けた高坏



S J 23

- | | |
|------------|------------------------------|
| 1 餅作土 | |
| 2 暗オリーブ褐色土 | マンガン粒子 しまりあり |
| 3 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子・マンガン粒子少量
しまりあり |
| 4 暗オリーブ褐色土 | 灰色シルト粒子 焼土粒子・炭化物粒子少量 しまりあり |
| 5 オリーブ褐色土 | 灰色シルト粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子少量 しまりあり |
| 6 黒褐色土 | 灰色シルト粒子・炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |
| 7 灰色土 | 灰色シルト粒子・炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |
| 8 灰色土 | 灰色シルト粒子極少量 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |
| 9 灰色土 | 灰色シルト極少量 しまり・粘性あり |
| 10 黒褐色土 | しまり・粘性あり |
| 11 灰オリーブ色土 | 焼土粒子少量 炭化物粒子 しまり・粘性あり |

ビツ1・2

- | | |
|------------|-----------------------|
| 12 灰オリーブ色土 | 焼土粒子・炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |
| 13 灰オリーブ色土 | 焼土粒子・炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |

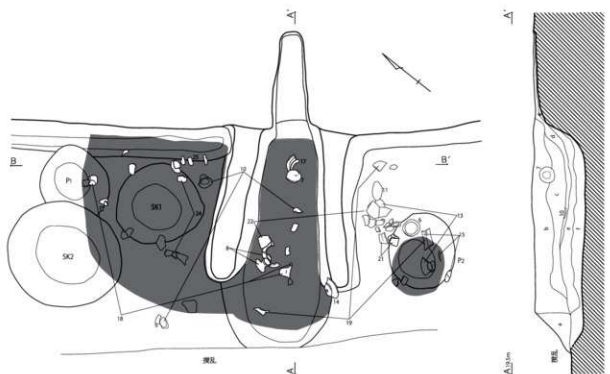
SK1・2

- | | |
|---------|--------------|
| 14 黒褐色土 | 焼土粒子 炭化物粒子多量 |
| 15 暗褐色土 | 焼土粒子多量 |

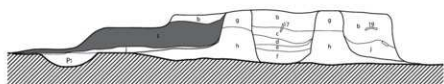
貯蔵穴

- | | |
|---------|------------------|
| 16 灰色土 | 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |
| 17 暗褐色土 | 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |
| 18 暗褐色土 | 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり |

第66図 第23号住居跡



B195m



B195m



S J 23 カマド

- a 黒褐色土 灰色シルト粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子
しまり・粘性あり
b 黒褐色土 灰色シルト粒子・焼土粒子・炭化物粒子
c 暗灰黄色土 天井部崩壊 灰色シルトブロック・焼土粒子・炭化物粒子
d 灰オリーブ色土 天井部崩壊 灰色シルトブロック・焼土粒子・炭化物粒子

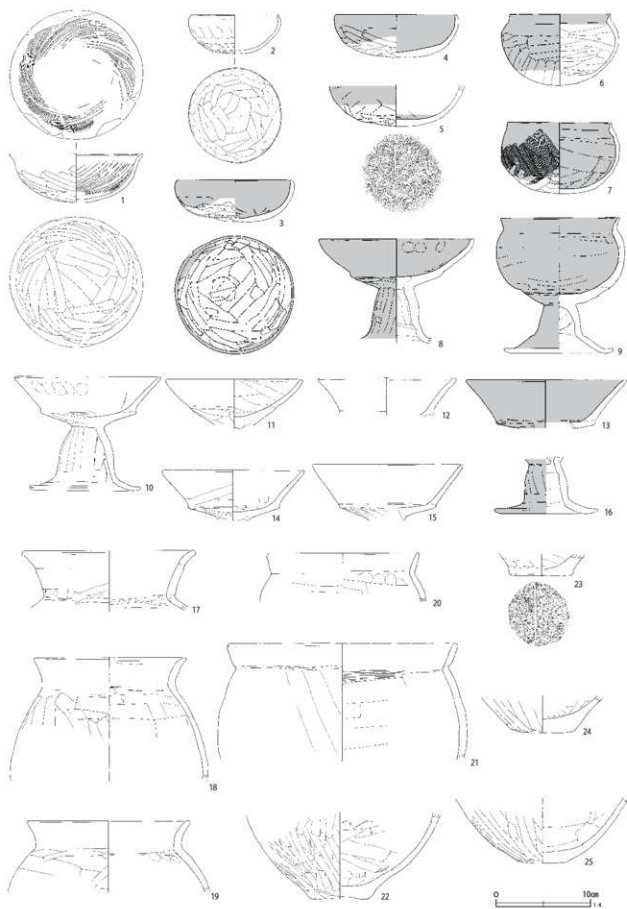
- e 黒色土 炭化物層 焼土粒子・炭化物粒子多量
f 暗灰黄色土 掘り方充填 焼土粒子・炭化物粒子含む しまり・粘性あり
g 灰黄色土 袖部 灰色シルト粒子含む しまり・粘性あり
h 灰オリーブ色土 袖部 しまり・粘性あり
i 灰層 焼土粒子・炭化物粒子多量
j 灰オリーブ色土 しまり・粘性あり

第67図 第23号住居跡カマド

(8)が出土しており、支脚に転用されたものと推定される。またこの支脚とともに甕(18)もあり、架け口に放置された状態で埋没している。総延長2.53m、燃焼部長1.82m・内法幅0.54m、煙道部長0.71m・幅0.20~0.28mである。また、カマド左側の南北約1m×東西1.3mの範囲に亘って、炭化

物が厚く堆積している。さらにカマド右側のPit2付近や南壁際付近にも炭化物の堆積がみられる。

カマド右側の南東隅には、長軸1.32m×短軸1.00mの不正楕円形で、床面からの深さ0.53mを測る掘り込みが認められる。位置的条件から貯蔵



第68图 第23号住居跡出土遺物

第28表 第23号住居跡出土遺物観察表 (第68図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	14.0	5.2		C E H I K	90	良好	橙	内斜口縁 暗文 No2・3		63-4
2	土師器	坏	9.4	4.0		C E H I K	95	普通	にぶい	坏身模倣 底部平底風 No4・5		63-3
3	土師器	坏	12.0	4.4		A C E H I K	95	普通	にぶい	内湾口縁 赤彩 貯蔵穴No1・2		64-1
4	土師器	坏	(12.8)	4.5		C E I K	70	普通	にぶい	内湾口縁 赤彩		63-5
5	土師器	埴		4.4		C E H I K	70	普通	にぶい	赤彩 二次的被熱 底部本葉痕		
6	土師器	椀	10.6	7.5		C E H I J	90	普通	にぶい	口縁外反 赤彩 二次的被熱 カマドNo28		64-2
7	土師器	椀	11.0	7.5		C E I K	100	普通	にぶい	口縁外反 赤彩 内面に黒色斑点状の付着物 カマドNo1		64-3
8	土師器	高坏	16.4	11.0		A C E H I	70	普通	灰黄褐	転用支脚 有種坏 赤彩 カマドNo7・10		64-4
9	土師器	高坏	(12.4)	14.2	最大径 11.7	A C E H I J	45	普通	にぶい	椀器載折脚 赤彩		64-5
10	土師器	高坏	(15.4)	12.0	最大径 11.8	A H I K	60	普通	橙	有種坏屈折脚 二次的被熱? カマドNo3・24・54		
11	土師器	高坏	14.3	5.3		A C E H I K	95	普通	にぶい黄 橙	有種坏 二次的被熱 カマドNo27		
12	土師器	高坏	14.5	4.0		C H I K	85	普通	橙	有種坏 No6		
13	土師器	高坏	(17.0)	5.1		A H I	20	良好	橙	有種坏 赤彩 二次的被熱 カマドNo52・53		
14	土師器	高坏	15.0	5.3		C E H I K	95	普通	橙	有種坏 二次的被熱 カマドNo5		
15	土師器	高坏	15.9	5.9		A C D H I	50	良好	橙	有種坏 二次的被熱 カマドNo42・44・51		
16	土師器	高坏	6.1		最大径 11.0	A H I K	80	普通	にぶい黄 橙	屈折脚 外面赤彩? No7		64-6
17	土師器	壺	(18.0)	6.4		E H I K	30	普通	にぶい	有段口縁(段退化) 二次的被熱 カマドNo2		
18	土師器	甕				A C H I K	40	普通	にぶい	長胴化 煮沸痕 煤付着 カマドNo11・15・56		
19	土師器	甕	(16.8)	7.6		A E H I	40	普通	橙	カマドNo6・25・43		
20	土師器	小型甕	(16.0)	5.3		C E H	15	普通	橙	煮沸痕顕著 カマド		
21	土師器	甕	(24.0)	12.5		A C I K	15	普通	にぶい黄 橙	大口 器面風化顕著 煤付着 カマドNo37・38		
22	土師器	甕		9.2	5.8	E H I K	60	普通	にぶい	(長胴化) 底部土台風 煮沸痕 カマドNo8・29		
23	土師器	甕		2.3	6.8	D E G H I	95	普通	にぶい黄 橙	本葉痕?		
24	土師器	甕		3.9	6.8	D H I K	70	普通	明赤褐	煮沸痕 カマドNo17・45		
25	土師器	甕		7.2	5.6	A E H I K	70	普通	赤褐	煮沸痕 器面風化顕著 カマドNo19		

穴と推定される。中層部から赤彩された内湾口縁坏(3)が出土している。

またカマドの周辺には、平面規模の小さなピット2本(Pit1・2)と平面規模の小さな土城2基(SK1・2)が位置する。規模は、Pit1が長径0.56m×短径0.50m×床面からの深さ0.12m、Pit2が長径0.60m×短径0.50m×床面からの深さ0.23m、SK1が長径0.70m×短径0.63m×床面からの深さ0.16m、SK2が長径0.92m×短径0.83m×床面からの深さ0.21mで、浅い。Pit2とSK1・2はカマド左側の炭化物層下に位置する。Pit1の上面にも炭化物が堆積する。いずれも用途は明確ではない。

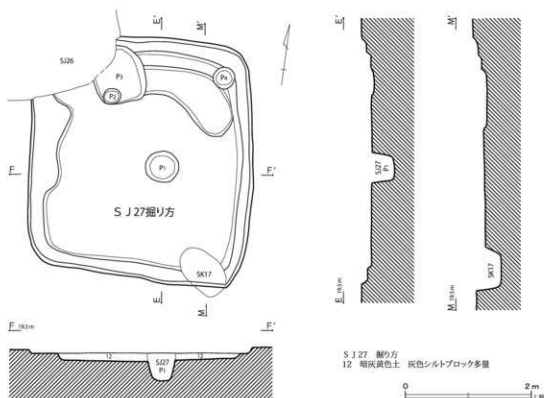
主柱穴は確認されていない。柱穴を掘り込まないタイプの住居跡とも考えられるが、貯蔵穴とした南東隅の掘り込みが主柱穴である可能性も否定できない。

壁溝は、カマド左側の東壁に沿って巡っている。幅0.22～0.29m、床面からの深さ0.05～0.06mである。

遺物は、カマド・貯蔵穴の周辺部に集中する。坏類には、内斜口縁や赤彩された内湾口縁・坏身模倣・外反口縁鉢タイプが含まれる。高坏は有種坏屈折脚で、鉢が載るタイプも1点含まれている。壺は口縁部中位に形散化した稜が残り、甕には長胴化がみられる。これらの器形や組成から、銭塚・城敷IV期古段階に相当する。

第25・26・27号住居跡 (第69・70図)

第25・26・27号住居跡はE・F-5・6グリッドに位置し、南北に並んだ重複する3軒の住居跡である。覆土の堆積状況や出土遺物の比較などから、最北の第25号住居跡が最も新しく、次に中央の第26号住居跡、最南の第27号住居跡が最も古い。



第70図 第27号住居跡掘り方

第25号住居跡方半部が調査区域外にある。第26号住居跡と重複する部分は検出されていない。南東辺約2.8m・南西辺約2.9m、南東辺の方位はN-42°-Eを指す。確認面からの深さは0.10mで暗オリーブ褐色土の単層である。南東壁際には2本のピットが並んでいる。Pit1は長径0.35m×短径0.33m×床面からの深さ0.18m、Pit2は長径0.30m×短径0.23m×床面からの深さ0.30mで、出入口施設に関連する機能などが考えられる。また、調査区域外との境付近には、炭化物の堆積層がみられる。主柱穴・炉・貯蔵穴・壁溝は確認されていない。遺物は床面直上から出土し、古墳時代前期の台付甕の台部2点を図示し得た。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-3に相当する。

第26号住居跡は平面形態が方形で、第25号住居跡と重複する北東隅、第27号住居跡と重複する南東隅の壁はトレンチによって壊されていた。南北長3.95m・東西長3.67m、確認面からの深さは

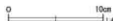
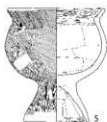
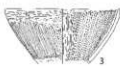
0.22mで南北軸方位はN-16°-Wを指す。覆土には灰色シルトブロックが多量に含まれていることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。また、西半部の床面には、炭化物と焼土が広がっている。この焼土は北半部の中央付近に位置することから、地床炉であった可能性も考えられる。ピットは2本検出され、北東隅に位置するPit1は長径0.68m×短径0.56m×床面からの深さ0.14mの規模からも貯蔵穴とみられる。Pit2は長径0.19m×短径0.17m×床面からの深さ0.12mと規模は小さいが、南西部中央に陥取していることから、主柱穴と推定される。ただし、対応する他の主柱穴は検出されていない。遺物は少なく、図示し得るものはなかった。

第27号住居跡も方形の住居跡で、北西隅付近は重複する第26号住居跡によって削平されている。また、南東隅に重複する第17号土壌との新旧関係は不明である。南北長3.90m・東西長3.48m・確

第25号住居跡



第27号住居跡



第71図 第25・27号住居跡出土遺物

第29表 第25・27号住居跡出土遺物観察表 (第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	台付甕		7.7	10.9	E H I K	90	普通	に沁・橙	SJ25 台部 二次的被熱 内面黒色化	No.2-3	65-1 65-2
2	土師器	台付甕		8.3	10.7	E H I K	70	普通	明褐色	SJ25 台部	No.1	
3	土師器	埴	(12.2)	5.8		C E H I K	60	普通	橙	SJ27 直口縁	No.2	
4	土師器	壺	8.6	15.0	4.9	C E H I K L	95	普通	橙	SJ27 単口縁 底部ヘラケズリ	No.4	
5	土師器	台付甕	10.3	12.0	最大径D	A C D E H I	90	普通	に沁・橙	SJ27 小型 煮沸痕顯著 黒色の付着物	No.3	
6	土師器	台付甕	(14.0)	12.8		E H I	30	普通	橙	SJ27 煮沸痕	No.1	

認面からの深さは0.12m、南北軸方位はN-5°-Wを指す。床面は貼床で、広範囲にわたって炭化物が広がる。床面下からは掘り方が確認され、掘り方は周辺部をテラス状に残して中央部を0.1~0.15mほど掘り込んでいる。住居北西部に炉が位置する。長軸0.33m×短軸0.32mの円形に焼土化し、床面からの深さ0.04mほどの浅い掘りこみもみられる。ピットは中央部の Pit1、炉の東側に接する Pit2、北東隅の Pit4 の3本である。規模は、Pit1 が長径0.53m×短径0.50m×床面からの深さ0.44m、Pit2 が長径0.27m×短径0.25m×床面からの深さ0.23m、Pit4 が長径0.35m×床面からの深さ0.34mである。用途は明確ではない。また Pit3 として調査した掘り込みは、南北軸0.92m×東西軸0.81m×床面からの深さ0.11mの方形である。覆土の観察から Pit2 と新旧関係にあり、第27号住居跡よりも古い土壌の可能性が高い。

遺物は長頸の小型壺2点と、胴部の張りの強い

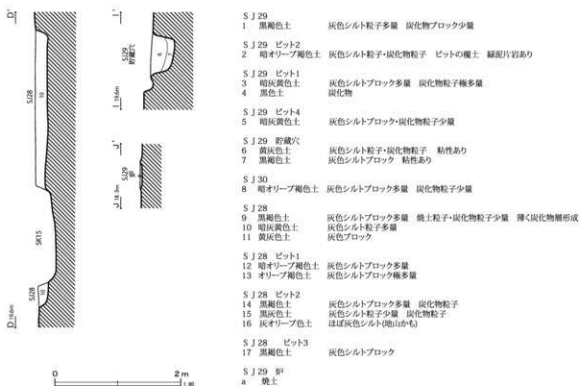
小型・中型の台付甕1点ずつが出土している。銭塚・城敷Ⅱ期、反町編年Ⅱ-2に相当する。

第28号住居跡 (第72・73図)

E・F-6グリッドに位置し、北側約1/3は調査区域外にある。重複する第29・30号住居跡、第15号土壌よりも古い。

平面形態は南北方向に長軸をもつ長方形で、長軸長5.6m以上、短軸長4.73m、長軸方位はN-32°-Wを指す。確認面からの深さは0.32mである。覆土には灰色シルトブロック・粒子が多量に含まれていることから、人為的に埋め戻されている可能性がある。

主柱穴4本の住居で、このうち Pit1・Pit2・Pit3 の3本が検出されている。対応する残りの1本は調査区域外にある。主柱穴の規模は、Pit1 が長径0.48m×短径0.43m×床面からの深さ0.15m、Pit2 が長径0.45m×短径0.42m×床面からの深さ0.24m、Pit3 が長径0.61m×短径0.56m



第73図 第28・29・30号住居跡(2)



第74図 第28号住居跡出土遺物

第30表 第28号住居跡出土遺物観察表(第74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	壺	(21.0)	24.8		G	20	普通	に黒い明濁	有段口縁 二次的焼熟 赤彩不明	No.1	65-3

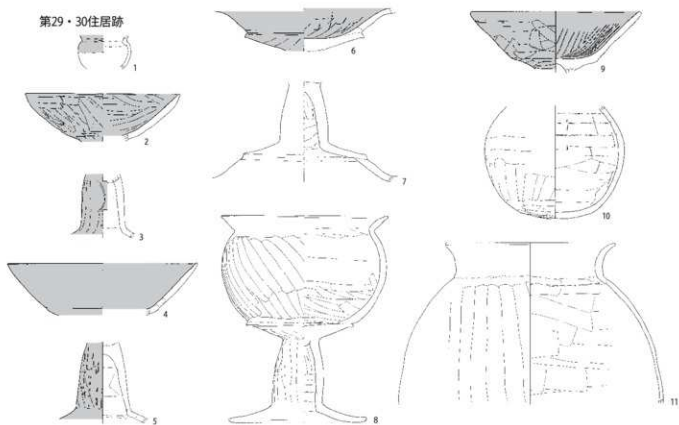
×床面からの深さ0.08mである。柱間距離は長軸方向(Pit3-Pit2)3.0m、短軸方向(Pit2-Pit1)2.3mで、長方形を呈する住居の形状と合致する。

炉などの厨房施設はみつかっていないが、床面には炭化物の薄い堆積がみられる。壁溝は、南壁

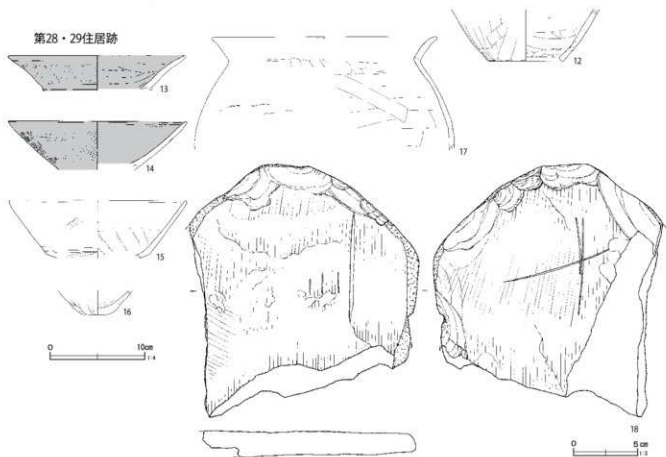
の西側1/2のみに検出されている。幅0.23m、床面からの深さ0.06mである。

遺物は南東隅から大型壺が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期・反町Ⅱ-1に相当する。

第29·30住居跡



第28·29住居跡



第75图 第28·29·30住居跡出土遺物

第31表 第28・29・30号住居跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	小型用		3.7		E H I K	20		にぶい	SJ29-30	外面赤彩 器面風化顕著	
2	土師器	高坏	(16.4)	5.0		A H I K	15	普通	にぶい	SJ29-30	有稜环 赤彩	
3	土師器	高坏		6.8		A E H I K	20	普通	にぶい	SJ29-30	外面赤彩 外面に半丸形の線刻	
4	土師器	高坏	(20.0)	5.5		A E H I J K	20	普通	橙	SJ29-30	有稜环 二次的被熱顕著 №13・20	
5	土師器	高坏		8.6		A C D E H I J	85	普通	にぶい	SJ29-30	屈折脚 外面赤彩 貯蔵穴№1	
6	土師器	高坏		4.6		E H I K	80	普通	にぶい	SJ29-30	有稜环 赤彩 №10	
7	土師器	高坏		10.7		C E H I K	60	普通	橙	SJ29-30	有段脚 支脚転用痕 №15・17	
8	土師器	高坏	17.3	21.9	最大径 14.6	E H I K	80	良好	にぶい	SJ29-30	極薄載屈折脚 支脚転用痕 №16・18・19	65-5
9	土師器	甕	(17.8)	17.2		H I K	30	普通	明赤褐	SJ29-30	長胴化出現 煮沸痕 器面風化 №20	
10	土師器	小型壺		11.9		A C E H I K	95	普通	橙	SJ29-30 Pit1No2	球胴形 底部ケズリ出し 二次的被熱	65-6
11	土師器	高坏	18.2	6.5		D E H	100	良好	にぶい	SJ29-30	有稜环 赤彩 二次的被熱 Pit1No1	
12	土師器	甕		5.4	(7.8)	C E I K	25	普通	にぶい	SJ29-30	単孔式 外面煮沸痕 №2	
13	土師器	高坏	(18.8)	3.6		C E I J K	20	普通	にぶい	SJ28-29	有稜环 赤彩 内面被熱	
14	土師器	高坏	19.0	5.1		B C H I K	25	普通	明赤褐	SJ28-29	有稜环 赤彩	
15	土師器	高坏	(18.8)	6.1		A E H I K	10	普通	明赤褐	SJ28-29	有稜环	
16	土師器	甕		2.6	3.0	C I J K	70	普通	灰褐	SJ28-29	底部ケズリ出し 煮沸痕	
17	土師器	甕	(23.7)	12.1		A E H I K	20	普通	橙	SJ28-29	広口 煮沸痕 器面風化 №19	

第29・30号住居跡 (第72・73図)

E・F-6グリッドに位置する。調査段階では重複する2軒の住居跡と捉えられていたが、覆土の堆積状況の再検討し、軸を揃えた相似形を呈することから、第30号住居跡が第29号住居跡へ拡張されたものと判断される。

当初、構築された第30号住居跡は主軸方位をN-58°-Wに向け、主軸長4.20m、短軸長4.12mの平面台形である。この掘り込み部に灰色シルトブロックを多量に含む暗オリーブ褐色土によって埋戻され、第29号住居跡の床面が形成されている。

拡張された第29号住居跡は、主軸長5.66m短軸長5.60mの方形で、北隅が調査区域外にある。

確認面からの深さは0.11mである。

ピットは、拡張前第30号住居跡南東壁際に沿った3本 (Pit1・Pit2・Pit3) と、東隅のPit4がある。このうちPit1・Pit2・Pit3の3本が平面規模と床面からの深さに共通性が認められ、主柱穴の可能性をもつが、これと対応する位置にピットはみつからない。東隅のPit4は、平面規模が近似するが、床面からの深さが半分ほどと浅い。

炉は主軸方向の北西壁側によって位置する。長径0.40m×短径0.27m、床面からの深さ0.03mほ

どの範囲に焼土化がみられ、周囲には炭化物が薄く堆積する。

貯蔵穴は、南隅に位置する。長径0.76m×短径0.75mの円形で、床面からの深さ0.38mである。壁溝は、南東壁に沿って検出されている。幅0.20～0.22m、床面からの深さ0.06mである。

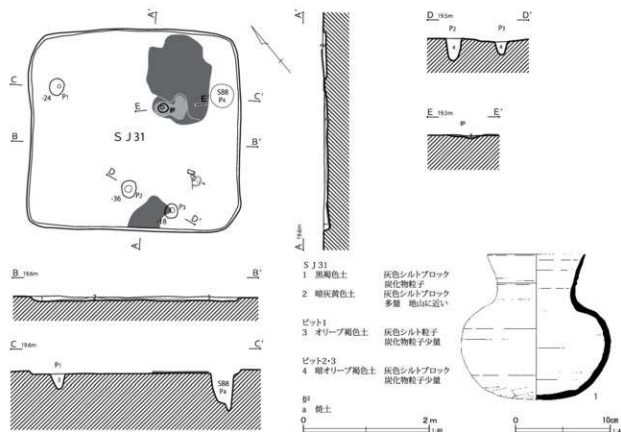
遺物は、拡張された第29号住居跡床面付近からの出土が多い。供膳具には火類がなく、有稜环屈折脚の高坏が主体である。これに有段脚の高坏(7)と、鉢を載せたもの(8)も含まれている。これらの高坏の脚はいずれも長いものが多い。甕には平底のもの(16)が出現し、大型で胴部の張りも強い(9・17)。銭塚・城敷Ⅲ期古段階に相当する。

18は大型の砥石で、上下両面に使用痕がみられる。側縁部に成形時の打撃痕が残る。長20.05cm×短18.20cm×厚さ2.40cm、重さ1157.0g、石材は緑泥片岩である。(Pit6/図版65-4)

第31号住居跡 (第76図)

F-6・7グリッドに位置し、第8号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は方形で、主軸長3.23m・幅3.37m、主軸方位はN-39°-Eを指す。確認面からの深さは0.04～0.09mと浅い。



第76図 第31号住居跡・出土遺物

第32表 第31号住居跡出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	直口壺	(10.2)	15.3		D I	90	良好	黒灰	産地不明 No.5		65-7

炉は、地床炉である。中央からやや北東に寄って位置する。径0.13m×0.15m×床面からの深さ0.04mほどの浅い掘り込みを中心に、南北0.4m×東西.53mの範囲が焼土化している。また炉を南西隅とした南北1.4m×東西1.0mの範囲には、炭化物が薄く堆積している。さらに、炭化物の堆積は、南壁際にも認められる。

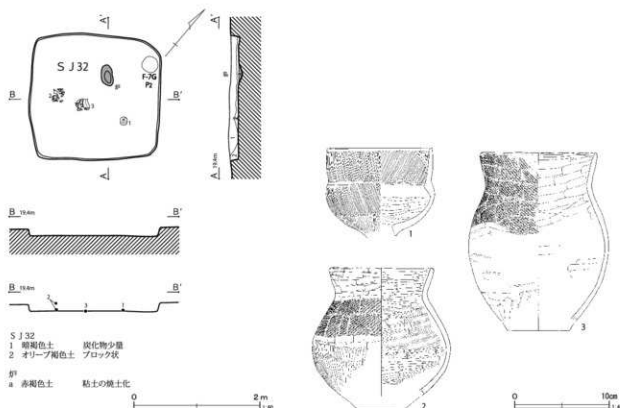
ピットは3本検出されている。Pit1は北西部の西壁際に、Pit2・Pit3は南壁際に位置する。規模は、Pit1が径0.24m×床面からの深さ0.24m、Pit2が径0.25m×床面からの深さ0.36m、Pit3が径0.22m×床面からの深さ0.18mである。位置や規模などからいずれも主柱穴とは考えがたい。

貯蔵穴や壁溝はみつかっていない。

遺物は吉ヶ谷式の細片数点と図示した須恵器壺

が出土している。図示し得なかったが、炉が付設されていることから、住居自体は吉ヶ谷期と推定される。

1は須恵器の直口壺である。胴部中位に最大径をもち、底部はやや平底風に成形されている。口縁部は薄く、端部は丸く仕上げられている。頸部外面には沈線が2条巡る。肩部から胴部下位にロクロナデによって整形されている。胴部下位には手持ちケズリが行われ、底部に指ナデ風の指頭王痕がみえる。内面はロクロナデが施され、底部にはヘラ工具の当たった痕跡があるが、観察が困難である。口縁内面・肩部外面を中心に白色の自然釉が付着している。肩部の段・扁平な胴部・平底などの要素に、古い様相がみられる。形態・製作技法・胎土等の特徴からは、産地を特定することは



第77図 第32号住居跡・出土遺物

第33表 第32号住居跡出土遺物観察表 (第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	脚付碗	11.0	9.5		A C D E H I J	100	普通	にぶい橙	縦割1/3が焼熟、器面風化 ミガキはナデ後粗くなっ ている Na3	ミガキはナデ後粗くなっ ている Na3	65-8
2	吉ヶ谷	甕	(11.1)	13.5		A G I K	60	良好	黒褐	胴部上手に単節 LR2段施文 口縁端部に縄文原体押 圧 No1-一括	口縁端部に縄文原体押 圧 No1-一括	66-1
3	吉ヶ谷	甕	12.0	17.9		A E G	80	普通	橙~黒褐	口縁部~胴部上半に単節 RL 煮沸痕 No2	口縁部~胴部上半に単節 RL 煮沸痕 No2	66-2

困難である。

第32号住居跡 (第77図)

F-7グリッドに位置する。

平面形態は方形で、主軸長2.02m・幅2.07m、確認面からの深さは0.12~0.15mで、主軸方位はN-39°-Wを指す。覆土は自然堆積で、南壁際から埋没した状況が観察できる。

炉は地床炉である。住居の中心から北西壁方向によって位置する。火床面は、長径0.34m×短径0.20mの楕円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.06mほどの浅い掘り込みがみられる。

主柱穴や貯蔵穴・壁溝は検出されていない。

遺物は床面直上から出土している。

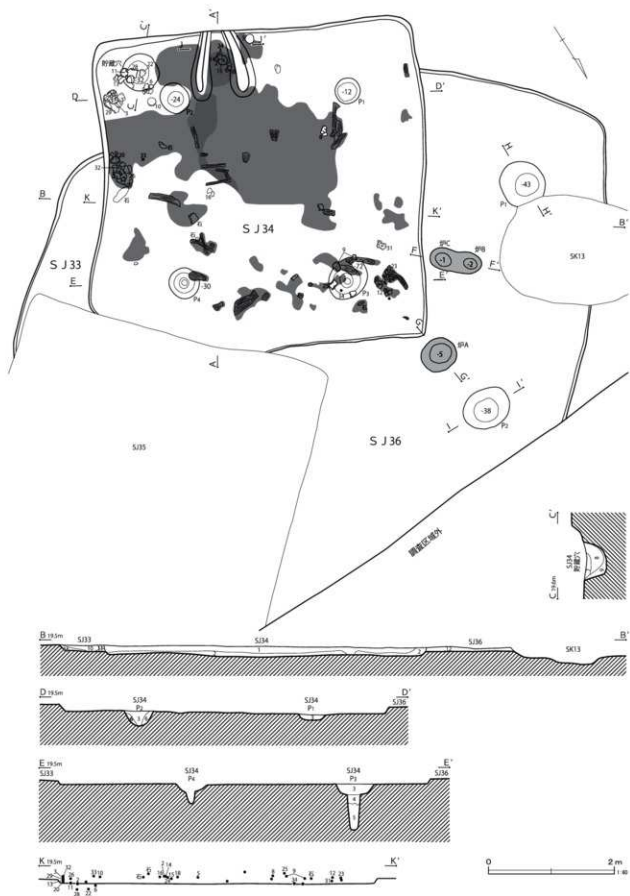
1は直口碗が載る脚付碗、2・3は吉ヶ谷式の甕である。

2は、口縁端部に縄文原体を押し、肩部外面に単節LRを上から下方向に反時計回りに2段施文している。器面の剥離が顕著で、部分的に文様の残りが悪い。3は、口縁部から肩部にかけて単節RLが反時計回りに上から下方向へと施文されている。器面風化が顕著である。

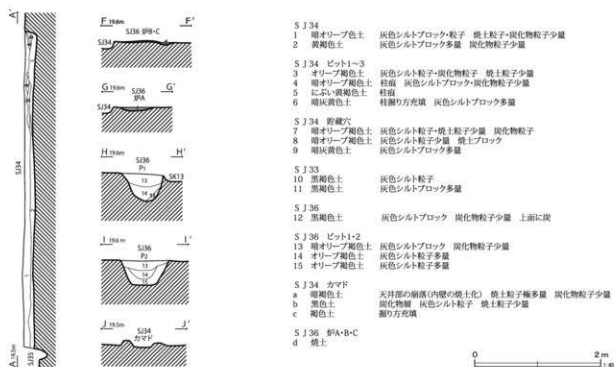
銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-1に相当する。

第33・34・36号住居跡 (第78・79図)

E・F-8・9グリッドに第33~36号住居跡の4軒が集中する。新日関係は、第35号住居跡が最も新しく、次が第34号住居跡、第33・36号住居跡



第78图 第33·34·36号住居跡(1)



第79図 第33・34・36号住居跡(2)

が最も古い。

第34号住居跡は北東隅を第35号住居跡によって攪乱されている。

平面形態は方形で、カマドを南壁の中央付近に付設する。主軸長5.16m、幅5.06m、確認面からの深さは0.11～0.17mを測り、主軸方位はN-151°-Wを指す。住居跡全域に炭化物が堆積し、主柱穴付近や柱間位置から炭化材がみつかることから、焼失住居と推定される。

主柱穴は Pit1・Pit2・Pit3・Pit4 の4本が相当する。主柱穴の規模は、Pit1 が径0.41m×床面からの深さ0.12m、Pit2 が径0.46m×床面からの深さ0.24m、Pit3 が径0.65m×床面からの深さ0.72m、Pit4 が径0.48m×床面からの深さ0.30mである。南側の Pit1・Pit2 は浅いが、北側の Pit3・Pit4 では柱痕の掘り込みが検出されている。柱間距離は、主軸方向が Pit1-Pit3=3.0m、Pit2-Pit4=2.95m、東西方向が Pit1-Pit2=2.75m、Pit3-Pit4=2.6mを測る。距離数値にバラつきが見られるが、主軸方向が長く、東西方向

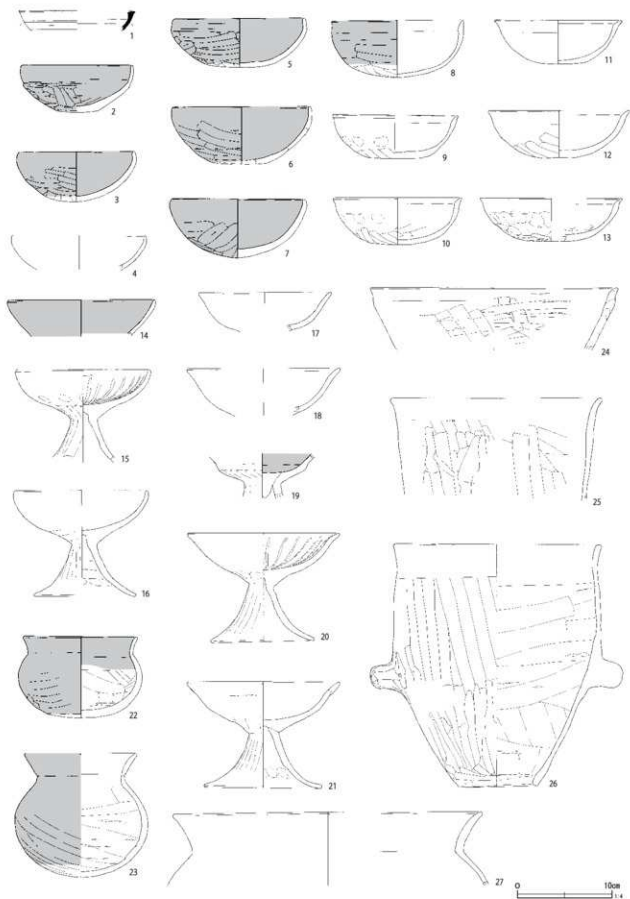
が短い住居形態と合致している。

カマドは、燃焼部のみが検出され、煙道部は削平されている。袖部は造り付けか、地山掘り残しかは不明である。付け根の住居南壁から燃焼部先端に向かってハの字に開いている。燃焼部の中央付近では、裾部を欠損した高環(15)が倒立させた状態で支脚に転用されている。また環や高環の環部辺も一括して出土していることは特徴的である。燃焼部には天井部が崩落(内壁焼土化)し、炭化物層が形成されている。特に転用支脚前面には高物が厚く堆積し、焚き口部が推定できる。長さ1.07m、内法幅0.40mを測る。残存状態が影響している可能性もあるが、カマド導入段階の初期的な様相が感じられる。

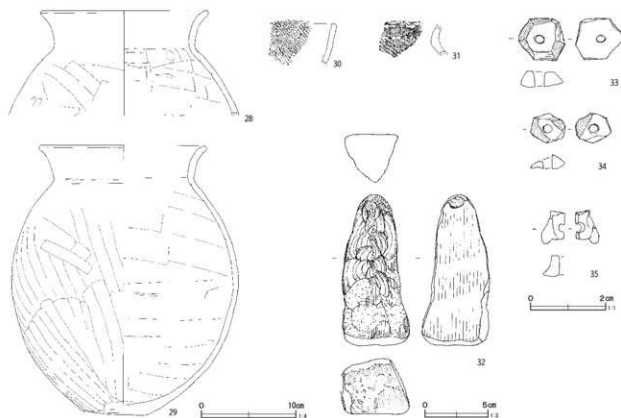
貯蔵穴は、カマド左側の南東隅に付設されている。長軸0.60m×短軸0.59mの平面円形で、床面からの深さは0.32mを測る。中から、環(13)・鉢(22)・甕(28)が出土している。

壁溝は巡っていない。

遺物は床面直上～数cmの範囲から出土している。



第80图 第34号住居跡出土物(1)



第81図 第34号住居跡出土遺物(2)

浅い覆土層にもかかわらず出土量が多く、住居の焼失が影響しているものと推測される。

1は須恵器の坯身である。図示部の残存率10%程度の小破片から、復元実測した。外面には自然釉が付着している。形態や胎土等の特徴から、陶邑産のTK47型式段階のものと推定される。

土師器の坯類は、内罅口縁と内斜口縁のみで、模倣坯がみられない。有稜坏屈折脚高坏は稜部が退化したもので、内罅口縁を載せたものもある。甕は須恵器模倣で、把手が付く。甕には長胴化の兆しが見える。器形や器種組成等の特徴から、銭塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。

32は東壁際から出土した砥石である。本来は角柱状の形態であったものが再加工され、断面三角形となっている。再加工の目的は不明である。現存する長さ11.95cm・幅5.30cm・厚さ4.40cm、重さ315.7g、石材は凝灰岩である。(No20/図版68-4)

33~35は白玉未成品である。33・34は穿孔後に廃棄された工程品で、いずれも側面部に形削り工程段階の加工痕が残る。大きさは、33が長さ1.21cm・幅1.11cm・厚さ0.37cm・重さ0.6g(No32)、34が長さ0.88cm・幅0.75cm・厚さ0.40cm・重さ0.3g(No31)である。35は穿孔段階の破損品である。長さ0.87cm・幅0.35cm・厚さ0.37cm・重さ0.2gである。33は東壁際付近、34はPit3から出土している。(図版107-1)

このほかに滑石製品の製作途上の剥片が2点出土している(第35表)。残存する大きさ・形状等から、白玉製作工程の形削り剥片・切削工程品・切削剥片に分類した。これらの遺物から、白玉製作にかかる工房機能が推定されるが、製作に伴う施設や工具等は発見されていない。

第33号住居跡は南北0.9m・東西2.4m(最長3.5m)の狭い範囲が検出されているに過ぎない。また確認面からの深さも0.08mほどで、不明な点

第34表 第34号住居跡出土遺物観察表 (第80・81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏身		2.2		I K	10	良好	灰	坏目身 陶色産 TK47 一括		66-3
2	土師器	坏	11.6	5.0	4.4	C E H I K	85	普通	浅黄橙	内埴口縁 平底 赤彩 No6-10 カマド・貯蔵穴		66-4
3	土師器	坏	12.0	5.3		C E H I	100	普通	橙	内埴口縁 平底 赤彩 二次的被熱 No17		66-5
4	土師器	坏 (14.0)	3.6			A H I J K	10	不良	橙	内埴口縁 赤彩 器面風化顕著		
5	土師器	坏	13.6	5.1		C E H	100	良好	橙	内埴口縁 平底 赤彩 No3		66-6
6	土師器	坏	14.6	6.1	4.5	B E H I K	85	普通	橙	内埴口縁 平底 赤彩 二次的被熱 No7-9 貯蔵穴		66-7
7	土師器	坏	13.8	6.2		A C E H I K	80	普通	にぶ赤	内埴口縁 赤彩 器面風化顕著		66-8
8	土師器	坏 (13.9)	6.0			A B C H I K	35	普通	にぶ赤	内斜口縁 赤彩 内面風化顕著 No1		66-9
9	土師器	坏	13.2	4.6		A E H I J K L	80	普通	にぶ赤	内斜口縁 二次的被熱 No23		67-1
10	土師器	坏	13.5	5.0		A C H I J K	100	普通	橙	内斜口縁 二次的被熱 器面風化顕著 No8		67-2
11	土師器	坏	13.4	4.6	4.4	E H I J	100	普通	橙	内斜口縁 二次的被熱 器面風化顕著 No11-14 貯蔵穴		67-3
12	土師器	坏 (17.8)	5.0			E I J K	60	普通	橙	内斜口縁 器面風化顕著 No26		67-4
13	土師器	坏 (15.0)	4.5			A C E H I J K	25	普通	にぶ赤	内斜口縁 二次的被熱 No13 貯蔵穴		67-5
14	土師器	高坏 (15.4)	3.9			A C E I K	20	普通	明赤褐	有種坏 赤彩 外面二次的被熱 No6 カマド		
15	土師器	高坏	14.0	9.8		A E F H I J K	90	普通	橙	転用支脚 坏蓋載 坏部内面暗文 脚部凹孔(3) 器面風化顕著 No7		67-6
16	土師器	高坏 (14.0)	11.2		10.5	E H I J K	60	普通	橙	坏蓋載 器面風化顕著 No15		67-7
17	土師器	高坏 (14.0)	4.1			E H I J	40	普通	橙	有種坏種退化 器面風化顕著		
18	土師器	高坏 (16.0)	5.0			A E H I J K	40	普通	にぶ赤	有種坏種退化 内面、外面ともに二次的被熱により、器面剥落し、調整痕不明瞭 No4 カマド		67-8
19	土師器	高坏	4.7			B D E H I K	70	普通	にぶ赤	有種坏 赤彩 二次的被熱		
20	土師器	高坏 (16.0)	11.4		10.8	A C E H I K	70	普通	橙	有種坏種退化 坏部内面暗文 二次的被熱 器面風化顕著 No18		67-9
21	土師器	高坏 (15.8)	11.3		12.2	B C E H I K	70	普通	橙	有種坏種退化 器面風化顕著 赤彩? No25		68-1
22	土師器	鉢 (12.0)	8.6			A C E H I K	50	普通	橙	赤彩 二次的被熱 No12 貯蔵穴		68-2
23	土師器	鉢 (12.0)	13.1			C E H I J K	60	普通	にぶ赤	赤彩 二次的被熱 器面風化顕著 No27		68-3
24	土師器	瓶 (26.0)	6.5			A B E	10	普通	にぶ黄橙	No5 カマド		
25	土師器	瓶 (22.0)	10.9			A C E I J K	15	普通	褐灰	No22		
26	土師器	瓶	21.6	25.7	8.2	E H I K	85	普通	にぶ赤	把手付 No19		68-5
27	土師器	甕 (32.6)	78.0			E H I J	5	普通	にぶ赤	広口甕 器面風化顕著		
28	土師器	甕	17.2	11.1		C E H I K	20	普通	橙	煮沸痕 No14 貯蔵穴		
29	土師器	甕	17.3	28.6	7.0	A C E I K	70	普通	にぶ赤	煮沸痕 No16		68-6
30	古ッ谷	壺?	4.3			C H I K	5	普通	浅黄橙	単節 RL		
31	古ッ谷	壺?	3.3			A E H I K	5	普通	浅黄橙	単節 RL		

第35表 第34号住居跡出土滑石剥片一覧表

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
4	形剥片	0.970	0.880	0.090	0.1	No32	5	形剥片	0.840	0.620	0.060	0.0	No32

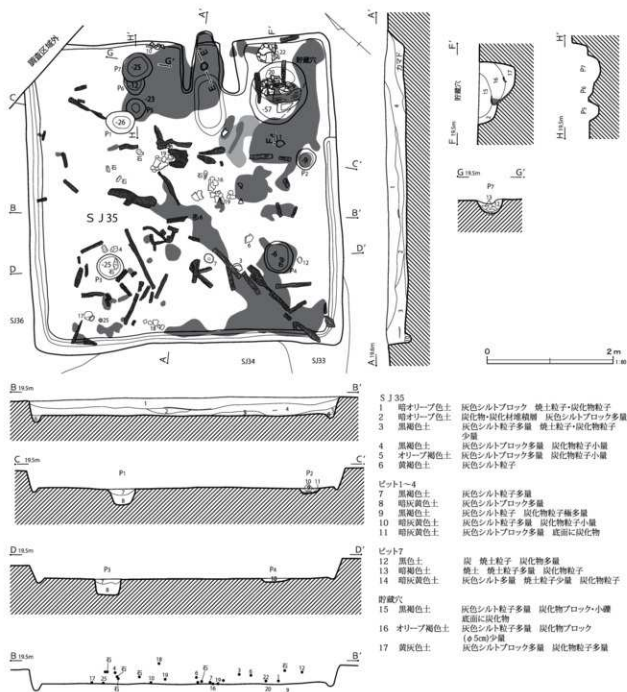
が多い。南西隅と思われる壁の屈曲がみられるが、第33号住居跡よりも僅かに浅い第36号住居跡に、対応するプランは確認されていない。むしろ、第36号住居跡と酷似した方向性を示し、確認面からの深さや覆土に共通性が認められる。このような状況から、第33号住居跡と第36号住居跡は同一の大型住居と捉えられる。

第33・36号住居跡は重複する第34・35号住居跡によって半分以上が削平され、北側は調査区域外にある。また、第13号土壌とも重複し、覆土の

堆積状況から第33・36号住居跡の方が古い。

平面形態は、各辺がわずかに丸みをもつ方形で、長軸長9.15mが検出され、短軸長は8.85mを測る。長軸方位はN-49°-Eを指す。確認面からの深さは0.08mと浅い。

2本検出されたピット(Pit1・Pit2)は、主柱穴と思われる。恐らくは主柱穴が6本もしくは8本の住居跡になるものと推定される。規模は、いずれも径0.70mで、床面からの深さはPit1が0.43m、Pit2が0.38mでほぼ同規模である。柱間



第82図 第35号住居跡

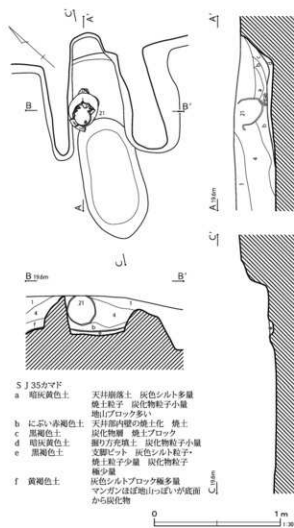
距離は3.65mを測る。

炉は3基検出され、いずれも地床^アである。主柱穴を結んだ線よりもやや内側に並んでいる。炉^アは長径0.68m×短径0.51mの円形に焼土化し、床面からの深さ0.05mの浅い掘込みがみられる。炉^イと炉^シは重複し、新旧関係・同時使用等につ

いては不明である。炉^イは長径0.82m×短径0.35m×床面からの深さ0.03m、炉^シは長径0.82m×短径0.35m×床面からの深さ0.02mの範囲が焼土化している。

壁溝は巡っていない。

遺物は出土していない。時期は厨房施設が炉^イで、



第83図 第35号住居跡カマド

重複する第34号住居跡よりも古いことから、銭塚・城敷Ⅱ～Ⅲ期段階に相当すると思われる。

第35号住居跡 (第82・83図)

E-9グリッドに位置し、北隅が調査区域外にある。重複する第34・33・36号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、カマドを北東壁に付設する。主軸長4.90m・幅4.97mを測り、主軸方位はN-47°-Eを指す。確認面からの深さは0.25~0.29mほどである。住居跡中層部のほぼ全域にわたって炭化物と炭化材が検出されている。床面状に約0.10m前後の覆土堆積層の上部にあたり、単純に焼失住居と断定することは困難である。

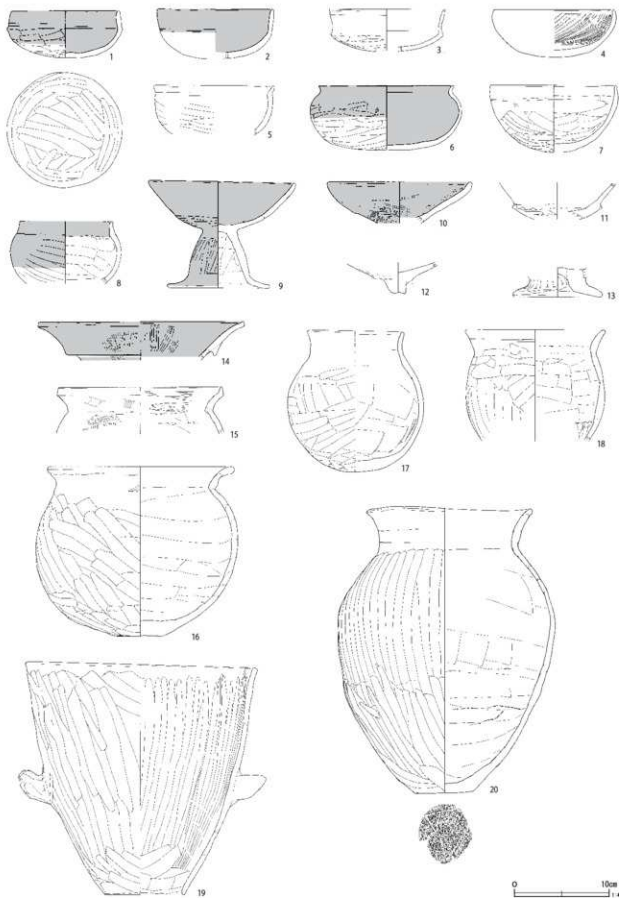
主柱穴は、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本が

位置的には相当する。北列のPit1は径0.40m×床面からの深さ0.26m、Pit3は径0.41m×床面からの深さ0.25mで、同等の規模をもつ。一方南列のPit2は径0.32m×床面からの深さ0.09m、Pit4は径0.48m×床面からの深さ0.06mと浅い。このほかに主柱穴の候補が無いため、意図的に深さが区別された構造や、もしくはPit1・Pit3の2本主柱穴構造も検討する必要がある。柱間距離は、主軸方向のPit1-Pit3=2.3m、Pit2-Pit4=1.6m、Pit1-Pit2=3.0m、Pit3-Pit4=2.7mで、住居の形状とは若干異なる台形に配置されている。

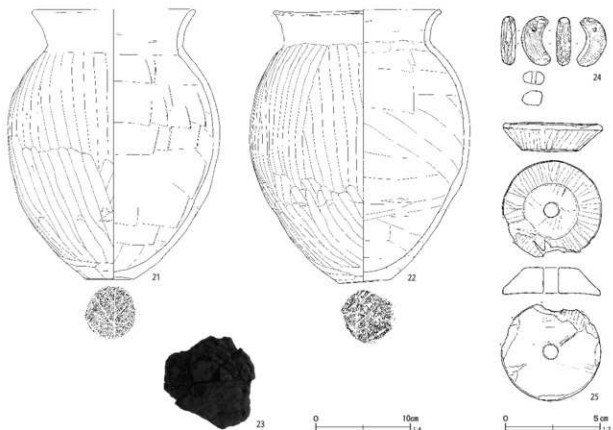
カマドは、地山掘り残しの袖を基礎にして構築されている。燃烧部が住居壁の内側に位置し、ここから長さ0.18m×幅0.26mほどの短い煙道部が張り出している。燃烧部は長方形で、前面部には長径0.98m×短径0.46m×床面からの深さ0.02~0.06mの楕円形の浅い掘込みがみられる。燃烧部は長さ0.82m×幅内法0.38~0.50mである。また燃烧部の中央付近には、径0.13m×床面からの深さ0.05mの支脚を支える小ピットが検出されている。火床面の上面には炭化物層(C層)が形成され、直上には天井部の崩落土(a・b層)が堆積している。特にb層は天井部の内壁が焼土化したもので、同様に袖部内壁の焼土化も顕著である。さらに甕(21)が架け口にかけてられたままの状態出土している。

貯蔵穴は、カマド右側の東隅に付設されている。長軸1.05m×短軸0.87mの楕円形である。掘り方は西半部にテラスをもち、住居跡の床面からの底面までの深さは0.57mを測る。中から高坏(9)と甕(20)が出土している。

ピットはカマドの左側に主軸方向に3本が並んでいる。Pit5は主柱穴Pit1と重複し、径0.32m×床面からの深さ0.23mを測る。主柱穴と遜色がないもので、住居の建て直しなども検討する必要がある。Pit6・Pit7は重複し、Pit6が径0.33m×床面からの深さ0.12m、Pit7が径0.46m×床面か



第84图 第35号住居跡出土遺物(1)



第85図 第35号住居跡出土遺物(2)

第36表 第35号住居跡出土遺物観察表(第84・85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	11.6	5.8		A E H I J K	100	普通	にぶ・黄釉	坏身模散 赤彩 二次的被熱	No.20	69-1
2	土師器	坏	12.3	5.2		C E H I K	60	普通	にぶ・黄釉	坏蓋模散 赤彩 器面風化顕著		68-7
3	土師器	坏	(12.2)	4.4		A H I K	40	普通	橙	北武蔵型坏蓋模散	No.13	
4	土師器	坏	(12.8)	5.0		A H I J	30	良好	橙	内凹口縁 内面暗文 外面風化顕著	No.4	69-4
5	土師器	坏	12.8	5.2		A D E H I J K	30	普通	橙	内斜口縁 器面風化顕著 赤彩(範囲不明)		
6	土師器	椀	(14.2)	6.8		C I K	60	普通	にぶ・赤周	外反口縁 赤彩	No.10-14	69-5
7	土師器	椀	13.4	7.0	(2.5)	A E H I K	95	普通	にぶ・橙	内凹口縁 平底風 赤色斑点(赤彩?)	No.12	
8	土師器	椀	(9.8)	6.6		C E H I K	25	普通	にぶ・赤周	外反口縁 赤彩		
9	土師器	高坏	15.5	11.3	10.6	A E H K	100	普通	にぶ・黄釉	有種坏屈折脚(稜退化・短脚化)	赤彩 二次的被熱貯蔵穴No.2	69-2
10	土師器	高坏	15.4	4.3		A H I K	90	普通	にぶ・黄釉	有種坏(稜退化)	赤彩 No.23	
11	土師器	高坏		3.9		A E H K	30	普通	橙	有種坏 稜部に工具先端の押圧痕 二次的被熱 器面風化顕著		
12	土師器	高坏		3.4		A E H I	80	普通	橙	有種坏 器面風化顕著(赤彩?)	No.22	
13	土師器	高坏		3.2	(9.4)	A E H I K	40	普通	橙	短脚 粗製		
14	土師器	壺	(21.8)	4.1		C I K	5	普通	にぶ・橙	有段口縁(粘土帯貼付)	赤彩	
15	土師器	甕	(17.2)	5.0		A E H I	5	普通	橙	口縁部内傾 煮沸痕		
16	土師器	甕	19.6	18.0	4.8	E H I K	90	普通	にぶ・橙	中型 胴丸 煮沸痕 基部部残	No.16	69-3
17	土師器	小型壺	10.0	14.9		C E H I J K	95	普通	にぶ・橙	若干平底を意圖	No.1	69-6
18	土師器	小型壺	(14.6)	11.7		A E H I K	25	普通	にぶ・橙	煮沸による黒色化	No.3	
19	土師器	甕	24.1	24.6	8.4	A E G H I K	90	普通	にぶ・黄釉	把手付 煮沸痕による被熱部と非被熱部が分割される	No.11-16-17	69-7
20	土師器	甕	17.0	30.3	6.2	A C E H I K	90	普通	にぶ・橙	長脚化出現 煮沸痕 底部木葉痕	貯蔵穴No.1	70-1
21	土師器	甕	16.6	28.7	5.7	C D E H I K	80	普通	にぶ・赤周	長脚化出現 煮沸痕顕著 底部木葉痕	カマフNo.1	70-2
22	土師器	甕	17.4	29.0	5.2	C E H I K	95	普通	にぶ・黄釉	長脚化出現 煮沸痕顕著 底部木葉痕	No.18	70-3

らの深さ0.25mである。用途は不明である。

壁溝は、南東壁の南側2/3ほどから南西壁・北西壁に沿って巡っているが、カマドが付設された北東壁には無い。幅0.17～0.23m、床面からの深さ0.05～0.07mほどである。

遺物は、カマド・貯蔵穴の周辺部や住居中央部に分布する。多くは床面直上～炭化物層下である。供膳具は坏類が主体となり、副次的に高坏がみられる。坏類には身の深い内彎口縁・外反口縁鉢タイプなどの古い要素が残存するが、赤彩された坏身模倣や北武蔵型坏蓋模倣が出現している。高坏は有坏屈折脚の流れをくむものであるが、坏部の稜が退化し、脚も短脚化が目立つ。甗は須恵器模倣で、把手が付く。甗は、小型・中型品には胴部の張りが残るが、煮沸用の大型品には長胴化がみられる。このような器形や器種組成等の特徴から銭塚・城敷Ⅳ期新段階に相当する。

23は、不明土製品で、被熱した板状の土塊である。片面は平滑であるが、対面には蕈状の圧痕が深く残されている。

24は、滑石製の勾玉である。挟りが弱く、両方の先端部が尖った三日月形を呈しているが、断面形は丸みをもっている。片面からの穿孔であるが、穿孔時に位置を替えた痕跡が残る。長さ2.48cm・幅0.98cm・厚さ0.73cm・孔径0.29cm、重さ3.9gである。(図版70-4)

25は、滑石製紡錘車である。西陽付近の床面直上から出土している。周辺部の一部を欠損する。大きさは径5.28cm・孔径0.78cm・厚さ1.43cm、重さ51.5gを測る。(No2/図版70-5)

第37号住居跡 (第86・87・88図)

E・F-9・10グリッドに位置し、第3号溝跡と重複する。

平面形態は方形で、カマドが北東壁(カマドA)と北西壁(カマドB)に付設されている。カマドAは燃焼部等が検出されているが、カマドBは煙道部のみを検出である。これに対応して、主柱穴

も隣り合った2本ずつみつかっていることから、住居跡は拡張が行われ、これに伴ってカマドも造り替えられたものと判断される。新しいカマドA方向を主軸とすると、規模は主軸7.34m・幅7.13m・確認面からの深さは0.39mを測り、主軸方位はN-50°-Eを指す。

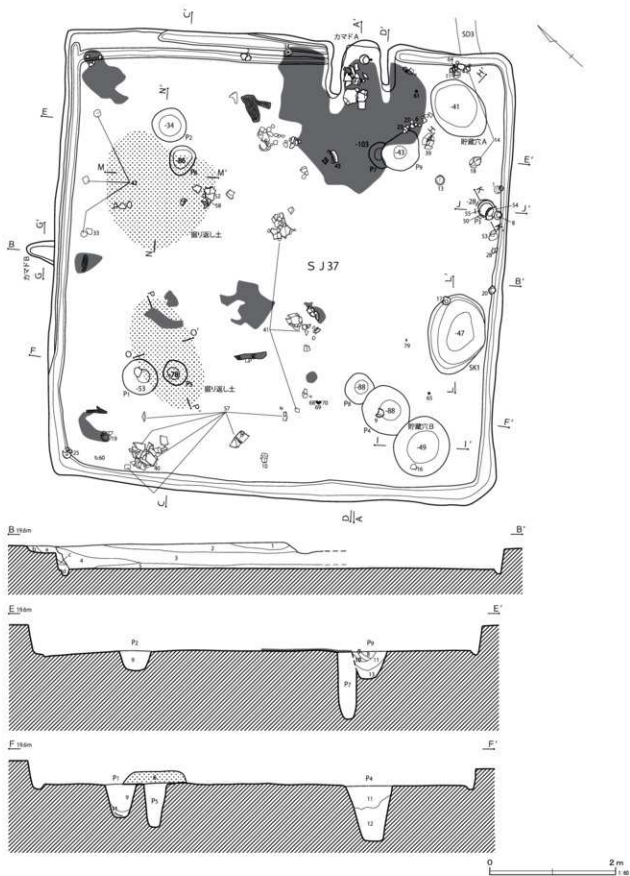
主柱穴は2本ずつが隣り合い、4ヶ所計8本が検出されている。拡張された住居跡という条件を前提にすると、外側に配置されたPit2・Pit9・Pit4・Pit1が建て替え後の住居跡に、内側に位置するPit6・Pit7・Pit8・Pit5が建て替え前の住居跡に対応する。

建て替え後の主柱穴の規模は、Pit2が径0.54m×床面からの深さ0.34m、Pit9が径0.60m×床面からの深さ0.43m、Pit4が径0.75m×床面からの深さ0.88m、Pit1が径0.54m×床面からの深さ0.53mでしっかりとした柱掘り方を有する。柱間距離は、主軸方向Pit2-Pit1=4.0m・Pit9-Pit4=4.10m、幅方向Pit1-Pit4=4.0m・Pit2-Pit9=3.7mを測り、住居形態に相似した方形配置を取る。注目されるのは、Pit1・Pit2の脇に堆積する砂層(6層)で、これは住居廃絶時に柱材を掘り返したものが残存したものである。

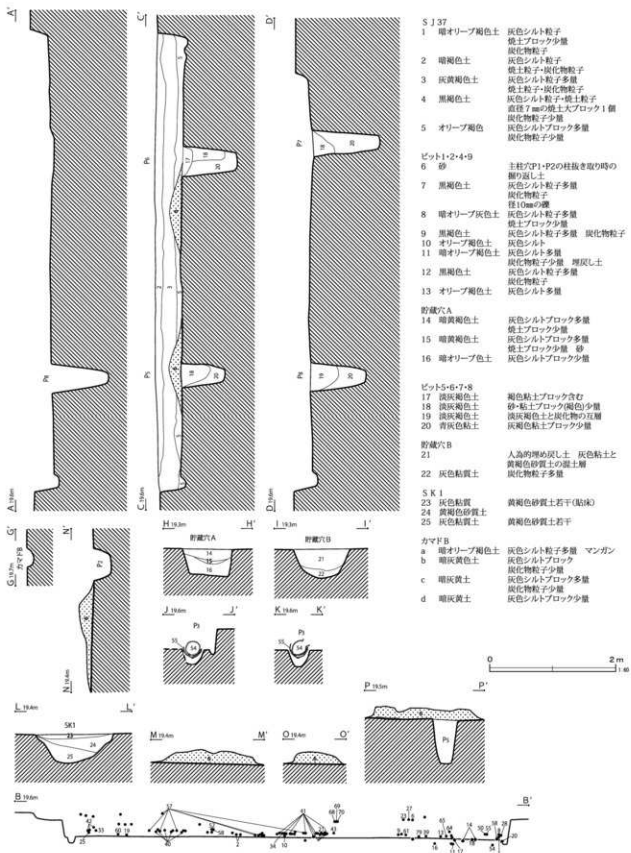
一方、建て替え前の主柱穴の規模は、Pit6が径0.44m×床面からの深さ0.86m、Pit7が径0.41m×床面からの深さ1.03m、Pit8が径0.48m×床面からの深さ0.88m、Pit5が径0.39m×床面からの深さ0.78mである。建て替え後の主柱穴と比べると平面規模は小さいが、深くしっかりとした柱掘り方をもっている。柱間距離は、Pit5-Pit8=3.0m、Pit6-Pit7=3.1m、Pit5-Pit6=3.4m、Pit8-Pit7=3.2mである。建て替え後の配置に比べて、より方形に近い配置状況である。

カマドは、北東壁に付設されたカマドAが建て替え後、北西壁に煙道部が残るカマドBが建て替え前に対応する。

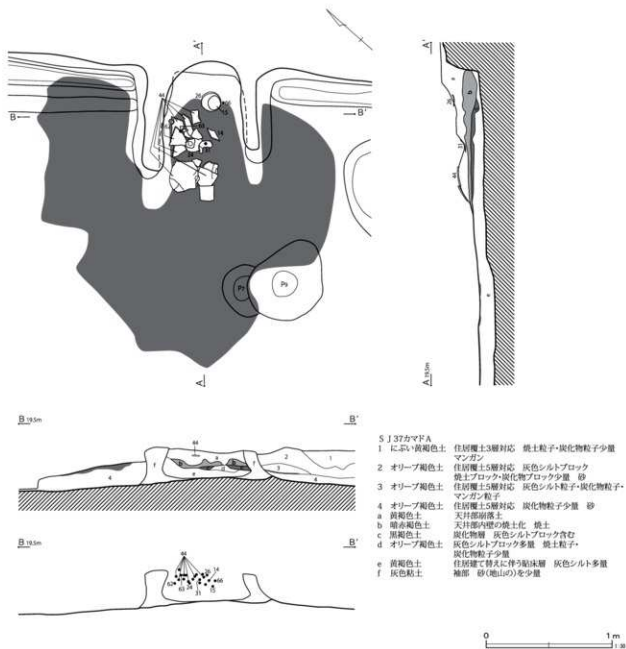
カマドAは燃焼部が検出され、煙道部は削平さ



第86図 第37号住居跡 (1)



第87図 第37号住居跡(2)



第88図 第37号住居跡カマダ A

れてしまったものと思われる。灰色粘土によって造り付けられたもので、拡張に伴う貼床以前に袖部の土台が築かれている (e・f層)。燃焼部は長方形を呈し、奥壁に向かって傾斜をもつ。火床面上には炭化物層が形成され、炭化物はカマダの周囲にも広がっている。炭化物層の上部には天井部が崩落し、内壁の焼土化は顕著である (b層)。規模は、長さ0.86m×幅内法0.64mである。脚裾部

を欠損した高坏 (24) が、倒立した状態で支脚に転用されている。カマダ A内からは大型の壺 (43・44) や坏 (11・14・15)、高坏 (26・31・32・34) や、ガラス製小玉 (63)・滑石製紡錘車 (62)・白玉が出土している。

カマダ Bは燃焼部を拡張された住居によって壊され (土層 B-B')、煙道部のみが残存している。長さ0.45m、幅0.40mが検出されている。

貯蔵穴は、カマドA右側の東隅（貯蔵穴A）と、カマドAに対面する南隅（貯蔵穴B）がある。貯蔵穴Aは、長径1.05m×短径0.77mの楕円形で、床面からの深さは0.41mである。貯蔵穴Bは、長径0.93m×短径0.86mの円形で、床面からの深さは0.49mである。上層は人為的に埋め戻された層である（21層）。中から坏（16）が出土している。貯蔵穴Bが人為的に埋め戻されていることから、貯蔵穴Aが建て替え後、貯蔵穴Bが建て替え前に対応する可能性が考えられる。また、カマドBに對面する南東壁際には長径1.17m×短径0.93m×床面からの深さ0.47mの土塼（SK1）がある。中から滑石製有孔門板が出土している。位置関係から、この土塼をカマドBに対応する貯蔵穴と考えることもできるが、拡張された壁際に所在することから、拡張後に掘り込まれた土塼と捉えた方が妥当である。このように考えると、貯蔵穴も同様に拡張後に付設された貯蔵穴とする方が無難かもしれない。

壁溝は全周し、カマドA左側では二重に巡っている。幅0.13～0.34m、床面からの深さ0.08～0.10mほどである。

SK1の北側の南東壁際には、Pit3が掘り込まれている。径0.32m×床面からの深さ0.28mと、規模は小さい。甕（55）の中に台付甕（54）が入り込んだような状態で発見されている。また周囲には、須恵器高坏（1）や坏（8・17）、高坏（28）が集中している。

遺物のほとんどは、床面直上から10cm未満の高さから出土している。前述した須恵器の高坏をはじめ、ガラス製小玉（63）・滑石製の石製紡錘車（60～62）・有孔門板（77）・剣形品（78）・勾玉（79・80）・白玉（64～71）と、白玉を製作する途上に破損したもの（72～76）も出土している。73は穿孔後の研磨段階の破損品、72・74～76は穿孔時の破損品である。

1は、須恵器の無蓋高坏である。坏蓋を逆さに

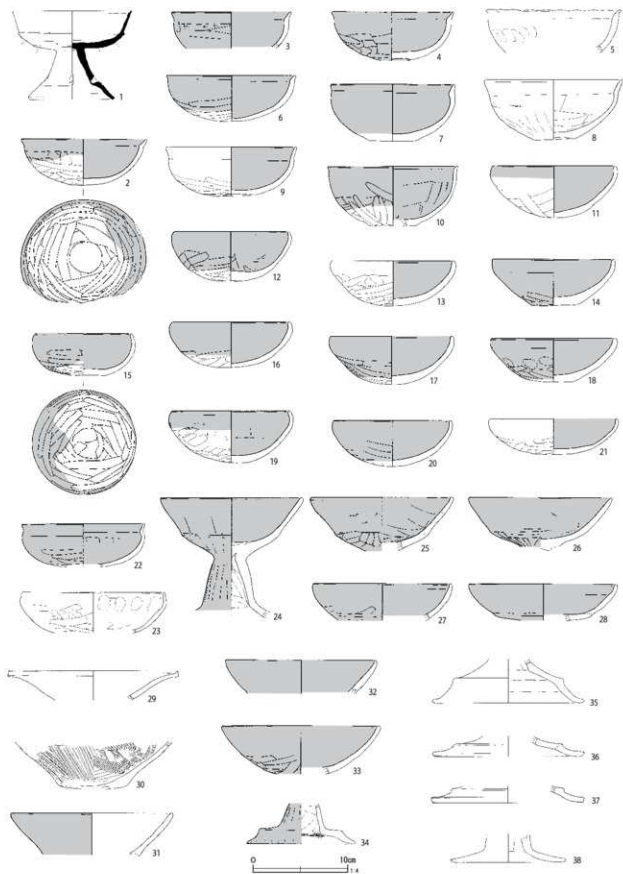
して脚の上に載せたような形状である。坏口唇部は内傾し、内面は沈線状に凹む。口縁部と体部の境の稜側面には僅かな幅をもつ。脚部端面は面取られている。脚部下半部に、ヘラ状工具先端の刺突によって、スカシ孔が4孔穿たれている。このうち3孔は辛うじて貫通しているが、残る1孔は未貫通である。形態・製作技法や胎土・焼成の特徴などから、陶邑産のTK216型式段階に推定される。

土師器の坏類には、楕型坏が含まれない。内斜口縁・外反口縁・内湾口縁のもので、平底もみられる。高坏には有稜坏屈折脚と有稜坏有段脚が混在する。甕類は胴部の張りが強く、長胴化の兆しがみられない。58は胴部に焼成後の二次的な穿孔が行われている。甕は頸部が括れて口縁部が外反し、把手が付く。また台付甕、大型壺も残る。このような器種組成や形態から、銭塚・城敷Ⅲ期新段階に相当する。そこで、第37号住居跡はカマド導入期の住居跡として注目される。

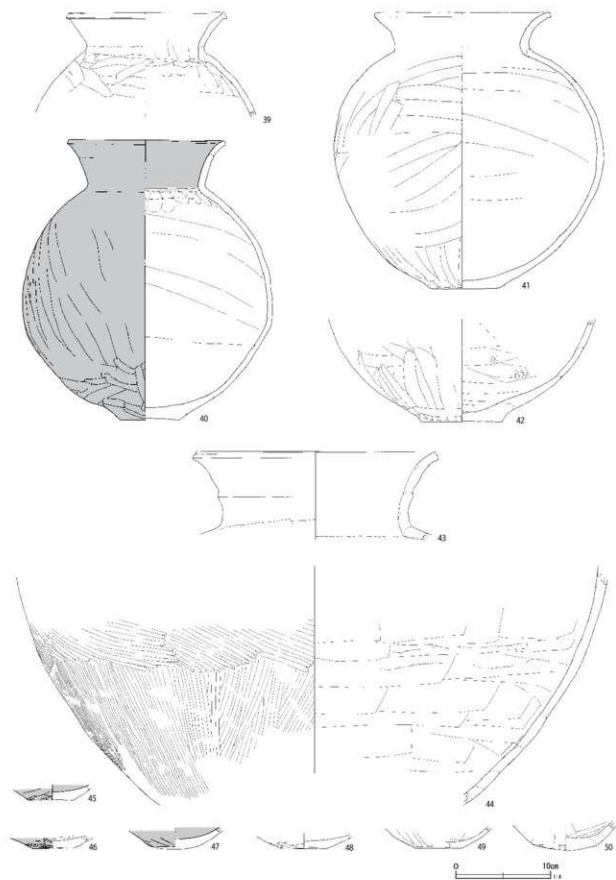
60～62は滑石製の紡錘車である。60は上半部を欠損する。西隅の床面直上から出土している。下径4.50cm・残存厚1.53cm・孔径0.73cm、残存重46.1gを測る（No5/図版74-4）。61は、カマド右側の貯蔵穴との中間地点の床面付近から出土している。上径3.02cm・下径4.60cm・厚さ1.210cm・孔径0.79cm、重さ38.2gを測る（カマドNo23/図版75-1）。62は、半球状の断面形で、上面の稜は曖昧である。上径2.85～3.32cm・下径4.54cm・厚さ0.93cm・孔径0.80cm、重さ30.6gである。上下面・側面に擦痕が明瞭に残る（カマドNo31/図版75-2）。

63は、ガラス製小玉である。カマド内から出土している。長径0.42cm・短径0.40cm・厚さ0.20cm・孔径0.16cmである。重さは0.1gに満たないため、計測できない。（カマドNo4/図版107-1）

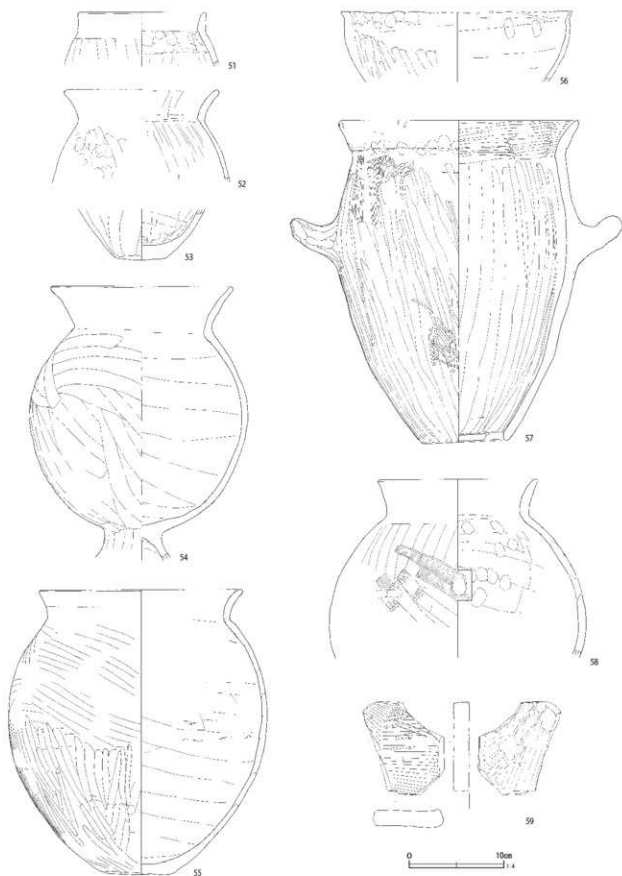
77は、滑石製の有孔門板である。横方向に長軸をもち、扁平な造りである。軸に沿って、小円孔



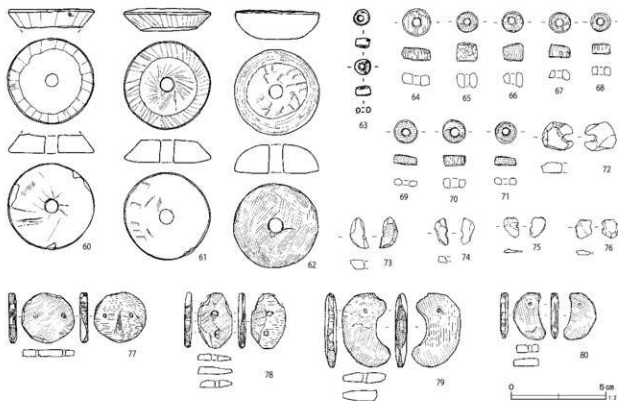
第89图 第37号住居跡出土遺物(1)



第90图 第37号住居跡出土遺物（2）



第91图 第37号住居跡出土遺物(3)



第92図 第37号住居跡出土遺物(4)

第37表 第37号住居跡出土遺物観察表(第89~92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	無蓋高坏	12.6	9.3	(脚)8.9	I	100	良好	灰	陶色産 TK216か 脚部に刺突による透孔4孔(口孔未貫通) No.56		71-1
2	土師器	坏	13.3	4.9	3.4	ACHJK	70	普通	にじみ・黄橙	内斜口縁 赤彩 楕円形(口径最大径) 平底 No.41		71-2
3	土師器	坏	(12.6)	3.9		CEHIJK	20	普通	にじみ・黄橙	内斜口縁 赤彩		
4	土師器	坏	12.9	5.2	3.2	CHIK	70	普通	にじみ・褐	内斜口縁 赤彩 内斜口縁 平底(上付底) Pit1		71-3
5	土師器	坏	(13.9)	4.6		EHIJK	20	普通	にじみ・橙	内斜口縁 二次的の被熱 器面風化顕著		
6	土師器	坏	13.4	4.9		EHIK	70	普通	にじみ・橙	内斜口縁 赤彩 二次的の被熱 器面風化 No.48		71-4
7	土師器	坏	(13.0)	6.0	(4.8)	CEHIK	30	普通	にじみ・橙	内斜口縁 赤彩 器面風化顕著		
8	土師器	坏	14.4	6.4	4.4	HIK	95	普通	橙	外反口縁 平底 器面風化顕著 外面タール状付着物 No.57		71-5
9	土師器	坏	13.6	5.2	4.3	CEHIJK	90	普通	橙	外反口縁 平底風 赤彩 二次的の被熱 器面風化顕著 No.53		71-6
10	土師器	坏	(13.6)	6.3	(4.8)	CEHIK	35	普通	にじみ・黄橙	外反口縁 平底 赤彩 No.16		
11	土師器	坏	12.8	4.5		ABEHIK	70	普通	にじみ・橙	内増口縁 赤彩 器面風化顕著 カマドNo.24		71-7
12	土師器	坏	12.1	5.1	4.2	ABDE	95	良好	暗赤灰~明赤褐	内増口縁 赤彩 二次的の被熱顕著 凹状の基部痕		71-8
13	土師器	坏	12.8	4.8		ACEHIK	95	普通	橙	内増口縁 赤彩 器面風化顕著 No.62		72-1
14	土師器	坏	12.6	4.9	4.7	AEHIK	80	普通	にじみ・橙	内増口縁 赤彩 No.63~カマドNo.15-25		72-2
15	土師器	坏	10.2	4.4	3.3	ACEIK	95	普通	灰黄褐	内増口縁 平底 赤彩 カマドNo.2		72-6
16	土師器	坏	12.4	4.8		CEHIJ	90	普通	にじみ・橙	内増口縁 赤彩 器面風化顕著 二次的の被熱 No.54		72-3
17	土師器	坏	12.8	5.1		AEHIK	80	普通	橙	内増口縁 赤彩 器面風化顕著 No.58-61		72-4
18	土師器	坏	13.0	4.6	4.8	BCEHIK	85	普通	にじみ・橙	内増口縁 平底 赤彩 No.63		72-5
19	土師器	坏	12.4	5.5		EHI	90	普通	にじみ・橙	内増口縁 赤彩 器面風化顕著 No.3		72-7
20	土師器	坏	12.4	4.9		ACEHIK	90	普通	にじみ・橙	内増口縁 赤彩 器面風化顕著 一部二次的の被熱 No.60		72-8

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
21	土師器	環	(13.4)	3.8		A H I	30	普通	にぶい	内側口縁 赤彩 外面風化顕著 №19		
22	土師器	環	(12.8)	4.6		E H I J K	20	普通	にぶい	外反口縁 赤彩		
23	土師器	環	(15.0)	4.3		C H I K	20	普通	にぶい	坯身模倣 二次的被熱 №48		
24	土師器	高環	14.8	12.8		C E H I K	95	普通	にぶい	転用支脚 有種環屈折脚 赤彩 カマフ№32		73-1
25	土師器	高環	14.8	5.7		B C E H I J K	95	普通	にぶい	有種環 赤彩 二次的被熱 №4		
26	土師器	高環	15.0	5.6		A C E K	95	普通	にぶい	有種環 赤彩 支脚転用痕? カマフ№3		
27	土師器	高環	(14.4)	4.0		A C E	30	普通	にぶい	有種環 赤彩 二次的被熱 №48		
28	土師器	高環	(15.6)	3.9		A G K	60	普通	にぶい	有種環 赤彩 器面風化顕著 №59		
29	土師器	高環	(18.0)	3.1		A C E H	10	普通	にぶい	高環? 二次的被熱 器面風化顕著 赤彩不明瞭		
30	土師器	高環		5.2		C E H I K	20	普通	にぶい	有種環		
31	土師器	高環	(17.0)	4.4		C G H I	30	良好	橙	有種環 赤彩 器面剥落 カマフ№6		
32	土師器	高環	(15.8)	3.6		A H I J K	10	普通	にぶい	有種環 赤彩 二次的被熱 器面風化顕著 カマフ		
33	土師器	高環	(16.4)	5.1		C E H I K	20	普通	橙	有種環 赤彩 器面風化顕著 二次的被熱 №34		
34	土師器	高環		4.3	11.5	A E I	95	普通	にぶい	有段脚(様退化) 赤彩 カマフ№22		
35	土師器	高環		4.6	(16.0)	A D E H	20	普通	橙	有段脚 二次的被熱 器面風化顕著		
36	土師器	高環		2.2	(16.0)	A C E H I	15	普通	橙	有段脚 二次的被熱 器面風化顕著		
37	土師器	高環		1.8	(15.8)	A C E H I	20	普通	にぶい	有段脚 二次的被熱 器面風化顕著		
38	土師器	高環		3.0	(12.2)	A C D E H I J	45	普通	橙	屈折脚 器面風化 外面赤彩?		
39	土師器	壺	16.2	11.1		A C E G I K	70	不良	にぶい	口縁段退化 №47		
40	土師器	壺	16.4	29.7	6.3	A C E H I K	80	良好	橙	口縁段退化 二次的被熱 器面風化顕著 №9-11-12-13		73-2
41	土師器	壺	18.3	29.4	7.4	A B C E I K	80	普通	にぶい	単口縁 煮沸痕 器面風化顕著 底部ヘラケズリ №18-20-22-23-24-27-37-55		73-3
42	土師器	壺		11.0	8.2	E I K	40	普通	橙	二次的被熱 底部ヘラケズリ №1-35-36-37		
43	土師器	壺	(25.0)	9.4		H I J	30	普通	橙	掘口縁状の様(退化) 44と同一個体 二次的被熱 内面剥離 カマフ№22		
44	土師器	甕		25.4		H I J	30	普通	橙	43と同一個体 赤彩 二次的被熱 貯蔵穴・カマフ №9-10-11-12-13-17-18-21		73-4
45	土師器	壺		1.6	5.0	C E H I K	80	普通	にぶい	赤彩 底部ヘラケズリ		
46	土師器	壺		1.3	4.4	C E H I K	90	普通	浅黄橙	赤彩 底部ヘラケズリ		
47	土師器	壺		2.3	5.0	A B C E K	75	普通	にぶい	赤彩 底部ヘラケズリ №29		
48	土師器	壺		1.6	4.5	B C D H I K	65	普通	明赤褐	二次的被熱 底部ヘラケズリ		
49	土師器	壺		3.3	(5.0)	C E I J K	30	普通	にぶい	底部ヘラケズリ		
50	土師器	壺		3.2	6.6	C E H I K	50	普通	にぶい	二次的被熱 底部ヘラケズリ №65・貯蔵穴		
51	土師器	小型甕	(13.2)	5.7		A C E H K	10	普通	にぶい	二次的被熱 カマフ		
52	土師器	小型甕	(15.8)	9.9			5	普通	にぶい	二次的被熱 №29		
53	土師器	小型甕		5.4	5.2	A B C H I K	70	普通	にぶい	二次的被熱 №58		
54	土師器	台付甕	19.0	29.1		D H I K	90	普通	にぶい	煮沸痕 №64		73-5
55	土師器	甕	21.3	30.2	8.0	E H I K	80	普通	にぶい	広口 胴張 器面風化顕著 底部ヘラケズリ №65		73-6
56	土師器	鉢	(24.2)	7.4		C E K	20	普通	にぶい	口縁外反 二次的被熱 盂形状		
57	土師器	甕	25.0	34.1	9.0	A H I J K	90	普通	にぶい	把手付(非正対) 一部に被熱による赤色化 №2-6-7-10-13-15-17-Pit1№1		74-1
58	土師器	甕	(16.6)	18.9		A E H I	20	普通	にぶい	胴張 胴部上半に焼成後に穿孔(外→内)し転用 №29		74-2
番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	状態			出土位置/備考	図版	
60	滑石	紡錘車	4.500	4.480	1.530	46.1				№5		74-4
61	滑石	紡錘車	4.600	4.540	1.210	38.2				カマフ№23		75-1
62	滑石	紡錘車	4.540	4.530	0.930	30.6				カマフ№31		75-2
63	ガラス	小玉	0.420	0.400	0.200	0.0				№4カマフ		107-1
64	滑石	白玉	0.740	0.720	0.310	0.3	完成品			№50		107-1
65	滑石	白玉	0.540	0.530	0.460	0.2	完成品			№51		107-1
66	滑石	白玉	0.540	0.520	0.420	0.2	完成品			№1カマフ		107-1
67	滑石	白玉	0.548	0.535	0.364	0.1	完成品			カマフ		107-1
68	滑石	白玉	0.490	0.480	0.270	0.1	完成品			№20		107-1
69	滑石	白玉	0.600	0.590	0.240	0.1	完成品			№20		107-1
70	滑石	白玉	0.600	0.590	0.280	0.1	完成品			№20		107-1
71	滑石	白玉	0.547	0.537	0.237	0.1	完成品			カマフ		107-1

番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	状態	出土位置/備考	図版
72	滑石	白玉	0.807	0.718	0.220	0.2	穿孔後破損品	カマド	107-1
73	滑石	白玉	0.833	0.424	0.251	0.1	穿孔後破損品	カマド	107-1
74	滑石	白玉	0.698	0.326	0.205	0.1	穿孔時破損品	カマド	107-1
75	滑石	白玉	0.535	0.394	0.058	0.0	穿孔時破損品	カマド	107-1
76	滑石	白玉	0.529	0.425	0.087	0.0	穿孔時破損品	カマド	107-1
77	滑石	有孔四板	2.770	2.620	0.360	5.0		SK1 2ヶ所穿孔あり	74-5
78	滑石	劍形	2.890	1.750	0.380	2.9		貯蔵穴 左右上側縁部欠損 2ヶ所穿孔あり	74-6
79	滑石	勾玉	3.860	1.750	0.630	9.0		No52	74-7
80	滑石	勾玉	2.510	1.280	0.380	2.4		No34カマド	75-3

第38表 第37号住居跡出土滑石剥片一覧表

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
16	形剥片	0.767	0.587	0.183	0.1	カマド	71	形剥片	0.693	0.505	0.342	0.1	カマド
17	切剥片	0.477	0.361	0.057	0.0	カマド	72	切剥片	0.830	0.360	0.106	0.0	カマド
18	切剥片	0.299	0.260	0.060	0.0	カマド	73	形剥片	0.902	0.498	0.253	0.2	カマド
20	切剥片	0.616	0.389	0.183	0.0	カマド	74	形剥片	0.921	0.394	0.258	0.2	カマド
22	形剥片	0.698	0.326	0.205	0.1	カマド	75	形剥片	1.134	0.383	0.158	0.1	カマド
23	形剥片	0.930	0.447	0.228	0.2	カマド	76	形剥片	0.637	0.515	0.271	0.1	カマド
24	形剥片	0.816	0.607	0.105	0.1	カマド	77	形剥片	0.980	0.666	0.210	0.2	カマド
25	形剥片	1.704	0.564	0.292	0.4	カマド	78	形剥片	0.894	0.595	0.272	0.2	カマド
30	切剥片	0.522	0.299	0.110	0.0	カマド	79	形剥片	0.725	0.594	0.196	0.1	カマド
31	切剥片	0.478	0.384	0.083	0.0	カマド	80	形剥片	0.714	0.506	0.230	0.1	カマド
32	切剥片	0.475	0.347	0.164	0.0	カマド	82	形剥片	0.850	0.773	0.156	0.1	カマド
33	切剥片	0.432	0.416	0.067	0.0	カマド	83	形剥片	1.026	0.688	0.294	0.3	カマド
34	切剥片	0.390	0.301	0.049	0.0	カマド	84	形剥片	1.006	0.707	0.235	0.3	カマド
35	切剥片	0.748	0.334	0.207	0.0	カマド	87	形剥片	1.091	0.472	0.320	0.3	カマド
36	切剥片	0.515	0.365	0.094	0.0	カマド	88	形剥片	0.959	0.555	0.135	0.1	カマド
37	切剥片	0.654	0.291	0.125	0.0	カマド	89	形剥片	1.071	0.605	0.285	0.3	カマド
38	切剥片	0.573	0.297	0.138	0.0	カマド	90	形剥片	1.503	0.540	0.212	0.3	カマド
39	切剥片	0.407	0.397	0.063	0.0	カマド	91	形剥片	1.035	0.548	0.134	0.1	カマド
40	切剥片	0.535	0.426	0.108	0.0	カマド	92	形剥片	0.946	0.701	0.177	0.2	カマド
42	切剥片	0.486	0.334	0.207	0.0	カマド	93	形剥片	0.921	0.545	0.319	0.2	カマド
43	切剥片	0.363	0.357	0.568	0.0	カマド	94	形剥片	0.561	0.385	0.168	0.1	カマド
46	形剥片	0.726	0.637	0.346	0.2	カマド	95	形剥片	0.954	0.491	0.200	0.1	カマド
47	形剥片	0.796	0.578	0.208	0.2	カマド	96	形剥片	0.765	0.372	0.251	0.1	カマド
49	形剥片	0.467	0.444	0.227	0.1	カマド	99	形剥片	0.641	0.433	0.264	0.1	カマド
50	形剥片	1.093	0.508	0.281	0.2	カマド	100	切剥片	0.530	0.315	0.097	0.0	カマド
51	形剥片	0.531	0.410	0.118	0.1	カマド	101	切剥片	0.691	0.315	0.133	0.0	カマド
52	形剥片	0.704	0.519	0.258	0.1	カマド	102	形剥片	0.613	0.556	0.236	0.1	カマド
53	形剥片	0.946	0.350	0.240	0.1	カマド	103	形剥片	0.975	0.412	0.141	0.1	カマド
54	形剥片	0.659	0.375	0.186	0.1	カマド	104	切剥片	0.894	0.413	0.105	0.0	カマド
55	切剥片	0.871	0.391	0.071	0.0	カマド	105	形剥片	0.872	0.470	0.152	0.1	カマド
56	切剥片	0.406	0.363	0.104	0.0	カマド	106	形剥片	1.291	0.752	0.316	0.4	カマド
57	形剥片	0.859	0.396	0.231	0.1	カマド	107	形剥片	0.693	0.396	0.246	0.1	カマド
58	形剥片	0.789	0.495	0.294	0.2	カマド	108	形剥片	0.700	0.501	0.161	0.1	カマド
59	形剥片	0.704	0.326	0.173	0.1	カマド	109	形剥片	0.834	0.522	0.142	0.2	カマド
60	形剥片	0.726	0.369	0.200	0.1	カマド	110	形剥片	0.880	0.510	0.257	0.1	カマド
61	切剥片	0.822	0.343	0.159	0.0	カマド	111	切剥片	0.922	0.402	0.155	0.0	カマド
62	形剥片	0.928	0.522	0.289	0.2	カマド	112	形剥片	0.632	0.362	0.265	0.1	カマド
63	形剥片	0.739	0.550	0.260	0.2	カマド	113	切剥片	0.493	0.377	0.182	0.0	カマド
64	形剥片	0.694	0.443	0.106	0.1	カマド	114	切剥片	0.580	0.414	0.133	0.0	カマド
66	形剥片	0.959	0.473	0.322	0.2	カマド	115	形剥片	0.630	0.455	0.207	0.1	カマド
67	形剥片	0.757	0.526	0.219	0.2	カマド	116	切剥片	0.711	0.377	0.140	0.0	カマド
68	切剥片	0.716	0.353	0.179	0.0	カマド	117	切剥片	0.443	0.293	0.122	0.0	カマド
69	形剥片	0.908	0.519	0.137	0.1	カマド	118	形剥片	0.651	0.382	0.141	0.1	カマド
70	形剥片	0.653	0.334	0.192	0.1	カマド	119	切剥片	0.729	0.364	0.135	0.0	カマド

番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	番号	器種 / 状態	長 (cm)	短 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
120	切削銅片	0.619	0.369	0.099	0.0	カマド	180	切削銅片	0.429	0.326	0.074	0.0	カマド
121	形削銅片	0.733	0.469	0.205	0.1	カマド	181	形削銅片	0.616	0.340	0.200	0.1	カマド
122	切削銅片	0.636	0.343	0.102	0.0	カマド	182	切削銅片	0.600	0.361	0.136	0.0	カマド
123	形削銅片	0.673	0.555	0.219	0.1	カマド	183	切削銅片	0.408	0.318	0.080	0.0	カマド
124	形削銅片	0.573	0.494	0.251	0.1	カマド	184	切削銅片	0.392	0.331	0.178	0.0	カマド
125	形削銅片	0.626	0.352	0.265	0.1	カマド	186	切削銅片	0.401	0.252	0.109	0.0	カマド
126	切削銅片	0.633	0.406	0.135	0.0	カマド	187	切削銅片	0.462	0.280	0.056	0.0	カマド
127	切削銅片	0.703	0.272	0.178	0.0	カマド	189	切削銅片	0.470	0.319	0.139	0.0	カマド
128	切削銅片	0.430	0.340	0.210	0.0	カマド	190	形削銅片	0.615	0.356	0.243	0.1	カマド
129	切削銅片	0.459	0.386	0.083	0.0	カマド	191	切削銅片	0.331	0.280	0.177	0.0	カマド
130	切削銅片	0.666	0.468	0.147	0.0	カマド	192	切削銅片	0.500	0.323	0.086	0.0	カマド
132	切削銅片	0.683	0.402	0.106	0.0	カマド	193	切削銅片	0.553	0.405	0.131	0.0	カマド
133	切削銅片	0.475	0.323	0.096	0.0	カマド	194	形削銅片	0.650	0.301	0.270	0.1	カマド
135	切削銅片	0.462	0.319	0.071	0.0	カマド	195	形削銅片	0.605	0.370	0.107	0.1	カマド
136	切削銅片	0.413	0.279	0.147	0.0	カマド	197	形削銅片	0.821	0.459	0.200	0.2	カマド
137	切削銅片	0.545	0.486	0.169	0.0	カマド	198	形削銅片	0.955	0.505	0.294	0.2	カマド
138	形削銅片	1.045	0.568	0.229	0.2	カマド	199	切削銅片	0.688	0.373	0.097	0.0	カマド
139	形削銅片	0.693	0.316	0.288	0.1	カマド	200	切削銅片	0.682	0.353	0.141	0.0	カマド
140	切削銅片	0.590	0.395	0.136	0.0	カマド	201	切削銅片	0.604	0.392	0.096	0.0	カマド
141	切削銅片	0.525	0.300	0.215	0.0	カマド	202	切削銅片	0.533	0.275	0.328	0.0	カマド
142	切削銅片	0.519	0.391	0.134	0.0	カマド	203	形削銅片	0.979	0.494	0.203	0.1	カマド
143	切削銅片	0.469	0.359	0.188	0.0	カマド	204	形削銅片	0.808	0.546	0.154	0.1	カマド
144	切削銅片	0.507	0.376	0.162	0.0	カマド	205	形削銅片	0.463	0.429	0.209	0.1	カマド
145	切削銅片	0.412	0.400	0.085	0.0	カマド	206	切削銅片	0.567	0.385	0.159	0.0	カマド
146	切削銅片	0.537	0.475	0.159	0.0	カマド	207	切削銅片	0.783	0.322	0.106	0.0	カマド
147	切削銅片	0.592	0.414	0.157	0.0	カマド	208	形削銅片	0.633	0.311	0.249	0.1	カマド
148	形削銅片	0.734	0.505	0.134	0.1	カマド	209	切削銅片	0.571	0.332	0.178	0.0	カマド
149	形削銅片	0.616	0.432	0.126	0.1	カマド	210	切削銅片	0.452	0.439	0.148	0.0	カマド
150	形削銅片	1.024	0.544	0.178	0.1	カマド	211	切削銅片	0.596	0.429	0.152	0.0	カマド
151	形削銅片	0.845	0.308	0.113	0.1	カマド	212	切削銅片	0.629	0.380	0.168	0.0	カマド
153	形削銅片	0.743	0.395	0.179	0.1	カマド	213	形削銅片	0.744	0.399	0.119	0.1	カマド
154	切削銅片	0.584	0.382	0.097	0.0	カマド	214	切削銅片	0.663	0.433	0.083	0.0	カマド
155	切削銅片	0.553	0.399	0.147	0.0	カマド	215	切削銅片	0.421	0.295	0.103	0.0	カマド
156	切削銅片	0.642	0.355	0.165	0.0	カマド	216	切削銅片	0.404	0.295	0.114	0.0	カマド
157	切削銅片	0.581	0.316	0.090	0.0	カマド	218	形削銅片	0.533	0.415	0.205	0.1	カマド
158	形削銅片	0.525	0.413	0.144	0.1	カマド	219	形削銅片	0.670	0.318	0.221	0.1	カマド
159	切削銅片	0.566	0.232	0.109	0.0	カマド	221	切削銅片	0.447	0.345	0.097	0.0	カマド
161	切削銅片	0.471	0.406	0.092	0.0	カマド	222	切削銅片	0.586	0.316	0.075	0.0	カマド
162	切削銅片	0.437	0.381	0.128	0.0	カマド	223	切削銅片	0.334	0.324	0.099	0.0	カマド
163	切削銅片	0.567	0.441	0.137	0.0	カマド	224	切削銅片	0.645	0.333	0.172	0.0	カマド
164	切削銅片	0.539	0.270	0.142	0.0	カマド	225	切削銅片	0.395	0.244	0.152	0.0	カマド
165	切削銅片	0.484	0.263	0.102	0.0	カマド	226	切削銅片	0.434	0.372	0.089	0.0	カマド
166	切削銅片	0.366	0.208	0.123	0.0	カマド	227	切削銅片	0.536	0.372	0.071	0.0	カマド
167	切削銅片	0.510	0.427	0.156	0.0	カマド	228	切削銅片	0.349	0.257	0.037	0.0	カマド
169	切削銅片	0.462	0.264	0.144	0.0	カマド	229	切削銅片	0.477	0.318	0.103	0.0	カマド
170	切削銅片	0.528	0.315	0.066	0.0	カマド	230	切削銅片	0.415	0.363	0.108	0.0	カマド
171	切削銅片	0.403	0.317	0.184	0.0	カマド	231	切削銅片	0.529	0.259	0.265	0.0	カマド
172	切削銅片	0.395	0.338	0.109	0.0	カマド	232	切削銅片	0.437	0.348	0.138	0.0	カマド
173	形削銅片	0.648	0.455	0.187	0.1	カマド	233	形削銅片	0.917	0.542	0.131	0.1	カマド
174	形削銅片	0.770	0.346	0.144	0.1	カマド	234	切削銅片	0.507	0.364	0.206	0.0	カマド
175	切削銅片	0.550	0.253	0.143	0.0	カマド	235	切削銅片	0.573	0.454	0.094	0.0	カマド
177	切削銅片	0.515	0.215	0.183	0.0	カマド	236	切削銅片	0.431	0.389	0.158	0.0	カマド
178	切削銅片	0.600	0.309	0.126	0.0	カマド	237	切削銅片	0.784	0.395	0.122	0.0	カマド
179	切削銅片	0.561	0.341	0.169	0.0	カマド	239	切削銅片	0.726	0.380	0.070	0.0	カマド

2孔が並んで片面から穿たれている。大きさは長径2.77cm・短径2.62cm・厚さ0.36cm・左孔径0.13cm・右孔径0.18cm、重さ5.0gを測る。(SK1)

78は、滑石製の剣形品である。縦長の亀甲形で、側面は直線的である。上方の左右縁部を一部欠損する。長さ2.89cm・幅1.75cm・厚0.380cm、重2.9gを測る。孔は片面から縦にならんで2孔穿たれ、上方孔径0.35cm・下方孔径0.19cmである。(貯蔵穴)

79・80は、滑石製の勾玉形模造品である。

79は、床面直上から出土した。幅広く、扁平な作りである。孔は片面から穿たれ、径は0.24cmほどである。長さ3.86cm・幅1.75cm・厚さ0.63cm、重さ9.0gを測る。(No52/図版74-7)

80は、北西壁際の床面付近から出土した。持ちがきわめて弱い半月形で、扁平である。孔は片面から穿たれて孔径は0.14cm、上面の開口は径0.51cmと広く窪められている。長さ2.51cm・幅1.28cm・厚さ0.38cm、重さ2.4gを測る。(カマドNo34/図版75-3)

64-71は、滑石製の白玉である。また72-76は製作途上の破損品である。72・73は穿孔後の研磨時の破損品で、面に研磨痕が残る。74-76は穿孔時の破損品である。(図版107-1)

このほかに滑石製品の製作途上の剥片が196点出土している(第38表)。大きさ・形状等から、白玉製作工程の形割剥片・切削工程品・切削剥片に分類した。これらの遺物から、白玉製作にかかる工房機能が推定されるが、製作に伴う施設や工具等は発見されていない。59が砥石とも考えられたが、平瓦転用硯(長さ9.5cm・幅7.4cm・厚さ6.0cm)のため、後世の流入した滑石製品製作には関連がない。**第38・39号住居跡**(第93・94・95図)

E-9・10、F-10グリッドに位置する重複する2軒の住居跡である。覆土の堆積状況や出土遺物の比較から、第38号住居跡の方が新しい。

第38号住居跡は、平面形態が方形で、北東壁に

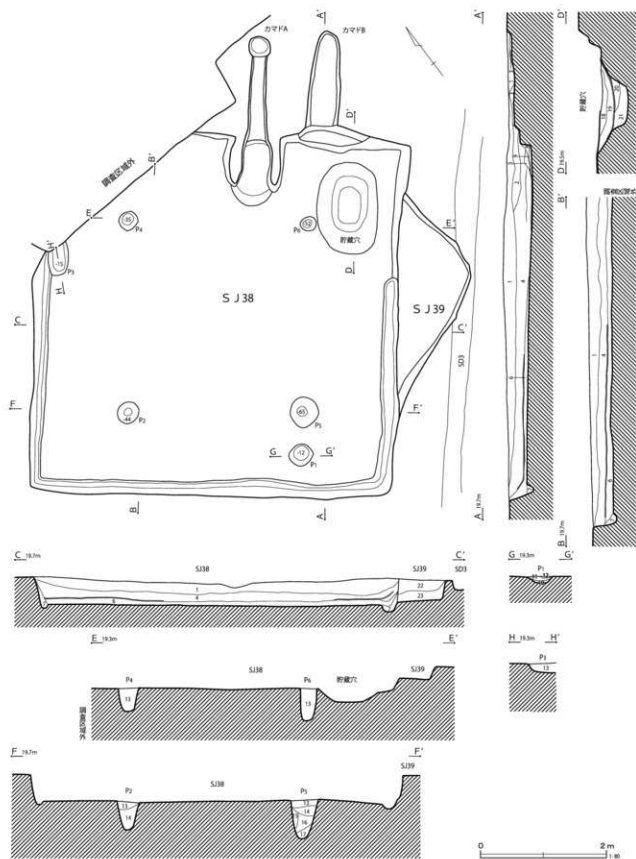
カマドをもつ。北隅付近は調査区域外にある。主軸長5.78m・幅5.77m・確認面からの深さ0.35~0.42mを測る。主軸方位はN-37°-Eを指す。6層と4層の層間には、薄い炭化物層が形成され、壁際では藁状の炭化材が多くみられる。

主柱穴は、Pit2・Pit4・Pit5・Pit6の4本が相当する。規模はPit2が径0.34m×床面からの深さ0.44m、Pit4が径0.30m×床面からの深さ0.35m、Pit5が0.46m×床面からの深さ0.65m、Pit6が径0.23m×床面からの深さ0.52mである。平面規模は小さいが、しっかりとした深さを有している。柱間距離は、主軸方向のPit4-Pit2とPit6-Pit5が3.1m、東西方向のPit4-Pit6とPit2-Pit5が2.8mで、規則性の高い配置がされている。

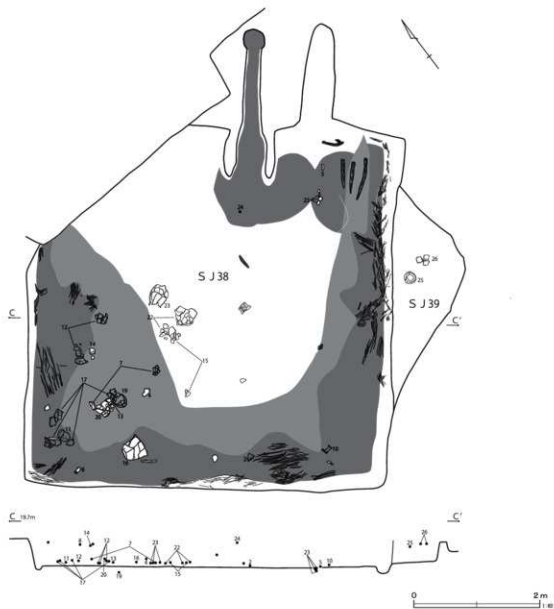
カマドは2基検出されている。当初は煙道部のみが残存しているカマドBが設置され、これを壊してカマドAが造り直されている。

カマドAは北東壁中央寄りに位置し、燃焼部から煙道部・煙出し部までが残存している。奥行き短い燃焼部に、長く伸びる煙道部が付く。燃焼部は楕円形に僅かに凹み、奥壁は住居壁の延長線と合致する。長さ1.05m・幅内法0.48mの規模をもつ。燃焼部内の下半部には、薄い炭化物層と焼土層が交互に堆積する。その上部には、住居跡上層土が一気に埋没している。燃焼部の中から、高坏の柱脚(10)が出土し、支脚に転用されていたものと思われる。煙道部は長さ1.34m・幅0.23~0.36mで、先端に径0.34mの煙出し部が付随する。煙道部の底面は先端に向かって登って行き、深さは燃焼部奥壁部で0.20m、煙出し部前で0.04mを測る。煙出し部は煙道部床面をはるかに超えた0.29mまでピット状に掘り込まれている。炭化物層は、カマドの前部から煙出し部まで続いている。

カマドBは、北東壁の北隅付近に付設されている。住居壁部に幅の狭いテラス状の範囲が形成さ



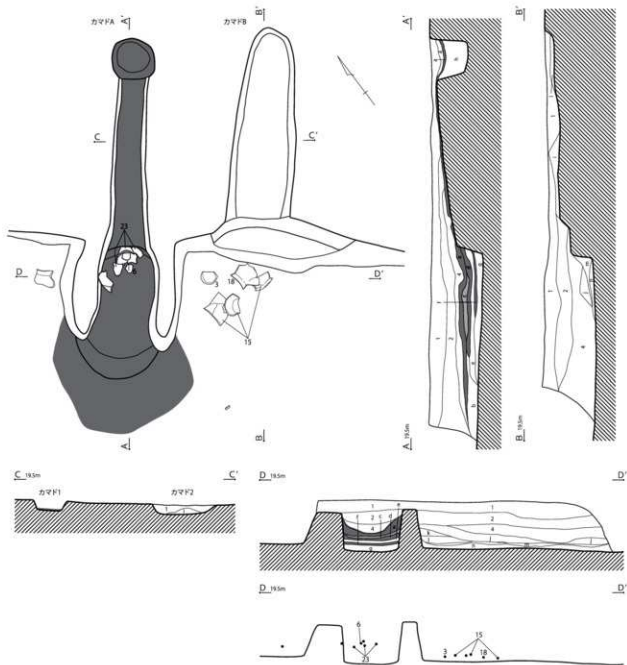
第93图 第38·39号住居跡(1)



- S J 38
- 1 暗オリーブ褐色土 灰色シルトブロック・炭化物粒子 焼土粒子少量
しまり・粘性あり
- 2 灰黄褐色土 灰色シルトブロック・炭化物粒子 焼土ブロック少量
しまり・粘性あり
- 3 灰オリーブ色土 灰色シルト粒子少量 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
- 4 暗オリーブ褐色土 灰色シルト粒子多量 炭化物粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子
しまり・粘性あり
- 5 暗褐色土 焼土と炭化物 灰色シルト粒子少量
焼土粒子・炭化物粒子多量
- 6 オリーブ褐色土 灰色シルトブロック多量 炭化物粒子少量 砂多量
粘土 しまり・粘性あり
- 7 灰オリーブ色土 炭化物粒子極少量 砂
- 8 暗褐色土 焼土と炭化物 灰色シルトブロック・炭化物粒子
焼土粒子多量
- 9 灰オリーブ色土 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量 砂極多量
しまりあり 張り方
- S J 38 ビット1
- 10 オリーブ褐色土 灰色シルト粒子極少量 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
- 11 黒褐色土 焼土と炭化物 焼土粒子 炭化物粒子多量
- 12 オリーブ褐色土 灰色シルト粒子多量 しまり・粘性あり

- S J 38 ビット2-6
- 13 オリーブ褐色土 灰色シルト粒子多量 灰色シルトブロック極少量
炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
- 14 オリーブ褐色土 灰色シルト粒子・砂多量 焼土粒子・炭化物粒子極少量
しまり・粘性あり
- 15 オリーブ褐色土 灰色シルト粒子 炭化物粒子少量 砂多量
しまり・粘性あり
- 16 オリーブ黒色土 灰色シルト粒子・焼土粒子少量 炭化物ブロック・砂多量
- 17 灰オリーブ色土 灰色シルト少量 炭化物粒子極少量 砂多量
- S J 38 貯蔵穴
- 18 オリーブ褐色土 灰色シルト粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量 砂
- 19 黒褐色土 灰色シルト粒子・焼土粒子少量 炭化物粒子
しまり・粘性あり
- 20 オリーブ黒色土 灰色シルト粒子・炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
- 21 暗灰褐色土 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
- S J 39
- 22 暗オリーブ褐色土 灰色シルト粒子少量 しまり・粘性あり
- 23 灰色土 灰色シルトブロック多量 炭化物粒子極少量
しまり・粘性あり

第94図 第38・39号住居跡(2)



S J 38 カマダA

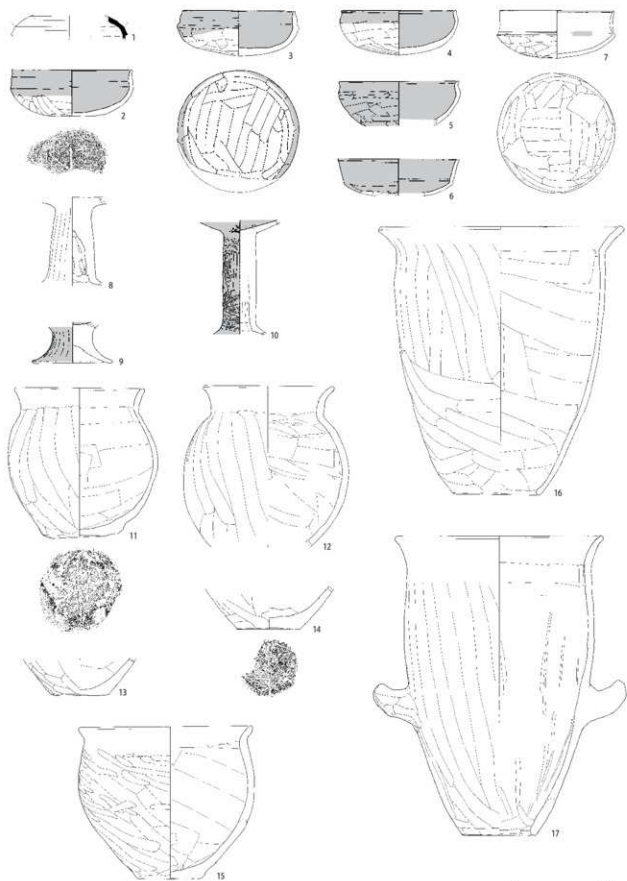
- a 黒色土 炭化物層 灰色シルト粒子少量 焼土粒子
 b 暗灰黄色土 灰色シルトブロック・砂 炭化物粒子少量
 c 褐色土 しまり・粘性あり
 d 黒褐色土 焼土層 灰色シルト粒子・炭化物粒子少量
 e 暗灰黄色土 炭化物層 灰色シルト・焼土ブロック少量
 f 黒褐色土 灰色シルトブロック・砂 炭化物粒子少量
 g 暗灰黄色土 しまり・粘性あり
 h 暗褐色土 炭化物層 灰色シルト粒子・焼土粒子少量
 i 暗灰黄色土 傾り方充填 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量
 j 暗褐色土 焼出し傾り方 焼土・炭化物崩落 しまり・粘性あり

S J 38 カマダB

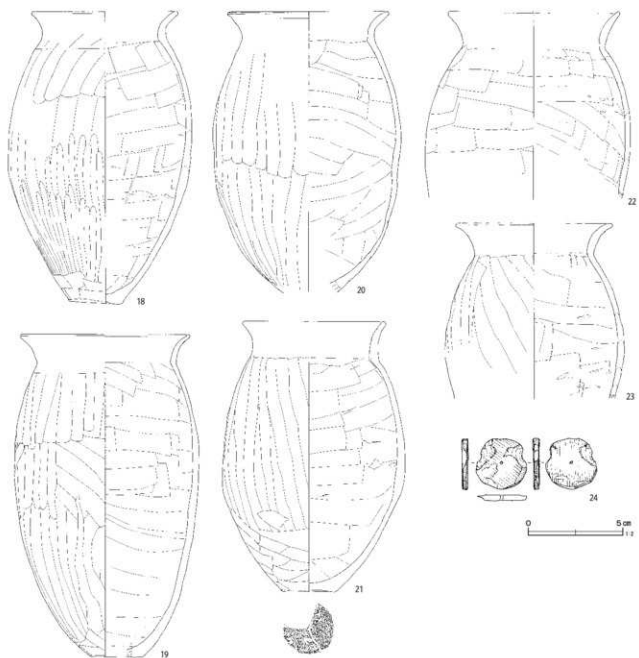
- i 灰オリーブ色土 天井部崩落 灰色シルト粒子・炭化物粒子少量
 j 暗褐色土 しまり・粘性あり
 k 暗褐色土 炭化物層 焼土粒子・灰色シルト粒子少量
 l オリーブ褐色土 灰色シルト粒子・焼土少量
 m 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒子
 n 灰オリーブ色土 灰色シルト粒子・焼土ブロック
 傾り方充填土 灰色シルトブロック 炭化物粒子少量
 砂多量 しまりあり

0 1m

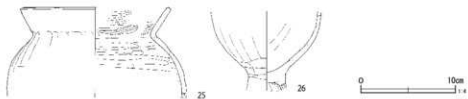
第95図 第38号住居跡カマダ



第96图 第38·39号住居跡出土遺物(1)



第39号住居跡



第97图 第38·39号住居跡出土遺物(2)

第39表 第38・39号住居跡出土遺物観察表 (第96・97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	環蓋		2.6		I	5	普通	灰	坏目蓋 陶色産 ~TK23		75-4
2	土師器	環	(12.6)	4.9		A E H I J K	40	良好	赤褐	坏身模倣 赤彩 底部本葉痕 No5		75-6
3	土師器	環	11.8	4.7		E H I	70	普通	にぶい	坏身模倣 赤彩 カマドNo8		75-5
4	土師器	環	(12.1)	4.7		E H I	50	普通	橙	比企型環 赤彩 No14		75-7
5	土師器	環	12.7	4.7		A E H I	55	普通	にぶい	比企型環 赤彩 カマド・貯蔵穴No1		75-8
6	土師器	環	(12.8)	3.9		C H I J K	30	普通	明赤褐	坏蓋模倣 赤彩 カマドNo6		
7	土師器	坏	12.1	5.0		C H I K	90	普通	にぶい	模蓋模倣 部分的赤彩残 No13・21		76-1
8	土師器	高環		9.4		E H I J K	85	普通	にぶい	支脚転用痕 No24		
9	土師器	高環		4.2	8.5	C E H I	70	普通	にぶい	短脚(脚・鉢蓋被?) 赤彩		
10	土師器	高環		12.0		C E H I	90	普通	橙	柱状脚 赤彩 支脚転用痕 No6		76-2
11	土師器	小型甕	13.4	15.8	5.5	A E H I J L	85	普通	にぶい	赤褐 煮沸痕 器面風化顕著 煤付着 底部本葉痕 No27		76-4
12	土師器	小型甕	(13.6)	17.1		A E I J K	50	普通	暗褐	煮沸痕 外面剥離顕著 No16-30		
13	土師器	小型甕		4.0	(6.2)	E I K	40	普通	灰黄褐	煮沸痕 No19		
14	土師器	小型甕		4.6	6.0	E H I K	45	普通	灰褐	煮沸痕 底部本葉痕 No23		
15	土師器	鉢	18.2	16.1	6.6	A E H I K	75	普通	にぶい	黄橙 口縁部先端肥厚 底部ヘラケズリ カマドNo9-10-12		76-3
16	土師器	甕	25.0	28.5	8.8	E H I K	95	普通	にぶい	黄橙 煮沸痕 器面風化顕著 No10		76-5
17	土師器	甕	(21.8)	32.6	7.7	E H I J K	40	普通	にぶい	赤褐 把手付 No9-19-26-28-29		77-1
18	土師器	甕	15.1	30.8	5.4	A E H I K	80	普通	にぶい	黄橙 長胴化 煮沸痕 カマドNo4-5-7・貯蔵穴No3-4-5		78-1
19	土師器	甕	17.6	34.5	(5.3)	C H I K	90	普通	浅黄橙	長胴化 煮沸痕 甕 No17		77-2
20	土師器	甕	(16.6)	29.6		H I J K	80	普通	にぶい	黄橙 長胴化 煮沸痕 器面風化顕著 No11-12		77-4
21	土師器	甕	14.8	28.5	5.6	H I J K	80	普通	にぶい	黄橙 長胴化 煮沸痕 底部ヘラケズリ No15		77-3
22	土師器	甕	17.8	19.7		E H I K	70	普通	橙	長胴化 煮沸痕 外面風化顕著 No20		
23	土師器	甕	(16.2)	18.5		A E H I J K	30	普通	にぶい	黄橙 長胴化 器内煤付着物 カマドNo11		
25	土師器	甕	15.3	9.5		A E H I J	70	普通	にぶい	赤褐 SJ39 胴張 煮沸痕 器面剥離 No1		
26	土師器	小型甕		8.4		E H K	60	普通	にぶい	黄橙 SJ39 煮沸痕 器面風化顕著 No2		

れ、燃焼部の名残りと思われる。壁際の床面には焼土化した部分のみられ、火床面の残存と推定される。煙道部は長さ1.53m×幅0.50mである。

貯蔵穴は、カマドBの前面の北隅に位置する。長軸1.45m×短軸0.95mの隅丸長方形で、中間に段をもつ掘り方を呈している。床面からの深さは0.48mを測る。

壁溝は、南東壁中央～南西壁～北西壁に沿って巡っている。幅0.17～0.30m、床面からの深さ0.10mほどである。

ピットは2本検出されている。主柱穴Pit5の外側に位置するPit1は、径0.36m×床面からの深さ0.12mを測る。北西壁際の調査区域境界部のPit3は、長径0.42m以上、短径0.32m、床面からの深さ0.15mほどである。

遺物は炭化物層下の床面直上付近に集中する。

1は須恵器環蓋の蓋である。図示部残存率5%程度の小破片から、復元した。口縁部と天井部の境の稜がやや丸いが、器壁が薄く、全体的にはシ

ャープなつくりである。胎土・焼成等の特徴などから、陶色産と思われる。稜の形状や外面のロケズリの範囲などから、最新でTK23型もしくは遡る時期の所産と推定される。

土師器は、環類に赤彩された坏身模倣・環蓋模倣と口縁部先端が小さく外反する比企型環がある。高環は脚部のみ出土で、供膳具は環類にとって代わられている。甕は器高が高く、長胴化したもので、甕は須恵器模倣で、把手が付くものもつかないものがある。小型の甕では胴部の張りが残る。器種組成や形態的な特徴から銭塚・城敷IV期新段階に相当する。その中でも最新の段階に位置づけられる。

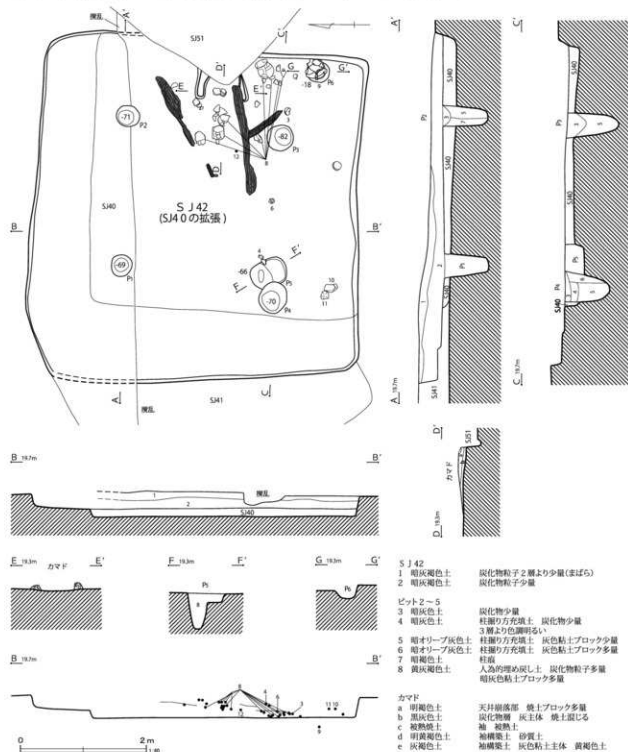
24は滑石製の有孔円板である。カマド前面の覆土上層部から出土している。中央付近に小孔が1孔のみ、片面から穿たれている。縁辺部約1/3を欠損する。径2.70cm・厚さ0.38cm、重さ4.5gを測る。(No4/図版78-2)

第39号住居跡は大半が第38号住居跡に掘りか

れており、南北1.6m・東西2.4mの三角形状に検出されているにすぎない。南北軸の方位はN-23°-Wを指す。確認面からの深さは0.34mで、しっかりとした掘込みをもつ。覆土は2層に分層されるが、範囲が狭いため、堆積状況の判断は困

難である。主柱穴・カマド・炉・貯蔵穴・壁溝等の諸施設はみつかっていない。

遺物は覆土上層から、胴部の張りが強い甕と小型の台付甕が出土している。銭塚・城教Ⅱ期、反町Ⅱ-3に相当する。



第98図 第42号住居跡

第42・40号住居跡 (第98・100図)

第42・40号住居跡は、拡張・建て替えが行われた1軒の住居跡である。第40号住居跡が本来の住居跡で、第42号住居跡が拡張後のものである。

F-10・11グリッドに位置し、第41・51号住居跡と重複する。覆土の堆積状況や出土遺物の比較から、第41号住居跡よりは新しい。しかし、第51号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況の観察からは第51号住居跡の方が新しく捉えられたが、出土遺物を比較から新旧関係を明らかにすることができない。

第42号住居跡は、第40号住居跡から北側と西側を拡張したものである。平面形態は方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長5.15m、幅5.22mを測り、主軸方位はN-92°Eを指す。確認面からの深さは0.27mほどで、覆土は自然堆積である。覆土下半部から、炭化材が検出されている。

主柱穴には、Pit1・Pit2・Pit3・Pit5の4本が相当する。主柱穴の規模は、Pit1が径0.34m×床面からの深さ0.69m、Pit2が径0.34m×床面からの深さ0.71m、Pit3が径0.42m×床面からの深さ0.81m、Pit5が長径0.60m×短径0.35m×床面からの深さ0.66mである。平面規模は小さいが、しっかりとした掘り込みをもつ柱穴である。柱間距離は、主軸方向のPit2-Pit1=2.4m、Pit3-Pit5=2.3m、南北方向のPit2-Pit3=2.5m、Pit1-Pit5=2.2mを測る。西側に短辺、東側に長辺をもつ台形気味の配置である。また、Pit5の西側に

接してPit4が位置する。径0.46m×床面からの深さ0.70mで主柱穴と遜色がない。

カマドは、重複する第51号住居跡によって大半が壊され、燃焼部の前半部のみが検出されている。第51号住居跡調査中にカマドの痕跡が認められていないことは、第42号住居跡よりも新しいとする状況証拠といえる。カマドは造り付けられたもので、両袖がハの字に広がる。燃焼部には炭化物層が形成され、その上部には内壁が焼土化した天井部が崩落している。袖部内側の被熱痕も顕著にみられる。カマド導入期頃の古い様相がみられるカマドである。奥行きは0.25mほどが検出され、内法幅は0.50mである。

カマド右側の南東隅付近には、径0.35m×床面からの深さ0.22mのPit6が所在する。貯蔵穴とするには規模が小さく、用途は不明である。

壁溝は巡っていない。

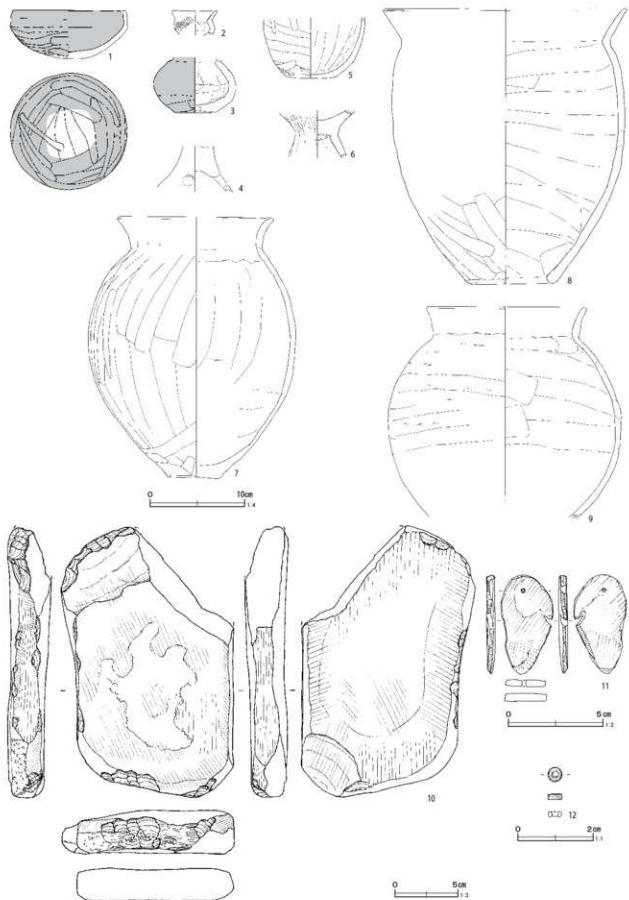
遺物は、カマドの周辺部から集中して出土している。赤彩された坏身模倣坏、長胴化した甕に新しい要素が見られる一方で、手捏土器・小型壺や胴部の張りが強い甕などに古い要素が残っている。銭塚・城敷IV期古段階に相当する。

10は、大型の砥石である。側縁部に成形時の打撃痕が残り、右上部を欠損する。長さ21.5cm・幅14.7cm×厚さ3.5cm、重さ1368.7g、石材は緑泥片岩である。(No1/図版79-4)

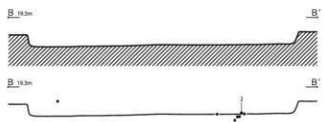
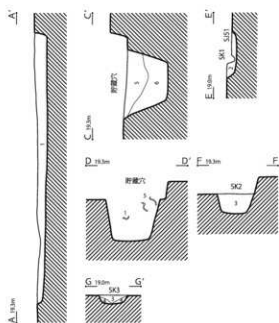
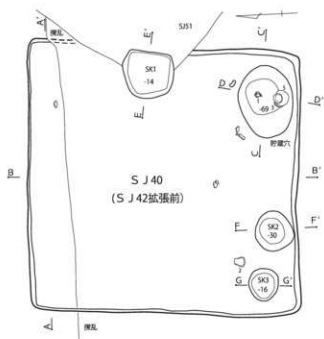
11は滑石製の剣形品である。角の無い逆水滴形を呈し、全体に丸みをもつ。鐳の表現も無く、扁平なつくりである。孔は片面から穿たれ、孔径は

第40表 第42号住居跡出土遺物観察表 (第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版	
1	土師器	坏	12.0	5.1	3.1	AHJL	95	普通	に濃い赤褐	坏身模倣 赤彩	二次的被熱 内面一部剥離	No5-6	78-3
2	土師器	小型甗	4.5	2.7		CEIJK	60	普通	に濃い橙	手づくねの胴部に口縁部を接合			78-4
3	土師器	小型甗		5.7	4.4	EHIJK	60	普通	に濃い赤橙	平底 赤彩	No8-15		78-5
4	土師器	高坏		5.1		A E H I J	45	普通	橙	二次的被熱 器面風化顕著	凹孔3 No4 (混入)		
5	土師器	鉢		6.4	5.4	A C H J	70	普通	に濃い赤褐	内面被熱により黒色化	No14		
6	土師器	台付甗		5.1		E H I J K	70	普通	に濃い橙	煮沸痕	No6 (混入)		
7	土師器	甕	16.4	27.6	(5.5)	H I	90	普通	橙	長胴化出現 底部へラケズリ	No19-27		79-1
8	土師器	甗	25.4	29.3	9	A C E H I J K	70	普通	に濃い橙	煮沸痕 煤付着 使用頻度高	No7-11-12-16-20-21-22-25		79-2
9	土師器	甕	16.8	22.4		A E H I J K L	90	普通	橙	球胴形 煮沸痕 器面風化顕著	No28		



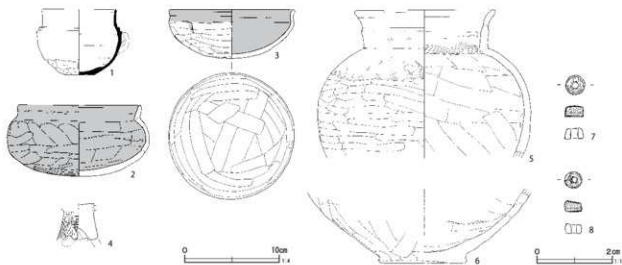
第99图 第42号住居跡出土遺物



S J 40
1 灰色粘土ブロック多量 (S J 42 貯床)

S K 1 ~ 3
2 暗灰色土 オリーブ灰色の粘土を少量
カマドの層の方向不明(可能性がある)
3 暗灰色土 炭化物少量 4層との境に特に集中
4 オリーブ灰色土

貯蔵穴
5 暗褐色土 灰色粘土ブロック少量 炭化物の層を間にし少しはむ
6 オリーブ灰色土 炭化物 灰色粘土のブロック



第100図 第40号住居跡・出土遺物

第41表 第40号住居跡出土遺物観察表 (第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	把子付椀	7.8	6.9	3.2	HI	65	不良	淡褐色	赤焼(軟質)須恵器 陶邑産か 非常に薄い 体部下位手持ちヘラケズリ	ロクロ整形 器壁非 貯蔵穴№2	79-5
2	土師器	鉢	12.8	7.3		CEHIL	100	普通	にぶい椀	口縁部外反 赤彩 №1		79-3
3	土師器	坏	13.0	5.2	2.4	AHIK	95	普通	にぶい椀	坏蓋模倣 赤彩 平底風 貯蔵穴№3		80-2
4	土師器	高坏		4.8		AEHIK	90	普通	にぶい椀	赤彩? 円孔3		
5	土師器	壺	14.3	15.7		ADEHIJK	100	良好	にぶい椀	口縁部段形膨化 貯蔵穴№1		
6	土師器	壺		7.4	8.4	AHI	40	普通	椀	外面に煤付着 底部ヘラケズリ		

0.19cmである。側面部から深さ0.6cmほどの抉りが入られているが、装飾的なものか、二次転用的なものかの判断は困難である。長さ5.17cm・幅1.89cm・厚さ0.41cm、重さ9.9gを測る。(№10/図版80-1)

12は、滑石の白玉である。製品で、長さ0.40cm・幅0.39cm・厚さ0.16cmである。重さは0.1g未満のため、計測できない。(図版107-1)

拡張前の第40号住居跡は、主軸長4.28m、幅4.25mの平面正方形である。東壁・南壁は第42号住居跡と合致し、北壁・西壁は内側にある。大42号住居跡床面からの深さは0.10~0.20mで、人為的に埋め戻されている。

主柱穴・カマド・壁溝は検出されていない。

南東隅に貯蔵穴が付設されている。長軸1.14m×短軸0.86mの楕円形の掘り込みで、底面は平坦である。床面からの深さ0.69mを測る。中から、須恵器の把手付椀(1)・赤彩された坏(3)・頸部に稜が巡る胴丸の甕(5)が出土している。

東壁際にSK1、南西隅の南壁に沿ってSK2・SK3が並んでいる。SK1は長軸0.80m×短軸0.74mの平面方形で、×床面からの深さ0.14mである。SK2は径0.62mの平面円形で、床面からの深さ0.30mである。SK3は径0.49mの平面円形で、床面からの深さ0.16mを測る。平面規模が小さいものが多いが、掘り込みは浅く、柱穴などの用途は考えられない。

遺物の多くは貯蔵穴周辺の床面直上から出土しているが、量は少ない。坏類は赤彩された坏蓋模倣坏と口縁部が外反する鉢タイプ、滑石製の白玉

2点が出土している。第42号住居跡と同様に、銭塚・城敷IV期古段階に相当する。しかし、長胴化の兆しすら見えない甕の存在は、より古い要素と捉えられる。

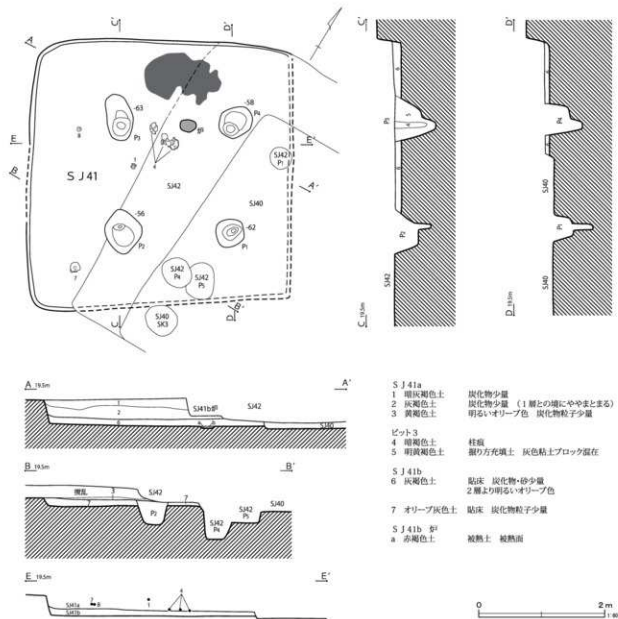
1は、須恵器の把手付椀で、貯蔵穴から出土している。把手は欠損しているが、体部上半側面部に痕跡がみられる。口縁部は直立し、端部は丸く内傾する。口縁部と体部の境には、突帯が二条巡る。体部下半から底部にかけて手持ちのヘラケズリによって整形され、底部は平底である。内面には、ロクロナゲが残る。焼成状況があまり良くなく、赤焼軟質の須恵器となっている。しかし器壁が非常に薄く、高い製作技術によって作られたものである。器形や製作技法などから、陶邑編年1期2~3段階(TK216型式~TK208型式)に位置づけられる。産地は関東以外に求められ、時期的な要素も考慮すると、陶邑産と推定される。

7・8は、滑石製の白玉の製品である。大きさは、7が長さ0.52cm・幅0.51cm・厚さ0.27cm・重さ0.1g、8が長さ0.46cm・幅0.45cm・厚さ0.29cm・重さ0.1gである。(図版107-1)

第41号住居跡 (第101図)

F-10・11グリッドに位置し、重複する第42・40号住居跡によって、東半部が攪乱されている。

平面形態は方形で、主軸長4.27mを測る。第42号住居跡との重複状況から幅は4.05m前後と推定される。主軸方位はN-30°-Wを指す。確認面からの深さは0.42mmである。床面が2面検出されているが、これに伴う拡張などは行われていない。覆土は自然堆積で、北側の1層と2層の間



第101図 第41号住居跡

には炭化物が薄く堆積する。

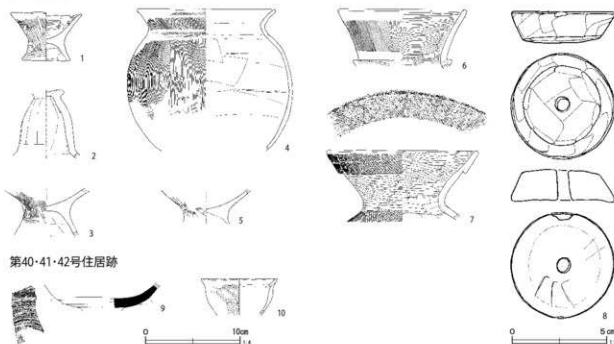
主柱穴には、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本が相当する。いずれの柱穴も上面の床面から掘り込まれたもので、柱が深く打ち込まれた痕跡がみられる。規模は、Pit1が長径0.45m×短径0.43m×床面からの深さ0.31~0.62m、Pit2が長径0.71×短径0.57m×床面からの深さ0.37~0.56m、Pit3が長径0.65m×短径0.38m×床面からの深さ0.40~0.63m、Pit4が長径0.55m×短径0.40m

×床面からの深さ0.39~0.58mである。柱間距離は、主軸方向が1.6m、東西方向が1.75mを測り、規則的な配置を示している。

炉は地床炉で、下面の床面から検出されている。北側に寄った、主柱穴Pit3とPit4の柱間に位置する。火床面は、長軸0.25m×短軸0.20mの楕円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.04mほどの浅い掘り込みがみられる。

遺物は少ないが、上面の床面直上もしくは僅か

第41住居跡



第40・41・42号住居跡

第102図 第40・41・42号住居跡出土遺物

第42表 第41号住居跡・第40・41・42号住居跡出土遺物観察表 (第102図)

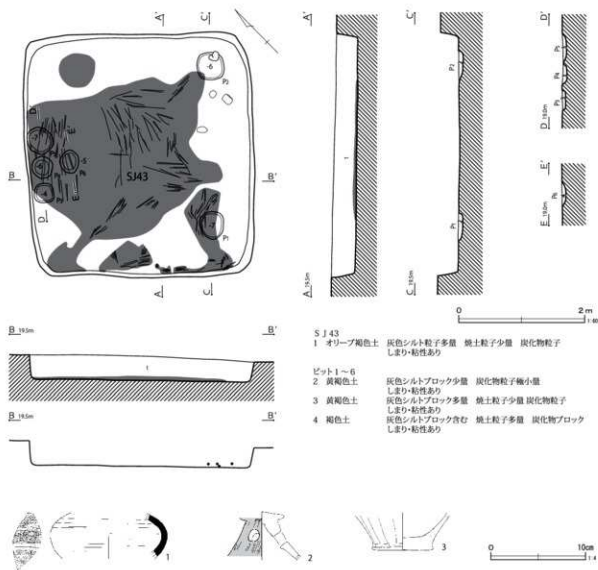
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	小型高坏	7.3	5.1	4.7	C E H I J K	80	普通	橙	SJ41 鼓形 無赤彩 焼成時のひび割れ	No.3	80-3
2	土師器	高坏		7.3		A H I K	90	普通	橙	SJ41 赤彩? Pit2		
3	土師器	台付甕		5.2		C E H I K	60	普通	にぶい橙	SJ41 煮沸痕 器面風化		80-4
4	土師器	甕	14.4	15.0		E H I K	60	普通	にぶい橙	SJ41 単口縁 煮沸痕 器面剥離	No.4・5・6	
5	土師器	台付甕		3.6		E H K	60	普通	橙	SJ41 煮沸痕 器面風化顕著		
6	土師器	壺	(13.3)	6.3		C E I K	40	普通	にぶい黄橙	SJ41 頸部突帯に工具先端部の押圧による連続文		
7	吉ヶ谷	壺	15.8	7.6		G J	80	普通	橙	SJ41 折返口縁+単節 RL2段 肩部単節 RL	No.1	80-5
9	須恵器	無蓋高坏		2.7		I K	5	良好	灰	SJ40・41・42 陶色産 TK83 (TK73併行) 深身の大型の高坏 把手付(形状不明) 括れ部に脚部の方形スカシの切り込み痕(孔数不明) 内面自然釉付着		81-1
10	土師器	小型碗	(8.0)	3.4		J L	25	普通	にぶい黄橙	SJ40・41・42 体部に粘土紐を貼付し、口縁部を形成		

に浮いた位置から出土している。ミニチュア高坏や小型壺・台付甕と吉ヶ谷系の壺・土製紡錘車が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-Iに相当する。

7は、吉ヶ谷系の折返口縁の壺である。口縁部および肩部に単節RLの縄文が施文されている。

8は土製紡錘車である。ケズリによって整形後、ナデによる仕上げが施されている。上径4.15cm・下径5.55cm・厚さ1.70cm・孔径0.72cm、重さ54.5gである。(No2/図版80-6)

第42・40・41号住居跡一括遺物として、須恵器の高坏と土師器の小型鉢がある(第102図)。1は高坏の坏部の破片である。坏部の身が深く、把手が付くタイプのものである。底面部に脚部透孔の切込みが認められるが、細片のため、三方・四方の判断が困難である。器形や覆土の特徴などから陶色産と推定される。時期はTK83型式(TK73型式併行)に相当する。



第103図 第43号住居跡・出土遺物

第43表 第43号住居跡出土遺物観察表 (第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図取
1	須恵器	壺		4.8		I K	5	良好	灰	陶色産 TK216 波杖文 高等技術品		81-2
2	土師器	高坏		5.2		A E H I K	50	普通	ニシ・橙	赤彩 円孔3 器面風化顕著		
3	土師器	甕		4.0	(6.4)	A H I L	50	普通	橙	煮沸痕 底部木炭痕		

第43号住居跡 (第103図)

E・F-10・11グリッドに位置し、重複する遺構はない。

平面形態は方形で、北東-南西方向に長軸をもつ。長軸長3.90m、短軸長3.57m、長軸方位はN-42°-Eを指す。確認面からの深さは0.32~0.40mで、覆土は単層の自然堆積である。床面の直上には、ほぼ全面に炭化物が薄く広がっている。

東隅と南隅に径0.42~0.45mのPit2とPit1が所在し、主柱穴の可能性はある。しかし、床面下らの深さはPit2が0.07m、Pit1が0.06mと浅い。また、対応する北隅・西隅にはピットがない。そのため、Pit1とPit2を主柱穴と断定することは困難である。この2本のピット間の距離は、約2.5mを測る。

北西壁際に沿って、Pit3・Pit4・Pit5の3本

のピットが並び、これと直交する Pit4 の南東に近接して Pit6 が位置する。Pit5 が一番大きく径 0.43m、ほかは径 0.30～0.34m である。いずれのピットも床面からの深さは 0.04～0.07m ほどで、Pit1・Pit2 と同様に浅い。壁際という位置状況から出入り口施設に関連する機能が想起されるが、意図的な配列関係と捉えることも可能で、その場合には別の用途を考える必要がある。

炉・カマド等の厨房施設や、貯蔵穴・壁溝等の諸施設も検出されていない。

遺物は少なく、主に東隅の Pit2 周辺の床面直上から出土している。須恵器甕と錢塚・城敷Ⅱ期の高坏脚部・甕底部片が伴出しており、須恵器甕は流れ込み遺物の可能性が高い。

1 は須恵器の甕で、小破片資料を還元図化したものである。胴部中に最大径をもち、頸部～口縁部・底部の形状は不明である。胴部中には、櫛描きによる波状文が施文されている。小破片のため、透孔は残存していない。洗練された胎土の特徴から、陶邑産のなかでも高い技術で丁寧に製作された高級品と思われる。形状や製作技法・施文方法などから、TK216 型式平行と推察される。

第44・45号住居跡 (第104図)

第44・45号住居跡は E-11・12 グリッドに位置し、重複する 2 軒の住居跡である。いずれの住居跡も多くの部分が調査区域外にあり、新旧関係の把握は困難である。覆土の堆積状況から第45号住居跡の方が新しい住居跡として捉えられているが、出土遺物の比較からは明確に新旧関係を判断することは難しい。

第44号住居跡は、第11号掘立柱建物跡とも重複する。北側の 1/2 以上が調査区域外にある。

平面形態は方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長 4.45m、幅 2.4m が検出され、主軸方位は N-121°-E を指す。確認面からの深さは 0.33m ほどで、覆土は壁際から埋没した状況が観察できる (C-C')。床面上には、広い範囲に亘って炭化物が広がっている。

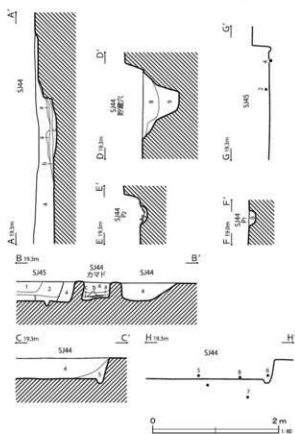
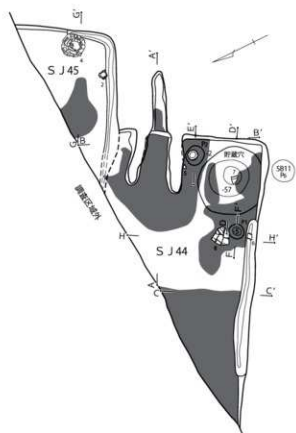
カマドは燃焼部が住居壁の内側に位置し、ここから煙道部が外方に延びている。燃焼部は長方形で、奥壁は住居壁の延長上に合致する。奥行き 0.93m、内法幅 0.38～0.54m を測る。火床面の直上には炭化物層が形成され、その上部には天井部が崩落している。内壁の焼土化が顕著にみられる。燃焼部には脚部を欠損した高坏 (5) を、倒立させた状態で支脚に転用している。その上からは甕 (12) が出土しており、架け口にかげられた状態で埋没している。煙道部は燃焼部に比べて幅が狭くなり (0.20m)、燃焼部との境では深さが 0.12m あったものが、1/3 ほど外側に 0.04m と極端に浅くなってしまふ。長さは 0.95m ほどである。また、カマド右袖に沿って、胴の張った甕 (8) と甕 (9) のセットと甕 (11) が出土している。

貯蔵穴は、カマド右側の南東コーナー部に付設されている。長軸 1.12m × 短軸 1.02m の隅丸長方形である。掘り方は中段に稜をもち、底面は平らである。住居跡の床面からの底面までの深さは 0.57m を測る。中から甕 (7) が出土している。

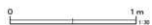
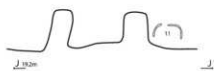
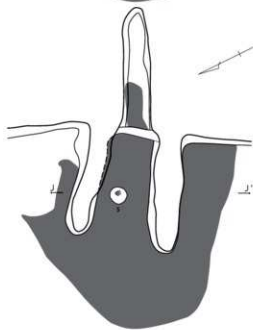
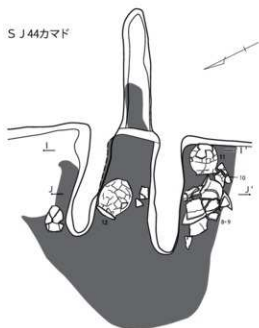
ピットは 2 本検出されている。貯蔵穴西側の南壁際の Pit1 は径 0.23m × 床面からの深さ 0.10m、

S J 45	
1 オリーブ褐色土	灰色シルトブロック含む 焼土粒子少量 炭化物多量 しまり・粘性あり
2 暗灰黄色土	灰色シルト粒子含む 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
3 暗オリーブ褐色土	灰色シルト粒子含む しまり・粘性あり
S J 44	
4 暗灰黄色土	灰色シルト粒子含む 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
5 灰オリーブ色土	炭化物粒子少量 砂含む しまりあり
S J 44 ビット 1	
6 黒褐色土	灰色シルトブロック少量 焼土粒子含む 炭化物粒子極多量

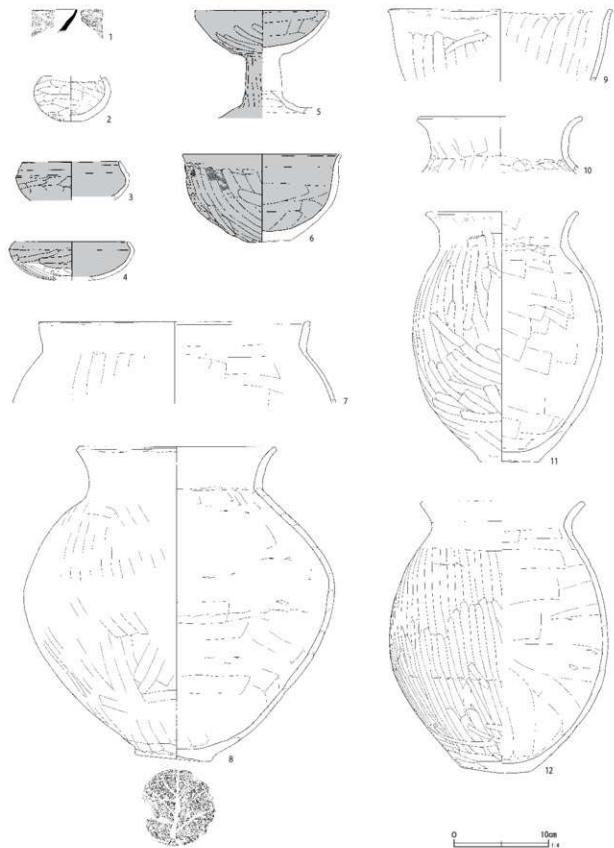
S J 44 ビット 2	
7 黒色土	炭化物・炭化物粒子多量
S J 44 貯蔵穴	
8 暗灰黄色土	灰色シルトブロック・炭化物粒子含む 焼土粒子少量 しまり・粘性あり
9 暗灰黄色土	灰色シルトブロック・砂含む 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
S J 44 カマド	
a 暗オリーブ褐色土	天井部の崩落 灰色シルト粒子極少量 焼土粒子多量 炭化物粒子含む しまり・粘性あり
b 黒色土	炭化物層 焼土粒子含む
c 黄褐色土	掘り方充填土 灰色シルト粒子含む しまり・粘性あり



S J 44カマド



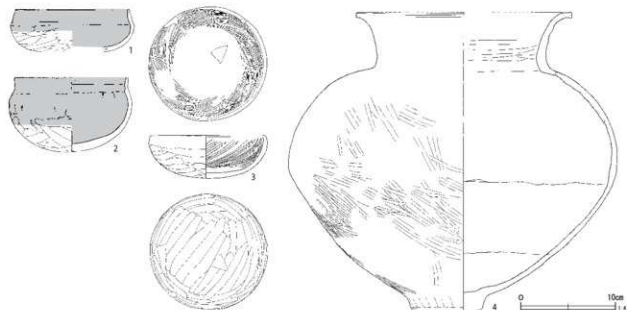
第104図 第44・45号住居跡・出土遺物



第105图 第44号住居跡出土遺物

第44表 第44号住居跡出土遺物観察表 (第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	壺?			2.5	I K	5以下	良好	灰	壺の口縁部? 陶器産か 内面自然釉付着		81-4
2	土師器	小型甗		4.8	2.5	C H I K	60	普通	にぶ・橙	丸底 二次的被熱		
3	土師器	坏	10.4	4.1		E I K	60	普通	にぶ・橙	坏身模倣 赤彩		
4	土師器	坏	(12.0)	4.1		B C H I K	20	普通	にぶ・橙	坏身模倣 赤彩 二次的被熱		
5	土師器	高坏	14.1	11.4		F H I K	85	普通	にぶ・赤銅	転用支脚 有稜坏屈折脚 赤彩 No.4・カマドNo.8	81-3	
6	土師器	鉢	16.7	9.3	4.5	A E H I	75	普通	にぶ・橙	口縁部外反 平底 赤彩 二次的被熱 No.2・カマド	81-5	
7	土師器	甗	(28.8)	8.7		C E H I	10	普通	にぶ・橙	大型 器面風化・剥離 貯蔵穴No.1		
8	土師器	甗	20.6	33.4	7.0	A E H I J	85	普通	にぶ・橙	胴張り著 煮沸痕 器面風化 底部木炭痕 No.1・カマドNo.1-2	81-6	
9	土師器	甗	(23.4)	7.7		C E H I K	(5)	普通	にぶ・橙	カマドNo.2		
10	土師器	甗	17.8	6.1		C E H I K	90	普通	にぶ・橙	長胴化 煮沸痕 カマドNo.3		
11	土師器	甗	15.7	26.7	6.3	A E H I K	90	普通	にぶ・橙	長胴化 煮沸痕の被熱度合いが異なる(焚口側顯著) カマドNo.1-2-4	82-1	
12	土師器	甗	16.9	28.8	7.6	G H I J K	95	普通	にぶ・橙	長胴化 煮沸痕の被熱度合いが異なる(焚口側顯著) カマドNo.4	82-2	



第106図 第45号住居跡出土遺物

第45表 第45号住居跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.6		H I K	20	普通	明赤褐	坏身模倣 赤彩		
2	土師器	椀	(12.0)	7.9	1.5	A E H I K	60	普通	にぶ・橙	外反口縁 赤彩 二次的被熱 No.1	82-3	
3	土師器	坏	11.9	4.6		E H I	95	良好	橙	内面口縁 内面暗文	82-4	
4	土師器	壺	23.0	31.7	7.9	A E H I K	90	普通	にぶ・黄橙	単口縁 二次的被熱 器面風化顯著 No.2	83-1	

カマドと貯蔵穴に挟まれた Pit2は径0.31m×床面からの深さ0.10mである。位置や規模から、いずれも支柱穴ではない。Pit1の北側から、胴部の張りが強い大型甗(8)が出土している。

壁溝は、南壁際のごく一部分からみつかっている。幅0.17～0.23m、床面からの深さ0.07mほど

である。

遺物は、須恵器片1片と小型丸底土器、赤彩された坏身模倣坏、口縁部が外反する平底鉢と、長胴化が進んだ甗と壺甗の分離ができていない胴の張りが強いものが共存している。新旧の要素が取り交ぜられた組成で、銭塚・城敷IV期古段階に相

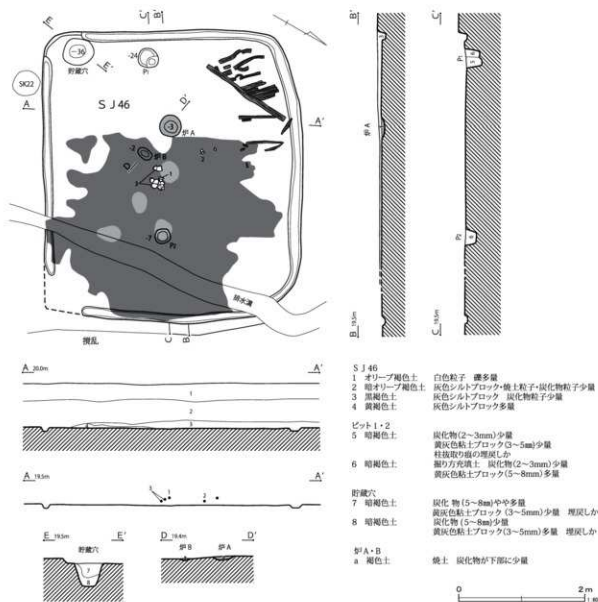
当する。

1は須恵器壺の口縁部と思われる、口縁部が長い。器壁は薄く、口縁端部は丸い。内外面ともにロクロナデによって整形され、内面には焼成時の自然釉が付着している。胎土・焼成の特徴から陶邑産の可能性が高い。

第45号住居跡は南北長1.53m、東西長2.05mが検出されたにすぎず、大半の部分が調査区域外にある。重複する第44号住居跡と軸を揃え、南壁の

方位はN-124°-Eを指す。確認面からの深さは0.31mである。最上層に炭化物の堆積がみられた。主柱穴・カマド・貯蔵穴などの施設は検出されていない。東壁の南東隅から南壁に壁溝が巡っている。幅0.17m・床面からの深さ0.08mほどである。

遺物は、南東隅の東壁・南壁に沿って、床面直上から出土している。環類には内湾口縁・外反口縁鉢タイプ・坏身模倣、胴部中位に極端な張りを



第107図 第46号住居跡

壺甕もある。器形や器種組成から銭塚・城敷Ⅳ期古段階に相当するとおもわれ、第44号住居跡との新旧は明確ではない。もし高環を含まないとすると、新しい様相と捉えることもできなくはないが、限られた範囲の結果から断定することはできない。**第46号住居跡** (第107図)

E・F-3・4グリッドに位置し、重複する遺構はない。発掘調査は計画の都合上、東西別々に実施した。そのため、東隅付近は削平されている。

平面形態は長方形で、主軸長4.68m、南北幅4.12m、主軸方位はN-121°-Wを指す。確認面からの深さは0.07mと浅い。覆土は自然堆積と推定され、下半部の床面には炭化物が広がり、西隅には炭化した木材が集中する。これらは桁梁材と屋根材の可能性が高く、第46号住居跡は焼失住居の可能性もある。

主柱穴は、検出されていない。

炉は2箇所確認されている。

炉Aは住居中央よりも南西壁側にやや寄って位置する。長径0.35m×短径0.34mの範囲が焼土化した地床炉である。火床面下には深さ0.03mほどの浅い掘り込みがみられる。

炉Bは住居中央から南東壁側にわずかに寄った位置にある。炉Aと同様に長径0.23m×短径0.16mの範囲が焼土化した地床炉で、床面からの深さ0.02mの浅い掘り込みをもつ。

貯蔵穴は、南隅壁際に付設されている。長径0.49m×短径0.42m、床面からの深さ0.36mを測る円形である。

壁溝は、貯蔵穴の位置する南炭付近・削平された西隅部を除いて全周する。幅0.12～0.22m、床面からの深さ0.04～0.06mを測るが、規模は小さ

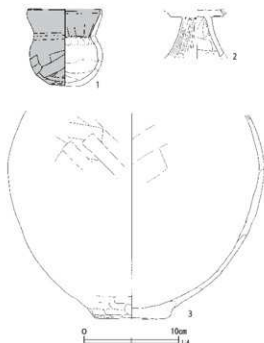
い。

ピットは2本検出されている。Pit1は南西壁中央付近の壁際に位置し、規模は長径0.34m×短径0.32m×床面からの深さ0.24mである。用途は不明であるが、位置状況から出入り口施設に関連する機能が想定される。Pit2は炉Aに対抗する位置に見られ、径0.23m×床面からの深さ0.07mである。

遺物は、住居中央付近の床面直上から出土している。小型丸底土器、脚の三方向に円孔が穿たれた高環脚部(2)、胴部中位に最大径をもつ甕が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-3に相当する。

第47号住居跡 (第109・110図)

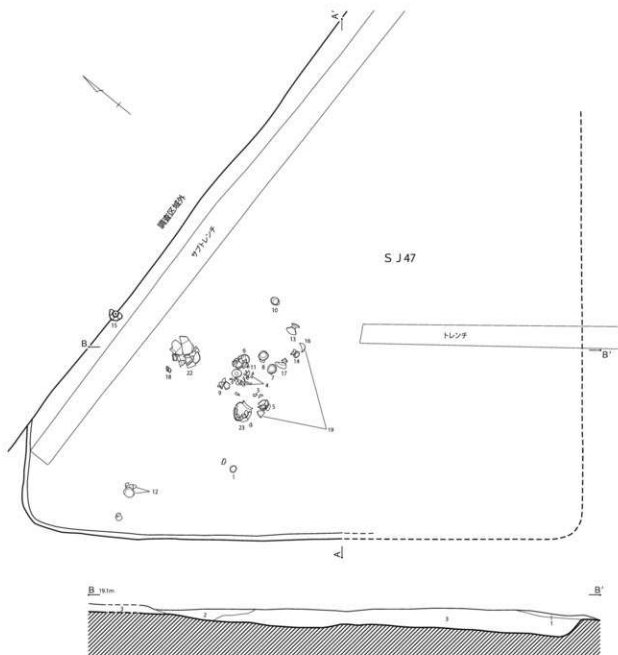
E-13グリッドに位置し、北半部は調査区域外にある。また、南半部は第4号溝跡(大溝跡)第6地点に向かう傾斜地にあたり、明確な壁は検出されていないため、断面の観察から範囲を確定し



第108図 第46号住居跡出土遺物

第46表 第46号住居跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	埴	7.7	8.1	3.2	A I	100	普通	に淡褐色	丸底 赤彩 No.3		83-2
2	土師器	高環	16.9	28.8	7.6	G H I J K	95	普通	に赤・橙	高脚脚接合 円孔3 二次的焼熱 No.2		
3	土師器	甕		21.7	8.0	A D E H I J K	40	普通	褐灰	胴張 煮沸底 器面剥離顕著 No.4		



S J 47

- 1 黄灰色土 灰色シルトブロック少量 炭化物粒子少量 しまりあり
- 2 灰色土 灰色シルトブロック少量 炭化物粒子あり しまりあり
- 3 黄灰色土 灰色シルトブロック少量 炭化物粒子あり しまりあり

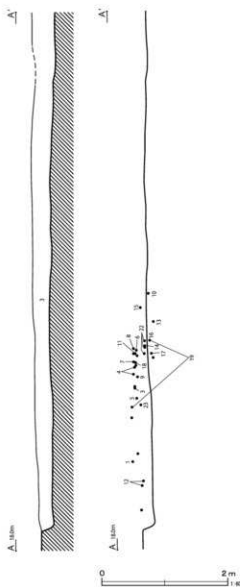


第109図 第47号住居跡(1)

ている。

平面形態が方形で、一辺8.9m前後の大型住居である。検出された南西壁の方位はN-37°-Wを指す。確認面からの深さは0.36mである。主柱穴や炉・カマド・貯蔵穴等の厨房施設、壁溝等は検出されていない。

遺物は西半部からまとめて出土している。坏椀類には、内彎口縁平底椀・内斜口縁平底椀・外反口縁鉢タイプとともに赤彩された坏身模倣と坏蓋模倣が共存する。高坏は有稜坏屈折脚で、坏部の稜はしっかりとしている。甕の胴部は丸みをもち、長胴化以前のものである。このように高坏・



第110図 第47号住居跡(2)

甕には古い要素がみられるが、模倣坏が半数を占める新しい要素も持っている。形態変化に敏感な坏類に着目すると、銭塚・城敷IV期古段階に相当する。

第48号住居跡(第113図)

J・K-14グリッドに位置し、西半部が調査区域外にある。

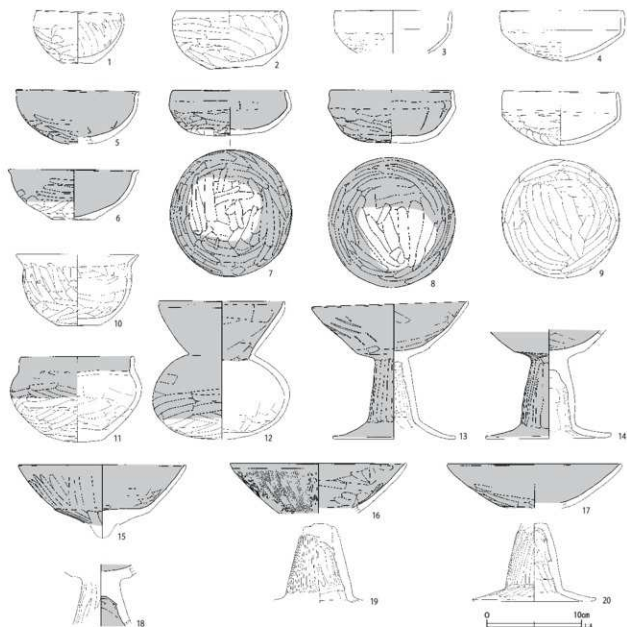
平面形態は方形である。南壁際の調査区域の協会付近に炭化物層の堆積が認められることから、この周辺にカマドが設置されている可能性を考えている。主軸長3.89m、東西幅は3.22mが検出されている。主軸方位はN-151°-Wを指す。確認面からの深さは0.37~0.52mで、覆土は自然堆積である。床面から0.1mほどの高さまでに炭化物や住居跡の建築部材と推測される炭化材が堆積している。ただし量は少なく、焼失住居と断定することは難しい。

Pit1・Pit2は、主柱穴に相当する。本来は4本主柱穴で、残る2本は調査区域外に位置する。規模はPit1が径0.32m×床面からの深さ0.23m、Pit2が径0.38m×床面からの深さ0.27m、柱間距離は1.55mである。また、東壁際にPit3が所在する。規模は径0.26m×床面からの深さ0.22mである。位置的な条件を加味すると、出入口施設に関連した用途が推定される。

貯蔵穴は、南東隅に付設されている。一部が南

第47表 第47号住居跡出土遺物観察表(第111・112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	椀	(9.2)	5.6	3.3	A E H I K	60	普通	橙	内埴口縁	平底(基底部痕残) No29	83-3
2	土師器	坏	11.3	6.0	5.8	A E H I K	100	普通	に染い橙	内埴口縁	平底	83-4
3	土師器	坏	(12.4)	4.6		E H I	20	普通	橙	坏蓋模倣	器面風化 No16	
4	土師器	坏	13.0	5.3		C H I K	70	普通	に染い橙	坏蓋模倣	器面風化顕著 赤彩? No9-10	83-5
5	土師器	坏	13.2	5.8		A E H I J K	95	普通	に染い赤黒	内斜口縁	赤彩 二次的焼熱 No24	83-6
6	土師器	坏	13.8	5.4	4.3	C E H I J K	80	普通	に染い赤黒	内斜口縁	平底 赤彩 二次的焼熱 No13	83-7
7	土師器	坏	12.0	4.8		A E H I K	100	普通	に染い赤黒	坏身模倣	赤彩 No17	84-1
8	土師器	坏	13.0	5.6		A E H I K	90	普通	に染い赤黒	坏身模倣	赤彩 No14	84-2
9	土師器	坏	12.2	5.7		A H I K	95	普通	橙	北武蔵型模倣坏	No6	84-3
10	土師器	椀	12.9	7.5	4.6	A E H I	95	普通	に染い黄橙	口縁部外反	平底 二次的焼熱顕著 No20	84-4
11	土師器	椀	12.0	9.0	(5.9)	A E H I K	90	普通	橙	口縁部内埴	平底風 赤彩 No12	84-5
12	土師器	埴	13.4	14.6	14.6	A C I K	95	普通	に染い黄橙	赤彩	二次的焼熱 No2-3	85-1
13	土師器	高坏	16.5	14.5	13.1	A E H I K	80	普通	に染い黄橙	有横环屈折脚	赤彩 No21	83-8
14	土師器	高坏		11.7	(12.8)	A C E H I K	60	普通	に染い赤黒	有横环屈折脚	赤彩 支脚転用痕 No23	

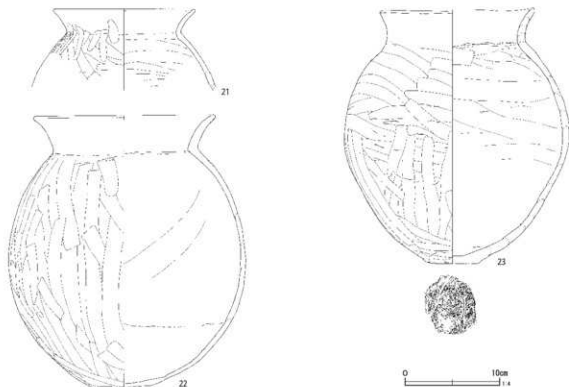


第111図 第47号住居跡出土遺物(1)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
15	土師器	高坏	17.8 (18.8)	7.8		A E I J K	60	普通	灰黄褐	有種坏 赤彩 支脚転用痕	No.30	
16	土師器	高坏		5.3		A E I K	20	普通	にじみ赤褐	有種坏 赤彩	No.22	
17	土師器	高坏	(18.5)	4.7		C I K	20	普通	にじみ黄橙	有種坏 赤彩	No.19	
18	土師器	高坏		6.5		A C E H I	90	普通	にじみ黄橙	外面赤彩? 脚部の内面に赤彩	No.4	
19	土師器	高坏		8.3		A E H I K	90	普通	赤褐	坏部突起残	No.22-25	
20	土師器	高坏		8.3 (13.0)		A E H I K	70	普通	にじみ黄橙	屈折脚		
21	土師器	甕	(15.0)	8.6		A C H I K	20	普通	にじみ橙	胴張 煮沸痕顕著 器面風化		
22	土師器	甕	18.9	28.8	5.8	A E I K	95	普通	灰黄褐	胴張 煮沸痕 底部へラケズリ	No.5	85-3
23	土師器	甕	(16.2)	27.0	5.2	A E H I J K	80	普通	にじみ橙	胴張 煮沸痕 底部木炭痕	No.26	85-2

東辺の壁溝と重複している。長軸0.80m×短軸0.62mの平面楕円形である。床面からの深さは0.33mを測り、床面は平坦である。中から高坏

(1)・甕(6)・滑石製有孔円板(12)が出土している。壁溝は、みつかっていない。遺物は、床面直上から炭化材の堆積する前後に



第112図 第47号住居跡出土遺物(2)

集中する。平面的には南半が多く、北半部からは白玉が2点出土している。供膳具には坏類が無い。有稜环屈折脚高坏で占められ、脚は長い。煮沸具は小型・大型の胴部の丸い単口縁の甕と小型の鉢形瓶、貯蔵具として複合口縁壺がある。器形や器種組成から、銭塚・城敷Ⅲ期古段階に相当する。

12・13は滑石製の有孔円板である。12は一括遺物で、約1/2を欠損している。推定される形状から、上方によった位置に小円孔2孔が並んでいる。片面から穿たれ、孔径は0.15cmほどである。現存する大きさは、縦1.21cm・横2.05cm・厚さ0.14cm、重さ0.7gを測る。本来は、縦2.1cm・横2.5cmほどと推定される(図版86-4)。13は、貯蔵穴から出土している。隅丸方形の中央に片面から1孔のみ穿たれている。孔径は0.18cmである。大きさは、縦2.39cm・横2.59cm・厚さ0.26cm、重さ2.7gを測る(貯蔵穴No4/図版86-5)。

14・15は滑石製の白玉である。14は長さ0.50cm・幅0.48cm・厚さ0.25cm、重さ0.1gである(No

1/図版107-1)。15は上部を欠損し、長さ0.47cm・幅0.46cm・厚さ0.19cm、重さは0.1g未満である(No2/図版107-1)。

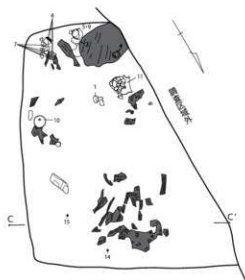
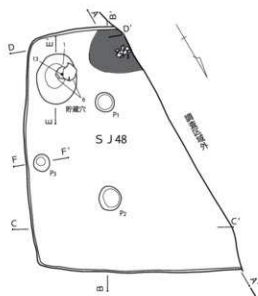
第49号住居跡(第115図)

F-12グリッドに位置し、住居跡の一部とカマドが検出されている。ほかの大部分は、調査区域外にある。覆土の堆積状況や厨房施設の違いから、重複する第50号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長3.23m、東西幅4.50mが検出され、主軸方位はN-34°-Eを指す。確認面からの深さは0.28~0.45mほどで、覆土は自然堆積である。

Pit1は、主柱穴に相当する。径0.25m×床面からの深さ0.70mのしっかりとした掘り方を有する。北側には深さ0.08mの張り出しをもち、柱抜き取り時の痕跡と推定される。

カマドは、燃焼部のみが検出されている。煙道部は削平され、燃焼部の一部は調査時の排水溝によって壊れている。灰色粘土が積み上げられた袖



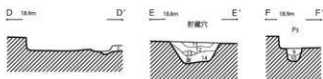
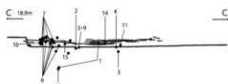
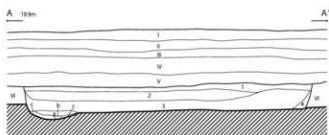
- I 耕作土
II 明灰黄色土
III 栗色土
IV 明灰黄色土
V 暗灰黄色土
VI 黄褐色土

S J 48

- I 明灰褐色土 鉄分中粒子中量 炭化物小粒子少量
2 灰褐色土 鉄分中粒子中量 炭化物小粒子中量
炭化物小粒子少量火災後に入ってきたもの
3 暗褐色土 火災時の一括埋没か 鉄分中粒子中量 炭化物中粒子多量
4 明灰褐色土 鉄分中粒子中量 炭化物小粒子極少量

ビット1

- 5 明灰褐色土 鉄分中粒子少量 炭化物小粒子極少量 砂多量
6 灰褐色土 鉄分中粒子少量 炭化物小粒子極少量 砂多量



ビット2

- 7 明灰褐色土 鉄分中粒子・炭化物中粒子・砂少量
8 暗灰褐色土 鉄分中粒子・炭化物小粒子少量

ビット3

- 9 明灰褐色土 鉄分中粒子・炭化物小粒子少量 (φ5~20mm)の白色粘土ブロック少量
10 暗灰褐色土 鉄分中粒子・炭化物小粒子少量

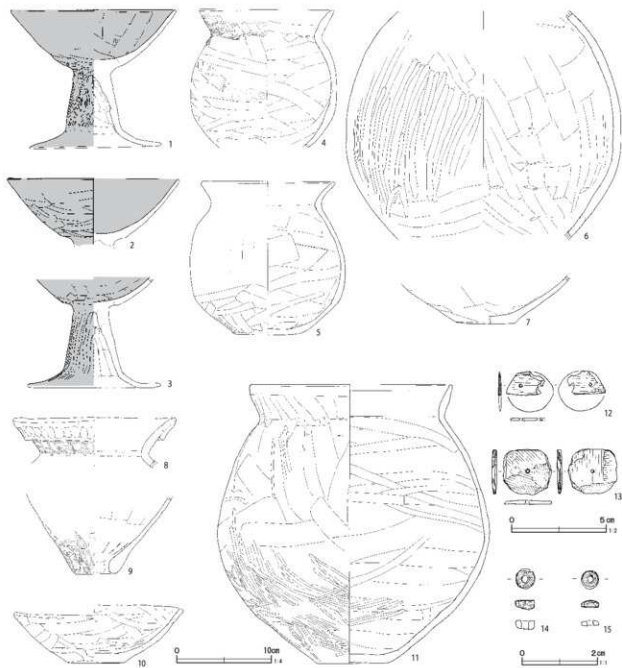
貯蔵穴

- 11 灰褐色土 鉄分中粒子・炭化物小粒子中量
12 暗灰褐色土 鉄分小粒子中量 炭化物中粒子多量
13 青灰色土 鉄分小粒子少量 炭化物中粒子多量
14 青灰色土 鉄分小粒子少量 砂多量

カマド

- a 炭化物層 (φ100mm)程度の粘土の幅
b 窯り方光瑣 炭化物小粒子少量 黄褐色土+灰色のシルト
c 明灰褐色土 ブロック

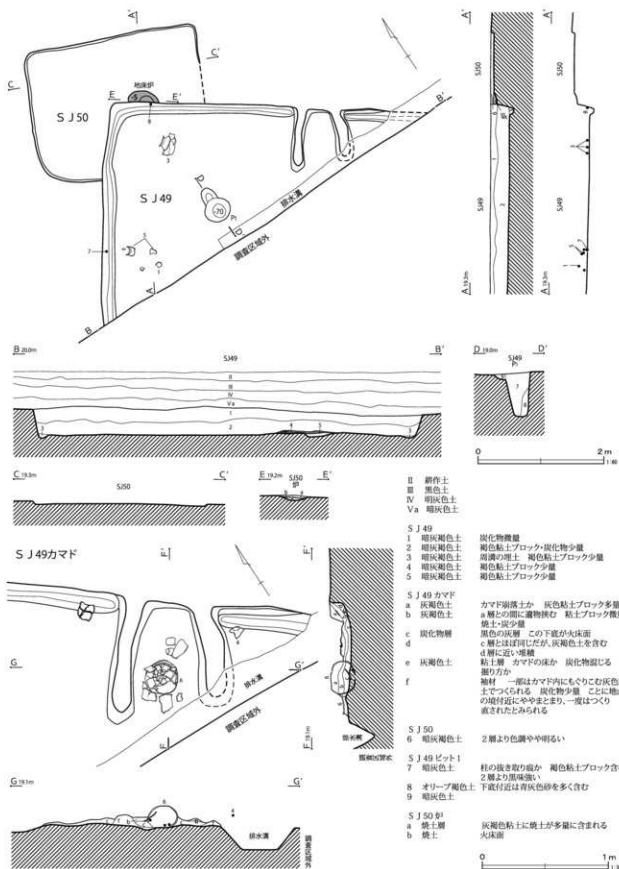
第113図 第48号住居跡



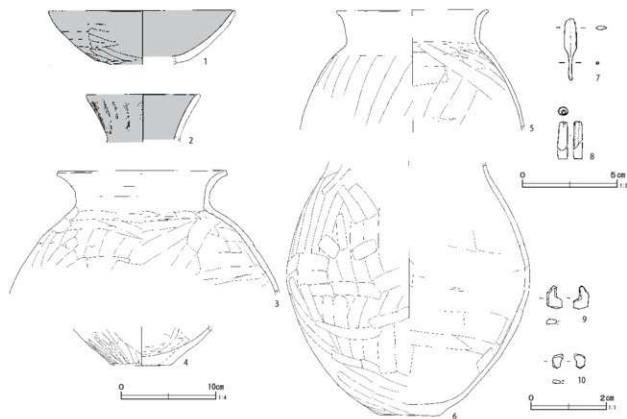
第114図 第48号住居跡出土遺物

第48表 第48号住居跡出土遺物観察表 (第114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏	17.3	14.6	14.0	AEH1JK	95	普通	灰褐色	有轆环屈折脚 赤彩 貯藏穴No3-14		85-4
2	土師器	高坏	18.0	6.8		ACIJ	50	良好	赤褐色	有轆环 赤彩 支脚転用痕 No6		
3	土師器	高坏		11.7	14.1	ACI	60	普通	橙	転用支脚 有轆环屈折脚 赤彩 カマFNo1		
4	土師器	小型甕	14.0	14.6		AEH1JK	90	普通	にぶ褐色	煮沸痕 煤付着 No3		85-5
5	土師器	小型甕 (13.8)		16.2	7.0	AEH1JK	80	普通	褐灰	二次的被熱 器面調整不明瞭 No4		86-1
6	土師器	甕		24.2		AEH1JK	40	普通	灰黄褐色	胴張 No7-18-22-24 貯藏穴No1-2		
7	土師器	甕		5.1	6.2	CHIJK	65	普通	明赤褐色	煮沸痕 No8-10-17-25-26		
8	土師器	壺	17.1	5.3		CHJ	40	良好	にぶ褐色	折返口縁 二次的被熱 器面風化		
9	土師器	瓶		8.2	4.2	AEH1JKL	75	普通	にぶ褐色	鉢形 No4		86-2
10	土師器	転用鉢		6.3	5.8	ACEH1JK	100	普通	褐灰	製作時の乾燥休止部で剥離した胴張甕を転用 欠損部研磨 底部ヘラケズリ No12		
11	土師器	甕	21.0	29.5	7.8	AEH1JK	50	普通	にぶ黄褐色	胴張 No15		86-3



第115図 第49・50号住居跡



第116図 第49号住居跡出土遺物

第49表 第49号住居跡出土遺物観察表 (第116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏		5.7		C I K	10	普通	に染・赤	有稜坏 赤彩	内面二次的被熱顯著 No14	
2	土師器	壺		5.0		C E H I K	30	普通	橙	単口縁 赤彩		
3	土師器	甕	17.8	13.2		H I K	70	普通	に染・橙 ～灰黄褐	胴張 煮沸痕顯著	No9	86-6
4	土師器	甕		4.2	(6.0)	C H I K	25	普通	に染・橙	煮沸痕 カマドNo8		
5	土師器	甕	(16.0)	12.9		A I K	30	普通	灰黄褐	長胴化出現 煮沸痕 煤付着	No10-12	
6	土師器	甕		27.0	6.4	A E H K	80	普通	に染・橙	長胴化出現 カマドNo5	胴部中位に最大径 煮沸痕 基台部残	86-9

第50表 第49号住居跡出土滑石削片一覧表

番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	番号	器種/状態	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
4	形削削片	1.065	0.470	0.143	0.2		9	切削削片	0.336	0.302	0.065	0.0	
5	切削削片	0.505	0.294	0.069	0.0		10	切削削片	0.509	0.272	0.089	0.0	
6	形削削片	0.747	0.560	0.160	0.1		11	切削削片	0.380	0.231	0.159	0.0	
7	切削削片	0.729	0.308	0.101	0.0		12	切削工程品	0.408	0.345	0.097	0.0	
8	切削削片	0.552	0.346	0.092	0.0								

部を土台にして造り付けられたカマドで、燃焼部は長方形を呈している。燃焼部奥壁には住居壁が転用されている。奥行き0.94m、内法幅1.08mである。火床面直上には炭化物層が形成され、これを覆うように天井部が崩落している。架け口部には甕(6)がかけられた状態のまま埋没している。

壁溝は、検出された壁に沿って全周する。幅0.15～0.23m、床面からの深さ0.03～0.07mほどである。

遺物は、カマド内と北西隅・西壁際に分布し、床面直上付近からの出土である。有稜坏屈折脚高坏の坏部と頸部に段が残る壺、長胴化の兆しがみ

られる甕があり、坏類の出土が無い。カマドが付設された住居跡で、残存率の高い甕の形態に着目すると、銭塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。

7の銅鑑は注目される遺物で、西壁際から出土している。鑑身部は逆刺をもたない椀長の亀甲形を呈し、先端部を欠損する。頸部は直線的な無篋被である。現存する鑑長3.3cm、鑑身長1.7cm・幅0.6cm・厚さ0.25cm、重さ1.85gを測る。(図版86-7)

8は、碧玉製管玉の欠損品である。現存部から穿孔方法については断定し難いが、両面穿孔されたものと推定される。現存部では孔が著しく偏っている。孔径は0.24cmほどである。現存長1.38cm・幅0.47cm、重さ0.3gを測る。(Na15/図版86-8)

9・10は、滑石製白玉の製作時の破損品である。いずれも穿孔時に破損したもので、上下面・背面に研磨痕・ケズリ痕はみられない。またこれらの遺物に対応する製作遺構や工具などは認められない。大きさは、9が長さ0.578cm・幅0.449cm・厚さ0.116cm・重さ0.1g未満、10が長さ0.361cm・幅0.449cm・厚さ0.116cm・重さ0.1g未満である。(図版107-1)

このほかに滑石製品の製作途上の剥片が9点出土している(第50表)。残存する大きさ・形状等から、白玉製作工程の形割剥片・切削工程品・切削剥片に分類した。これらの遺物から、白玉製作にかかる工房機能が推定されるが、製作に伴う施設や工具等は発見されていない。

第50号住居跡 (第115図)

F-12グリッドに位置し、南側1/4が重複する第49号住居跡によって壊されている。

平面形態は東西に長軸をもつ長方形で、南北長2.19m・東西長2.77mを測る。主軸方位はN-26°-Eを指す。確認面からの深さは0.01~0.09mと浅い。

住居跡の中心から東に寄った箇所に、炉が位置

する。南半部は重複する第49号住居跡によって壊されている。炉は地床炉で、火床面は東西0.49mの範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.05mほどの浅い掘り込みがみられる。

主柱穴・壁溝は検出されていない。

出土遺物が無く時期を特定することはできないが、方形プランの住居跡・炉などの諸条件から、銭塚・城敷Ⅱ~Ⅲ期の住居跡といえる。

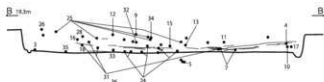
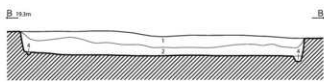
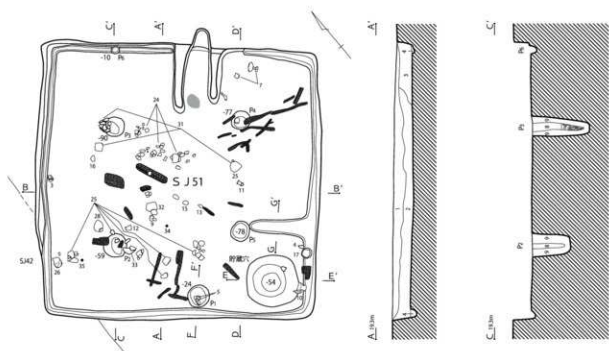
第51号住居跡 (第117・118図)

F-11グリッドに位置し、第42・40号住居跡と重複する。覆土の堆積状況の観察からは第51号住居跡の方が新しく捉えられたが、出土遺物の比較からは新旧関係を明らかにすることができない。しかし、第51号住居跡調査中に第42号住居跡のカマドの痕跡が認められていないことは、第42号住居跡よりも新しい遺構とする状況証拠といえる。

平面形態は方形で、カマドを北東壁に付設する。主軸長4.64m、幅4.50mを測り、主軸方位はN-31°-Eを指す。確認面からの深さは0.25~0.38mほどである。覆土は自然堆積で、床面上から炭化材が検出されている。

Pit2・Pit3・Pit4・Pit5の4本が、主柱穴に相当する。規模はPit2が径0.36m×床面からの深さ0.61m、Pit3が径0.32m×床面からの深さ1.0m、Pit4が径0.30m×床面からの深さ0.78m、Pit5が0.30m×床面からの深さ0.80mである。均一的な規模で、しっかりとした深さを有する。土層の観察から、柱痕も確認されている。柱間距離は、主軸方向のPit3-Pit2・Pit4-Pit5ともに1.8m、幅方向のPit3-Pit4・Pit2-Pit5ともに2.0mで、規則性の高い配置となっている。

カマドは燃焼部が住居壁の内側に位置し、ここから短い煙道部が外方に延びている。住居の床面から燃焼部火床面へと平滑に繋がり、境は認められない。燃焼部奥壁は、住居壁の延長上とほぼ一致する。高さ0.12mほど立ち上がり、ここから長



- SJ51
- 1 暗灰褐色土 炭化物少量 直下に炭層形成 燐化鉄や多い
 - 2 灰褐色土 灰褐色粘土のブロック・炭化物少量
 - 3 灰褐色土 粘土 カマド跡の炭出
 - 4 暗オリーブ灰色土 燐漬

- 間仕切りの溝
- 5 灰褐色土 粘質土 炭化物粒子

ピット1

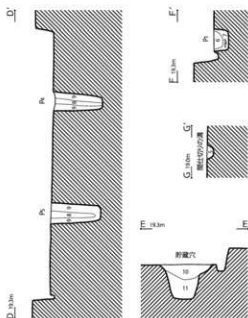
- 6 暗灰色土 2層との境に炭
- 7 オリーブ灰色土 炭化物わずかに

ピット2～5

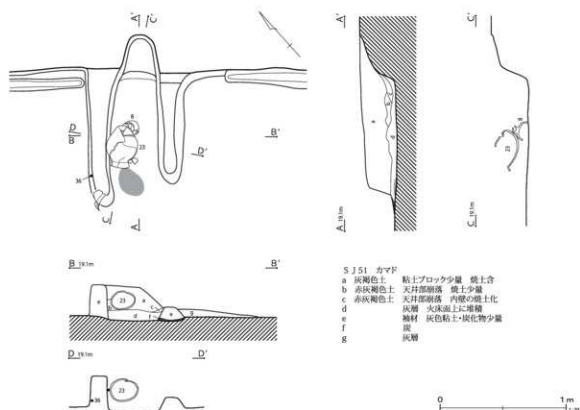
- 8 暗茶褐色土 柱痕
- 9 暗オリーブ灰色土 柱廻り方充填 炭化物・灰色粘土ブロック少量

野廬穴

- 10 暗灰褐色土 炭化物粒子 明灰色砂質土ブロック 粘性強い
- 11 明灰色砂質土 炭化物粒子や少ない 灰色粘土ブロック少量



第117図 第51号住居跡



第118図 第51号住居跡カマド

さ0.29mの短い煙道部が続いている。軸部は灰色粘土が積み上げられた造り付けのカマドで、左右平行に直線的に伸びている。燃焼部は、奥行き1.08m×内法幅0.46mの長方形を呈している。火床面直上には灰層が形成され、天井部の崩落土がこれを覆う。架け口部には甕(23)が架けられた状態で埋没し、その直下には脚裾部が欠損した高坏(8)が倒立させた状態で支脚に転用されている。支脚前面部の火床面の焼土化が顕著で、焚口と断定される。カマド右側には、炭化物層が厚く形成されている。

南東壁から主柱穴 Pit5 に向かって、間仕切り溝が張り出している。長さ0.8m×幅0.23m×床面からの深さ0.10mほどである。炬と貯蔵穴を仕切るように伸びている。間仕切りの南西の南隅部には貯蔵穴が位置し、貯蔵穴と他の居住空間を区切る意図が感じられる。

貯蔵穴は、長軸0.90m×短軸0.86mの隅丸方形

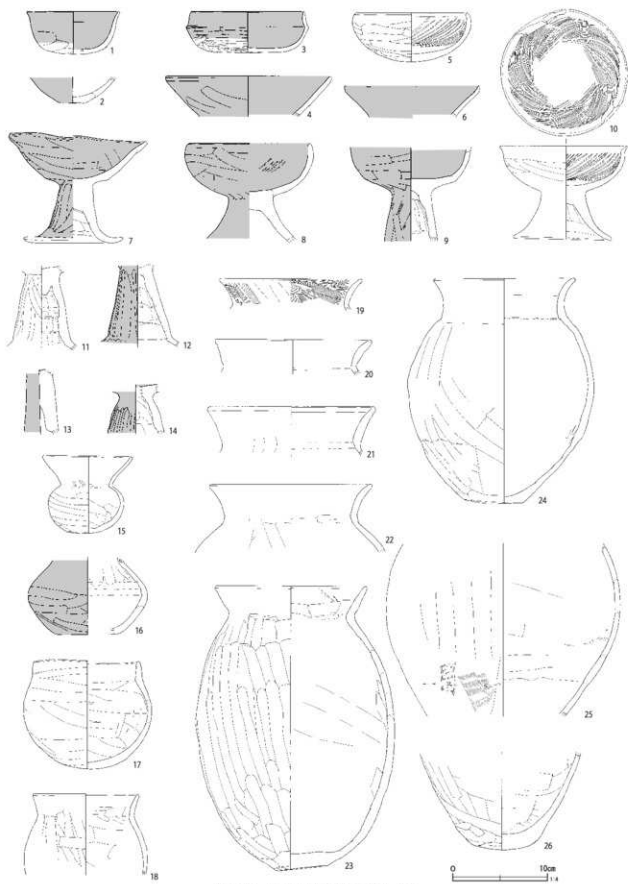
である。床面から0.14m付近に段をもち、住居跡の床面からの底面までの深さは0.54mを測る。底面は平坦である。

カマドと対面する南西壁際には、Pit1がある。径0.34m×床面からの深さ0.24mで、主柱穴に比べると浅い。位置的条件から、出入口施設に関連する機能が想定される。

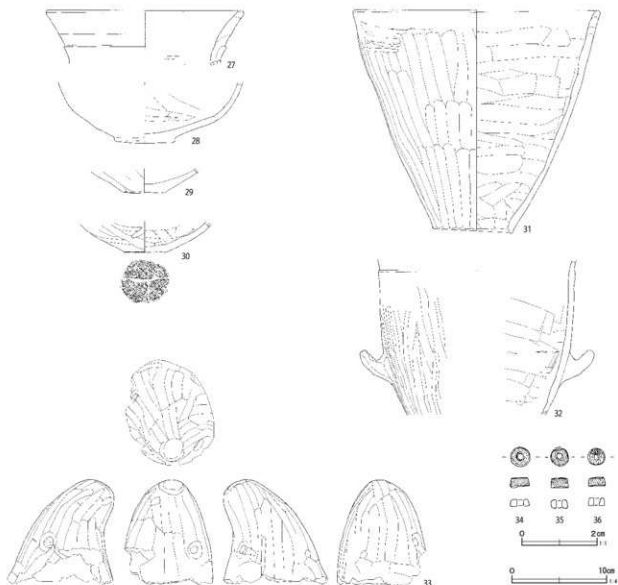
壁溝は全周する。幅0.08～0.19m、床面からの深さ0.04～0.10mほどである。

遺物は住居跡全体に分布し、際だって集中する箇所は無い。床面直上からの出土とともに、壁際が高い位置、中央部が低い位置というレンズ状の出土状況もみられる。

坏類は赤彩された坏身模倣・外反口縁の小型の鉢タイプと内灣口縁がある。高坏には有稜坏屈折脚と内灣口縁や内斜口縁の坏が載るものがある。供膳具としては、坏よりも高坏の方が多い。甕は胴部に丸みが残っているものの、長胴化の兆しが



第119图 第51号住居跡出土遺物(1)



第120図 第51号住居跡出土遺物(2)

窺われる。甑には鉢形と把手付の須恵器模倣がある。また埴や小型の甕も含まれる。器形や器種組成から、錢塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。

注目されるのは、鳥帽子形の土製支脚(33)である。支柱穴 Pit2 の南側に接して出土している。焼きが甘く、特に基部は顕著である。粘土が乾いた状態で支脚として使用し、使用時の被熱によって徐々に焼成されたものと思われる。側面には非貫通の孔が1孔ずつ、計2孔が穿たれている。ここに棒状のものを差し込んで、隣に配置した土製支脚と連結させていたものと推定される。3～5

点程度で五徳状に連結された支脚になっていたものと推測される。表面はナデによって調整されている。

34～36は滑石製の白玉である。カマドの左袖外側(36)や住居跡東半部(34・35)からの出土で、規則性は無い。大きさは、34が長さ0.50cm・幅0.49cm・厚さ0.24cm、重さ0.1gである(No11)。35は、長さ0.45cm・幅0.42cm・厚さ0.23cm、重さ0.1gである(No30)。36は、長さ0.45cm・幅0.44cm・厚さ0.25cm、重さ0.1gである(カマドNo1)(図版107-1)。

第51表 第51号住居跡出土遺物観察表 (第119・120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	碗	(9.8)	4.6		H I J	30	普通	にぶ・橙	口縁部外反 赤彩		
2	土師器	碗		2.8	2.8	A H I J	30	普通	にぶ・橙	平底 外面赤彩 内面黒色 器面風化調整不明瞭		
3	土師器	坏	(12.0)	4.3	(8.6)	E H I J L	40	普通	明赤褐	坏身模範 赤彩 平底風 №35		
4	土師器	高坏	(17.6)	4.2		A E H I J K	30	普通	にぶ・橙	有残片 赤彩 №15		
5	土師器	坏	(11.8)	5.2		A H I J K	50	普通	にぶ・橙	内開口縁 内面暗文 口縁部に二次的焼熱 №32		
6	土師器	高坏	(14.4)	3.4		H I	10	普通	橙	有残片 赤彩		
7	土師器	高坏	14.4	11.2	8.5	A B E H I J	90	良好	にぶ・赤褐	有残片屈折脚 赤彩 坏部歪大 支脚転用痕 カマド№4・5		87-1
8	土師器	高坏	13.0	10.4		A E H I J K	95	普通	にぶ・橙	転用支脚 内開口縁片搭載 内面暗文か カマド№7		87-2
9	土師器	高坏		9.9		C E H K	60	普通	橙	模範載 輪部残形成 赤彩 №10		
10	土師器	高坏	13.4	10.0	10.1	A H J	95	普通	橙	外反口縁模範搭載 内面暗文 №31		87-6
11	土師器	高坏		8.9		A E H K	80	普通	にぶ・橙	(屈折脚) №24		
12	土師器	高坏		8.7		C E H I J K	70	普通	にぶ・橙	(屈折脚) 赤彩 №6		
13	土師器	高坏		6.8		A E H I K	80	普通	にぶ・橙	(柱状脚) 赤彩 支脚転用痕 №23		
14	土師器	高坏		5.1		C H K	30	普通	にぶ・橙	短脚 赤彩		
15	土師器	埴	(8.8)	8.1		A E H I J K	60	普通	にぶ・黄	小型丸底 器面風化顕著 (赤彩?) №22		87-3
16	土師器	埴		8.1	(6.8)	A E I K	25	普通	にぶ・黄	算盤玉形胴部 赤彩 №17		
17	土師器	鉢	11.0	11.4		A E H J K L	100	普通	暗褐	直立短口縁 丸底 二次的焼熱顕著 覆片着 №16		87-4
18	土師器	鉢	(11.2)	8.6		C I J K	15	普通	にぶ・黄	口縁部外反		
19	土師器	台付甕	(15.0)	3.3		A E H I K	5	普通	にぶ・黄	外面は煮沸により、赤色化・器面風化		
20	土師器	甕	16.4	3.7		A C E H I J K	50	普通	橙	煮沸痕 ハケ残		
21	土師器	甕	(17.5)	5.4		I L	40	普通	橙	SJ40一括遺物と接合		
22	土師器	甕	(17.0)	7.2		H L	20	普通	橙	SJ40一括遺物と接合 煮沸痕 器面風化		
23	土師器	甕	15.8	30.2	5.2	C E H I K	80	普通	にぶ・黄	長胴化出現 煮沸痕 底部ヘラケズリ カマド№6		88-1
24	土師器	甕	14.7	23.9	6.1	A E H I K	90	普通	にぶ・赤褐	胴張残 煮沸の影響強 器面風化顕著 調整痕不明瞭 底部ヘラケズリ №26・27・28		88-2
25	土師器	甕		18.3	最大径 24.9	A E H I J K	60	普通	灰黄褐	胴張残 煮沸の影響強 器面風化顕著 調整痕不明瞭 №2・5・8・9・13 / SJ40一括遺物と接合		
26	土師器	甕		10.3	6.4	C H L	60	普通	明赤褐	長胴化 煮沸痕 №1		
27	土師器	壺	(20.9)	5.8		A E H I	10	普通	にぶ・黄	口縁部段形風化		
28	土師器	壺		6.7	6.4	D H I J K	30	普通	にぶ・黄	二次的焼熱 (被熱による亀裂) 底部ヘラケズリ №4		
29	土師器	壺		3.5	4.8	A C	65	普通	にぶ・黄	底部無調整 (節痕) 二次的焼熱		
30	土師器	甕		3.2	4.4	H L	45	普通	明赤褐	底部木葉痕 二次的焼熱顕著 SJ40・SJ42カマドと接合		
31	土師器	瓶	25.7	23.4	8.3	A E H I K	95	普通	橙	外面+内面上半部に二次的焼熱 №18・19・25		87-7
32	土師器	瓶		16.3		A C E H I	20	普通	明赤褐	把手付 二次的焼熱・器面風化顕著 №21		
33	土師器	支脚		11.2		H I	85	不良	にぶ・橙	鳥帽子形土製支脚 焼成不良 非貫通2孔(連結使用か) №29		88-3

第52号住居跡 (第121図)

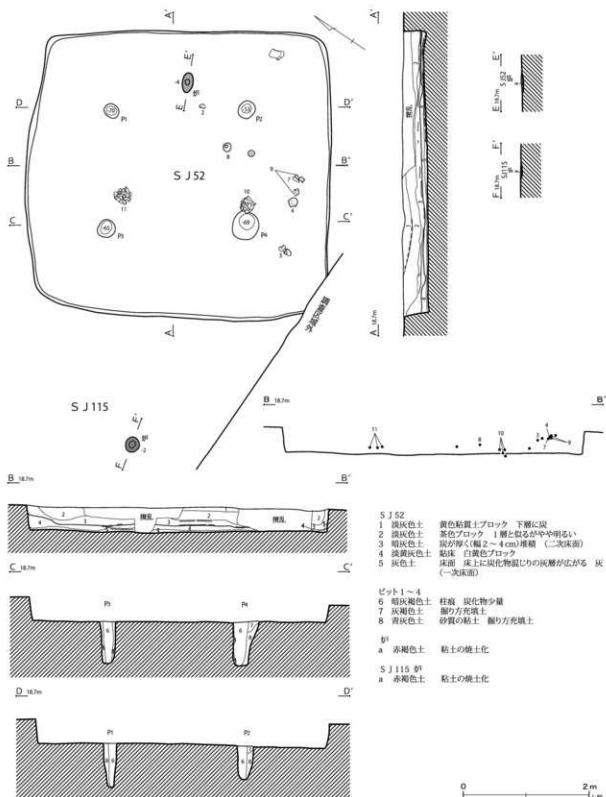
F-9グリッドに位置し、南隅部は調査区域外にある。第115号住居跡と重複する。

平面形態は方形で、主軸長4.50m・幅4.85mを測り、主軸方位はN-56°-Eを指す。確認面からの深さは0.31~0.40mである。覆土は自然堆積であるが、上半部は攪乱されている。

Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本が主柱穴に相当する。規模はPit1が径0.23m×床面からの深さ0.70m、Pit2が径0.27m×床面からの深さ0.53m、Pit3が径0.28m×床面からの深さ0.65m、

Pit4が径0.43m×床面からの深さ0.69mである。いずれもしっかりとした掘込みを有し、断面観察では柱痕も確認されている。柱間距離は、主軸方向(Pit1-Pit3・Pit2-Pit4)が1.85m、幅方向(Pit1-Pit2・Pit3-Pit4)が2.2mで住居形態と合致した規則性の高い配置である。

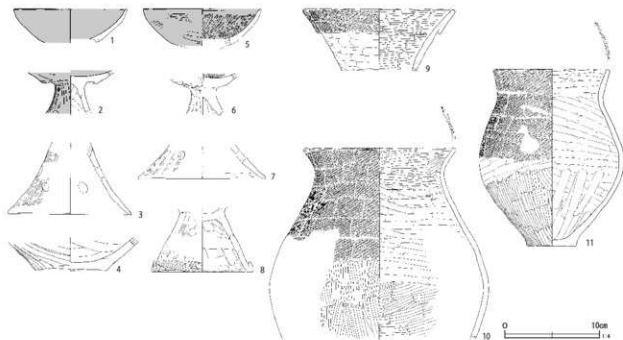
炉は地床である。主柱穴のPit1とPit2を結ぶ線よりも北東壁に寄って位置する。火床面は、長軸0.30m×短軸0.16mの楕円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.04mほどの浅い掘り込みがみられる。



第121図 第52・115号住居跡

貯蔵穴や壁溝はみつかっていない。
遺物は出土量が少なく、床面よりもわずかに浮いた位置からの出土である。小型高坏・台付甕と

吉ヶ谷系の甕・壺(9~11)が出土している。高坏の脚部には円孔が3孔穿たれるものと、2孔一対(計4孔)穿たれるものがある。銭塚・城敷Ⅱ



第122図 第52号住居跡出土遺物

第52表 第52号住居跡出土遺物観察表 (第122図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏	(11.9)	3.6		A E G H I K	20	普通	に灰・黄褐色	赤彩 二次的被熱 器面風化 調整痕不明瞭		
2	土師器	高坏		4.7		A E H I K	60	普通	に灰・橙	赤彩 円孔3		
3	土師器	高坏		7.5	(13.0)	A D E H I J K	15	普通	に灰・橙	円孔2孔1対 器面風化顕著 (赤彩?)	No.7	
4	土師器	壺		3.5	7.6	I L	70	普通	に灰・橙	No.9		
5	土師器	高坏	(12.3)	3.9		E I K	25	普通	に灰・黄褐色	赤彩 器面風化顕著		
6	土師器	高坏		4.3		A C H	100	普通	浅黄	円孔3 脚部二次的被熱 坏脚製造を接合		
7	土師器	高坏		3.5	(13.2)	A E I J L	20	普通	に灰・橙	円孔3 No.11		
8	土師器	台付甕		6.6	10.4	A E H I J	100	普通	に灰・黄褐色	端部折返 外面ヨコハケ	No.3	
9	土師器	壺	(16.0)	6.7		A E G	10	普通	橙	口縁部折返部に単節LR二段施文 二次的被熱	No.10-12	
10	弥生	甕	(15.8)	20.4		A G K	30	良好	黒褐	外面口縁部～胴部上位に単節LR六段施文(5段目と6段目の間に隙間) 口唇部に縄文原体を斜位に押圧	No.6	89-1
11	弥生	甕	12.3	18.7	5.3	G I	90	良好	黒褐～橙	外面口縁部～胴部上半に単節LR五段施文 口唇部に縄文原体を斜位に押圧 二次的被熱	No.1	89-2

期、反町Ⅱ-1に相当する。

9は吉ヶ谷系の壺である。二重口縁の外面には単節LRが反時計回りに下から上へ二段施文されている。口唇部は横方向の丁寧なナデによって仕上げられている。

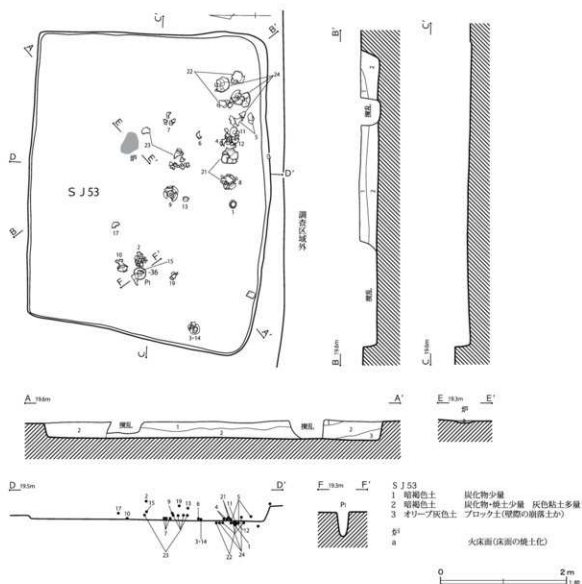
10の甕の外面の口唇部から胴部上位にかけて、単節LRの縄文が反時計回りに上から下へ施文されている。施文は6段目および、5段目と6段目の間には隙間が空いている。また、口唇部上端には縄文原体を斜位に押圧されている。

11の甕の外面の口縁部から胴部中位には、単節LRを反時計回りに上から下へと5段にわたって施文されている。また口唇部には、縄文原体が斜位に押圧されている

第115号住居跡 (第121図)

F-9グリッドに位置し、炉のみが検出された住居跡である。壁や他の諸施設はみつからない。炉の位置から、第52号住居跡との重複が推定される。

炉は地床炉で、火床面は長軸0.24m×短軸



第123図 第53号住居跡

0.22mの円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.02mほどの浅い掘り込みがみられる。

出土した遺物は無い。

第53号住居跡 (第123図)

F-8グリッドに位置する。重複する第69号住居跡と重複し、覆土の堆積状況から第53号住居跡の方が新しい。

平面形態は長軸を東西にもつ長方形で、主軸長5.15m、幅3.61mを測り、主軸方位はN-92°-Eを指す。確認面からの深さは0.22~0.29mと深い。覆土は自然堆積で、壁際から埋没する状況が観察

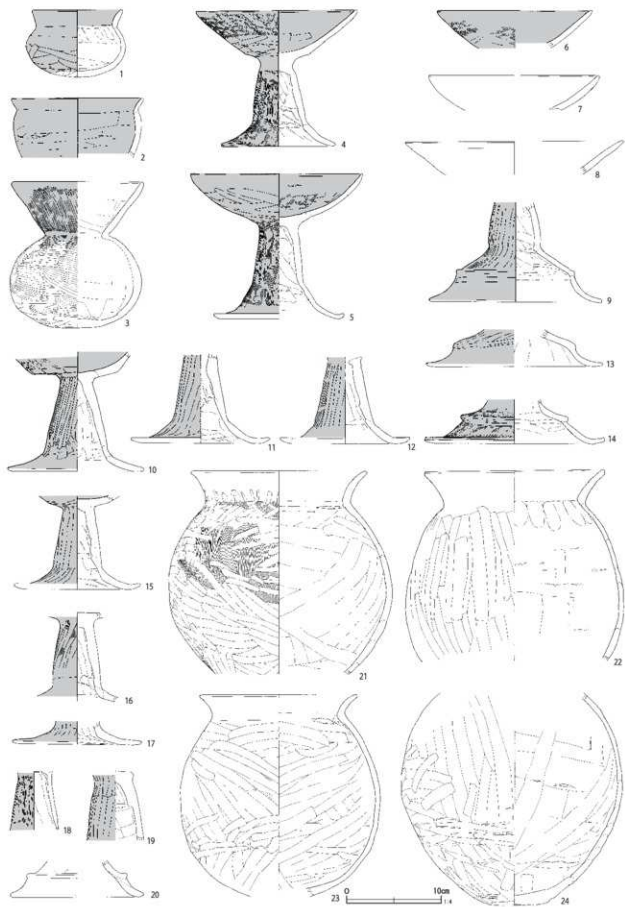
できる。

炉は地床炉で、住居跡の中心よりやや東に位置する。火床面は、長軸0.35m×短軸0.21mの不正形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.03mほどの浅い掘り込みがみられる。

炉に対面する位置にPit1が所在する。径0.18m×床面からの深さ0.36mの規模をもつ。対応するピットがないことから主柱穴とは考えたいが、用途は不明である。

主柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出されていない。

遺物は、炉と南壁の間とPit1周辺に分布し、床



第124图 第53号住居跡出土遺物

第53表 第53号住居跡出土遺物観察表 (第124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	椀	9.4	7.1	3.3	A H I J	95	普通	明赤褐	口縁部外反 灰底 赤彩 二次的被熱	No.7	89-3
2	土師器	椀	(13.7)	6.3		A C E H I J K	40	普通	明赤褐	口縁部外反 赤彩 二次的被熱 器面風化顕著	No.4	89-5
3	土師器	埴	13.6	15.4		A E H I J K	80	普通	にぶい	二次的被熱顕著 赤彩不明瞭	No.1	89-4
4	土師器	高坏	(17.0)	14.4	11.7	A C E H I	60	良好	にぶい	有稜坏屈折脚 赤彩 支脚転用痕	No.16	89-5
5	土師器	高坏	18.0	15.3	12.8	A E H I J K	90	普通	にぶい	有稜坏屈折脚(緩直化) 赤彩 支脚転用痕(倒立)	No.17-18	89-6
6	土師器	高坏	(15.9)	3.9		A E H I K	40	普通	明黄褐	有稜坏 赤彩	No.20	
7	土師器	高坏	(18.0)	3.7		E I J	35	普通	明赤褐	有稜坏 口縁部に二次的被熱	No.22	
8	土師器	高坏	22.8	3.5		A E H I J	10	普通	にぶい	有稜坏		
9	土師器	高坏		10.5	18.2	A H I K	95	良好	にぶい	有段脚 赤彩	No.10	89-7
10	土師器	高坏	12.6	14.1		A C I J	80	良好	にぶい	屈折脚 赤彩 支脚転用痕(正立)	No.6	
11	土師器	高坏	9.4	14.7		A H I J	80	普通	明赤褐	屈折脚 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕	No.15	
12	土師器	高坏	9.1	11.6		C I	90	良好	明赤褐	屈折脚 赤彩 支脚転用痕(倒立)	No.14	
13	土師器	高坏	3.9	(18.6)		C E H I K	25	普通	にぶい	有段脚 赤彩 二次的被熱	No.9	
14	土師器	高坏	4.7	16.4		A C H I J	75	良好	にぶい	有段脚 赤彩 二次的被熱	No.1	
15	土師器	高坏	9.9	(10.6)		A E H I J K	45	普通	にぶい	有稜坏屈折脚 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕	No.5	
16	土師器	高坏	9.5	8.5		E H I	85	普通	にぶい	屈折脚 赤彩		
17	土師器	高坏	2.4	(13.6)		E H I J K	30	普通	にぶい	屈折脚 赤彩 内外面二次的被熱	No.11	
18	土師器	高坏	6.1			E H I K	80	普通	にぶい	屈折脚 赤彩 比較的薄手のつくり		
19	土師器	高坏	7.0			A C E H I J	90	普通	褐灰	屈折脚 赤彩 破損後の支脚転用痕	No.3	
20	土師器	高坏	3.9	(13.2)		A I	15	普通	灰黄褐	有段脚 二次的被熱		
21	土師器	甕	18.4	21.5		A H J L	70	普通	明黄褐	球胴形(台付甕) 煮沸痕	No.8-13	90-1
22	土師器	甕	(18.6)	20.1		E H I L	35	普通	明褐	胴張 二次的被熱顕著(器壁・器面は発泡状)	No.25-27	90-2
23	土師器	甕	16.4	21.3		A C E H I	70	普通	褐灰	胴張 煮沸痕顕著	No.21-23	
24	土師器	甕		22.0	6.4	A E H I J K	70	普通	黒褐	胴張 煮沸痕 外面壓付着	No.19-24-26	

面直上付近から出土している。供膳具には口縁部が外反する椀と高坏があり、坏は出現していない。高坏は有稜坏屈折脚と有段脚があるが、有段脚の割合が多い。坏部の稜ははっきりとしたもので、脚は長いものが多い。小型壺は小型丸底土器の系譜を引くもの、甕は胴部が丸みをもつ単口縁である。遺物の形態や器種組成などから、銭塚・城敷Ⅲ期古段階に相当する。

第54号住居跡 (第125図)

F-7・8グリッドに位置する。北隅部は攪乱され、南側約1/3は調査区域外にある。覆土の堆積状況や出土遺物の比較から、重複する第70号住居跡よりも新しい。

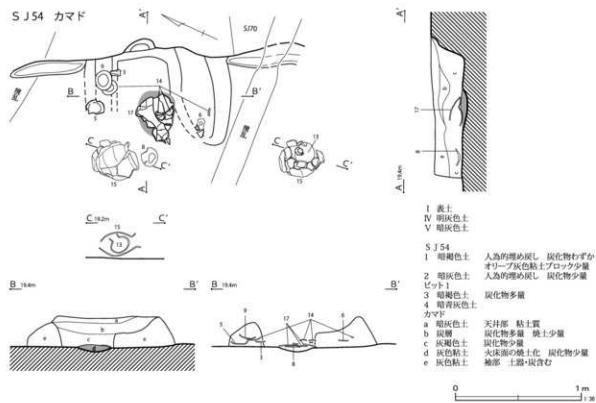
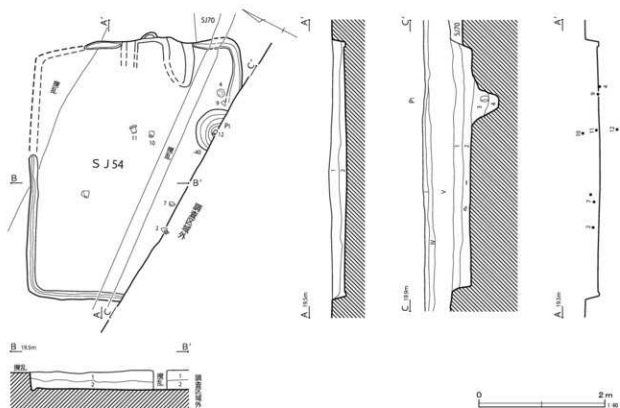
平面形態は主軸方向に長軸をもつ長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長4.13mを測り、幅は3.3mと推定される。主軸方位はN-65°-Eを指す。確認面からの深さは0.18~0.31mほどで、覆土は自然堆積である。

主柱穴は検出されていない。

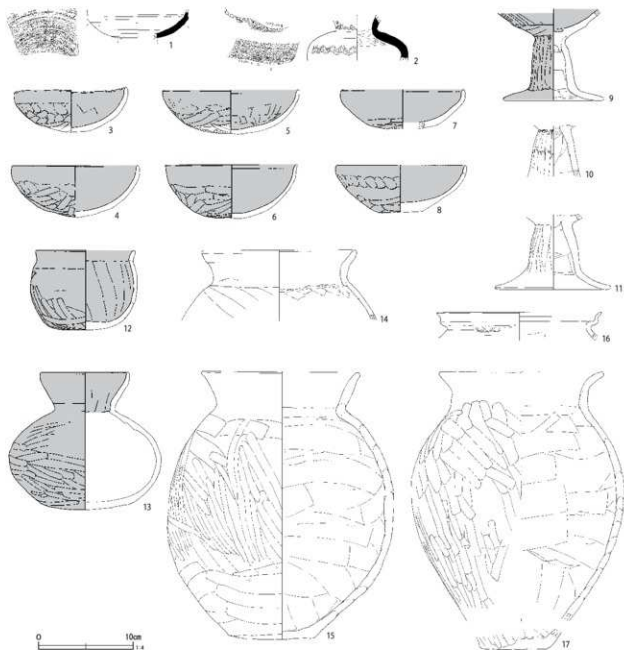
カマドは、住居の内側に灰色粘土によって造り付けられたもので、燃焼部奥壁と住居壁が一致する。ここから長さ0.1mほどの短い煙道部が外方へ延びる。袖は壁から垂直に住居跡中央へ向かい、燃焼部は方形を呈している。右袖の芯材として環(3・5)と破損した甕(14)が用いられている。先端部の残存状態が悪く、全体の把握が困難である。燃焼部には明確な掘り込み等はみられず、火床面と住居床面との明瞭な境がない。燃焼部内には天井部が崩落している。架け口部には甕(17)が架けられた状態で発見され、直下の火床面の焼土化が顕著である。規模は奥行き0.7m、内法幅0.44mである。

南壁際からPit1が検出されている。径0.70m×床面からの深さ0.40mとしかりとした掘込みをもつ。南半が調査区域外にあるため不明瞭な点が多いが、貯蔵穴と考えることもできる。

壁溝は、検出された壁に沿って全周する。幅0.12~0.20m、床面からの深さ0.02~0.03mほど



第125図 第54号住居跡



第126図 第54号住居跡出土遺物

である。

遺物はカマドの周辺部に集中し、他の箇所から出土した遺物も床面直上付近からの出土である。カマド前面部から出土した甕（15）の中には埴（13）が入っていた。また東側の調査区域の境界際から須恵器平底瓶が、一括資料として須恵器高坏が出土している。

坏類は丸底の内灣口縁と平底の内灣口縁・内斜

口縁があり、小型の鉢が加わる。高坏は有稜坏屈折脚、甕は胴部に丸みを残しながらも長胴化の兆しが窺われる。器形の特徴や模倣坏が含まれていない器種組成などから、銭塚・城敷Ⅲ期新段階～Ⅳ期古段階に相当する。カマドも導入期の古式の形態であり、遺物の時期と合致する。なお、S字口縁の甕（16）は、流れ込んだ遺物である。

1の須恵器高坏は、細片からの復元実測である。

第54表 第54号住居跡出土遺物観察表 (第126図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	無蓋高坏		3.2		IK	20	良好	灰	陶色産 TK23~TK47) 口縁部波状文 自然釉付着		90-3
2	須恵器	平底瓶		4.8		IK	40	良好	灰	陶質土器か韓式土器(百濟馬韓からの搬入品か?) 器形的には5世紀代 頸部・胴部に波状文 頸部絞り技法 内面擦痕 自然釉付着 器壁が厚い No8		90-4
3	土師器	坏	11.6	4.7		ACDEHIL	95	普通	橙	内埴口縁 口縁部歪 赤彩 二次的被熱 煤付着 器面風化顕著 カマFNo11		90-5
4	土師器	坏	13.3	5.4		ACEHK	95	普通	にぶい橙	内埴口縁 赤彩 平底瓶 No6		90-6
5	土師器	坏	14.1	4.6	3.2	AEHK	100	普通	にぶい橙	内埴口縁 赤彩 カマFNo1		90-7
6	土師器	坏	13.9	5.2	4.2	BEIJK	100	普通	にぶい橙	内埴口縁 平底 赤彩 二次的被熱 煤付着 カマFNo12		91-1
7	土師器	坏	12.7	3.6		AEHK	50	普通	にぶい橙	内埴口縁 平底瓶 赤彩 No2		
8	土師器	坏	13.7	4.9	4.8	ACEHKL	90	普通	明赤褐	内埴口縁 平底 赤彩 二次的被熱顕著 カマFNo8		91-2
9	土師器	高坏		(9.8)	10.2	EHIK	60	普通	橙	有稜坏屈折脚 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕 No5・カマFNo9		
10	土師器	高坏		5.4		AHIIJK	70	普通	にぶい橙	(屈折脚) No3		
11	土師器	高坏		(8.0)	11.6	AEGHI	80	普通	にぶい橙	屈折脚 支脚転用痕 赤彩不明 No4		
12	土師器	鉢	10.2	8.4		AEHK	90	普通	明赤褐	口縁部外反 平底 赤彩 二次的被熱顕著 No7		91-3
13	土師器	埴	9.2	14.6		EHIJK	90	普通	にぶい赤褐	平底瓶 赤彩 二次的被熱顕著 カマFNo6		91-4
14	土師器	甕	16.0	7.5		BEJ	25	普通	明赤褐	胴張 カマFNo2・10-13		
15	土師器	甕	16.6	28.2	9.2	AEHK	90	普通	灰黄褐	胴張 煮沸痕 煤付着 No4		91-5
16	土師器	台付甕	17.2	2.9		AHIIJK	5	普通	にぶい橙	S字状口縁 混入品 煤付着		
17	土師器	甕	17.1		7.0	EHIK	50	普通	にぶい赤褐 ~暗赤灰	長胴化 煮沸痕 カマFNo5		91-6

内外面ともに焼成時の自然釉が付着しており、不明瞭な部分がある。外面の口縁部には波状文が施文されている。体部のロクロヘラケズリは古い様相と捉えられる。器形や技法、胎土・焼成等の特徴から、陶色産のTK23型式(～TK47型式)段階と推定される。

2は須恵器平底瓶と思われる。外面の頸部と胴部中に波状文が施されている。胴部波状文の上下には区画沈線はみられない。内面の頸部はナデによって仕上げられているが、絞り込んだ際の指頭痕が残る。また、一部に擦痕もみられ、底部内面を棒状の工具で突いた時の痕跡と思われる。器厚が厚く、陶質土器や韓式系土器系と推定される。器形的には5世紀代のもので、百濟馬韓からの搬入品の可能性も考えられる。

第55号住居跡 (第127図)

F-6グリッドに位置し、南隅部が調査区域外にある。第10号掘立柱建物跡と重複する。東西方向に幅1.2mほど攪乱されている。

平面形態は台形である。主軸短辺長2.8m、主軸長辺長3.3mと推定され、幅3.23mを測る。主軸

方位はN-43°-Wを指す。確認面からの深さは0.17～0.30mと深い。覆土は自然堆積で、北東側から堆積した様子が看取できる。最下層の4層には多量の炭化物が堆積している。

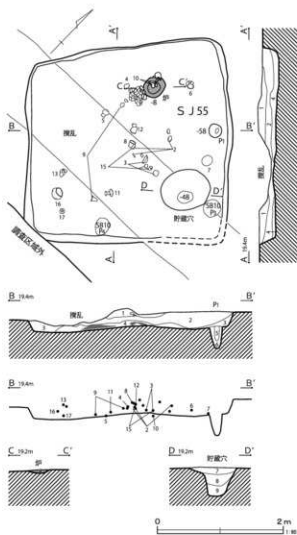
炬は地床がで、極端に西壁に寄った位置にある。火床面は、長軸0.37m×短軸0.31mの円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.05mほどの浅い掘り込みがみられる。

貯蔵穴は、東隅部に付設されている。長軸0.76m×短軸0.64mの円形で、床面からの深さは0.48mを測る。

北東壁中央付近の壁際には、Pit1が存在する。径0.20m×床面からの深さ0.58mの規模をもつ。位置的条件から、出入り施設に関連する機能が推定される。

主柱穴・壁溝はみつからない。

遺物は、炬を中心とした広い範囲に分布し、床面直上から覆土上層まで分散して出土している。供膳具には坏が含まれていない。口縁部が外反する身の深い碗、有稜坏の高坏には屈折脚と有段脚がある。小型丸底土器の系譜にある小型壺、甗は



- S J 55
- 1 暗褐色土 炭化物・焼土少量
 - 2 暗灰色土 炭化物わずか
 - 3 暗灰色土 灰色粘土ブロック主体
 - 4 暗褐色土 炭多量
- ピット 1
- 5 暗褐色土 柱痕
 - 6 オリーブ褐色土 掘り方充填土
- 貯蔵穴
- 7 暗褐色土 炭化物多量
 - 8 暗褐色土 オリーブ褐色粘土ブロック・炭化物少量
 - 9 暗青灰色土
- 貯
- a 赤褐色土 粘土の焼土化

第127図 第55号住居跡

小型鉢形で、16は鉢の底部が穿孔された転用甕である。器形の特徴や器種組成などから、銭塚・城敷Ⅲ期古段階に相当する。

17は滑石製の紡錘車である。南隅部付近から出土した。上面部を中心に欠損し、上径は計測できない。下径4.37cm・厚さ1.13cm・孔径1.00cm、

重さ20.2gを測る。(No.25/図版92-4)

第56・72号住居跡 (第129図)

第56・72号住居跡は重複する2軒の住居跡で、F-5グリッドに位置する。覆土の堆積状況から、第72号住居跡の方が新しい。

第72号住居跡は大部分が調査区域外にあり、北隅部付近のみが確認されている。一辺1.5mほどの検出で、北西壁の方位はN-48°-Eを指す。確認面からの深さは0.15~0.31mで、覆土は自然堆積である。主柱穴・炉・貯蔵穴・壁溝等の諸施設はみつかっていない。遺物は破片が多く、図示し得た遺物は少ない。坏部がやや小振りで、稜がしっかりと残る高坏と、屈折脚が出土している。

第56号住居跡は第25号土壌よりも古い。東西方向に幅1.2m前後の攪乱が走り、1/3ほどが調査区域外にある。

平面形態は方形で、主軸長3.0mが検出されている。幅4.25mを測り、主軸方位はN-38°-Eを指す。確認面からの深さは0.18~0.23mで、覆土は自然堆積である。

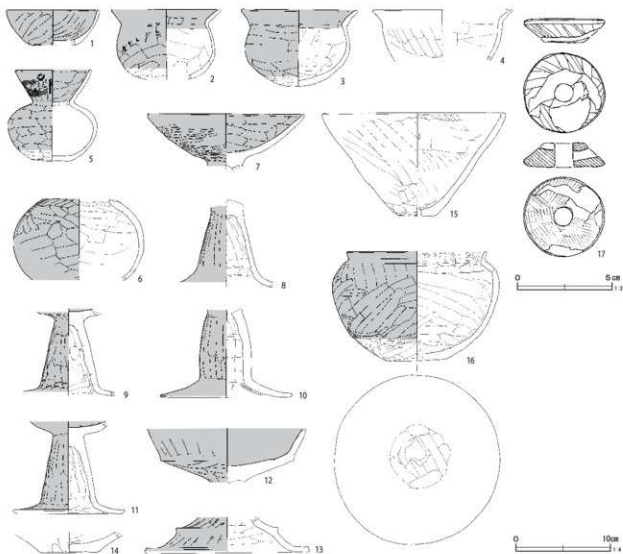
炉は地床炉で、極端に北壁側寄った位置にある。北半部は重複する第25号土壌によって壊されている。火床面は径0.37mの範囲が焼土化し、火床面下には深さ0.02mほどの浅い掘り込みがみられる。

主柱穴・貯蔵穴・壁溝などは検出されていない。出土遺物は少ない。前代の承溜を引く高坏の坏部と屈折脚、吉ヶ谷系甕の口縁部片が図示し得た。

第72・56号住居跡から出土した遺物は量が少なく、遺物の形状や器種組成などから新旧関係を捉えることは困難である。強いて言及すると、第72号住居跡が銭塚・城敷Ⅲ期新段階、第56号住居跡が銭塚・城敷Ⅲ期古段階に相当する。

第57号住居跡 (第130図)

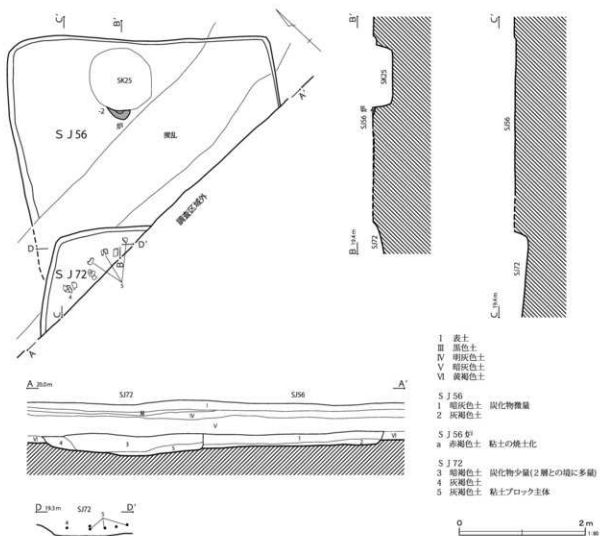
F-3・4グリッドに位置する。南半部は調査区域外にあり、また境界に沿って幅1mほどの帯状に攪乱されている。



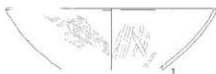
第128図 第55号住居跡出土遺物

第55表 第55号住居跡出土遺物観察表 (第128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	碗	(9.7)	3.7	(5.0)	A E I J K	25	普通	に染・赤褐	内埋口縁 平底 赤彩 (底面にも赤彩)		
2	土師器	鉢	(11.6)	7.4		A E I J K	40	普通	橙	口縁部外反 赤彩 No.9-11-14		92-1
3	土師器	鉢	(12.2)	8.1		A H I J	45	普通	明赤褐	口縁部外反 赤彩 二次的被熱 No.6-7		92-2
4	土師器	鉢	(14.8)	5.4		C H I J	20	普通	に染・黄橙	口縁部外反 No.21		
5	土師器	小型皿	8.0	9.6		A E I K	95	普通	灰黄褐	平底風 赤彩 No.13		92-3
6	土師器	皿		8.6		A H I K	40	普通	橙	赤彩 二次的被熱 No.24		
7	土師器	高坏	16.6	6.0		A D E H I J	100	普通	赤褐	有稜坏 二次的被熱 No.16		
8	土師器	高坏		9.2		A H I J	85	普通	赤褐	(屈折脚) 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕 No.10		
9	土師器	高坏		9.2		A E H I J K	80	普通	に染・褐	(屈折脚) 赤彩 支脚転用痕 No.4-17		
10	土師器	高坏		9.2	13.8	C H I K	90	普通	に染・橙	屈折脚 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕 No.22		
11	土師器	高坏		9.8	(11.0)	A E H I J K	50	普通	褐灰	有稜坏屈折脚 赤彩 支脚転用痕 (倒立) No.5		
12	土師器	高坏		5.7		C E H I	40	普通	明赤褐	有稜坏 赤彩 二次的被熱 No.12		
13	土師器	高坏		3.8	(17.1)	A E H I	20	普通	橙	有段脚 赤彩 No.2		
14	土師器	甕		2.2	5.8	A H I K	60	普通	に染・赤褐	煮沸痕		
15	土師器	瓶	(18.8)	10.8	3.9	C H J K	30	普通	に染・橙	鉢形 単孔 口縁部を内側に折り返す No.6-11		
16	土師器	転用皿	14.8	11.5	6.3	A E H I J K	100	普通	に染・黄橙	大型鉢の底部を穿孔して皿に転用 赤彩 No.1		92-5



第56号住居跡



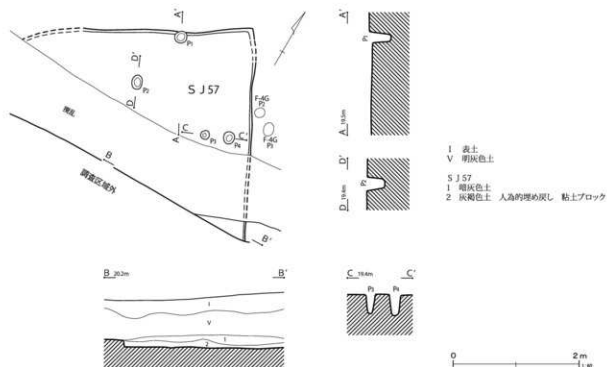
第56・72号住居跡



第129図 第56・72号住居跡・出土遺物

第56表 第56・72号住居跡出土遺物観察表 (第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図取
1	土師器	高坏	(22.4)	6.5		A E H I K	10	普通	にぶ青緑	SJ56 大型有稜坏	器面風化顕著	
2	土師器	高坏		8.1		E I J K	70	普通	にぶ青緑	SJ56 (屈折脚)	支脚転用痕 器面風化顕著	
3	吉ヶ谷	甕		2.5		A E H I J K	5	普通	褐灰	SJ56 単節LR施文		
4	土師器	高坏	18.5	6.8		A E H I J L	55	普通	明赤褐	SJ56-72 有稜坏	赤彩 二次的被熱 器面風化	
5	土師器	高坏		9.4	11.4	C H I L	50	普通	赤褐	SJ56-72 屈折脚	赤彩 SJ72No3-4-6	



第130図 第57号住居跡

平面形態は方形で、南北長3.37m、東西長3.65mが検出されている。南北軸の方位はN-29°-Wを指す。確認面からの深さは0.11~0.21mで、覆土には人為的に埋め戻されたような様相がみられる。

主柱穴や炉・カマド、壁溝等の諸施設はみつかっていない。

ピットは、4本検出されている。

Pit1は、北壁際に位置し、径0.20m×床面からの深さ0.29mである。Pit2は、北半部の内側にあり、長径0.23m×短径0.16m×床面からの深さ0.32mである。Pit3とPit4は、東壁に直交するように並ぶ。Pit3は長径0.14m×短径0.13m×

床面からの深さ0.30m、Pit4が径0.18m×床面からの深さ0.26mである。いずれも平面規模が小さく、位置からも主柱穴とは考え難い。

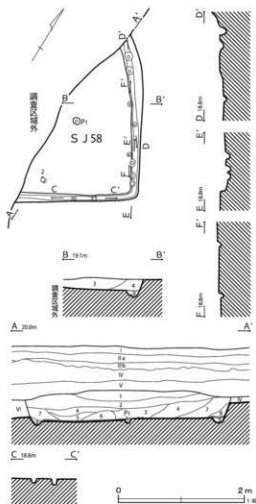
遺物は出土していない。

第58号住居跡 (第131図)

M-10グリッドに位置し、西半部は調査区域外にある。

平面形態は方形で、南北長2.56m、東西長1.85mが検出されている。炉・カマドはみつかっていない。南北軸の方位はN-31°-Wを指す。確認面からの深さは0.35~0.48mで、覆土は自然堆積である。

検出された東壁・南壁に沿って、壁溝が全周す



- I 表土
IIa 餅付土
IIb 明褐色土
IV 明灰色土
V 暗灰色土
VI 黄褐色土

- S J 58
1 暗灰褐色土 炭化物中粒子少量 鉄分中粒子多量
2 暗灰褐色土 鉄分中粒子中量 炭化物小粒子・黄褐色小ブロック少量
3 暗灰褐色土 炭化物粒子多量 鉄分中粒子中量 黄褐色中ブロック少量
4 明灰褐色土 炭化物中粒子少量(下部に多い) 黄褐色中ブロック多量
5 暗灰褐色土 鉄分中粒子中量 炭化物中粒子・黄褐色小ブロック少量
6 黄褐色土 鉄分中粒子中量 炭化物中粒子(下部に集積)・明灰褐色小ブロック少量
7 明灰褐色土 鉄分中粒子中量 炭化物小粒子・黄褐色中ブロック少量
8 暗灰褐色土 鉄分中粒子中量 炭化物中粒子・黄褐色中ブロック少量
9 明灰褐色土 (厚溝) 鉄分中粒子中量 炭化物小粒子・黄褐色中ブロック少量

第131図 第58号住居跡

る。幅0.10～0.25m、床面からの深さ0.08～0.11mである。この壁溝の中には、非規則な間隔でピット10本が並んでいる。径0.07～0.13m×深さ0.03～0.10mほどの小規模なものである。住居上層を支える壁柱穴や壁板を保持する支柱穴等の用途が考えられるが、不規則な配置から後者と思われる。

住居跡床面からも Pit1 がみついている。径0.10m×床面からの深さ0.06mの規模であるが、位置的には支柱穴の可能性はある。

遺物は少なく、台付甕の台部2点と、小型壺底部片1点が図示し得た。銭塚・城敷Ⅱ期に相当する。

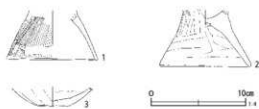
第59号住居跡 (第132図)

L-10グリッドに位置し、西側の大半の部分が調査区域外にある。

平面形態は方形で、南北長5.90m、東西長3.15mが検出されている。南北軸の方位はN-26°-Wを指し、確認面からの深さは0.35～0.50mほどである。

検出された Pit1 は、支柱穴に相当する。長径0.80m×短径0.65m×床面からの深さ1.18mもの大型の柱穴であり、第59号住居跡が大型住居であったと想起させる。

炉・カマドや貯蔵穴・壁溝等はみつかっていない。



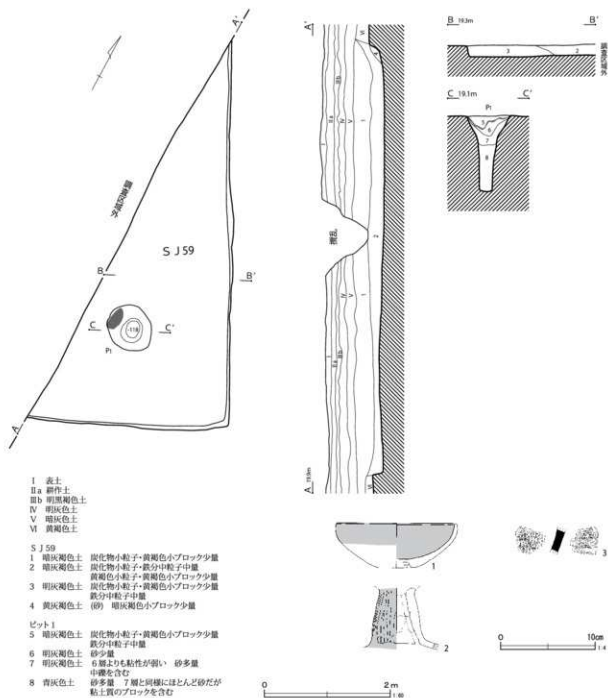
第132図 第58号住居跡出土遺物

第57表 第58号住居跡出土遺物観察表 (第132図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	台付甕	5.2	(9.6)	C E I J K	25	普通	にぶい黄緑	煮沸痕顕著			
2	土師器	台付甕	5.9	9.5	C E H I	30	普通	にぶい黄緑	№1			
3	土師器	壺	2.0	3.3	C E H I K	50	普通	橙	やや上げ底 二次的熱熟顕著			

出土した遺物は少ない。口縁部が内灣する平底
 杯・有稜杯屈折脚高杯の脚部と須恵器残片が図示

し得た。平底の杯から、銭塚・城敷Ⅲ期新段階～
 Ⅳ期古段階に推定される。



- I 表土
- IIa 新浮土
- IIIb 明黒褐色土
- IV 明灰色土
- V 暗灰色土
- VI 黄褐色土

- S J 59
- 1 暗灰褐色土 炭化物小粒子・黄褐色小ブロック少量
 - 2 暗灰褐色土 炭化物小粒子・鉄分中粒子中量
 - 3 黄褐色土 炭化物小粒子・黄褐色小ブロック少量
 - 4 明灰褐色土 炭化物小粒子・黄褐色小ブロック少量
 - 5 暗灰褐色土 鉄分中粒子中量
 - 6 明灰褐色土 砂少量
 - 7 暗灰褐色土 砂多量 粘土質のブロックを含む
 - 8 青灰色土 砂多量 7層と同様にほとんど砂だが粘土質のブロックを含む
- ピット1
- 5 暗灰褐色土 炭化物小粒子・黄褐色小ブロック少量
 - 6 鉄分中粒子中量
 - 7 明灰褐色土 砂少量
 - 8 暗灰褐色土 砂多量 粘土質のブロックを含む

第133図 第59号住居跡・出土遺物

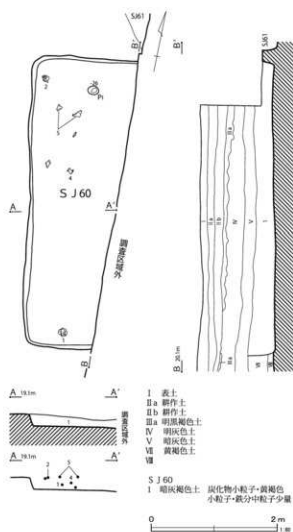
第58表 第59号住居跡出土遺物観察表 (第133図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	杯	12.6	4.7	4.0	ACEHIK	30	普通	に灰・黒	内湾口縁 平底	赤彩 器面風化顕著 No.3	
2	土師器	高杯		6.5		ACHIK	90	普通	に灰・赤褐	(屈折脚)	赤彩 支脚転用痕 No.2	
3	須恵器	甕		3.1		EHIK	5	普通	灰	陶色産 TK208以降	外面：平行タタキ・螺旋状文 内面：ナデ消し	92-6

3は須恵器甕の胴部片である。外面には平行タタキと螺旋状文がみられる。内面ではタタキの当て具痕がナデ消されている。内外面の器面調整は古い様相と捉えられ、陶邑産のTK208型式以降の5世紀代のものと推定される。

第60号住居跡 (第134図)

L-10グリッドに位置し、東側の大半が調査区



第134図 第60号住居跡

域外にある。

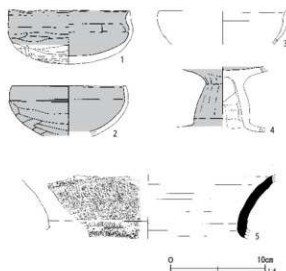
平面形態は方形で、南北長4.70mを測る。東西長1.60mが検出され、南北軸の方位はN-19°-Wを指す。確認面からの深さは0.12~0.30mほどで、覆土は自然堆積である。

北西隅付近から Pit1 が検出されている。長径0.17m×短径0.14m×床面からの深さ0.26mの規模の小さいもので、主柱穴とは考え難い。

主柱穴・カマド・貯蔵穴・壁溝等の諸施設はみつからない。

遺物は床面よりもやや浮いた位置から出土しているものが多い。また須恵器甕の口縁片が含まれている。坏類には内溝口縁と外反口縁鉢タイプがあり、高坏は有稜坏屈折脚である。煮沸具・貯蔵具の出土が無い。銭塚・城敷IV期古段階に相当する。

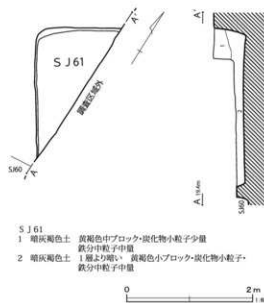
5は須恵器甕の口縁である。内外面に焼成時の降灰が付着している。外面には波状文が施されて



第135図 第60号住居跡出土遺物

第59表 第60号住居跡出土遺物観察表 (第135図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	12.6	5.7		CHIK	70	普通	にじみ黄褐色	口縁部小さく外反 赤彩	No.1	92-7
2	土師器	坏		5.3		CEHIK	40	普通	赤	坏身模倣	赤彩 No.7	
3	土師器	坏	13.3	3.6		ACHIK	10	普通	橙	内溝口縁 二次的焼熟顯著 調整痕不明 (有稜坏屈折脚)	赤彩 支脚転用痕? No.3	
4	土師器	高坏		6.9		ACEHIK	80	良好	にじみ赤褐色			
5	須恵器	甕		6.8		IK	5	良好	灰	陶邑産 5世紀代 外面:波状文 内外面自然堆積付着	No.5-6	93-1



第136図 第61号住居跡

いるが、施文方法に新しい様相がみられる。胎土等から陶器産で、5世紀代のものと推定される。

第61号住居跡 (第136図)

L-10グリッドに位置し、東側の大半部分が調査区域外にある。

平面形態は方形で、東西長1.25m・南北長1.83mが検出されている。南北軸の方位はN-36°-Wを指す。確認面からの深さは0.50mと深く、覆土は自然堆積である。

主柱穴、炉・カマド、貯蔵穴、壁溝等の諸施設はみつからない。

出土した遺物はない。

第62号住居跡 (第137図)

K・L-10グリッドに位置し、東側の一部が調査区域外にある。

平面形態は主軸方向に長軸をもつ長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長6.47m以上、幅5.12mを測り、主軸方位はN-68°-Eを指す。確認面からの深さは0.22~0.30mほどで、覆土は自然堆積である。

主柱穴には、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4が相当する。規模は、Pit1が長径0.49m×短径0.39m×床面からの深さ0.56m、Pit2が径0.50m以上×

床面からの深さ0.80m、Pit3が長径0.54m×短径0.40m×床面からの深さ0.52m、Pit4が長径0.56m×短径0.47m×床面からの深さ0.55mである。いずれの主柱穴からも柱は抜き取られ、平面形態的にも楕円形を呈する共通項として表れている。柱間距離は、主軸方向のPit1-Pit3=3.2m・Pit2-Pit4=3.4m、南北方向のPit1-Pit2=2.6m・Pit3-Pit4=2.1mを測る。カマド側が広く、その反対側が狭い台形に配置されている。また、Pit4からは滑石製紡錘車(15)が出土している。

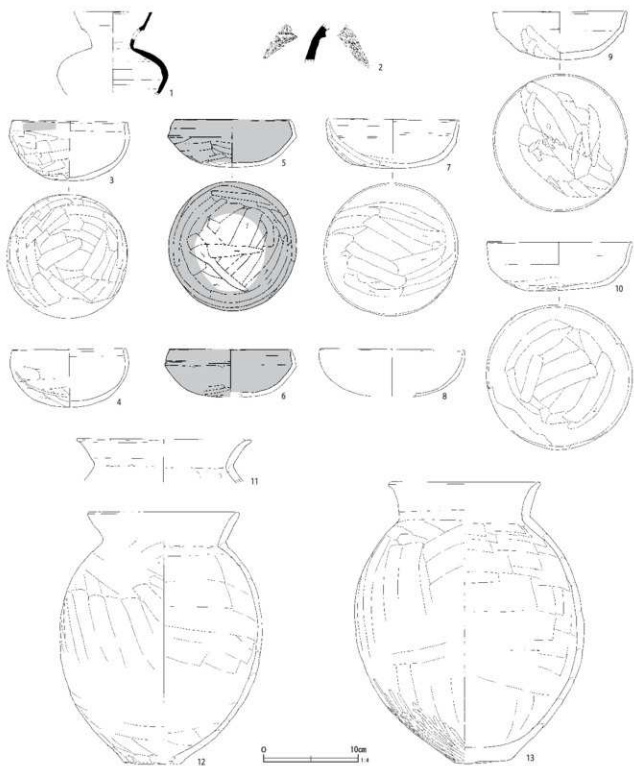
カマドは、大半の部分が調査区域外にあり、燃焼部の先端部のみが確認されている。造り付けのカマドで、袖は壁面に対して垂直に伸びているようである。燃焼部先端の内法幅は0.6mと狭い。燃焼部および周辺には炭化物が堆積している。また、焼骨化した獣骨も検出されているが、種類・部位等は同定できなかった(V-2参照)。

貯蔵穴は、南壁に沿って位置する。当初はPit5として調査を行ったが、坏(4)と甕(13)が出土したことから、貯蔵穴と判断した。長軸0.52m×短軸0.40mの平面楕円形である。床面からの深さは0.14mを測り、他のピットに比べて浅い。

壁溝は、南壁の東から1/3ほどの地点から、西壁を経て、北壁の西側3/4ほどに巡っている。幅0.13~0.23m、床面からの深さ0.03~0.12mほどである。

遺物は、カマドから貯蔵穴に至る南東部に集中し、床面直上付近からの出土が多い。須臾器の甕・甕や石製紡錘車・砥石などバラエティーに富んでいる。

坏類は模倣坏が主体となり、赤彩された坏身模倣と無赤彩の坏蓋模倣がある。また内罅口縁坏も含まれている。高坏の出土が無く、供膳具が高坏から坏にとって代わられている。甕は胴部に丸みを残しながらも、長胴化が進んでいる。これらの器形や器種組成の特徴から、銭塚・城敷IV期古段

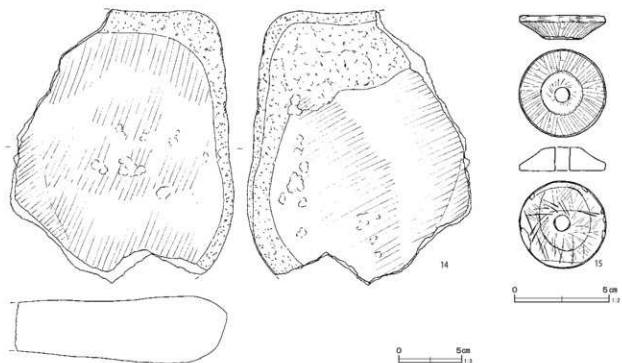


第138図 第62号住居跡出土遺物(1)

階に相当する。

1は須恵器の甕である。細片3点から復元実測した。口縁部は薄く・シャープな造りで、端部は凹線上に凹む。外面には焼成時の自然釉が厚く付

着しているため、波状文等は確認できない。また胴部の孔部は検出されていない。胎土には黒色斑点状の含有物がみられ、非陶邑産の製品である。候補として東海産があげられ、口縁端部の特徴な



第139図 第62号住居跡出土遺物(2)

第60表 第62号住居跡出土遺物観察表(第138・139図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	甕	(8.2)			IK	20	良好	灰	東海産か? (非陶色産) TK208併行	自然輪付着 No1	93-2
2	須恵器	甕		4.1		IK	5以下	良好	灰	陶色産 TK216 変型	自然輪付着	93-3
3	土師器	坏	12.2	6.3		EHI	80	普通	橙	坏身模倣(原初的) 赤彩(口縁部一部のみ確認)	二次的被熱顕著 No3	93-5
4	土師器	坏	(12.0)	6.1		CHIK	30	普通	橙	内埴口縁 二次的被熱	Pit5No1	93-4
5	土師器	坏	12.0	5.1		CEHIK	100	普通	にぶい橙	坏身模倣 赤彩	No12	93-6
6	土師器	坏	(13.0)	5.0		ACEHIK	20	普通	にぶい橙	坏身模倣 赤彩	No8	
7	土師器	坏	13.8	5.2		ACEHIJK	100	良好	にぶい橙	坏蓋模倣(原初的)	No10	94-1
8	土師器	坏	(15.3)	5.0		AHI	20	普通	橙	内埴口縁 器面風化顕著	No14	
9	土師器	坏	14.1	5.1		ACIJK	95	普通	にぶい橙	坏蓋模倣 平底風	No9	94-2
10	土師器	坏	15.2	5.1		AEHK	85	普通	にぶい橙	坏蓋模倣	No7-11	94-3
11	土師器	甕	(18.4)	4.6		CDHIK	20	普通	にぶい橙	Pit2		
12	土師器	甕	15.5	26.9	5.9	ACEHIJ	70	普通	にぶい橙	長胴化出現(胴張) 煮沸痕	No18	94-4
13	土師器	甕	15.4	29.9	5.8	CEHI	85	普通	橙	胴張(長胴化出現) 煮沸痕 煤付着	基礎部残痕 Pit5 No1	95-1

どからTK208型式併行段階と推定される。

2は須恵器甕の口縁部である。外面には凸帯が巡るが、波状文はみられない。胎土等の特徴も加味すると、陶色産のTK216型式段階と推定される。

14は、大型の砥石である。側部・下部を欠損する。長さ21.8cm・幅17.8cm・厚さ5.5cm、重さ

2941.3g、石材は砂岩である。(No13/図版95-2)

15は、滑石製の紡錘車である。上面径が小さく、側面裾部には垂直面が形成されている。下面には線状の擦痕が多くみられる。上径2.23cm・下径4.65cm・厚さ1.23cm・孔径0.85cm、重さ34.3gを測る。(Pit4/図版95-3)

第63号住居跡 (第140図)

J・K-8グリッドに位置し、南側の大半が調査区域外にある。

平面形態は方形で、南北長1.67m、東西長3.13mが検出されている。南北軸の方位はN-29°-Wを指す。確認面からの深さは0.26~0.45mほどである。覆土は自然堆積で、壁際から堆積した状況が観察できる。

主柱穴・炉・貯蔵穴・壁溝等の諸施設はみつからない。

遺物は少なく、高坏柱状罎と小型壺が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-3に相当する。

第64号住居跡 (第142図)

J-7・8グリッドに位置し、北東部の一部が調査区域外にある。重複する第6号掘立柱建物跡は、

第64号住居跡よりも新しい。

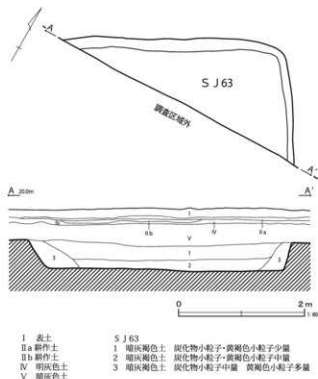
平面形態は方形で、主軸長5.78m、幅5.38mを測る。主軸方位はN-26°-Wを指す。確認面からの深さは0.09~0.17mで、覆土は自然堆積である。

ピットが4本検出されているが、すべて主柱穴に相当する。Pit2の脇には小さく浅いピットが付随し、Pit3は重複する第6号掘立柱建物跡の柱穴のよって壊されている。規模は、Pit1が径0.30m×床面からの深さ0.58m、Pit2が径0.67m×床面からの深さ0.58m、Pit4が長径0.65m×短径0.34m×床面からの深さ0.50mである。平面形態が楕円形を基本とし、覆土にも柱痕は認められないことから、柱は抜き取られているものと推定される。柱間距離は、主軸方向 (Pit3-Pit1・Pit4-Pit2) が2.8m、東西方向のPit3-Pit4=2.7m、Pit1-Pit2=3.0mを測る。わずかに、台形配置を示す。

炉は地床炉で、住居中心よりもやや北側に寄って位置する。火床面は、長軸0.28m×短軸0.24mの円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.04mほどの浅い掘り込みがみられる。

貯蔵穴は、炉に対面する南壁際に付設されている。南端部にグリッドピットが重複している。長軸0.65m×短軸0.60mの円形で、床面からの深さは0.23mを測る。

壁溝は、検出されていない。



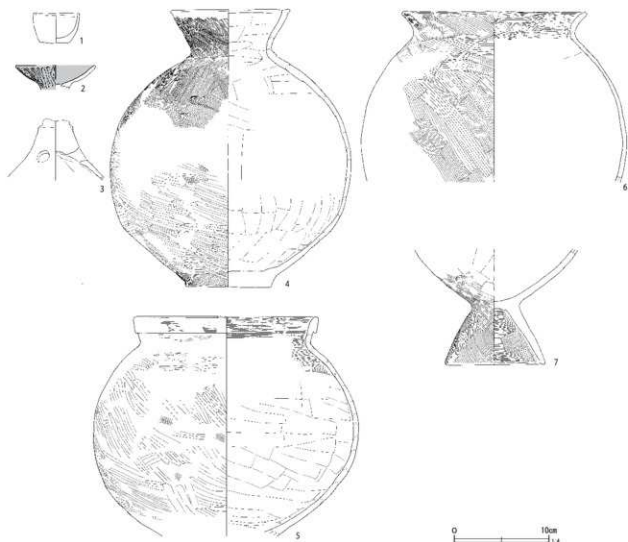
第140図 第63号住居跡



第141図 第63号住居跡出土遺物

第61表 第63号住居跡出土遺物観察表 (第141図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏		5.6		A G I K	95	普通	にぶ・橙	外面赤彩		
2	土師器	壺	(11.4)	6.3		E H I J	20	普通	にぶ・黄橙	単口縁		



第143図 第64号住居跡出土遺物

第62表 第64号住居跡出土遺物観察表 (第143図)

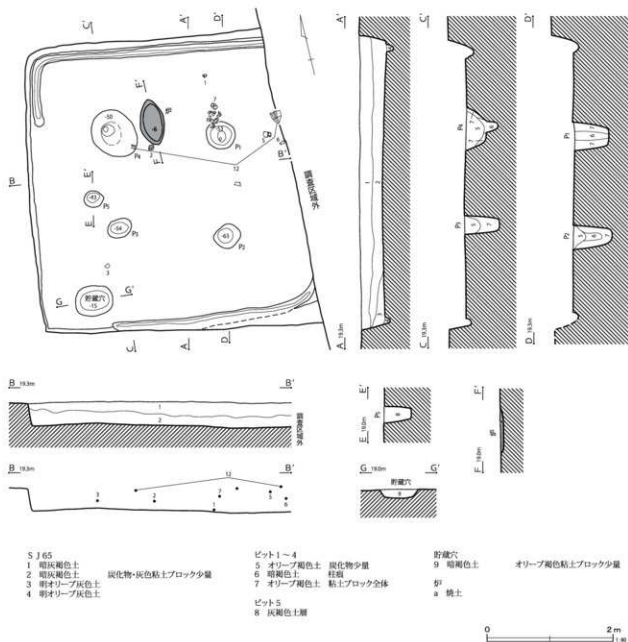
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	小型鉢	4.2	3.2	3.0	AH I K	90	普通	にぶ・黄	No.6		95-4
2	土師器	器台	8.4	2.7		A E H I K	80	普通	にぶ・橙	赤彩 No.1		
3	土師器	高坏		6.5		C E H I K	70	不良	灰黄褐	円孔3 二次的焼熟 器面風化顕著	No.8	
4	土師器	壺	12.3	29.5	8.8	H I K	50	普通	にぶ・黄	外面口縁増部付近に赤彩? 頸部沈線 肩部刻み状の斜線 沈線 No.2-5		95-5
5	土師器	壺	(18.9)	23.1		A E H I K	60	普通	にぶ・橙	折り返し口縁 No.4		95-6
6	土師器	台付甕	(19.3)	18.2	10.3	E H K	20	普通	にぶ・黄	刻み口縁 No.3・貯蔵穴・Pr4No.1	7と同一個体か 煮沸痕 器面風化顕著	
7	土師器	台付甕		12.2		E H K	20	普通	にぶ・黄	6と同一個体		

遺物は住居跡南東部からまとまって出土している。手捏の小型鉢・小型器台・高坏（円孔3）や単口縁壺・複合口縁甕・刻み口縁の台付甕がある。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-1に相当する。

第65号住居跡 (第144図)

I・J-10グリッドに位置し、東壁部付近は調査区域外にある。

平面形態は方形で、主軸長4.75mを測る。東西幅は4.32mが検出され、ほぼ正方形に近い形状と



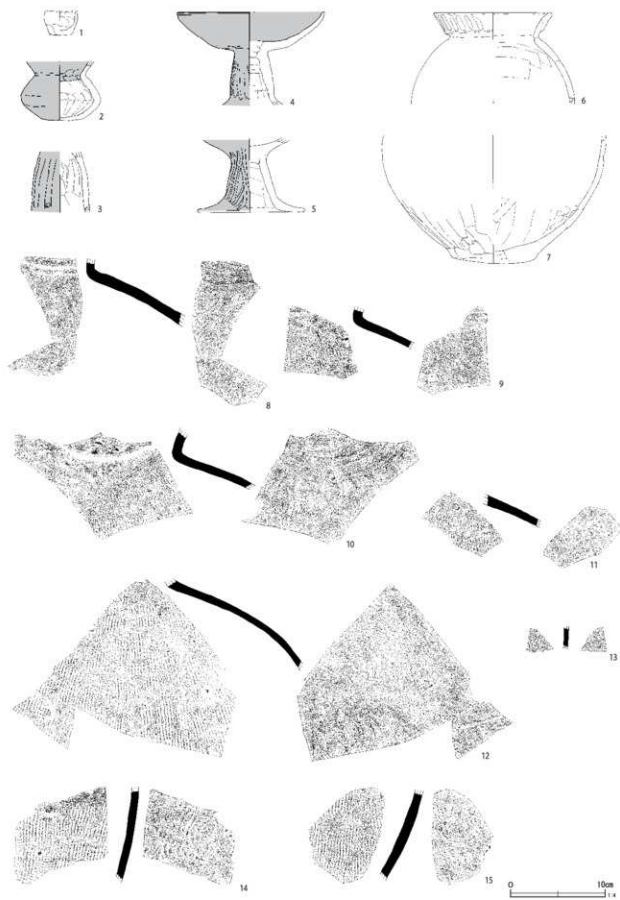
第144図 第65号住居跡

推測される。主軸方位はN-10°-Eを指す。確認面からの深さは0.34～0.42mで、覆土は自然堆積である。

主柱穴には、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4が相当する。規模は、Pit1が径0.44m×床面からの深さ0.53m、Pit2が径0.36m×床面からの深さ0.63m、Pit3が長径0.40m×短径0.29m×床面からの深さ0.54mとほぼ均等であるが、Pit4は長径0.81m×短径0.65m×床面からの深さ0.30～0.50mと平

面規模が大きい。覆土の観察から、柱が床面付近で折り取られているため、上層部には抜き取り痕がみられるが、下層部に柱痕が残る。Pit4の場合は、柱を抜き取る際の穴が大きくなってしまい、他の主柱穴よりも規模の大きなものになっている。柱間距離は、主軸方向(Pit1-Pit2・Pit4-Pit3)が1.6m、東西方向(Pit4-Pit1・Pit3-Pit2)が1.8mを測り、規則的な配置を示している。

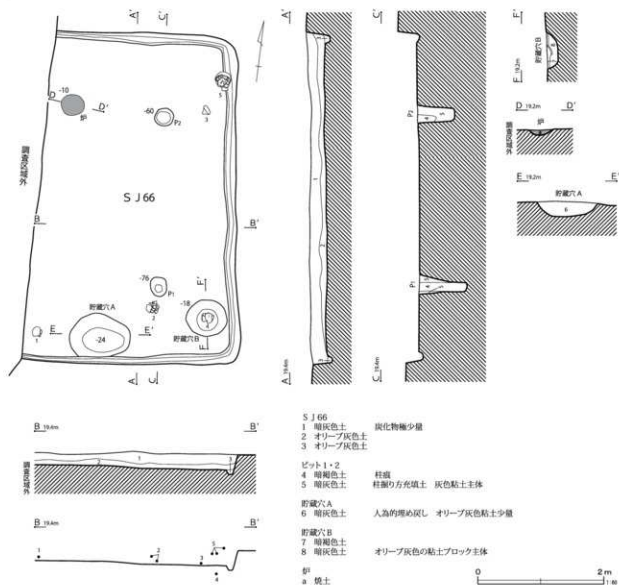
炉は地床炉で、主柱穴Pit4の東側に位置する。



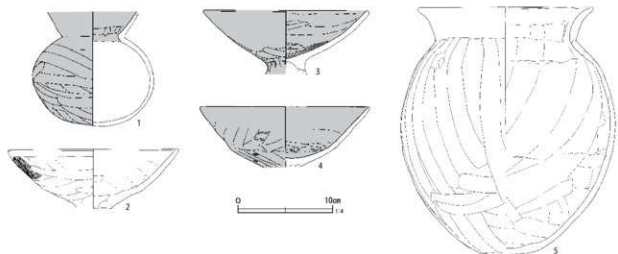
第145图 第65号住居跡出土遺物

第63表 第65号住居跡出土遺物観察表 (第145図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	手捏	備考	出土位置	図版	
1	土師器	小型鉢	(3.3)	2.6		A E H I J K	75	普通	にぶ+黄褐色	手捏 無調整	No.9		96-1	
2	土師器	小型埴		6.2	(4.4)	A E H I J K	80	普通	褐灰	赤彩?	二次的被熱により黒化	No.7		
3	土師器	高坏		6.5		A E H I J K	50	普通	灰黄褐色	(屈折脚) 赤彩	焼成後の穿孔1 (小円孔) 二次的被熱	No.10	96-2	
4	土師器	高坏	(15.4)	6.8		E I J K	90	普通	にぶ+褐色	有残坏 赤彩	支脚転用痕 (倒立)			
5	土師器	小型埴		7.7	(11.4)	A E H I J K	50	普通	にぶ+黄褐色	屈折脚	赤彩	No.3		
6	土師器	甕	(12.1)	9.8		E H I		普通	橙	口縁部に裝飾的なミガキ	赤彩痕	No.2	96-3	
7	土師器	甕		13.7	8.9	E H I K	60	普通	にぶ+黄褐色	器面風化顕著	底部ヘラケズリ	No.5		
8	須恵器	甕		7.4		I	5	普通	灰白	8~15同一個体	陶色産	5世紀前半	外面平行タタキ 内面: 当て具痕ナデ酒シ SD4-4	96-5
9	須恵器	甕		4.5		I K	5	普通	灰白	8~15同一個体	陶色産	5世紀前半	SJ65	96-5
10	須恵器	甕		6.4		I	5	普通	灰白	8~15同一個体	陶色産	5世紀前半	SJ60No.5-6	96-5
11	須恵器	甕		3.6		I	5	普通	灰白	8~15同一個体	陶色産	5世紀前半	I10Gr	96-5
12	須恵器	甕		14.8		I	5	普通	灰白	8~15同一個体	陶色産	5世紀前半	SJ65No.4-8	96-6
13	須恵器	甕		2.6		I	5	普通	灰白	8~15同一個体	陶色産	5世紀前半	I10Gr	96-6
14	須恵器	甕		10.2		I K	5	普通	灰白	8~15同一個体	陶色産	5世紀前半	E6~9Gr	96-4
15	須恵器	甕		9.8		I	5	普通	灰	8~15同一個体	陶色産	5世紀前半	SJ34No.30	96-4



第146図 第66号住居跡



第147図 第66号住居跡出土遺物

第64表 第66号住居跡出土遺物観察表 (第147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	罎		12.0		ACEHIK	90	普通	に濃い赤褐色	丸底 二次的被熱 靑い No1		97-1
2	土師器	高坏	18.0	6.3		A E H I K	95	普通	橙	有稜坏 赤彩有無不明 No2		
3	土師器	高坏	17.4	6.7		A H I K	95	普通	に濃い橙	有稜坏 (稜退化) 赤彩 No4		
4	土師器	高坏	17.8	6.5		E H I J K	60	普通	灰黄褐色	有稜坏 赤彩 二次的被熱 No3		
5	土師器	甕	(18.0)	26.3	6.2	A E H I K	90	普通	に濃い赤褐色	胴張 煮沸痕 煤付着 底部ヘラケズリ No5・H10		97-2

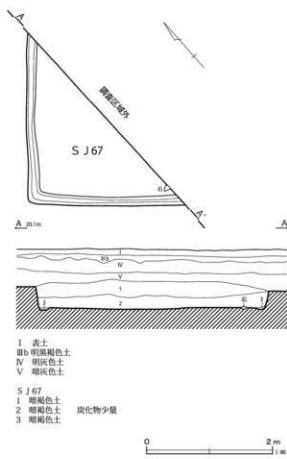
火床面は、長軸0.75m×短軸0.38mの楕円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.05mほどの浅い掘り込みがみられる。

貯蔵穴は、炉²に対面する南東隅に付設されている。長軸0.60m×短軸0.50mの隅丸方形で、床面からの深さは0.15mを測る規模の小さなものである。

壁溝は、南壁南西隅から西壁北西隅の間を抜き、北壁・南壁に巡っている。幅0.18~0.12m、床面からの深さ0.08~0.10mほどである。

主柱穴 Pit3 と Pit4 を結ぶ線よりも西壁側に、Pit5 が位置している。長径0.30m×短径0.25m×床面からの深さ0.43mである。壁との距離もあるため、単純に出入り口施設に関連する機能を想定することは難しい。

遺物は、主柱穴 Pit1 から調査区域際の北東部に分布が集中し、覆土上層からの出土が多い。手捏の小型鉢・碗・有稜坏屈折脚高坏・胴部の丸い平底甕があるが、坏類がみられない。限定は難し



第148図 第67号住居跡

いが、銭塚・城敷Ⅲ期に想定される。

8～15は同一個体と推定される須恵器の甕である。第65号住居跡・I-10グリッドを中心にE・F-6～9グリッドや第4号溝跡第4地点など広範囲から出土している。外面は平行タタキが行われ、内面は当て具痕がナデ消されている。胎土や器面調整の手法などから、5世紀前半代の陶邑産と推定される。

第66号住居跡 (第146図)

H-10グリッドに位置し、西側1/3ほどが調査区域外にある。

平面形態は方形で、主軸長5.32mを測る。東西方向に3.95mが検出され、主軸方位はN-6°-Wを指す。確認面からの深さは0.17～0.28mで、覆土は自然堆積である。

主柱穴が4本と推定される住居跡で、東辺のPit1とPit2の2本が検出されている。対応する西辺の2本は調査区域外にある。主柱穴の規模は、Pit1が径0.28m×床面からの深さ0.76m、Pit2が径0.29m×床面からの深さ0.60mである。しっかりと掘り込みを有し、土層断面では柱痕も確認されている。柱間距離は2.7mを測る。

炉は地床がで、柱穴を結ぶ線上の外側の北壁に寄って位置する。火床面は、長軸0.37m×短軸0.34mの円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.10mほどの浅い掘り込みがみられる。

貯蔵穴は、2基検出されている。

貯蔵穴Aは、炉に對する南壁際に付設されている。長軸0.85m×短軸0.70mの楕円形で、床面からの深さは0.24mを測る。覆土には人為的に埋め戻された様相が認められる。

貯蔵穴Bは、南東隅に位置する。長軸0.63m×短軸0.60mの円形で、床面からの深さ0.18mを測る。貯蔵穴Aが放棄されて造り直された貯蔵穴と推定され、高坏(4)が出土している。

壁溝は、検出された壁に沿って全周する。幅0.07～0.25m、床面からの深さ0.07mほどである。

遺物は出土量が少ない。南側の貯蔵穴の周辺と北東隅付近に分布している。多くは床面直上に位置していたが、北東隅から出土した甕(5)は覆土の上層からの出土である。球胴形の小型壺、身の深い有稜高坏、胴部に丸みをもつ単口縁甕があり、銭塚・城敷Ⅲ期新段階に相当する。

第67号住居跡 (第148図)

G・H-10グリッドに位置し、東半部は調査区域外にある。

平面形態は方形で、北西辺2.66m、南西辺2.45mが検出されている。北西壁の方位はN-40°-Eを指し、確認面からの深さは0.32～0.48mである。覆土は自然堆積である。

主柱穴、炉・カマド、貯蔵穴等の諸施設は検出されていない。

壁溝は、検出された壁に沿って全周する。幅0.13～0.18m、床面からの深さ0.02～0.04mである。

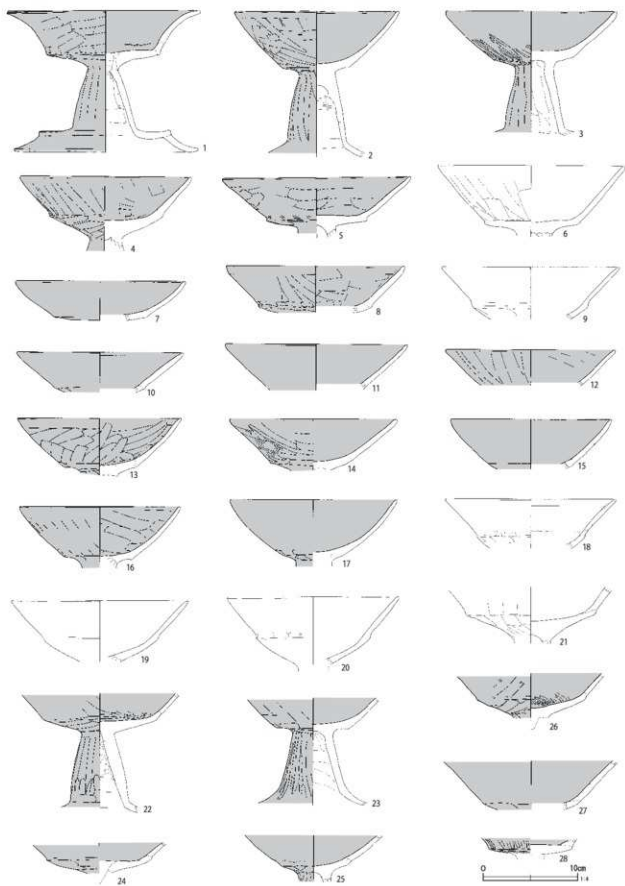
出土した遺物はない。

第68号住居跡 (第149図)

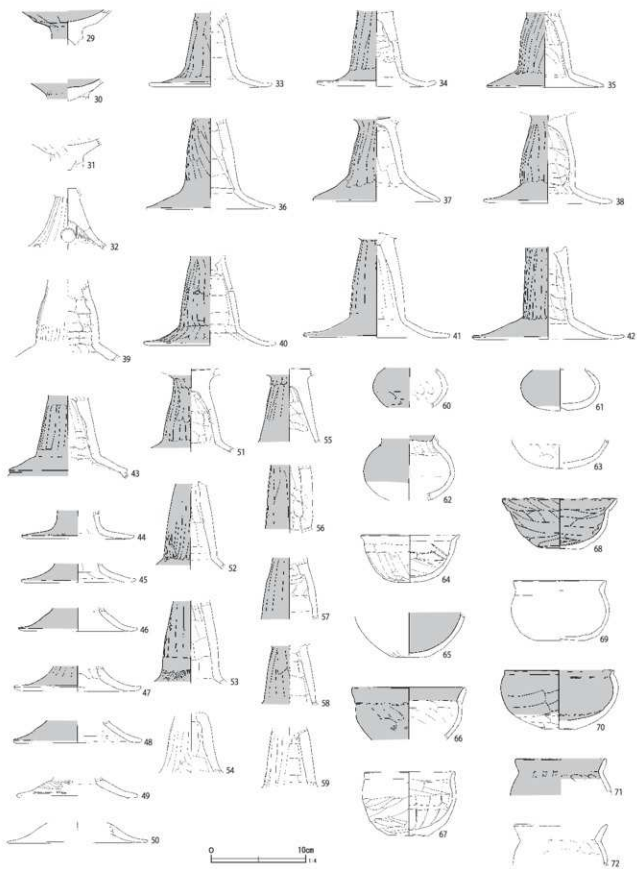
G-10グリッドに位置し、東側・西側ともに調査区域外にある。

主軸長5.50mを測り、東西幅は5.6m以上となる。平面形態は東西方向に長軸をもつ長方形で、主軸方位はN-17°-Wを指す。確認面からの深さは0.16～0.30mで、覆土は自然堆積である。

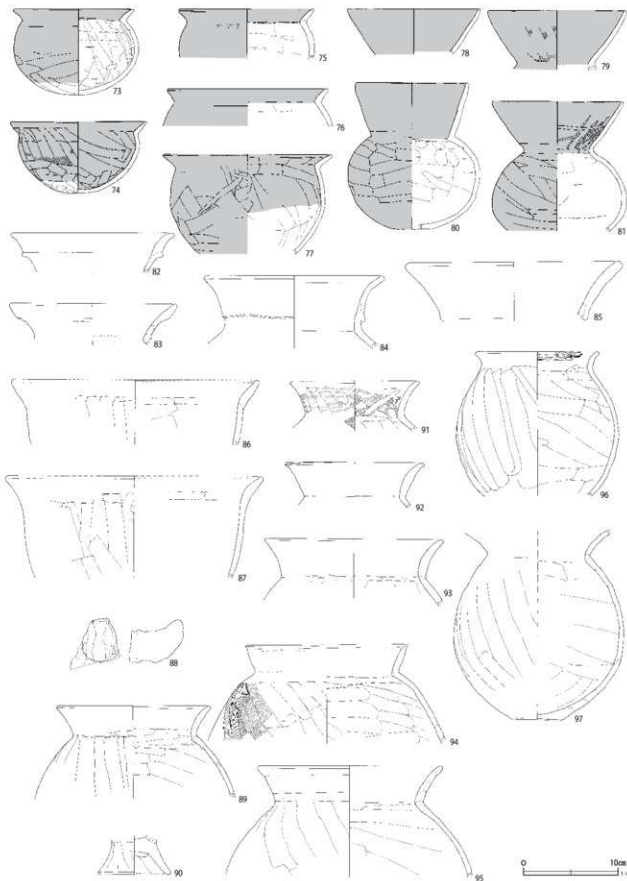
主柱穴には、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4が相当する。規模は、Pit1が径0.50m×床面からの深さ0.62m、Pit2が径0.32m×床面からの深さ0.70m、Pit3が径0.66m×床面からの深さ0.68m、Pit4が径0.58m×床面からの深さ0.66mを測る。平面的にはPit2が極端に小さな柱穴のようであるが、断面観察から、床面付近で柱が抜き取られていることがわかる。そのため上半部の柱の抜き取り痕と、下半部の柱痕と掘り方を充填した土層に分層することができる。Pit1・Pit3・Pit4では、柱を抜き取るために掘り込んだ穴が広くなり、主柱



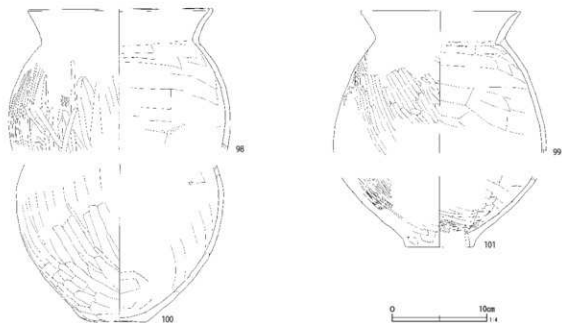
第150图 第68号住居跡出土物(1)



第151图 第68号住居跡出土遺物(2)



第152图 第68号住居跡出土物(3)



第153図 第68号住居跡出土遺物(4)

第65表 第68号住居跡出土遺物観察表(第150～153図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏	20.2	15.0	19.4	A E H I K	70	良好	にぶ・橙	有稜环有段脚 赤彩 坏部と脚部の接合面にキザミ 二次的被熱 器面風化顯著 No.8・15・105・138		97-3
2	土師器	高坏	(17.3)	15.5		E H I K	40	普通	にぶ・黄橙	有稜环 赤彩 支脚転用痕 No.119		97-4
3	土師器	高坏		18.0	13.2	C H I J K	70	普通	にぶ・黄橙	有稜环 赤彩 No.39		97-5
4	土師器	高坏	18.0	7.9		A C E H I K	90	普通	赤灰～橙	有稜环 赤彩 No.152		
5	土師器	高坏	20.0	6.3		C E H I K	90	普通	橙	有稜环 赤彩 支脚転用痕(倒立) No.54		
6	土師器	高坏	19.6	7.5		E H I K	90	普通	明赤褐	有稜环 支脚転用痕(正位) No.30		
7	土師器	高坏	(17.8)	4.1		E H	20	普通	橙	有稜环 赤彩		
8	土師器	高坏	(18.8)	5.1		A C E H	30	普通	橙	有稜环 赤彩 二次的被熱 No.115・Pi4		
9	土師器	高坏	(18.8)	5.5		A E I K	10	良好	にぶ・褐	有稜环 支脚転用痕? No.21		
10	土師器	高坏	(17.6)	4.2		A C E I K	10	普通	にぶ・橙	有稜环 赤彩 一部の口縁端部付近に被熱痕 No.90		
11	土師器	高坏	(19.3)	4.9		A E H	25	普通	明赤褐	有稜环 赤彩 二次的被熱顯著 No.24・110		
12	土師器	高坏	(17.8)			A B D E H I K	20	普通	暗赤褐	有稜环 赤彩 二次的被熱 No.16		
13	土師器	高坏	17.2	6.1		A C H I K	95	普通	にぶ・黄橙	有稜环 赤彩 No.59・60・61		
14	土師器	高坏	17.4	5.4		A C E H I J	35	普通	橙	有稜环 赤彩 二次的被熱顯著 No.85・94		
15	土師器	高坏	(16.8)	5.2		E H J	10	普通	にぶ・黄橙	有稜环 赤彩 No.8		
16	土師器	高坏	16.9	6.5		E H I K	90	普通	にぶ・褐	有稜环 赤彩 二次的被熱 No.75・76・78・Pi4		
17	土師器	高坏	(17.4)	7.0		C E I K	20	普通	赤彩部 (赤褐)	有稜环 赤彩 二次的被熱 No.97・108		
18	土師器	高坏	(18.0)	5.2		A C E H I	20	普通	にぶ・橙	有稜环 器面風化顯著 No.42		
19	土師器	高坏	(18.4)	6.5		C E I K	10	普通	にぶ・橙	有稜环 二次的被熱 器面風化顯著 No.21		
20	土師器	高坏	(18.0)	7.2		E G H	20	普通	橙	有稜环 支脚転用痕		
21	土師器	高坏		6.8		A C E H I	50	普通	橙	有稜环 支脚転用痕? (倒立) No.93		
22	土師器	高坏		12.6		C E I K	80	普通	橙	有稜环 赤彩 No.32・33		
23	土師器	高坏		11.4		C E H I K	60	普通	灰褐	有稜环 赤彩 支脚転用痕(倒立) No.40		
24	土師器	高坏		4.2		C E H	15	普通	橙	有稜环 赤彩 内面風化顯著		
25	土師器	高坏		4.9		E H I K	25	普通	にぶ・赤褐	有稜环 赤彩 二次的被熱		
26	土師器	高坏		6.0		C E I K	30	普通	にぶ・橙	有稜环 赤彩 No.50		
27	土師器	高坏		5.2		A C E I K	20	普通	にぶ・橙	有稜环 赤彩		
28	土師器	高坏		1.7		A C E H I	80	普通	にぶ・褐	有稜环 赤彩 No.8		
29	土師器	高坏		3.6		C E H I	85	普通	灰褐	有稜环 赤彩 二次的被熱 No.132		
30	土師器	高坏				A C E H I K	70	良好	にぶ・橙	(有稜环) 赤彩 No.130		
31	土師器	高坏		3.4		A C E H I	80	普通	黒褐	(有稜环) 二次的被熱 No.16		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版	
32	土師器	高坏		6.5		DH	30	普通	橙	母孔2孔3対千鳥配置 坏部欠損後の支脚転用痕? №151			
33	土師器	高坏		7.9 (13.0)		CEIK	20	普通	にぶ・褐	屈折脚 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕 №115・117			
34	土師器	高坏		8.0	最大径 12.6	EI	70	普通	にぶ・褐	屈折脚 赤彩 支脚転用痕			
35	土師器	坏		8.0	12.4	ACEHIK	90	普通	橙	屈折脚 赤彩 支脚転用痕 Pit3No1			
36	土師器	高坏		9.7	13.5	CEHIK	80	普通	にぶ・黄緑	屈折脚 赤彩 支脚転用痕 №131			
37	土師器	高坏		9.7 (13.4)		ABCEIK	70	普通	にぶ・橙	屈折脚 赤彩 №62			
38	土師器	高坏		9.4	最大径 13.6	EHIK	90	普通	にぶ・黄緑	屈折脚 赤彩 №125			
39	土師器	高坏		8.5		A E H I K	30	良好	にぶ・橙	(屈折脚) 二次的焼熱による器面風化顕著 赤彩不明 №74			
40	土師器	高坏		9.4	12.0	CEI	80	普通	にぶ・橙	屈折脚 赤彩 焼成後穿孔(右側未貫通) №89	97-6		
41	土師器	高坏		11.1 (14.9)		CEHIK	70	普通	にぶ・赤褐	屈折脚 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕 №42			
42	土師器	高坏		9.7 (16.0)		A E H I K	85	良好	灰褐	屈折脚 赤彩 支脚転用痕(倒立) №66			
43	土師器	高坏		8.8		A E H I J K	60	良好	にぶ・黄緑	有段脚 赤彩 支脚転用痕 №58			
44	土師器	高坏		3.0	最大径 12.0	EHIK	20	普通	灰褐	屈折脚 赤彩 二次的焼熱			
45	土師器	高坏		2.0 (12.2)		A E H I	60	普通	にぶ・黄緑	屈折脚 赤彩 №2			
46	土師器	高坏		2.5 (12.6)		CEIK	20	普通	にぶ・黄緑	屈折脚 赤彩			
47	土師器	高坏		2.7 (13.6)		A E H I	45	普通	にぶ・赤褐	屈折脚 赤彩 №144			
48	土師器	高坏		3.3 (13.6)		A E H I K	40	良好	にぶ・黄緑	屈折脚 赤彩 №147			
49	土師器	高坏		2.2 (12.9)		CEIK	20	普通	にぶ・赤褐	屈折脚 二次的焼熱			
50	土師器	高坏		2.2 (14.6)		CEH	15	普通	明赤褐	屈折脚 赤彩? 二次的焼熱顕著 №73			
51	土師器	高坏		8.8		CEHIK	85	普通	にぶ・橙	(屈折脚) 赤彩 二次的焼熱 №63			
52	土師器	高坏		9.4		A E I K	90	良好	にぶ・赤褐	(屈折脚) 赤彩 支脚転用痕			
53	土師器	高坏		8.7		A D E H I	55	普通	橙	(屈折脚) 赤彩 二次的焼熱顕著			
54	土師器	高坏		6.2		E H I	90	普通	橙	(屈折脚) №118			
55	土師器	高坏		7.7		E H I K	70	普通	にぶ・黄緑	(屈折脚) 赤彩 №36			
56	土師器	高坏		7.1		A E I J K	90	良好	灰黄褐	(屈折脚) 赤彩 二次的焼熱 №14			
57	土師器	高坏		6.5		BCEIK	75	普通	にぶ・橙	(屈折脚) 赤彩			
58	土師器	高坏		6.3		E H	70	普通	にぶ・褐	(屈折脚) 赤彩 №46			
59	土師器	高坏		6.4		CEIK	80	普通	橙	(屈折脚) 支脚転用痕? №116			
60	土師器	小型埴		4.2		CEHIK	40	普通	灰褐	外面赤彩 二次的焼熱 №101			
61	土師器	小型埴		4.5 (1.6)		A E H I	25	普通	にぶ・橙	外面赤彩 風化顕著 器面調整不明瞭			
62	土師器	小型埴		7.0		CEHI	20	不良	にぶ・黄緑	赤彩 器面風化顕著 №10・13			
63	土師器	埴		3.1		CEI	80	普通	にぶ・橙	二次的焼熱 器面風化顕著 №72			
64	土師器	鉢	10.5	5.0	4.9	H I J	75	普通	橙	口縁部外反 平底風(不安定) 赤彩? №18	98-1		
65	土師器	鉢		4.7 (3.6)		CEI	40	やや不良	暗褐	赤彩 二次的焼熱 №34			
66	土師器	鉢	(12.0)	5.5		E H I K	20	普通	にぶ・褐	赤彩			
67	土師器	鉢		9.4	6.9	A D E I K	70	普通	淡黄・黒褐	口縁部短く外反 平底(上げ底) №114	98-2		
68	土師器	鉢		12.1	5.4	4.4	I	85	普通	赤褐	口縁部のみ内彎気味 平底 赤彩 №12・19	98-3	
69	土師器	鉢	(19.7)	6.4	5.0	A B C D E H I	55	普通	黒褐・橙	口縁部短く外反 平底 二次的焼熱顕著 №13	98-4		
70	土師器	鉢	(11.6)	6.3	3.2	C E E I K	100	普通	橙	口縁部短く外反 平底 赤彩 №38	98-5		
71	土師器	鉢	(9.4)	3.8		E H I K	40	普通	にぶ・黄緑	赤彩 №6			
72	土師器	鉢	(9.8)	4.4		A C H I K	20	普通	橙	器面風化顕著 №43			
73	土師器	鉢		12.6	9.1	C H I J K	60	普通	橙	口縁部外反 丸底 赤彩 二次的焼熱顕著 №41・145・146	98-6		
74	土師器	鉢		14.3	7.5	1.5	I K	70	普通	橙	口縁部外反 丸底 赤彩 二次的焼熱 №87・141	98-7	
75	土師器	鉢	(14.0)	5.4		A E I K	25	普通	灰褐	口縁部外反 赤彩 Pit1・Pit4			
76	土師器	鉢	(17.0)	4.1		CEIK	15	普通	にぶ・橙	口縁部外反 赤彩 №115			
77	土師器	鉢	(17.9)	15.0		CEHIK	20	普通	にぶ・橙	口縁部外反 赤彩 №100			
78	土師器	埴	(14.0)	4.8		EI	40	普通	赤彩部(赤)	赤彩 №91			
79	土師器	埴	(14.8)	6.2		A E H J	45	普通	灰白	赤彩 二次的焼熱顕著 №108			
80	土師器	埴	(11.8)	15.5	2.5	H I K	50	普通	にぶ・褐	丸底 赤彩 二次的焼熱 №51・52・53	98-8		
81	土師器	埴	(13.7)	13.7		CEI	70	普通	にぶ・黄緑	赤彩 №27・102	99-1		
82	土師器	壺	(17.0)	4.3		CEIK	15	普通	にぶ・黄緑	擬口縁状 №104			
83	土師器	壺	(17.6)	4.4		A H I K	5	良好	灰褐	口縁部上半肥厚し、段形成 二次的焼熱			
84	土師器	壺		18.6	6.7	E H I	50	普通	にぶ・橙	段形散化 二次的焼熱 器面風化顕著 №90・106	99-2		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
85	土師器	壺	(22.4)	6.2		ADEHI	45	不良	に染・橙	段形瓶化 二次的被熱 器面風化顕著	No.140・143・148	99-3
86	土師器	甗	(26.0)	6.8		ACEHI	15	普通	に染・黄橙	煮沸痕 No.35・137		
87	土師器	甗	(27.0)	10.8		EH	10	普通	に染・黄橙	被熱痕 No.122		
88	土師器	甗				BCEIK	100	普通	灰黄褐	把手 長さ4.6mm 幅4.7mm 厚さ3.5mm	No.127	
89	土師器	甗	16.1	9.8		CEFI	60	普通	に染・橙	胴張 煮沸痕 No.68		
90	土師器	台付甗		4.1	7.4	I	100	普通	灰黄褐	煮沸時の煤付着	No.44	
91	土師器	壺	(13.2)	5.3		CEIK	30	普通	に染・黄橙	外面ハケ残 二次的被熱	No.40	
92	土師器	壺	(14.5)	4.8		AEIK	20	良好	に染・橙	二次的被熱	No.95	
93	土師器	甗	(18.6)	7.1		ACEI	30	普通	に染・黄橙	煮沸痕 指No.128		
94	土師器	甗	(17.0)	10.5		AEIJK	25	不良	灰褐	胴張 煮沸痕 No.115		
95	土師器	甗	(19.4)	12.3		BCEHIK	30	普通	灰褐	胴張 煮沸痕 No.37		
96	土師器	甗	(12.8)	15.2		ACEHIK	80	普通	灰褐	中型品 煮沸痕 No.42・45・48		
97	土師器	甗		19.9	5.2	CEIK	65	普通	に染・橙	中型品 煮沸痕 No.55・56・57	Pit.3	
98	土師器	甗	19.4	14.9		EHK	60	普通	灰黄	胴張 二次的被熱	No.17・20・139	99-5
99	土師器	甗	(16.9)	15.0		EHIJK	30	普通	に染・黄	胴張 103・112		
100	土師器	甗		16.6	5.8	ACEIK	50	普通	灰褐	胴張 煮沸痕 煤付着	No.4・9・15	99-6
101	土師器	壺		7.5	(6.6)	A E H I	20	普通	橙	(胴張) No.9		

穴の平面規模の違いとして表れている。3本とも床面からの深さ0.24～0.36mほどに段をもち、それ以下は細くなっている。柱間距離は、主軸方向・東西方向ともに約2.7mで、規則性の高い配置を示している。

炉は地床がで、主柱穴 Pit1・Pit4 を結んだ線上よりも北側の、Pit4 寄りに位置する。火床面は、長軸0.35m×短軸0.32mの円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.02mほどの浅い掘り込みがみられる。

貯蔵穴は、南西隅に付設されている。長軸0.87m×短軸0.75mの円形で、床面からの深さは0.56mを測る。貯蔵穴を囲むように、幅0.8m前後、高さ0.05mほどの低い堤が巡っている。

主柱穴 Pit3 の北西に、Pit5 が位置する。長径0.22m×短径0.20m×床面からの深さ0.64mの規模をもつ。用途は不明である。

壁溝は、みつかっていない。

遺物は出土量が多く、住居跡のほぼ全域に分布している。しかし、床面直上部には少なく、ほとんどが覆土上層からの出土である。

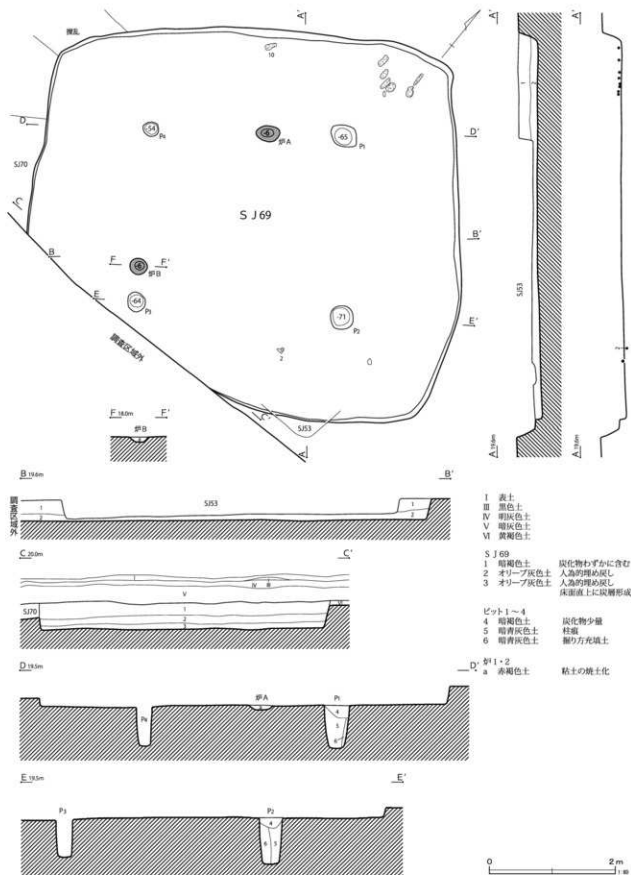
供膳具は高環を主体とし(1～59)、少量の甗類が加わっている。また檜模坏は出土していない。高環は有稜円屈折脚で、2点ほど有段脚(1・43)が含まれている。60～61は小型埴・鉢である。64～70は椀で体部に丸みがない64・68と、丸みをもつ65～67・69・70がある。口縁部は体部から屈曲して外反し、平底を基本とする。71～77は球形の胴部を有する小型・中型の鉢、78～81は埴である。これらの小型・中型品には、赤彩が基本である。壺は口縁部のみ出土で、口縁部に段が残るもの(82・83)と複合口縁(84・85)がある。甗は須恵器模倣で、把手も出土している。小型の甗は胴部の丸みが強い。大型の甗には全体像が解るものがないが、胴部に丸みを残しながらも長胴化の傾向が認められる。器形や器種組成の特徴などから、銭塚・城敷Ⅲ期古段階(～新段階)に想定される。



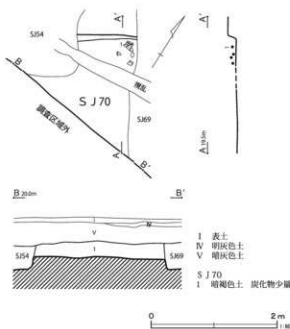
第154図 第69号住居跡出土遺物

第66表 第69号住居跡出土遺物観察表 (第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(13.9)	3.9		EHIK	25	普通	橙	内側口縁		
2	土師器	高環		5.4		C1J	40	普通	明褐色	(屈折脚) 赤彩 二次的被熱顕著 脆い	No.1	



第155図 第69号住居跡

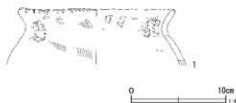


第156図 第70号住居跡・出土遺物

第69号住居跡 (第155図)

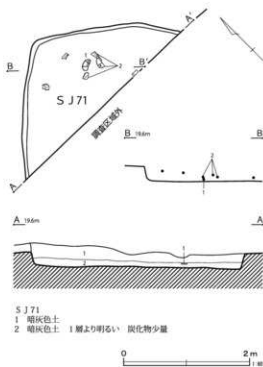
F-8グリッドに位置し、南隅の一部が調査区域外にある。第53・70号住居跡と重複する。覆土の堆積状況から、第53号住居跡が最も新しく、次いで第69号住居跡、最も古いのが第70号住居跡という3軒の住居跡の新旧関係が把握されている。

平面形態は東西方向に長軸をもつ長方形で、各

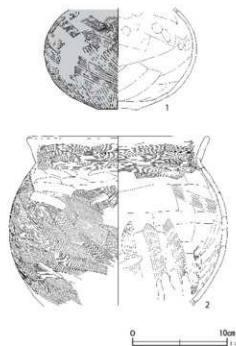


第67表 第70号住居跡出土遺物観察表 (第156図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	台付甕	(16.2)	5.8		E H I J K	20	普通	灰黄褐	刻み口縁 二次的被熱顯著	No.2	



第157図 第71号住居跡・出土遺物



第68表 第71号住居跡出土遺物観察表 (第157図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	甕		10.8	4.4	E H K	40	普通	にぶ+橙	平底 赤彩 二次的被熱 器面風化	No.4	
2	土師器	台付甕	(18.6)	17.9		A H I	20	普通	灰褐	単口縁 煮沸痕顯著	No.2-3-5	

辺は丸みをもつ。南北長6.15m、東西長6.40mを測り、南北軸の方位はN-39°-Wを指す。確認面からの深さは0.12~0.34mで、覆土は自然堆積と思われる。

主柱穴には、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4が相当する。規模は、Pit1が長径0.47m×短径0.36m×床面からの深さ0.65m、Pit2が径0.38m×床面からの深さ0.71m、Pit3が径0.30m×床面からの深さ0.64m、Pit4が径0.24m×床面からの深さ0.54mを測る。平面規模に比べてしっかりと掘り込みを有し、土層断面から柱痕が確認されている。柱間距離は、南北方向のPit1-Pit2=2.85m・Pit3-Pit4=2.75m、東西方向のPit4-Pit1=3.1m・Pit3-Pit2=3.3mを測る。住居跡自体が西辺は短く、東辺が長い台形気味の形状であり、合致した配置である。

炬は2基検出され、いずれも地床炬である。新旧関係にあるのか、同時に使用していたものなのか判断はできない。

炬Aは、住居跡北側の主柱穴Pit1-Pit4を結んだ線上に位置する。火床面は、長軸0.38m×短軸0.26mの楕円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.06mほどの浅い掘り込みがみられる。

炬Bは、住居跡西側の主柱穴Pit3の北側に位置する。火床面は、長軸0.27m×短軸0.26mの円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.06mほどの浅い掘り込みがみられる。

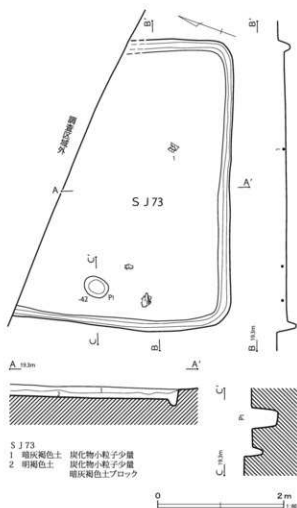
貯蔵穴・壁溝はみつからない。

遺物は、北東隅の床面直上付近から出土しているが、少量である。内罅口縁環と高坏脚部がある。カマド未付設段階の住居跡であり、銭塚・城敷Ⅲ期に相当する。

第70号住居跡 (第156図)

F-8グリッドに位置し、南側は調査区域外にある。また重複する第54・69号住居跡よりも古く、多くの部分が壊されている。

平面形態は方形で、南北1.90m、東西1.32mが



第158図 第73号住居跡・出土遺物

第69表 第73号住居跡出土遺物観察表 (第158図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	壺	(16.2)	9.3		A C E H I J	30	普通	橙	口縁端部に粘土紐を巻く	赤彩不明瞭 №3	99-7

検出され、南北軸の方位はN-33°-Wを指す。確認面からの深さは0.18~0.25mで、覆土は単層である。主柱穴・炉・貯蔵穴・壁溝等の諸施設はみつかっていない。

遺物は北東部の第69号住居跡と重複する境の床面直上付近から出土している。口縁部に刻みのある甕で、銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-2に相当する。

第71号住居跡 (第157図)

F-7グリッドに位置し、南半部は調査区域外にある。平面形態は方形で、北東辺2.07m、北西辺2.10mが検出されている。北西辺の方位はN-44°-Eを指し、確認面からの深さは0.17~

0.35mである。覆土は自然堆積である。

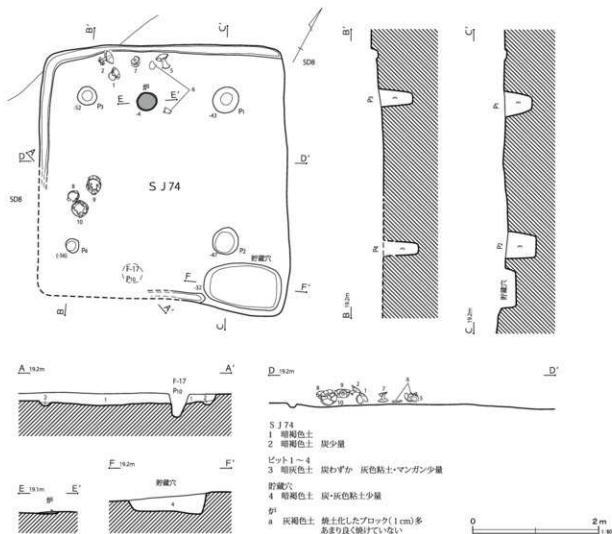
主柱穴・炉・貯蔵穴・壁溝等の諸施設はみつかっていない。

遺物は、床面からやや浮いた高さから出土している。赤彩された平底で球胴形の壺と胴部の丸い単口縁のハケメ甕が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-2に相当する

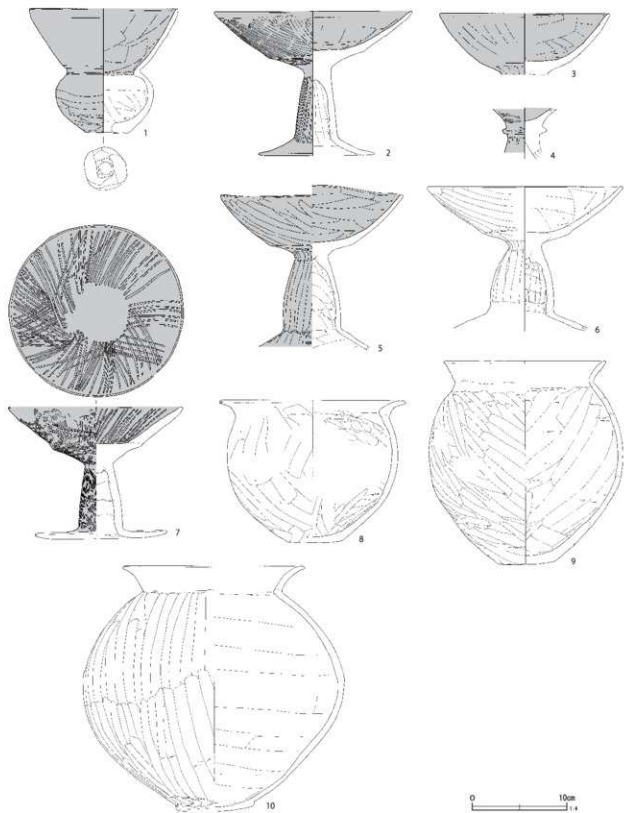
第73号住居跡 (第158図)

E-16・17グリッドに位置し、北半部は調査区域外にある。

平面形態は方形で、東西長4.64mを測る。南北方向に3.25mが検出され、南辺の方位はN-71°-Eを指す。確認面からの深さは0.15~0.18mで、



第159図 第74号住居跡



第160图 第74号住居跡出土遺物

第70表 第74号住居跡出土遺物観察表 (第160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	埴	15.5	13.2	4.4	CEHIK	90	普通	にぶ・橙	平底 錐状工具による焼成後の穿孔	赤彩 No.2	100-1
2	土師器	高坏	20.8	15.2	(12.3)	ACIK	90	普通	灰黄	有稜坏屈折脚	赤彩 No.1	
3	土師器	高坏 (17.8)	6.6			ACEHIJL	15	普通	にぶ・靑	有稜坏	赤彩	
4	土師器	高坏		4.4		BCEHIK	70/8北	普通	橙	括れ部に突帯	赤彩	
5	土師器	高坏	18.7	17.4		CEGH	80	良好	橙	有稜坏 赤彩	口縁部歪み顕著 No.5	99-8
6	土師器	高坏 (20.4)	15.3			CEIK	30	普通	にぶ・靑	有稜坏	赤彩? No.4-6	
7	土師器	高坏	18.4	13.9	最大径14.1	ACEIK	80	普通	にぶ・靑	有稜坏屈折脚	赤彩 坏部内面暗文 No.3	100-2
8	土師器	鉢	(19.0)	推定15.0	5.3	E	60	不良	にぶ・靑	広口 胴部内面は粗雑なつくり	No.8	
9	土師器	甕	(17.0)	21.4	6.0	ACEHIK	70	普通	にぶ・靑	胴張	No.7	100-3
10	土師器	甕	(18.7)	26.0	8.1	AEGHIL	90	良好	褐色	胴張	No.9	100-4

覆土は自然堆積である。

主柱穴・炉・貯蔵穴はみつからない。

西壁際に Pit1 が位置する。長径0.40m×短径0.31m×床面からの深さ0.42mの規模で、しっかりと掘込みをもつ。位置的には出入り口部に関連する機能が想定できるが、2本柱穴の柱穴となる可能性も考えられる。

壁溝は、検出された壁に沿って全周する。幅0.10～0.22m、床面からの深さ0.10～0.14mである。

遺物は出土量が少ないが、いずれも床面直上から出土している。図示し得たのは小型壺の口縁部1点である。銭塚・城敷Ⅱ期・反町Ⅱ-1に相当する。

第74号住居跡 (第159図)

E・F-17グリッドに位置する。幅の広い第8号溝跡の中から発見され、第74号住居跡の方が新しい。調査段階では平面プランの把握が困難であったため、南隅付近の壁は検出されていない。

平面形態は方形で、主軸長4.08m、幅3.90mを測る。主軸方位はN-28°-Wを指す。確認面からの深さは0.10～0.18mで、覆土は自然堆積と思われる。

主柱穴には、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4が相当する。規模は、Pit1が長径0.42m×短径0.30m×床面からの深さ0.43m、Pit2が径0.42m×床面からの深さ0.47m、Pit3が径0.30m×床面からの深さ0.52m、Pit4が径0.22m×床面からの深さ0.56m

である。いずれもしっかりとした掘り込みを有する。柱間距離は、主軸方向のPit1-Pit2=2.3m・Pit3-Pit4=2.4m、東西方向のPit3-Pit1=2.2m・Pit4-Pit2=2.4mを測る。距離にバラつきが少ない規則的な配置である。土層は単層で、柱痕は確認されていない。

炉は地床炉で、北側に寄った主柱穴Pit3-Pit1の線上付近に位置する。火床面は、長軸0.30m×短軸0.28mの円形範囲が焼土化している。火床面下には深さ0.04mほどの浅い掘り込みがみられる。

貯蔵穴は、南西隅に付設されている。長軸1.22m×短軸0.73mの長方形で、床面からの深さは0.17～0.32mを測る。

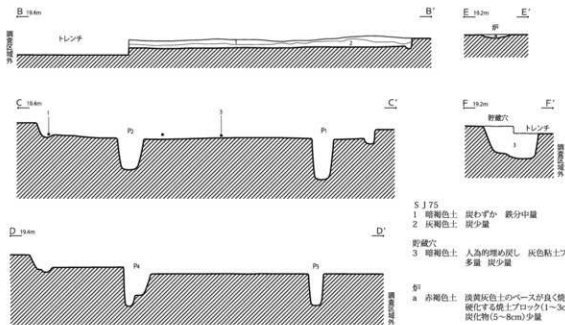
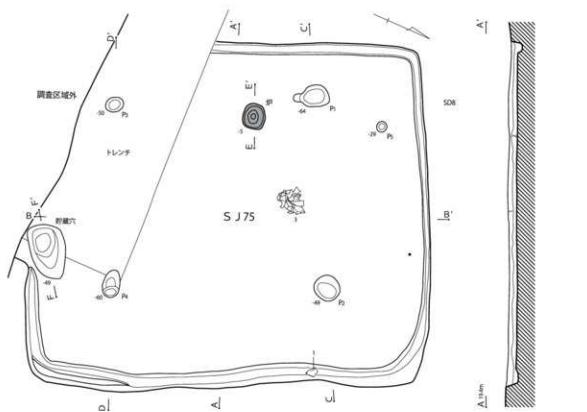
壁溝は、貯蔵穴の西側から西壁・北壁に沿って巡っている。幅0.07～0.18m、床面からの深さ0.03～0.05mである。

遺物は、炉の北側の北壁際と主柱穴北側の西壁際に分布する。いずれも床面直上付近からの出土である。

平底の埴は、底部が穿孔されて甕に転用されたものと思われる。高坏は有稜坏屈折脚で、脚が長い。また、括れ部に突帯が巡るものもある。7は坏部内面に暗文が残る。甕には小型・中型・大型があり、いずれも胴部の張りが強い単口縁である。銭塚・城敷Ⅲ期古段階に相当する。

第75号住居跡 (第161図)

F-17・18グリッドに位置し、南西隅付近が



S J 75

1 暗褐色土 灰わずか 炭分中量
2 灰褐色土 炭少量

野積穴

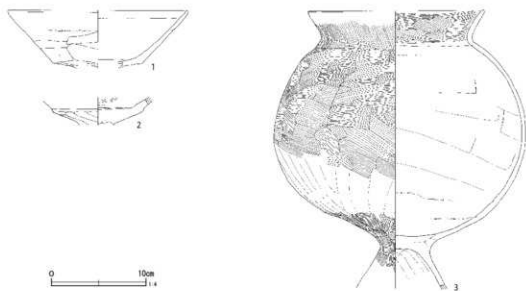
3 暗褐色土 人為的埋め戻し 灰色粘土ブロック 多量 炭少量

5'

a 赤褐色土 淡黄灰色土のベースが良く焼けている 硬化する焼土ブロック(1~3cm)多量 炭化物(5~8cm)少量



第161図 第75号住居跡



第162図 第75号住居跡出土遺物

第71表 第75号住居跡出土遺物観察表 (第162図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏	(18.8)	6.1		A D E H I	25	普通	橙	有稜坏 器面風化顕著 赤彩不明	No.2	
2	土師器	高坏		2.9		C E H I K	60	普通	橙	有稜坏 器面風化顕著		
3	土師器	台付甕	18.4	29.6		A C E H I K	70	普通	に黒い黄斑	胴部下半に最大径	No.1	100-5

調査区域外にある。また、調査区域の境に沿って幅1.5m前後のトレンチを入れたため、この部分の壁は検出されていない。

平面形態は南北に長軸をもつ長方形で、主軸長5.45m、南北長6.46mを測る。主軸方位はN-113°-Wを指す。確認面からの深さは0.10~0.30mで、覆土は自然堆積である。

主柱穴には、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4が相当する。規模は、Pit1が長径0.47m×短径0.33m×床面からの深さ0.64m、Pit2が長径0.42m×短径0.38m×床面からの深さ0.49m、Pit3が長径0.29m×短径0.21m×床面からの深さ0.50m、Pit4が長径0.43m×短径0.27m×床面からの深さ0.50mである。土層観察は行われていないが、Pit1の南側に張り出しをもつことから、柱は抜き取られたものと推定される。柱間距離は、主軸方向のPit1-Pit2=3.05m・Pit3-Pit4=2.95m、南北方向のPit3-Pit1=3.20m・Pit4-Pit2=3.45mを測る。やや台形気味の長方形配置がみられる。

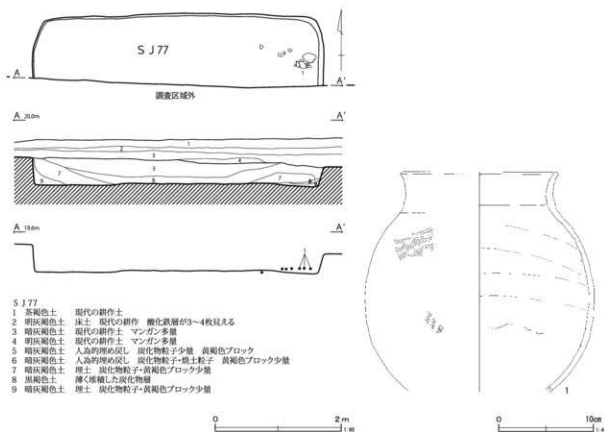
炉は地床炉で、主柱穴Pit3-Pit1を結んだ線上よりやや内側の西壁に寄って位置する。火床面は、長軸0.40m×短軸0.35mの隅丸方形範囲が焼土化している。火床面下には、深さ0.05mほどの浅い掘り込みがみられる。

貯蔵穴は、西壁際中央付近に付設されている。長軸0.90m×短軸0.55mの隅丸長方形で、床面からの深さは0.40~0.49mを測る。

壁溝は、検出された壁に沿って全周する。北東隅・南東隅付近では、壁との間に隙間があく。幅0.10~0.30m、床面からの深さ0.05~0.09mである。

北西隅付近からPit5が検出されている。径0.16m×床面からの深さ0.29mの小規模のものである。用途は、住居隅・壁際・炉といった位置関係も考慮する必要がある。

遺物は、中央部の床面直上から台付甕、東壁の壁溝内から高坏が出土している。台付甕は最大径を胴部下位にもつ下膨れの単口縁、高坏は有稜坏で脚部は検出されていない。両者には時期的な齟



第163図 第77号住居跡・出土遺物

第72表 第77号住居跡出土遺物観察表 (第163図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土器	甕	(16.0)	23.3		CDEHIK	25	普通	にぶい橙	器面風化顕著 No1		

甕がみられる。出土量の少ない状況から困難な作業ではあるが、時期の新しい高坏を優先し、銭塚・城敷Ⅲ期に想定する。

第77号住居跡 (第163図)

A・B-18・19グリッドに位置し、南側の多くの部分が調査区域外にある。

平面形態は方形である。東西長4.58mを測り、南北1.2mが検出されている。南北軸の方はN-0°-Eを指し、確認面からの深さは0.31~0.43mである。覆土は壁際から埋まり始めたが、中央部の凹みには炭化物・焼土を多量に含む土砂が人為的に投げ込まれている(5・6層)。

主柱穴、炉・カマド、貯蔵穴・壁溝等の諸施設は検出されていない。

遺物は、東壁際から出土した甕1点である。胴

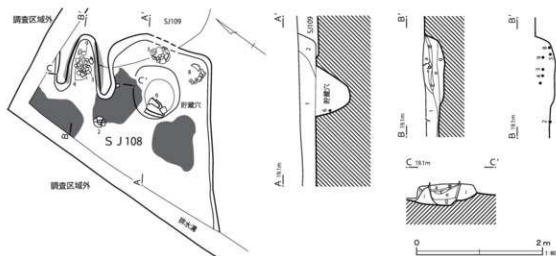
部に張りを残しながらも長胴化の兆しもみられる。銭塚・城敷(Ⅲ期新段階~)Ⅳ期古段階に相当すると思われる。

第108号住居跡 (第164図)

第3次調査区域北西端のK・L-19・20グリッドに位置し、西半部が調査区域外にある。重複する第109号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、カマドを北東壁に設置する。主軸方位はN-52°-Eを指す。検出された主軸長2.52m、幅2.87m、確認面からの深さは0.28mを測る。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況を確認することができる。また、カマド前面と貯蔵穴西側付近の床面には、薄く炭化物が堆積する。

カマドは、粘土によって造り付けられている。住居壁の内側に袖部・燃焼部があり、煙道部は検



- S J 108
 1 褐色土 炭化物粒微量 地山粒・地山塊少量 マンガン少量 しまりやや弱 粘性中
 2 褐色土 炭化物粒微量 地山粒・地山塊微量 マンガン少量 しまりやや弱 粘性中
- カマド
 a 灰褐色土 炭化物粒微量 地山粒・地山塊少量 焼土粒微量 マンガン少量 しまり・粘性中
 b 暗褐色土 天井の崩落か 炭化物粒微量 焼土粒多量 マンガン微量 しまり・粘性やや弱
 c に近い黄褐色土 軸立ての崩落か 白色土上のフラック状の層 しまり中 粘性やや弱
 d 褐色土 焼土層 煙道もしくは天井の崩落か 炭化物粒微量 しまりやや弱 粘性中
 e 黒色土 炭化物粒多量 地山粒・地山塊・焼土粒微量 しまり・粘性弱
- f に近い赤褐色土 d層の焼土化
 g 灰黄色土 粘土層 粘性強い
 h 褐色土 粘土と焼土との混土層 粘性強
 i 灰黄褐色土 粘土層だがd層より粘性が弱い

第164図 第108号住居跡

出されていない。燃焼部は一度浅く掘り込んだ後に粘土を貼って火床面を形成し、その脇から袖部が積み上げられている。火床面の直上には炭化物層が堆積し、壁面は被熱により焼土化が著しい。カマド内から脚裾部が欠損した高環 (3) と完形品の高環 (4) が出土しており、いずれか一方か、もしくは2連の支脚に転用されている。その上部からは甕 (7) が出土している。燃焼部の規模は、長さ0.95m、幅は0.30～0.53mである。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に付設されてい

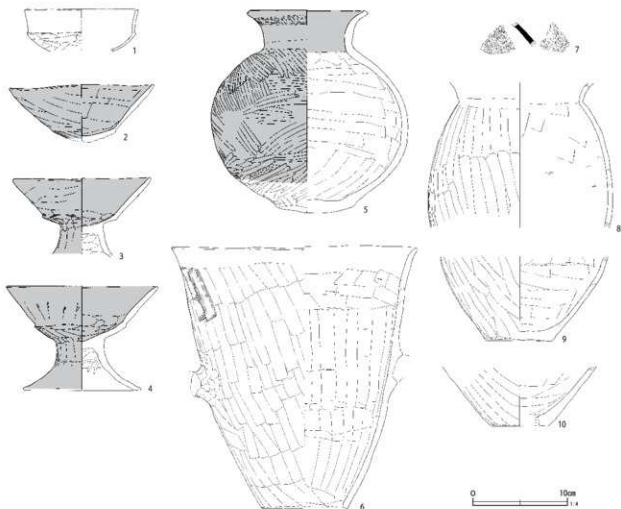
る。隅丸方形で、長径0.83m×短径0.72m×床面からの深さ0.55mである。

柱穴・壁溝は、検出されていない。

遺物は、カマド・貯蔵穴およびその周辺に集中している。口縁部が直立する蓋模倣環 (1)、高環は有稜环屈折脚で、脚は太く短い (2・3・4)。壺は球胴形の平底 (5)、甕は須恵器模倣の把手付き (6)、甕には長胴化の兆しがみられる (8・9・10)。また、7の須恵器甕片は陶色産と推定される。模倣環や甕の長胴化などの特徴から、銭塚・城敷IV

第73表 第108号住居跡出土遺物観察表 (第165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	環	12.0	4.5		B C H I	30	普通	橙	北武蔵型模倣蓋		
2	土師器	高環	15.2	5.9		B H I J K	95	普通	にぶい・橙	有稜环 赤彩 No7		
3	土師器	高環	14.5	8.4		A E H I J K	90	普通	灰褐色	有稜环 短脚 赤彩 No3		100-6
4	土師器	高環	15.8	11.1	(12.4)	A E H I J K	50	普通	にぶい・橙	有稜环屈折脚 短脚 赤彩 No1		101-1
5	土師器	壺	12.2	21.5	8.0	A B E I J K	75	普通	にぶい・黄橙	単口縁 赤彩 No5		101-2
6	土師器	甕	25.6	27.9	9.0	A E H I J K	95	普通	にぶい・黄橙	把手付 貯蔵穴No8		101-3
7	須恵器	甕	3.3			I	5	普通	灰白	陶色産		101-4
8	土師器	甕	15.3			A H I J K	65	普通	明赤褐	長胴化 煤付着 No6		101-5
9	土師器	甕	8.8	7.0		C E H I	80	普通	明赤褐	長胴化 煮沸痕 煤付着 No2・カマド		
10	土師器	甕	6.6	6.2		C J	20	普通	にぶい・褐	長胴化 煮沸痕 煤付着		



第165図 第108号住居跡出土遺物

期古段階に相当する。

第109号住居跡 (第166図)

K-20グリッドに位置する。南辺周辺の幅1.70m前後の範囲の検出で、北側の大半が調査区域外にある。重複する第108号住居跡よりも古い。

角の丸みの強い方形で、南辺長7.90m、南辺方位はN-98°-Wを指す。確認面からの深さは0.31mで、覆土は壁際から埋没した状況が観察できる。覆土の中層(4層)からは、薄い炭化物層と炭化材が検出されている。調査範囲が狭く、検討の余地が残るが、焼失住居の可能性を考慮しておく必要がある。

貯蔵穴は南西隅に付設され、長軸0.78m×短軸0.70mの隅丸方形で、深さ0.10mと浅い。

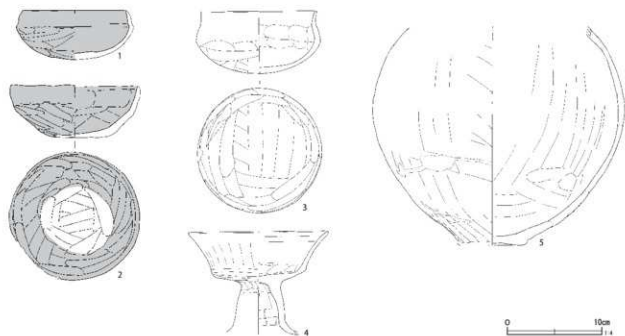
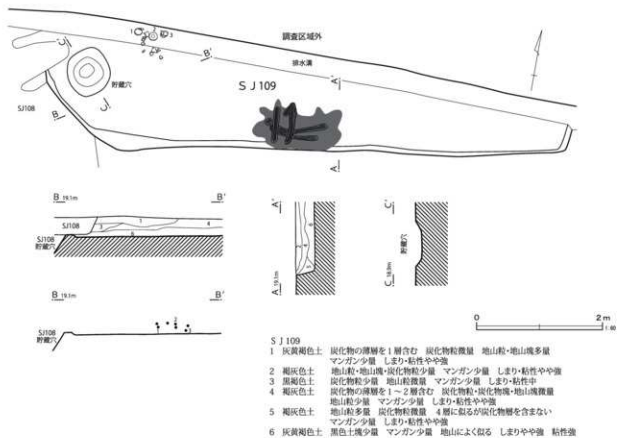
柱穴・壁溝は、検出されていない。

遺物は、調査区域際から集中して出土している。坏類には赤彩された坏身模倣(1)と内罎口縁平底(2)、外反口縁鉢タイプ(3)がある。高坏は有稜坏屈折脚で、脚部は太く短くなっている。甕の胴部には丸みが残り、長胴化が始まっていない。器形や器種組成などから銭塚・城敷IV期古段階に相当するが、第108号住居跡との重複関係から、この段階幅の中でも古く位置づけられる。

第110号住居跡 (第167図)

L-21・22グリッドに位置する。重複する第111号住居跡は、第100号住居跡よりも新しい。

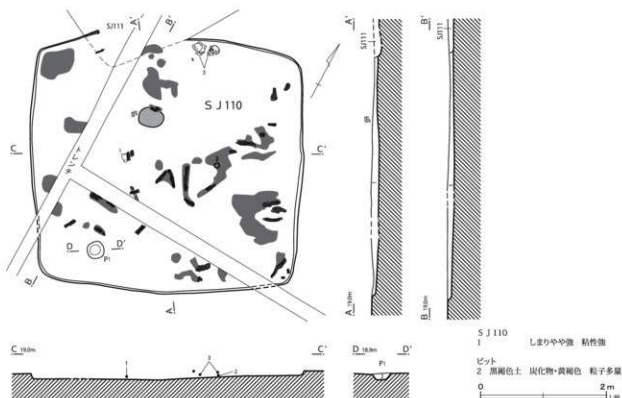
平面形態が方形の住居跡で、炉が中心よりも北側に設けられている。主軸長4.07m、東西幅4.30m、



第166図 第109号住居跡・出土遺物

第74表 第109号住居跡出土遺物観察表 (第166図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(11.0)	5.3		IJK	45	普通	明赤褐	坏身模倣 赤彩 髷い No4		101-6
2	土師器	坏	13.4	5.5		CEHIJK	80	普通	灰褐	坏蓋模倣(原初的) 平底 赤彩 No2		101-7
3	土師器	椀	12.1	6.6		AHI	90	普通	橙	口縁部外反 丸底 二次的被熱 No1		102-1
4	土師器	高坏	14.8	10.9		A E H I	70	普通	橙	有稜坏 短脚		102-2
5	土師器	甕		23.1	6.6	A E H I J K	40	普通	仁色・黄橙	胴張 器面風化顕著 調整痕不明瞭		



第167図 第110号住居跡

確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位はN-28°-Wを指す。覆土は1層で、炭化物を多量に含む。床面直上には炭化物・炭化材が分布し、焼失住居と想定される。

炉は地床炉で、長軸0.40m×短軸0.31mの楕円形の範囲が焼土化している。

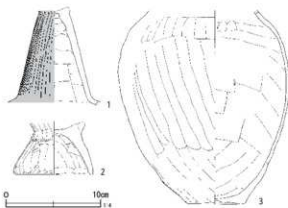
南西隅付近から、径2.80m×床面からの深さ0.10mのPit1が検出されている。浅いビットで、柱穴の機能は想定し難い。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は、検出されていない。

遺物は、炉跡南側と北壁際から出土しているが、量は少ない。長脚な高坏(1)と、台付甕(2)・中型の甕(3)である。高坏や中型甕から銭塚・城敷Ⅲ期古段階と思われる。

第111号住居跡(第169図)

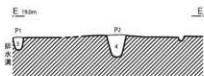
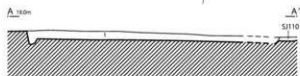
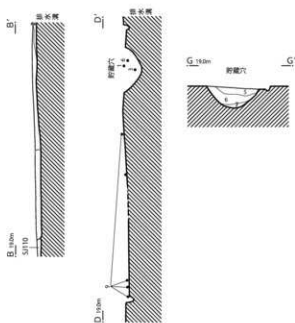
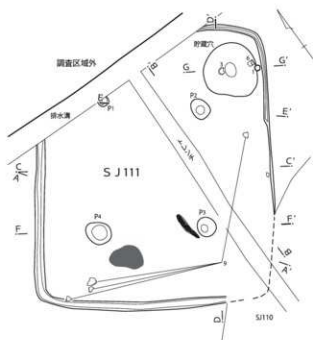
K-21・22・L-21グリッドに位置し、北西隅付近は調査区域外にある。重複する第110号住居跡よりも新しい。



第168図 第110号住居跡出土遺物

第75表 第110号住居跡出土遺物観察表(第168図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏		10.3		A B C H I J	60	普通	橙	(屈折部) 大型 赤彩 二次的焼熱(破片接合面も焼熱) No.5		
2	土師器	台付甕	5.6	8.5		E H I J L	100	普通	灰黄褐	煮沸による器面風化顕著 No.4		
3	土師器	甕	20.6	6.0		A C H I L	75	普通	橙	長脚気味 煮沸痕 器面風化顕著 No.1-2		102-3

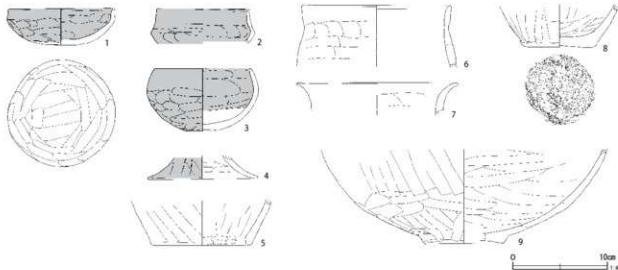


SJ111
 1 褐灰色土 炭化物粒・地山粒数豊富 マンガン少量 しまり・粘性やや強
 2 灰黄褐色土 2~3mm程の厚さの炭化物の薄層を含む 鉄土粒子多量
 しまりやや強 粘性中

ピット2~4
 4 灰黄褐色土 灰褐色粒子多量 炭化物少量 粘性強

ピット1
 3 褐灰色土 褐色粒子多量 炭化物少量 やや砂質 粘性強

貯蔵穴
 5 未注記
 6 未注記
 7 径5mmの焼土ブロック数割



第169図 第111号住居跡・出土遺物

第76表 第111号住居跡出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	11.2	3.9		A E H I J K	100	普通	灰褐色	坏身模倣 器面風化 赤彩範囲不明瞭	No.1	102-4
2	土師器	坏	(9.6)	3.7		C E H I K	50	普通	にぶい煙	坏身模倣 赤彩 小径深身		
3	土師器	椀	(10.7)	6.1	3.6	A E H I J K	50	普通	にぶい煙	内罎口縁 平底 赤彩? 破損後に二次的焼熱	No.2	102-5
4	土師器	高坏		2.5	(11.8)	C E H I K	45	普通	にぶい煙	屈折脚 赤彩 工具痕が縦刻状に残る		
5	土師器	甌		4.8	(10.6)	E H I K	20	普通	にぶい煙	器面風化顯著 (外面に赤彩?)		
6	土師器	鉢	(15.6)	6.6		A C E H I K	20	普通	にぶい煙	No.3		
7	土師器	甕	(16.8)	3.4		A E H I K	20	普通	にぶい煙			
8	土師器	甕		4.7	7.0	E H I K	70	普通	にぶい煙	煮沸痕 器面風化顯著 底部木葉痕+周辺ヘラケズリ		
9	土師器	壺		10.0	8.2	A E H I	25	普通	煙	外面は二次的焼熱顯著	No.4-6-7-8	

平面形態は長方形で、長軸長4.48m、短軸長0.14m、長軸方位はN-36°-Eを指す。確認面からの深さ0.14mで、覆土は上層の褐灰色土の1層と、焼土粒子を多量に含む炭化物層(2層)が堆積する。

Pit1・Pit2・Pit3・Pit4は主柱穴で、住居跡の形態と相似した長方形に配置されている。規模は、Pit1が径0.18m×床面からの深さ0.20m、Pit2が長径0.34m×短径0.26m×床面からの深さ0.35m、Pit3が長径0.32m×短径0.29m×床面からの深さ0.15m、Pit4が長径0.43m×短径0.35m×床面からの深さ0.11mである。柱間距離は、長軸方向のPit2-Pit3=1.90m、Pit1-Pit4=2.10m、短軸方向のPit1-Pit2=1.55m、Pit4-Pit3=1.70mである。

壁溝は、第110号住居跡との重複箇所から東壁中央付近を除き、全周している。0.07~0.16m、床面からの深さ0.02~0.08mである。

貯蔵穴は、北東隅に付設されている。平面径田が不整形で、長径1.90m×短径1.87m×床面からの深さ0.33mである。東壁際と中央中層から坏・椀・甕(1・3・6)が出土している。

厨房施設のカマド・炉跡は確認されていないが、住居跡の形状と北東隅に位置する貯蔵穴の存在から、カマドが調査区域外の北壁中央に設置されていた可能性が高い。

遺物の出土位置にはまとまりがないが、いずれも床面直上に分布している。赤彩された坏身模倣椀、内罎口縁坏と高坏(有坏屈折脚)・甌(須恵

器模倣)・壺(球胴形)・甕(長胴化の兆し)の破片がある。坏類の器形・組成や甕・甌の要素等から銭塚・城敷IV期古段階に相当する。

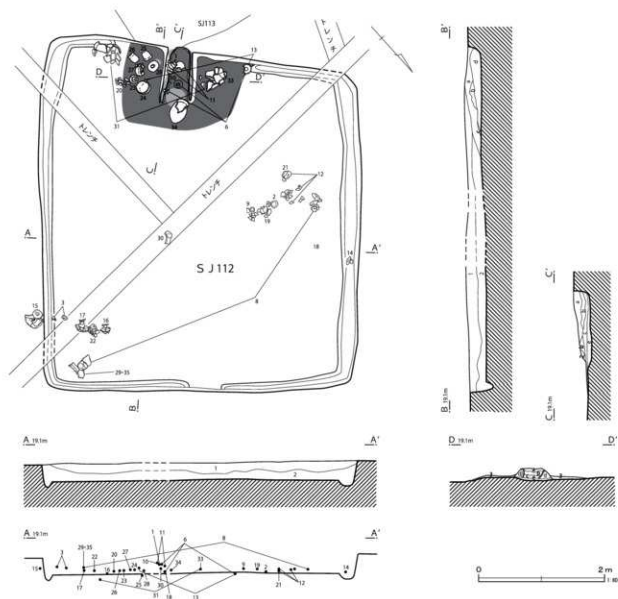
第112号住居跡 (第170図)

L-20グリッドに位置し、重複する第113号住居跡よりも新しい。

平面形態は台形を呈する。カマドを西壁に付設し、主軸方位はN-138°-Wを指す。主軸と平行する北辺長4.95m・南辺長5.70m、南北幅5.08m、確認面からの深さは0.32mを測る。覆土は、上下2層に分層される自然堆積である。

主柱穴は、発見されていない。

カマドは、西壁の中央付近に、粘土によって造り付けられている。住居壁の内側に袖部・燃焼部があり、煙道部は検出されていない。燃焼部の奥壁は住居跡壁と一致し、直立する。カマドの構築順序は、カマドの全範囲を一度、床面よりも掘り窪め、ここに白色粘土を貼って土台を形成する。この両端に袖部を積み上げてカマドを形づくる。燃焼部中央付近に高坏(18)を転用した支脚を設置し、その前面部は焼土化している。火床面の上面には炭化物層が堆積し、直上には天井部が崩落している。カマドの燃焼の度合いは高く、天井部・袖部の内側は焼土化が顯著である。燃焼部の規模は、長さ0.45m×幅0.30~0.45mである。袖部のつくりが貧相で、カマド導入期の様相が窺われる。また、カマドの前面・両脇には、カマド内から掻き出された炭化物が薄く堆積している。さらに架け口に架けられていた甕(34)が壊れ落ち



S J 112

- 1 褐色粘土
2 黒褐色土
3 黒色土

炭化物粘層 地山粉・マンガン少量 しまりや中強 粘性中
地山粉・マンガン少量 炭化物粘層 しまり・粘性や中強
カマド周辺に堆積した炭化物層 焼土粒子少量

カマド

- a 灰褐色土 天井部崩落 白色粘土主体 地山粉・炭化物粉・マンガン少量 しまり強 粘性や中強
b 赤褐色土 天井部内壁の焼土化 白色粘土 炭化物粘層 しまりや中強 粘性弱
c 黒色土 燃焼部に堆積した炭化物層 焼土粒子少量 しまり・粘性や中強
d 灰・黄褐色土 袖部 白色粘土 内壁の焼土化顯著 しまり・粘性強
e 黄灰色土 隅り方焼土 白色粘土 炭化物粒子少量

第170図 第112号住居跡

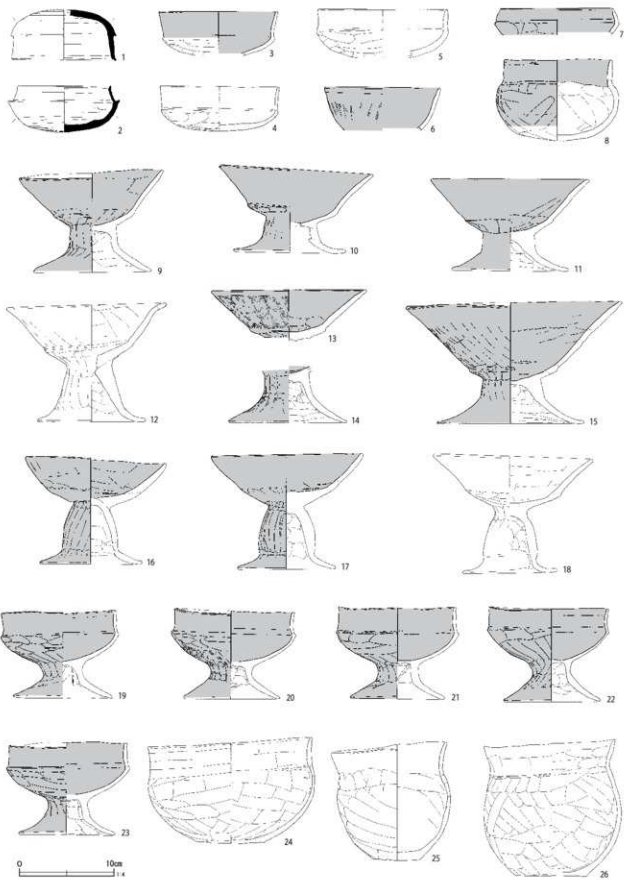
た様な状況もみられる。カマド内からは須恵器坏蓋 (1)・高坏 (10・11) が出土している。

壁溝は、カマド両脇部とカマドに対面する東壁中央部以外は全周する。幅0.13～0.35m、床面からの深さ0.10～0.12mほどである。北壁中央付近の壁溝中から、高坏脚 (14) が出土している。東

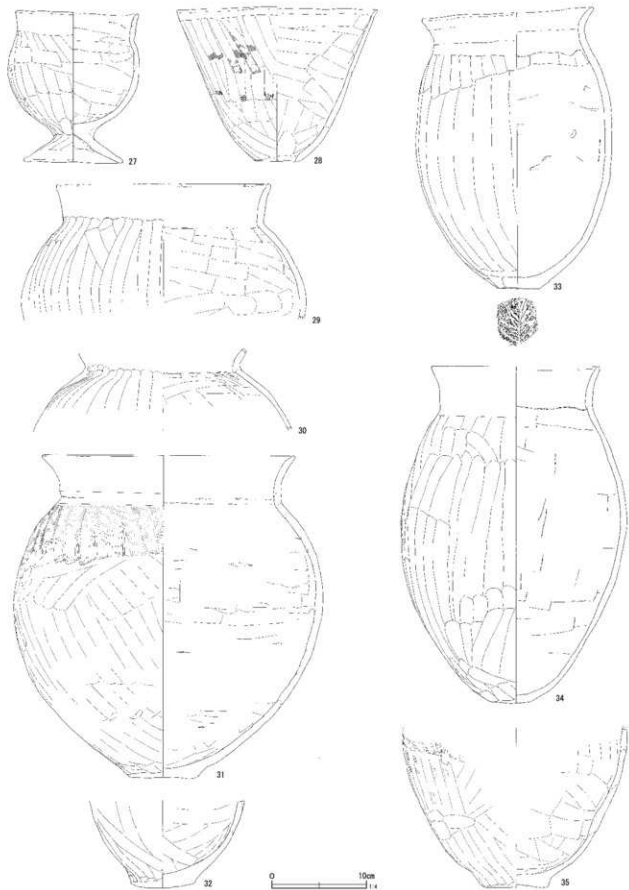
壁中央部の壁溝が途切れる箇所には、出入口施設の設置が推定される。

貯蔵穴は、検出されていない。

遺物は、カマドおよびカマド周辺部、北部中央付近、南東隅の3カ所に集中し、概ね、覆土下層中に分布している。また、遺物の接合率がきわめ



第171图 第112号住居跡出土遺物(1)



第172图 第112号住居跡出土遺物(2)

第77表 第112号住居跡出土遺物観察表 (第171・172図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏蓋	11.0	5.3		IK	55	普通	灰	坏日蓋 陶色産 TK23-47 外面に自然軸付着	No30	102-6
2	須恵器	坏身	9.9	4.9		IK	100	普通	灰	坏日身 陶色産 TK47 底部線刻一条 外面1/3に自然軸付着	No15	103-1
3	土師器	坏	(12.5)	4.6		CH I J K	50	普通	にぶ・黄	坏蓋模倣 赤彩 No5-6		103-2
4	土師器	坏	(12.6)	4.7		CH I K	50	普通	橙	坏蓋模倣		103-3
5	土師器	坏	(13.8)	5.1		A H I J L	35	普通	にぶ・黄	坏蓋模倣 二次的被熱		
6	土師器	椀	(12.2)	4.6		E H I J K	50	普通	にぶ・赤褐	直口縁 二次的被熱 No25-27-34		
7	土師器	坏	(11.9)	2.3		A H I J	5	普通	明褐	坏身模倣 赤彩 二次的被熱		
8	土師器	椀	11.4	8.6		C E H I J	90	普通	灰黄	口縁部直立 丸底 赤彩 No1-10		103-4
9	土師器	高坏	15.2	11.0	12.1	C E H I J K	90	普通	にぶ・橙	有稜坏屈折脚 短脚 赤彩 No17		103-5
10	土師器	高坏	15.8	9.0	(12.8)	C E H I J	60	普通	にぶ・黄	有稜坏屈折脚 短脚 赤彩 二次的被熱による風化顕著	No32	103-6
11	土師器	高坏	16.5	9.7		A H I J	70	普通	灰黄褐	有稜坏屈折脚 短脚 赤彩 No31-32		103-7
12	土師器	高坏	16.7	12.6	11.4	CH I J	70	普通	橙	有稜坏屈折脚 短脚 No12-13-14		103-8
13	土師器	高坏	16.3	5.3		CH I J	100	普通	にぶ・黄	有稜坏 (短脚) 赤彩 No26-27		
14	土師器	高坏		6.0	12.6	CH I J	100	普通	にぶ・黄	(有稜坏) 屈折脚 短脚 赤彩 No9		
15	土師器	高坏	22.5	13.0	15.4	E H I J	100	普通	にぶ・黄	大型有稜坏屈折脚 短脚 赤彩 No7		104-1
16	土師器	高坏	14.8	11.3	10.7	CI	100	普通	橙	有稜坏屈折脚 赤彩 器面風化顕著 底抜け坏とコーン状脚の接合	No2	104-2
17	土師器	高坏	16.0	12.2	10.2	E H I J K	90	普通	にぶ・橙	有稜坏屈折脚 内外面赤彩 器面の風化が著しく調整痕不明瞭 内面に粘土の巻き上げ痕	No4	104-3
18	土師器	高坏	16.8	12.7	(10.0)	A H J K	75	普通	橙	転用支脚 有稜坏屈折脚 No34・カマド		104-4
19	土師器	高坏	12.1	9.3	10.2	E H I J K	90	普通	にぶ・橙	坏蓋模倣坏搭載 屈折短脚 赤彩 No16		104-5
20	土師器	高坏	12.4	9.4	10.0	A E H I J K	70	普通	にぶ・橙	坏蓋模倣坏搭載 屈折短脚 赤彩 支脚転用痕	No14-6 21	104-6
21	土師器	高坏	12.5	9.6	9.7	E H I J K	90	普通	灰黄褐	坏蓋模倣坏搭載 屈折短脚 赤彩 No14		104-7
22	土師器	高坏	12.7	10.0	10.2	G H I J	90	普通	にぶ・黄	坏蓋模倣坏搭載 屈折短脚 赤彩 No3		104-8
23	土師器	高坏	12.5	9.8	10.1	A E I J K	95	普通	にぶ・橙	坏蓋模倣坏搭載 屈折短脚 赤彩 坏部二次的被熱	No20	105-1
24	土師器	鉢	17.2	11.2	7.4	A E H I J K	100	普通	灰褐	坏蓋模倣大型化 平底 No19		105-2
25	土師器	小型甕	(12.1)	12.5	4.9	AGI	80	普通	にぶ・黄	内面タテ1/2以上に黒色テール状の付着物	No28	105-3
26	土師器	小型甕	13.9	14.5	7.6	E H I J K	100	普通	にぶ・黄	煮沸痕なし No23		105-4
27	土師器	台付甕	12.9	15.9	10.4	A E H I J K	60	普通	にぶ・赤褐	短脚 煮沸痕 No22		105-5
28	土師器	甕	21.2	16.3	(4.3)	H I J K	95	普通	にぶ・黄	鉢形 No29		105-6
29	土師器	甕	22.8	14.2		A E H I J K	30	普通	にぶ・橙	胴張 煮沸痕顕著 No1		105-7
30	土師器	甕		8.7		E F H I K	20	普通	にぶ・橙	胴張 煮沸痕 器面風化 No8		105-8
31	土師器	甕	(26.5)	34.1	6.2	E H I	90	普通	にぶ・橙	大口胴張 No18-24		105-7
32	土師器	甕		9.2	6.8	A E H I J K	40	普通	褐灰	長胴化 基部残痕 (底部不安定)		
33	土師器	甕	18.2	29.2	4.7	HI	95	普通	橙	長胴化 底部本葉痕 No18		106-1
34	土師器	甕	(17.4)	35.7	4.0	B H I J K	90	普通	にぶ・黄	長胴化 煮沸痕明瞭 No33		106-3
35	土師器	甕		6.7	16.8	A C E H I J K	30	普通	灰黄褐	長胴化 煮沸痕 テール状煤付着	No1	

て高く、実測不可能な土器片は数少なかった。

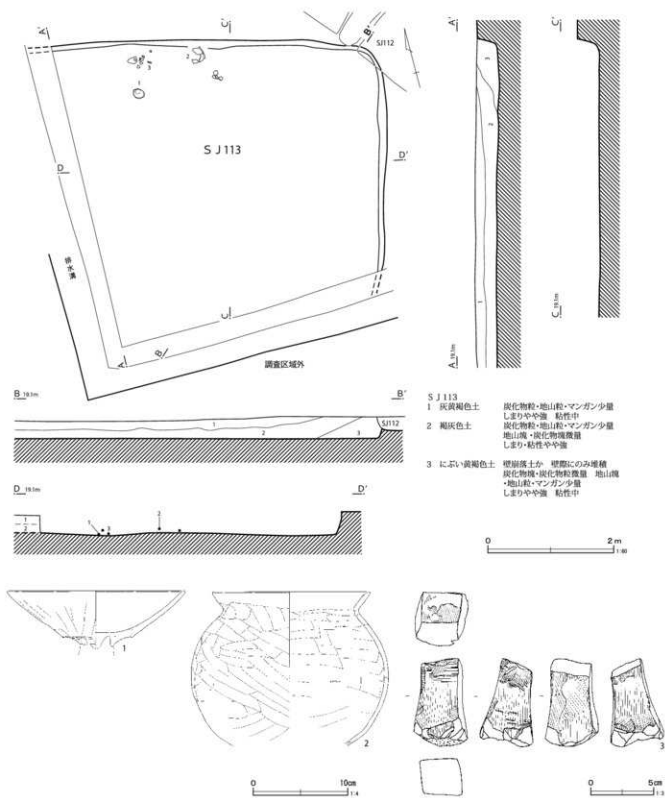
特に、カマドの左脇部の集中度が高く、坏(4)・高坏(13・20・23)・大型鉢(24)・小型甕(25・26)・小型台付甕(27)・甕(28)・甕(31)といったあらゆる器種が揃っている。またカマドの右脇からも椀(6)・甕(33)が出土している。

北部中央付近では、須恵器坏身(2)と椀(8)・高坏(9・12・19・21)の供膳具がまとまっている。また、住居中央部からは、甕の上半部(30)

が検出されている。一方、南東隅からは、坏(3)・高坏(15・16・17・22)・甕(29・35)の供膳具と煮沸具が共存している。

坏類には、須恵器の坏蓋と坏身、坏蓋模倣坏・坏身模倣坏・椀がある。

高坏は、有稜坏屈折脚と屈折脚の上に坏蓋模倣坏が載るタイプに大別される。また有稜坏屈折脚高坏は、脚部が膨らみをもつ長脚のもの、短脚のものに細分される。さらに、15のような大型品



第173図 第113号住居跡・出土遺物

第78表 第113号住居跡出土遺物観察表 (第173図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	高坏	18.6	6.1		E H I J K	80	普通	橙	有轆坏 二次的被熱 器面風化	No.2	
2	土師器	台付甕	16.5	16.3		A E H I J K	80	普通	黒褐	胴張 煮沸痕顕著	No.3	106-4

も含まれている。坏蓋模倣坏が載るタイプの坏部は、共存する坏蓋模倣坏と比べると、若干、古い様相を残している。

24の鉢は平底であるが、坏蓋模倣坏を大型化したような形状を呈している。25・26の小型甕は頸部の括れが弱く、鉢として使用したものかもしれない。27の台付甕は25・26のような小型甕にハの字に開く短い台が付いている。甕は大径で胴部に丸みを残すもの(29~31)と長胴化したもの(32~35)がある。

出土遺物の器形や器種組成などから、銭塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。

1は須恵器坏H蓋である。天井部に丸みがみられ、口縁部はやや外側に開く。端部は沈線上に凹む。器形や製作技法・胎土等の特徴から、陶邑産のTK23型式~TK47型式段階に推定される。

2は須恵器坏H身である。口縁部は比較的短く、器壁が薄い。端部は序版が直線的に内傾し、下半部が凹む。外面に線刻が一条残る。緻密なつくりで、器面には小豆色の発色部がある。器形や製作技法・胎土等の特徴から、陶邑産のTK47型式のものとして推定される。

第113号住居跡 (第173図)

L・M-19・20グリッドに位置する。第3次調査区域の南西隅にあたり、西側・南側は調査区域外にある。覆土の堆積状況と出土遺物の形状から、重複する第112号住居跡の方が新しい。

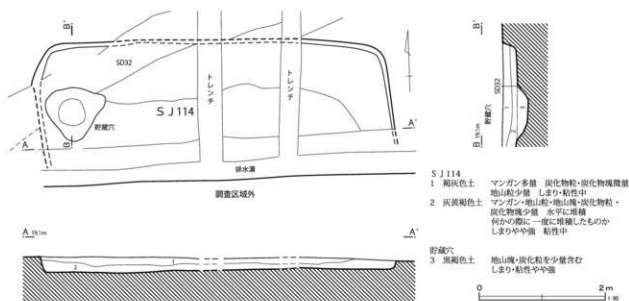
平面形態は、方形もしくは長方形の住居跡となる見込みである。検出された北辺長5.06m・東辺長4.90mで、北辺の方角をN-74°-Wに向ける。

確認面からの深さは0.35mで、比較的しっかりとした壁をもつ。覆土は3層に分層され、壁際から埋没して言った様相をみることが出来る。

主柱穴やカマド・ガ・貯蔵穴、壁溝等は、検出されていない。

遺物の出土量は少ないが、北壁際の床面直上からまとまって発見されている。図示し得たのは、有稜坏の高坏(1)・胴部に丸みに残る甕(2)・砥石の3点である。断定は難しいが、銭塚・城敷Ⅲ期に相当する。

3は砥石である。折損した上面は再利用され、計5面に使用痕がみられる。右側面には溝状の擦痕が残る。長さ6.90cm・幅4.25cm・厚さ4.20cm、重さ140.8gである。石材は砂岩である。(No4/図版106-2)



第174図 第114号住居跡

第114号住居跡 (第174図)

L・M-21グリッドに位置する。幅1.6~1.7mほどの検出で、大半が調査区域外にある。第32号溝跡と重複する。

平面形態は方形で、北辺の長さ5.73m、北辺方向はN-92°-Eを指す。確認面からの深さは、0.15~0.25mである。覆土は2層に分層される、

自然堆積である。

貯蔵穴が、北西隅に付設されている。平面径田が不整形で、長径0.93m×短径0.85m×深さ0.17mの比較的浅い掘り込みである。

この他に、カマド・炉、支柱穴・壁溝等は検出されていない。また、出土遺物もない。

2. 掘立柱建物跡

本報告が対象とする城敷遺跡南半部から発見された掘立柱建物跡は、13棟(第1・3~12・16・17号掘立柱建物跡)である。

第1号掘立柱建物跡は単独1棟で、竪穴住居跡と混在する。このほかは大きく4つの分布域に分かれている。

F-6~8グリッドに位置する第7~10号掘立柱建物跡の4棟は、竪穴住居跡群の間隙に位置している。竪穴住居跡との重複度合いは僅かにかする程度であり、同時期に存在していたことが推測される。

E・F-11・12グリッドに第3号掘立柱建物跡と第11号掘立柱建物跡の2棟が位置する。竪穴住居跡群と大溝跡(第4号溝跡第6地点)に挟まれた地域である。周囲には滑石製白玉の製作地があり、玉作と掘立柱建物跡の関連が注目される。

J-7~10グリッドには、第4~6・12号掘立柱建物跡の4棟が分布する。竪穴住居跡が希薄な地区で、周囲には多数のピットが分布する。組み合わせが把握できなかった掘立柱建物跡が存在する可能性が高く、掘立柱建物跡が集中する地区である。

最後は、第3次調査区のL-22・23グリッドに位置する第16・17号掘立柱建物跡である。竪穴

住居群東側の空閑地に建築され、竪穴住居跡との直接的な重複がない。

第1号掘立柱建物跡 (第175図)

A・B-13グリッドに位置し、南東半は調査区域外にある。重複する第16号住居跡よりも新しい。

3間×2間の側柱建物跡と推定される。南北軸の方位はN-43°-Eを指す。柱穴は10本のうち6本が発見され(Pit1~Pit6)、ほか4本は調査区域外にある。

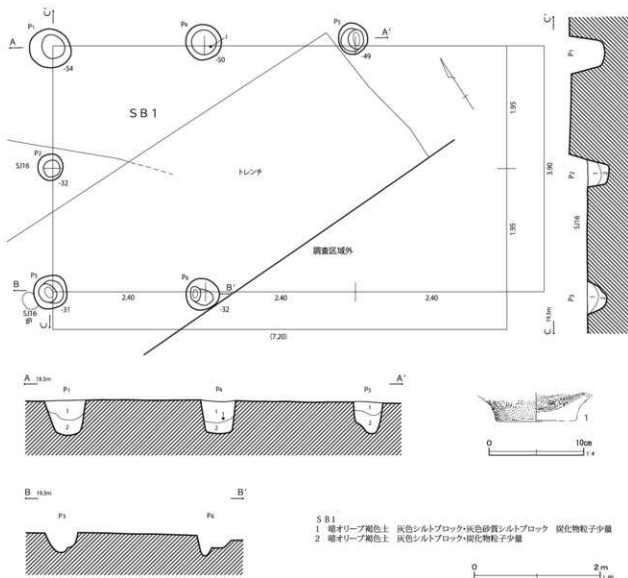
規模は、南北3.90m×東西7.20m・面積28.08㎡と推測される。柱間距離は、南北方向が1.95m、東西方向が2.40mに統一されている。柱穴の平面規模は、西辺中央のPit2が小さいが、ほかは均一的である。底面標高はほぼ同数値を示し、きわめて統一性の高い建物跡である。

覆土は上下2層に分層されるが、柱痕は確認されていない。1・2層ともに柱掘り方への充填もしくは柱抜き取り痕の埋没層と思われる。

遺物は、北西隅のPit1から壺もしくは甕の底部片が出土している。細片のため、時期の特定や遺構の時期を直接的に示す遺物とする検証も困難である。おそらくは、銭塚・城敷Ⅲ期~Ⅳ期頃に相当すると思われる。

第79表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第175図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	壺		3.0	8.5	CEHJ	60	普通	に灰緑	底面ヘラズリ	Pit No1	



第175図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物

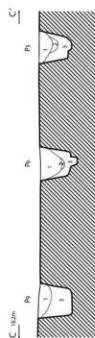
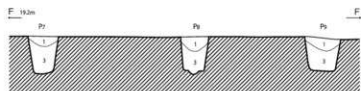
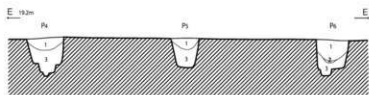
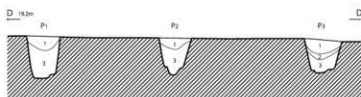
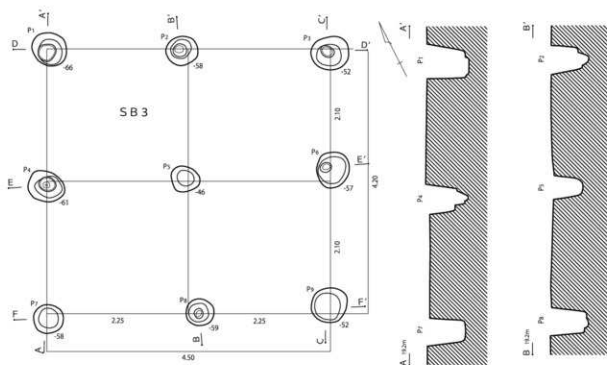
第3号掘立柱建物跡 (第176図)

E・F-12グリッドに位置する。重複する遺構はないが、北側・西側の空間地域からは石製模造品や白玉の未成品や製作破損品・剥片等が集中的に出土している。

2間×2間の総柱建物跡である。軸方位はN-26°-Eを指す。規模は、東西4.50m×南北4.20m・面積18.9㎡である。柱間距離は、東西方向2.35m、南北方向2.10mに統一されている。柱並びも整然としたもので、きわめて規則性の高い柱配置を示している。

柱穴の規模は、中央の東柱の位置にあるPi5が小さく、浅い。しかし、意識して比較しないと認識できないほどの差である。他の柱穴は、平面規模・深さともにほぼ等しい。また、Pi7とPi9を除いた柱穴の底面には、さらに一段深く掘り込まれた柱痕が検出されている。

規則性の高い柱配置と共通項が多い柱掘り方の統一性から、設計技術・建築技術の高さを垣間見ることができる。2間×2間の総柱建物から高床倉庫が想定されるが、これらの技術に支えられた頑強な建物構造と推定される。



SB 3

1 暗オリーブ褐色土 灰色シルトブロック・炭化物粒子含む

2 褐色土 黄土、下部に炭化物

2 暗オリーブ褐色土 灰色シルト粒子含む 炭化物粒子少量



第176図 第3号掘立柱建物跡

覆土は、概ね上下2層に分層される。柱痕は確認されていないことから、上層(1層)は柱抜き取り痕の埋没層、下層は柱掘り方充填土である。また、南北に並ぶ Pit3・Pit6 では、中層に薄い焼土・炭化物層が堆積している。

遺物は、赤彩された口縁部が内彎する椀(1)と、北西隅柱の Pit1 から滑石製剣形品(2)が出土している。このほかに、Pit1・Pit3・Pit4・Pit5・Pit8・Pit9 から土師器甕・環・高坏等の図示し得ない細片が出土している。

2の滑石製剣形品は、いわゆる剣菱形を呈しているが、側面部はあまり角張らない。鑄の表現が無く、切刃形の断面形である。周辺部は丁寧に仕上げられているが、右側面部に刻み状の痕跡が3カ所みられる。先端部を欠損する。孔は上方部の1孔で、片面から穿たれている。現存長4.87cm・幅2.16cm・厚さ0.45cm・孔径0.14cm、重さ7.7gを測る。(図版107-2)

第4号掘立柱建物跡 (第179図)

J-9グリッドに位置する。重複する第5号溝跡は浅い江戸時代の溝跡であり、第4号掘立柱建物跡の柱穴が第5号溝跡の底面下にも掘り込まれている。また、柱穴同士の直接的な重複はない

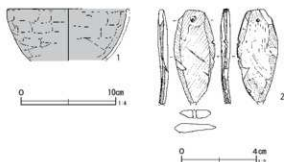
が、第5号掘立柱建物跡の建物範囲と第4号掘立柱建物跡の建物範囲が、軸方位を違えた状況で重複する関係にある。

3間×2間の総柱建物跡である。軸方位はN-14°-Wを指す。規模は、東西4.80m×南北3.30m・面積37.8㎡である。柱間距離は、東西方向の中央間1.50m・両脇間1.65m、南北方向は1.65mを図る。きわめて規則性が高い柱配置を示している。

柱穴の規模は、東列の3本(Pit4・Pit8・Pit12)平面規模が大きく、深さもやや深い。ほかの柱穴の平面規模は均一的で、底面標高もほぼ等しい。上屋構造には、高床建物が想定される。

覆土は、概ね2層に分層される。1層が柱痕、2層が柱掘り方の充填土である。多くの柱穴で柱痕層が確認されているが、平面的な確認はできなかった。

遺物は、口縁部先端が小さく外反する、赤彩が施された比企型環が出土している。このほかに、Pit3・Pit4・Pit8・Pit9 から土師器甕の図示し得ない細片が出土している。少量の出土遺物から特定することは困難であるが、銭塚・城敷IV期新段階に相当する可能性がある。



第177図 第3号掘立柱建物跡遺物



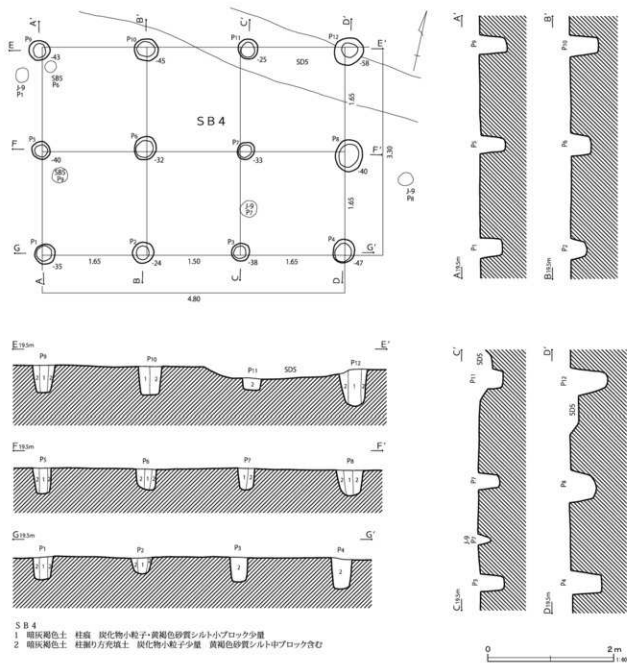
第178図 第4号掘立柱建物跡遺物

第80表 第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	椀	(12.4)	5.5		E H I J K	20	普通	に赤・赤黒	内彎口縁 赤彩	二次的養熟	

第81表 第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	環	(12.6)	2.7		A H I K	25	普通	に赤・黄緑	環身模痕 赤彩		



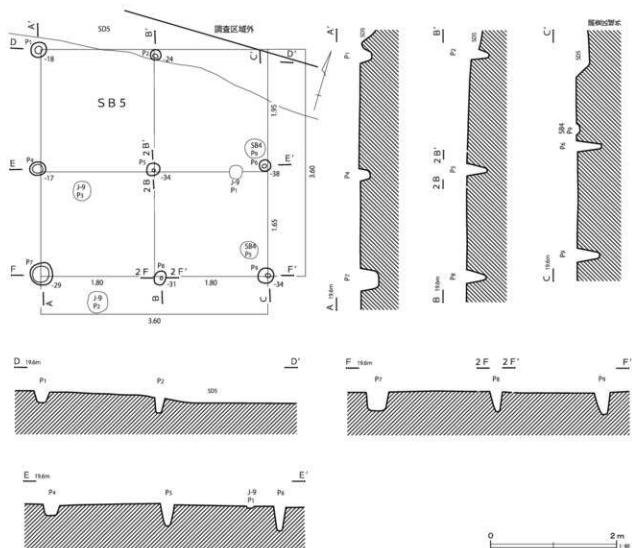
第179図 第4号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡（第180図）

J-9グリッドに位置し、北東隅の柱穴は調査区外に位置する。重複する第5号溝跡は浅い江戸時代の溝跡であり、第5号掘立柱建物跡の柱穴が第5号溝跡の底面下にも掘り込まれている。また、柱穴同士の直接的な重複ではないが、第4号掘立柱建物跡の建物範囲と第5号掘立柱建物跡の建物範囲が、軸方位を違えた状況で重複する関係にあ

る。

2間×2間の総柱建物跡である。軸方位はN-25°-Wを指す。規模は、東西3.60m×南北3.60m・面積7.20㎡である。柱間距離は、東西方向1.80m、南北方向の北間1.95m・南間1.65mを測る。規則性が高い柱配置を示している。四隅の柱に対して、中間に配置された柱穴の柱並びに、ごくわずかなブレが認められる。



S B 5
 *ピットの覆土：炭化物小粒子・黄褐色小ブロック含む。ほぼ全部同じようすで黄褐色ブロック振り方に多少の差が微妙にあるくらい。

第180図 第5号掘立柱建物跡

柱穴の規模は、南西隅の Pit7 (径0.37m) を除いて、平面規模が小さく、浅いものが多い。特に底面積が狭く、頑強な柱を想定できない柱穴である。覆土は観察されていない。

遺物は、Pit9から土師器甕が出土している。細片のため図示し得ないが、銭塚・城敷Ⅲ期～Ⅳ期頃に相当すると思われる。

第6号掘立柱建物跡 (第181図)

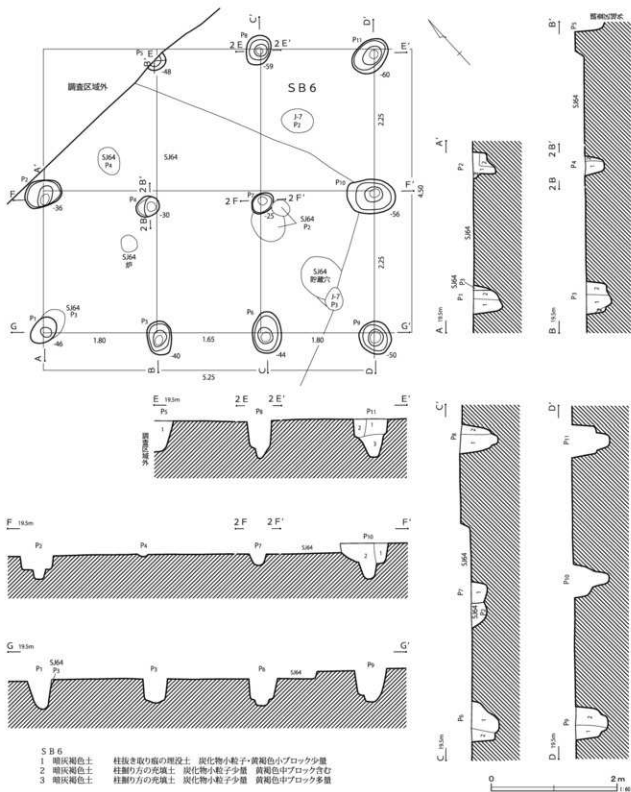
J-7・8グリッドに位置し、北西隅は調査区域外にある。第64号住居跡と重複し、覆土の堆積状況から第6号掘立柱建物跡の方が新しい。

3間×2間の総柱建物跡である。軸方位はN

-41°-Eを指す。規模は、東西5.25m×南北4.50m・面積23.625㎡である。柱間距離は、東西方向の中央1.65m・両脇1.80m、南北方向2.25mを測る。きわめて規則性が高い柱配置である。

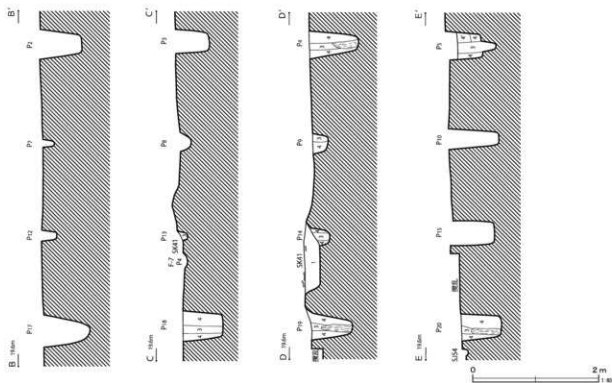
柱穴の平面規模と深さは、隅柱の Pit1・Pit9・Pit11が大きく、深い。一方、束柱となる Pit4・Pit7は小さく、浅い。また、隅柱と側柱では、柱痕部が深く掘り込まれている。覆土は、柱抜き取り痕の埋没層(1層)と柱掘り方の充填土の(2・3層)に分層される。このような柱穴の状況から、相当にしっかりとした高床建物が想定される。

遺物は、Pit1・Pit2・Pit9・Pit10から土師器



第181図 第6号掘立柱建物跡

甕・小型器台等が出土している。細片のため図示し得ないが、銭塚・城敷Ⅲ期～Ⅳ期頃に相当すると思われる。



- S K 41
1 暗褐色土 炭化物少量
- S B 7
2 黒褐色土 柱脚り方陥没部への流入土 灰色シルト粒子・ブロック多量 炭化物粒子極多量
3 黒褐色土 炭土多量
4 暗褐色土 柱脚り 一部柱材残
5 暗褐色土 柱脚り方への充填土 褐色粘土ブロック・灰色シルト粒子・炭土粒子・炭化物粒子少量
6 暗褐色土 4層より薄い
- S K 18
5 暗オリーブ褐色土 灰色シルト粒子少量 炭化物粒子
6 加褐色土 灰色シルトブロック・炭化物粒子
7 灰オリーブ色土 地山

第183図 第7号掘立柱建物跡・第18・41号土壌(2)

第7号掘立柱建物跡・第18-41号土壌(第182-183図)

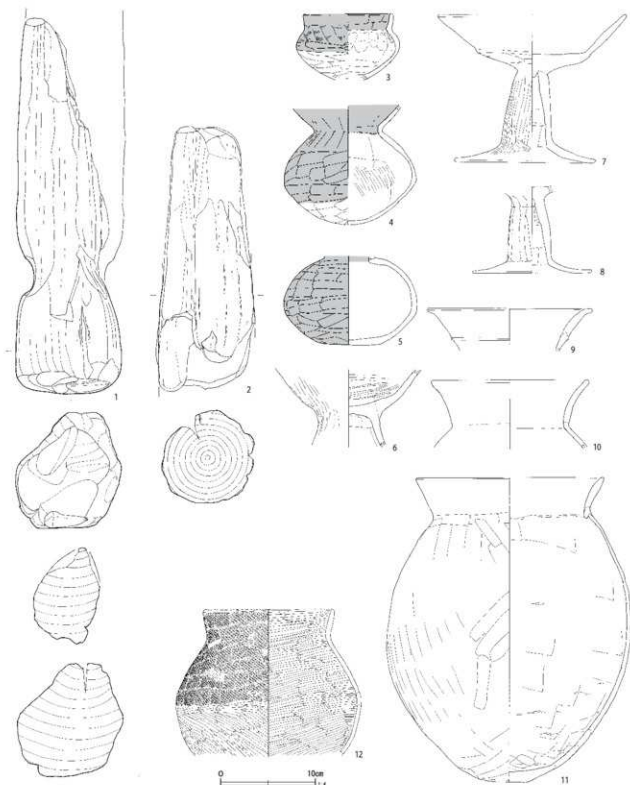
第7号掘立柱建物跡は、E-8・F-7・8グリッドに位置し、軸方位を違える第8号掘立柱建物跡と重複する。また、周囲には、方向性が一致す

る第36・37・69号住居跡などの比較的大型な住居跡が存在する。

4間×3間の総柱建物跡である。軸方位はN-43°-Wを指す。規模は、東西5.85m×南北

第82表 第7号掘立柱建物跡・第41号土壌出土遺物観察表(第184図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
3	土師器	鉢	(9.3)	7.0		A E H I K	40	普通	にぶ・橙	口縁部内埋 赤彩 No12		108-1
4	土師器	埴		12.6		A H I J	85	普通	橙	丸底 赤彩 No3		108-2
5	土師器	埴		9.2	6.6	A E H I J K	95	良好	にぶ・橙	平底 赤彩 No9		108-3
6	土師器	脚付鉢		8.2		E H I J K	60	普通	にぶ・橙	台付甕ではない 二次的被熱 No7-8		
7	土師器	高坏	19.8	15.6	14.7	A H I K	80	普通	橙	有縁坏屈折脚 二次的被熱 器面風化・赤彩不明 No10		108-4
8	土師器	高坏		9.2	(12.5)	A E G H I K	70	普通	にぶ・橙	屈折脚 支脚転用痕 赤彩不明 No5		
9	土師器	壺	(17.4)	4.5		A C E H I K	10	普通	にぶ・橙	口縁部に工具先端ナデによる稜形成 No1		
10	土師器	甕	16.5	7.3		A E H I K	60	普通	にぶ・橙	煮沸痕顕著 調整不明痕 No2		
11	土師器	甕	19.6	32.2	5.2	A H I K	60	普通	灰黄褐	長割化出現 煮沸痕顕著 No11		108-5
12	古々谷	甕	(13.8)	15.6		G	60	普通	暗褐	口縁部一胴部上半に卑路 RL 施文 口縁端部に卑路 RL 押圧		108-6



第184図 第7号掘立柱建物跡・第41号土壇出土遺物

4.50m・面積26.325㎡である。柱間距離は、1.50mを基本とするが、東西方向の西から3間目の Pit3—Pit4・Pit9—Pit10・Pit13—Pit14・Pit18—

Pit19は1.35mを測り、他の柱間よりも狭い。特に規則性が高い柱配置を示している。

柱穴の平面規模は、建物外周に配された隅柱と

側柱が大きい。一方、建物内部の東柱にあたる Pit7・Pit8・Pit9・Pit12・Pit13・Pit14の6本は、小さい。また、深さにおいては、隅柱の Pit1・Pit5・Pit16・Pit20が最も深く、次いで側柱10本と続く。東柱6本は、極端に浅い。このように配置位置によって柱穴の規模が3分される状況から、高度な設計に基づいた高床建物が想定される。

覆土は、概ね3層に分層される。一つは、一部の柱穴でみられるもので、時間経過による柱掘り方の陥没部への流入土（2層）である。3層は柱痕層である。なかでも、Pit4(1)・Pit19・Pit20(2)からは、腐食せずに遺存していた柱根が発見されている。ただし、Pit20では腐食の進行が著しく、取り上げることができなかった。4層は柱掘り方への充填土であるが、版築状に衝き固めた様相は捉えられていない。

遺物は、Pit1・Pit7・Pit11・Pit14・Pit19・Pit20から土師器甕が出土している。細片のため図示し得ないが、銭塚・城敷Ⅲ期～Ⅳ期頃に相当すると思われる。

また、第7号掘立柱建物跡は、第18・41号土壌と重複する。

第18号土壌は、第7号掘立柱建物跡西辺の Pit7と近接する。平面形態が隅丸台形の、掘り込みの浅い土壌である。長軸長0.94m、短軸長0.72m、確認面からの深さ0.14mを測り、長軸方位はN-46°-Eを指す。遺物は出土していない。

第41号土壌は、第7号掘立柱建物跡の東柱 Pit13・Pit14と重複する。平面形態は楕円形で、断面形が凹レンズ状の掘り込みの浅い土壌である。長軸長2.03m、短軸長1.32m、確認面からの深さ0.14mを測る。長軸方位はN-3°-Eを指す。遺物が、西側・南側の壁際から集中している。これらの遺物は、土壌の検出面とほぼ一致したレベルから出土していることから、第41号土壌に伴う遺物として即断することは注意を要する。

第7号掘立柱建物跡と第18・41号土壌との関

係を、明らかにすることは困難である。覆土の堆積状況からは、第7号掘立柱建物跡よりも第41号土壌が新しく、第18号土壌は古いという、新旧関係が捉えられている。しかし、第41号土壌の遺物出土状況から、単なる新旧関係として把握することに対して警鐘を鳴らしている。第18号土壌はともかく、第7号掘立柱建物跡と第41号土壌には、有機的な関係にあったことを示唆しておく。例として、高床建物の床下貯蔵施設や、建築時の儀式に伴う施設などが考えられる。

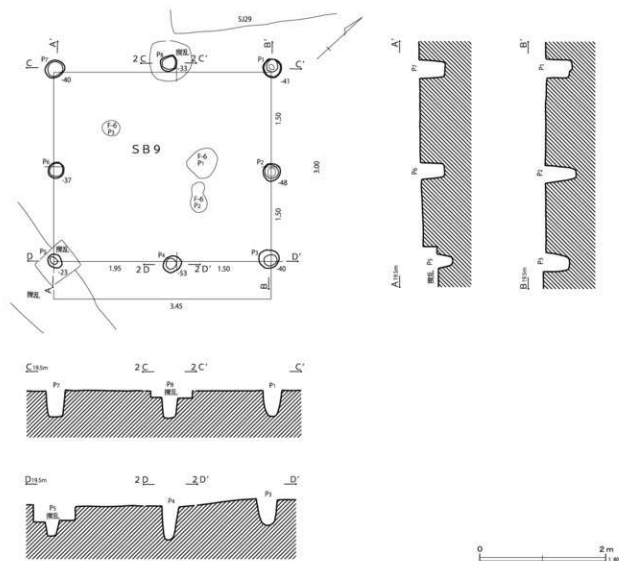
1は、Pit4に残存していた柱根である。下端部には斧状の工具によって切断された工具痕を明瞭に残す。下から10cm程の側面部は人為的に扶られ、括れが全周する。根絡部材が組み合わされるための細工と思われる。ただし、対応する根絡部材は検出されていない。現存長39.2cm、幅11.1cm、厚さ12.0cm、括れ部幅7.0cm、厚さ10.1cmである。木取りはみかん割り、樹種はキハダである。(図版107-4 / 整理番号286 / ST2-346)

2は、Pit19に残存していた柱根である。芯持ち丸材で、表面の風化が顕著で、加工痕は確認できない。根元部分は腐食が進行し、空洞化・黒色化している。現存長27.9cm、幅9.7cm、厚さ9.9cmである。樹種はキハダである。(図版107-3 / 整理番号514 / ST2-450)

第8号掘立柱建物跡 (第185図)

F-7グリッドに位置し、軸方位を違える第7号掘立柱建物跡と重複する。また、第31号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

2間×2間の総柱建物跡である。軸方位はN-34°-Wを指す。規模は、東西4.20m×南北3.80m・面積15.96㎡である。柱間距離は、東西方向が2.10m、南北方向が1.90mにそれぞれ統一されている。柱穴の規模も、柱位置に関わらず、平面規模・深さともに均一性が高い。きわめて高い規則性を窺わせる。上層構造には、高床倉庫が想定される。



第186図 第9号掘立柱建物跡

遺物は、Pit2・Pit3・Pit7・Pit8から土師器高坏・甕が出土している。細片のため図示し得ないが、銭塚・城敷Ⅲ期～Ⅳ期頃に相当すると思われる。

第9号掘立柱建物跡（第186図）

F-6グリッドに位置し、重複する遺構はない。

2間×2間の側柱建物跡である。軸方位はN-43°-Wを指す。規模は、東西3.45m×3.00m・面積10.35㎡である。柱間距離は、東西方向の西間が1.95mを測るのに対し、ほかは1.50mに統一されている。柱穴の規模も、柱位置に関わらず、平面規模・深さともに均一性が高い。一方、柱並

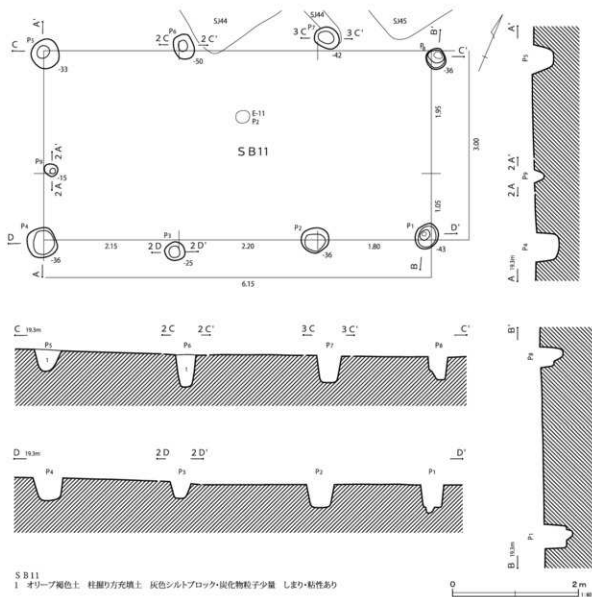
びは、北辺・南辺中央のPit2・Pit8が外側に張り出し、東辺中央のPit6は位置がずれている。

遺物は、Pit4から土師器の壺・甕類が出土している。細片のため図示し得ないが、銭塚・城敷Ⅲ期～Ⅳ期頃に相当すると思われる。

第10号掘立柱建物跡（第232図）

F-6グリッドに位置し、南半部は調査区域外にある。第55号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

総柱・側柱の判別はできないが、2間×2間程度の建物跡と推定される。軸方位はN-38°-Eを指す。柱間距離は、東西方向1.95m、南北方向



第188図 第11号掘立柱建物跡

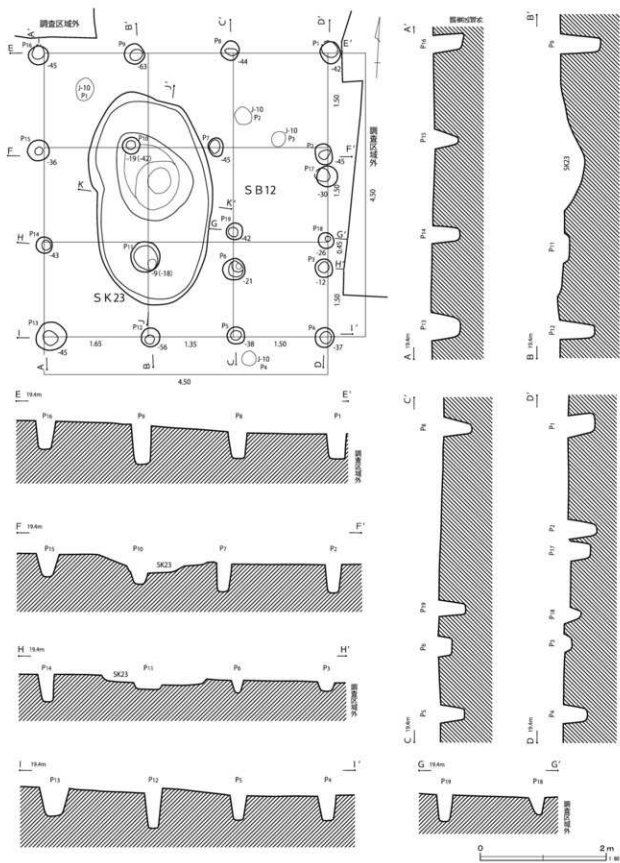
ほど多い。Pit2とPit17、Pit18とPit3、Pit10とPit6が隣り合う。これら3組の柱穴の組み合わせから、建て替えも考えられる。しかし、Pit2・Pit18・Pit10は深く、Pit17・Pit3・Pit6は浅い柱穴である。また総柱建物であることから、上屋構造に高床建物を想定し、深い柱穴（Pit2・Pit18・Pit10）の脇で床を支えるための浅い柱穴（Pit17・Pit3・Pit6）と考えることができる。

柱間距離は、東西方向では西から1.65m・1.35m・1.50mを測り、各間とも異なっている。

これに対し、南北方向では1.50mに統一されている。柱並びは、側柱列では直線的に並んでいるが、建物内部の束柱は方形筋置からずれている。柱穴の深さは、隅柱・側柱が深く、束柱が浅い傾向があるものの、統一感に欠ける。

遺物は、Pit13から土師器器が出土している。細片のため図示し得ないが、銭塚・城敷Ⅲ期～Ⅳ期頃に相当すると思われる。

第23号土壌は、長軸方位を第12号掘立柱建物跡と一致させる楕円形の土壌である。長軸長



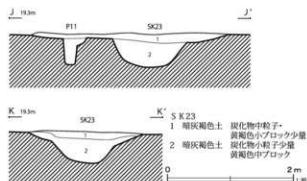
第189图 第12号掘立柱建物跡・第23号土庫(1)

3.40m、短軸長1.87m、確認面からの深さ0.06m程の浅い掘り込みの中央付近に、長軸長1.46m、短軸長1.26m、確認面からの深さ0.51mの下段土壌が掘り込まれている。

重複する第12号掘立柱建物跡の軸方向と第23号土壌の長軸方向が合致することは、両遺構の関連性の高さを示唆している。例として、高床建物の床下貯蔵施設や、建築時の儀式に伴う施設などが考えられる。しかし、床下貯蔵施設として第23号土壌が開口されていた場合、直接的に重複するPit11の深さがほぼ同じ高さであり、東柱としての強度を保つことが問題となる。

第23号土壌から、須恵器の大型甕(1)と土師器の高坏(2・有稜坏)が出土している。

須恵器の大型甕は、細片を組み合わせた復元実測で、最大径が20.5cmと推定される。外面には、焼成時の自然軸が薄く付着している。頸部には櫛描き波状文が施されている。肩部には工具先端の刺突による列点文が並ぶ。胴部中位よりも上部に平行する二条ずつの沈線によって区画され、櫛描波状文を施文後に円孔が穿たれている。胴部下半部から底部には平行タキがみられ、内面には当て具痕が対応する。また、内面の肩部付近には連

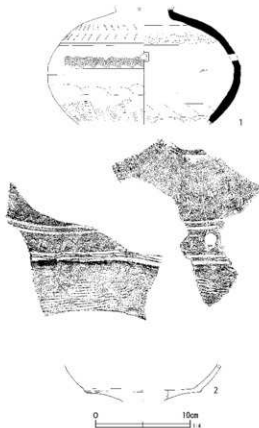


第190図 第12号掘立柱建物跡・第23号土壌(2)

続した頸頭瓦痕が残る。器形や製作技法、胎土・焼成等の特徴から、TK216型式段階以前の陶邑産と推定される。

当時の関東地方においては、陶邑産の須恵器はきわめて貴重な器である。また甕という器種からは、祭祀的な意味合いが想起させられる。この遺物の出土は、第23号土壌を第12号掘立柱建物跡の付属施設とする根拠の一つとなり、建築時の儀式に伴う施設と考えることが妥当と思われる。

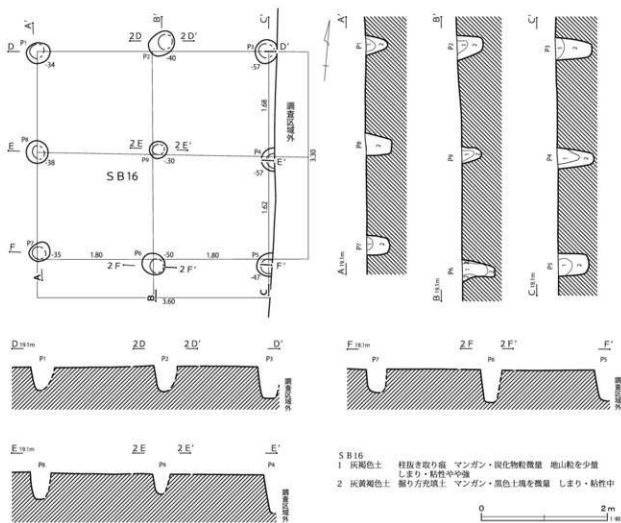
この須恵器大型甕と同一個体の破片は、第4号溝跡・J・I-10グリッドからも出土している。



第191図 第23号土壌出土遺物

第83表 第23号土壌出土遺物観察表(第191図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	甕		12.4		I K	40	普通	灰	陶邑産 ~ TK216 推定最大径20.5cm(大型) 円孔1 胴部に刺突列点文 頸部・胴部に櫛描き波状文 外面自然軸付着		109-1
2	土師器	高坏		4.0		A E H K	15	普通	橙	有稜坏 器面風化		



第192図 第16号掘立柱建物跡

第16号掘立柱建物跡 (第192図)

L-23グリッドに位置し、第3次調査区域東辺際に接する。

調査区域外の東側に延びる可能性もあるが、東辺の柱穴の深さから、桁行2間×梁行2間の総柱建物跡と推測される。南北軸の方位はN-94°-Wを指す。発見された柱穴は9本 (Pit1~9) である。

規模は、南北3.30m×東西3.60m・面積11.88㎡である。柱間距離は、東西方向が1.80mに統一されている。一方、南北方向は南から1.62m (Pit4-Pit5・Pit7-Pit8)、1.68m (Pit3-Pit4・Pit8-Pit1) を測る。柱並びは、各辺の中央柱がわず

かに外方に張り出す傾向にある。

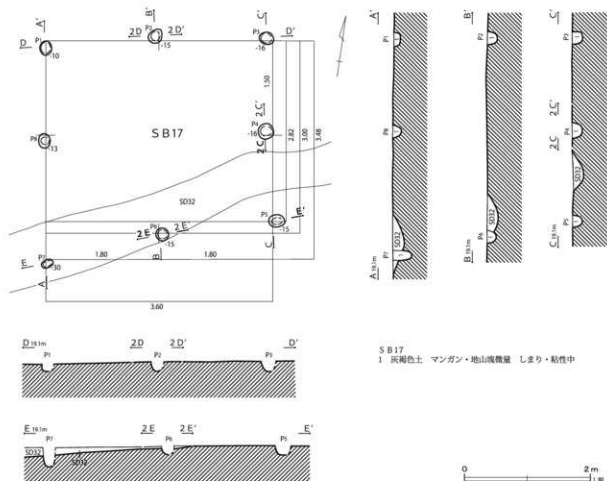
柱穴の平面規模にはバラつきが少ないが、深さは西側の柱穴よりも東側の柱穴の方が深くなる傾向が窺われる。また、中央の束柱 (Pit9) の深さは、他の柱穴よりも浅く約2/3ほどである。上屋構造については、平面径と柱穴の深さの差から、倉庫・高床式の居住建物の判断はできない。

覆土は、上層の柱抜き取り痕に堆積した土層と下層の柱掘り方に充填されていた土層に分層される。

遺物は出土していない。

第17号掘立柱建物跡 (第193図)

L-22グリッドに位置する。第32号溝跡と重



第193図 第17号掘立柱建物跡

複し、覆土の堆積状況から第17号掘立柱建物跡の方が新しい。

桁行2間×梁行2間の側柱建物跡である。軸方位はN-98°-Wを指す。南辺は、他辺に対して方向を違える柱並びである。

規模は、南北2.82~3.48m×東西3.60m・面積11.34㎡である。柱間距離は、東西方向が1.80mと統一されている。南北方向は北側が1.50m、南側が1.32~1.98mを測る。

柱穴の規模は、平面径0.20~0.25m、確認面か

らの深さ0.10~0.16mである。しかし、第32号溝跡と重複するPit7が、他の柱穴に比べて小さく深い。そのため、Pit7は第17号掘立柱建物跡の柱穴ではない可能性もある。その場合は、南北方向2.82~3.00m・面積10.152~10.8㎡と推定される。

覆土は1層である。きわめて規模が小さく、重厚な上屋構造を想定することはできない。

遺物は出土していない。

3. 柱穴列

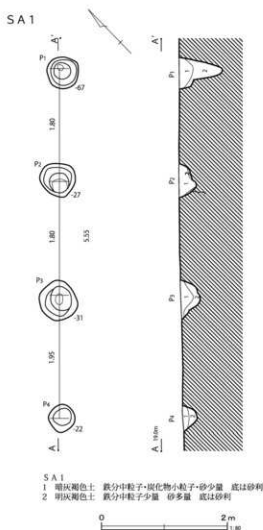
第1号柱穴列 (第194図)

L-15グリッドに位置し、4本の柱穴が一列に並ぶ。周囲の規則的な位置に柱穴がないため、柱穴列として報告する。軸方位はN-44°-Eを指す。

柱穴の柱間距離は、北から Pit1-Pit2=1.80m、Pit2-Pit3=1.80m、Pit3-Pit4=1.95mを測り、合計5.55mとなる。南側の同間隔の位置に柱穴が存在しないことから南方へは延びない。しかし、北側は調査区域外にあるため、延長される可能性が残る。

柱穴の平面規模はPit4がやや小さいものの、均一的である。深さはPit1が他の柱穴の2倍ほどの深さを持つ。覆土は2層に分層されるが、柱痕は確認されていない。

遺物は出土していない。



第194図 第1号柱穴列

4. 土壇

本報告が対象とする城敷遺跡南半部から発見された土壇は、32基（第1～15・17～29・39～42号土壇）である。多くは住居跡・掘立柱建物跡の隙間に分布し、隣接するこれらの遺構との関連が注目される。

第9号土壇 (第195図)

A-2・3グリッドに位置する。第14・15号住居跡と重複する。覆土の堆積状況では第14号住居が新しい。

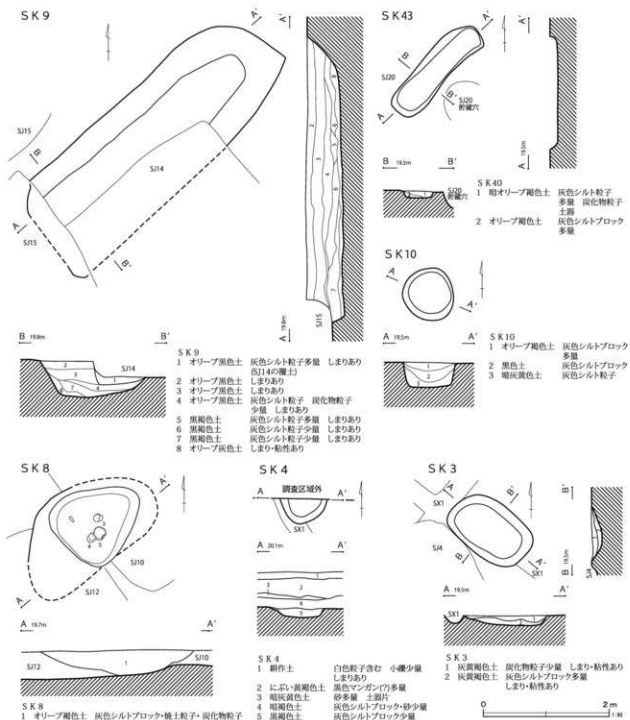
平面形態は長方形である。規模は、長軸長4.65m + a、短軸長1.70m、確認面からの深さ

0.58mを測る。長軸方位はN-52°-Eを指す。底面は短軸方向が凹面を形成し、壁は45~60°程の傾斜をもって緩やかに立ち上がる。覆土はオリブ黒色土の上層（2~4層）と黒褐色土の下層（5~8層）に分層される。いずれも自然堆積と観察される。

遺物は台付甕の括れ部片が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期に相当すると思われる。

第43号土壇 (第195図)

B-8グリッドに位置する。重複する第20号住居跡よりも新しい。



第195図 土坑 (1) 第9・43・10・8・4・3号土坑

平面形態は長方形で、長軸長1.82m、短軸長0.50m、第21号住居跡床面からの深さ0.13mを測り、長軸方位はN-46°-Eを指す。底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。

第10号土坑 (第195図)

A-9グリッドに位置し、重複する遺構はない。

平面形態は円形で、長軸長0.85m、短軸長0.80m、確認面からの深さ0.40mを測る。長軸方位はN-35°-Wを指す。底面が平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

第8号土坑 (第195図)

A-10グリッドに位置し、第10・12号住居跡

と重複する。覆土の堆積状況や出土遺物の特徴から、2軒の住居跡よりも新しい。

重複する第10・12号住居跡の調査中に把握された土壌であり、明確な平面形態は捉えられていない。断片的な状況から、楕円形に近い形状と推定される。規模は、覆土の堆積範囲から長軸長2.45m、短軸長1.33mと計測される。掘り方は中央部が深く、その周囲にテラス状の上段部がまわる。確認面からの深さは中央部0.40m、上段部東側0.18m、上段部西側0.29mを測る。長軸方位はN-47°-Eを指す。

遺物は中央部の掘込み部から出土し、環類に口縁が小さく外反する鉢タイプと北武蔵型の坏蓋模倣坏、胴部に丸をもつ中型甕、砥石が出土している。銭塚・城敷Ⅳ期古段階に想定される。

2の砥石は、角棒状の各面に使用痕がみられる。長さ8.6cm、幅3.3cm、厚さ3.3cm、重さ163.6gで、石材はチャートである。(No1/図版110-1)

第4号土壌 (第195図)

A-12グリッドに位置し、北半部は調査区域外にある。第1号性格不明遺構と重複する。

平面形態は、円形もしくは楕円形と推定される。規模は、東西長0.75mを測り、南北長0.40mが検出されている。掘込みが浅く、確認面からの深さは0.14mである。

第3号土壌 (第195図)

A-12グリッドに位置する。第4号住居跡・第1号性格不明遺構と重複する。

平面形態は隅丸長方形で、長軸長1.35m、短軸長0.87m、確認面からの深さ0.16mを測る。底面は長軸方向では平坦であるが、短軸方向は凹面を呈し、そのまま壁も立ち上がる。長軸方位はN-50°-Wを指す。

第2号土壌 (第196図)

A-11・12グリッドに位置し、現水路によって一部を削平されている。第1号性格不明遺構と重複する。

平面形態は、長軸がきわめて長い台形である。長軸長5.50m、短軸長0.62~1.44mを測る。長軸方位はN-52°-Wを指す。確認面からの深さが0.28mで、平面規模に対して浅い平坦な土壌である。

第7号土壌 (第196図)

A-12グリッドに位置し、南半部が調査区域外にある。第1号性格不明遺構と重複する。

平面形態は、楕円形もしくは隅丸方形である。長軸方位はN-91°-Wを指す。規模は、長軸長が3.47mを測り、短軸長は1.13mが検出されている。底面が平坦な浅い土壌で、確認面からの深さは0.10mである。

遺物は、単口縁の台付甕が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期に相当する。

第5号土壌 (第196図)

A-12グリッドに位置し、北半部が調査区域外にある。

平面形態は、長軸を南北方向にもつ楕円形と推定される。検出された長軸長0.45m、短軸長0.50m、確認面からの深さ0.55mを測る。底面は平坦で、東から西に傾斜する。覆土は二層に分層され(5・6層)、自然堆積と観察される。

第1号土壌 (第196図)

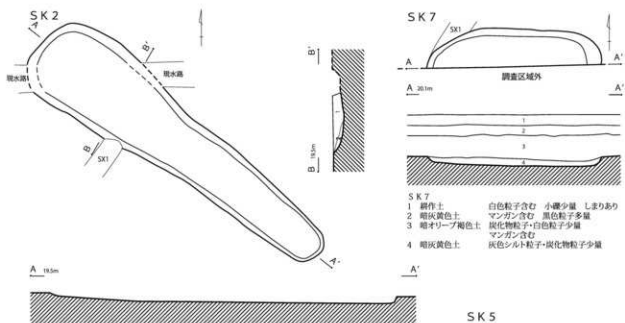
A-13グリッドに位置する。現水路によって一部を削平され、北端部は調査区域外にある。第3号住居跡と重複する。

平面形態は不整形で、長軸方位がN-28°-Wを指す。長軸長2.13m、短軸長2.05m、確認面からの深さ0.38mを測る。壁はわずかに外傾するが、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。覆土は二層に分層され、壁際から埋没し始めた自然堆積状況を示している。

遺物は三方に円孔が穿たれた高坏の脚が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期に相当する。

第6号土壌 (第196図)

A-13グリッドに位置し、重複する第13号住



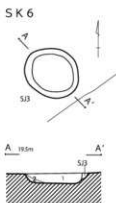
SK 2
 1 灰黄褐色土 炭化物粒子少量 しまり・粘性あり
 2 灰黄褐色土 灰色シルトブロック多量 しまり・粘性あり

SK 7

SK 7
 1 耕作土 白色粒子含む 小礫少量 しまりあり
 2 暗灰黄色土 マンガン含む 黒色粒子多量
 3 暗オリーブ褐色土 炭化物粒子・白色粒子少量
 4 暗灰黄色土 灰色シルト粒子・炭化物粒子少量



SK 1
 1 黒褐色土 炭化物粒子含む 粘性あり
 2 黒褐色土 灰色シルトブロック・砂少量 粘性あり



SK 6
 1 灰黄褐色土 砂少量 しまりあり
 2 オリーブ褐色土 砂少量 粘性あり

SK 5
 1 耕作土 白色粒子含む 小礫少量 しまりあり
 2 濃い黄褐色土 黒色マンガンの多量
 3 暗褐色土 灰色シルト粒子少量 白色細粒子・灰色砂質シルト粒子少量
 4 暗褐色土 炭化物粒子極少量 灰色砂質シルトブロック多量
 5 灰黄褐色土 灰色砂質シルトブロック
 6 黒褐色土 灰色シルトブロック少量

0 2m

第196図 土壌(2) 第2・7・1・6・5号土壌

居跡よりも新しい。

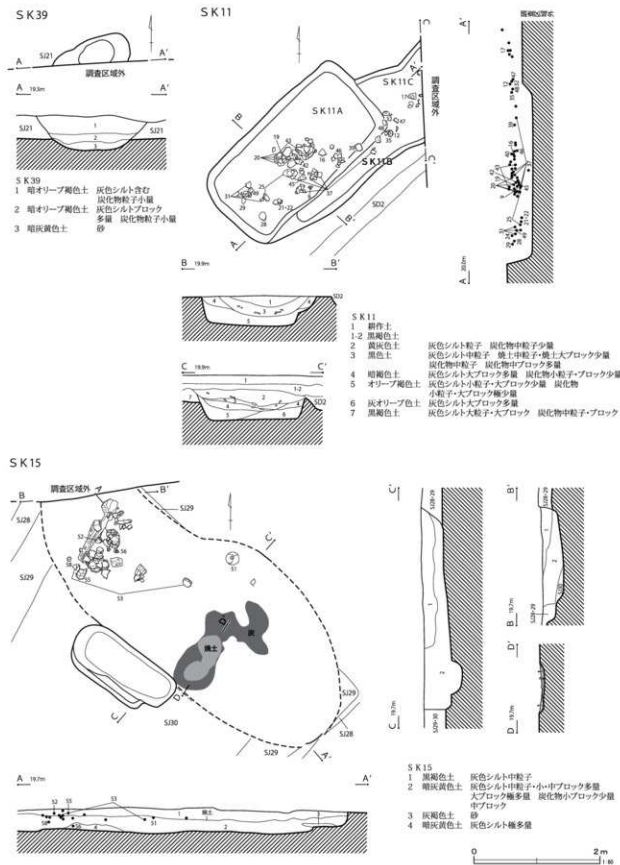
平面形態は、長短軸長がわずかに異なる円形である。長軸長0.90m、短軸長0.78m、確認面からの深さ0.16mを測る。長軸方位はN-45°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、壁は外傾気味に立ち上がる。覆土は自然堆積で、西側から埋没していった状況が観察できる。

第39号土壌(第197図)

A-14・B-14 グリッドに位置し、南半部は

調査区域外にある。覆土の堆積状況から、重複する第21号住居跡よりも新しい。

平面形態は、楕円形もしくは隅丸長方形と推定される。検出された規模は、長軸方向が1.22m、短軸方向が0.46mである。確認面からの深さは0.55mを測り、長軸方位はN-86°-Eを指す。底面は緩やかな窪み状で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。覆土は三層に分層され、自然堆積と観察される。



第197図 土塊(3)第39・11・15号土塊

第11号土壙 (第197図)

B-3グリッドに位置する。1基の土壙として調査を行ったが、平面形態やB-B'とC-C'の合致しない不自然な土層堆積状況から、2基もしくは3基の土壙が重複しているものと考えられる。平面形態の様相から、ほぼ同規模の3基の土壙が連続していることが予想される。範囲は、長さ4.05m×幅1.88mにおよんでいる。

3基の土壙のうち、全体像が把握できるのは西側の土壙(SK11A)である。長方形の平面形態が捉えられる。残る中央部(SK11B)は長軸方向のプランが不明確、東側(SK11C)は大半が調査区域外にある。

SK11Aの規模は、長軸長2.92m、短軸長1.50mを測り、長軸方位はN-45°-Eを指す。底面は平坦で、壁は外傾気味に立ち上がる。SK11B・SK11Cも、ほぼ同規模と推測される。

覆土の堆積状況では、B-B'がSK11AとSK11Bの土層断面、C-C'がSK11Cの土層断面となる。B-B'では、SK11Aの方がSK11Bよりも新しい傾向が窺われるものの、明確に分層できない。また、SK11CとSK11A・SK11Bとの新旧関係も明確にすることができない。土層断面から計測される各土壙の深さは、SK11Aが0.48m、SK11Bが0.26m、SK11Cが0.48mである。

遺物は、3基の土壙すべてから出土している。出土位置からは、21・22・24・28・29・31・37・40・42・43・45(取り上げNo1~48・52)がSK11Aに、32・35(取り上げNo49~51・53~61)がSK11B・SK11Cに相当する。しかし、接合関係等から明確に分割することは難しい。

SK11Aでは中央部に集中し、若干が西壁側に散在する。SK11B・SK11Cでは、集中することなく満遍なく広がっている。いずれの遺物も床面からやや浮いた状態で出土しており、最下層の5・6層の堆積後、埋没したものと推定される。そのため、出土遺物と第11号土壙群は直結する関

係が直ちに成立し難く、周囲の遺構との関係も注視する必要がある。特に発見された須恵器が5世紀代の陶邑産であり、出土状況については多々の可能性を考えながら、対処する必要がある。

9は須恵器甕の口縁部片である。器壁の薄い、シャープなつくりである。口縁部下端の稜は鋭利で、頸部の外面に櫛描き波状文が施文されている。口縁部は僅かな凹みをもつが、両端にはしっかりとした稜をもつ。内面には焼成時の自然釉が着している。器形・製作技術・胎土・焼成等の特徴から、陶邑産のON231型式-TK208型式に推定される。

10は須恵器甕の口縁部片である。11~20までの甕とは、別個体と推定される。口唇部は丸く肥厚し、直下に断面三角形の突帯が巡る。内外面ともに、焼成時の自然釉が付着している。器形や製作技法、胎土・焼成等から陶邑産のTK216型式段階のものと考えられるが、口縁部の端面にやや新しい要素も認められるため、TK208型式段階まで下がる可能性もある。

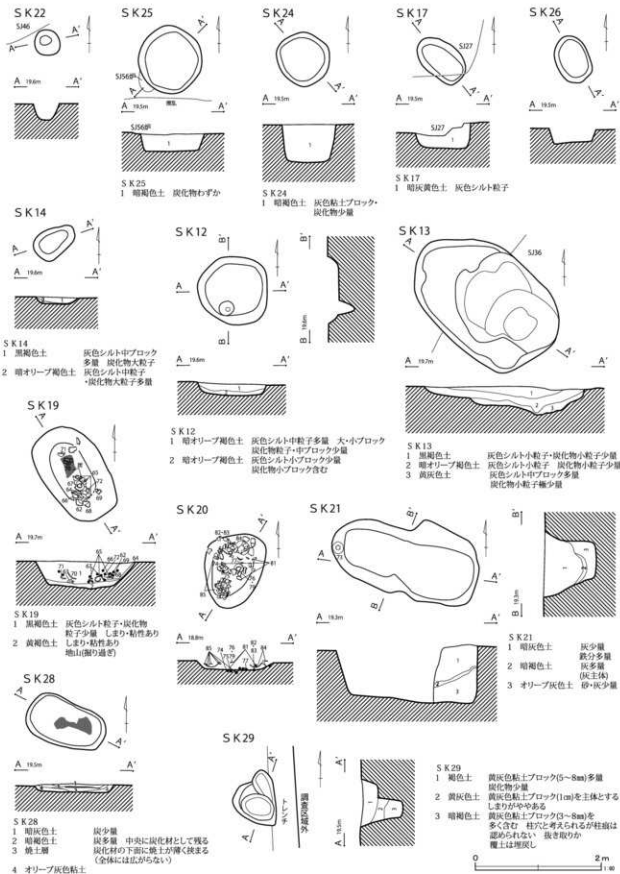
11~20は同一個体と推定される須恵器の甕片である。外面には平行タタキが残るが、対応する内面の当て具痕はナデ消されている。外面には白色線状の火禿痕がみられる。また、20の底部付近の破片の内面には、白色粉末状物質が線上に付着している。製作技法や胎土・焼成等の特徴から、陶邑産のTK216型式前後と推定される。

46・47は石錘と思われる。

46は裏面が剥がれ、左右両側とも欠損する。長さ6.85cm、幅5.55cm、厚さ0.8cm、重さ44.4g、石材は絹雲母片岩である。(No45/図版112-4)

47も裏面が剥がれ、右上部が欠損する。長さ5.1cm、幅8.45cm、厚さ0.9cm、重さ52.1g、石材は絹雲母片岩である。(No54/図版112-5)

48は、自然礫を未加工のまま使用した砥石もしくは磨石と思われる。正面中央部と裏面上部が欠損する。長さ9.6cm・幅7.6cm・厚さ5.75cm、重さ



第198図 土壌(4)第22・25・24・17・26・14・12・13・19・20・21・28・29号土壌

397.6gである。石材は安山岩と思われる。(No 52 / 図版112-6)

49は、用途不明の石製品である。上部・右側縁部欠損、長さ8.55cm、幅7.3cm、厚さ2.65cm、重さ94.1gである。石材は安山岩と思われる。(No4 / 図版112-7)

第15号土壌 (第197図)

E-6グリッドに位置し、第28・29・30号住居跡と重複する。当初は、第16号土壌と重複する2基の土壌として調査を行ったが、明確に分割することができないため、1基の土壌として報告する。覆土の堆積状況から、重複する3軒の住居跡よりも新しい。

重複する第28・29・30号住居跡の調査中に検出された土壌で、明確な平面プランは把握されていない。観察された土層断面から、長軸方位をN-45°-W方向に向け、楕円形もしくは隅丸長方形と推定される。また、北端の一部は、調査区域外にある。検出された範囲は、長軸方向5.36m、短軸方向3.18mにおよぶ。底面は比較的平坦で、確認面からの深さ0.24~0.38mを測る。

南西辺に沿って、長軸長1.38m、短軸長0.81m、深さ0.2mの土壌状の掘込みが所在する。これが、第15号土壌に伴う施設か、重複する住居跡に伴う施設かの判断は困難である。また、南半中央の底面付近から、焼土と炭の広がり確認されている。土壌状の施設と同様に、第15号土壌に伴う施設か、重複する住居跡の炉・カマドの痕跡かの特定はできない。

遺物は、北半部から集中して出土し、炭化した木材も発見されている。小振りな埴・有稜屈折脚の高坏・口が大きく開く平底鉢・胴部に丸みをもつ甕と滑石製紡錘車がある。銭塚・城敷Ⅲ期古段階に相当する。

58の滑石製紡錘車は、上面が狭く、稜も不明瞭である。全面に細かに研磨痕を残す。上径2.08cm・下径5.47cm・厚さ0.92cm・孔径0.9cm、重さ

34.0gである。(No9 / 図版113-3)

第22号土壌 (第198図)

F-3グリッドに位置し、第46号住居跡に近接する。

平面形態は円形で、長軸方位はN-35°-Wを指す。長軸長0.43m、短軸長0.40m、確認面からの深さ0.25mを測る。平面・垂直規模ともに小さい。

第25号土壌 (第198図)

J-10グリッドに位置する。第56号住居跡が跡と重複するが、新旧関係は新しい。

平面形態は、円形もしくは隅丸方形である。南北長1.20m、東西長1.20m、第56号住居跡の床面からの深さ0.27mを測る。南北軸方位はN-38°-Eを指す。底面は平坦で、壁はやや外傾気味に直立する。

第56号住居跡の炉と重複するが、住居跡北壁中央付近の壁際に位置することから、第56号住居跡の付属施設の可能性もある。しかし、近接する位置に規模の近似する第24号土壌が存在していることから、土壌として調査・報告した。

第24号土壌 (第198図)

F-5グリッドに位置する。

平面形態は、円形もしくは隅丸方形である。長軸長0.85m、短軸長0.80m、確認面からの深さ0.60mを測る。長軸方位はN-42°-Wを指す。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。近接する第25号土壌と酷似し、両者の関連が想定される。

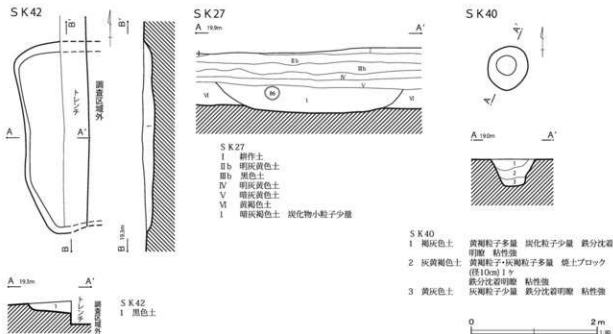
第17号土壌 (第198図)

F-6グリッドに位置し、第27号住居跡南東隅と重複する。新旧関係は不明である。

平面形態は楕円形で、長軸方位はN-48°-Wを指す。長軸長0.87m、短軸長0.56m、確認面からの深さ0.40mを測る。底面はやや起伏が見られるが、概ね平坦である。壁はほぼ直立する。

第26号土壌 (第198図)

F-7グリッドに位置し、第32号住居跡に近接



第199図 土壌 (5) 第42・27・40号土壌

する。

平面形態は楕円形で、長軸方位はN-18°-Wを指す。長軸長0.79m、短軸長0.53m、確認面からの深さ0.18~0.25mを測る。底面は中央部がやや盛り上がるものの、ほぼ平坦である。壁は外傾気味に立ち上がる。

第14号土壌 (第198図)

E-7グリッドに位置し、重複する遺構はない。

平面形態は不整な隅丸長方形で、長軸方位はN-54°-Eを指す。長軸長0.70m、短軸長0.46mと規模は小さい。浅い扁平な掘込みで、確認面からの深さは0.10mほどである。

第12号土壌 (第198図)

E-7グリッドに位置し、重複する遺構はない。

平面形態は隅丸長方形で、長軸方位はN-0°-Eを指す。長軸長1.09m、短軸長1.09m、確認面からの深さ0.18mを測る。底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。南西隅には径0.23m、床面からの深さ0.24mのピットが掘り込まれている。このピットが第12土壌に伴う施設か、周囲に点在するピットと同様のものが掘り込まれているものかは

判断できない。

第13号土壌 (第198図)

E-8グリッドに位置し、第36号住居跡と重複する。覆土の堆積状況から、第13土壌は第37号住居跡よりも新しい。

平面形態は楕円形で、長軸方位はN-56°-Wを指す。長軸長3.52m、短軸長1.62mを測る。底面は西から東に向かって階段状に深くなり、確認面からの深さは0.12~0.45mほどである。覆土の土層観察から、所謂レンズ状の土層堆積が確認できる。

第19号土壌 (第198図)

E・F-10グリッドに位置し、重複する遺構はない。

平面形態は隅丸長方形で、長軸方位はN-33°-Wを指す。長軸長1.60m、短軸長1.00m、確認面からの深さ0.44mを測る。底面は中央にやや凹みが見られるが概ね平坦で、壁は大きく外傾しながら立ち上がる。

遺物は床面付近から出土し、特に南半部の集中密度は高い。柱状脚の高坏・埴・鉢形の甌・埴口

緑の台付甕がある。城敷銭塚Ⅱ期、反町Ⅱ-2に相当する。

第20号土壌 (第198図)

F-15グリッドに位置し、第4号溝跡(大溝跡)東岸の傾斜面に所在する。

平面形態は楕円形で、長軸方位はN-30°-Eを指す。長軸長1.23m、短軸長0.95m、確認面からの深さ0.13mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は、高坏・小型器台・単口縁台付甕が出土し、銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-1~3に相当する。また、80は流れ込んだ遺物で、須恵器甕の胴部片である。外面には平行タキ、対応する内面の当て具痕はナデ消されている。器面調整技法や胎

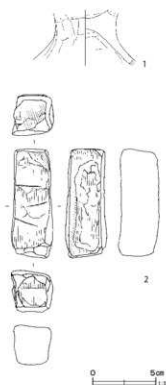
土・焼成等から、5世紀代の陶邑産と推定される。

第21号土壌 (第198図)

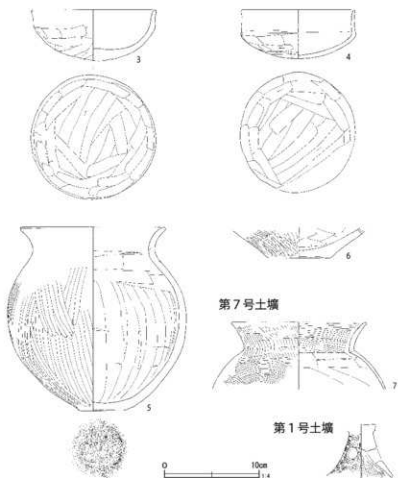
F-15・16グリッドの第4号溝跡(大溝跡)東岸斜面肩部に位置する。

平面形態は隅丸長方形で、第4号溝跡の落ち込み部で形状が変化している。長軸方位はN-73°-Wを指す。長軸長2.36m、短軸長1.25m、確認面からの深さ0.93mを測る。しっかりと掘り込みをもつ土塚で、覆土の中間に薄く灰を主体とした層が堆積している。底面は、中央付近にわずかな凹みが認められるが、ほかは平坦である。長軸方向の西壁・東壁はほぼ直立する。短軸方向の壁は底面から直立するが、中段付近にごくゆるい稜をもつ断面葉研状の形態となっている。

第9号土壌



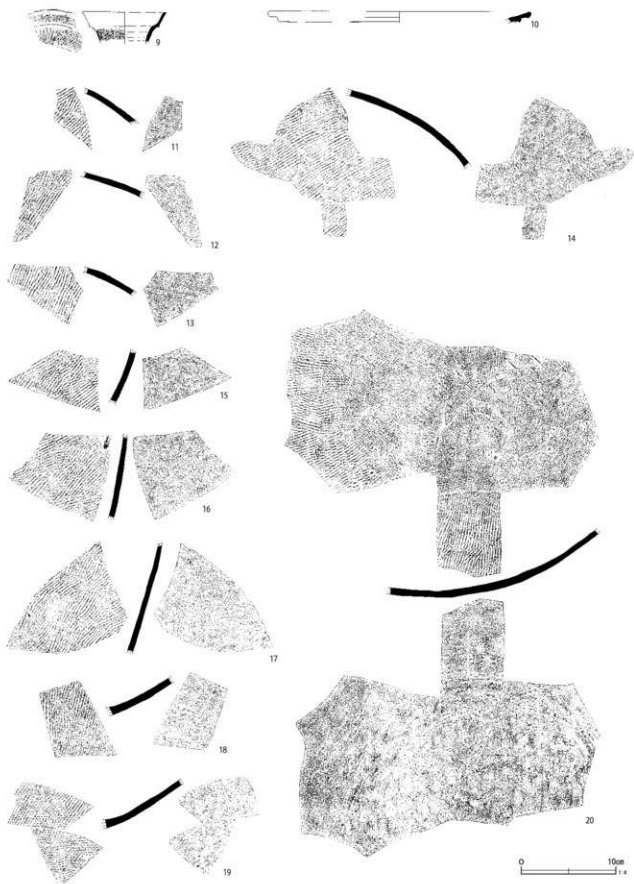
第8号土壌



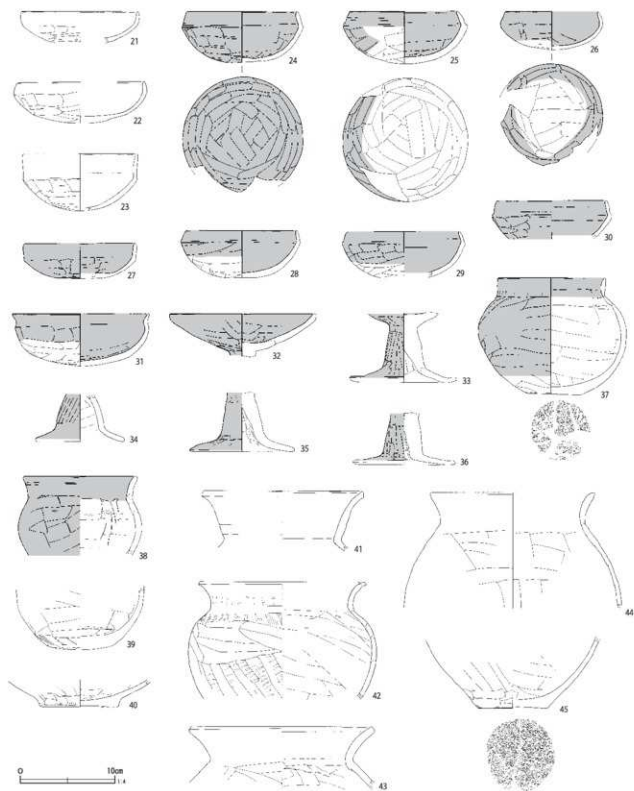
第7号土壌

第1号土壌

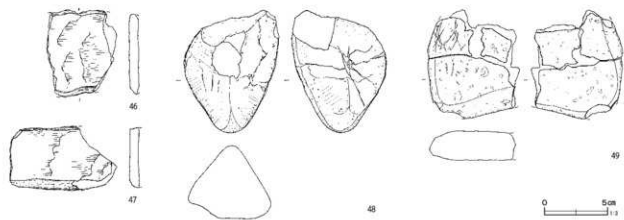
第200図 土壌出土遺物(1)



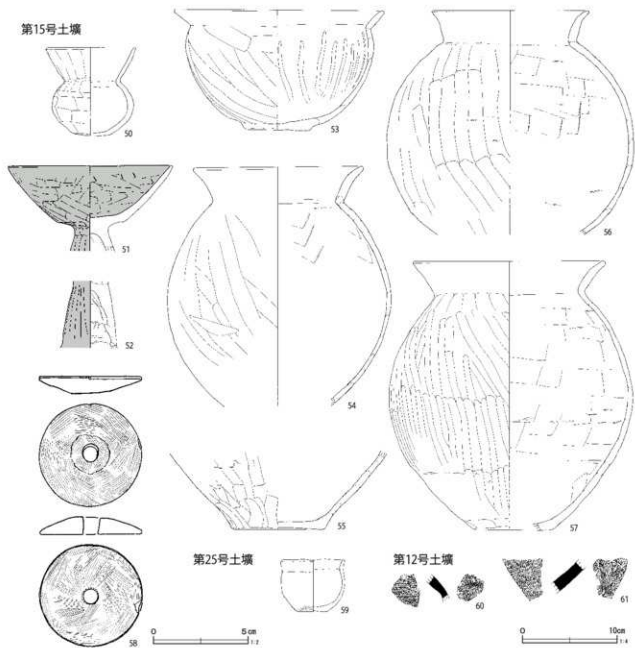
第201图 土壤出土遺物（2）



第202图 土城出土遺物 (3)



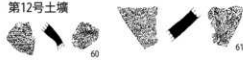
第15号土壙



第25号土壙

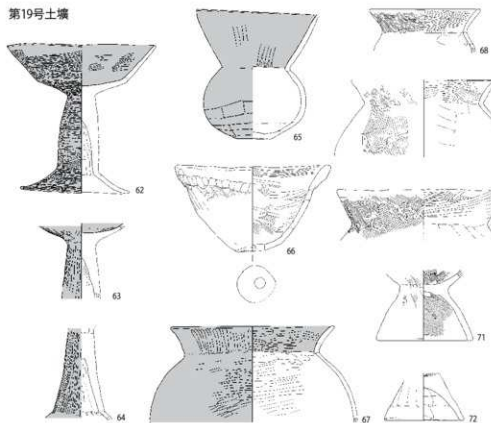


第12号土壙

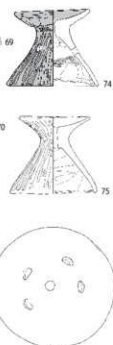


第203图 土壙出土遺物 (4)

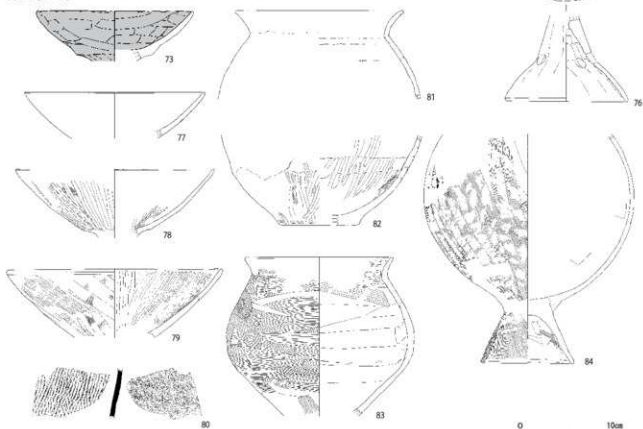
第19号土坑



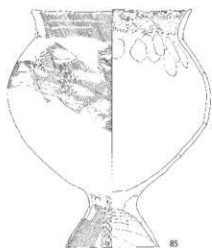
第20号土坑



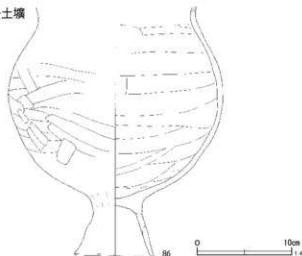
第21号土坑



第204图 土坑出土遗物(5)



第27号土壌



第205図 土壌出土遺物(6)

遺物は、赤彩が施された高環の有稜環が出土している。銭塚・城敷Ⅲ期に相当すると思われる。

第28号土壌 (第198図)

E・F-18グリッドに位置し、周囲にはピットが密集する。

平面形態は隅丸長方形で、長軸方位をN-66°-Wに向ける。長軸長1.24m、短軸長0.72m、確認面からの深さ0.13mを測る。底面は平坦で、壁は外傾する。

覆土は自然堆積で、壁際から堆積した様相が捉えられる。覆土中層には、炭化物が広く堆積し(2層)、また炭化物層の直下には薄い焼土層(3層)が形成されている。

第29号土壌 (第198図)

F-18グリッドに位置し、周囲にはピットが密集する。東半部は発掘調査時の排水溝によって削平されている。

平面形態は不整形で、3本以上のピットが重複したような掘り込みを持つ。周囲に密集するピットの重複も考えられるが、覆土の堆積状況では単一の遺構と読み取ることができる。南北長0.86mを測り、東西長は0.65mが残存する。二段に掘り込まれた掘り方をもち、確認面からの深さは0.25~0.65mである。

第42号土壌 (第199図)

O-10グリッドに位置し、東半部は調査時のトレンチによって削平されている。

平面形態は長方形で、長軸方位はN-4°-Wを指す。長軸長3.07m、確認面からの深さ0.28mを測る。短軸長は0.73mが残存する。平面規模に対して浅い、フラットな土壌である。

第27号土壌 (第199図)

第4号溝跡第7地点東岸のN-15・16グリッドに位置する。調査区域の壁面に検出された土壌で、平面形態・規模は不明である。掘り込みは深く、深さ0.43mを測る。しかし、遺構確認面から遙か上方から掘り込まれ、遺構確認面では底面付近の掘り込みが辛うじて確認されるにすぎない。

遺物は、単口縁の台付甕が出土している。銭塚・城敷Ⅱ期、反町Ⅱ-3に相当する。

第40号土壌 (第199図)

第3次調査区域から発見された土壌で、L-22グリッドに位置する。第110号住居跡北西コーナー付近に近接する。

平面形態は南北にやや長い円形で、主軸方位をN-5°-Eに向ける。長軸長0.72m、短軸長0.62m、確認面からの深さ0.34mを測る。底面は平坦で、壁は外反気味に立ち上がる。

第84表 土壌出土遺物観察表 (第200~205図)

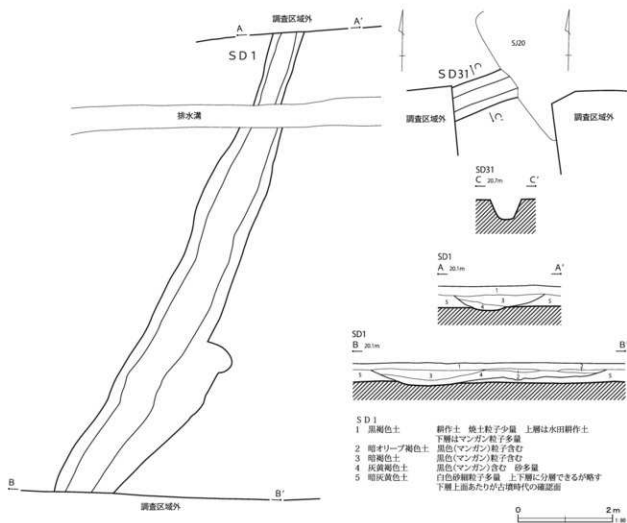
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	白付甕		5.9		EHI	30	普通	橙	SK9 煮沸痕		
3	土師器	坏	12.9	5.4		CEGHI	90	普通	橙	SK8 口縁部外反 二次的被熱 器面風化 No2		109-2
4	土師器	坏	12.0	5.1		ACHIK	75	普通	にぶい橙	SK8 坏蓋模倣 二次的被熱 器面風化 No4		109-3
5	土師器	甕 (15.1)	19.3	4.8		EHI	40	普通	橙	SK8 球胴形 底部木葉痕 二次的被熱顕著 No3		109-4
6	土師器	壺		3.2	(6.8)	ACHI	30	普通	灰黄褐	SK8 基底部残痕		
7	土師器	甕 (14.3)	7.1			ACEHIJ	20	普通	にぶい褐	SK7 胴張 煤付着 No4-6		
8	土師器	高坏		5.9		EHI	80	普通	橙	SK1 坏部を意図的に打ち欠き(支脚転用か) 器面風化 赤彩? 円形3孔 No1		
9	須恵器	甕 (8.9)	3.4			IK	20	良好	暗灰	SK11 陶色産 ON231~TK208 波状文 自然釉付着 No13		110-2
10	須恵器	甕口縁	(27.6)	1.2		IK	5	普通	灰	SK11 陶色産 TK216~(TK208) 自然釉付着 断面三角の突帯		110-3
11	須恵器	甕		3.9		I	5	普通	灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半)		110-4
12	須恵器	甕		2.8		IK	5	普通	暗緑灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半) No55		110-4
13	須恵器	甕		3.1		IK	5	普通	暗オリーブ灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半)		110-4
14	須恵器	甕		8.6		IK	5	普通	灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半) B-2-3Gr		110-4
15	須恵器	甕		5.8		I	5	普通	灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半)		110-5
16	須恵器	甕		9.1		IK	5	普通	オリーブ灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半) No41		110-5
17	須恵器	甕		11.9		I	5	普通	灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半) No57		110-5
18	須恵器	甕		4.3		IK	5	普通	オリーブ灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半)		110-5
19	須恵器	甕		5.4		IK	5	普通	オリーブ灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半) No36		110-5
20	須恵器	甕		7.2		IK	5	普通	黄灰	SK11 11~20同一個体 陶色産 TK216(5世紀前半) No22-24-35-36		110-6
21	土師器	坏 (12.4)	3.3			EHIK	20	普通	明赤褐	SK11 内埴口縁 二次的被熱 No10		
22	土師器	坏 (13.4)	4.3			ACEHIK	30	普通	明赤褐	SK11 内埴口縁 二次的被熱 No10		112-1
23	土師器	坏 (12.1)	6.0			ACHIK	35	不良	橙	SK11 蓋坏模倣 二次的被熱		
24	土師器	坏 11.8	5.4			EHIK	80	普通	橙	SK11 坏身模倣 赤彩 No2		111-1
25	土師器	坏 11.4	5.6			ACEHIK	80	普通	にぶい橙	SK11 坏身模倣 赤彩 No7-16		111-2
26	土師器	坏 (10.0)	4.0			ACDEHIK	60	普通	灰黄褐	SK11 坏身模倣 赤彩		111-3
27	土師器	坏 (11.8)	3.7			EHI	20	普通	にぶい橙	SK11 坏蓋模倣 赤彩 平底風		
28	土師器	坏 (11.9)	5.0			A E H I J K	55	普通	灰黄褐	SK11 坏身模倣 赤彩 No6		112-2
29	土師器	坏 (12.0)	4.8			ACIK	30	普通	にぶい橙	SK11 坏身模倣 赤彩 No1		
30	土師器	坏 (11.5)	4.1			A E H I K	20	普通	赤	SK11 坏身模倣 赤彩		
31	土師器	高坏 14.5	5.5			EHIK	55	普通	にぶい橙	SK11 比企型坏 赤彩 No3-5-8		112-3
32	土師器	高坏 (15.4)	4.5			CEHIK	40	普通	にぶい橙	SK11 模倣載 赤彩 No53		
33	土師器	高坏		7.3	最大 11.5	BCEIK	60	普通	にぶい褐	SK11 有残坏折脚 赤彩 二次的被熱 風化顕著		
34	土師器	高坏		5.0	9.2	CEHIK	20	普通	にぶい橙	SK11 屈折脚(短脚) 赤彩		
35	土師器	高坏		6.3	10.8	CEHIK	100	普通	橙	SK11 屈折脚 赤彩 No51		
36	土師器	高坏		5.4	(10.8)	ACEIK	60	普通	にぶい橙	SK11 屈折脚 赤彩 支脚転用痕(倒立)?		
37	土師器	鉢	11.3	12.3	5.8	ABCHIK	70	普通	にぶい橙	SK11 口縁部直立 赤彩 底部無調整 No11-16-46-47-49		111-4
38	土師器	鉢 (11.8)	8.2			ACDEHIK	20	普通	にぶい褐	SK11 赤彩? 二次的被熱		
39	土師器	鉢		6.7	7.2	ACHIK	70	普通	にぶい橙	SK11 底部ヘラケズリ No48		
40	土師器	甕		2.9	8.3	ACEHK	40	普通	明赤褐	SK11 胴張 煮沸痕 No29		
41	土師器	壺 (17.0)	6.3			CEHKL	20	普通	橙	SK11 段退化 二次的被熱		
42	土師器	甕 (17.3)	12.5			CHJ	45	普通	明黄褐	SK11 球胴形 煮沸痕 煤付着 No37		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
43	土師器	甕	(19.2)	6.6		D E H I	30	普通	橙	SK11 胴張 No25-39		
44	土師器	甕	(17.0)	12.3		C E H I K	20	普通	にぶい橙	SK11 胴張 煮沸痕 風化顕著		
45	土師器	甕		7.6	7.3	H I K	50	普通	にぶい橙	SK11 胴張 煮沸痕 煤付着 底部木炭痕 No14		
50	土師器	用	9.3	9.2	3.6	C E I K	100	普通	にぶい橙	SK15 平底 二次的被熱の影響が顕著 赤彩?	112-8	
51	土師器	高坏	17.4	9.0		A C E H I K	95	普通	にぶい橙	SK15 有椀坏 赤彩 坏内面に黒色タール状付着物 支脚転用痕(倒立) No16	112-9	
52	土師器	高坏		7.1		C E I K	90	普通	赤褐	SK15 (組折脚) 支脚転用痕? No4		
53	土師器	鉢	22.1	12.8	6.6	A I J K	85	普通	にぶい橙～褐灰	SK15 二次的被熱 内面暗文状のナデ No10-18	113-1	
54	土師器	甕	17.6	25.3		A H I K	60	普通	にぶい橙～橙	SK15 胴張 煮沸の影響が顕著		
55	土師器	壺		8.4	9.6	E H I J K	30	普通	にぶい黄橙	SK15 底部ヘラケズリ(一部木炭痕) No11		
56	土師器	甕	(16.4)	23.7		E I J K	40	普通	明赤褐	SK15 球胴形 煮沸痕顕著 No12	113-2	
57	土師器	甕	20.0	28.4	(8.0)	C D E H I K	65	普通	にぶい黄橙	SK15 球胴形 煮沸の影響が顕著		
59	土師器	小型瓶	(6.4)	5.5	3.2	A E H I K	70	普通	にぶい黄橙	SK25 口縁部外反 平底 No3	113-4	
60	須恵器	提瓶		2.3		I J	5	良好	褐灰	SK12 南北企産		
61	須恵器	甕		3.3		A I K	5	良好	灰白	SK12 南北企産		
62	土師器	高坏	15.8	15.6	11.2	A E H I J K	90	普通	にぶい橙	SK19 有椀坏組折脚 赤彩 ミガキ仕上げ No19	113-5	
63	土師器	高坏		7.6		A C E I J K	80	普通	明赤褐	SK19 有椀坏 赤彩 支脚転用痕 No23		
64	土師器	高坏		9.7		A H J	95	普通	橙	SK19 (組折脚) 赤彩 No22		
65	土師器	用	12.8	13.6	3.7	A E H I J K	75	普通	にぶい橙	SK19 平底 赤彩 No7-11-16	113-6	
66	土師器	瓶	16.1	9.1	4.1	A H I	80	普通	橙	SK19 鉢形 孔が中心からズレる 折り返し口縁 煮沸の影響が顕著 No20	113-7	
67	土師器	壺	17.2	10.2		E H I J K	50	普通	にぶい黄橙	SK19 単口縁 二次的被熱 器面剥落 赤彩劣化 No21		
68	土師器	小型甕	(11.6)	4.6		A C I	40	普通	明黄褐	SK19 単口縁 煤付着 No17		
69	土師器	甕	(15.2)	8.1		A E I J K	25	普通	黒褐	SK19 単口縁 煮沸により黒色化 No3		
70	土師器	甕	(18.2)	5.3		A I J	40	普通	明黄褐	SK19 単口縁 煮沸により黒色化 No6		
71	土師器	台付甕		7.4	(10.0)	A C H	25	普通	灰褐	SK19 煮沸痕 No5		
72	土師器	台付甕		5.0	8.3	A E H I J K	70	普通	にぶい黄橙	SK19 頸部円錐形の台部 No15		
73	土師器	高坏	16.5	5.3		E H I J K	90	普通	灰褐	SK21 有椀坏 赤彩 二次的被熱 No1		
74	土師器	甕台	7.7	8.2	9.4	A E H K	90	普通	にぶい橙	SK20 赤彩 円孔2孔×1対=4孔 支脚転用痕? 脚部内面に点々と赤色塗料付着 No7	114-1	
75	土師器	甕台	7.3	8.2	9.0	A E I J K	95	普通	橙	SK20 無孔 支脚転用痕 赤彩? No8	114-2	
76	土師器	甕台		9.1	12.6	A E H I J	90	普通	橙	SK20 赤彩? 円孔2孔×1対=4孔 二次的被熱の影響顕著 No13	114-3	
77	土師器	高坏	(19.0)	4.9		A E H I K	20	普通	橙	SK20 有椀坏 器面風化顕著 No9		
78	土師器	高坏	(21.0)	7.2		A E I	45	普通	橙	SK20 大型有椀坏 二次的被熱 器面風化顕著		
79	土師器	高坏	(22.6)	7.2		E H I	60	普通	にぶい橙	SK20 大型有椀坏 支脚転用痕 No13		
80	須恵器	甕		5.5		I	5	普通	青灰	SK20 陶色産 5世紀代	114-4	
81	土師器	甕	(17.8)	9.5		C E H I K	30	普通	にぶい橙	SK20 胴張 煮沸の影響が顕著 No6-7-13		
82	土師器	甕		9.6	8.0	H I K	70	普通	にぶい黄橙	SK20 胴張 煮沸痕 No4		
83	土師器	台付甕	15.6	16.8		D E H I J K	40	普通	灰褐	SK20 単口縁 煮沸痕 No4	114-5	
84	土師器	台付甕	24.1	9.7		A E I K	50	普通	にぶい橙	SK20 煮沸痕 No11	114-6	
85	土師器	台付甕	16.8	25.2	9.8	A E H I J K	85	不良	明赤褐	SK20 単口縁 煮沸の影響が顕著 No1-10	114-7	
86	土師器	台付甕		26.6	8.0	E H I J K	80	普通	にぶい橙	SK27 単口縁 器面風化顕著 No1	115-1	

5. 溝跡

城敷遺跡第1次・第2次・第3次調査では、合計32条の溝跡が発見されている(第1～3・5～33号溝跡)。このなかで、調査区北半部のZO～ZZグリッドに位置する21条の溝跡(第10～30号溝跡)については、「銭塚Ⅱ/城敷Ⅰ」(第369集)

で報告済みである。よって本報告では、調査区南半部のA～Qグリッドに所在する11条(第1～3・5～9・31～33号溝跡)について報告する。また、第14・15号溝跡は、前報告・本報告地区に跨って検出された。詳細は前報告で行っているた



第206図 溝跡(1)第1・31号溝跡

め、本報告では報告区域内の検出状況・概要について報告する。

第1号溝跡(第206図)

A・B-7グリッドに位置し、重複する遺構はない。南北ともに調査区域外に至る。第1号溝跡の下半部は古墳時代の遺構確認面を削り込み、覆土は自然堆積である。

検出長10.8m、上幅0.56~1.96m・下幅0.28~0.72m、確認面からの深さ0.50~1.17mを測る。走行方位はN-35°-Eを指す。溝底標高は、19.34~19.40mを計測し、溝底には若干のアップダウンはあるが、明確な傾斜がみられない。

遺物は、板碑の破片(第214図1・2)が出土し

ている。

1には、連座とキリークの一部が残存する。長さ11.0cm・幅4.4cm・厚さ1.1cm・重さ78.8gである。石材は緑泥片岩である。(図版115-2)

2には、二条線が残存する。長さ16.8cm幅9.95cm厚さ2.6cm重さ662.4gである。石材は緑泥片岩である。(図版115-3)

第31号溝跡(第206図)

B-8グリッドに位置する。東側が第20号住居跡と重複し、西側が調査区域外にある。

検出長が1.40mと短い。上幅0.65~0.68m・下幅0.28m、確認面からの深さ0.38~0.41mを測る。走行方位はN-67°-Eを指す。溝底標高は

20.01～20.05mを計測し、溝底には明確な傾斜がみられない。

第14・15号溝跡 (第207図)

A-20グリッドに位置する。南北方向に併走する溝跡で、両者とも北端・南端は調査区域外に至る。

第14号溝跡は、検出長5.68m、上幅0.41～0.72m・下幅0.26～0.42m、確認面からの深さ0.07～0.22mを測る。走行方位はN-6°-Eを指す。溝底標高は、北端付近18.89m、中央付近18.96m、南端付近18.88mを計測し、溝底には明確な傾斜はみられない。

第15号溝跡は、検出長5.48m、上幅0.72～1.00m・下幅0.44～0.50m、確認面からの深さ0.04～0.18mを測る。走行方位はN-5°-Wを指す。溝底標高は、北端付近18.91m、中央付近18.94m、南端付近18.93mを計測し、溝底には明確な傾斜はみられない。

第2号溝跡 (第207図)

B・C-3グリッドに位置する。第22号住居跡と重複し、北側が調査区域外に至る。

検出長5.16m、上幅0.20～0.32m・下幅0.10～0.12m、確認面からの深さ0.07～0.13mを測る。走行方位はN-44°-Eを指す。溝底標高は、北端付近が19.4m、第22号住居跡と重複する付近が19.26m計測し、溝底は北から南へ下る。

第3号溝跡 (第207図)

E-10・11、F-10グリッドに位置し、北端が調査区域外に至る。中央付近で第39号住居跡、南端で第37号住居跡と重複する。

検出長10.8m、上幅0.26～0.40m・下幅0.16～0.20m、確認面からの深さ0.13～0.16mを測る。走行方位はN-50°-Eを指す。溝底標高は、北端付近19.10m、中央付近19.20m、第37号住居跡重複する南端付近19.30mを計測し、溝底は南から北へ下る。

第8号溝跡 (第208・209図)

E-17、F-16・17グリッドに位置し、第74・75号住居跡と重複する。北端・南端は調査区域外に至るが、他の調査区域からは第8号溝跡の続きは検出されていない。第4号溝跡(大溝跡)第6地点の東側に併走する大規模な溝跡であるが、深さや住居跡との重複など相違点が多い。

検出長17.2m、上幅6.96～8.40m・下幅2.72～2.90m、確認面からの深さ0.36～0.50mを測る。走行方位はN-23°-Eを指す。溝底標高は、北端付近18.61m、中央付近18.63m、南端付近18.66mを計測し、溝底は南から北に向かってわずかに下る傾向が窺われる。

第9号溝跡 (第208図)

E-17・18グリッドに位置し、北端が調査区域外に至る。

検出長6.3m、上幅0.22～0.54m・下幅0.08～0.30m、確認面からの深さ0.12～0.16mを測る。走行方位はN-34°-Eを指す。溝底標高は、北端付近19.2m、中央付近19.11～19.16m、南端付近19.02mを計測し、溝底は北から南へ下る。

第32号溝跡 (第209図)

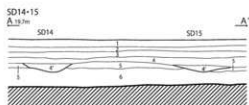
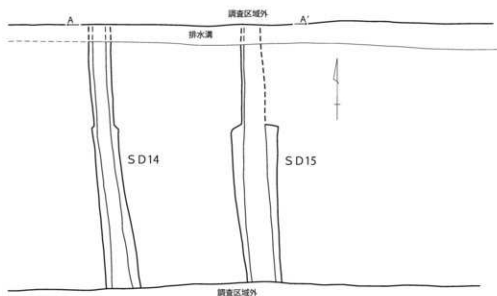
F-18グリッドに位置し、北端・南端ともに調査区域外に至る。

検出長6.8m、上幅0.40～0.88m・下幅0.30～0.74m、確認面からの深さ0.02～0.10mを測る。走行方位はN-65°-Eを指す。溝底標高は19.10～19.12mを計測し、溝底に傾斜はみられない。

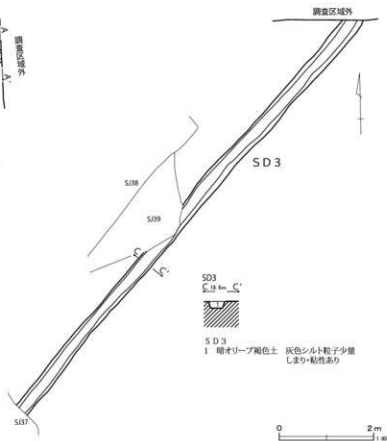
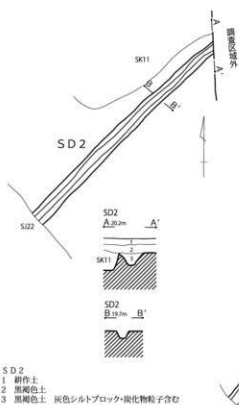
第7号溝跡 (第209図)

J・K-5グリッドに位置し、北端・南端ともに調査区域外に至る。

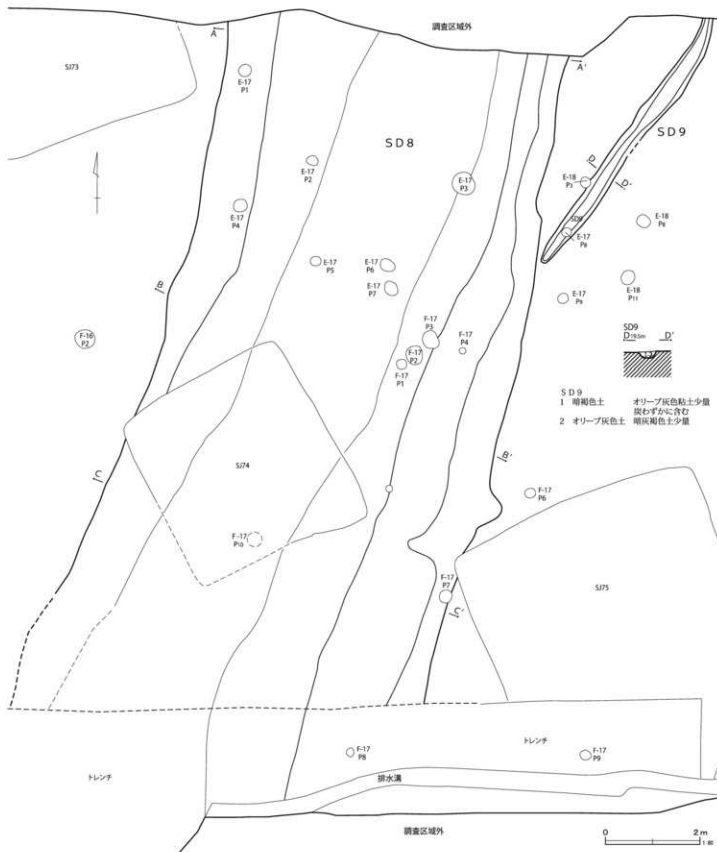
検出長11.8m、上幅2.20～2.48m・下幅0.98～1.32m、確認面からの深さ0.75～0.86mを測る。走行方位はN-35°-Eを指す。溝底標高は、北端付近18.46m、中央付近18.43m、南端付近は18.42mを計測し、溝底は北から南に向かってわ



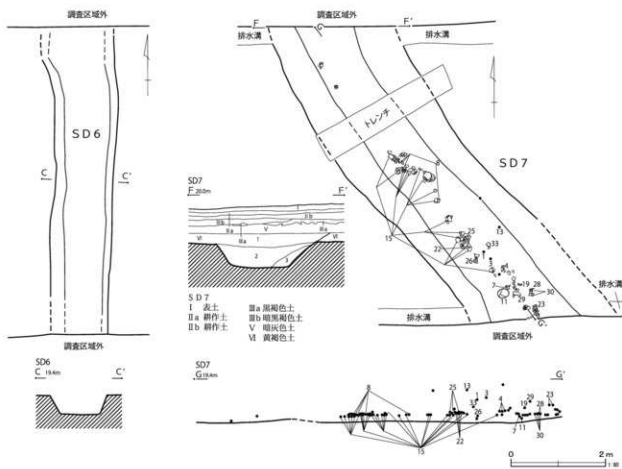
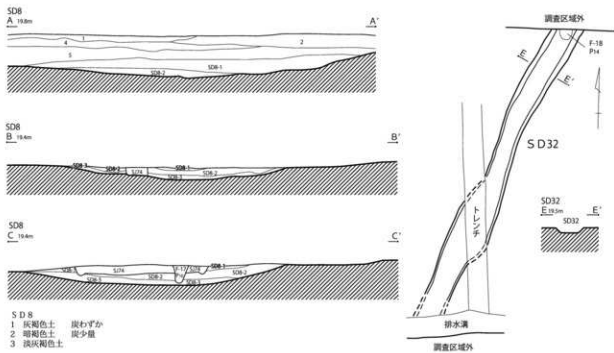
- SD14・15 (A-20グリッド)
- 1 黒耕作土 表土
 - 2 褐色土 炭わすか 鉄分少層
 - 3 暗茶褐色土 炭わすか 鉄分少層
 - 4 暗褐色土 水田面につながる同じような層 5層との境はインボリューションすき込み跡かもしれない SD4に合わせて層が落ち込む
 - 4 暗灰色土 SD14・15の覆土 4層と変わりない 水田の遺構の一部
 - 5 炭灰色土 炭わすか
 - 6 灰白色土 灰色が強い 5層より明るく白く色がぬける



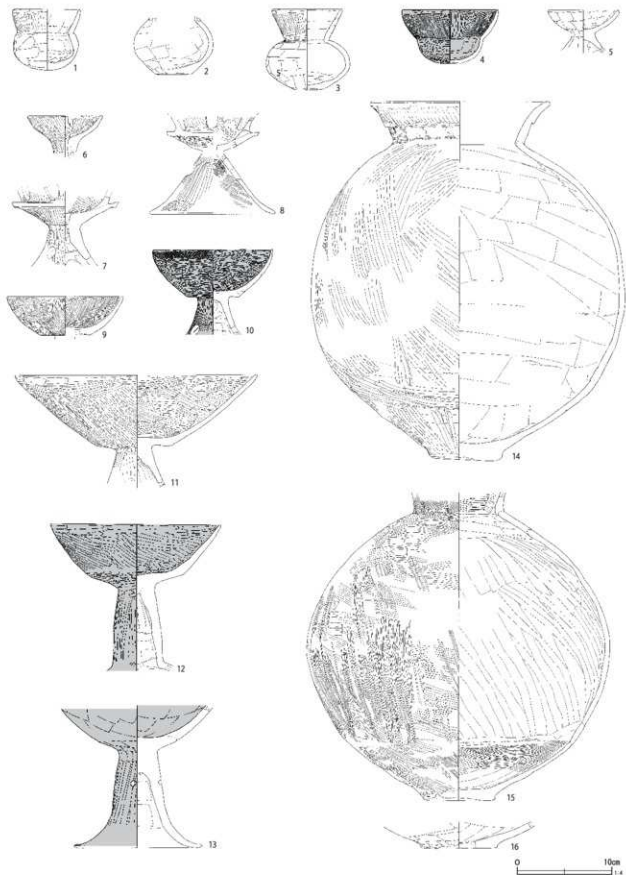
第207図 溝跡(2)第14・15・2・3号溝跡



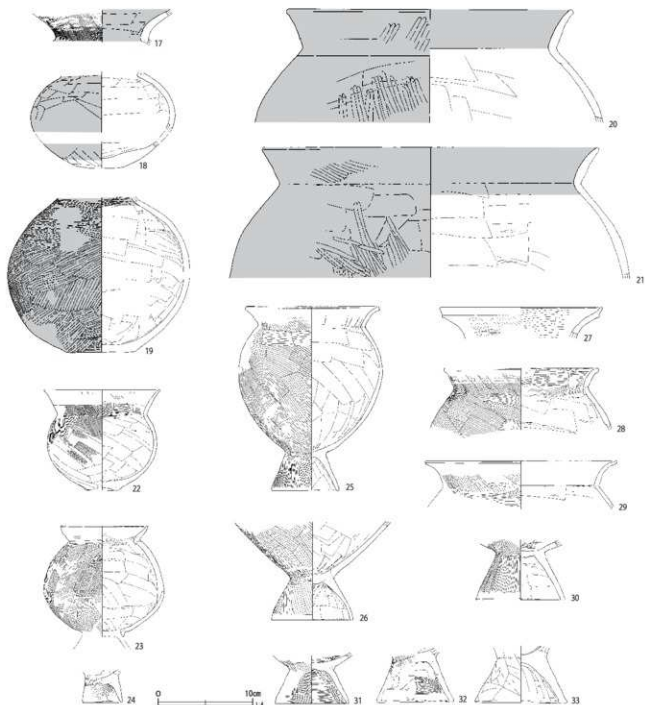
第208図 溝跡(3)第8・9号溝跡



第209図 溝跡(4)第8・32・6・7号溝跡



第210图 第7号沟跡出土遺物(1)



第211図 第7号溝跡出土遺物(2)

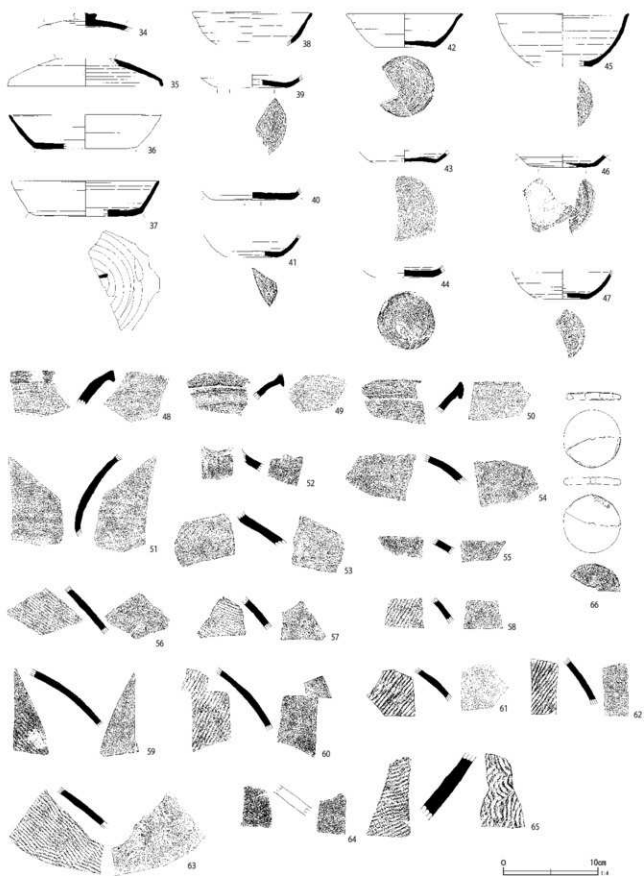
ずかに下る。

遺物は、古墳時代前期の土器群(1~33)と、奈良・平安時代の土器群(34~65)に分割される。

奈良・平安時代の遺物は上層から出土しているが、分布状況の記録がない。全面回転ヘラケズリの坏と糸切り離しの坏が一括で出土しており、一

時期おける埋没ではない。66は坏底部を転用した紡錘車である。

古墳時代前期の土器群は、南半部に集中している。いずれも、溝底からやや浮いた状態での出土であるが、溝跡本来の時期を知る遺物群と推定される。小型の埴や高坏・器台・裝飾器台・壺・台



第212图 第7号沟跡出土遺物(3)

第85表 第7号満跡出土遺物観察表 (第210～212頁)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	小型埴	6.9	6.4		A E G H I K	95	普通	灰黄褐	丸底 二次的被熱顯著 上層No5		115-4
2	土師器	小型埴		6.1	3.7	A E G H I K	90	普通	に染み黄橙	平底 二次的被熱 器面風化 上層部		
3	土師器	小型埴	7.3	8.5	2.7	A E G H I K	90	普通	に染み黄橙	平底 器面風化顯著 上層No6		115-5
4	土師器	小型埴	10.0	5.6	2.0	A C E G H I K	45	普通	に染み黄橙	底面上底 赤彩 二次的被熱 器面剥落 煤付着 No.25		115-6
5	土師器	小型高坏	7.3	4.5		A E G I K	70	普通	黄灰	器面風化顯著 外面タテ半部と環部内面に二次的被熱 上層部		115-7
6	土師器	小型甬台	(7.8)	4.4		A E G H I K	30	普通	に染み黄橙	内面ミガキ 中層		
7	土師器	裝飾甬台		8.0		A C E G H I K	40	普通	に染み黄橙	受部に三角形透かし8孔 脚部に円孔2孔×3対=6孔 二次的被熱 部分的に煤付着 No.19		115-8
8	土師器	裝飾甬台	11.5～12.0	(13.2)		A C E G H I K	20	普通	灰黄	受部に三角形透かし8孔 脚部に円孔2孔×3対=6孔 受部内面赤彩? No.43・53・59 / N7Gr		
9	土師器	高坏	(12.0)	4.1		A E I J	20	良好	に染み黄褐	内外面に丁寧なミガキ仕上げ 二次的被熱 下層部		
10	吉ヶ谷	高坏	(12.6)	9.0		A G I	50	普通	褐	口縁部に単線 L.R 施文 脚部円孔3		115-9
11	土師器	高坏	25.3	11.4		A B C E H I J	60	良好	に染み黄橙	欠山系(在地産) 脚部円孔3 口縁部煤付着 No.17		
12	土師器	高坏	17.8	15.5		A E G H I K	60	普通	に染み黄橙	有稜片(屈折脚) 長脚 赤彩 二次的被熱 煤付着 上層土器集中		
13	土師器	高坏		15.0	(12.4)	A E G H I K	40	普通	に染み黄橙	有稜片屈折脚 稜形微化 赤彩 焼成後穿孔(未貫通) 支脚転用痕と捺合 上層No.4 / J5Gr		
14	土師器	壺	18.6	37.9	7.7	A E G H I K	50	普通	に染み黄褐	折返口縁 球胴形 外面赤彩 上層土器集中 / J5Gr		116-1
15	土師器	壺	(32.6)	7.5		A C E G H I K	60	普通	に染み黄橙	球胴形 二次的被熱 外面風化 No.27・31・33・37・39・40・41・44～49・51・54・56・65		116-2
16	土師器	壺		2.8	(8.0)	A E G I	5	普通	明黄褐	外面二次的被熱 上層		
17	土師器	壺		3.7		A E G H I	5	普通	に染み黄橙	(有段口縁) 赤彩 破損後に二次的被熱? 上層		
18	土師器	小型壺	6.4×3.0			A E G H I K	40	普通	に染み黄橙	球胴形 平底 J5Gr		
19	土師器	壺		16.4	7.1	A C E H I J K	90	良好	に染み黄橙	球胴形 平底 外面赤彩 二次的被熱 煤付着 下層No.1		116-3
20	土師器	甕	(29.9)	12.0		A E G H I	5	普通	に染み黄橙	大型 赤彩 器面風化顯著 上層・上層集中		
21	土師器	甕	(35.4)	13.8		A E G H I	5	普通	に染み黄橙	大型 赤彩 器面風化顯著 上層		
22	土師器	小型甕	(12.0)	10.6	(3.3)	A E G H I	45	良好	に染み黄橙	口縁 口縁部が長い 煮沸痕 底部部残 No.34		116-4
23	土師器	台付甕	(9.1)	11.7		A E G H I K	40	普通	灰黄褐	小型 口縁端部内屈(S字の名残) 煮沸痕 煤付着 No.7・中層		116-5
24	土師器	台付甕		3.5	4.2	A B E G H I	95	普通	灰黄褐	小型短脚 煮沸痕 上層部		
25	土師器	台付甕	13.9	19.4	7.0	A B C E G H I K	75	普通	に染み黄橙	単口縁 煮沸痕 部分的に煤付着 No.35		116-6
26	土師器	台付甕		10.1	8.5	A E G H I K	40	普通	に染み黄橙	煮沸痕 No.28		
27	土師器	壺	(16.9)	3.3		A C E	5	普通	灰黄褐	口縁端部内屈(S字の名残) 上層部		
28	土師器	台付甕	(16.0)	6.5		A B E G H	5	普通	褐灰	単口縁 煮沸痕 煤付着 No.14・中層		
29	土師器	台付甕	(20.0)	5.1		A C E G H I	5	普通	に染み黄橙	単口縁 No.15		
30	土師器	台付甕		6.4	(9.2)	A B E I	5	普通	に染み黄橙	煮沸痕 No.14・18		
31	土師器	台付甕		5.1	(7.6)	A C E H I J	10	普通	橙	煮沸痕 器面一部剥離 中層・下層部		
32	土師器	台付甕		5.7	8.0	A B E G H I J	95	良好	に染み黄橙	煮沸痕 上層		
33	土師器	台付甕		6.0	9.7	A E G I J	15	普通	灰黄	煮沸痕 No.29		
34	須恵器	蓋		1.9		C E G I J K	15	普通	灰白	南比企産		
35	須恵器	蓋	(16.3)	2.9		C E G I J K	15	普通	灰白	南比企産		
36	須恵器	坏	(15.9)	3.6	(8.7)	E G I J	10	普通	灰	南比企産 火だすき痕		
37	須恵器	坏	(15.5)	3.7	(10.0)	E G I J	25	普通	灰	南比企産 底面に墨書(不明) 底部回転ヘラケズリ 上層土器集中		
38	須恵器	坏	(12.4)	3.5		E G I J K	20	普通	灰	南比企産		
39	須恵器	坏		1.4	(7.4)	E I J K	10	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り離し後周辺回転ヘラケズリ		
40	須恵器	坏		1.3	(8.7)	C E G H I J	10	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り離し後周辺回転ヘラケズリ		
41	須恵器	坏		2.4	(5.4)	E G I J K	5	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り離し		
42	須恵器	坏	(12.2)	3.5	6.4	E G I J K	60	普通	灰黄	南比企産 底部回転糸切り離し 上層		117-1
43	須恵器	坏		1.4	6.6	E I J	15	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り離し		
44	須恵器	坏		1.3	6.2	E G I J L	20	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り離し 底面に×印捺割		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
45	須恵器	坏	(13.9)	5.6	(6.0)	E G I J K	15	普通	黄灰	南比金産	底部回転糸切り難し	
46	須恵器	坏		1.4	(7.0)	E G H I J K	15	普通	灰	南比金産	底部回転糸切り難し後周辺回転ヘラケズリ	
47	須恵器	坏		3.1	(5.2)	E G I J K	10	普通	灰オリーブ	南比金産	底部回転糸切り難し 上層	
48	須恵器	甕		3.6		A E G H I J K	5以下	普通	灰白灰	南比金産		
49	須恵器	甕		3.1		A E G I K	5以下	良好	灰	南比金産	自然軸付着	
50	須恵器	甕		3.3		C E G I J K	5以下	普通	灰白	南比金産		
51	須恵器	甕		9.4		E I K	5以下	普通	灰	南比金産	内面自然軸付着	
52	須恵器	甕		1.6		E I K	5以下	普通	灰	南比金産		
53	須恵器	甕		2.6		A E G I J	5以下	不良	黒	南比金産		
54	須恵器	甕		4.0		A E I K	5以下	普通	灰	南比金産	外面自然軸付着	
55	須恵器	甕		2.1		E I K	5以下	普通	灰白	南比金産	外面自然軸付着	
56	須恵器	甕		4.3		E G I K	5以下	不良	灰白	南比金産	57同一個体か	
57	須恵器	甕		3.8		E G I K	5以下	不良	灰白	南比金産	56同一個体か	
58	須恵器	甕		3.8		E I K	5以下	良好	灰白	南比金産		
59	須恵器	壺		8.0		E I K	5以下	普通	灰白	南比金産	外面自然軸付着	
60	須恵器	甕		6.7		A E I K	5以下	良好	灰白	南比金産	外面自然軸付着	
61	須恵器	壺		4.6		A E I K	5以下	良好	灰白	南比金産	外面自然軸付着	
62	須恵器	甕		5.0		A E I K	5以下	良好	灰白	南比金産	外面自然軸付着	
63	須恵器	蓋		6.0		A F I K	5以下	普通	灰	南比金産	上層土器集中	
64	須恵器	甕		3.1		A E I K	5以下	普通	灰白	南比金産	外面自然軸付着	
65	須恵器	甕		7.1		A E I K	5以下	普通	黄灰	南比金産		
66		紡錘車		0.7		A E G I J K	45	普通	灰	南比金産	須恵器坏底部転用 転用時に側面研磨	117-2

付甕がある。銭塚・城敷Ⅱ期、反町(Ⅱ-2~Ⅱ-3)に相当する。

第6号溝跡(第209図)

J・K-6グリッドに位置し、北端・南端ともに調査区域外に至る。

検出長6.5m、上幅1.20~1.48m・下幅0.78~1.08m、確認面からの深さ0.37~0.50mを測る。走行方位はN-1°-Wを指す。溝底標高は、北端付近18.68m、中央付近18.63m、南端付近18.51mを計測し、溝底は北から南へ下る。

第5号溝跡(第213図)

J-8・9グリッドに位置する。調査区域とほぼ併走し、西端部で調査区域外に至る。第4・5号掘立柱建物跡と重複する。

検出長19.0m、上幅0.60~1.02m・下幅0.34~0.44m、確認面からの深さ0.13~0.28mを測る。走行方位はN-85°-Wを指す。溝底標高は、西端付近19.06m、中央付近19.04m、東端付近19.02mを計測し、溝底は西から東へ向かって下る傾向が窺われるが、ほぼ平坦である。

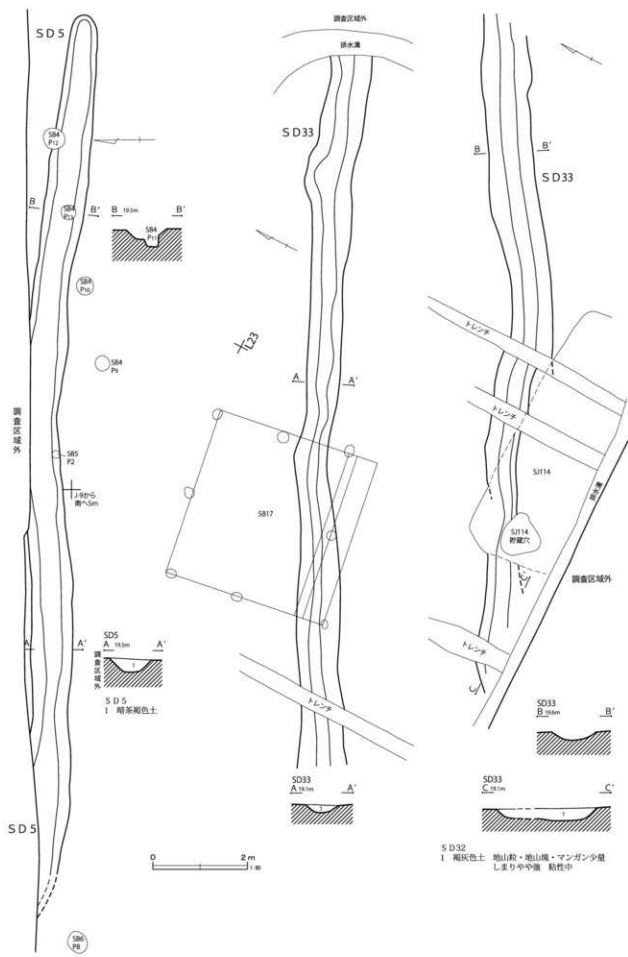
遺物は18世紀代の肥前碗、青磁碗、瀬戸・美濃の皿・摺鉢、焙烙等が出土している。

第33号溝跡(第213図)

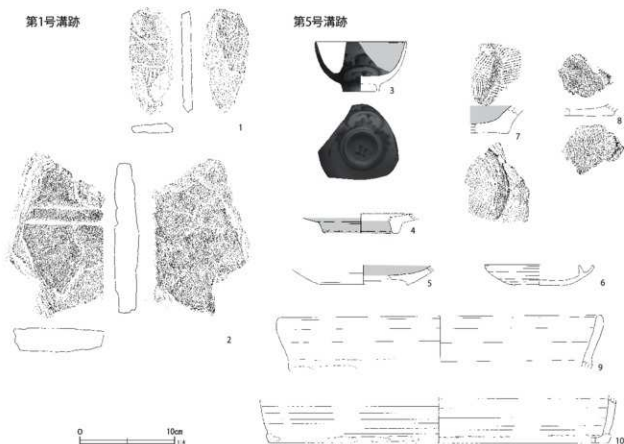
第3次調査区域から発見された溝跡である。調査時には第32号溝跡として調査したが、第1・2次調査区域にも第32号溝跡が存在することから、第33号溝跡として報告する。

K-23、L-21・22・23、M-21グリッドに位置し、第3次調査区域北東隅から南辺西側1/3ほどにかけて斜走する。第114号住居跡・第17号掘立柱建物跡と重複する。

検出長29.4m、上幅0.59~1.01m・下幅0.20~0.27m、確認面からの深さ0.13~0.28mを測る。走行方位はN-65°-Eを指す。溝底標高は、L-22ライン付近が最も低く18.77m、幅が最も狭い第17号掘立柱建物跡と重複する付近が18.84mと最も高い。東西の両端付近は18.81mを計測し、若干のアップダウンはあるが、溝底には明確な傾斜がみられない。



第213図 溝跡(5)第5・33号溝跡



第214図 第1・5号溝跡出土遺物

第86表 第5号溝跡出土遺物観察表 (第214図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版	
3	磁器	碗	(9.6)	5.3	3.8	I	40	良好	灰白	肥前 くらわんか碗 草花文	18世紀中葉～後葉		
4	青磁	碗		2.1	(8.0)	I K	15		灰白	内面底部は無施釉	18世紀		
5	陶器	皿		2.0	9.9	I	15	普通	浅黄橙	瀬戸・美濃 内面施軸軸	18世紀後半 灯明皿に転用?		
6	陶器	灯明皿	(11.6)	2.2	(5.0)	I	10	良好	灰白	瀬戸・美濃	18世紀後葉～19世紀前葉		
7	陶器	摺鉢		2.9	(10.9)	H I K	25	普通		瀬戸・美濃 内外面施釉	底部糸切り		時期不詳
8	陶器	摺鉢		1.3		H I K	5	普通	に黒黄橙	瀬戸・美濃 内外面施釉	底部糸切り		時期不詳
9	焙烙	焙烙	(36.0)	5.6		C H I K	5	普通	灰白	在地産	18世紀代		
10	焙烙	焙烙		5.1	36.0	C H K	10	普通	灰白	在地産	18世紀代		

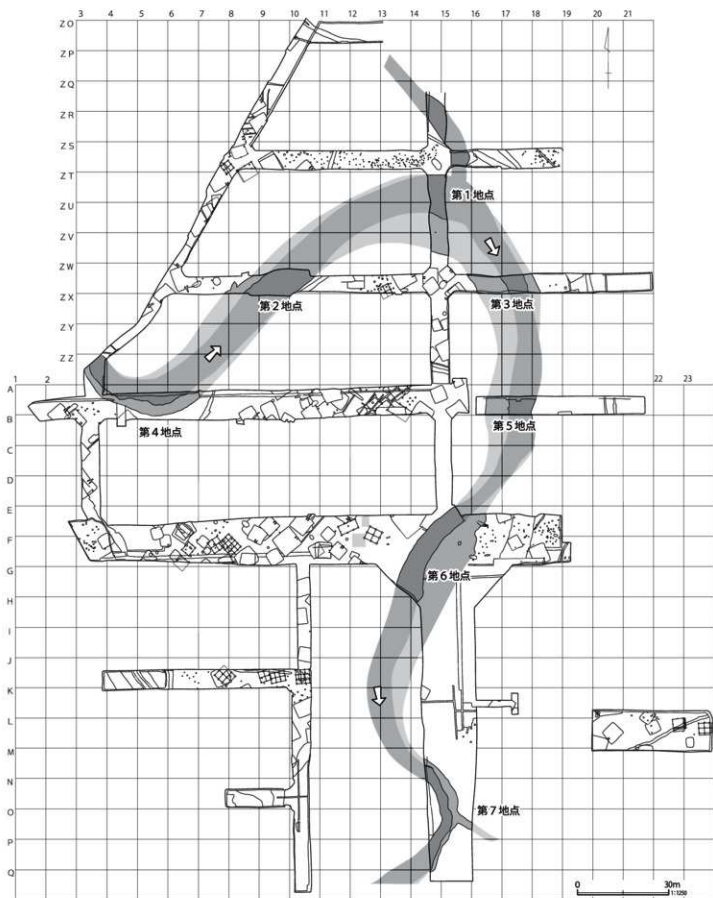
6. 大溝跡

城敷遺跡では、7地点で大規模な溝跡が検出されている。各地点の規模や覆土の堆積状況、出土遺物の種類・時期などに類似点が多いことから、同一の大溝跡と判断し、第4号溝跡と報告する。

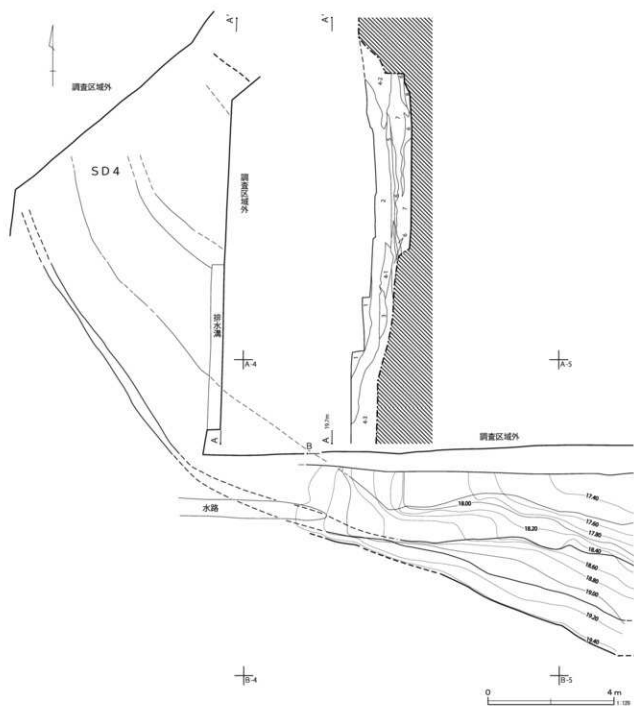
この大溝跡は、古墳時代の集落のなかを縫うように蛇行していた河川跡と推定される。第215図

に、予想されるルートを示した。

最西端の第4地点(ZZ-3・4グリッド、A-3～7グリッド)を始点に、西側から遺跡内に入り込む。第4地点では、北西から北東へ「し」の字状にカーブを描き、北上する。途中、第2地点(ZW・ZX-8～10グリッド)を経由し、第1地点

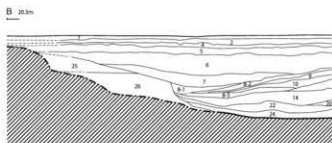


第215图 第4号满迹地点配置图

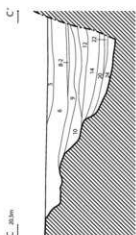


SD 4 第4地点 A-A'

- 1 黒褐色土 植物遺体少量
- 2 暗褐色土 植物遺体少量
- 3 黒褐色土 植物遺体少量
- 4-1 青灰色土 砂少量 4-2・4-3とはほぼ同じ
- 4-2 青灰色土 黒色粒子→炭化物かも、植物遺体少量 4-1・4-3とはほぼ同じ
- 4-3 青灰色土 4-1・4-2とはほぼ同じ
- 5 植物遺体少量 砂少量 小礫多量 ϕ 3~5cmもある ϕ 5cm以下の礫もあり、かなりのSD4の炭層が想定できる (礫・砂)とシルト・植物が互層になる
- 6 黒褐色土 植物遺体多量 (礫・砂)とシルト・植物が互層になる
- 7 植物遺体少量~中量 7層の下層からは特に多い 砂多量 小礫中量 (礫・砂)とシルト・植物が互層になる
- 8 植物遺体少量 砂・小礫多量 (礫・砂)とシルト・植物が互層になる



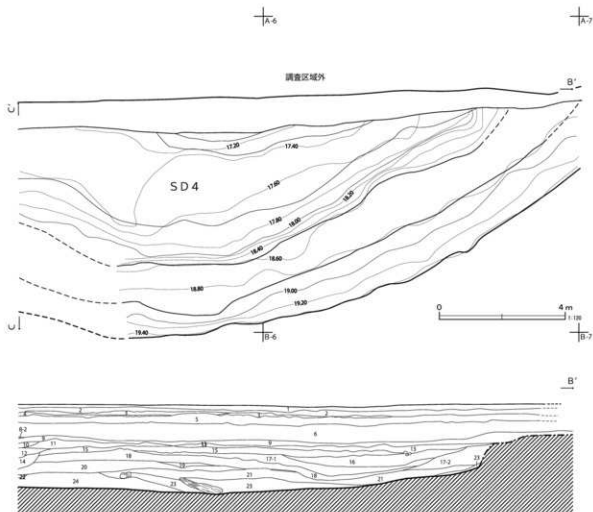
第216図 第4号溝跡第4地点(1)



SD 4 第4地点 B-B'-C'-C'

- | | | |
|-----|---------|--------------------------------------------------------------------|
| 1 | 暗灰黄色土 | 耕作土 白色粒子中量 小礫少量 |
| 2 | にぶい黄褐色土 | 黒色粒子多量 しまりあり 水田床土か |
| 3 | にぶい黄褐色土 | 黒色マンガン(?)多量 |
| 4 | 黒褐色土 | 黒土 |
| 5 | 灰黄褐色土 | 砂・黒色粒子中量 |
| 6 | 灰黄褐色土 | 炭化物中粒子少量 砂含む |
| 7 | オリーブ黒土 | 小礫・腐植物少量 粘性あり |
| 8-1 | 黒褐色土 | 砂質リカルト シルト50% 礫50%
砂層から薄く互層をなす
直径0.2-10mm以上 上層
(7層)シルト混じる |
| 8-2 | 黒褐色土 | 砂・礫 直径2-15mm |
| 8-3 | 黒褐色土 | シルト20% 礫80% |
| 9 | 黒褐色土 | 砂・小礫 炭化物中粒子少量
鉄分多量 |
| 10 | 灰色土 | シルト・砂 砂礫多量 植物中量 |
| 11 | 黒褐色土 | マコモ層 植物極多量 |
| 12 | 黒褐色土 | 砂・植物極多量 |
| 13 | 黒褐色土 | 炭化物小粒子・砂・白色粒子少量
しまり・粘性あり |
| 14 | 黒褐色土 | 植物多量(根など大型有り) マコモ |

- | | | |
|------|----------|-------------------------------------------------|
| 15 | 黒褐色土 | 炭化物中粒子中量 植物少量 |
| 16 | 黒色土 | 炭化物小粒子少量 植物多量
粘性あり |
| 17-1 | 黒褐色土 | 炭化物中粒子少量 植物中量
砂 粘性あり |
| 17-2 | オリーブ黒色土 | シルト+植物 砂少量 大型まるた有り
未熟い式につれシルトになる |
| 18 | オリーブ黒色土 | 炭化物小粒子・黒色粒子少量
コハルトブルーの物質(リン酸鉄)
植物極少量 粘性あり |
| 19 | オリーブ黒色土 | 炭化物小粒子少量 植物極多量
粘性あり |
| 20 | オリーブ黒色土 | 炭化物小粒子・黒色粒子少量 粘性あり |
| 21 | 黒褐色土 | 炭化物中粒子・植物中量 粘性あり |
| 22 | 黒褐色土 | マコモ+砂 植物多量(白根・細かいり)
砂混じる |
| 23 | オリーブ黒色土 | 植物+砂 砂と植物の互層
互層は途中で切れる |
| 24 | 黒色土 | 植物+砂 砂10%が薄く互層をなす
30cmほど下(25層)はマコモ
土層? |
| 25 | 暗オリーブ褐色土 | 土層? |
| 26 | 灰色土 | 砂 植物? |



第217図 第4号溝跡第4地点(2)

(ZT～ZV-14・15グリッド)に至る。ここで屈曲して南方へ向きを変え、第3地点(ZW-15～18グリッド)に向かう。その後、第5地点(A-16・17グリッド)→第6地点(E-G-13～16グリッド)→第7地点(M-P-14・15グリッド)の順に緩やかに蛇行しながら南下し、調査区南端部で西側に抜けていく。また、第4号溝跡第1地点北側に位置する第10号溝跡(『錢塚Ⅱ/城敷Ⅰ』報告済み)は、他の溝跡と比べて規模が大きいことから、第4号溝跡に合流する可能性が高い。

城敷遺跡の古墳時代集落は、この第4号溝跡を避けるように3地点に分かれて営まれている。しかし、城敷遺跡では河川(第4号溝跡)の流れを自然に任せていたわけではなく、第4号溝跡の流れによって集落が分断されたものではない。その根拠として、第4号溝跡には人工的に流路をコントロールしていた痕跡が各所にみられる。例えば、第2地点に設置された堰状施設や護岸施設、多くの地点で確認されている河川敷のようなテラス部等の土木事業が認められる。また、河川岸への昇降施設や祭祀の場等の諸施設も設けられている。このように、城敷遺跡の集落では、第4号溝跡を管理しながら、積極的に活用した痕跡が多数発見されている。つまり、第4号溝跡が集落に住む人々の生活と一体となって機能していたことは確実である。その一方では、第4号溝跡の流路変更や水位変化の影響が、集落の消長に連動したことが予想される。

大溝跡の第4号溝跡は、7地点にわたって検出されている。このうちの第1～3地点については、『錢塚Ⅱ/城敷Ⅰ』で報告済みである。本報告では第4～7地点について報告する。

第4号溝跡第4地点(第216～222図)

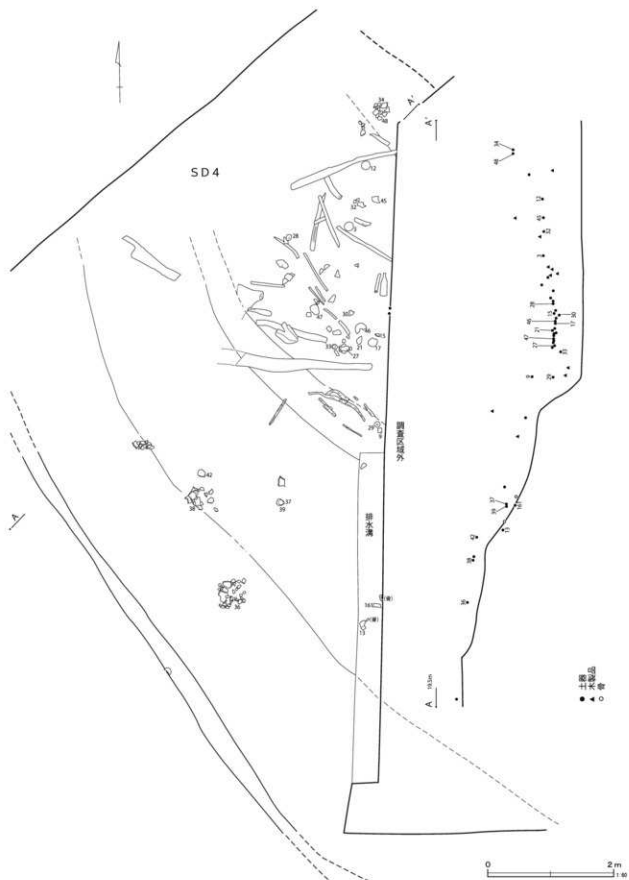
第4号溝跡第4地点は、調査区域中央の最西端に位置し、ZZ-3・4グリッド、A-3～7グリッドに亘る。北西のZZ-3・4グリッドから流入した流れが、A-3～7グリッドで屈曲して北東方

へ向かう屈曲点にあっている。調査区域内では両岸に達する箇所がなく、南側の岸部から溝底付近までの調査である。そのため、規模は数値化が困難である。また発掘調査もZZ-3・4グリッドとA-3～7グリッドで分割されていたため、土層分層が合致していない。本来ならば、整合していなければならないが、A-A'は流路に対してやや斜めに分層し、B-B'は流路方向に沿って分層したもので、整合作業も困難である。そのため、各土層断面図に対応した土層説明文を掲載している。概ね、A-A'の6～8層とB-B'・C-C'の9～26層が対応するものと思われる。

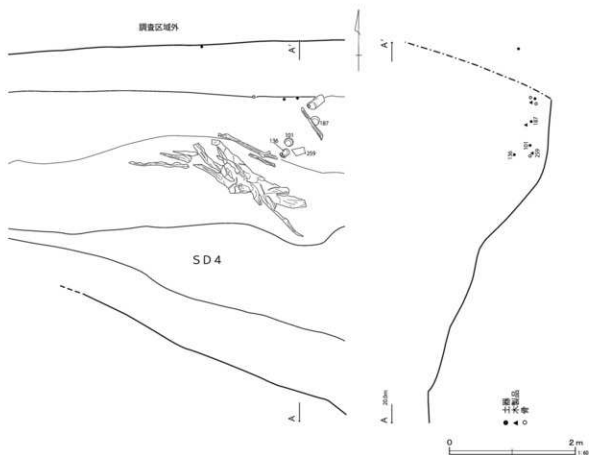
遺物は、ほぼ全域から出土している。主に傾斜面の中程から溝内覆土中からの出土で、標高的には18m前後に集中している。土師器・須恵器とともに、木製品が多量に出土している。木製品は大型品が多く、長手方向を流路に沿わせたような状態で検出されている。ごく一部を除き、きわめて整然とした出土状況と捉えることができる。多分に人為的な様相と解釈が可能であるが、杭を打ち込んだような状況は確認されていない。一方で、流木が流路屈曲部に集まったものと単純に考えることも可能である。しかし、整然とした状況とともに、数多くの須恵器・土師器が出土している。特に須恵器は5世紀代の「古式須恵器」で、多くは陶邑産と推定されるものである。よって、整然とした長大な木製品は、護岸や再加工のための水漬け行為等を目的として、人為的に配置していたものと考えられる。また、川岸付近からは獣骨も発見され、ニホンジカ(尺骨・脛骨)とイヌ(下顎骨)に同定されている(V-2参照)。

第223図1～第224図50は、第218図に出土状況を図化した、ZZ-3・4グリッドから出土した須恵器・土師器である。この地点から数多くの木製遺物が出土しているが、加工痕がみられないものが多く、図示していない。

1～11は、須恵器である。



第218图 第4号沟迹第4地点遗物出土状况(1)



第219図 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(2)

1の坏H蓋は、微細な口縁部片からの復元である。口縁部はやや短い。端部は凹みをもつ。器形や胎土・焼成の特徴から、陶邑産のTK23型式～TK47型式と推定される。

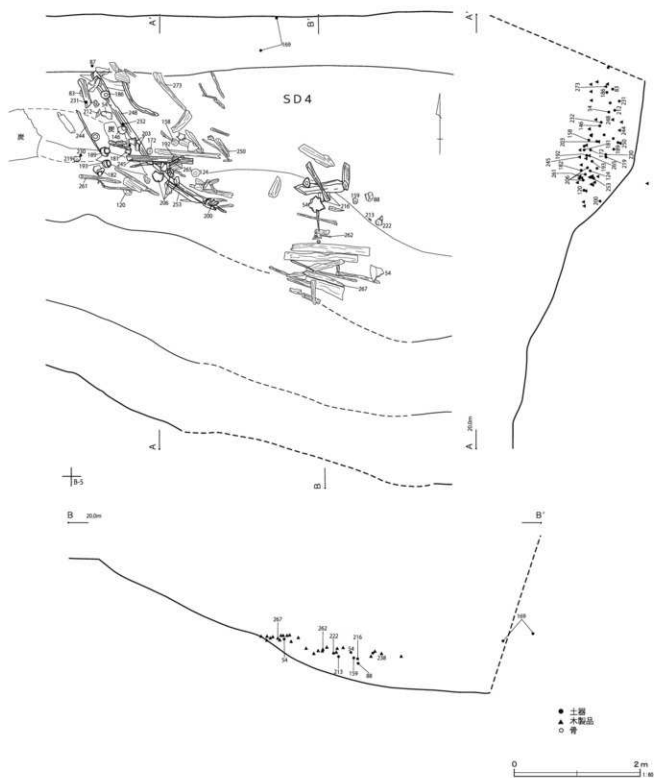
2の坏H蓋も、図化部残存率10%程度の破片からの復元である。口縁部は直立し、天井部には丸みが出現している。胎土・焼成の特徴から陶邑産と推定される。器形はTK23型式段階と思われる。

3は、坏H身の完形品で、シャープなつくりである。口縁端部はやや凹み、内傾する。体部は丸みをもち、底部のケズリ範囲は広い。胎土はやや粗く、径1～2ミリの細礫を含む。器形や胎土・焼成の特徴から、陶邑産のTK23型式と推定される。

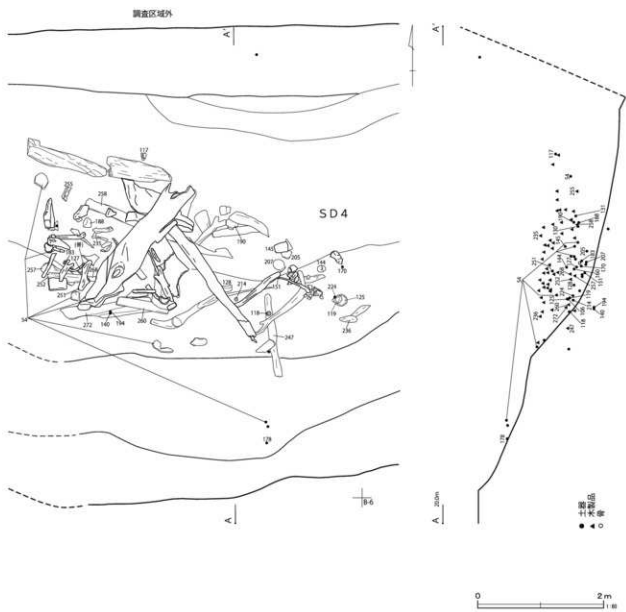
4は、無蓋高坏である。口縁部が長く伸び、口

縁端部は外方に張り出さない。口唇部は内傾し、沈線が巡る。口縁部と体部の境の稜は高く、体部にはカキ目が施されている。脚部は短く、下半部に沈線を巡らせている。端部はほぼ垂直に形成され、稜をもたない。スカシ孔は円形が4孔穿たれていると思われる。坏部と脚部の接合面には、窺描による同心円文が観察される。器形や胎土・焼成の特徴から、産地は陶邑以外に求められる。口縁部が長く伸びる点は東海のな特徴であるが、東海産の須恵器には類例が知られていない。器形的にはTK23型式併行と推定される。

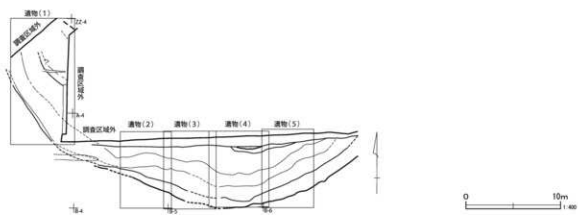
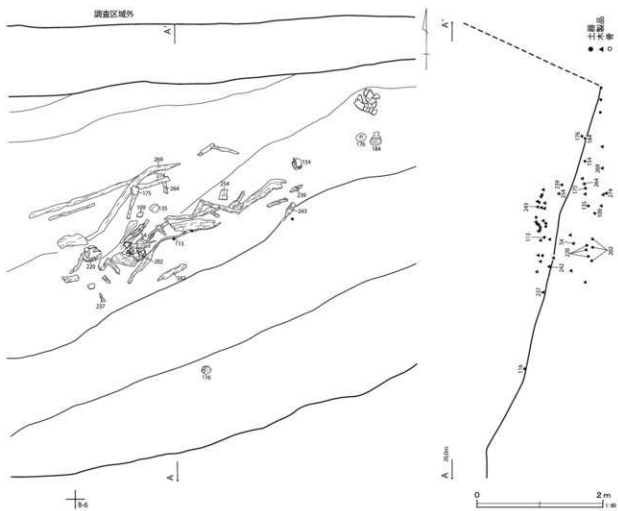
5は、大型の無蓋高坏である。図化部残存率10%程度の破片からの復元で、器壁の薄いシャープなつくりである。深身の坏部で、口縁部は比較的長い。口縁部と体部は二条の突帯状の稜によって画されている。稜の直下には櫛描き波状文が施



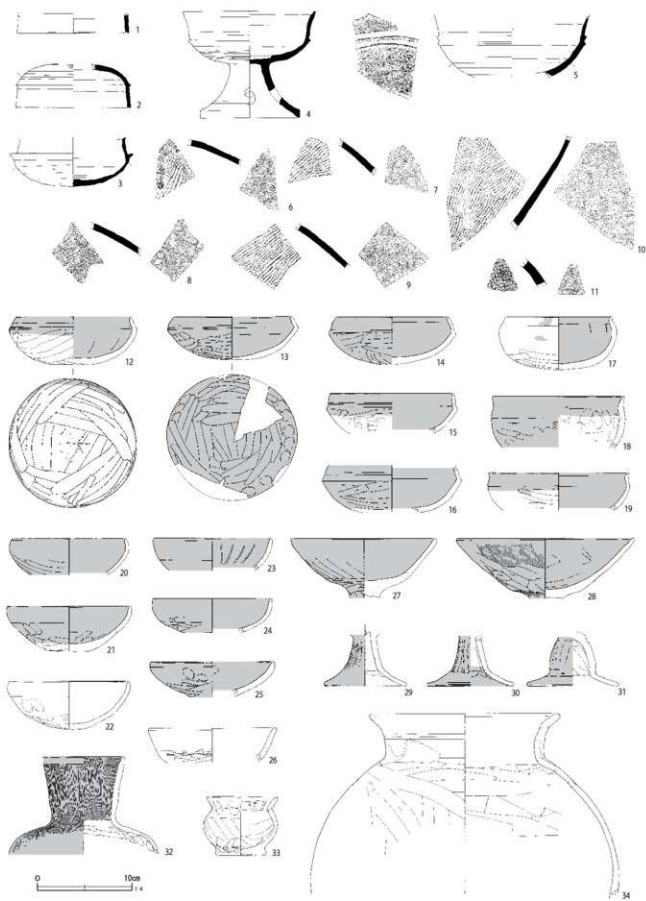
第220图 第4号沟第4地点遺物出土状况(3)



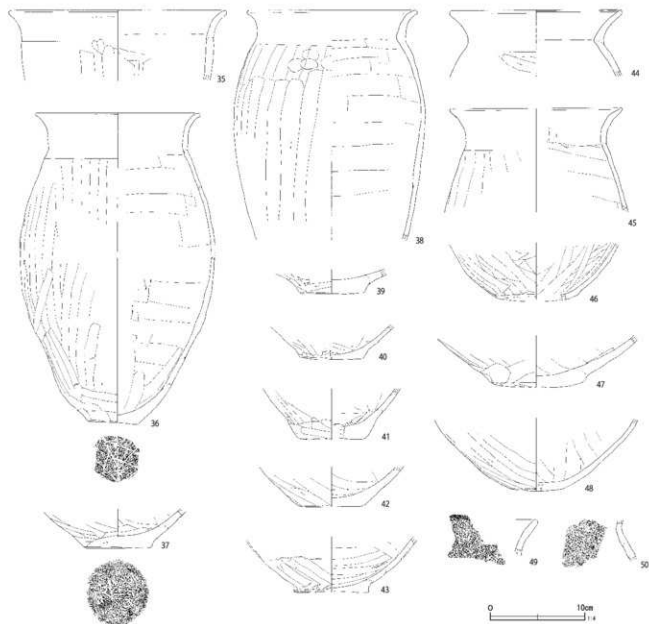
第221图 第4号溝跡第4地点遺物出土状況(4)



第222图 第4号沟第4地点遗物出土状况(5)



第223图 第4号清海第4地点出土器物(1)



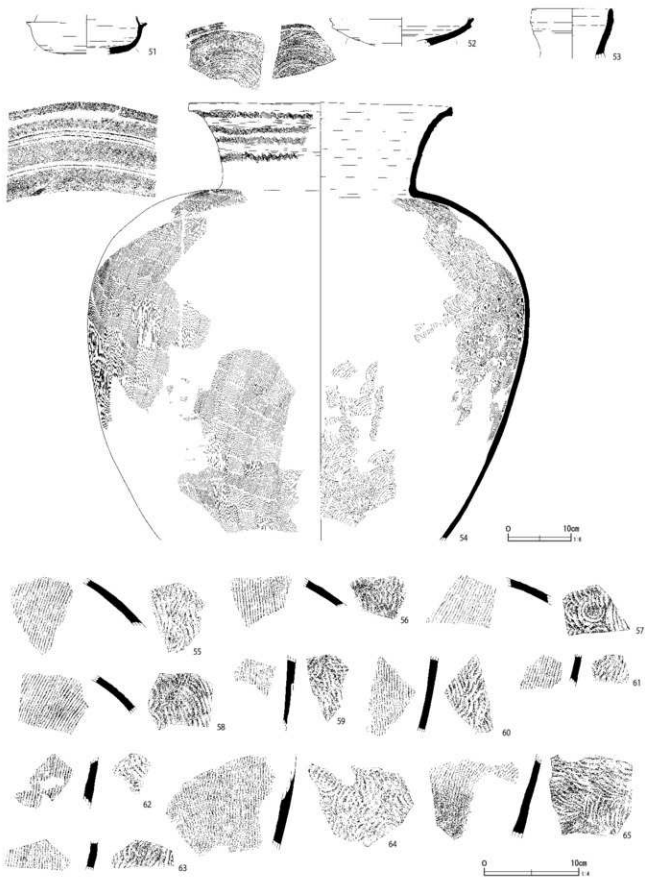
第224図 第4号溝跡第4地点出土遺物(2)

文されているが、焼成時の自然釉が厚く付着し、幅幅・本数等は不明瞭である。胎土・焼成の特徴から陶邑産と推定されるが、時期・型式の特定は困難である。伴出している須恵器の年代から、5世紀代のものと思われる。

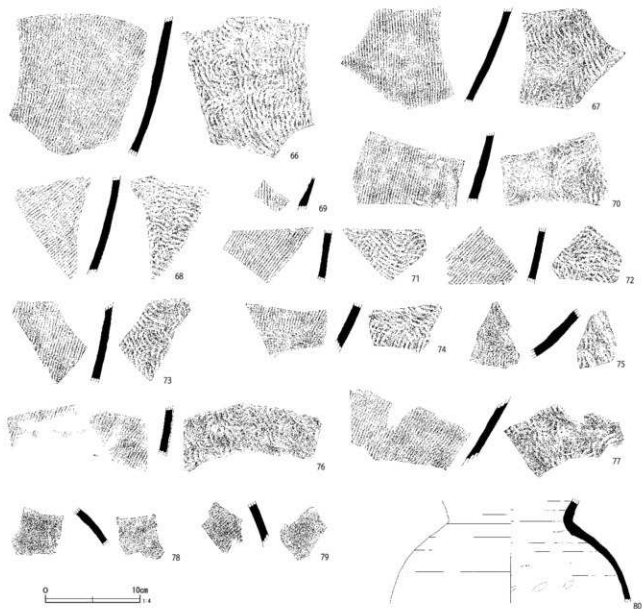
6～10は、同一個体と思われる甕片である。外面には平行タタキが行われ、内面の当て具痕はナデ消されている。器面調整技法や胎土・焼成の特徴から、陶邑産の5世紀中葉以前のものとして推定される。

11も甕片であるが、6～10とは別の個体である。外面には格子目タタキが残る。器面調整技法や胎土・焼成の特徴から、陶邑産の5世紀代のものと推定される。

12～48は土師器、49・50は吉ヶ谷の甕片である。坏類には坏身横做(12～16)・内灣口縁(20～26)・外反口縁鉢タイプ(17・18)と比企型坏(19)がある。高坏は有稜坏屈折脚で、小型鉢(33)・直口壺(32)・有段口縁壺(34)が含まれ、壺も段は形骸化している。甕(35)は須恵器模倣タ



第225图 第4号溝跡第4地点出土遺物(3)



第226図 第4号溝跡第4地点出土遺物(4)

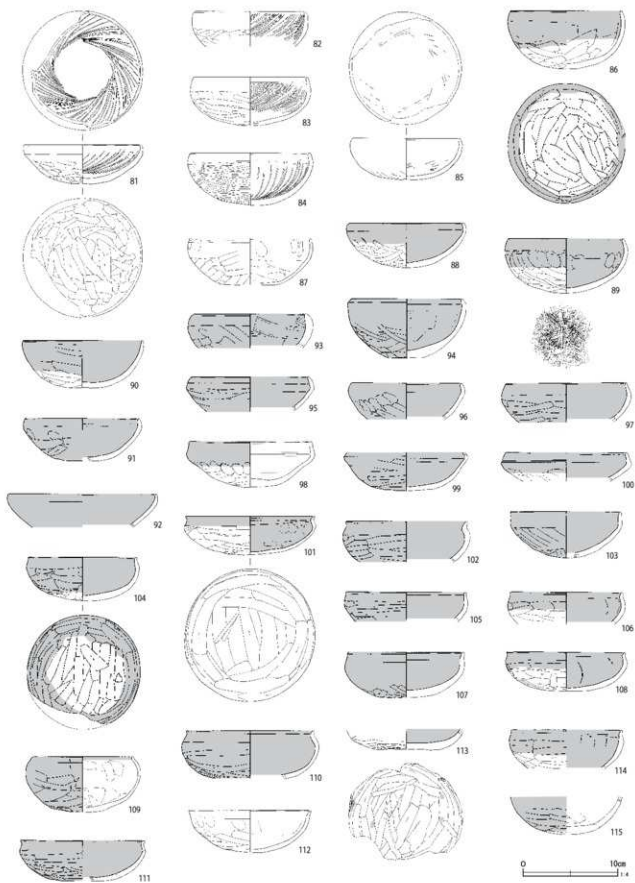
イブで、甕は長胴甕(36・38・44・45)である。37・39~43・46~48は甕もしくは壺の底部である。高環に古い要素が残るが、概ね銭塚・城敷IV期新段階に相当する。

第225図51~第233図234は、第218~222図に出土状況を図化した、A-3~7グリッドから出土した須恵器・土師器・石製品である。また、第234図235~第240図274は同地点から検出された木製品である。農具・弓をはじめ、建築部材や用途不明部材等である。

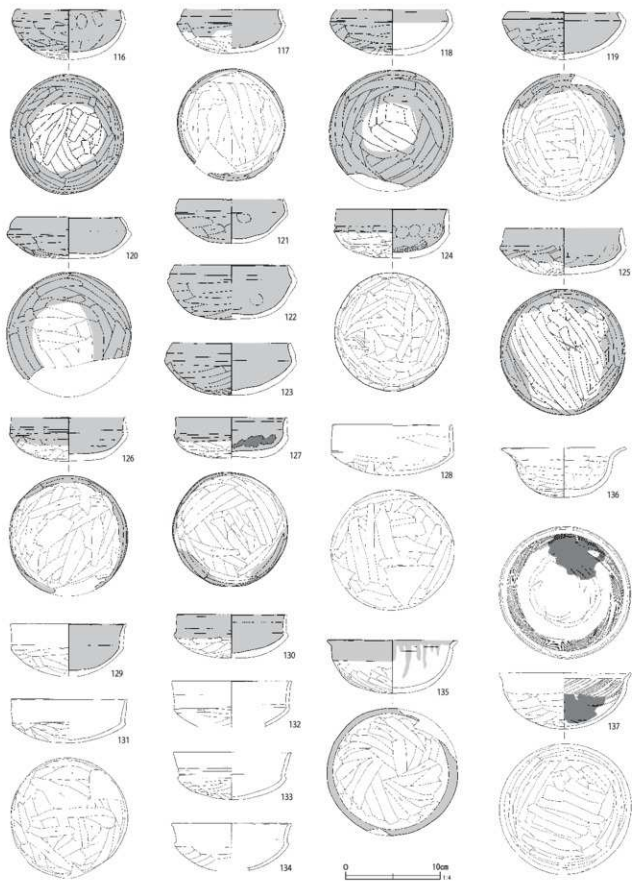
51~80は、須恵器である。

51の坏H身は器壁の薄いシャープなつくりで、特に口縁部は薄く仕上げられている。口縁部と体部の境の稜の張り出しが著しい。底部の丸みは弱く、平底風に削り込まれている。器形や胎土・焼成の特徴から、陶邑産のTK23型式~TK47型式に推定される。

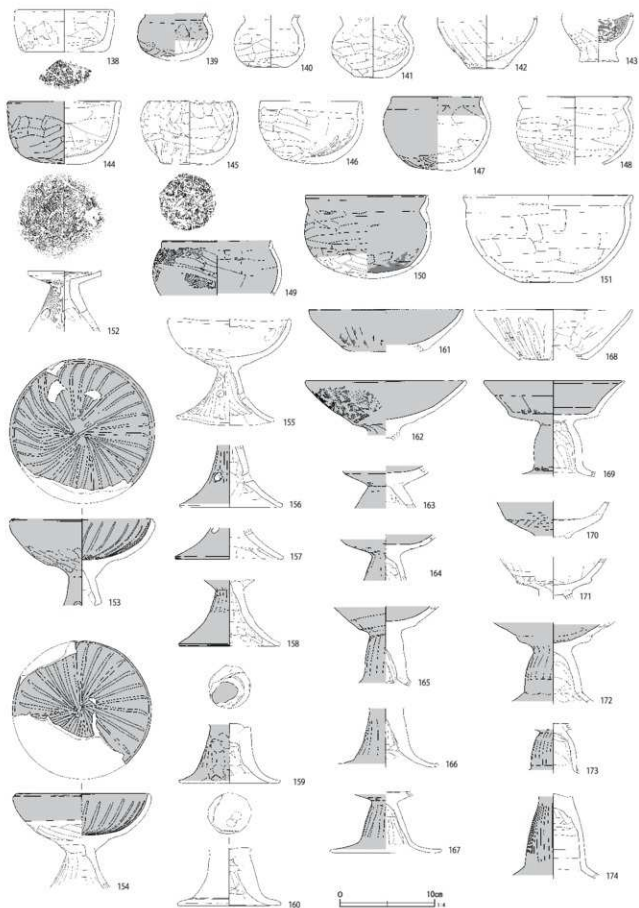
52は、大型の無蓋高環で、身が割れものと復元される。口縁部と体部の境には突帯状の稜が二条まわり、直下には稚拙な櫛描きの波状文が施され



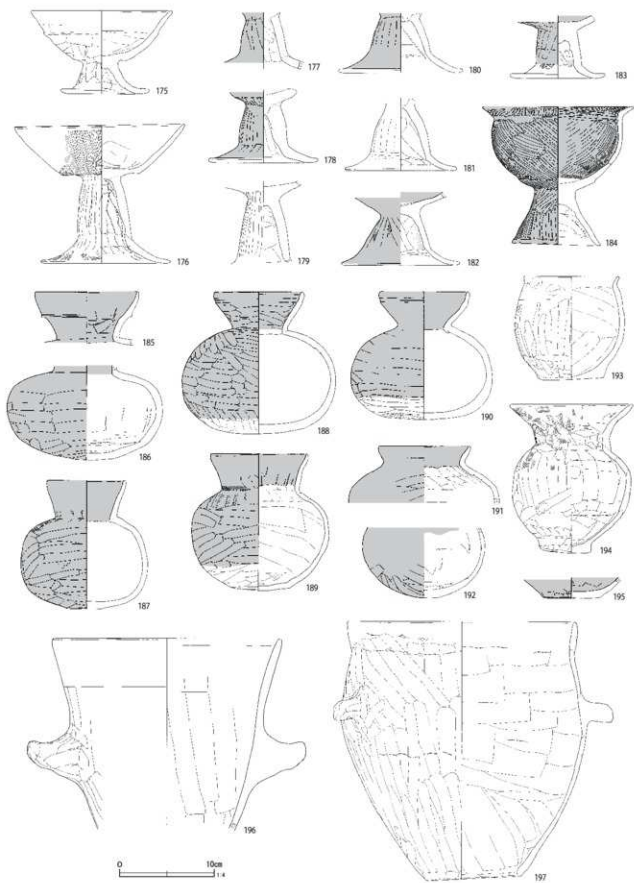
第227图 第4号满滩第4地点出土遗物(5)



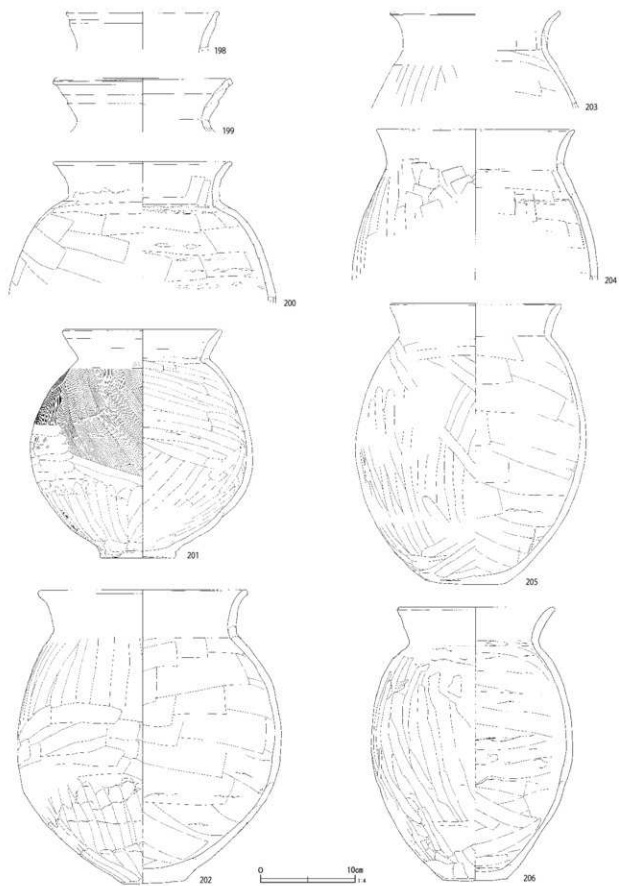
第228图 第4号沟跡第4地点出土遺物(6)



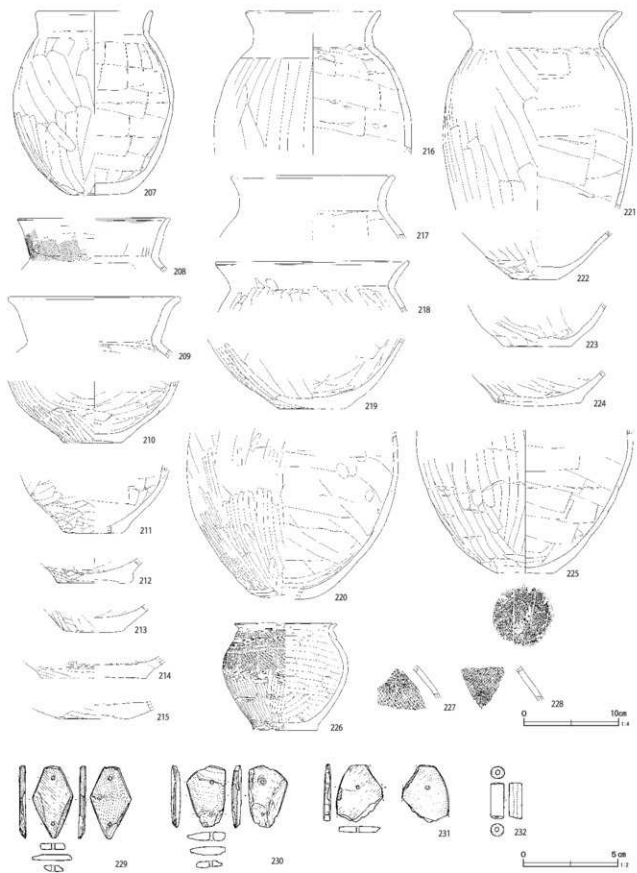
第229号 第4号沟第4地点出土遗物(7)



第230图 第4号沟第4地点出土器物(8)



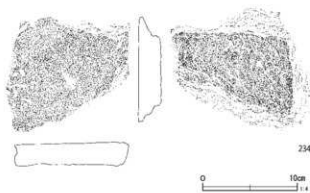
第231图 第4号满踪第4地点出土器物(9)



第232图 第4号满清第4地点出土遗物(10)



第233図 第4号溝跡第4地点出土遺物(11)



ている。胎土には白色針状物質が含まれていることから、在地の南比企産と推定される。器形的には、TK47型式併行と思われる。

53は、壺の口縁部と思われる。端部は丸く、外面には二条の沈線が巡っている。類例がなく、産地や時期は不明である。伴出遺物から、5世紀代の可能性が高いと思われる。

54は大甕で、55～77は接合ができなかった同一個体と推定される破片である。口径41.4cm・高さ70cm以上もある大型品である。口縁部端面はわずかに上下に伸びるが、しっかりとした稜は形成されていない。口縁部には突帯を2段巡らせて区画し、櫛描き波状文が施されている。突帯は貼り付けたものではなく、上下を工具先端で沈線状になることによって形成されたものである。突帯上段は二条、下段は一条で、口縁部との間には波状文が1段、突帯と突帯の間は波状文が2段、下段突帯下に波状文1段が施文されている。中央の上段は上部を巡る突帯直下までおよんでいる。また波状文は、最上段と他段とは本数が異なることから、別の工具が用いられている。肩部から下部には平行タタキが行われている。タタキ具は、木目に対して直交する方向に溝が刻まれたもので、タタキ痕の凹面には直交する木目が観察できる。内面の当て具痕の凹凸が緩く、器面が滑らかで、

ナデ消されている可能性がある。大型品にも関わらず、きわめて器壁が薄い。しっかりと叩き締められた堅緻なつくりである。色調は暗紫灰色を基調としている。整形技術の高さや、胎土・色調の特徴から、陶邑産のTK23型式～TK47型式と推定される。

78・79は、54～77とはそれぞれ別個体の甕である。

78は、内面の当て具痕がナデ消された陶邑産と推定される。79も、内面の当て具痕がナデ消されたもので、陶邑産の5世紀前半頃のものと推定される。

80は、南比企産の甕である。

81～225は土師器で、226～228は吉ヶ谷の壺である。

81～90は内彎口縁の環で、内面に暗文が施されたものが多い。91～100は明瞭な稜をもたずに口縁部が内屈する環である。101～108・110・111・114は比企型環、109は口縁部が小さく外反する鉢タイプ、112は内斜口縁環である。116～123は坏身模倣環で、いずれも赤彩されている。124～134は坏蓋模倣環で、131～134は北武蔵型と思われる。136は口縁部が外反する丸底の碗、135・137は内斜口縁環である。

138・144～151は鉢で小型・大型のものがある。

第87表 第4号溝跡第4地点出土遺物観察表 (第223～233図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏蓋	(11.8)	2.2		H I K	5	良好	灰	坏目蓋 陶色産 (TK23-TK47) ZZ3Gr		117-3
2	須恵器	坏蓋	(12.0)	4.6		I K	10	良好	灰	坏目蓋 陶色産か TK23 自然輪付着 ZZ3Gr		117-4
3	須恵器	坏身	11.2	5.2		L	100	良好	灰	坏目蓋 陶色産か TK23か ZZ3Gr No20		117-5
4	須恵器	無蓋高坏	14.0	11.2	(10.5)	H I K	45	良好	明灰	東海産か(非陶色産) TK23併行か 脚部透孔4孔 ZY4Gr / ZZ3Gr		117-6
5	須恵器	無蓋高坏		6.6		H I K	10	良好	灰	大型高坏 陶色産 5世紀代 波状文 自然輪付着 ZZ3Gr		117-7
6	須恵器	甕		4.1		I K	5	良好	灰	6~9同一個体 陶色産 5世紀中葉以前 自然輪付着 ZZ3Gr		
7	須恵器	甕		5.3		I K	5	良好	黄灰	6~9同一個体 陶色産 5世紀中葉以前 ZZ3Gr		
8	須恵器	甕		3.7		I	5	普通	灰オリーブ	6~9同一個体 陶色産 5世紀中葉以前 自然輪付着 A区谷		
9	須恵器	甕		6.6		I K	5	普通	灰	6~9同一個体 陶色産 5世紀中葉以前 ZZ3Gr No12		
10	須恵器	甕		10.3		E I K	5	良好	灰	陶色産 5世紀中葉以前 自然輪付着 ZZ3Gr		
11	須恵器	甕		3.0		H I K	5	普通	明赤褐	陶色産 5世紀代 外面磨子タタキ ZZ3Gr		117-8
12	土師器	坏	12.2	5.0		C E H I K	100	普通	に染・黄橙	坏身模倣 赤彩 底部木葉痕 ZZ3Gr No17		118-1
13	土師器	坏	12.4	4.6		A E I K	90	良好	に染・赤褐	坏身模倣 赤彩 ZZ3Gr / A3Gr No1		118-2
14	土師器	坏	(11.7)	5.0		D E H	60	良好	橙	坏身模倣 赤彩 ZZ3Gr		118-3
15	土師器	坏	(13.0)	4.3		C E H I K	20	普通	に染・橙	坏身模倣 赤彩 ZZ3Gr No36		
16	土師器	坏		5.0		C E H	10	良好	橙	坏身模倣 赤彩 ZZ3Gr		
17	土師器	坏	(11.1)	5.6		A C H I K	60	普通	に染・黄橙	比企型坏 赤彩 器面風化顕著 ZZ3Gr No35		118-4
18	土師器	輪	(13.8)	5.4		C E H I J K	25	良好	に染・赤褐	外反口縁 赤彩 ZZ3Gr		
19	土師器	坏	(15.0)	4.0		A I K	10	良好	に染・赤褐	比企型坏 赤彩 ZZ3Gr		
20	土師器	坏	(12.0)	3.9		A C H I K	25	普通	に染・黄橙	内増口縁 赤彩 ZZ3Gr		
21	土師器	坏	(13.0)	4.8	4.6	A C D E H I	45	普通	橙	内増口縁 平底 赤彩 二次的被熱 ZZ3Gr No37		118-5
22	土師器	坏	(12.6)	5.1		A E H I	40	普通	に染・橙	内増口縁 二次的被熱 ZZ3Gr		118-6
23	土師器	坏	(12.4)	3.4		C E H I K	20	普通	に染・橙	内増口縁 赤彩か 内面暗文 ZZ3Gr		
24	土師器	坏	(12.6)	3.6		A C E H I J	20	良好	に染・黄橙	内増口縁 赤彩 ZZ3Gr		
25	土師器	坏	(13.0)	3.7		C H I J K L	20	普通	に染・橙	内増口縁 赤彩 ZZ3Gr		
26	土師器	坏	(13.4)	3.6		A C H I K	15	普通	に染・橙	口縁部短く外反 二次的被熱顕著 ZZ3Gr		
27	土師器	高坏	15.2	6.3		A E H I J K	80	普通	に染・黄	有稜坏 赤彩 二次的被熱? ZZ3Gr No38		119-1
28	土師器	高坏	(18.6)	6.4		A C D E H I J	30	普通	に染・橙	有稜坏 赤彩 ZZ3Gr No24		
29	土師器	高坏		6.5	8.7	A C E H I K	100	普通	に染・橙	屈折脚 赤彩 内面赤色塗料付着 二次的被熱 ZZ3Gr No13		
30	土師器	高坏	5.4	9.0		C H I J K	100	良好	浅黄橙	屈折脚 端部面取付 赤彩 内面赤色塗料付着 炭化物付着(支脚転用痕?) ZZ3Gr No31		
31	土師器	高坏		5.7	(9.4)	A E H I	60	普通	橙	屈折脚 短脚 赤彩 ZZ3Gr		
32	土師器	壺	8.4	10.3		A C H I K	30	普通	橙	直口壺 赤彩不明 ZZ3Gr No19		118-7
33	土師器	小型鉢	7.5	6.2	5.2	C E H I	100	良好	に染・黄橙	ZZ3Gr No48		119-2
34	土師器	壺	(20.0)	15.0		A E H I K L	35	普通	灰黄	口縁部中に工具による凹線で稜形成 器面風化顕著 ZZ3Gr No15		119-3
35	土師器	瓶	(22.8)	7.4		C E H I K	10	普通	橙	ZZ3Gr		
36	土師器	甕	(17.2)	32.8	5.1	C H I K	25	普通	に染・赤褐	長胴化 煮沸痕 器面風化顕著 底部木葉痕 ZZ3Gr No5		119-4
37	土師器	甕	4.2	7.2		E H I	70	普通	に染・橙	煮沸痕 底部木葉痕+周辺ヘラズリ ZZ3Gr No9		
38	土師器	甕	17.4	24.5		B D E G H I K	60	普通	に染・褐	長胴化 煮沸痕 器面風化顕著 ZZ3Gr No6		119-5
39	土師器	甕	2.6	6.7		B E H I	60	普通	に染・黄橙	煮沸痕 煤付着 ZZ3Gr No9		
40	土師器	甕	3.7	6.6		C E I K	70	普通	に染・橙	煮沸痕の影響が顕著 ZZ3Gr		
41	土師器	甕	5.4	(6.8)		C E I	20	普通	に染・黄橙	長胴化 ZZ3Gr		
42	土師器	甕	4.2	6.0		A C D E H I	35	普通	に染・黄橙	煮沸痕 器面風化顕著 ZZ3Gr No7		
43	土師器	甕	5.9	(7.6)		A B C H I J	30	普通	に染・橙	煤付着 器面剥離 ZZ3Gr		
44	土師器	甕	(18.0)	7.0		B E H	15	普通	橙	長胴化 器面風化顕著 ZZ3Gr		
45	土師器	甕	(18.2)	11.0		A C E I K	20	良好	灰褐	長胴化 煮沸痕 ZZ3Gr No18		
46	土師器	甕	6.0	9.0		A C D E H I	95	普通	褐灰	煮沸痕 内面に煤付着 ZZ3Gr No32		
47	土師器	壺	5.5	9.9		C E H I K	50	普通	に染・黄橙	外面の数か所に赤色部(赤彩?) ZZ3Gr No29		
48	土師器	甕	7.7	(5.7)		A E H I K	15	普通	に染・黄橙	煮沸痕 風化顕著 ZZ3Gr No15		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
49	古ヶ谷	甕		3.8		E H	5	普通	外-黒中-橙	甲節 RL 施文 ZZ3Gr		
50	古ヶ谷	壺		4.3		C E H	5	普通	黒褐	甲節 LR 施文 ZZ3Gr		
51	須恵器	坏身		4.1		I K	20	良好	灰	坏 H 身 陶色産 TK23~TK47 最大径12.8cm A 区谷	120-2	
52	須恵器	無蓋高坏		3.1		A I J K	15	普通	灰	大型高坏 南北企産(在地)の可能性大 陶土に白色斜状物質を含む 波状文(稚拙・不鮮明) A5Gr 東	TK47併行期	120-4
53	須恵器	壺	(8.4)	5.3		I K	10	普通	灰	壺の口縁か 産地・時期不詳 A5Gr 東		120-3
54	須恵器	甕(大甕)	41.4	69.6		I K	50	良好	暗紫灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期(5世紀後半代) 口縁部に波状文1条+突帯2条+波状文2条+突帯1条+波状文1条(最上段と他では波状文の施文工具が異なる) 外面のタタキ目は本目に対して直交する方向に溝が刻まれたもの(タタキ凹部に直交する本目が観察できる) 内面の当て具痕はナゲ消し A5Gr 西 №5・28・39・89 / A5Gr 東 №5・29・48・77・82・83・87・88 / A6Gr 西 №49		120-1
55	須恵器	甕		5.3		I	5	普通	灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-1
56	須恵器	甕		3.0		I	5	普通	灰褐	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-1
57	須恵器	甕		3.0		I	5	普通	褐	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A5Gr 東		121-1
58	須恵器	甕		4.1		I	5	良好	褐灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-1
59	須恵器	甕		8.0		I	5	普通	灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-1
60	須恵器	甕		8.2		I	5	普通	灰褐	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A5Gr 東		121-1
61	須恵器	甕		3.4		I	5	普通	灰褐	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-1
62	須恵器	甕		5.6		I	5	普通	灰褐	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-2
63	須恵器	甕		6.8		E H I	5	良好	にじみ・黄緑	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 ZZ3Gr		121-2
64	須恵器	甕		9.8		H I	5	普通	灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A5Gr 東		121-2
65	須恵器	甕		8.7		I	5	普通	にじみ・黄緑	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-2
66	須恵器	甕		14.6		I	5	普通	灰褐	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A5Gr		121-3
67	須恵器	甕		10.1		I	5	普通	灰赤	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A5Gr 東		121-3
68	須恵器	甕		10.4		I	5	普通	褐灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A5Gr 東		121-4
69	須恵器	甕		3.6		I	5	普通	黄褐	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-4
70	須恵器	甕		7.4		I	5	普通	灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-4
71	須恵器	甕		5.5		I	5	普通	灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-4
72	須恵器	甕		5.9		H I	5	普通	灰	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		121-4
73	須恵器	甕		8.5		I	5	普通	灰褐	54~77同一個体 陶色産 TK23~TK47併行期 A区谷		122-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
74	須恵器	甕		5.2		I	5	普通	にじみ赤褐色	54～77同一個体 A区谷	陶色産 TK23～TK47併行期	122-1
75	須恵器	甕		5.9		HI	5	普通	にじみ橙	54～77同一個体 A区谷	陶色産 TK23～TK47併行期	122-1
76	須恵器	甕		5.3		I	5	普通	灰	54～77同一個体 A5Gr東	陶色産 TK23～TK47併行期	122-1
77	須恵器	甕		7.3		I	5	普通	暗灰黄	54～77同一個体 A5Gr東/A区谷	陶色産 TK23～TK47併行期	122-1
78	須恵器	甕		4.1		IK	5	普通	赤灰	79同一個体	陶色産 5世紀前半 自然釉付着 A1～4Gr	122-2
79	須恵器	甕		4.9		IK	5	普通	灰	78同一個体	陶色産 5世紀前半 A5Gr東	122-2
80	須恵器	甕		11.1		EIK	20	普通	灰	南北企産	A5Gr No1	
81	土師器	坏	(12.1)	4.2		ADHIK	70	普通	にじみ橙	内増口縁	内面暗文 A区谷	122-3
82	土師器	坏		11.8	3.7	ACEHIJ	20	良好	橙	内増口縁	内面暗文 二次の被熱 A5Gr東	
83	土師器	坏		(12.0)	5.1	CEHIK	50	普通	橙	内増口縁	内面暗文 A5Gr西No85	122-4
84	土師器	坏		(12.9)	5.5	AHI	45	普通	橙	内増口縁	赤色不明 内面暗文 A6Gr西/A区谷	123-1
85	土師器	坏		11.4	4.4	DH	60	不良	橙	内増口縁	内面暗文 器面剥離 赤彩? A区谷	123-2
86	土師器	坏		11.8	6.2	CEHIJ	95	普通	にじみ黄橙	内増口縁	赤彩 内面に黒色付着物 A5Gr東/A区谷	123-4
87	土師器	坏	(13.0)	4.9		BEHIJK	20	普通	橙	内増口縁	A区谷	
88	土師器	坏		12.0	4.7	AEHJK	60	良好	にじみ赤褐色	内増口縁	赤彩 A5Gr東No93	123-3
89	土師器	坏		12.2	5.7	HI	70	普通	明赤褐	内増口縁	赤彩 底部に木葉痕残 A5Gr東/A区谷	123-5
90	土師器	坏		12.7	5.0	CEGI	60	普通	赤褐～褐色	内増口縁	赤彩 二次の被熱? A区谷	123-6
91	土師器	坏		(12.0)	4.6	ACIK	25	普通	にじみ橙	口縁内縁(稜不明)	赤彩 A5Gr東	
92	土師器	坏		(15.8)	3.5	ACEHIJK	20	普通	赤褐	口縁内縁(稜不明)	赤彩 二次の被熱 A5Gr東/A区谷	
93	土師器	坏		(12.0)	3.6	ACEGHI	25	普通	にじみ橙	口縁内縁(稜不明)	A5Gr東	
94	土師器	坏		11.8	6.3	CEIJK	80	普通	暗赤灰	口縁内縁(稜不明)	深身平底 二次の被熱 A5Gr西No59/A区谷	124-1
95	土師器	坏		(12.6)	3.7	CDHI	25	良好	にじみ橙	口縁内縁(稜不明)	赤彩 A5Gr東/A区谷	
96	土師器	坏		(11.8)	3.8	EHIK	20	普通	赤褐	口縁内縁(稜不明)	赤彩 A5Gr西/A区谷	
97	土師器	坏		(12.8)	4.1	AHIK	20	普通	にじみ橙	口縁内縁(稜不明)	赤彩 A5Gr西/A区谷	
98	土師器	坏		(13.0)	4.8	CEHIK	20	普通	にじみ赤褐色	口縁内縁(稜不明)	赤彩 二次の被熱 A区谷	
99	土師器	坏		4.0		ACEHI	35	良好	にじみ橙	口縁内縁(稜不明)	平底風 赤彩 二次の被熱 A5Gr東	
100	土師器	坏		(13.0)	3.0	EH	20	良好	にじみ黄橙	口縁内縁(稜不明)	赤彩 二次の被熱 A5Gr西	
101	土師器	坏		13.7	4.0	CEHIJK	100	普通	にじみ黄橙	比企型坏 赤彩	外面に蓑状圧痕 A4Gr東No3	124-2
102	土師器	坏		(13.0)	4.4	HI	25	良好	赤	比企型坏 赤彩	A5Gr東	
103	土師器	坏		(11.6)	4.9	BEHIK	20	普通	にじみ黄橙	比企型坏 赤彩	A区谷	
104	土師器	坏		11.4	4.6	DH	80	良好	にじみ褐	比企型坏 赤彩	A5Gr谷No76	124-4
105	土師器	坏		12.8	3.1	EHIJK	65	良好	赤	比企型坏 赤彩	A5Gr東	
106	土師器	坏		(12.0)	3.4	AEHJK	25	良好	にじみ橙	比企型坏 赤彩	A5Gr東No76/A区谷	
107	土師器	坏		12.2	4.8	CEH	60	良好	赤	比企型坏 平底風 赤彩	A5Gr東/A区谷	124-5
108	土師器	坏		(12.5)	4.1	CDEHI	55	良好	にじみ赤褐色	比企型坏 赤彩	A区谷	124-3
109	土師器	坏		(10.7)	5.8	CDEHI	30	良好	灰褐	口縁部が小さく外反	赤彩 A6Gr西No50	124-6
110	土師器	坏		(13.6)	5.1	EHI	40	良好	にじみ黄橙	比企型坏 赤彩	二次の被熱 A区谷	125-1
111	土師器	坏		(13.4)	4.3	ACEHIL	25	良好	にじみ橙	比企型坏 赤彩	A5Gr東	
112	土師器	坏		13.0	4.4	ACEHIK	80	普通	にじみ黄橙	内斜口縁	A5Gr東/A区谷	125-2
113	土師器	坏		2.3	6.9	AEHJK	70	良好	にじみ黄橙	赤彩	底部木葉痕 A6GrNo30	
114	土師器	坏		(12.0)	4.1	ACIK	30	良好	灰黄褐	比企型坏 赤彩	A区谷	
115	土師器	坏		4.0		AEHJK	60	良好	にじみ黄橙	赤彩	A5Gr西No24	
116	土師器	坏		11.1	5.3	ACEHIK	100	普通	にじみ橙	坏身模倣	赤彩 外面蓑状圧痕 A6GrNo32	125-3
117	土師器	坏		10.2	4.6	AEHJK	80	良好	灰黄褐	坏身模倣	赤彩 A5Gr東No4/A区谷	125-4
118	土師器	坏		11.6	4.8	ACEHI	90	普通	にじみ赤褐色	坏身模倣	赤彩 A5GrNo68/A5Gr東	125-5
119	土師器	坏		11.6	5.0	CEIK	80	普通	橙	坏身模倣	赤彩 二次の被熱 A5GrNo43/A区谷	126-1
120	土師器	坏		10.9	4.3	AEH	70	良好	橙	坏身模倣	赤彩 二次の被熱 平底風 A5Gr西No38	126-2
121	土師器	坏		(11.2)	4.6	ACEIK	70	普通	橙	坏身模倣	赤彩 A5Gr東/A区谷	126-3
122	土師器	坏		12.1	5.7	AEEK	70	良好	にじみ赤褐色	坏身模倣	赤彩 二次の被熱 A区谷	126-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
123	土師器	環	12.6	5.5		A C D E H I	75	普通	にぶ・濁	環身模倣 赤彩 A5Gr 東		126-5
124	土師器	環	11.9	5.1		E H I K	95	普通	にぶ・濁	環蓋模倣 赤彩 A5Gr 西№45 / A区谷		127-1
125	土師器	環	12.3	4.8		C E H I K L	95	普通	赤褐	環蓋模倣 赤彩 底部本葉痕 A5Gr №40		127-2
126	土師器	環	12.2	4.6		A E H I J K	85	良好	にぶ・濁	環蓋模倣 赤彩 A5Gr 東 / A区谷		127-3
127	土師器	環	11.5	4.2		A E I K	95	良好	赤褐	環蓋模倣 赤彩 内面にツール状付着物 A5Gr 東№78 / A区谷		127-4
128	土師器	環	12.5	5.4		A C H I	85	普通	橙	北武蔵型環蓋模倣 口縁部高+浅身 A5Gr 東№71 / A5Gr 東		128-1
129	土師器	環	12.3	5.5		C D H I	70	普通	にぶ・濁	環蓋模倣 赤彩 A5Gr 東 / A区谷		126-6
130	土師器	環	11.6	4.6		C D H I	85	良好	にぶ・濁	環蓋模倣 赤彩 A5Gr 東№64 / A区谷		128-2
131	土師器	環	12.4	4.7		C H I K	80	普通	橙	北武蔵型環蓋模倣 二次的被熱 器面剥落 内面に黒色付着物 A5Gr 東№90 / A5Gr 東		128-4
132	土師器	環	(12.6)	4.9		A C H I K	30	普通	橙	北武蔵型環蓋模倣 A6Gr 西 / A区谷		
133	土師器	環	(12.4)	5.0		H I	60	良好	にぶ・赤濁	北武蔵型環蓋模倣 A区谷		128-3
134	土師器	環	(12.8)	5.0		A C H I K	25	普通	にぶ・濁	北武蔵型環蓋模倣 二次的被熱顯著 器面剥落 A区谷		
135	土師器	環	13.6	5.6		C E H I J K	90	普通	にぶ・濁	内斜口縁 赤彩 (内面口縁部のみ+塗彩時の垂れ) 二次的被熱による変色 A6Gr 西№51		129-1
136	土師器	碗	13.0	7.3		C E H I K	70	普通	にぶ・濁	口縁部外反 灰底 二次的被熱 内面に黒色付着物 A4Gr 東№4		128-5
137	土師器	環	13.7	5.9		C H I K	100	普通	橙	内斜口縁 内面暗文 二次的被熱 A5Gr 東№67		129-2
138	土師器	鉢	(10.1)	4.5	(8.4)	A C E H I K	20	普通	にぶ・黄濁	平底 口縁部直立 底部本葉痕 A区谷		
139	土師器	埴	5.0	5.0		A C E H I K	70	普通	橙	灰底 赤彩 A区谷		128-6
140	土師器	埴	5.5	4.2		A C D E H I K L	85	良好	にぶ・黄濁	平底 二次的被熱 A5Gr 東№95		129-3
141	土師器	埴	6.5	3.7		E H I	60	普通	にぶ・黄濁	平底 二次的被熱 A5Gr 東		130-1
142	土師器	小型壺	5.6	4.0		C E I J	80	普通	灰黄褐	平底 A5Gr 東		130-2
143	土師器	台付鉢	6.1	4.3		E I K	90	普通	にぶ・黄濁	台付(形成時の基底部をそのままナゲ調整) A5Gr 東		130-3
144	土師器	鉢	11.7	6.6	4.6	C E H	80	普通	にぶ・濁	赤彩 底部本葉痕 A5Gr 東№45		130-4
145	土師器	鉢	8.7	5.7	5.9	E H I J K	100	普通	にぶ・黄濁	内凹口縁 平底 二次的被熱 内面煤付着 底部無調整(扇状圧痕) A6Gr 西№48		130-5
146	土師器	鉢	(10.7)	6.6	5.5	A C D E H I K	70	普通	にぶ・濁	ヘラケズリによる平底風 A5Gr 西№58		130-6
147	土師器	鉢	(9.4)	7.7		D E H	70	良好	橙	口縁部外反 赤彩 A5Gr 東		130-7
148	土師器	鉢	(11.8)	7.2		C E H I	30	普通	にぶ・黄濁	口縁部外反(内凹気味) 二次的被熱 A区谷		
149	土師器	鉢	(11.6)	5.8		E H I	30	良好	橙	口縁部外反 赤彩 A区谷		
150	土師器	鉢	(13.0)	8.8		E H I K	60	普通	にぶ・濁	口縁部内凹 赤彩 二次的被熱 ツール状付着物 A区谷		130-8
151	土師器	鉢	(17.6)	9.2	5.9	A E H I K	25	良好	にぶ・黄濁	口縁部外反 平底 A5Gr 西№93		131-1
152	土師器	器台	(7.7)	6.4		A E H I J	30	良好	にぶ・濁	円孔3 受部内面は二次的被熱による赤色化 A6Gr 西		131-2
153	土師器	高環	14.8	9.3		C E H I K	80	普通	にぶ・濁	内凹口縁環搭載 円孔3 環部内面暗文 赤彩 A5Gr 東№67 / A5Gr 東		131-3
154	土師器	高環	14.0	10.2		A C E H I K	50	普通	にぶ・濁	内凹口縁環搭載 環部内面暗文 赤彩 二次的被熱 A6Gr 西№28 / A6G 西 / A区谷		131-4
155	土師器	高環	12.8	11.2	10.2	A E H I J K	95	良好	にぶ・赤濁	内凹口縁環搭載 焼け歪み顯著 裾端部面取り 円孔3 A5Gr 東№66・94 / A5Gr 東		131-5
156	土師器	器台	6.6	(10.5)		A C E H I J	60	普通	にぶ・濁	円孔3 赤彩 A5Gr 西№34 / A区谷		
157	土師器	高環	11.4	3.3		C E H J	50	良好	にぶ・濁	円孔3 赤彩 A5Gr 東		
158	土師器	高環	7.0	(10.6)		A C I J K	80	普通	にぶ・濁	赤彩 環部欠損後の頂部に二次的な穿孔? A5Gr 西№53		
159	土師器	高環	6.3	(10.7)		A H I K	80	良好	にぶ・赤濁	赤彩 環部上の接合部残 A5Gr 西№3		
160	土師器	高環	6.1	(10.8)		E H I J K	70	普通	明赤褐	赤彩 環部内面暗文 A5Gr 東№79		
161	土師器	高環	16.4	4.5		C E H I J	25	普通	にぶ・黄濁	有種環 赤彩 二次的被熱		
162	土師器	高環	17.0	6.2		A C D E H I K	95	良好	にぶ・黄濁	有種環 赤彩 径歪(隅丸楕円形) 二次的被熱 A5Gr 西 / A区谷		
163	土師器	高環	4.5			A C E I K	50	良好	灰褐	赤彩 二次的被熱 A5Gr 東 / A区谷		
164	土師器	高環	4.9			B C E H I J K	80	普通	にぶ・濁	有種環 赤彩 二次的被熱 煤付着 A5Gr 西 / A区谷		
165	土師器	高環	8.6			E H I	60	普通	にぶ・濁	有種環 赤彩 A5Gr 東		
166	土師器	高環	6.2			A C E I K	80	普通	にぶ・黄濁	折損脚 赤彩 A区谷		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
167	土師器	高坏		6.4	(11.9)	A E H I K	50	普通	灰黄褐	屈折脚 赤彩 A5Gr 西/A区谷		
168	土師器	高坏	(16.2)	5.3		B C E H I K	20	普通	褐灰	有残坏 斑点状に赤色塗料付着 A6Gr 西		
169	土師器	高坏	14.8	10.1		A C E I I J	70	普通	にじみ・橙	有残坏 赤彩 二次的被熱 A5Gr No74 / A5Gr 西 No74・104	131-6	
170	土師器	高坏		4.0		C E H I J	70	普通	にじみ・赤濁	有残坏 赤彩 外面一部煤付着? 器面剥離 A5Gr 東No47		
171	土師器	高坏		4.5		C E	60	普通	暗灰黄	有残坏 二次的被熱 A6Gr 西		
172	土師器	高坏		8.6		C D E H I	80	普通	橙	有残坏 短脚 赤彩 A5Gr 西No54		
173	土師器	高坏		5.3		A C K	90	普通	にじみ・橙	(屈折脚) 短脚 赤彩 A5Gr 東		
174	土師器	高坏		9.0		A E H I K	55	普通	にじみ・橙	(屈折脚) 赤彩 A区谷		
175	土師器	高坏	14.8	8.8	最大径(9.4)	A E H I K	75	普通	にじみ・橙	有残坏短脚 A6Gr No34 / A6Gr / A区谷	132-1	
176	土師器	高坏	(17.9)	14.5	13.3	A C E R I I K	40	普通	灰黄褐	有残坏屈折脚 赤彩? A6Gr 西No52 / A6Gr 西/A区谷	132-2	
177	土師器	高坏		6.0		E H I	40	普通	にじみ・橙	(屈折脚) 赤彩 二次的被熱 A区谷		
178	土師器	高坏		7.8	(10.0)	C E H I K	50	普通	赤褐	屈折脚 赤彩 A5Gr 東No37		
179	土師器	高坏		8.7		A E H I K	70	良好	にじみ・橙	(有残坏屈折脚) 二次的被熱 器面剥離 A6Gr 西		
180	土師器	高坏		6.3	(13.2)	A C H I	60	普通	橙	屈折脚 赤彩 A区谷		
181	土師器	高坏		7.6	10.8	A C D H I	95	普通	橙	屈折脚 二次的被熱 A5Gr 西No55		
182	土師器	高坏		7.7	最大径(12.6)	C E H I K	70	普通	にじみ・橙	屈折短脚 赤彩 A5Gr 西No34 / A区谷		
183	土師器	高坏		6.6	最大径(10.2)	A C E I K	80	普通	にじみ・赤濁	屈折脚 赤彩 二次的被熱 A5Gr 東No82		
184	土師器	高坏	15.5	14.6	9.2	A D H I K	95	良好	灰黄褐	台付鉢的 赤彩 丁寧な器面仕上げ A6Gr 西No53 / A区谷	132-3	
185	土師器	壺	10.9	5.6		A E H I K	70	良好	灰黄褐	有段口縁 赤彩 A5Gr 東/A区谷	132-4	
186	土師器	埴		9.9		A C E H I K	100	良好	赤褐	扁平球胴 赤彩 二次的被熱 A5Gr 西No59 / A区谷	132-5	
187	土師器	埴	8.2	13.5	3.6	A C D E H I	95	良好	にじみ・黄橙	胴部・胴下半に角張りをもつ 赤彩 二次的被熱 A4Gr 東No2	132-6	
188	土師器	埴	9.3	15.0		A D E H I	95	良好	にじみ・黄橙	口縁部に沈線 赤彩 二次的被熱 A5Gr 東No15	132-7	
189	土師器	埴	10.2	14.4	6.4	C E H I K	85	普通	灰黄褐	単口縁 底部平底底 赤彩 A5Gr 西No101 / A区谷	132-8	
190	土師器	埴	(9.4)	13.5		E H I	80	普通	にじみ・黄橙	口縁部に沈線 赤彩 A5Gr 東No50 / A5Gr 東	133-1	
191	土師器	短頸壺	(9.6)	6.1		E H I	30	普通	にじみ・橙	短頸 赤彩 A区谷		
192	土師器	埴		7.5		A E H I K	70	普通	にじみ・黄橙	赤彩 二次的被熱 A5Gr 西No72 / A区谷	133-2	
193	土師器	小型壺	9.9	10.9	7.0	A C E I K	95	普通	明黄褐	二次的被熱(凝状物質の炭化痕付着) A5Gr 西No33 / A区谷	133-3	
194	土師器	小型壺	12.8	15.7	5.5	E H I	70	普通	にじみ・黄橙	直立した頸部から口縁部外側 A5Gr 東No95	133-4	
195	土師器	小型壺		2.2	6.1	E H J	70	良好	にじみ・黄橙	赤彩 A区谷		
196	土師器	甌	(23.6)	20.2		A E H J	10	普通	にじみ・黄橙	把手付 直線的な器形 A5Gr 東/A5Gr 西/A区谷	133-5	
197	土師器	甌	24.0	27.3	9.5	C E I J	85	普通	にじみ・橙	把手付(把手位置が相対点からずれる) 把手下に最大径 二次的被熱 煤付着 A5Gr 東/A区谷	133-6	
198	土師器	壺	(16.0)	4.3		C H I K	20	普通	にじみ・黄橙	口縁部に形骸化した段 器面風化顯著 A区谷		
199	土師器	壺	(18.4)	5.6		A E H I K	15	普通	灰黄	口縁部に形骸化した段 A6Gr 西		
200	土師器	甕	18.6	15.0		E H I K	50	普通	にじみ・褐	大型胴張 A5Gr No74 / A5Gr 西/A区谷		
201	土師器	甕	16.5	24.3	7.7	A C E H I K	90	普通	にじみ・赤濁	球形扁平底 ハタ残 煤付着 A6Gr 西/A区谷	133-7	
202	土師器	甕	21.6	31.2	6.9	C E H I K	70	普通	にじみ・褐	広口胴張 煮沸痕 煤付着 A6Gr 西No41 / A区谷	134-1	
203	土師器	甕	(17.8)	10.2		C E K	20	普通	にじみ・褐	長胴化出現 煮沸痕 煤付着 A5Gr 西No90		
204	土師器	甕	(20.8)	15.9		A C E H I K	15	普通	にじみ・橙	長胴化出現 A6Gr 西/A区谷		
205	土師器	甕	17.9	29.8	8.5	I K	50	普通	橙	長胴化出現 煮沸痕 煤付着 A5Gr 東No91 / A5Gr 東/A区谷	134-2	
206	土師器	甕	16.2	29.0	6.9	A C E I K	80	普通	にじみ・黄橙	長胴化出現 A5Gr 西No41・42・43 / A5Gr 西/A区谷	134-3	
207	土師器	甕	12.1	21.4	6.5	A C E H I K	95	良好	にじみ・橙	小型 煤付着 A5Gr 東No92	134-4	
208	土師器	甕	(16.0)	5.7		A C E H I	20	普通	にじみ・黄橙	口縁部に赤色塗料付着 A区谷		
209	土師器	甕	(18.0)	6.5		E G H J	30	良好	にじみ・黄橙	A区谷		
210	土師器	甕		6.5	6.2	A C E I K	70	普通	灰黄褐	二次的被熱 A区谷		
211	土師器	甕		7.3	(6.0)	E H	25	普通	にじみ・赤濁	二次的被熱 炭化物付着 A区谷		
212	土師器	甕		2.7	7.8	E H J	50	普通	にじみ・黄濁	二次的被熱 煤付着 A5Gr 西No99		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
213	土師器	甕		3.0	6.2	ACEHIK	80	普通	にぶ赤褐色	二次的焼熱 底部にはケズリ後の草茎圧痕残	A5Gr 西No2	
214	土師器	甕		2.3	11.0	ACEHIK	85	普通	にぶ黄褐色	二次的焼熱 煤付着	A5Gr 東No69	
215	土師器	甕		1.9	7.1	CEHI	70	不良	にぶ褐色	二次的焼熱 器面剥離顕著	A5Gr 西/A区谷	
216	土師器	甕	(14.0)	15.1		BEHIK	25	普通	明赤褐色	長嗣化出現 口径小 煮沸痕 煤付着	A5Gr 西No94	
217	土師器	甕	(17.0)	6.6		CDHI	40	良好	にぶ黄褐色	煮沸痕 全面煤付着	A5Gr 東	
218	土師器	甕	(20.4)	5.5		EHIK	20	普通	にぶ褐色	広口胴張 煮沸痕 煤付着	A区谷	
219	土師器	甕		7.4	7.0	ACDEHIK	70	普通	にぶ黄褐色	二次的焼熱 煤付着	A5Gr 西No56	
220	土師器	甕		17.6	6.0	A E I K	55	普通	灰黄	長嗣化出現 煮沸痕 煤付着	A6Gr 西No47	
221	土師器	甕	(17.4)	21.2		DEH	30	普通	浅黄褐色	長嗣化 煮沸痕 煤付着	A5Gr 東/A6Gr 西	
222	土師器	甕		5.2	4.4	A C H I K	30	普通	にぶ黄褐色	底部ヘラケズリ後の草茎圧痕 内面に煤付着物	A5Gr No1/A区谷	
223	土師器	甕		4.7	7.0	BCEHIK	40	普通	にぶ黄褐色	A5Gr 東		
224	土師器	甕		3.8	9.2	ACEHIK	70	普通	浅黄	A5Gr 東No44		
225	土師器	甕		15.1	6.2	HI	40	普通	にぶ黄褐色	長嗣化出現 煤付着 底部木葉痕	A5Gr 東/A6Gr 西	
226	吉ヶ谷	壺	(10.8)	11.3	6.8	G I	50	良好	黒褐色	短頸壺 外面頸部から胴部上半に単踵 RL 施文	A 区谷	134-5
227	吉ヶ谷	壺		4.3		A H	5	良好	にぶ褐色	単踵 RL 施文 無文部赤彩	A5Gr 西/A区谷	
228	吉ヶ谷	壺		4.4		E H J	5	良好	明褐色	単踵 LR 施文	A5Gr 東	
番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)		状態		出土位置/備考	図版	
229	滑石	剣形品	3.770	2.130	0.330	4.3		模造品		2ヶ所穿孔あり ZZ3Gr	134-6	
230	滑石	剣形品	3.210	2.150	0.460	4.3		模造品		2ヶ所穿孔あり A5Gr 西No61	135-1	
231	滑石	剣形品	2.990	2.390	0.290	4.4		模造品		下半部欠損 穿孔あり A区谷 A5Gr No86	135-2	
232	碧玉	管玉	1.850	1.710	0.710	1.8				A区谷 A5Gr No60	135-3	
233	凝灰岩	砥石	7.250	3.400	3.000	67.7				6面使用 A5Gr 谷	135-4	
234	緑泥片岩	板碑	12.300	12.800	2.600	571.9				欠損部分のため刻字判読不能 A5~8Gr	135-5	

139～143は埴・壺形の小型品で、143には台が付く。152は小型器台で脚部に円孔が3孔穿たれている。153～155は口縁部が内彎する坏部に裾広がり脚が付く高坏である。坏部内面には暗文が施され、脚部には円孔3が穿孔されている。156～158も同形態の高坏の脚と推定される。159～183は有稜坏屈折脚の高坏である。175のように脚部が極端に短いものも含まれている。184は比較的大型の鉢に裾広がり脚が付く。

185～190・192は埴、191は短頸壺、193は小型甕、194・195は小型壺である。

196・197の甕には、胴部が直線的なものと、丸く張り出すものがある。いずれにも把手が付く。

198・199は壺の口縁で、形骸化した段が巡っている。200～225は甕である。胴部の張りが強く残るもの(200～202)、長嗣化の兆しが窺われるものの胴部の張りが残るもの(203～205・216・220・225)、長嗣化したもの(206・221)とバラエティーがある。

土師器の器形には古墳時代前期(吉ヶ谷系を含む)から古墳時代後期前葉まで、長期にわたっている。しかし、古墳時代前期段階の遺物は少なく、概ね、錢塚・城敷IV期古段階～新段階を中心としている。

229～231は滑石製の剣形品である。

229は上端・側面が直線的な剣菱形を呈し、鐔の表現が無い片切刃である。孔は上端部と剣先部に1孔ずつ計2孔が穿たれている。長さ3.77cm・幅2.13cm・厚さ0.33cm、重さ4.3gである。(ZZ3Gr)

230は上端が丸く、側面が直線的な幅狭な扇形を呈している。鐔の表現が無く、左側面が薄く仕上げられた切刃である。孔は上端部と剣先部に1孔ずつ計2孔が穿たれている。長さ3.21cm・幅2.15cm・厚さ0.46cm、重さ4.3gである。(A5Gr No61)

231は下半部と上端の一部を欠損する。上端は直線的であるが、側面は丸みをもった形状であ

る。鐮の表現が無く、平坦な造りである。孔は上端に1孔穿たれている。長さ2.99cm・幅2.39cm・厚さ0.29cm、重さ4.4gである。(A5Gr No86)

232は碧玉製の管玉である。孔は両面から穿たれ、孔径0.22cmである。長さ1.85cm・幅0.71cm・厚さ0.71cm、重さ1.8gである。(A5Gr No60)

233は砥石である。角棒状の6面ともに使用痕がみられる。使用頻度が高く、中央の挟り込みが著しい。長さ7.25cm・幅3.40cm・厚さ3.00cm、重さ67.7g、石材は凝灰岩である。

234は板碑である。連座と文字の一部がみられるが、残存部が僅かなため、判読はできない。現存長12.3cm・幅12.8cm・厚さ2.6cm、重さ571.9gである。

第234図235～第240図274は木製品である。

235は、工具の楔と思われる。形状から建築部材の角柱材等を転用したものと推定される。下半部に表裏二面からケズリを施し、刃先状に加工している。加工面部からは、楔として使用した痕跡も確認できる。現存長24.5cm、幅8.6cm、厚さ5.8cmである。木取りは板目、樹種はツブラジイである。(図版168-1/整理番号187/No9/ST2-686)

236～238は、農具の膝柄に装着する平鋏である。

236は、刃部と軸部の一部が残存している。上面は炭化し、調整痕等は不明である。背面には整形時のケズリ痕がみられる。軸部の上面には横方向の細い擦れ痕がみられ、柄に装着した際の紐状素材の緊縛痕と推定される。また、軸部背面には炭化部が認められていない。このことから、柄に装着された状態で被熱し、柄と密着していた箇所が炭化を免れたものと予想される。現存長34.7cm、軸部幅4.2cm、厚さ1.1cm、刃部現存幅9.3cm、厚さ1.2cmである。木取りは柾目である。樹種は2ヶ所で同定を行い、通常はコナラ属アカガシ亜属(V-2)とされるものであるが、このなかでイチ

イガシ(V-1)に特定できた資料である。(図版168-2/整理番号294/No41/ST2-475)

237は、刃部から軸部の境付近が残存している。左側面の挟りから、軸部がヘタ状・笠状に造られるナスビ形鋏と思われる。現存長11.9cm、現存幅5.1cm、厚さ1.3cmである。木取りは柾目、樹種はコナラ属クスギ節である。(図版168-3/整理番号220/No7/ST2-1139)

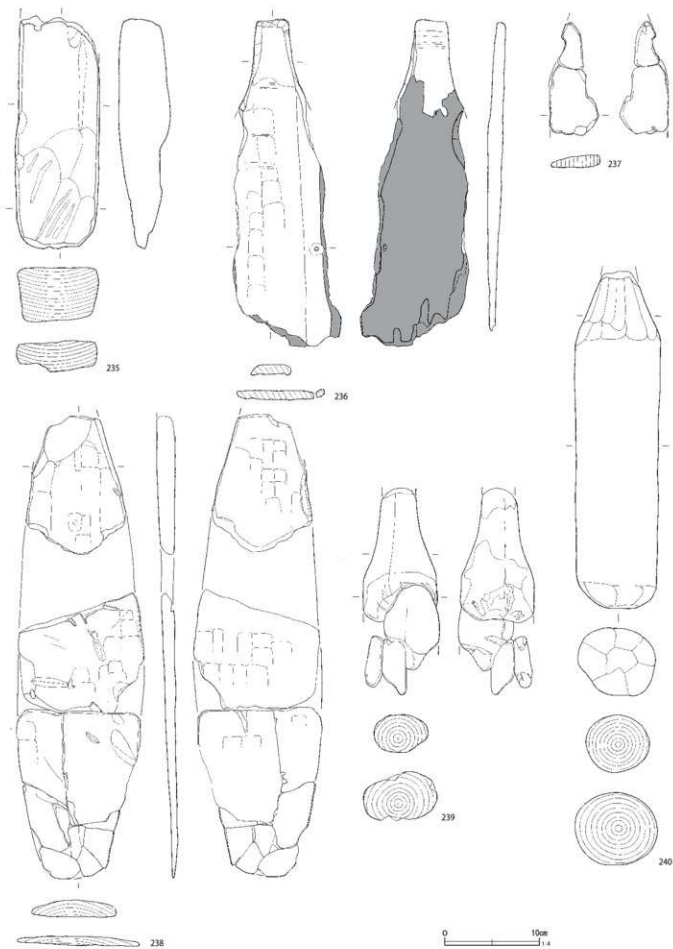
238は、刃部のみが残存し、途中も欠損する。長さをもつ大振りの刃部であるが、幅が狭い。表裏面ともにケズリ加工が施され、軸部から刃先に向かって薄く仕上げられている。上端の軸部付近では素材の丸みを残存しているが、先端部に至っては鋭い刃先に整形されている。現存する復元長48.8cm、幅13.0cm、厚さ0.2～1.8cmである。木取りは板目、樹種はイチイガシである。(図版168-4/整理番号42/No4/ST2-509)

239～242は、農具の竪杵である。

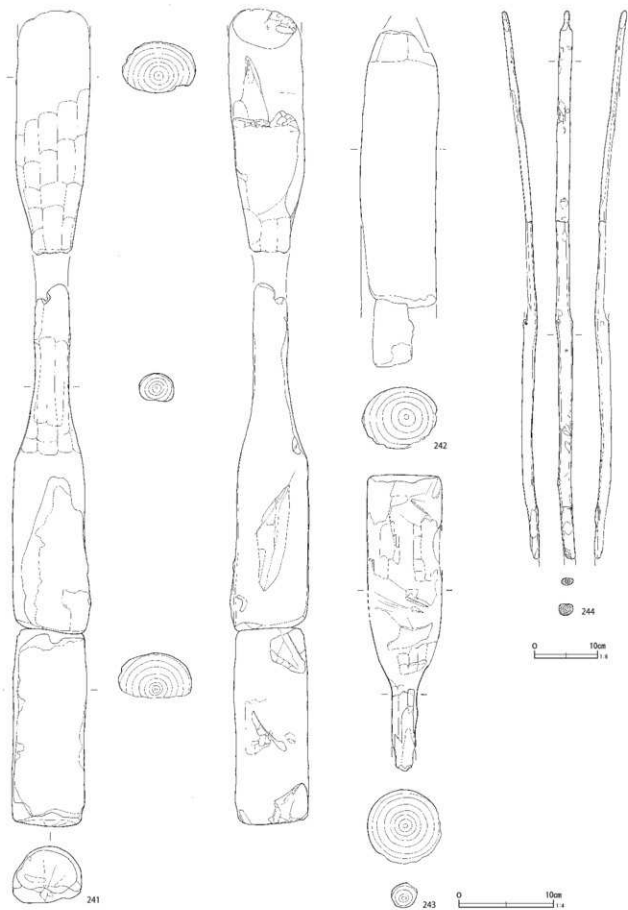
239は、握部下端から搦部上半部のみが残存である。芯持ちの丸木材を加工したものであるが、器面の磨滅により加工痕は不明瞭である。また、搦部から握部への遺構部分付近は炭化している。現存長21.9cm、搦部幅7.8cm、搦部厚さ5.1cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版169-1/整理番号54/No27/ST2-424)

240は、一方の搦部のみが残存で、握部ともう一方の搦部は欠損している。芯持ちの丸木材の中央部を削り込んで握部を形成している。搦部の端面はケズリによって半球状に面取りされている。使用された痕跡は不明瞭で、あまり使い込まれていない様子と思われる。現存長35.9cm、搦部幅8.7cm・厚さ7.7cm、握部付近の幅6.7cm・厚さ6.1cmである。樹種はツバキ属である。(図版169-2/整理番号5/No98/ST2-400)

241は、上方の搦部片と下方の握部～搦部片は直接には接合しないが、同一の個体である。握部の長さによって大きさが異なってくるが、本来は



第234图 第4号满踪第4地点出土遗物(12)



第235图 第4号满跡第4地点出土遺物 (13)

1m前後のものと復元される。芯持丸木材の中央付近を削り込んで握部を形成し、ケズリ痕を明瞭に残す。上下の端面は垂直に切り落とし、微かに工具痕が観察できる。側面部の加工は少なく、側面部の処々に樹皮が残存する。上方の搦部先端と下方の搦部背面は欠損している。現存長25.9+57.0+ α cmで、径は上搦部7.7cm、握部3.6cm、下搦部7.7cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版169-3/整理番号177/ST2-342-343)

242は、芯持ち丸木材から削り出して成形したものである。一方の搦部のみが残存で、握部に移行する箇所にはケズリ加工が施されている。側面部に加工痕はみられない。下端部および背面部は欠損している。現存長35.6cm、幅7.8cm、厚さ6.5cmである。樹種はツバキ属である。(図版170-1/整理番号262/No2/ST2-345)

243は、農具の横鋸である。丸木材から握部を削り出した一木造りである。握部は折損し、一部のみ残存している。敲打部の先端は平滑であるが、摩擦が激しく切断加工・調整加工の痕跡は不明である。側面では、約1/2面には調整痕等が見られないが、残り1/2面には使用痕(敲打痕)が残されている。現存長31.3cm、敲打部径7.8cm、握部径2.7cmである。木取りは丸木、樹種はヒノキである。(図版170-2/整理番号101/No1/ST2-401)

244は、弓である。芯持材に加工を施したもので、上端の末弰から鳥打・矢摺・弮(握)付近までが残存する。矢摺・弮部は枝葉を払い、樹皮を剥いた材の内側をわずかに削っている。鳥打部から末弰部にかけては半截状に内側を削っていると思われるが、現状ではこの箇所は表面が剝離している。末弰部は正面および左右両側から削り込まれて成形されている。また末弰部には弦をかけたような痕跡がみられず、使用回数が少なかったのか、もしくは製作途中に欠損してしまった可能性

も考えられる。現存長87.2cm、幅2.0~2.2cm、厚さ1.1~1.9cmである。樹種はイヌガヤである。(図版170-3/整理番号182-1/No97/ST2-606)

245~253・256~258は、建築部材である。

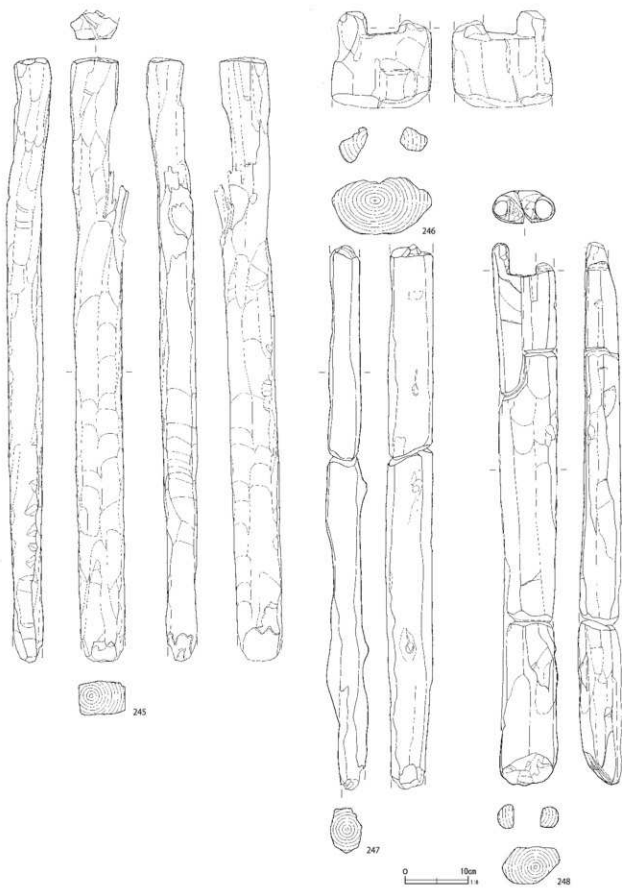
245は、角材である。表面はケズリ加工によって面取りされ、断面形は整った長方形を呈している。上部には器面が伏れ、ささくれ立った箇所がある。元々は分枝式の角材で、枝部が折損した段階に大きく破損したものと推定される。上端面には粗い切断痕が残る。この木製品は、転用に下方は欠損している。現在長96.2cm、幅7.3cm、厚さ5.4cmである。木取りは芯持丸木、樹種はイヌガヤである。(図版171-1/整理番号272/No50/ST2-640)

246は柱材の先端付近で、先端には輪薙ぎ込み仕口が形成されている。現存長15.3cm、幅15.7cm、厚さ9.0cmで、重厚な建造物の柱材と推定される。木取りは芯持丸木、樹種はサカキである。(図版172-1/整理番号265-1/No18/ST2-1178)

247は、柱状の部材である。芯持丸木材の表面にケズリを施し、断面が丸をもつ長方形に整形されている。継手・仕口等の加工は確認できない。上下ともに欠損し、現存長86.9cm、幅5.0cm、厚さ7.2cmである。樹種はサカキである。(図版171-2/整理番号188-2/No57/ST2-603)

248は、先端に輪薙ぎ込み仕口が形成された柱材である。芯持丸木を削り、断面は楕円形を呈する。先端の出柄の一方は欠損する。下端面には極めて粗い工具痕が残され、転用時に二次的に切断されたものと判断される。現存長86.0cm、幅9.1cm、厚さ5.8cmである。樹種はツブラジイである。(図版172-4/整理番号280-1/No92/ST2-610)

249は柱状の部材である。芯持丸木の上端部に出柄が形成され、下部には欠き込みが施される。ここより下部は欠損する。現存長40.8cm、幅5.8



第236组 第4号满迹第4地点出土遗物 (14)

cm、厚さ7.2cmである。樹種は同定していない。(図版173-1/整理番号188-1/No57)

250は出納をもち、出納から直接繋がる側面は原形を保っているが、その反対側は折損面である。よって、棒状材ではなく、やや幅をもつ角材もしくは板材と推定される。図下端部は加工痕が粗く、二次的に切断されたものと判断される。二次転用が想定されるが、用途は不明である。現存長27.0cm、現存幅6.8cm、厚さ4.3cmである。木取りは割材、樹種はモミ属である。(図版173-2/整理番号30/No81/ST2-1171)

251は、先端に出納が形成された部材である。先端付近のみの残存で、現存長13.2cm、幅7.6cm、厚さ3.8cmである。木取りは柾目、樹種は同定していない。(図版168-5/整理番号265-2/No18)

252は、板材である。上端部には出納状に、下方には方形の欠き込み状に整形されている。上下ともに欠損する。現存長79.5cm、幅12.4cm、厚さ1.9~2.3cmである。表裏面・側面は極めて平滑に仕上げられている。木取りは板目、樹種はモミ属である。(図版174-1/整理番号271/No75/ST2-397)

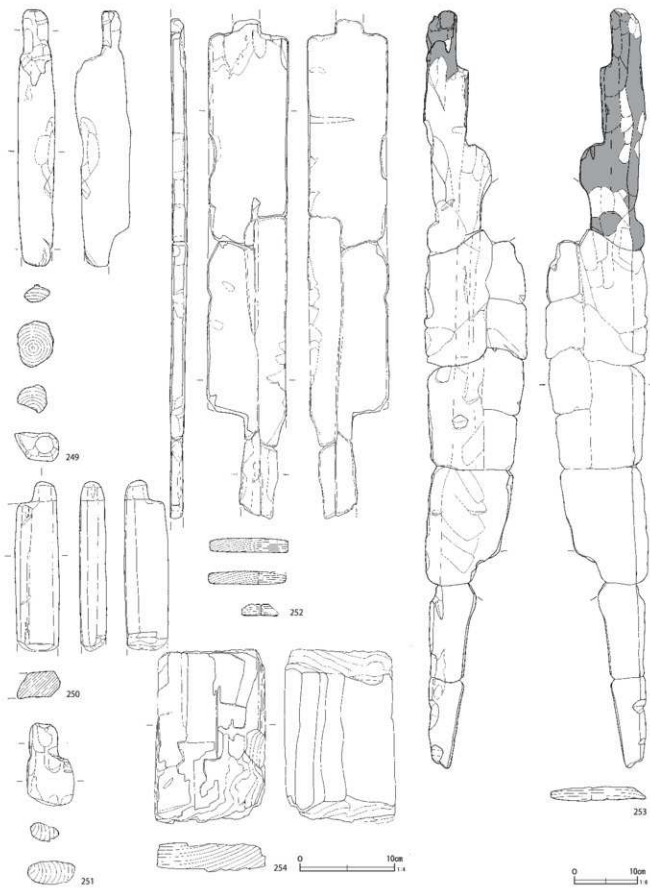
253は、両端部の一部が欠損した蹴放しと思われる。本来ならば、両端から方立仕口・辺付仕口・軸穴が成形されていたと思われるが、いずれも一方のみの残存である。現存長120.4cm、現存幅15.1cm、厚さ2.3cmである。軸穴の心々距離は、約58cmほどである。木取りは板目、樹種はサクラ属である。全体的に摩耗が激しく、図上端付近には炭化が見られる。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代1690±30yrBP、暦年較正年代265calAD-272calAD・335calAD-398calAD・258calAD-299calAD・319calAD-414calADである。(図版173-3/整理番号13・24-1・24-2・183・228-1・228-2/No44/ST2-403・405・406・687・688)

256は板材で、欠き込みによる仕口加工が施さ

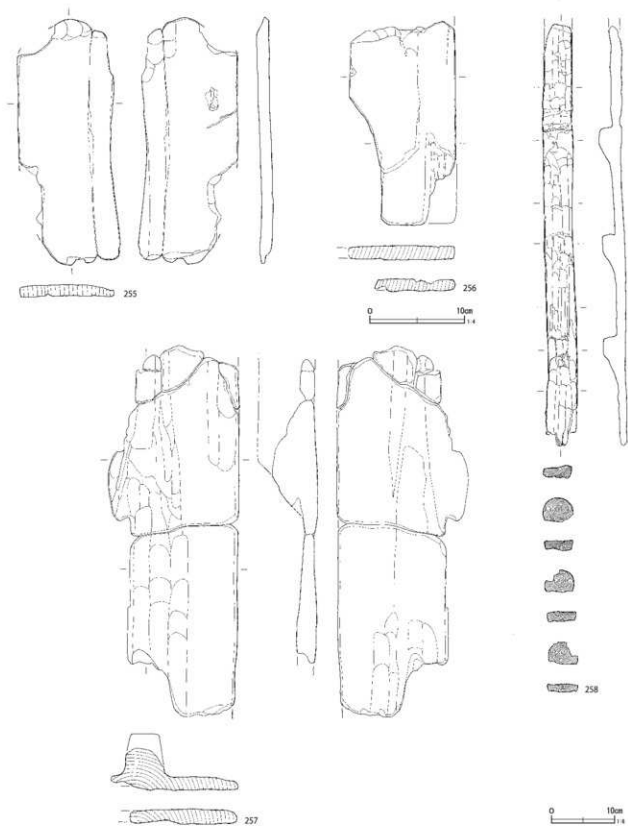
れている。表裏面・側面・端面は平滑に仕上げられている。現存長21.5cm、幅8.6~11.3cm、厚さ1.3~1.6cmである。仕口加工の位置から床板も想定されるが、厚さが2cm未満と薄いことから、開口部の楣・蹴放し等の部材の可能性もある。木取りは追柾目、樹種はモミ属である。(図版175-1/整理番号263/ST2-689)

257は、扉板である。板目材を削り出して凹受けを造り出している。板の厚さの薄い方を上方、厚い方を下方と推定すると、左扉の凹受け下半付近のみが残存している状態である。凹受けもごく一部が残っているにすぎず、凹穴は確認できない。側面部も摩耗が激しく、丸みをもつ断面形態である。表面部は凹受けを中心にケズリ痕がみられるが、平滑に仕上げられている。背面にはごく一部にケズリが施されているが、木取り時の凹凸が削られずに残されている。現存長59.1cm、現存幅20.2cm、厚さ2.5cm、凹受けは高さ4.3cm程が残存する。木取りは芯に近い箇所を使用した板目、樹種はムクロジである。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代BP1760±20、暦年較正年代calAD242-calAD260、calAD282-calAD323、calAD227-calAD343である。(図版176-1・2/整理番号117/No84/ST2-481)

258は、芯持ちの丸木材を削り込んで成形した一木造りの刻み梯子である。上方が折損し、上面が反り上がる折損部の断面形状から、少なくとも一段以上の階段が存在する。下端の固定仕口には出納が形成されている。階段部は手斧等の工具によって抉り込むように削り出され、工具痕を明瞭に残す。上面部は垂直に成形する。背面は平坦に加工され、側面は各段の薄くなった付近等、部分的に面取りが施されている。残存する階段は3カ所で、段間幅は下から第1段45.5cm(出納先端から)、第2段43.1cm、第3段44.9cm、第4段43.6cm(現存)である。また階段の高さと厚さは、第1段5.5cm・9.7cm、第2段5.4cm・9.5cm、第3段



第237图 第4号满迹第4地点出土遗物 (15)



第238图 第4号清跡第4地点出土遺物(16)

5.3cm・10.3cmである。下端の出納は長さ4.9cm、幅5.0cm、厚さ2.9cmである。長さ177.4cm、幅12.0～12.9cm、段間中央付近の厚さは第1段3.6cm、第2段4.5cm、第3段4.4cm、第4段5.6cmである。樹種はモミ属である。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代1570±30、暦年較正年代435calAD-493calAD・507calAD-521calAD・527calAD-540calAD・424calAD-557calADである。(図版177-1/整理番号63/No89/ST2-590)

254・255・259～261は、用途が不明な板材である。

254は、表面の剥離が激しく、原形をとどめている箇所は極めて少ない。現存長18.6cm、現存幅11.5cm、現存厚3.1cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。(図版172-2/整理番号144/No26/ST2-394)

255は、現存長25.9cm、幅10.0cm、厚さ1.2cmである。木取りは柾目、樹種はカヤである。(図版172-3/整理番号37/No11/ST2-1176)

259は、厚さが1.3cmほどであり、建築部材以外の紡織具や調度品等の部材が候補としてあげられる。下端は折損する。側面には明瞭な面取り加工がなく不明瞭で、本来の形状が残存しているものか判断は困難である。現存長32.5cm、幅15.3cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。一部、炭化している。(図版178-1/整理番号76/No6/ST2-402)

260は、比較的薄い板材のため建築部材ではなく、紡織具や調度品の部材の可能性が。側面はケズリによって面取りされている。長辺の一方は直線的であるが、対辺は両端部が成形され、幅がやや細くなっている。特に変換部では挟り込んだようなケズリが施されている。長さ83.1cm、幅15.7cm・上端幅13.3cm・下端幅12.9cm、厚さ1.4cm・下端部0.9cmである。木取りは板目、樹種はカヤである。(図版178-2/整理番号9/No72/ST2-635)

261は幅狭な板材で、建築部材以外の紡織具や調度品等の部材が、候補としてあげられる。上端部は台形に整形され、直下には、長手方向直交する溝状の欠き込みが加工されている。その背面には、非貫通の柄状加工がみられる。表裏面・側面には丁寧に面が形成され、断面は整った長方形を呈する。下方は欠損し、現存長66.5cm、幅5.1cm、厚さ2.3cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。(図版174-2/整理番号215/No35/ST2-638)

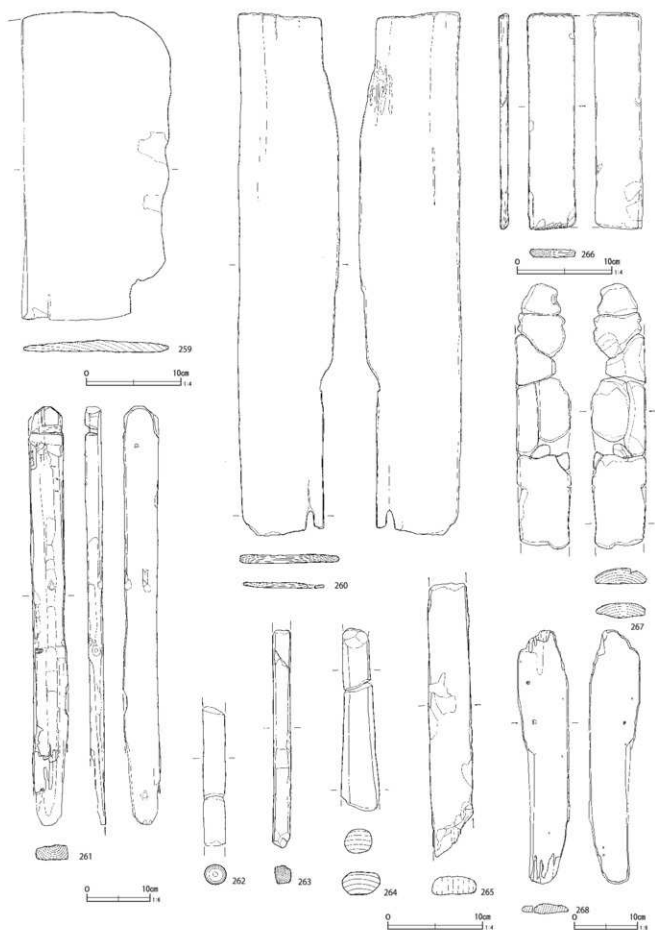
262は、用途不明の棒状材である。両端とも折損している。芯持丸木材で、目立った加工痕は確認できない。現存長14.7cm、幅2.3cm、厚さ2.1cmである。樹種はエノキ属である。(図版175-3/整理番号55/No23/ST2-422)

263は、棒状の割材の4側面を面取り加工し、細い角棒状に成形したものである。用途は不明である。上端は杭先状に加工して尖らせた後、焼き入れている。下方は欠損している。現存長23.0cm、幅1.8cm、厚さ1.9cmである。樹種はスギである。(図版175-4/整理番号82-1/ST2-1174)

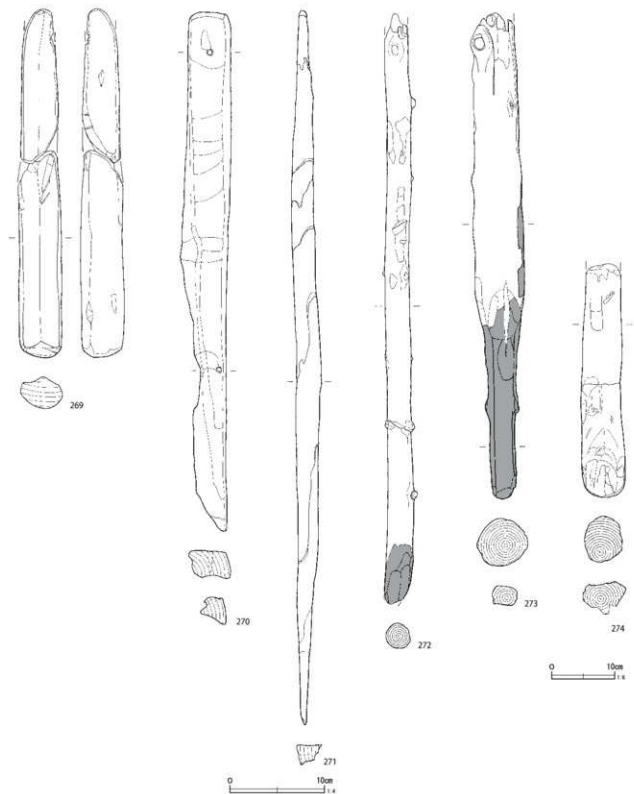
264は、農具等の柄もしくは用途不明の棒状部材である。芯無材を削り出したもので、上下両端ともに折損する。現存長19.3cm、幅は上端2.9cm・下端4.1cm、厚さは上端2.6cm・下端2.4cmである。太さは、上から下に向かって太くなる。樹種はクスノキ科である。(図版176-3/整理番号75/No36/ST2-421)

265は用途不明の棒状板材であるが、候補として紡織関係の部材が考えられる。上下両端ともに折損する。側面部の面取りが弱く、断面形状は若干丸みを帯びて見えるが、上下面ともに平滑に仕上げられた材である。現存長28.9cm、幅4.7cm、厚さ2.0cmである。木取りは柾目、樹種はクワ属である。側面の一部が炭化している。(図版178-3/整理番号71/No71/ST2-423)

266は、用途不明の板材である。上下端ともに、



第239图 第4号溝跡第4地点出土遺物 (17)



第240図 第4号溝跡第4地点出土遺物 (18)

二次的加工と推定される、粗い切断痕がみられる。側面部の一方には折損痕が残り、現状よりも幅広の板材であった。木取りから、自然に折れる状況

は考え難く、痕跡は捉えられていないが、人為的に切断された可能性が高い。長さ22.8cm、幅4.8cm、厚さ1.0cmである。大きさから、箱の側板等へ

の転用が候補としてあげられる。木取りは板目、樹種はスギである。(図版175-2/整理番号255/一括/ST2-396)

267は、板目に木取りされた周辺材を加工した、用途不明の板材である。樹木の外側にあたる面には丸みが残り、内側面では平坦な箇所と中央の盛り上がりが残存した箇所がある。側面は、ケズリによって面取り加工が施されている。両端とも欠損し、現存長42.1cm、中央付近の幅8.4cm・厚さ2.4cm、右端付近の幅7.7cm・厚さ2.3cmである。樹種は同定していない。(図版178-4/整理番号83/No11)

268は周辺部すべてが欠損面であり、用途が不明な板材である。現存長40.2cm、現存幅7.5cm、厚さ1.8cmである。木取りは追柵目、樹種はモミ属である。(図版179-1/整理番号19/No85/ST2-1041)

269は、農具等の柄もしくは用途不明の棒状部材である。図上端は折損し、下端部は面取りされている。太さは上端から下端に向かって太くなる。現存長36.8cm、幅4.4cm、厚さ3.4cmである。芯無し削り出で、樹種はムクロジである。(図版176-4/整理番号45/No44/ST2-1177)

270は、用途不明の角材である。2ヶ所に木釘が打ち込まれていることから、建築部材以外の調度品などの部材と推定される。上方の木釘は垂直に打ち込まれ、貫通はしない。下方の木釘は斜めに打ち込まれている。現存長55.0cm、幅4.4cm、厚さ3.0cmである。木取りは芯持割材、樹種はモミ属である。(図版175-5/整理番号182-3/No97/ST2-608)

271は、用途不明の棒状割材で、断面は三角形を呈する。使用目的があって削り出したものか(転用も含む)、大型部材の欠損破片かの判断も困難である。現存長75.8cm、幅2.7cm、厚さ2.1cmである。樹種はカヤである。(図版179-3/整理番号182-2/No97/ST2-607)

272~274は、杭である。

272は、芯持丸木の枝葉を取り払った材の先端に杭先加工を施し、焼きを入れて強度を増している。先端と上方を欠損し、現存長93.2cm、幅3.8cm、厚さ4.0cmである。樹種はモミ属である。垂木等の建築部材が転用された可能性もあるが、二次的加工痕等は観察できない。(図版178-5/整理番号216/No74/ST2-1172)

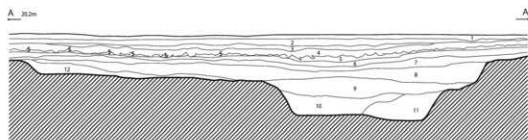
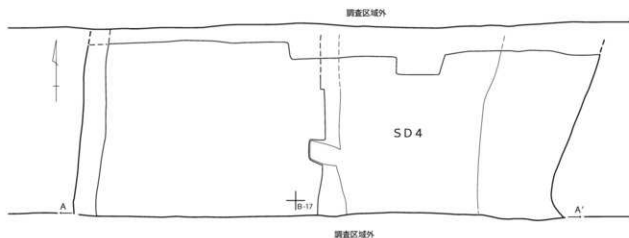
273は、長い通し納をもつ柱材を転用したものと推定される。出納部分を杭先に利用し、納の根元付近に二次加工を加えて段を消失している。細い出納部分には焼きを入れて強度を増している。現存長76.8cm、幅8.1cm、厚さ7.5cm、先端部(納部)幅4.0cm、厚さ3.2cmである。木取りは芯持丸木、樹種は不明である。一部炭化(図版179-4/整理番号193/No73/ST2-602)

274は、先端には概ね3面に亘る杭先加工が施され、断面が三角形を呈している。ただし、先端は鋭利に尖らずに丸く仕上げられている。また加工痕も粗く、二次的加工の可能性が高く、垂木等の建築部材などを転用したものと想定される。上端は欠損する。現存長36.8cm、幅6.0cm、厚さ7.3cm、杭先部幅6.8cm、厚さ5.1cmである。木取りは芯持丸木、樹種は同定していない。(図版179-2/整理番号85/No42)

第4号溝跡第5地点(第241・242図)

第4号溝跡第5地点は、A・B-16・17グリッドに位置する。第4地点から集落内に流れ込んできた流路が、第2地点→第1地点→第3地点と經由して南下する経路上にあたる。北から南方へ、ぼぼ方位に沿っている。数多くの住居跡が発見された西側には、テラスが付設されている。延長5.9mが検出され、本流部は幅7.4~8.9m・確認面からの深さ1.95mを測る。

断面図では、東岸には中段が確認されているが、発掘調査時には検出することができなかった。第1~4層が現代の水田土壌、第5~7層が第4号



SD4 第5地点

- | | | |
|------------------------------------------------------------|----------|---------------------------|
| 1 現耕作土 表土 | 7 暗灰色土 | 6層より暗い 灰わずか |
| 2 褐色土 灰わずか 炭分少 | 8 暗灰色土 | 7層より暗い 黄色がかる 灰わずか |
| 3 暗茶褐色土 灰わずか 炭分少 | 9 暗青灰色土 | 炭分少 10・11層より明るく12層より暗い |
| 4 暗褐色土 水田面につながる同じ土層 5層との境は複雑
すき込み跡かもしれない SD4に合わせて層が落ち込む | 10 暗青灰色土 | 9～13層がSD4の主な埋め土 |
| 5 暗灰褐色土 7・8より明るい 灰わずか | 11 暗青灰色土 | 11層より明るい 粘土層 炭分少 |
| 6 灰白色土 灰色が強い 5・7・8層より明るく白く色がぬける | 12 暗青灰色土 | 12層より暗い 粘土層 炭分少 |
| | 12 褐色土 | 炭分ばら 8層より明るい SD4のテラスを埋める土 |



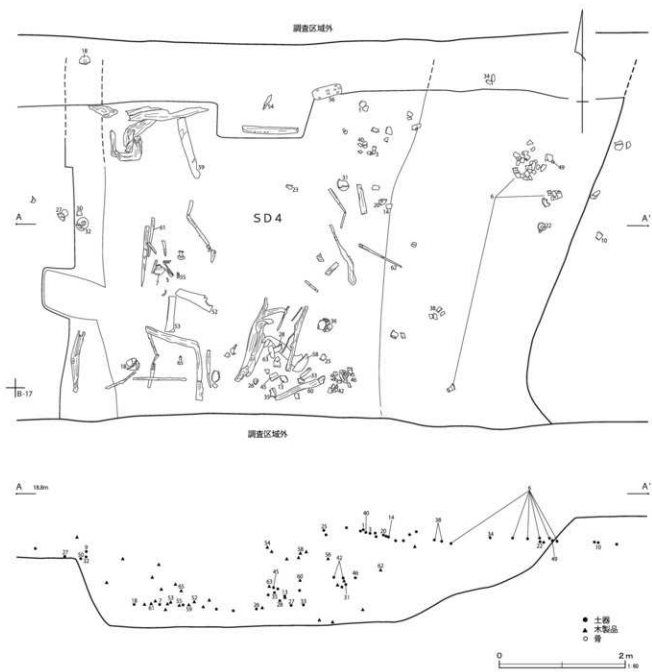
第241図 第4号溝跡第5地点

溝跡埋没から現水田開墾までの期間の堆積層、第8～12層が第4号溝跡の本格的な埋土となる。第1～4層は第4号溝跡本流部直上部を中心に凹みが認められ、埋没した河川跡が現地形まで影響をおよぼしている。

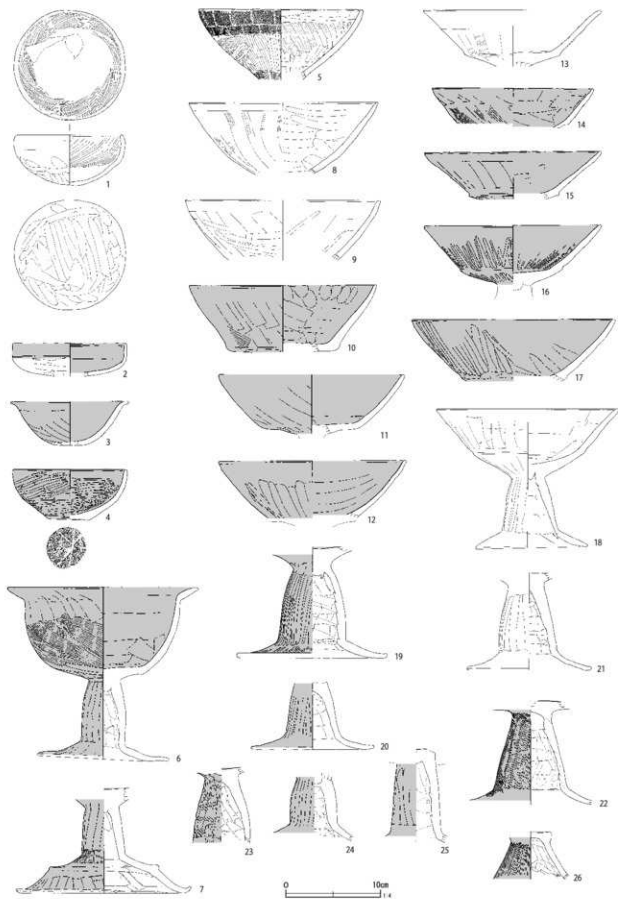
テラス部は、幅7.4～7.8m、比高差0.25m(確認面からの深さ0.45～0.7m)ほどの人工的に削平されたごく緩やかな斜面部である。西側の集落域から、東側の流路に向かって傾斜している。このテラス部を形成することによって、第4号溝跡本流路との比高差を和らげ、河川の利用を容易に

するための工夫と捉えられる。また、増水時にはテラス部も流水容積として加わることとなり、水害対策の一手段であったと推定される。いわば、現在の河川において堤防と流路の間に広がる河川敷に相当する。また、テラス部を掘削した土壌は、集落側に堤状に積み上げていた可能性も考えられるが、直上付近まで現水田に削平されているため、確認はできない。

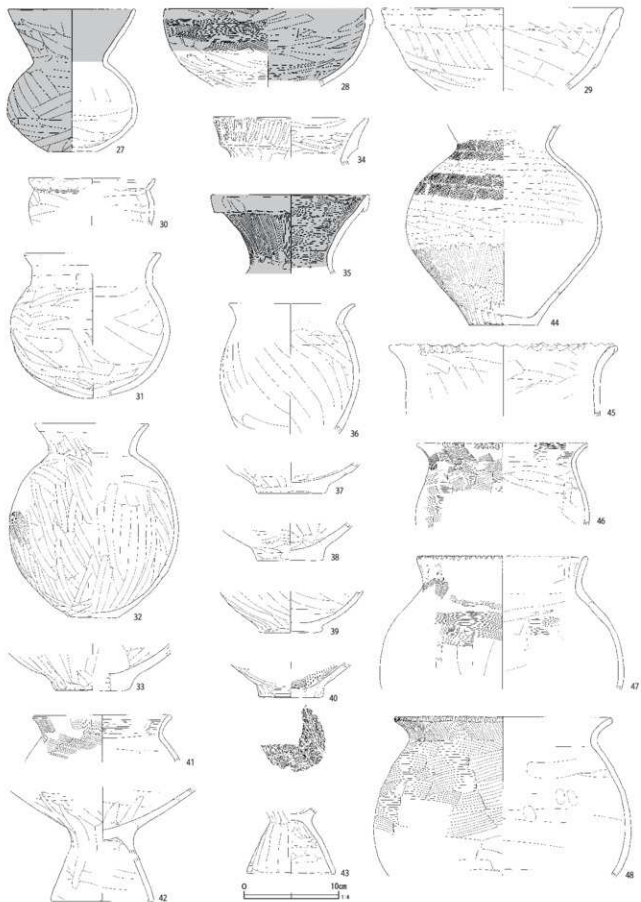
遺物は、東本の本流部からの出土である。溝底付近から木製品が出土し、流路方向に長手方向を揃えている。東側の壁斜面部には、土師器が集中



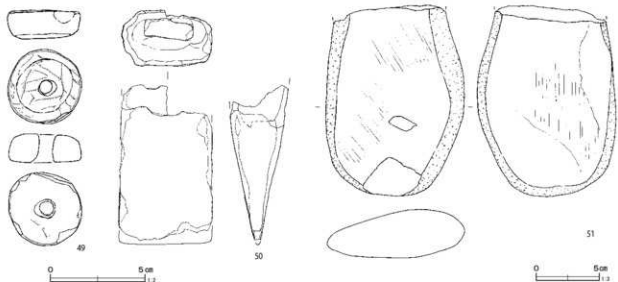
第242图 第4号沟第5地点遗物出土状况



第243组 第4号沟第5地点出土文物(1)



第244图 第4号清跡第5地点出土遺物(2)



第245図 第4号溝跡第5地点出土遺物(3)

している。出土した土器の時期は、古墳時代前期(銭塚・城敷Ⅱ期)と古墳時代中期(銭塚・城敷Ⅲ期新段階)に概ね大別される。しかし、平面方向・垂直方向ともに、年代別に出土状況を分割することはできない。また、西側のテラス部から本流に至る肩部付近から、県内でも出土例の少ない袋状鉄斧(50)と土器器甕(32)・埴(27)が伴出している。

本流部溝底付近からは木製品、川の流れる方向と長手方向がほぼ一致している。範囲が狭いため不明な点が多いが、人為的な目的を持って木製品を配置したような痕跡は認められない。しかし、無造作に第4号溝跡の中に投げ入れたものとは考えがたく、流路方向と木製品の長手方向を揃えて、落とし入れたものと推定される。検出された範囲が狭いため、木製品の出土量は決して多くはない。しかし、他の地域と比較すると、農具や容器・火鏝白などの木製道具類の出土が目立ち、建築部材の出土が少ない。特に農具には諸手鐮の未成品2点と鎌柄・田下駄などが注目される。

古墳時代前期の遺物には、壺(34・35)・台付甕(40~43・46~48)と、吉ヶ谷系の高埴(5)・壺(44)も含める。

古墳時代中期の遺物は、内面に暗文が施された内罎口縁環(1)・平底の碗(3・4)有稜屈折脚・有段脚の高埴・埴(27)・鉢(28・29)・甕類(30~33・36~40)である。

第245図49は滑石製の紡錘車である。テラス部より出土している。粗い研磨痕を残し、稜は不明瞭である。上径2.95cm・下径4.06cm・厚さ1.520cm・孔径0.9cm、重さ17.5gである(No22/図版137-5)。

50は、袋状の鉄斧である。肩部が無く、側面は直線的である。袋部の横断面は隅丸方形で、折り返し部は密着する。刃部は広がらずに直線的に刃先部に至る。側面部には面が形成され、断面形が長方形となる稜がみられる。刃先部は研ぎ減りによって、ごく僅かな抉りがみられる。また袋部には芯材の鉄板が残存している。現存長8.1cm・幅4.9cm・厚さ0.25~2.8cm、重さ265.81gである。錆化が進行し、残存状態は悪い。(No12/図版137-6)

51は大型の砥石で、上部を欠損する。上下両面に使用痕がみられるが、使用頻度は低い。現存長15.0cm・幅11.05cm・厚さ3.95cm、重さ798.1g、石材は砂岩である。(図版137-7)

第88表 第4号溝跡第5地点出土遺物観察表(第243~245図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	11.0	5.3		C E H I K	90	良好	にぶ黄緑	内脣口縁 A16Gr No6		135-6
2	土師器	坏	(12.0)	3.5		A H I J	10	普通	にぶ黄緑	坏器模倣 赤彩 A17Gr		
3	土師器	椀	(11.9)	4.6	(3.5)	A E G I K	25	普通	にぶ赤黒	口縁部外反 平底 A16Gr No12 / A16Gr		135-7
4	土師器	椀	(11.8)	5.3	4.3	C H I K	45	普通	黄	内脣口縁 平底(底部木葉痕) 赤彩 二次的被熱 B16Gr		136-1
5	吉ヶ谷	高坏	(17.2)	7.5		G	30	不良	にぶ黄	口縁部に縄文2段施文(上段:単節LR+下段:単節RL=羽状縄文配) 口縁端部に単節LR回転施文 赤彩痕不明 A17Gr		136-2
6	土師器	高坏	(19.6)	18.2	(13.5)	A E H I J	70	良好	黄	鉢蓋載り折脚 二次的被熱による黒色化(支脚転用痕?) 赤彩不明種 A16Gr No8・21・24 / A16Gr		136-3
7	土師器	高坏		11.1	18.6	C E H I J	90	良好	にぶ黄緑	有段脚 赤彩 内面に煤付着(支脚転用痕?) 倒立 A17Gr No22		136-4
8	土師器	高坏	(19.8)	7.5		A C E H I K	30	普通	にぶ黄緑	有種坏 二次的被熱 A17Gr		
9	土師器	高坏	(20.6)	6.4		E I J	20	普通	にぶ黄	有種坏 二次的被熱 A16Gr No18		
10	土師器	高坏	(19.8)	7.0		A E G H I K	10	普通	にぶ黄	有種坏 A16Gr No25		
11	土師器	高坏	(19.7)	6.3		B E I J K	20	普通	黄	有種坏 二次的被熱 器面風化 赤彩痕 A17Gr		
12	土師器	高坏	(19.8)	6.0		H I K	20	普通	にぶ黄	有種坏 赤彩 A16Gr / A17Gr		
13	土師器	高坏	(18.7)	5.9		A E G H I K	30	普通	黄	有種坏 器面風化 A16Gr / A17Gr No46		
14	土師器	高坏	(17.0)	4.1		A C E G I	15	普通	にぶ黄	有種坏 赤彩 二次的被熱 煤付着 A16Gr No4・9		
15	土師器	高坏	(18.6)	5.0		C E I K	30	普通	にぶ黄緑	有種坏 赤彩 二次的被熱 A17Gr 上層部		
16	土師器	高坏	18.8	6.8		A B C H I K	90	普通	にぶ黄	有種坏 赤彩 二次的被熱 器面風化 A17Gr		
17	土師器	高坏	(21.6)	6.6		A D E H	20	良好	にぶ黄	有種坏 赤彩 二次的被熱 A17Gr		
18	土師器	高坏	19.0	19.2	14.7	11.5	85	普通	にぶ黄	有種坏屈折脚 支脚転用痕 A17Gr No32 / A17Gr 上層部 / A17Gr		136-5
19	土師器	高坏		11.7	15.2	A H I	70	良好	浅黄緑	屈折脚 赤彩 支脚転用痕		
20	土師器	高坏		7.1	(13.0)	A H I K	50	普通	にぶ黄	屈折脚 赤彩 A16Gr No10		
21	土師器	高坏		10.2	12.8	A D E H J	80	良好	明赤褐	屈折脚 二次的被熱 赤彩不明瞭 A16Gr / A17Gr		
22	土師器	高坏		10.9		A C E G H I K	45	普通	にぶ黄	(屈折脚) 赤彩 二次的被熱 A16Gr No25		
23	土師器	高坏		7.9		A C E H I K	95	普通	にぶ黄緑	(屈折脚) 赤彩 A17Gr No57		
24	土師器	高坏		7.2		A E G I J K	30	普通	にぶ赤黒	(屈折脚) 赤彩 A16Gr		
25	土師器	高坏		9.8		C E H I K	90	普通	にぶ黄	(屈折脚) 赤彩 二次的被熱 A16Gr No6		
26	土師器	高坏				D E H I	30	普通	にぶ黄緑	短脚 赤彩 A17Gr No43		
27	土師器	埴	13.3	15.0	5.0	A E I J K	95	良好	灰褐	平底 赤彩 A16Gr / A17Gr No13		136-6
28	土師器	鉢	(21.6)	8.3		C E H I K	30	普通	にぶ黄	折返口縁 赤彩 外面に煤付着 A17Gr No44 / A17Gr		
29	土師器	鉢	(25.3)	8.8		A B C E G H I	20	普通	にぶ黄緑	口縁部肥厚 二次的被熱 A16Gr / A17Gr		
30	土師器	小型甕	(13.3)	5.0		A C E G H I J	10	普通	にぶ黄緑	口縁部のみ内脣 口縁部外面に連続した指頭圧痕 A16Gr		
31	土師器	小型甕	(14.1)	15.3		C E H I K	90	普通	にぶ黄	頸部直立 A17Gr No10		136-7
32	土師器	小型甕	11.8	20.5	5.1	C E H I K	85	良好	にぶ黄緑	口縁部先端付面に面形成 A17Gr No14		137-1
33	土師器	甕		5.0	7.8	C E H I K	50	普通	にぶ黄緑	底部無調整 A16Gr / A17Gr No49		
34	土師器	壺	16.3	4.9		A D H	60	良好	黄	有段口縁 A16Gr No29 / B18Gr		137-2
35	土師器	壺	(16.2)	8.4		E I K	80	普通	にぶ黄緑	複合口縁 赤彩 A17Gr / B17Gr No59		137-3
36	土師器	小型甕	(13.1)	13.8		A C E G H I	30	普通	黄	煮沸の影響顯著 器面風化 A16Gr No1・21 / A16Gr		
37	土師器	甕		3.3	7.5	A C E I J K	70	普通	黄	煮沸痕 底部に木葉痕の痕跡? A17Gr		
38	土師器	甕		4.0	7.0	A E G H I K	5	普通	黄	煮沸痕 煤付着 A16Gr No4・5		
39	土師器	甕		4.2	6.0	A E I K	50	普通	灰黄	煮沸痕 煤付着 A17Gr		
40	土師器	甕		3.8	(6.6)	A C E G I J	5	普通	にぶ赤黒	煮沸痕 A16Gr No14 / A16Gr		
41	土師器	台付甕	(14.2)	5.0		C D H	20	普通	黄	単口縁 煮沸痕 A17Gr / B18Gr		
42	土師器	台付甕		12.0	(10.6)	C D E H	10	普通	明赤褐	煮沸痕 煤付着 A17Gr No52 / A17Gr		
43	土師器	台付甕		6.9	9.4	A E I K	90	良好	灰黄	煮沸痕 A17Gr		
44	吉ヶ谷	壺		21.2	7.4	E G I	70	普通	にぶ黄	肩部・胴部上半に単節LR施文 外面胴部上半の無文部に赤彩 底部に鈎痕? A16Gr No1 / A16Gr		137-4
45	弥生	甕	(24.0)	7.7		C E H J	10	普通	灰黄褐	波状口縁 煤付着 A17Gr No45		
46	土師器	台付甕	(18.0)	8.7		D H	15	普通	にぶ黄緑	知み口縁 煤付着 A17Gr No52 / A17Gr		
47	土師器	台付甕	(17.8)	14.0		A E I K	15	普通	灰黄	知み口縁 煮沸痕 器面風化 A17Gr		
48	土師器	台付甕	(22.8)	16.8		A E I K	30	普通	褐灰	知み口縁 煤付着 A17Gr No52 / A17Gr / B18Gr		

第246図52～第248図65は木製品である。

52・52は、農具の柄孔装着式の諸手鍛未成品である。板目材を削り出して成形したもので、ケズリ痕を明瞭に残す。

52は、中央に台形の着柄隆起が造り出されているが、柄孔は穿孔されていない。着柄隆起を中心として左右に大きく反り上がり、厚さも端部に向かって薄く整形されている。わずかに短い右側の端面は非直線的で、折損している可能性がある。幅57.2cm、長さ12.6～13.5cm、厚さ1.7～2.0cm、着柄隆起厚3.4cmである。木取りは板目、樹種はイチイガシである。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代1730±30、暦年較正年代255calAD-344calAD・244calAD-385calADである。(図版180-1/整理番号585/No30/ST2-456)

53は、左側上面に極めて平滑な箇所があり、鈍で仕上げられている可能性がある。中央付近には台形の着柄隆起が造り出されているが、柄孔は穿孔されていない。着柄隆起を中心とした左右は非対称で、大きく反り上がる。短い左側の端面は非直線的なことから、折損している可能性がある。これが未成品のまま遺存した要因かもしれない。現存幅55.5cm、長さ12.7～13.9cm、厚さ2.4cm、着柄隆起厚4.0cmである。樹種は2ヶ所で同定を行い、通常はコナラ属アカガシ亜属(V-2)とされるものであるが、このなかでイチイガシ(V-1)に特定できた資料である。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代1700±30、暦年較正年代263calAD-278calAD・329calAD-391calAD・256calAD-304calAD・314calAD-410calADである。(図版180-2/整理番号545-1/No31/ST2-521)

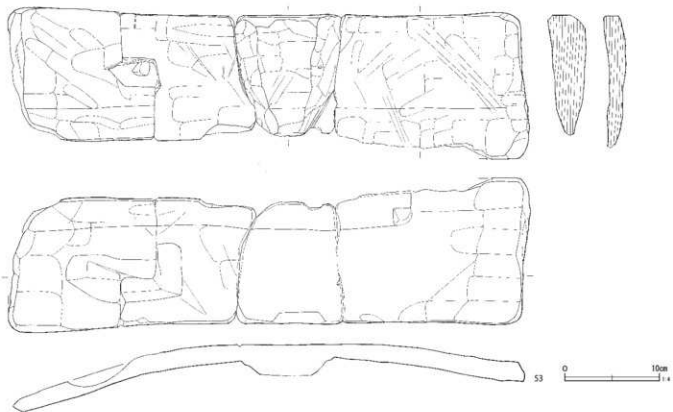
54は、農具の鎌の柄である。直線的な柄で、柄頭部上半部を欠損する。刃を柄の上面から下面まで貫通された装着孔に差し込む形式で、孔の一部が残存している。柄頭部の突起は、装着孔の下部から柄頭先端まで続くもので、重厚な造りになっ

ている。装着孔は柄と直交する。基部には突起をもち、握った手が滑らない工夫が施されている。現存長26.4cm、頭部幅現存幅2.7cm・現存厚5.3cm、握部幅2.8cm・厚さ3.5cm、基部幅2.8cm・厚さ3.9cmである。柁目状の棒状材から削り出したもので、樹種はイチイガシである。(図版181-1/整理番号462/No17/ST2-486)

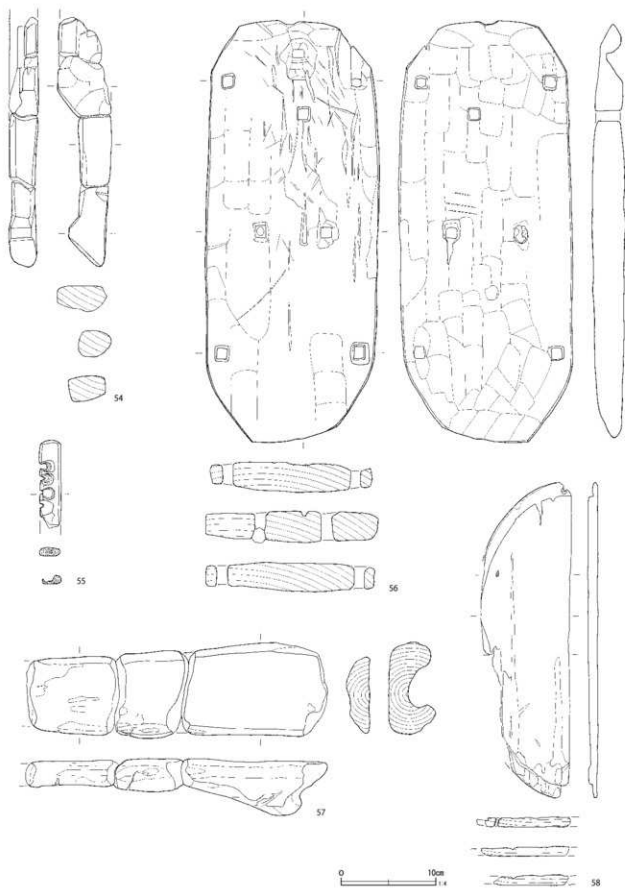
55は、雑具の火鑽白である。芯持材を板状に面取った木片の側面に、断面V字形の刻みが5カ所入れられている。この刻みに対応する左から3カ所には、炭化した火鑽穴が残存する。4カ所目・5カ所目には炭化痕のみみられず、火鑽材が刻み位置で安定するように、前もって上面を浅く窪ませた状態である。ただし、5カ所目はごく浅く、見落としてしまうようである。現存長9.4cm、幅2.0～2.2cm、厚さ0.9cmである。樹種同定では、ヌルデ(V-2)とケンボナシ属(V-1)の2つの結果が得られている。(図版181-2/整理番号947/No28/ST2-476)

56は、農具の田下駄である。周囲に輪状の枠が取り付けられる輪標型田下駄と思われる。輪標は現存しない。長方形の板材の四隅を落とした隅切り長方形をしている。上面は平滑で、裏側の接地面は凸レンズ状の曲面に整形されている。先端の中央付近には上面から貫通しない柄状の窪みが掘り込まれている。ここに輪標を装着したものと思われる。貫通した方形孔7孔が穿孔され、中央部には3孔、四隅には4孔が配置されている。中央部の3孔は緒孔で、後方左の孔には木片が詰まっている。前方の孔は右側に寄り、また上面に残された使用痕から左足用の田下駄と推定される。四隅の孔は紐結合型田下駄の紐孔にあたり、前後の両端に2ずつ穿孔されている形式である。長さ44.9cm、幅18.2cm、厚さ3.3cmである。木取りは板目、樹種はスギである。(図版182-1/整理番号877/No15/ST2-520)

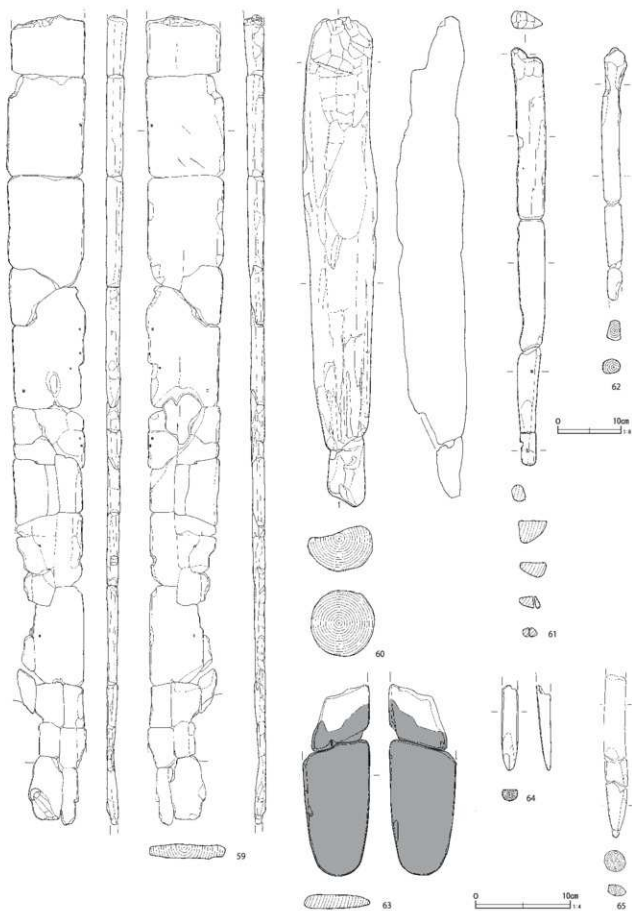
57は、農具の作業台と思われる。平坦面と裏側



第246图 第4号满踪第5地点出土遗物(4)



第247图 第4号满踪第5地点出土遗物(5)



第248图 第4号清跡第5地点出土遺物(6)

の突起から、平皿端面を作業面、突起を脚と推定した。突起部は中央が缺れているが、人工的な加工によるものではない。また全体に摩擦が激しく、工具痕の観察も困難である。現存長31.9cm、幅9.7cm、厚さ2.5cm、脚部高4.9cmである。木取りは芯持丸木、樹種はクワ属である。作業台としては高さが低いことから、梯子の欠損部片の可能性も考えられる。(図版181-4/整理番号752-1/ST2-826)

58は、曲物底板である。上下面ともに平滑に仕上げられ、側面は上下面と直角を成す。周縁は、上面を切り欠いて段を設けて側板をあてる形態である。釘穴もみられ、下面から木釘を打ち込んで側板を固定していた。平面形は楕円形となる。現存長33.4cm、現存幅9.4cm、厚さ1.1cmである。木取りは板目、樹種はヒノキである。(図版181-5/整理番号609/No1/ST2-499)

59は、建築部材の板材である。両端ともに欠損する。図下端部付近には半円形の欠き込みがみられることから、床板材と推定される。表裏面・側面いすれにもケズリ加工が施されている。側面が垂長の芋矧(突付け矧)の板材である。また、板面に対して垂直方向に打ち込まれた方形(一辺2~3mm)の釘穴が10カ所確認されている。現存長128.6cm、幅12.1cm、厚さ1.8~3.1cmである。厚さは、図上方が厚く、図下方が薄い。木取りは芯持柾目、樹種はキハダである。(図版183-1/整理番号429/No19/ST2-442)

60は、建築部材の柱材もしくは梁・桁材と思われる。上下ともに欠損している。上端には欠き込みの痕跡が残り、同面の下端も薄くなっていることから欠き込み施されていた可能性がある。所々にケズリ痕がみられるが、全体的に雑な仕上がりである。また下端は側面にもケズリが施されていることから、杭に転用した可能性がある。現存長78.1cm、径10.3~10.5cmである。木取りは芯持丸木、樹種はクワ属である。(図版183-2/整理番

号624/No48/ST2-963)

61は、図上端に出納をもつ棒状の部材で、用途は不明である。上端から下端に向かって細くなり、断面形も三角形から板状に薄くなっていく。下端付近には釘穴と思われる小穴が3孔確認され、左側面部には切り込みもみられる。長さ66.6cm、幅4.5~2.4cm、厚さ3.6~1.4cmである。みかん割り材を成形し、樹種はエノキ属である。(図版182-4/整理番号484-1/No24/ST2-416)

62は、用途不明の棒状部材である。枝材を加工したもので、上端は枝の根元を部材の影らみに活用している。直下には相対する二面から欠き込みが施されている。下方は欠損する。現存長40.2cm、径2.8~3.2cm、欠き込み部幅2.2cmである。木取りは芯持丸木、樹種はウコギ属である。本来の長さが復元できないが、屋根材の小舞等が用途の候補としてあげられる。(図版184-1/整理番号779/No9/ST2-558)

63は、用途不明の扁平な木製品である。先端部は櫛のように丸く・薄く仕上げられている。側面はケズリによって面取られている。表裏ともに炭化している。現存長20.2cm、幅6.9cm、厚さ1.5cmである。木取りは柾目、樹種はスダジイである。(図版182-2/整理番号563/No51/ST2-435)

64は、用途不明の棒状部材である。先端に向かって一面側を削り、薄く尖らせている。現存長9.0cm、幅1.7cm、厚さ1.2cmである。木取りは丸木、樹種はムラサキシキブ属である。(図版181-3/整理番号945/ST2-482)

65は、杭である。径3.3~3.4cmの芯持ち丸木の先端に杭先加工が施されている。加工は上面と両側面の3面のみに行われ、背面はそのまま丸みが残されている。上方は欠損し、現存長25.8cmである。樹種はトネリコ属トネリコ節である。(図版182-3/整理番号471/No34/ST2-417)

第4号溝跡第6地点 (第249~255図)

第4号溝跡第6地点は、E-14~16・F-13~

16・G-13～15・H-14グリッドの広い範囲に亘っている。第5地点を經由して南下する流路にあたり、北東から流れ込み、南方向へカーブを描きながら調査区域を流れる。

西岸には銭塚・城敷IV期古段階の第47号住居跡が迫っている。一方、対岸の東岸には広くテラスが形成され、北部のE-16グリッドには、昇降施設が設けられている。岸辺の幅10mほどの範囲にはピット群が所在し、その東側には、第4号溝跡と併走する浅い第8号溝跡が位置する。

本来の流路は、直線延長約32m、北端部5.8m・中央部6.5m・南端部9.5mと北から南へ流れるに従って上幅が広がっている。確認面からの深さ1.45～1.95mを測る。壁面は、西壁面が30°前後の傾斜角度をもって立ち上がっているのに対し、東壁は傾斜角度50～60°前後の急激な立ち上がりとなっている。分層された土層の説明記録がないため詳細は不明であるが、E-E'の第1・2・4層が第5地点第1～4層に、第8・9層が第5地点第5～7層に、第10～13層が第5地点の第8～11層に相当するものと予想される。第1・2・4層の堆積状況は、第5地点と同様に埋没した河川の影響が、現地形におよんでいる。

テラス部は流路東岸に設けられている。掘り込みラインは、河川流路とは平行せずに、ほぼ南北方位方向を向いている。北側のE-15・16グリッドでは、幅5.0m・比高差0.5m（確認面からの深さ0.3～0.8m）である。南下するに従って幅が広くなり、F-14・15グリッド南端部では幅13.5m比高差0.5m（確認面からの深さ0.3～0.8m）を測る。この付近ではテラス部東側の立ち上がりも緩やかになり、これより南側には、テラス部は確認されていない。

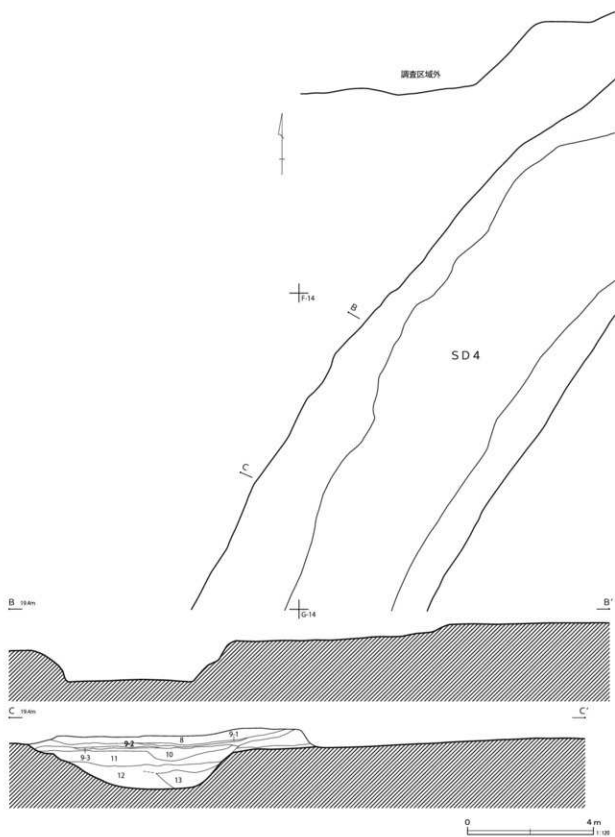
昇降施設はE-16グリッドに設置されている。集落域の平地部からテラス部中段付近を繋ぐ通路状の施設である。テラス部の掘り込みラインに対して直交するように掘削された溝状の遺構で、長

さ3.8m、幅0.4～1.1mを測る。不明瞭ではあるが、幅の狭い底面は、階段状に成形されている。また、傾斜のきつい東側半部には、浅いピット状の掘り込みがある。また、第2地点で検出された昇降施設と比べると階段状の底面が稚拙である。そこで、第6地点の昇降施設には板などをかけてスロープとし、ピットはその板材を支えていた支柱穴と考えることができる。

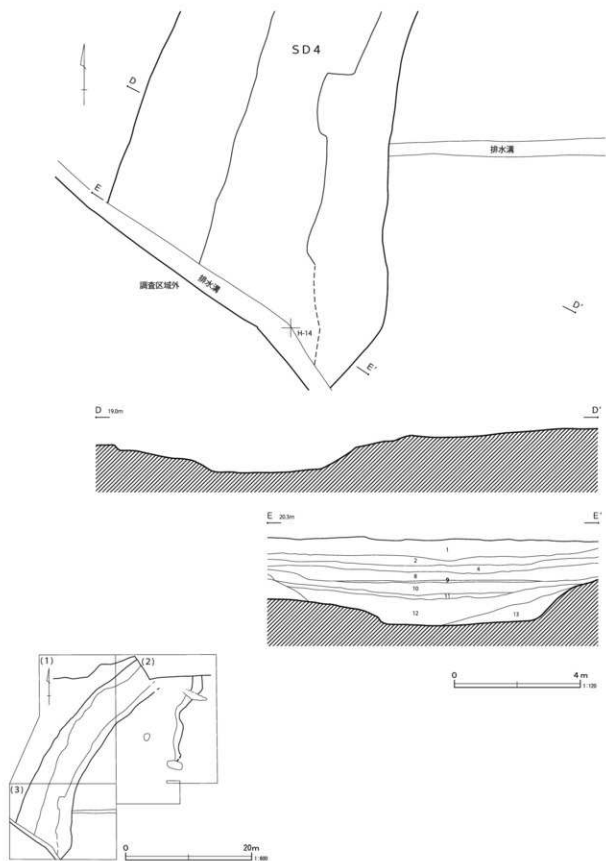
遺物は、流路内からの出土が大半である。傾向として、テラス部・昇降施設が付設された東側よりも、住居跡・掘立柱建物跡が群集する西岸よっている。須恵器・土師器・石製品とともに多量の木製品が出土している。これらの遺物は、第6地点全域から出土したのではなく、E・F-14グリッドに集中している。

木製品には、農具の鋤・鎌・堅杵、容器の槽・盤、一木造り・組合せ式の腰掛と多量の建築部材があり、これに木織も加わっている。建築部材には柱材・板材・垂木材・梯子などのほかに、扉2点と5孔以上の円孔が穿たれた長大な板材も含まれている。これらの建築部材の出土は、城敷遺跡の集落内に相応の建造物が存在していたことを示唆するものである。なかでも、扉は一般的な建物とは「格」が異なる建造物に用いられたものである。

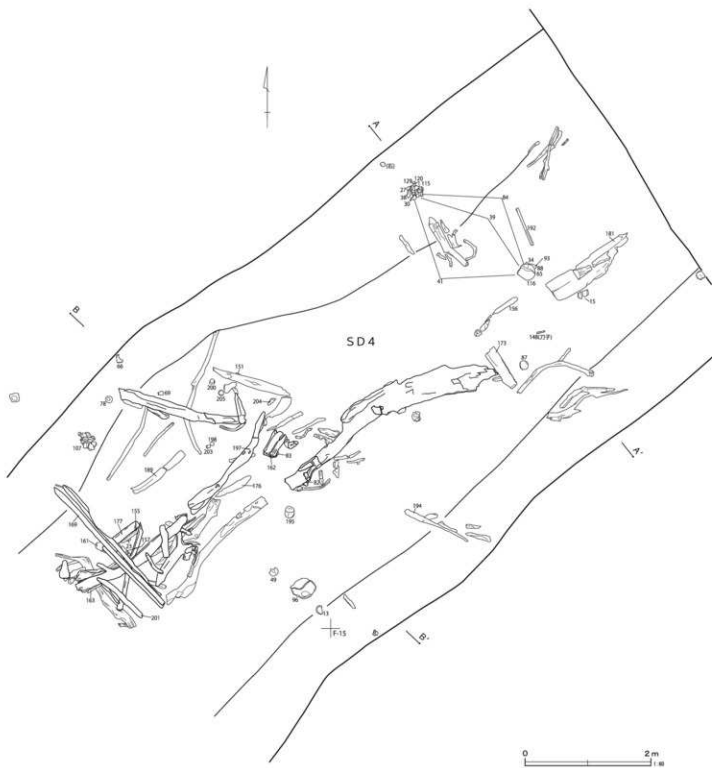
木製品では、出土状況も注目される。出土が集まる北側では、長尺の木製品が流路方向と長手方向を揃えた状態で出土している。この一群の北端部に扉（181）が位置している。しかし、E-14グリッドとF-14グリッドの境付近から、木製品の出土状況が大きく変わっている。北側と同様に長尺の木製品が出土しているが、長手方向を流路に対して直交する方向に向けている。概ね、規模の大きな木製品を中心にして、周囲に中小の木製品が位置している。特に集中地点の中央付近では、西岸上端から川底に向かって長尺材が並んでいる。この状況は、第4号溝跡第2地点で確認された堰



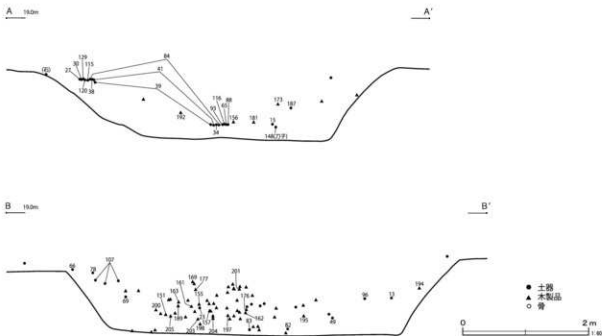
第249图 第4号沟迹第6地点(1)



第251图 第4号沟迹第6地点(3)



第252图 第4号清跡第6地点遺物出土狀況(1-1)



第253図 第4号溝跡第6地点遺物出土状況(1-2)

状施設と酷似している。第6地点も同様で、所謂しがらみ状遺構と呼ばれる堰状施設と推定され、一次的に水流を堰き止めて上流側の水位を上げる機能が推測される。また、第2地点では堰状施設の上流側に昇降施設があったが、第6地点でも堰状施設と昇降施設の配置関係は同様である。よって、第4号溝跡では、堰状施設とその上流の昇降施設が一体となっていたことが想定される。

出土遺物は、須恵器・土師器・木製品とともに、滑石製の剣形模造品・有孔円板・紡錘車、碧玉製の管玉、ガラス製小玉、刀子・鉄鎌や、鉄鎌を矢柄に装着する樹皮、木製鎌が出土している。

第256図1～6は須恵器で、1・2が坏H蓋、3～6が坏H身である。

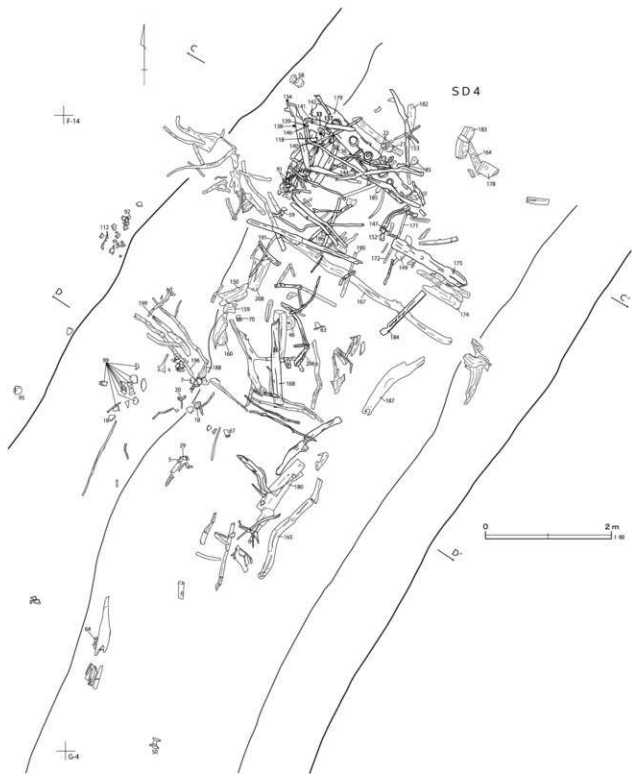
1は、天井部付近の破片で、器形等は不明である。器壁が薄く、シャープなつくりである。胎土や焼成等から陶邑産と推定される。形式を推測することは困難であるが、伴出した須恵器との共通

性からTK23型式～TK47型式頃の可能性がある。

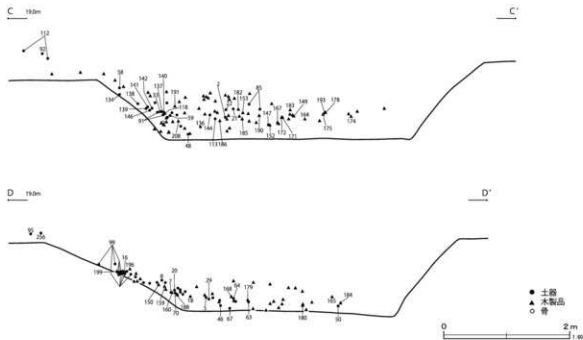
2は、しがらみ状施設の中央付近から出土した残存率が80%と高いものである。天井部は丸みをもち、受け部の稜はやや甘いつくりである。口縁部は短く、端部は内傾し、沈線状に凹みをもつ。胎土・焼成や大きさ・器形等の特徴から、陶邑産のTK47型式と推定される。

3・4は、図示部残存率5～10%ほどの小破片からの復元で、大きさ等は明確ではない。器壁の厚みが異なり、同一個体ではない。受け部の稜の上面部では工具先端によるナデ痕が口縁部に沿って沈線状に巡り、外半部に平坦面をもつ。胎土・焼成や稜の形状などから、いずれも陶邑産のTK23型式～TK47型式に推定される。

5は、しがらみ状施設下流の溝底付近から出土している。体部が丸く、底面部の回転ケズリの範囲が狭い。受け部の稜は張り台が強いが、先端部が丸くなる。口縁部は薄く、先端部で肥厚する。



第254图 第4号沟第6地点遗物出土状况(2-1)



第255図 第4号溝跡第6地点遺物出土状況(2-2)

端部は内傾し、中央部が沈線状に凹む。内面のロクロナデは強く、中段付近で大きく屈曲する。器壁が薄く、シャープなつくりである。焼成にはやや甘さがあるが、胎土や器形・製作技法等から陶邑産のTK47型式と推定される。

6は、口縁部は短く、歪みがある。端部は内傾し、中央の凹みも弱い。受け部は形骸的で、上面は直線的に内傾する。胎土・焼成等は陶邑産とは異なるため、産地は不明である。器形は、TK47型式併行と推定される。

第256図7～第261図132は土師器である。

坏類には、内灣口縁(7～15)・赤彩された坏身模倣(16～30)・赤彩された坏蓋模倣(31～36)・北武蔵型坏蓋模倣(37～45)がある。高坏は有稜坏屈折脚を主体とし、脚の長いものから短いものまでバラエティーに富んでいる。なかには装飾的な46や、脚部に円孔が穿たれたもの(51)、鉢が載るもの(58)も含まれている。

埴には小型品(79～83)と大型品(84～86)がある。鉢は口縁部が外反する広口のもの(87～

89)である。壺には形骸化した有段口縁(90～92)や、単口縁の壺甕的なもの(93～98)である。

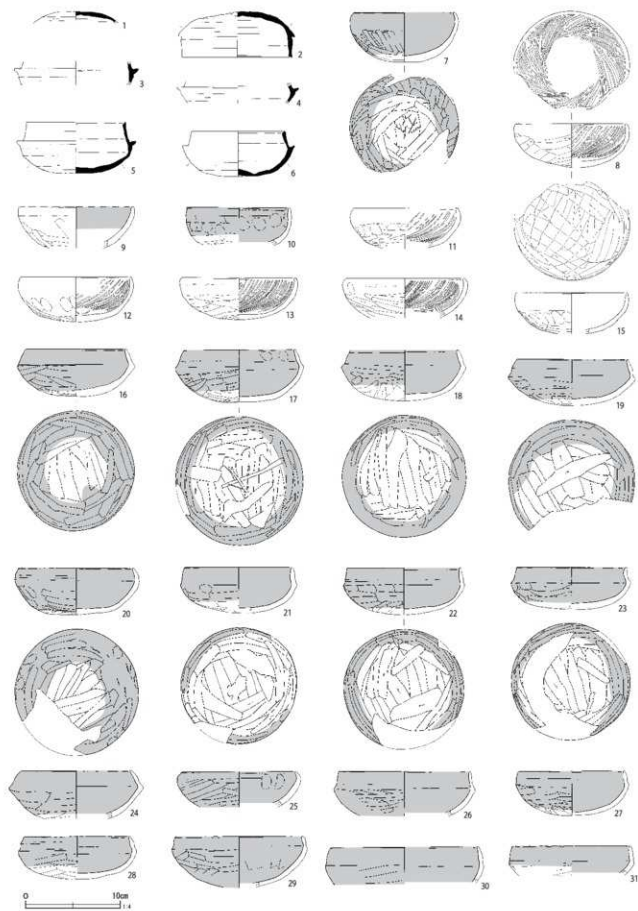
甗には把手がなく、口縁部が屈曲するもの(99)としないもの(100)がある。甗には中型品と大型品がある。中型品は胴が丸く張るものが多い。大型品には、長胴化したもの(120・121)と、長胴化の傾向が窺われながらも胴部の張りや器面のハケ調整が残るもの(11)、台付甗(108～110・125)がある。

大溝跡という遺構の特性から、時期はひとつの時期に限定することはできない。概ね、銭塚・城敷IV期古段階を中心とした時期に相当する。

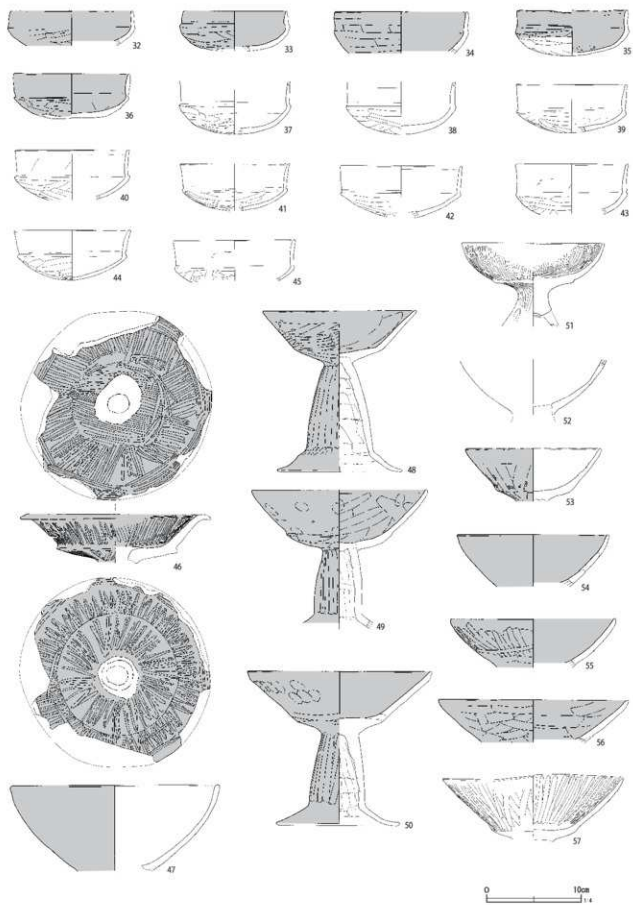
133～138は滑石製の剣形品である。133・134・137・138は片面に鑄が表現された片平鑄、135・136は両端に刃が表現された片切刃である。

139～143は有孔円板で、中央部に1孔穿たれた単孔タイプである。いずれも平坦な造りであるが、径の小さなものが厚く、径の大きなものが薄い傾向がみられる。

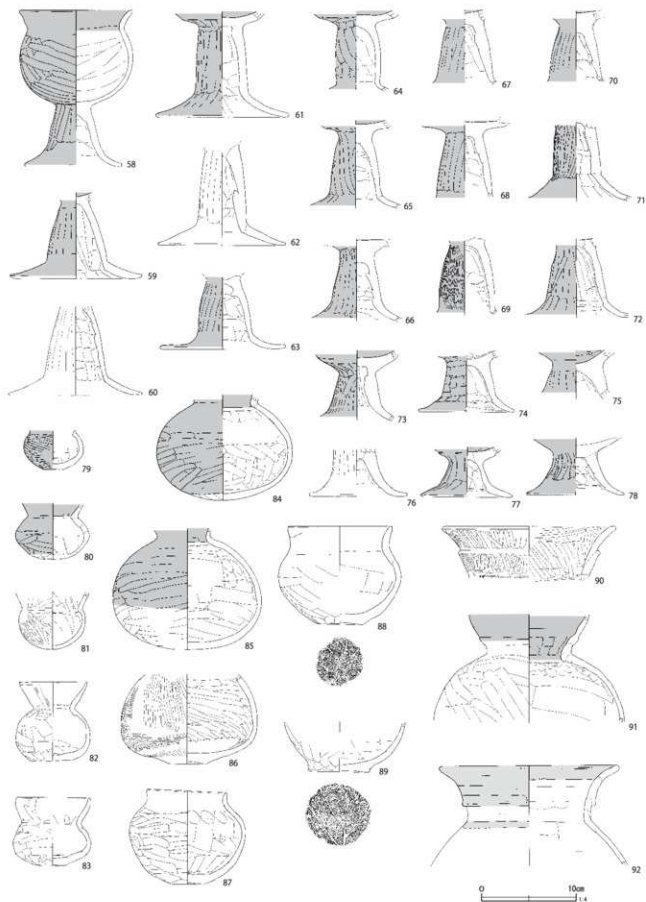
144は碧玉製の管玉である。大型品で、端部の



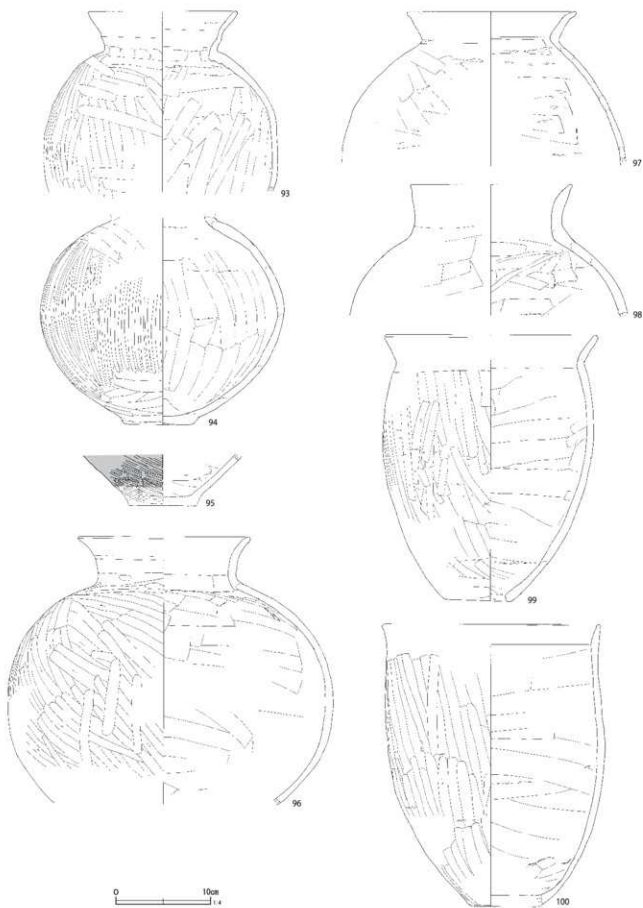
第256图 第4号满踪第6地点出土遗物(1)



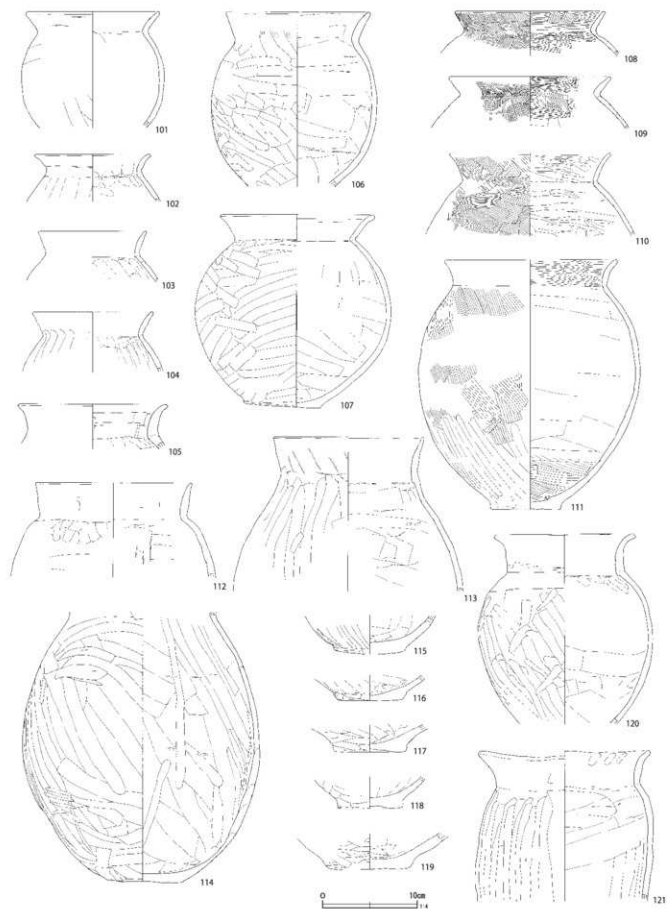
第257图 第4号清砾第6地点出土遗物(2)



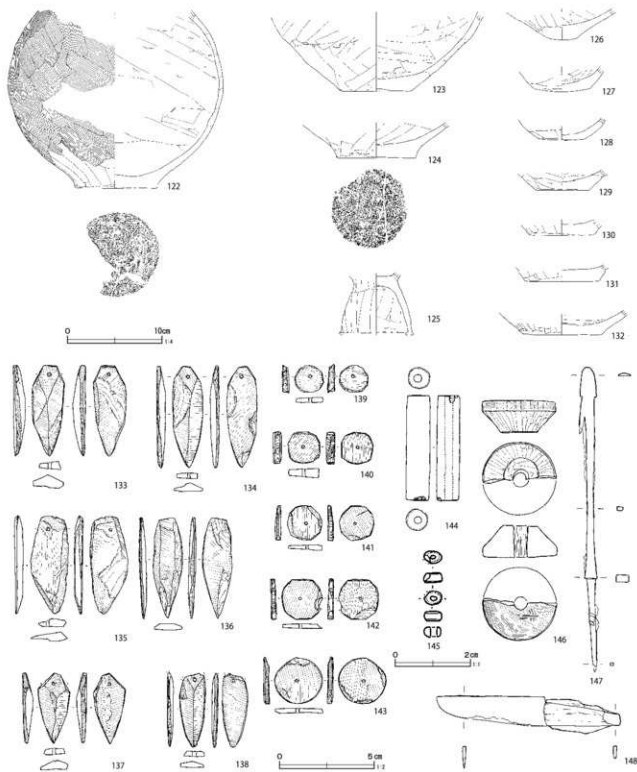
第258图 第4号满踪第6地点出土遗物(3)



第259组 第4号沟第6地点出土遗物(4)



第260图 第4号清跡第6地点出土遺物(5)



第261图 第4号沟跡第6地点出土遺物(6)

第89表 第4号溝跡第6地点出土遺物観察表 (第256~261图)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	烧成	色调	備考	出土位置	图版	
1	須恵器	环蓋		1.3		IK	30	普通	黄灰	坏日蓋 陶邑産 E14Gr 袖付着	型式不明TK23~TK47)	自然	137-8
2	須恵器	环蓋	11.7	4.8		EIK	80	良好	黑灰	坏日蓋 陶邑産 TK47小 自然袖付着	F14Gr No. 233		138-1
3	須恵器	坏身		2.5		IK	10	普通	灰	坏日身 陶邑産 TK23~TK47 E15Gr			138-2

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
4	須恵器	坏身		2.3		IK	5	普通	灰	坏身 陶色産 TK23~TK47 E15Gr		138-3
5	須恵器	坏身	(10.6)	5.35		I	25	普通	灰~明灰	坏身 陶色産 TK47 F14Gr No127		138-4
6	須恵器	坏身	(10.0)	4.7		I		普通	黒灰	坏身 産地不明 TK47併行 E14Gr/F14・15Gr		138-5
7	土師器	坏	10.6	5.2		A CE IJK	75	良好	にぶい 橙	内脣口縁 赤彩 底部本葉痕 F14Gr No135/F14Gr		139-1
8	土師器	坏	(11.4)	4.7		AHIK	75	普通	橙	内脣口縁 内面暗文 F14Gr No125		138-6
9	土師器	坏	(12.0)	4.4		A IJK	20	普通	にぶい 黄橙	内脣口縁 赤彩 F14Gr		
10	土師器	坏	(10.8)	4.0		EHI	25	良好	灰褐	口縁部小さく外反 赤彩 F14Gr		
11	土師器	坏	(10.8)	4.3		AIK	20	普通	にぶい 橙	内脣口縁 内面暗文 二次的被熱 F14・15Gr		
12	土師器	坏	(11.6)	4.7		ACIK	30	普通	橙	内脣口縁 内面暗文+中央部に「X」印の暗文状線刻 F14・15Gr		
13	土師器	坏	(11.9)	4.4		AHI	50	普通	にぶい 赤褐	内脣口縁 内面暗文 E14Gr No25		138-7
14	土師器	坏	(12.4)	4.2		CEHI	30	普通	にぶい 橙	内脣口縁 内面暗文 E14・15Gr		
15	土師器	坏	(11.8)	4.3		AHIK	30	普通	橙	内脣口縁 E15Gr No3		
16	土師器	坏	(10.6)	5.0		ACIK	30	普通	にぶい 橙	坏身模倣 赤彩 内面割離 F14Gr No254		139-2
17	土師器	坏	11.8	5.5		CEHIK	95	普通	暗赤灰	坏身模倣 赤彩 底部本葉痕 F14Gr		139-3
18	土師器	坏	11.4	5.4		AEH	100	良好	赤	坏身模倣 赤彩 F14Gr No134		139-4
19	土師器	坏	11.5	4.9		ACIK	70	良好	にぶい 赤褐	坏身模倣 赤彩 F14・15Gr		140-1
20	土師器	坏	12.1	4.9		CEHIK	80	普通	にぶい 黄褐	坏身模倣 赤彩 E15Gr No1・F14Gr No133/F14Gr		140-2
21	土師器	坏	11.3	4.8		EHIK	90	普通	赤褐	坏身模倣 赤彩 外面底部煤付着 No84 F14・15Gr		140-3
22	土師器	坏	12.0	4.9		A EHIK	70	普通	灰褐	坏身模倣 赤彩 F14・15Gr No85/E15Gr/F14・15Gr		140-4
23	土師器	坏	11.4	4.5		EHI	80	良好	にぶい 黄褐	坏身模倣 赤彩 F14・15Gr No185		141-1
24	土師器	坏	(11.6)	5.1		A E IJK	20	普通	にぶい 黄褐	坏身模倣 赤彩 E15Gr		
25	土師器	坏	(12.0)	3.7		HI	25	良好	褐灰	坏身模倣 赤彩 E15・F14Gr		
26	土師器	坏	(13.8)	4.8		ACHI	10	良好	赤	坏身模倣 赤彩 F14・15Gr		
27	土師器	坏	11.2	4.7		IK	75	普通	にぶい 赤褐	坏身模倣 赤彩 E15Gr No1/E14Gr/F14・15Gr		141-2
28	土師器	坏	(11.2)	4.5		EHIK	50	普通	にぶい 赤褐	坏身模倣 赤彩 二次的被熱 内面割離 F14・15Gr		
29	土師器	坏	(13.4)	5.3		AK	30	良好	赤褐	坏身模倣 赤彩 E15Gr No1/F14Gr No128/F14・15Gr		141-3
30	土師器	坏	(15.6)	3.9		CIK	10	普通	にぶい 橙	坏身模倣 赤彩 E15Gr No1		
31	土師器	坏	(12.4)	3.1		EH	30	良好	にぶい 橙	坏身模倣 赤彩 F14・15Gr		
32	土師器	坏	(13.0)	3.6		CHIK	10	普通	にぶい 橙	坏身模倣 赤彩 F14Gr		
33	土師器	坏	(11.0)	4.3		ACIK	20	普通	灰褐	坏身模倣 赤彩 F14Gr No231		
34	土師器	坏	(14.0)	4.4		HIK	60	普通	にぶい 黄褐	坏身模倣 赤彩 E15Gr No2/F14Gr No2/F14・15Gr		141-4
35	土師器	坏	11.7	4.9		CEHI	70	普通	にぶい 黄褐	坏身模倣 赤彩 F14・15Gr		141-5
36	土師器	坏	(12.1)	4.7		CEHIK	50	普通	暗赤褐	坏身模倣 赤彩 E15Gr/F14・15Gr		141-6
37	土師器	坏		5.6		HIK	30	良好	にぶい 黄褐	北武蔵型坏身模倣		
38	土師器	坏		5.5		CEHIK	50	普通	にぶい 橙	北武蔵型坏身模倣 工具先端による凹線状のナデ模倣 F14・15Gr No1		
39	土師器	坏	(11.8)	5.0		CEHIK	40	普通	にぶい 橙	北武蔵型坏身模倣 二次的被熱 E14・15Gr No1・2		141-7
40	土師器	坏	(12.0)	5.3		EHI	30	良好	橙	北武蔵型坏身模倣 二次的被熱 F14・15Gr		141-8
41	土師器	坏	(11.6)	5.0		CEHIK	40	普通	にぶい 黄橙	北武蔵型坏身模倣 F14・15Gr No1・2/F14・15Gr		
42	土師器	坏	(12.8)	5.5		AHI	10	良好	にぶい 黄橙	北武蔵型坏身模倣 E15Gr/F14・15Gr		
43	土師器	坏	(11.8)	5.3		ACEHI	20	普通	にぶい 黄橙	北武蔵型坏身模倣 E14・15Gr		
44	土師器	坏	(12.2)	5.3		CHI	70	普通	橙	北武蔵型坏身模倣 F14・15Gr		141-9
45	土師器	坏	(12.8)	4.4		AHI	30	良好	橙	北武蔵型坏身模倣 F14・15Gr		
46	土師器	高坏	最大径 20.2	5.2		BEHIK	75	普通	にぶい 黄橙	有様坏 赤彩 外面に放射状のミガキ 内面に暗文状の幅広ミガキ 坏中央に二次的穿孔 F14Gr No263/F14Gr		142-1
47	土師器	高坏	(21.8)	9.0		AHL	15	普通	橙	大型有様坏 赤彩 器面風化顕著 二次的被熱 F14Gr		
48	土師器	高坏	(20.2)	17.0	13.0	A	70	普通	赤褐	有様坏 踏客 支脚転用痕 E14Gr No232		142-2
49	土師器	高坏	18.5	14.7		CEHIK	75	普通	にぶい 橙	有様坏 (屈折脚) 赤彩 支脚転用痕 F14・15Gr No24		142-3
50	土師器	高坏	(19.6)	16.2	(13.2)	CEHI	50	良好	橙	有様坏 屈折脚 赤彩 支脚転用痕 F14Gr No122		142-4
51	土師器	高坏	(15.0)	8.9		A EHK	50	普通	にぶい 黄橙	内脣坏蓋載 円孔3 ミガキ顕著 F14Gr		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
52	土師器	高坏		5.8		IJK	45	不良	橙	二次的被熱 器面風化顯著 F15Gr		
53	土師器	高坏	(14.2)	5.6		ACEIJK	60	普通	にぶ・黄橙	有稜坏 赤彩 二次的被熱顯著 G14Gr		
54	土師器	高坏	(16.0)	5.5		IL	30	普通	明赤褐	有稜坏 赤彩 二次的被熱顯著 外面剥離 F14Gr		
55	土師器	高坏	17.5	5.2		AHIK	70	良好	にぶ・黄	有稜坏 赤彩 E14・15Gr・F14Gr		
56	土師器	高坏	(19.9)	4.5		ACEIJK	5	普通	赤褐	有稜坏 赤彩 二次的被熱 E15Gr		
57	土師器	高坏	19.2	7.0		CEHIJK	70	普通	橙	有稜坏 脚割離後に二次的被熱 E14・15Gr/F14・15Gr		
58	土師器	高坏	11.8	16.5	10.2	BCEHJ	90	良好	橙	鉢蓋載屈折脚 赤彩 F14GrNo19	142-5	
59	土師器	高坏		9.1	最大径 (14.0)	AEHJK	70	普通	にぶ・黄	屈折脚 赤彩 支脚転用痕 F14GrNo235		
60	土師器	高坏		9.4	(14.0)	CEHIK	55	普通	にぶ・黄	屈折脚 支脚転用痕 E15Gr/F14Gr		
61	土師器	高坏		11.2	13.8	AEHJK	90	普通	外・赤褐 内・褐灰	屈折脚 赤彩 F14・15Gr		
62	土師器	高坏		10.5	(13.0)	CIK	70	普通	にぶ・黄橙	屈折脚 二次的被熱 F14・15Gr		
63	土師器	高坏		7.6	13.2	CEIK	80	普通	にぶ・黄	屈折脚 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕 F14GrNo140		
64	土師器	高坏		8.4		EHIK	80	普通	にぶ・黄橙	(有稜坏屈折脚) 赤彩 支脚転用痕 F14GrNo123		
65	土師器	高坏		9.3		AETJK	50	良好	にぶ・赤褐	(有稜坏屈折脚) 赤彩 坏部・裾部欠損後の支脚転用痕 F14GrNo2		
66	土師器	高坏		8.7		CEK	70	普通	にぶ・黄橙	(有稜坏屈折脚) 赤彩 E14GrNo22		
67	土師器	高坏		7.9		AEHJK	90	良好	にぶ・黄橙	(有稜坏) 赤彩 F14GrNo139		
68	土師器	高坏		8.1		CEHIK	90	普通	にぶ・黄橙	(有稜坏屈折脚) 赤彩 支脚転用痕 E15Gr		
69	土師器	高坏		7.7		AEHK	90	良好	灰黄	(屈折脚) 赤彩 二次的被熱 E14GrNo23		
70	土師器	高坏		7.5		AEHJK	80	普通	にぶ・黄	(屈折脚) 赤彩 二次的被熱 F14GrNo141		
71	土師器	高坏		8.3		ACEHIJK	40	良好	にぶ・赤褐	(屈折脚) 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕 E14・15Gr		
72	土師器	高坏		8.4		CEHIK	40	普通	赤褐	(屈折脚) 赤彩 坏部欠損後の支脚転用痕 F14・15Gr		
73	土師器	高坏		7.4		EHIJ	70	普通	にぶ・黄橙	(有稜坏屈折脚) 赤彩 坏部破損後の支脚転用痕 E15Gr/F14Gr		
74	土師器	高坏		6.5	(10.2)	AEGHI	35	普通	にぶ・黄	(有稜坏) 屈折短脚 赤彩 支脚転用痕 E15Gr		
75	土師器	高坏		5.1		AEGIL	15	普通	にぶ・黄橙	(有稜坏屈折短脚) 赤彩 E15Gr		
76	土師器	高坏		5.0	(10.4)	ACEGHI	30	普通	橙	(有稜坏屈折短脚) 坏部内面ナデ E15Gr		
77	土師器	高坏		5.3	9.6	AEHJK	80	良好	赤褐	有稜坏屈折短脚 赤彩 E14Gr		
78	土師器	高坏		6.1	10.2	ACEHK	80	良好	にぶ・黄橙	(有稜坏) 屈折短脚 赤彩 E14GrNo21		
79	土師器	小型埴		4.1	2.2	CEIK	100	普通	にぶ・黄橙	平底 赤彩 F14Gr	142-6	
80	土師器	小型埴		5.9		CEHIK	90	普通	にぶ・黄	丸底 胴部尊盤玉形 赤彩 F14・15Gr	143-1	
81	土師器	小型埴		6.1		BCDHIK	20	普通	にぶ・黄橙	丸底 F14Gr	143-2	
82	土師器	小型埴	7.0	8.3	4.5	ACHJK	100	普通	橙	平底 E14GrNo174	143-3	
83	土師器	小型埴	7.8	7.2	2.4	AEHJK	100	良好	灰黄	平底 二次的被熱 E14GrNo175	143-4	
84	土師器	埴		11.2		AEHJK	95	良好	橙	丸底 赤彩 二次的被熱 E14・15GrNo1・2	143-5	
85	土師器	埴		12.8		BEHI	60	良好	にぶ・黄橙	丸底 赤彩 底部に木葉状圧痕 F14GrNo2・87・88/F14Gr	143-6	
86	土師器	埴		9.5	4.1	AEGHIK	50	普通	にぶ・黄 ～橙	平底 二次的被熱 E15Gr	143-7	
87	土師器	鉢	8.2	9.8	3.4	AEHJK	100	良好	浅黄橙	短脚 赤彩? E15GrNo5	143-8	
88	土師器	鉢	(10.9)	9.4	4.8	CHIK	40	普通	にぶ・赤褐	底部へラケズリ(一部に木葉痕) E14・15GrNo2	144-1	
89	土師器	小型壺		5.3	6.5	AEHJK	40	良好	にぶ・赤褐	底部木葉痕 F14・15Gr		
90	土師器	壺	(18.0)	5.7		AEHJK	40	良好	灰褐	瓶口縁状に稜形成 二次的被熱 F14・15Gr	143-9	
91	土師器	壺		11.5		ACEH	25	普通	にぶ・黄	有段口縁(形骸化) 赤彩 F14GrNo222・227・228	144-2	
92	土師器	壺	(18.7)	(10.5)		EHI	40	不良	橙	有段口縁(形骸化) 口縁部に橙色に発色する化粧粘土 F14GrNo203	144-3	
93	土師器	壺	(15.2)	19.0		AEHJK	80	普通	灰黄褐	頸部に形骸化した稜 二次的被熱 黒色付着物 F14・15GrNo2	144-4	
94	土師器	壺		21.8	7.7	CEIK	50	普通	にぶ・黄	球胴形 外面上半部に赤彩? 二次的被熱 E15Gr	144-5	
95	土師器	壺		5.4	7.0	AEHJK	30	良好	にぶ・黄	外面赤彩 F14GrNo257		
96	土師器	壺	18.0	28.3		EHI	70	普通	にぶ・黄橙	頸部に形骸化した稜 E14GrNo26/E15Gr/F14・15Gr	144-6	
97	土師器	壺	17.6	16.3		CEHIK	40	普通	にぶ・黄橙	頸部に形骸化した稜 二次的被熱 F14・15Gr	145-1	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版			
98	土師器	壺	16.9	13.8		A E G H I K	30	普通	灰黄	頸部に形骸化した様 器面風化					
99	土師器	甌	(22.1)	28.2	7.0	C E H I K	50	普通	にぶ・橙	くの字口縁 底径楕円形	F14Gr №142・143・144・145・146・148・251・253・255	145-2			
100	土師器	甌	22.5	30.0	(7.0)	A C E H I J K	70	普通	にぶ・橙	タテ平部に煮沸痕	E14Gr / F14・15Gr	145-3			
101	土師器	小型甕	(14.0)	12.2		A C L K	20	普通	橙	二次的被熱	F15Gr				
102	土師器	小型甕	(12.0)	5.0		A E G H I J	10	普通	にぶ・黄緑	口縁部わずかに核形成	二次的被熱	E15Gr			
103	土師器	小型甕	(11.3)	5.2		E H I K	20	普通	にぶ・赤褐	二次的被熱	器面風化顕著	F14・15Gr			
104	土師器	小型甕	(12.4)	6.2		A E H I J K	10	普通	褐灰	二次的被熱	F14・15Gr				
105	土師器	小型甕	(15.4)	4.8		E C E H I	30	普通	にぶ・橙	二次的被熱による器面剥落顕著	E14Gr				
106	土師器	小型甕	14.9	18.4		C D E I K	70	普通	橙	煮沸痕	煤付着	E14Gr / F14・15Gr	145-4		
107	土師器	甕	15.9	20.3	8.3	C E I K	80	普通	灰黄褐	球胴形	F14・15Gr №20	145-5			
108	土師器	甕	(17.8)	4.7		C E H I K	15	普通	灰黄褐	口縁部にS字状の名残	煮沸の影響顕著	E14Gr			
109	土師器	甕	(15.0)	5.5		A E G I K	5以下	普通	灰黄褐	単口縁	煮沸による器面風化	E14・15Gr			
110	土師器	甕	(16.8)	8.8		A E I K	30	普通	にぶ・黄	単口縁	煮沸痕	煤付着	E14Gr		
111	土師器	甕	(17.8)	26.5	7.0	A E H I J	80	普通	灰黄褐	単口縁平底	煮沸痕	煤付着	E14Gr	145-6	
112	土師器	甕	(16.4)	(10.0)		A B H I J	20	普通	にぶ・黄緑	直立気味の口縁	煮沸痕	煤付着	F14Gr №203		
113	土師器	甕	(15.8)	16.2		A E I K	30	普通	灰黄褐	直立気味の口縁	胴部中位に最大径	煤付着	F14Gr №222	146-2	
114	土師器	甕		28.5	7.8	A B E G H I K	60	普通	にぶ・黄緑	下部れの胴部	外面下半に煤付着		146-1		
115	土師器	甕		4.2		C E H I K	90	普通	にぶ・黄緑		E14・15Gr №1				
116	土師器	甕		2.7	(7.0)	A C E H I K	30	普通	黄灰褐	煮沸痕	煤付着	E15Gr №2			
117	土師器	甕		2.9	7.6	A E H I K	25	普通	灰褐	煮沸痕	F14Gr				
118	土師器	甕		3.4	7.0	A E H I K	60	良好	にぶ・橙	煮沸痕	F14Gr №230				
119	土師器	甕		3.8		A C E I J K	60	普通	にぶ・橙	煮沸痕	煤付着	F14・15Gr			
120	土師器	甕	14.6	20.0		A C E I K	70	普通	にぶ・赤褐	頸部直立	長胴化	煮沸痕	器面剥落	E15Gr №1	146-3
121	土師器	甕	17.8	15.8		E H I K	70	普通	にぶ・赤褐	長胴化	煮沸痕顕著	E14・E15Gr / F14Gr	146-4		
122	土師器	甕	18.7	8.6		I L	60	普通	明赤褐	球胴形	底部へラズリ(木炭灰残)	G15Gr №1			
123	土師器	甕		8.4	13.4	C H I K	30	普通	にぶ・黄緑	成形時の乾燥体止部明瞭	E14Gr / F14・15Gr				
124	土師器	甕		3.8	8.2	A E G H I J K L	5	普通	橙	底部木炭灰	器面剥離顕著	E15Gr			
125	土師器	台付甕		6.6	(8.0)	E I K	70	普通	灰黄褐	煮沸痕	E14Gr				
126	土師器	甕		3.3	2.8	A E I J K	60	普通	にぶ・黄緑	小底径	煮沸痕	F14Gr			
127	土師器	甕		2.7	6.0	S E H I J K	60	良好	灰黄	煮沸痕	煤付着	F14・15Gr			
128	土師器	壺		2.4	(4.6)	H J	40	普通	橙	F14Gr					
129	土師器	甕		2.1	5.2	C D E H	60	普通	にぶ・橙	煮沸痕	煤付着	E15Gr №1			
130	土師器	甕		1.7	(7.0)	A H I K	30	普通	褐灰	煮沸痕顕著	煤付着	内面剥離	底部無調整	F14・15Gr	
131	土師器	甕		1.9	8.0	E H I	70	普通	灰褐	内面煤付着	E14Gr				
132	土師器	甕		2.6	8.4	A E H I K	70	良好	にぶ・黄緑		E14Gr №18				
番号	石材	器種	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	重(g)	状態	出土位置 / 備考		図版					
133	滑石	銅形品	4.730	1.630	0.640	6.2	模造品	F14Gr/F14Gr		146-5					
134	滑石	銅形品	5.340	1.570	0.450	4.7	模造品	F14Gr №186		146-6					
135	滑石	銅形品	5.100	1.970	0.480	6.2	模造品	F14Gr №206F		146-7					
136	滑石	銅形品	5.260	1.590	0.350	4.4	模造品	F14Gr №246		147-1					
137	滑石	銅形品	3.690	1.720	0.540	3.7	模造品	F14Gr №212		147-2					
138	滑石	銅形品	3.890	1.380	0.320	2.4	模造品	上部欠損 F14Gr №207		147-3					
139	滑石	有孔円板	1.540	1.410	0.370	1.3	模造品	F14Gr №208		147-4					
140	滑石	有孔円板	1.790	1.710	0.430	2.3	模造品	F14Gr №213		147-5					
141	滑石	有孔円板	1.890	1.810	0.330	1.8	模造品	F14Gr №211		147-6					
142	滑石	有孔円板	2.240	2.110	0.260	2.4	模造品	F14Gr №210		147-7					
143	滑石	有孔円板	2.490	2.390	0.260	3.2	模造品	F14Gr №245		147-8					
144	碧玉	管玉	5.560	5.530	1.210	15.9		F14Gr №214		147-9					
145	ガラス	小玉	0.450	0.390	0.230	0.1		F14Gr №206F		147-10					
146	滑石	紡錘車	3.890	2.060	1.670	19.4		F14Gr №209		148-1					

一部を欠損する。両面穿孔が行われ、上方からの穿孔距離は長い。長さ5.56cm・幅5.53cm・厚さ1.21cm・孔径0.40cm、重さ15.9gである。(F14Gr No214)

145はガラス製小玉である。扁平球の中央に孔が開く。長さ0.45cm・幅0.39cm・厚さ0.23cm・孔径0.12×0.18cm、重さ0.1gである。(No206下/図版147-10)

146は滑石製紡錘車で、1/2を欠損する。上面の稜がしっかりと残り、側面部下端には垂直面が形成されている。上径1.82cm・下径3.89cm・厚さ1.67cm、孔径0.81cm、重さ19.4gである。(F14Gr No209/図版148-1)

147は鉄製の片逆刺を有する長頸三角形鍬である。鍬身部は片丸造り、鍬被には関が形成されている。茎部には矢柄の残骸が付着し、先端を欠損する。現存長15.8cm、重さ7.4g、鍬身長3.4cm・最大幅0.9cm・最大厚0.2cm、頸部最大幅0.7cm・最大厚0.4cm、茎長4.6cmを測る。片逆刺は須恵器TK73型式~TK47型式にかけて流行したものとされている。(F14Gr No234/図版148-2)

148は刀子で、把部の木質が残る。刃関にはほとんど段がみられないが、背関にはしっかりとした段が形成されている。現存長9.8cm・刃長5.7cm・刃幅最大1.5cm・背幅0.2cm、重さ13.97gである。(E15Gr No4/図版148-3)

第262図149~第273図208は木製品である。

149は、農具の組み合わせ鋤もしくは膝柄狭鍬の未成品と思われる。芯に近い板目の板材から軸部を造り出したまでの状態で、製作工程が復元できる貴重な資料である。断面は蒲鉾形を呈しているが、雑な感じが残る。刃部は左右非対称で、軸部の延長線からはカーブした形状である。先端には製材時の伐採痕が残る、やや尖っている。両面ともにケズリが施されているが、製品と比べるとはるかに厚い。現存長54.5cm(軸部15.4cm・刃部39.1cm)、軸部幅3.8cm・厚さ2.7cm、刃部幅11.1

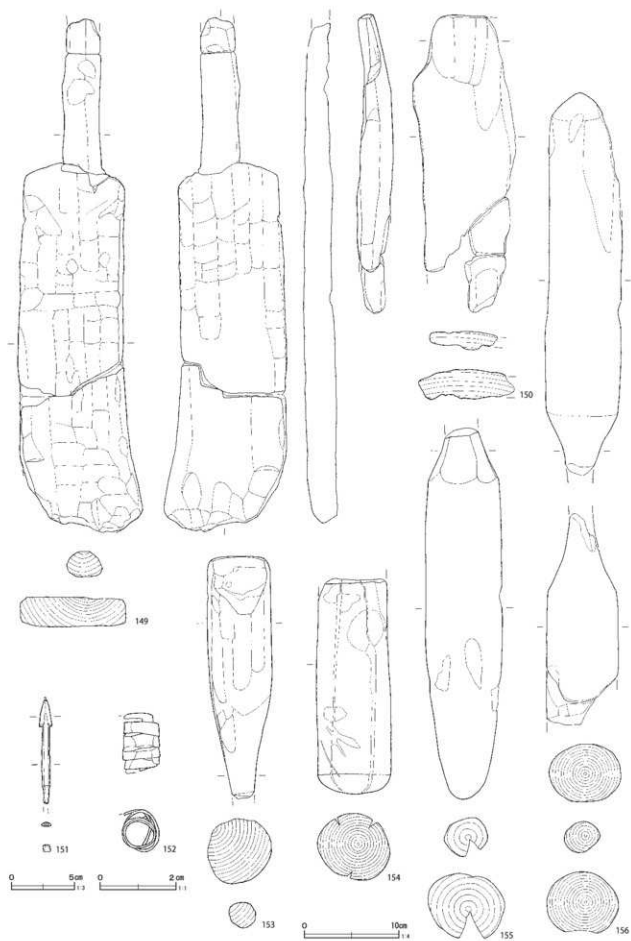
cm・厚さ3.2cmである。厚さは軸部から刃部先端に向かって厚くなる。樹種は2ヶ所で同定を行い、いずれもサクラ属と一致した(V-1・2)。放射線炭素年代測定の結果は、補正年代1600±30、暦年較正年代423calAD-442calAD・452calAD-461calAD・484calAD-533calAD・411calAD-540calADである。(図版185-1/整理番号560/No223/ST2-494)

150は板材で、平面形状が膝柄狭鍬の身に似ている。上方部は細く張り出し、左側面は非意図的に抉られたようになっている。背面は製材時の分割面がそのまま残存している。可能性として、鍬の身を製作途中に破損したために廃棄された未成品と想像される。現存長31.5cm、幅7.1~10.0cm、厚さ2.0~3.2cmである。木取りは板目、樹種はコナラ属コナラ節である。(図版185-2/整理番号743/No75/ST2-836)

151は木鍬で、芯無材から削り出されたものである。片平鍬の長三角形鍬形で、逆刺をもつ。鍬の稜は緩い。頸部は断面方形で、鍬被には関を有する。茎部は断面かまぼこ形で、先端部を欠損する。背面部は平坦で、厚さは鍬被から先端に向かって薄くなる。現存長8.2cm、鍬身部長2.1cm・幅0.9cm・厚さ0.3cm、頸部長4.8cm・幅0.6cm・厚さ0.5cm、茎部現存長1.3cmである。樹種はモミ属である。(図版184-2/整理番号950/No155/ST2-510)

152は、矢柄に鉄鍬を固定する口巻である。幅0.3cmの針葉樹の樹皮が用いられ、長さは現存で13.5cmほどである。図示した状態では、反時計回りに巻かれ、内側には錆が付着している。(整理番号954/No234/ST2-511)

153は農具の横楯で、敲打部のみが残存する。敲打部から握部に移行する箇所には段を持たない形状から、堅物の欠損品とも見ることができる。しかし、先端は平坦で、使用痕はみられない。また側面部上半には使用に伴う欠損痕がみられる。



第262图 第4号清跡第6地点出土遺物(7)

さらに割材を削り出した成形方法から、横槌と判断した。現存長25.9cm、幅6.7cm、厚さ6.9cmである。握部は径2.5cm程になる見込みである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版184-3/整理番号551/No238/ST2-438)

154は農具の竪杵で、敲打部のみが残存している。下端面は半球状を呈し、使用痕と思われる浅い凹凸が確認できる。上端は切断後、平滑に加工されているように捉えられることから、木錘に転用された可能性が考えられる。現存長22.9cm、幅7.7cm、厚さ7.1cmである。木取りは丸木、樹種はツバキ属である。(図版184-4/整理番号561-2/ST2-446)

155は、農具の竪杵の搦部もしくは横槌の敲打部である。芯持丸木から造り出されたもので、図上端部はケズリによって握部が形成される。下端がかなり細くとなった形状から横槌の可能性も考えられるが、側面の敲打痕はみられない。むしろ芯持丸木材であることから、かなり使い込まれた竪杵と考える方が妥当と思われる。現存長39.4cm、幅8.0cm、厚さ6.9cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。側面中央付近には抉り状の欠損部がみられ、木錘に転用された可能性を残す。(図版185-3/整理番号584/No168/ST2-485)

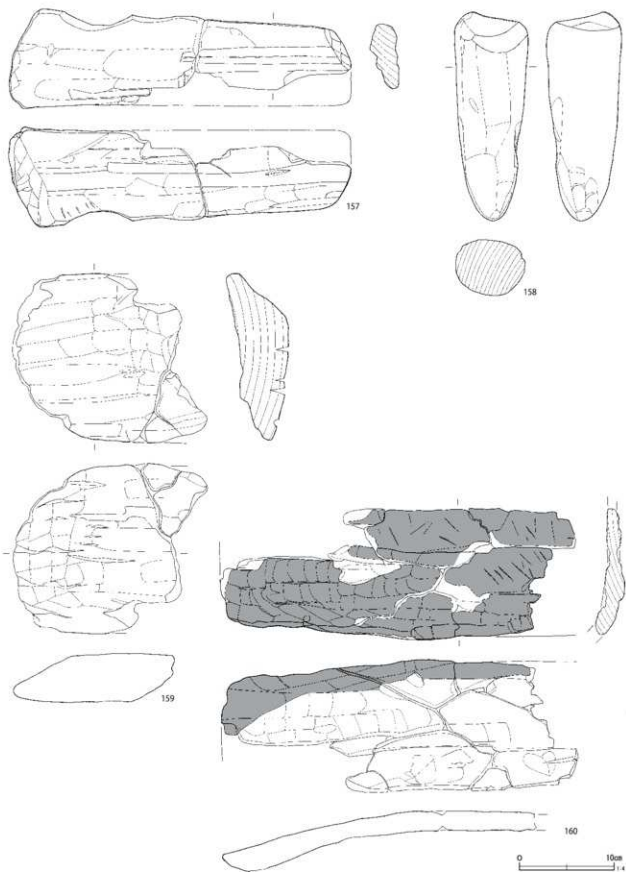
156は、農具の竪杵である。直接的な接合関係にはないが、出土状況や大きさ・樹種等から同一個体と推定した。芯持丸木材から削り出されたもので、細く削り込まれた握部は欠損している。磨滅により、加工痕は不明瞭である。上半搦部の端部は、使用により丸くなっている。現存長40.4cm、幅7.6cm、厚さ6.2cmである。下半搦部の端部には、粗い工具痕が残された二次的な切断が行われている。恐らくは、木錘に転用されたものと想定される。現存長22.3cm、幅7.5cm、厚さ6.5cmである。本来ならば、1m前後の長さで推定される。樹種はツバキ属である。(図版184-5/整理番号880/No16/ST2-570)

157は柁目材の一面を平坦に加工した幅の狭い板材で、用途には農具の作業台が候補にあげられる。両端は粗く切り落され、側面には削ったような痕跡もみられることから、建築部材等の転用の可能性がある。現存長36.2cm、幅7.0cm、厚さ3.1cmである。樹種はエノキ属である。(図版188-1/整理番号726/No169/ST2-828)

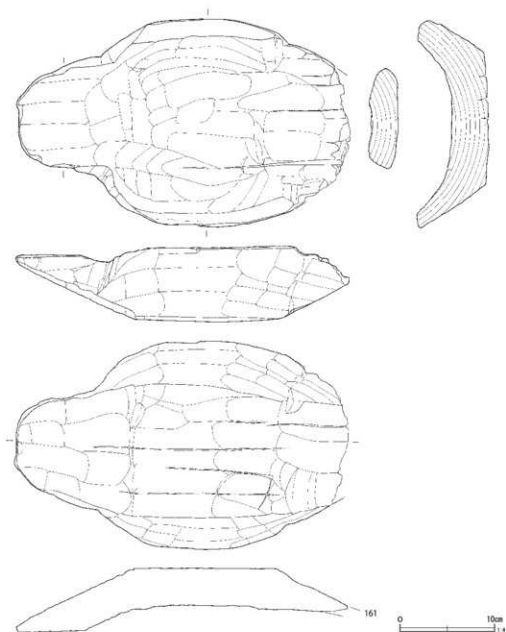
158は、農具の木錘である。円錐形の形状と、上端・下端の工具痕の粗い二次的な加工痕から、横槌もしくは竪杵の敲打部の転用品と推定される。側面部には浅い抉り部が認められ、木錘として使用時の組紐け用の抉り、もしくは横槌時の敲打痕と思われる。長さ22.1cm、幅7.4cm、厚さ5.9cmである。芯無材から削り出したもので、樹種はイチイガシである。(図版185-4/整理番号561-1/ST2-445)

159は容器の槽である。製作途中で破損し、放棄されたものである。半割り材の割り面を上面にし、横手取りに刳り抜いたものである。外面の底面・側面・木口面は平面的に加工され、各面が接する部分には、稜が形成されている。内面は刳り抜いている途中で、浅い直線的な凹みが残されている。現存長20.8cm、幅17.7cm、厚さ6.5cmである。樹種はクスノキである。(図版186-1/整理番号825/No76/ST2-566)

160は、浅い容器の盤である。厚みのある板目状の板材の表皮側を上面にし、横木取りに刳り抜いたものである。整理番号825の槽とは、刳り抜き面が異なる。平面形は長方形で、1/4ほどの残存と推定される。上面は木目方向に工具が移動しながら浅い刳り抜き面が形成されている。縁部は細かく、ほぼは大きく加工されている状況が観察できる。外面部では底面は平坦で、明確な稜を持たずに緩やかに側面・木口面に繋がる。上面・背面ともに一部が炭化しているが、表面的なもので、意図的に焼き入れした可能性も考えられる。現存長37.8cm、現存幅13.4cm、厚さ3.1cmである。



第263图 第4号满踪第6地点出土遗物(8)

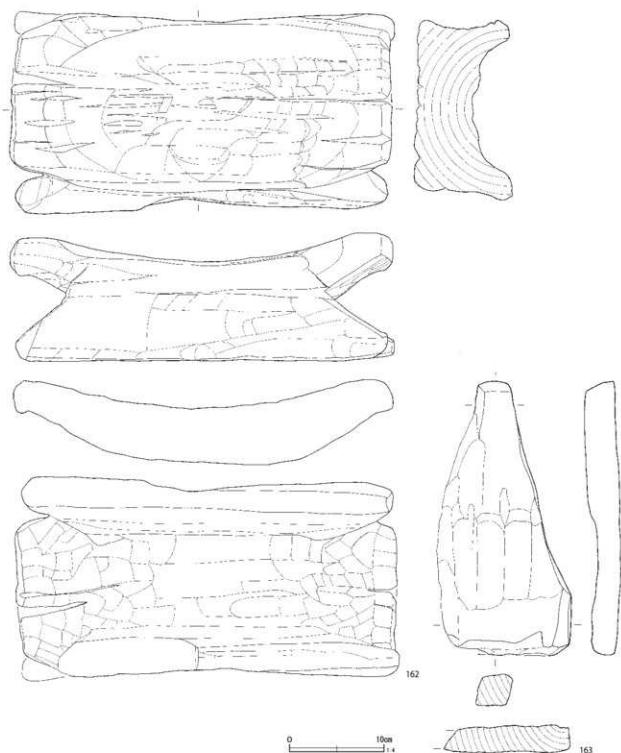


第264図 第4号溝跡第6地点出土遺物(9)

樹種はケヤキである。(図版187-1/整理番号859/No114/ST2-576)

161は容器の槽で、中央の隅丸方形の容器部の両側には羽根状の持ち手が広がる形状を呈している(一方は欠損)。半割り材を横木取りに割り抜いたもので、一木から造り出されている。平坦な割り面を上に向けて割り抜き、外面の側面部・底部は木材の半円面が削り落されている。容器部の内面には工具痕が残り、手斧によって深さ3.6cmほ

ど割り抜かれている。持ち手上面には水平面が成形されている。外面では、木口面・側面・底面ともに直線的・平面的に仕上げられ、各面が接する箇所にはそれぞれ稜が形成されている。現存長35.4cm、幅21.9cm、高さ7.6cmである。厚さが容器口縁部1.5~2.5cm、底部3.9cmほどあり重厚感が強く、洗練された様相がみられない。樹種はモミ属である。(図版186-3/整理番号640/No167/ST2-489)



第265図 第4号溝跡第6地点出土遺物(10)

162は半割り材を横木取りした、一木造りの雑具の腰掛である。側面部を脚とした、断面円形の脚である。まず、半割り材の樹皮側を上面に取り、上面・側面部を削り落した直方体部材を加工した

ものと思われる。上面(座面部)は両木口付近には平面が残るが、中央に向かってレンズ状に削り込まれている。剝物の槽とよく似た加工が施されている。背面部は、長手方向両端を脚部として残

され、中央部が削り込まれている。上面の形状と比例させ、両端部は上方に迫り上げられ、端部付近は水平に仕上げられている。そのため、中央では工具痕が長いのに対し、両端部では細かく、短い。脚部は両端が挟り込まれ、側面からみるとX字形を呈している。外側面にはケズリ加工によって整形され、上面・木口の二方向からみると、中央部に向かって内彎し、使用時に掛かる圧力を分散させるような形状となっている。下端面（接地面）は平坦に加工されているが、立ち上がり部の稜がなく丸い。ほぼ全面に焼き入れが行われている。長さ40.7cm、幅19.0cm、厚さ10.1cmである。樹種は、クワ属（V-1）と・ヤマグワ（V-2）に同定されている。（図版188-2/整理番号876/No164/ST2-519）

163は、雑具の組合せ式腰掛の脚板である。通常は上端部の出柄が座板と結合し、座板に対して外側に「ノ」の字に開くように組み合わせられる部材である。本品は左上半部が未加工、下半部が欠損したもので、製作途中に破損した未成品である。そのため、上端の出柄は未成形、下端は未加工のままで、製材時の切断面が粗く残った状態である。表面部の下半には、挟り込むように深くケズリが施され、端部付近には平坦面が形成されつつある。長さ29.1cm、現存幅3.9～13.4cm、厚さ2.9～3.4cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。（図版187-2/整理番号650/No157/ST2-580）

164～177は、建築部材である。

164は柱材である。上端には深い工具痕が残るが、当たり面は平滑であり、一次的な切断面と推定される。下半部は被熱により炭化し、下方は欠損する。また、背面には段差が生じているが、剥離によるもので人為的な加工痕ではない。現存長61.4cm、幅9.8cm、厚さ8.7cmである。木取りは芯持丸木、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。（図版187-3/整理番号321/No205/ST2-412）

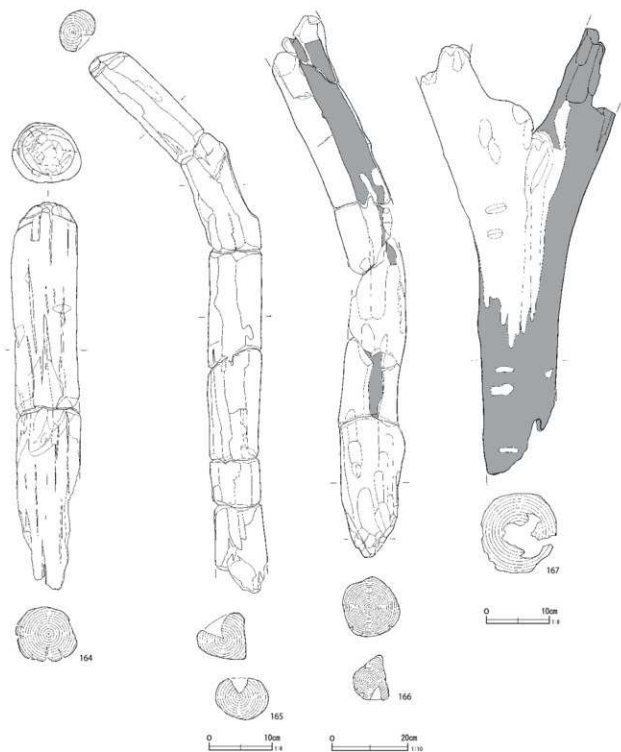
165は分枝材を用いた部材で、部位は不明であ

る。Y字形に枝分かれした又材の一方が二次的に切り落された転用部材と想定していたが、表面に残された工具痕は想像以上に滑らかで、当初から分枝部分が切り落される屈曲した部材として用いられていた可能性もある。上端部には階段状に工具痕が残り、二次的に切断されたものと推定される。下端は折損している。現存長92.7cm、幅6.8～8.4cm、厚さ6.6～7.4cmである。木取りは芯持丸木、樹種はコナラ属コナラ節である。（図版189-1/整理番号723/No109/ST2-867）

166は彎曲した形状であるが、長尺・大径の芯持丸木であり、柱材と思われる。下端には伐採時の工具痕を明確に残す。上半部は被熱によって炭化している。また上方を欠損し、現存長146.8cm、幅9.2～15.1cm、厚さ11.9～15.3cmである。樹種はクワ属である。（図版189-2/整理番号303/No71/ST2-1192）

167は、先端がY字形に分枝した芯持材を活用した又柱である。被熱による炭化が著しく、下端部は焼失し、芯部の空洞化も認められる。表面の加工痕も確認できない。現存長71.3cm、幅12.0cm、厚さ12.7cmである。樹種はクワ属である。（図版187-4/整理番号628/No220/ST2-1055）

168は梁桁材と推定される。両端とも欠損し、全長は不明である。芯持ちの半割り材の割り面を平滑にケズリ加工を施すが、断面形は半円形を残す。図上半部には6.2×5.2cmの方孔が貫通する。半割り面を下にして穿孔され、きれいな仕上りの穿孔面から、鉄鑿による加工と推定される。また方孔の約60cm下の背面には、5.2×6.7cmの範囲に極めて雑な工具痕がみられる。形状・深さから他の部材と組み合わせるための欠き込み仕口とも異なる。そのため、貫通孔を穿つ途中で寸法が合わなかったために放棄した痕跡の可能性が考えられる。現存長141.2cm、幅11.6～12.2cm、厚さ4.3～5.8cmである。樹種はムクノキである。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代1570±30、

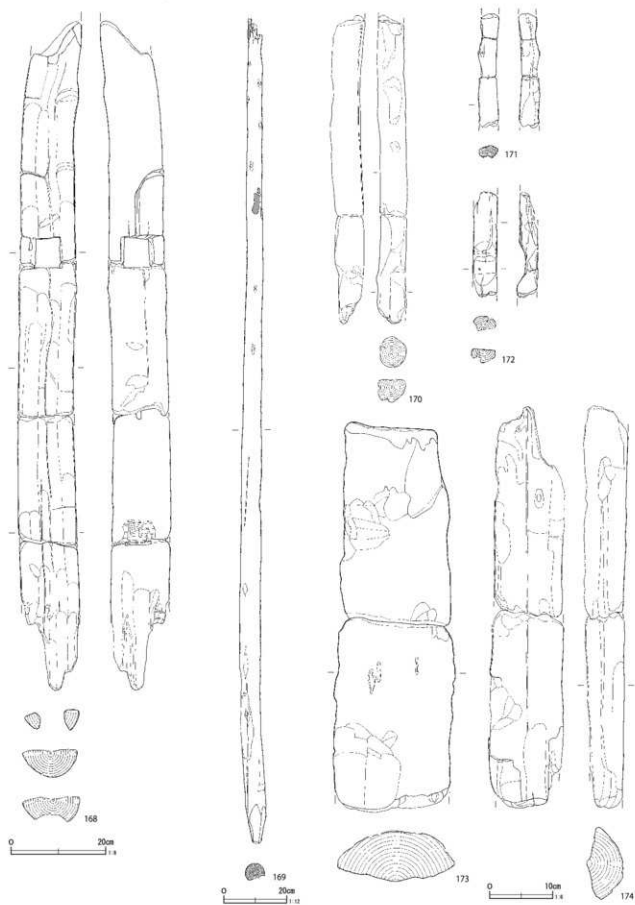


第266図 第4号溝跡第6地点出土遺物(11)

暦年較正年代435calAD-492calAD・507calAD-520calAD・527calAD-538calAD・425calAD-551calADである。(図版190-1/整理番号540・578・765/No258/ST2-439)

169は垂木である。先端部には本来、有頭棒状

加工されていたもので、頭部が欠損したものである。手斧等の工具によって削り出されたもので、5面に亘る工具痕から反時計回りに加工された順序が復元できる。上端は欠損し、現存長260.6cm、幅4.7~6.6cm、厚さ4.9~6.1cmである。先端に向



第267图 第4号清跡第6地点出土遺物(12)

かうほど太くなっている。木取りは芯持丸木、樹種はモミ属である。ごく一部であるが、炭化している。(図版188-3/整理番号893/No27/ST2-1059)

170は垂木と思われ、両端部を欠損する。先端部は欠き込み部から折れたもので、辛うじてケズリ加工の一部が観察できる。現存長48.7cm、幅4.1~4.3cm、厚さ4.9cmである。木取りは芯持丸木、樹種は同定していない。(図版191-1/整理番号731/No258)

171は172と酷似した棒状の木片であるが、直接的な接合関係がない。同一個体であれば、垂木等と思われる。芯を残した半割り状の木取りで、側面部にケズリがみられる。上下端ともに欠損し、現存長18.3cm、幅3.1cm、厚さ1.9cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版186-2/整理番号869-2/No237/ST2-592)

172は垂木等と思われ、先端に欠き込みが入れている。また欠き込み部には径0.3cmほどの小穴が貫通している(釘穴ではない)。両端ともに欠損し、現存長16.9cm、幅3.8cm、厚さ3.0cmである。木取りは芯持丸木、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版186-4/整理番号869-1/No237/ST2-591)

173は横架材と思われる。上下ともに欠損する。半割り材の樹皮側面の3ヶ所に加工痕がみられる。図上半部左側には粗い加工痕が残る。下端左側の加工痕は、他の部材と組み合わせられる欠き込み仕口と思われる。また、半割り面は概ね未加工のままである。現存長62.1cm、幅18.5cm、厚さ8.0cmである。樹種はエノキ属である。(図版191-2/整理番号659/No11/ST2-890)

174も横架材と思われる。長手の半割り材の側面から、欠き込み状の加工が施されている。図の上端部にあたり、現状ではここから欠損する。割り面・側面・背面には目立った加工痕はみられない。下端も欠損し、現存長64.1cm、幅5.8cm、厚さ11.5

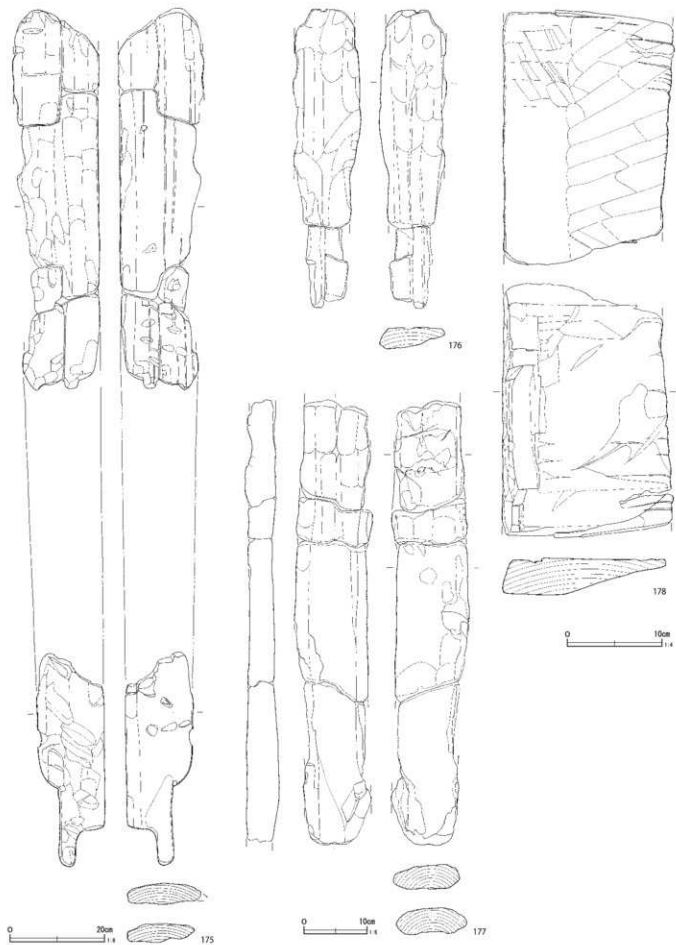
cmである。木取りは丸木、樹種はツバキ属である。(図版191-4/整理番号813・848/No95/ST2-909・575)

175は、台輪・蹴放し等の横架材と思われる。直接接合関係のない部材片であるが、出土状況・形状・加工方法・風化状況等に共通部分が多く、同一の個体と推定される。現存する部材だけでも150~180cm前後と推定されるため、本来の大きさは2m超級に復元される。板目材の芯側面にケズリ加工を施して平滑面を形成する。反対に外側面では一部にケズリが施される程度で、全体的に丸みが残されたままである。この両面の風化の度合いから、芯側面が内面、他方が外面と推定され、風食差が顕著にみられる資料である。端部の角には欠き込みが施されている。しかしその反対側は磨減が激しく、人為的な加工と欠損の判別が困難である。現存する長さ80.5cm+45.1cm、幅15.6cm、厚さ3.9~4.4cmである。樹種はスタジイである。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代1620±30、暦年較正年代420calAD-439calAD・487calAD-531calAD・390calAD-536calADである。(図版192-1/整理番号649・655/No92/ST2-579・584)

176は横架材と思われる。板目材の樹皮側面を平滑に加工した幅の狭い板材である。欠き込みなどの仕口はみられず、部位は不明である。現存長47.5cm、幅10.3cm、厚さ3.6cmである。樹種はスタジイである。(図版191-3/整理番号669/No49/ST2-598)

177も横架材と思われる。板目材の樹皮側の弧を平坦に加工されている。図左端付近には欠き込み状の挟り込みがみられることから、梁桁材の可能性もある。両方向ともに欠損し、現存長70.9cm、幅10.5~11.2cm、厚さ4.1~4.4cmである。木取りは板目、樹種はオニグルミである。(図版196-1/整理番号683/No30/ST2-596)

178は、用途不明の板材である。左側の一面の



第268图 第4号满踪第6地点出土遗物 (13)

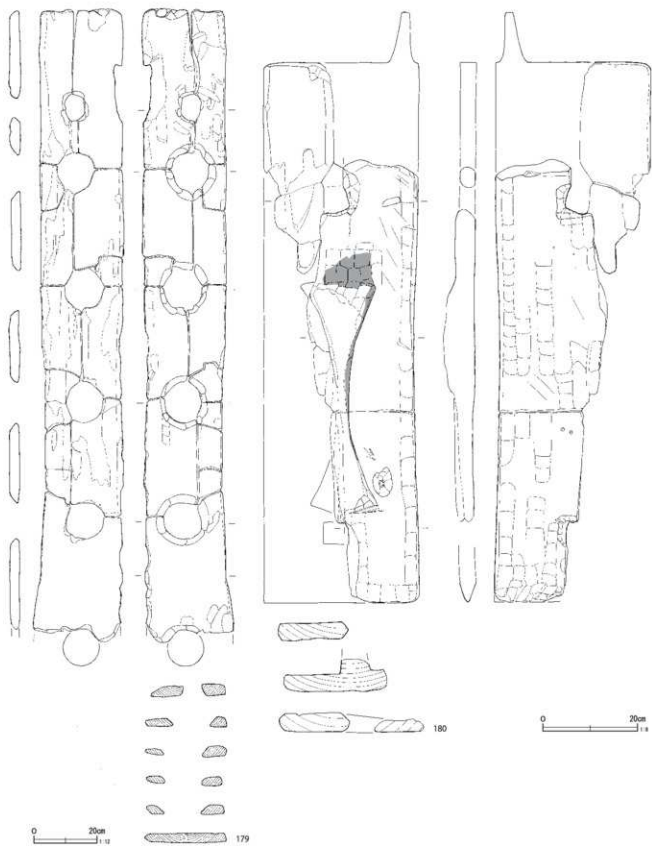
端部が片刃形に削り落とされた板材である。対面の右側は垂直であるが、工具痕が極めて粗く、二次的な切断痕と判断される。そのため、本来はある程度の長さをもった板材と推定される。端部を片刃形に薄く仕上げた特徴的な形状から、板倉造り建物の壁板であった可能性が考えられる。薄く削った部分の先端を柱の脇溝に落とし込むものであるが、当たり痕は観察できない。表面の風化の度合い（風食差）から、加工を施した面が建物の内側にあたると思われる。外面の切断部付近には、直線的な段差が生じている。仕口加工と断定できるほどの規模ではないため、他の部材との当たり痕と推測される。現存長18.1cm、現存幅27.1cm、厚さ3.9cmである。木取りは板目、樹種はアスナロである。（図版196-3/整理番号538/No201/ST2-449）

179は、5つ以上の円孔が穿たれた板材で、用途は不明である。円孔に残された工具痕は粗く、二次的に穿孔されたものと判断される。一方、上端の隅丸方孔は一次的な穿孔である。そこで、形状・大きさ・端部付近に穿孔する部材であることから、建築部材の板材が転用されたもので、上端の隅丸方孔は柱の長柄を通す貫通孔と考えられる。二次的に穿孔された円孔は下端部は欠損する。上面側から穿孔されたもので、断面形が上面は広く、下面が狭い斜め方向に穿たれている。上面径14.8~18.1cm、下面径11.1~13.0cmである。全体の大きさは、現存長200.2cm、幅23.8~25.9cm、厚さ3.1~4.2cmである。木取りは芯に近い部分の板目、樹種はスダジイである。転用後の用途の一案として、「壺などを載せる台」があげられる。この場合、日常生活に用いられていたものではなく、儀式的祭壇的な意味合いの強いものである。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代 BP1565±20、暦年較正年代 calAD436-calAD490・calAD509-calAD518・calAD528-calAD538・calAD430-calAD541である。（図版192-2/整理番号875

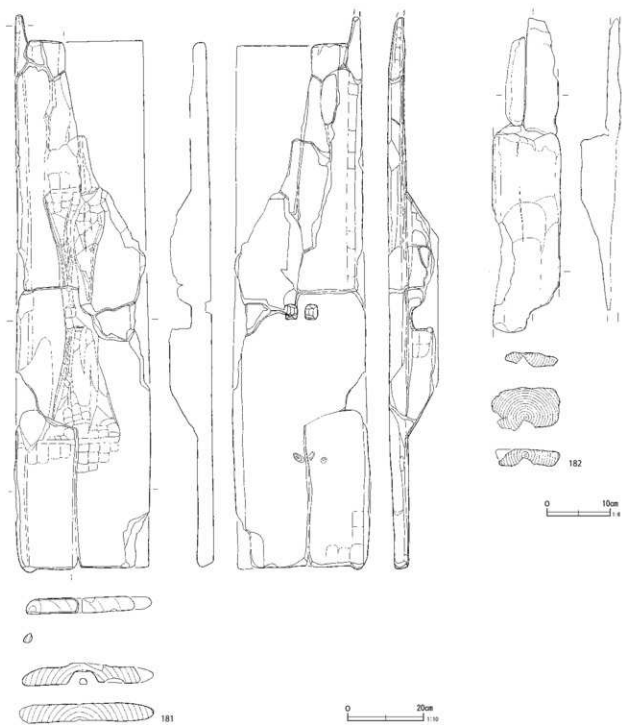
／No206/ST2-500）

180は、一枚板から削り出された建築部材の両開きの扉である。本来ならば、同辺の上下に回転軸が造り出され、開口部上下の楣・蹴放しに遣り返す^{ひんがし}俵^{ひんがし}で納められたものであるが、上下とも軸部は欠損している。181を参考に、板厚の薄い方を上にする、左扉となる。外面中央部には門受けが設けられ、平面U形の側面部には工具痕が明瞭に残る。基部付近のみの残存で、門穴等は消失している。上幅現存13.9cm・下幅現存9.1cm・長さ49.0cm・現存高2.7cmである。背面は平滑に仕上げられている。下端部は表裏両面から斜めに工具が入られ、断面形は尖る。表面のケズリ痕と比べると、刃当たり痕が粗く、二次的な切断痕と判断される。また、門受けの上下には方形の貫通孔が穿たれて、工具痕の観察から、二次的なものと思われる。さらに、門受右下の未貫通の円形孔は、穿孔途中で放棄したものと思われる。扉の用途とは直接的に結びつかないこともあり、二次的な加工と考えられる。長さ調節・貫通孔の穿孔から、貫通孔に脚状の部材を組み合わせて机・案の天板として背面平滑面の活用や、建物開口部の楣・蹴放し等の部材への転用が想定される。大きさは、現存長98.3cmで、上端辺と門受の位置関係から、140~145cm前後に復元される。幅は直に計測できる箇所がないが、32.8cmほどになる。厚さは3.8~4.2cmで、下方に向かって厚くなる。木取りは芯に近い板目、樹種はエノキ属である。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代 BP1692±32、暦年較正年代 calAD264-calAD276・calAD332-calAD402・calAD256-calAD304・calAD314-calAD419である。（図版193-1/整理番号879-2(A)/No262/ST2-495）

181は、建築部材の扉である。両開きの左扉で、一枚板から削り出されている。左辺の上下に回転軸が造り出され、上下に遣り返す^{ひんがし}俵^{ひんがし}で納められた扉である。そのため、上軸は細く長く（現存長



第269图 第4号满坑第6地点出土遗物(14)



第270図 第4号溝跡第6地点出土遺物 (15)

6.8cm・太1.5~3.3cm)、下軸は太く短い(現存長0.8cm・太3.2cm)。凹受けも造り出され、平面) (形の側面部・周辺部には工具痕が明瞭に残る。上幅15.5cm・下幅20.3cm・長さ64.8cm・現存高7.1cmである。凹穴は壁によって方孔が削り貫かれているが、凹穴外方を欠損する。現存で5.9

~7.9cmを測る。凹受けの背面には、二方向から挟り込んで繋げられた通し穴が設けられている。入り口部はタテ3.9cm×ヨコ3.2cmの方形である。用途として、紐等を通して内側から扉を閉める際の引き手とするもので、このことから、外開きの扉と推定される。大きさは、上下の軸部も含めて

現存長146.0cm、板部137.7cm、幅35.4cm、厚さ4.7～5.5cmである。推定される両開きの開口幅は60cm未満ほどで、長さ比べて幅が狭いのが特徴である。木取りは芯に近い部分の板目、樹種はムクロジである。また、放射性炭素年代測定の結果は、補正年代BP1735±20、暦年較正年代calAD255-calAD267・calAD271-calAD304・calAD314-calAD335・calAD243-calAD354・calAD367-calAD380である。(図版194-1・195-1/整理番号879-1(B)/No14/ST2-496)

182は、建築部材の梯子の破損品である。一木の芯持丸木材から造られた刻み梯子で、階段1段とその上下の部分のみが残存する。階段の下方部は手斧等の工具によって挟り込むように削り出され、表面には工具痕が明瞭に残る。階段上方は垂直に成形され、段上面は平坦に削られている。また、両側面と背面も平坦面が形成されている。階段部の断面形は長方形を呈していることから、タテ6～7cm、ヨコ11cmほどに製材された角材が刻まれた梯子と推定される。現存長50.0cm、幅10.8cm、階段高4.5cm、階段厚6.9cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版196-5/整理番号718/No225/ST2-557)

183は、みかん割り材の円弧面にケズリ加工を施して平坦面を形成しようとした木製品である。用途は不明であるが、候補として農具の作業台が考えられる。ただし、割り面を下面にすることで安定感に欠けるものとなるため、疑問が残る。上端は伐採時の痕跡が残り、やや尖った形状を残す。長さ54.2cm、幅14.9cm、厚さ6.1cmである。樹種はヤナギ属である。(図版197-1/整理番号308/No202/ST2-609)

184は半截材である。元々、芯部が空洞化していた原材を半截したもので、積極的な加工痕をみることができない。建築部材として利用されていた可能性があるが、部位は特定できない。もしくは、使用されずに放棄されたものかもしれない。

現存長61.3cm、幅13.0cm、厚さ7.2cmである。木取りは芯持丸木、樹種は同定していない。(図版197-3/整理番号32/No119)

185～193は、用途が不明である。

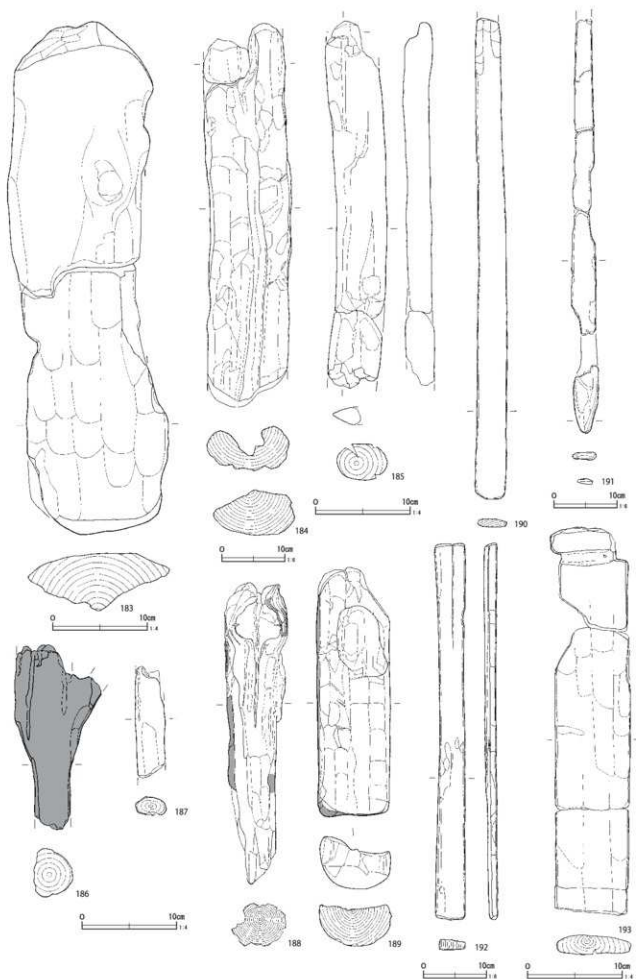
185は棒状部材である。上端は出柄状の加工にも見えるが、暖味な段や形状から相欠状の先端加工が施されている。下端には粗い人為的な工具痕と思われる状況が残ることから、二次的に切断されている可能性が高い。現存長39.0cm、幅5.3cm、厚さ3.8cmである。木取りは丸木、樹種はアサダである。用途については、機具等の部材が候補にあげられる。また垂木等の建築部材が転用されたものと推定される。(整理番号712/No241/ST2-543)

186は分枝材に加工が施されたもので、三方向ともに欠損する。大ききから建築部材とすることは困難である。部分的にケズリ痕がみられ、表面は炭化している。現存長19.5cm、幅4.2cm、厚さ5.1cmである。樹種はスダジイである。(図版196-2/整理番号684/No221/ST2-597)

187は棒状部材である。芯持丸木材で、上下端を欠損する。現存長11.8cm、幅3.2cm、厚さ1.9cmである。樹種はニワトコである。(図版196-4/整理番号869-3/No237/ST2-593)

188は杭状の木材であるが、明確な杭先加工は施されていない。一方では、表面に被熱による炭化部分が点在することから、焼きが入れられた柱材の腐食が進行した根入れ部分と解釈することもできる。現存長47.9cm、幅8.7cm、厚さ6.8cmである。木取りは芯持丸木、樹種はウコギ属である。(図版197-2/整理番号757/No97/ST2-559)

189は半割材で、割り面にはケズリ加工が施されている。上半には柄孔・欠き込みを意識したような浅く挟り込んだ部分がある。ただし、雑な工具痕で、加工は完了していない。図下端は切断され、上端は欠損する。現存長39.7cm、幅11.5cm、厚さ6.5cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属



第271图 第4号沟跡第6地点出土遺物(16)

である。左側面と下端面の一部が、被熱によって炭化している。(図版197-4/整理番号775/No.40/ST2-822)

190は棒状の板材である。上面には丁寧な加工が施され、極めて平滑である。一方、背面にはケズリ加工はみられず、製材時の分割面が残る。側面の一部に、挟り込まれたような箇所があるが、工具痕は不明瞭である。左端は欠損し、現存長76.7cm、幅4.7cm、厚さ1.3cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。表面の丁寧な加工から、紡織具や機具関連の部材が候補として考えられるが、部位等の特定はできない。(図版191-5/整理番号619/No.218/ST2-1091)

191は細長い板材である。形状的には剣形を呈し、端部(右端)は剣先上加工されているが、鋭さはみられない。上下面ともに平滑に丁寧な仕上げである。側面は平坦ではなく、丸みを持った三角形に整えられている。よって断面形態は、扁平な亀甲形をしている。先端部付近の下側面と中央付近の上側面には、幅11~12cm程が挟り込まれている。先端部付近と左端を欠損し、現存推定長65.7cm(10.9cm+50.3cm+ α)、幅2.5~3.8cm、厚さ1.0~1.3cmである。幅は、左端に向かって広がる。木取りは板目、樹種はモミ属である。用途については、紡織具・機具等の部材が候補としてあげられる。(図版198-3/整理番号630-1/No.59/ST2-924)

192は棒状の板材である。表裏面・側面のいずれも平滑に仕上げられている。一方、木口面には面取りが行われていない。側面部の1カ所に、ごく浅い挟り込みが認められる。長さ60.1cm、幅4.0cm、厚さ1.7cmである。木取りは柾目、樹種はスギである。大きさや仕上がりの丁寧さなどから建築部材とは考えにくく、機具等の部材が候補としてあげられる。(図版198-1/整理番号883/No.15/ST2-569)

193は板材である。芯持材が板状に面取りされ

たもので、表裏面・側面はきわめて平滑に削られている。左端部には幅1.5cmほどの溝状の欠き込みがみられ、その先端は有頸状になっている。右側は欠損し、現存長41.2cm、幅7.8cm、厚さ2.1cmである。樹種はエゴノキ属である。幅の狭い丁寧な仕上げの板材であることから、機具の部材等が候補に挙げられる。(図版199-1/整理番号833/No.98/ST2-568)

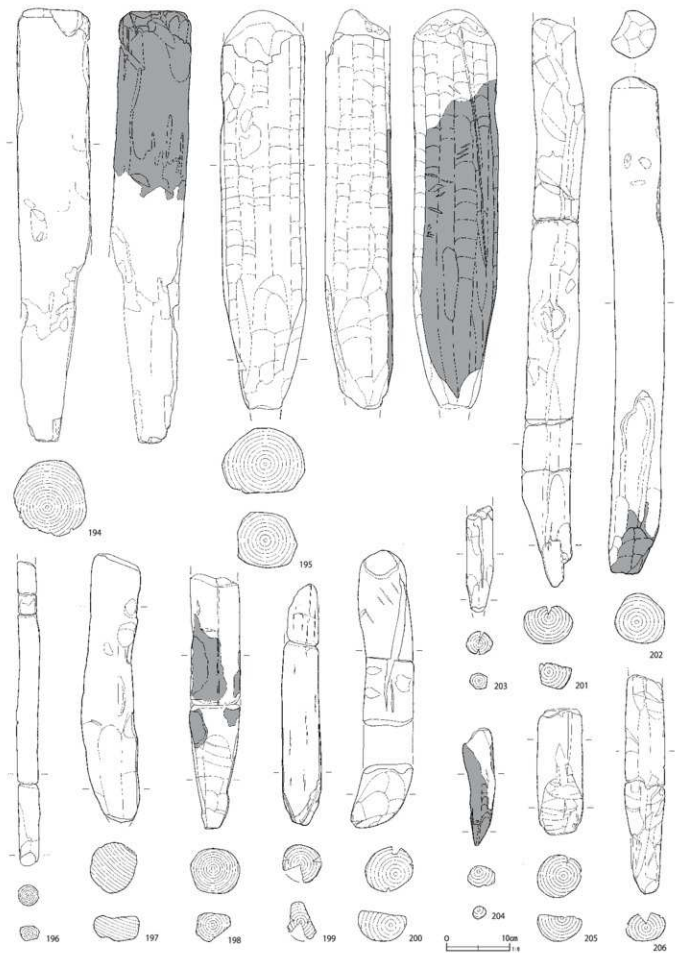
194~206は杭である。

194は柱材の転用である。杭先の加工は最小限で、折損した鋭利部もしくは寝入れの腐食部を杭先に活用したのと思われる。上端は垂直であるが、端面には粗い切断痕が残る。現存長68.9cm、幅11.5cm、厚さ12.2cmである。木取りは芯持丸木、樹種はクワ属である。上半部は被熱によって炭化している。(図版199-3/整理番号623/No.17/ST2-1098)

195は芯持丸木がケズリ加工によって面取りされたもので、上端は折損面に人為的・二次的な工具痕が認められる。よって、建築部材の柱材を杭に転用したものと推定される。先端には杭先加工が施され、背面を除く部分に五面の工具面が形成されている。先端部を欠損し、現存長63.6cm、13.1cm、厚さ10.3cmである。樹種はヒサカキである。背面の一部は、被熱により炭化している。(図版200-1/整理番号622/No.179/ST2-1102)

196は細い芯持丸木材の先端に杭先加工が施されている。加工面は表裏二面から行われている。上端は欠損し、現存長48.5cm、幅3.2cm、厚さ3.4cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。杭先以外の加工はみられず、ほぼ全面に樹皮が残存している。(図版201-3/整理番号815-2/No.73/ST2-574)

197は先端部には杭先加工が4面に亘って施され、断面長方形を呈している。先端は磨耗している。上方は欠損し、現存42.9cm、幅7.3~7.5cm、



第272图 第4号满踪第6地点出土物(17)

厚さ8.0cmである。木取りはみかん割り、樹種はエノキ属である。(図版198-2/整理番号724/No151/ST2-870)

198は先端に杭先加工が6面に亘って施されている。この加工痕を観察すると、滑らかな工具痕の面と粗い工具痕の面が混在している。粗い工具痕すべてが二次加工痕と断言する事はできないが、加工が施されていた建築部材等が転用された可能性を示唆しておく。上方は欠損し、現存長40.4cm、幅7.8cm、厚さ7.2cmである。木取りは芯持丸木、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。表面は一部炭化し、樹皮も残存している。(図版198-4/整理番号727/No181/ST2-556)

199は先端の杭先加工が概ね二面によるもので、背面部はひび割れている。上端は欠損し、現存長38.6cm、幅6.1cm、厚さ6.0cmである。木取りは芯持丸木、樹種はサカキである。(図版199-2/整理番号808/No71/ST2-571)

200は下端に一面のみの杭先加工が施され、上端は平滑に切断されている。このほかに目立った加工痕は見当たらず、当初から杭として用いられたものと思われる。現存長27.9+10.3cm、幅7.5~7.7cm、厚さ7.2cmである。上方部と先端部を繋ぐ部片がなく長さは不明であるが、70cm以上の製品と推定される。木取りは芯持丸木、樹種はクワ属である。(図版200-4/整理番号363/No183/ST2-426)

201は芯持丸木を2/3ほどに加工したものか、所々に工具痕が観察できる。これらは他の部材と組み合わせるような欠き込み仕口とは異なる。先端には杭先加工が施されているが、左側面の加工は他に比べて長く、欠き込みを持つ建築部材を転用した可能性もある。上方部は欠損し、現存長90.0cm、幅7.7cm、厚さ6.1cmである。背面には樹皮が残り、樹種はエノキ属である。(図版198-5/整理番号576/No33/ST2-465)

202は杭先加工が一面からの加工で、片刃形を

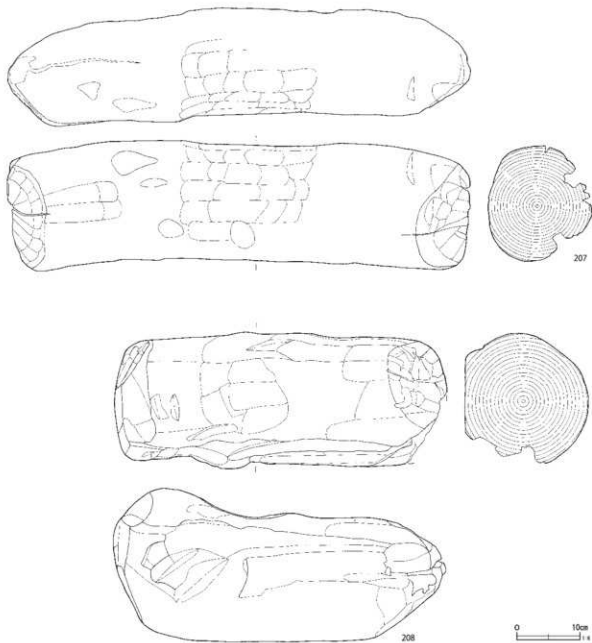
呈している。強度を増すために焼き入れを行い、加工面は炭化している。そのため、工具痕の観察が困難であるが、工具痕同士に段差を生じている等の状況から、二次加工によるものと推定される。上端には切断痕が認められるが、磨滅した工具痕から一次加工と二次加工かの判断をすることは難しい。ただし、二次的な杭先加工の状況から、建築部材の柱材(丸材)の転用と推定される。長さ79.1cm、幅7.8cm、厚さ8.0cmである。木取りは芯持丸木、樹種はツバキ属である。(図版201-2/整理番号695/No87/ST2-1112)

203は先端の杭先加工が六面に亘り、断面は六角形を呈している。上部は欠損し、現存長17.0cm、幅4.2cm、厚さ3.7cmである。木取りは芯持丸木、樹種はツブラジイである。(図版200-2/整理番号485/No180/ST2-413)

204は元々曲がった細い芯持丸木材で、先端には杭先加工が施されている。一部剥離しているが、ほぼ全面が浅く炭化しており、先端の加工後に強度を増すために焼き入れを行ったものと推定される。現存長18.7cm、幅4.3cm、厚さ3.4cmである。樹種はサカキである。(図版200-3/整理番号591-1/No154/ST2-451)

205は先端に一面のみの杭先加工が施されている。加工痕は深く、粗い二次的なもので、転用杭と推定される。上方は欠損し、現存長20.4cm、幅7.0cm、厚さ6.9cmである。木取りは芯持丸木、樹種はクワ属である。(図版200-5/整理番号397/No182/ST2-408)

206は先端に杭先加工が施され、上端には欠き込み状の痕跡が残る。いずれも工具痕が粗いもので、一次的な加工痕とは思えない。棒状の芯持丸木材が杭に二次転用されたもので、上端の工具痕は切断痕と見ることできる。現存長35.0cm、幅6.3cm、厚さ4.5cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属で、背面の一部に樹皮が残存する。(図版199-4/整理番号799・852/No116/ST2-



第273図 第4号溝跡第6地点出土遺物 (18)

560・242)

207・208は、木製品の原材となる伐採材と推定される。

207は、半割り・みかん割りによって分割し、活用するものと思われる。両端部は表裏二方向から切断工具が入られ、断面はV字形を呈している。中央付近には浅いケズリ痕がみられるが、明瞭ではない。長さ73.9cm、幅18.3cm、厚さ16.4

cmである。木取りは芯持丸木、樹種はクワ属である。(図版201-1/整理番号703-1/No220/ST2-1108)

208は、半割り・みかん割りによって分割し、活用するものと思われる。上端は比較的水平方向に切断されている。一方、下端は表裏二方向から切断工具が入られ、断面はV字形を呈し、先端は欠損する。中央付近には浅いケズリ痕がみられ

るが、製品作成加工ではない。長さ53.0cm、幅20.6cm、厚さ19.5cmである。木取りは芯持丸木、樹種はエノキ属である。(図版201-4/整理番号704/No215/ST2-865)

第4号溝跡第7地点(第274~280図)

第4号溝跡第7地点は、調査区最南端のM~P-14・15グリッドに亘る。第4号溝跡は、第5地点から南下し、第6地点を経由しながら西方へ流れを変えた。しかし、調査区域外で屈曲して再び東方へ進路を取り、調査区域内に流れ込んだものである。そしてまた、西側へ流路を向ける蛇行点が第7地点にあたる。

周囲の遺構は希薄で、北側約20mに第48号住居跡、北東約15mに第1号柱穴列が所在する。東北東約70m地点の第3次調査区域からは住居跡7軒・掘立柱建物跡2棟が検出され、E・F-16~18グリッドに分布する第73~75号住居跡とともに、第4号溝跡東側の集落を形成していたものと思われる。

流路部分のみの検出で、調査区域内の東岸部にはテラス部は設けられていない。西岸はほとんどが調査区域外にあるため平面的な確認はできないが、土層断面A-A'第3層堆積部やB-B'第1層堆積部(西側)がテラス部に相当する可能性がある。幅は、北端部5.7m・中央部8.1m・南端部5.8mで、蛇行点の頂点にあたる中央部で幅広くなっている。これと対応して、壁の立ち上がりも北端部と南端部は角度がきついが、中央部はなだらかな傾斜面が形成されている。確認面からの深さは、北端部1.5m・中央部1.25m・南端部1.4mを測る。

中央部付近の蛇行頂点やや南側のO-15グリッドには、東南東へ伸びる溝跡が派生している。延長6.8mが検出され、分岐部の幅1.8m・確認面からの深さ0.35m、東端の幅2.4m・確認面からの深さ0.65mを測る。第4号溝跡から分水した水を導く導水施設の可能性がある。分岐点と溝底との

比高差が約0.9mで、西岸部にテラス部を想定すると、恒常的な取水口とは考え難い。また下流部に水高を調節するような堰状施設も検出されていないことから肯定される。

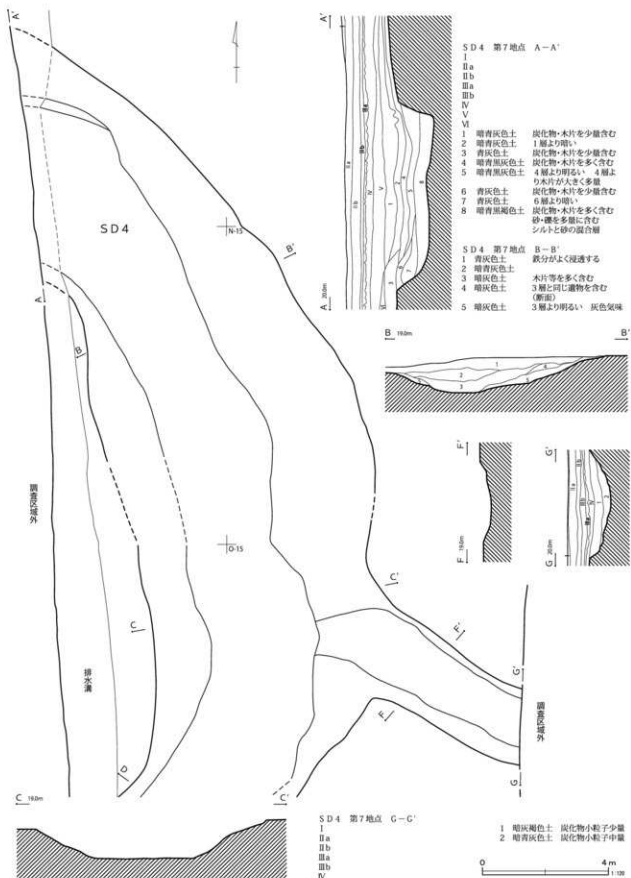
遺物の出土状況から、分布は概ね3箇所に分割することができる。

まずは、北端部東岸部である。長尺の木製品が、流路方向に長手方向を揃え、密集した状態で出土している。また、これらの木製品の下からは、溝底に打ち込まれた状態で杭が発見されている。このような木製品群の出土状況に、護岸機能が想定される。限定された範囲であり、構造的な復元は困難であるが、流路が蛇行する攻撃面を保護していたものと推定される。これらの木製品とともに、比較的残存率の高い環類(4・5・7・12)・高坏(13)・脚付鉢(15)・甕(25・26・33)などが検出されている。完存率の高さから、単純に廃棄遺物と捉えられない。木製品=護岸施設と土師器との関係性に規則性等は見出せないが、多分に人為的な要素を窺うことができる。

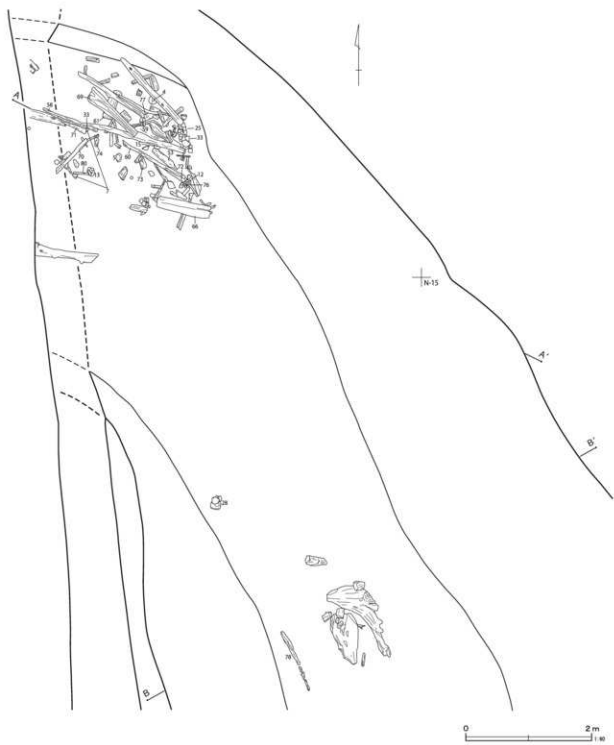
次は蛇行する頂点付近である。遺物の集中度が低く、3分割できる。北部は流路方向に長手方向を揃えた長尺の木製品と、坏(1・3)・埴(19)・甕(31)が出土しているが、きわめて疎らな分布である。中央部では木製品がきわめて希薄で、坏(2・6・8)・鉢(18)・甕(23)・甕(27・30)が出土している。南部では川岸に生えていた樹木の根元が流路内に落ち込み、その周辺から木製品が疎らに分布している。

最後は最南端部で、範囲が狭く出土量は少ないが、蛇行頂点付近の出土状況と比較すると密度は高い。木製品とともに、鉢(17・22)が出土している。

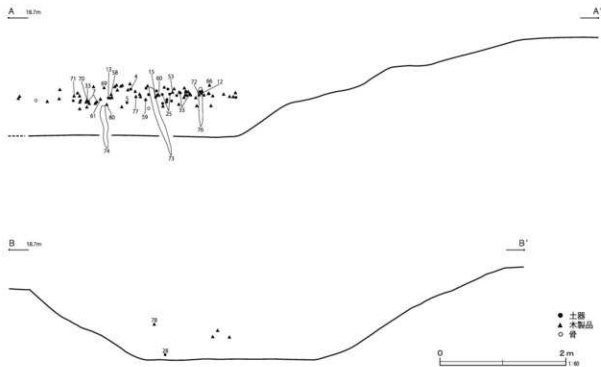
第281~284図は出土した土師器・須恵器である。環類には赤彩された坏身模倣と坏蓋模倣、無赤彩の北武蔵型坏蓋模倣、内灣口縁がある。高坏は脚部のみ出土で、脚が太く短いものである。



第274図 第4号溝跡 第7地点 (1)



第276图 第4号沟第7地点遗物出土状况(1-1)



第277図 第4号溝跡第7地点遺物出土状況(1-2)

鉢にはバラエティーがあり、広口や短頸壺・小型甕を扁平にしたような様々な形状が存在する。また、ハの字に広がる短脚付もある。甕は小型品と須恵器模倣の大型品がある。甕は長胴化したものである。これらの遺物は銭塚・城敷Ⅳ期新段階を中心とした時期に相当する。この中で、坏蓋模倣坏の系譜にある扁平な8・10は銭塚・城敷Ⅴ・Ⅵ期相当の7世紀前半代のものである。一方、外面にハケメが残された甕(28)や吉ヶ谷系の甕(34)は、銭塚・城敷Ⅱ期に相当する。

35～52は、同一個体と推定される須恵器の甕である。外面には平行タタキ後に螺旋状文が巡っている。螺旋状文は浅く、明瞭な沈線状とはなっていない。内面の肩部にはヨコナデが施されている。胴部の当て具痕は不明瞭で、細かく浅い同心円文である。胎土も灰白色系の地に黒色斑点状の物質が含まれている。焼成も堅緻である。これら胎土・焼成や器面調整・製作技法等の特徴から、5世紀後半代の東海西部の東山産と推定される。

49～52も須恵器の甕片で、35～48とは別の個体である。

49は、甕の肩部の破片で、外面平行タタキ後にカキ目が施されている。産地は不明であるが、在地産の可能性もある。

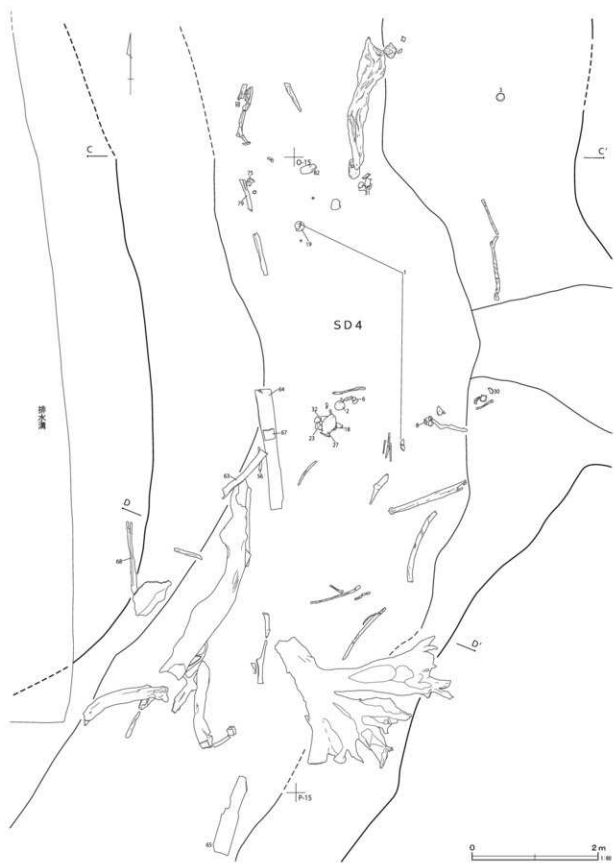
50は、甕の胴部片で、外面には平行タタキがみられるが、内面の当て具痕はナデ消されている。胎土・焼成や器面調整の特徴から、陶邑産の可能性をもつものである。

51・52は同一個体と推定される甕で、51が胴下半部、52が底部付近の破片である。そのため、器面調整の遺存状態は良くないが、外面には平行タタキ、内面は当て具痕ナデ消である。胎土・焼成や器面調整の特徴から、陶邑産の5世紀代のものと推定される。

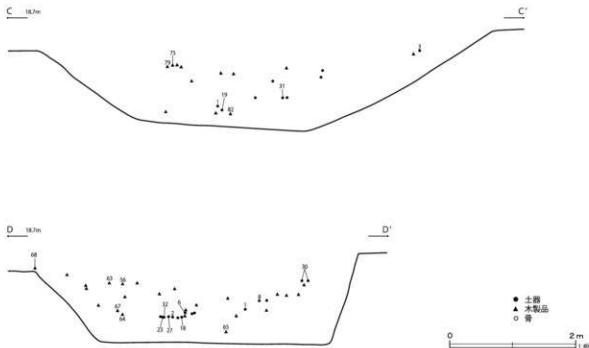
第285図53～第290図83は木製品である。

53・54は農具の竪柱で、芯持丸木材から削り出されている。

53は、搦部から握部に移行する括れ肩部が残存



第278图 第4号满坑第7地点遗物出土状况(2-1)



第279図 第4号溝跡 第7地点遺物出土状況(2-2)

している。握部はケズリによって細く成形される。搦部の端部は使用に伴って丸くなり、加工痕も観察できない。被熱によって一部炭化しているが、炭化面は一方に限定されていることから、意図的なものではない。現存長44.9cm、幅8.9cm、厚さ8.4cmである。樹種はツバキ属である。(図版201-5/整理番号681/No417/ST2-582)

54は、搦部から握部に括れる箇所が残存である。下端は使用に伴って角が取れて丸まっているが、中央部には製作時の加工痕がみられる。背面部は一部欠損する。現存長37.8cm、幅8.7cm、厚さ5.4cmである。樹種はツバキ属である。(図版202-1/整理番号651/No317/ST2-595)

55は、杭もしくは楔に転用されたものである。先端は1方向からの加工によって片刃状の形状を呈し、短い棒状品であることから楔などの用途も考えられる。棒状の芯無材の側面を6~8回ほど削って面を形成していたもので、本来は鋤・鍬の柄等が推定される。現存長18.6cm、幅4.1cm、厚さ3.9cmである。樹種はスギである。(図版202-

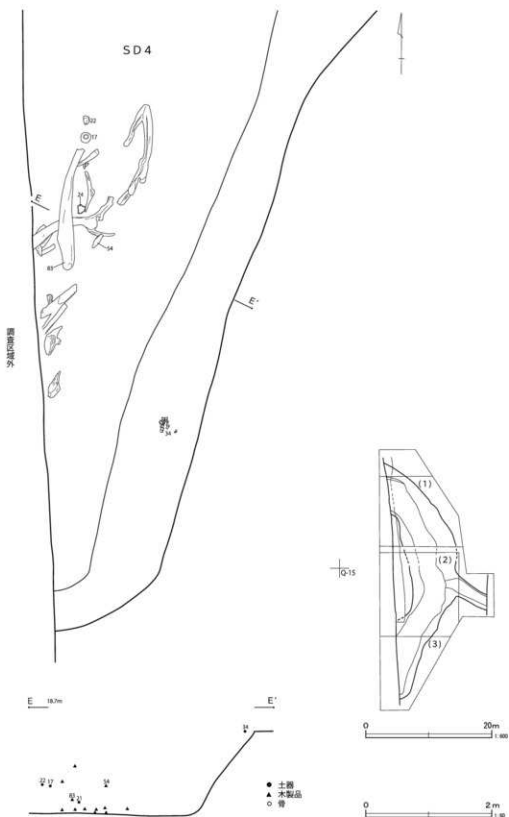
2/整理番号254/B区/ST2-984)

56は緩やかな曲がりをもつ棒状木製品で、農具等の柄と思われる。半割り材を加工したもので、上面・側面部には丁寧なケズリが施され、断面を方形に成形している。背面は剥離する。上下端が欠損し、現存長31.9cm、幅3.4cm、厚さ2.1cmである。樹種はカエデ属である。(図版202-3/整理番号198-1/No339/ST2-395)

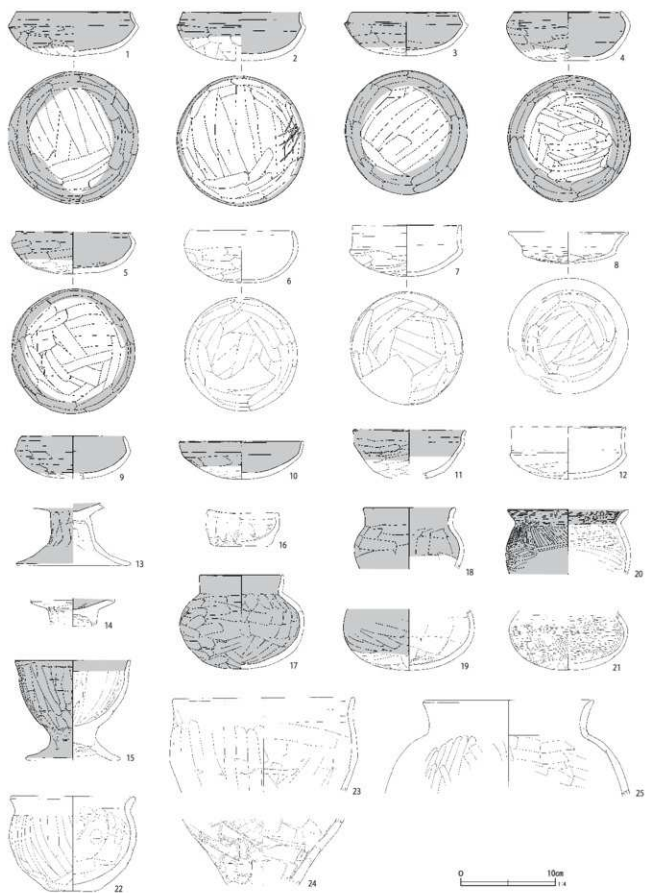
57は、芯無材から削り出されたやや扁平な棒状品である。上下端ともに欠損するが、大きさ・形状から、鎌などの小型農具の柄である可能性が考えられる。現存長22.9cm、幅2.5~3.4cm、厚さ2.0cmである。樹種はモミ属である。(図版202-4/整理番号676-1/一括/ST2-841)

58~67・69は、建築部材である。

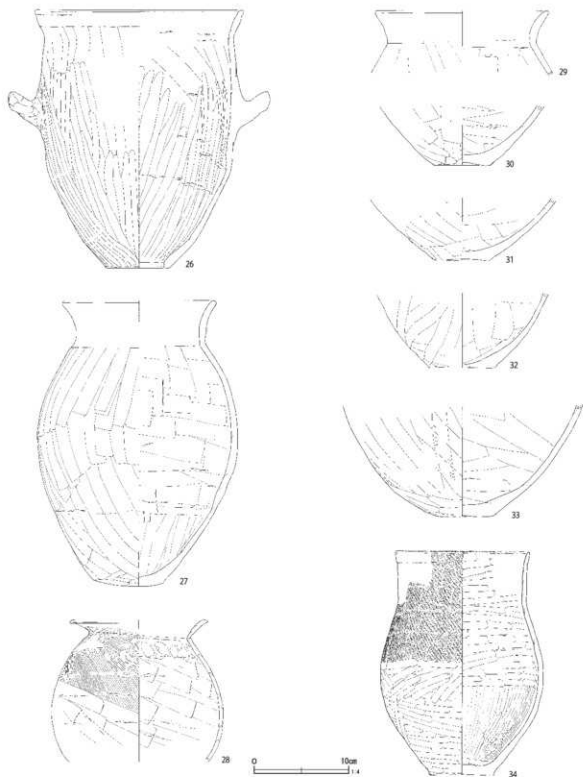
58は柱材で、仕口加工として上端の出柄と2ヶ所の欠き込みが確認できる。上端には現存長7.3cm、幅4.2cm、厚さ6.9cmの出柄が削り出されている。柄根本の上面部には粗い工具痕が残り、仕上げケズリが施されていないことから、現場合わせ



第280図 第4号溝跡 第7地点遺物出土状況(3)



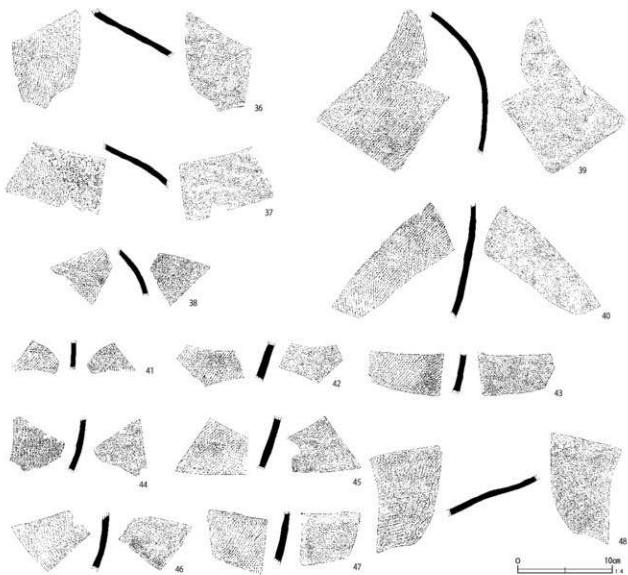
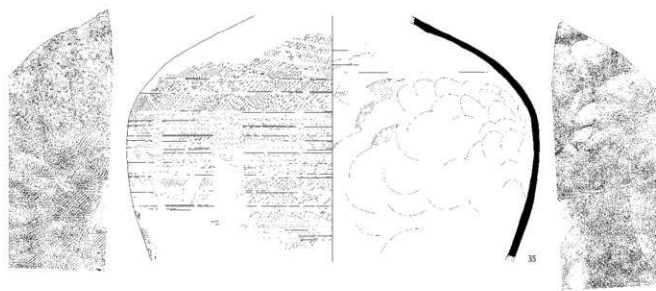
第281图 第4号沟葬第7地点出土遗物(1)



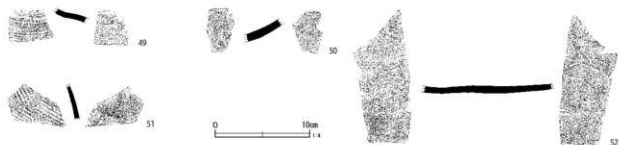
第282図 第4号溝跡第7地点出土遺物(2)

の加工痕と推定される。2ヶ所の欠き込みは、平滑に加工された左側面部に約40cm間隔で施されているが、下側の欠き込み部に欠損している。両者の欠き込み面には焼き入れが行われている。現

存長96.5cm、幅9.8~14.4cm、厚さ8.1~10.3cmである。木取りは半割り、樹種はフジキである。(図版203-1/整理番号702-1/No452/ST2-980)



第283图 第4号沟第7地点出土物(3)



第284図 第4号溝跡第7地点出土遺物(4)

第90表 第4号溝跡第7地点出土遺物観察表(第281~284図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	12.1	4.7		A E H I K	95	良好	にぶ・赤褐色	坏身模倣 赤彩 O15Gr No.365・375		148-4
2	土師器	坏	12.3	5.1		A E H	90	良好	にぶ・黄褐色	坏身模倣 赤彩 内面に草茎圧痕 O15Gr No.380		148-5
3	土師器	坏	11.4	4.6		A E H	80	良好	赤褐色	坏身模倣 赤彩 N15Gr No.323		148-6
4	土師器	坏	11.4	5.1	5.6	E H I	95	良好	赤	坏身模倣 赤彩 二次的被熱 M14Gr No.411		149-1
5	土師器	坏	12.0	4.4		A C D I K	100	良好	赤褐色	比企型坏 赤彩 No.462		149-2
6	土師器	坏	10.8	5.5		E H I K	85	普通	にぶ・赤褐色	内埋口縁 O15Gr No.378		149-3
7	土師器	坏	11.4	5.4		D E H I K	85	普通	にぶ・赤褐色	北武蔵型坏蓋模倣 M14Gr No.478・499		149-4
8	土師器	坏	12.5	3.3		A C H I K	90	良好	にぶ・黄褐色	坏蓋模倣 二次的被熱黒色化 O15Gr No.374		150-1
9	土師器	坏	(10.8)	4.5		E H I K	25	良好	赤	坏身模倣 赤彩 M-P14・15Gr		
10	土師器	坏	(12.8)	4.0		C E H I	60	普通	にぶ・赤褐色	坏蓋模倣 赤彩 器面風化顯著 M15Gr		
11	土師器	坏	(11.8)	5.1		A C H I K	20	普通	にぶ・赤褐色	坏蓋模倣 赤彩 底部を意識したケズリ M-P14・15Gr		
12	土師器	坏	(12.0)	5.5		C H I K	50	良好	にぶ・赤褐色	北武蔵型坏蓋模倣 M14Gr No.423		
13	土師器	高坏		6.6	12.0	A B C I K	70	良好	にぶ・赤褐色	(有枝坏) 屈折脚 赤彩 坏部破損後の支脚転用痕 M14Gr No.475		
14	土師器	高坏		3.0		C E I K	70	普通	褐灰	柱状脚の高坏? 赤彩 M14Gr		
15	土師器	脚付鉢	12.0	10.6	(10.0)	A H I	80	良好	橙	二次的被熱 M14Gr No.404・461		150-2
16	土師器	小型鉢	7.3	3.5		A E H I K	100	普通	灰黄	M14Gr No.323		150-4
17	土師器	鉢	8.8	9.9		A E H I	100	良好	灰黄	口縁部直立 赤彩 内面底部に赤色塗料付着 P14Gr No.311		150-3
18	土師器	鉢	(9.4)	6.4		E H	40	良好	赤	赤彩 二次的被熱 O15Gr No.383		
19	土師器	埴		6.4		A E H I	70	良好	橙	丸底 赤彩 O15Gr No.366		
20	土師器	鉢	(12.6)	6.8		A H J	50	良好	橙	赤彩 O14Gr No.344		
21	土師器	鉢		6.2		A E H I K	80	普通	にぶ・赤褐色	胴部扁平 外面に二次的被熱 (赤彩?) M-P14・15Gr		150-5
22	土師器	鉢	(13.0)	10.0	(5.4)	B C H I K	40	普通	にぶ・赤褐色	広口 平底 P14Gr No.310		150-6
23	土師器	瓶	(19.0)	10.0		D H I K	25	普通	にぶ・赤褐色	小型 O15Gr No.385		
24	土師器	瓶		7.1		E H I K	25	普通	灰黄褐	鉢形 二次的被熱 P14Gr No.321		
25	土師器	甕	(17.8)			A E G I	10	普通	にぶ・赤褐色	胴張 煮沸痕 M14Gr No.415		
26	土師器	瓶	(21.6)	27.2	6.6	A C E H I K	25	普通	橙	把手付 M15Gr		150-7
27	土師器	甕	15.8	30.0	7.5	A C E H I J K	100	普通	赤褐	長胴化 外面タテ平部に煮沸痕 内面に黒色付着物 O15Gr No.384		151-1
28	土師器	甕	13.7	15.0		A E H I K	50	普通	黒褐	中型 球胴形 煮沸痕 覆付着 M14Gr No.326		151-2
29	土師器	甕	(17.8)	6.9		A E I K	20	普通	灰黄褐	長胴化 煮沸痕 M-P14・15Gr		
30	土師器	甕		6.3	6.2	A B C D H I K	40	普通	にぶ・赤褐色	O15Gr No.370		
31	土師器	甕		6.6	5.7	A C E K	60	普通	にぶ・赤褐色	煮沸痕 O15Gr No.362		
32	土師器	甕		7.9	(7.0)	A C I K	30	普通	にぶ・赤褐色	煮沸痕 O15Gr No.385		
33	土師器	甕		11.8	7.0	C E	60	普通	にぶ・黄褐色	乾燥休止部での欠損 M14Gr No.415・499		
34	古ヶ谷	甕	(12.2)	23.8	6.8	G H	40	普通	暗褐色	口縁部~胴部上半に単層 RL 施文 P14Gr No.1		151-4
35	須恵器	甕		25.9		I K	30	普通	灰	35-48同一個体 東海西部(東山産) 5世紀後半代 最大推定径43.8cm 外面:平行タタキ後、螺旋状文・胴部自然縮付着 内面:細かく浅い当て具痕 胎土:灰白系の地に黒色斑点状の物質含む M14Gr M15Gr N15Gr BK		151-5

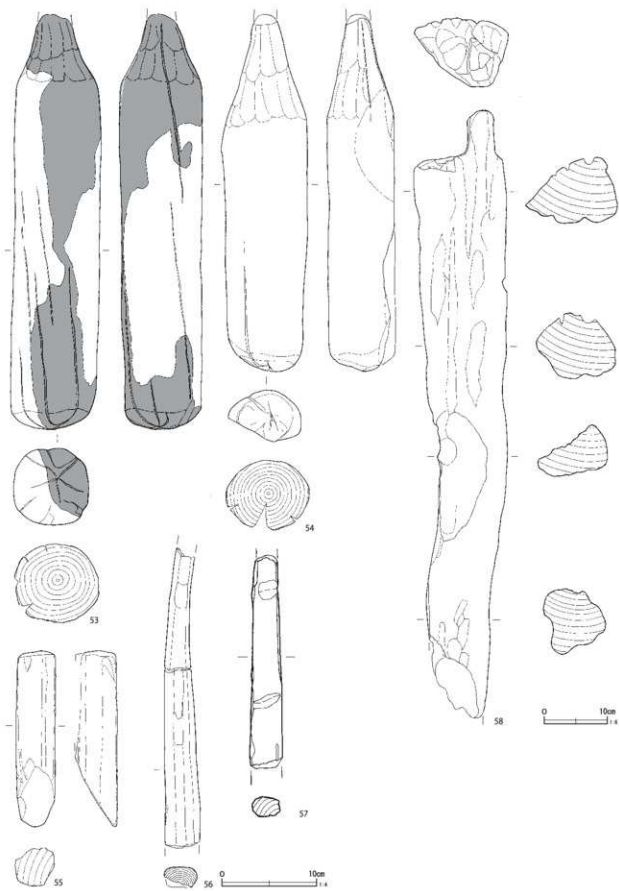
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
36	須恵器	甕		5.3		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) M14Gr	5世紀後半代	151-3
37	須恵器	甕		4.9		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) M14Gr No.3 / B K No.18	5世紀後半代	151-3
38	須恵器	甕		5.2		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) N14・15Gr / O14・15Gr	5世紀後半代	151-3
39	須恵器	甕		15.2		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) M14Gr No.427 / O14Gr	5世紀後半代	151-3
40	須恵器	甕		12.1		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) M14Gr	5世紀後半代	151-3
41	須恵器	甕		3.0		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) L14Gr No.3	5世紀後半代	151-6
42	須恵器	甕		4.4		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) N14・15Gr / O14・15Gr	5世紀後半代	151-6
43	須恵器	甕		4.5		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) M15Gr No.3	5世紀後半代	151-6
44	須恵器	甕		5.9		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) B K No.16	5世紀後半代	151-6
45	須恵器	甕		5.7		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) M14Gr No.1	5世紀後半代	151-6
46	須恵器	甕		6.4		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) M15Gr No.1	5世紀後半代	151-6
47	須恵器	甕		5.7		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) M15Gr No.2	5世紀後半代	151-6
48	須恵器	甕		4.3		I K	30	普通	灰	35~48同一個体 東海西部(東山産) N14・15Gr	5世紀後半代	151-6
49	須恵器	甕		1.7		E H I K	5	良好	灰	産地不明(在産地か) 平行タタキ後カキ目 下層	O14Gr	152-1
50	須恵器	甕		3.8		I K	5	良好	暗灰	陶色産か 外面:平行タタキ 内面:当て具痕ナデ消し	N14・15Gr	152-3
51	須恵器	甕		2.6		I	5	普通	オリブ灰	52同一個体 陶色産 内面:当て具痕ナデ消し	5世紀代 外面:平行タタキ L14Gr No.4	152-2
52	須恵器	甕		1.1		I	5	普通	オリブ灰	51同一個体 陶色産 内面:当て具痕ナデ消し	5世紀代 外面:平行タタキ L14Gr / M14Gr	152-3

59は、分枝式の柱材である。分枝部は人為的に切断され、工具の痕跡は雑であるが、工具面は滑らかである。上面部が水平を保てるように心がけられたような加工で、大引き受の部分と推定される。上端部は、大引き部と異なる粗い工具痕が残され、二次的切断面と判断される。下端部は被熱し、工具痕の観察はできない。しかし、被熱部が下端面のみに限定されていることから、二次的利用にあたって、切断面に焼き入れを行った可能性が高い。ただし、転用された用途は不明である。現存長58.5cm、幅8.3~10.8cm、分枝部幅20.0cm、厚さ7.8~10.2cmである。木取りは芯持丸木、樹種はエノキ属である。(図版205-1/整理番号899/No459/ST2-209)

60は、垂木と思われる。大きく2つの部片に分

かれ、両者は直接的な接合関係にはないが、出土状態や大きさなどから同一個体と判断した。図下端部に欠き込み状の加工がみられる。ただし工具の痕跡は粗く、二次加工の可能性も否めない。その場合には、一方向から施された杭先加工と推測することが可能である。現存長110.2cm、幅5.0~5.6cm、厚さ4.8~5.3cmである。芯持丸木で、樹種は同定していない。(図版202-5/整理番号307/No418)

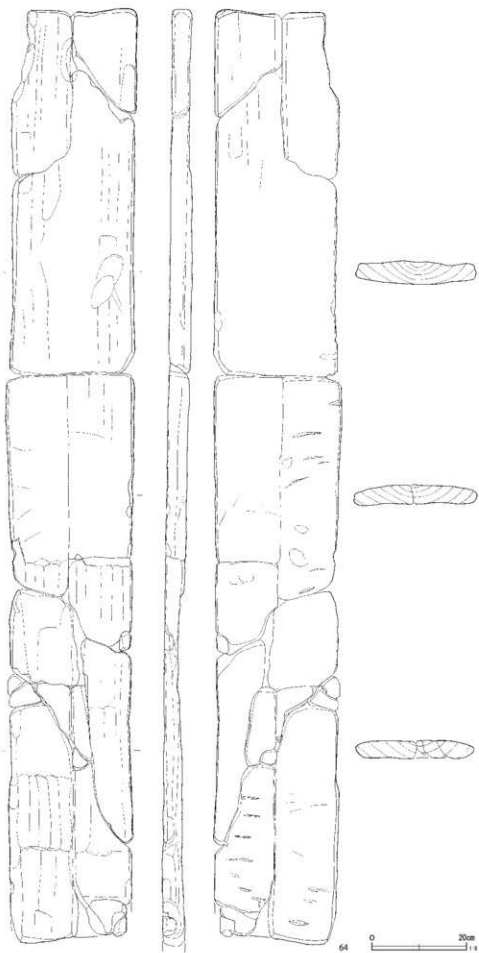
61は分枝材で、芯持丸木材から分枝していた枝を1本だけ残して利用されていたものと思われる。枝部先端は折損している。上下両端ともに欠損し、現存長198.9cm、幅4.5~6.8cm、厚さ4.7~6.9cmである。現存する長さや太さから、垂木の可能性が高い。樹種はモミ属である。(図版204-1/整理



第285图 第4号满踪第7地点出土遗物(5)



第286图 第4号沟第7地点出土文物(6)



第287图 第4号清跡第7地点出土遺物(7)

番号325/No446/ST2-615)

62は比較的、丁寧に面取りされた断面扁平な角材の一端に、出納状の仕口加工が施されたものである。柱材ではなく、梁桁・大引き・根太などの横架材と推定される。下端部には欠き込みが入れられ、細くなったこの部分で欠損する。現存長138.0cm、幅6.1~9.5cm、厚さ4.5~5.6cmである。木取りは榎目、樹種はフジキである。(図版203-2/整理番号702-2/No452/ST2-981)

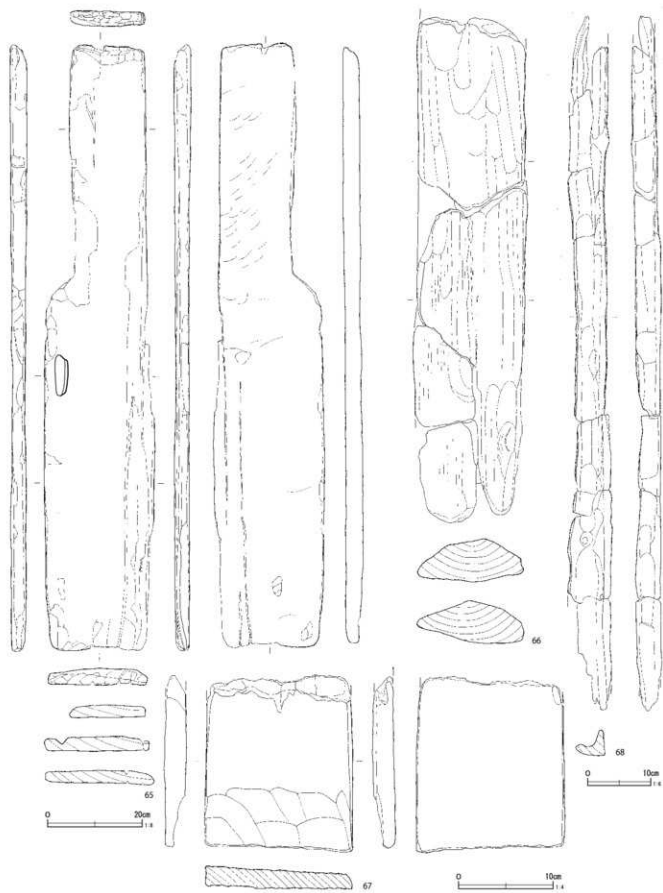
63は板材で、両端部の同一辺に突起がみられる。欠損した反対側の辺にも、同様の突起が削り出されている可能性がある。いずれにしても、板材の両端部には柱材と組み合わせられる方形の仕口が形成されている。側面部には抉るようにケズリを施し、中央付近が狭くなるような形成が行われている。上面はケズリ加工によって丁寧に仕上げられているが、背面には製材面がそのまま残されている。板材の特徴から、開口部の横架材(楣・蹴放し等)と推定されるが、軸穴等の納・貫通孔はみられない。現存長85.8cm、幅9.3~13.9cm、厚さ3.1cmである。木取りは榎目、樹種はサクラ属である。(図版204-2/整理番号565・646/No338/ST2-437・581)

64は板材で、図上端の左側面には浅い欠き込みが認められる。また、欠き込み部右側には、引き戸の把手状の抉り込みがある。上面にはケズリ加工が施され、平滑に仕上げられている。右側面部の面取りは丁寧に行為、断面もしっかりとした垂直面を形成している。一方、左側面部の面取りは緩く、断面も丸みを帯びている。背面部には積極的な加工痕はみられず、点々と工具痕がみられる程度である。長さ196.2cm、幅24.9~26.0cm、厚さ3.8~4.8cmである。厚みを持つ板材で、欠き込み状の抉り込みや、表裏の意識が高いことから、床板などの用途が推定される。木取りは板目である。樹種可定は3分割されていた部片ごとに行っていたが、スダジイ2と酷似したツブラジイ1に同定

されている。また、放射性炭素年代測定の結果は、補正年代1630±30、暦年較正年代385calAD-435calAD・491calAD-508calAD・519calAD-528calAD・345calAD-470calAD・477calAD-534calADである。(図版206-1/整理番号664・673・696-1/No336/ST2-964・1093・585)

65は板材で、下端部では端部上面付近をケズリによって薄くし、板の厚さが調節されている。上端部の木口面には、雑で粗い工具痕が残され、二次的な切断面と推定される。下端部と同様に、ケズリによって板の厚さが調節されている。下端部の板厚調節加工から本来は、板倉造り建物の壁板であったと推定される。両側面部ともに平滑に仕上げられていることから、芋刃(突付け刃)の板材となる。また、上端部の二次的切断後にも板厚調節加工が施されていることから、転用後も板倉造建物の壁板と同様に、柱脇の溝に落とす込まれた板材と想定される。さらに、中央付近には、引き戸の把手状の抉り込みがみられる。工具面は粗く、二次的な細工と思われる。再利用にあたり、移動を前提とした使用方法が加味されたことを物語る。そこで、深谷市中宿遺跡復元建物にみられるような、開口部の内側の閉塞板として転用されていた可能性が考えられる。長さ127.5cm、幅22.0~23.0cm、厚さ2.6~3.0cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。放射性炭素年代測定の結果は、補正年代BP1550±30、暦年較正年代calAD435-calAD491・calAD509-calAD518・calAD528-calAD555・calAD426-calAD576である。(図版207-1・208-1/整理番号627/No315/ST2-1116)

66は、みかん割り材の割り面側にケズリを施した板材で、断面形は台形を呈している。背面には目立った加工痕はみられない。しっかりとした厚みを持ち、大引・根太等の建築部材が候補に挙げられる。現存長80.3cm、幅16.8~17.0cm、厚さ6.9cmである。樹種はツブラジイである。(図版209



第288图 第4号满踪第7地点出土遗物(8)

一1/整理番号660/No428/ST2-583)

67は、壁板材である。端部付近の残存で、下端側には板厚調節加工が施されている。側面は、垂直もしくは近似する面を持つ。これらの特徴から、板倉造建物の壁板で、厚さが調節された端部が柱溝に落とし込まれる。板切方法は平切（突付け切）である。上端には粗い工具痕が残されているが、ごく一部分に限定されていることから、折損部の補修程度の加工とも考えられる。ほぼ正方形に近い板として再利用されたものと思われるが、用途は不明である。現存長18.7cm、幅15.6cm、厚さ2.1cmである。木取りは板目、樹種はスギである。（図版210-2/整理番号641/No337/ST2-488）

69は板材で、縦割れした残存品である。薄く仕上げられた板材で、上面には丁寧な加工が施されている。側面には面取り加工が行われている。下端面は垂直に切断されたものであるが、摩擦により本来のシャープさに欠ける。現存長102.2cm、現存幅10.3～20.6cm、厚さ2.0～3.1cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。（図版209-3/整理番号674/No444/ST2-1095）

68は、断面形がL字形を呈した長尺の部材である。割材の割り面を削り込んで、L字形（もしくはコの字形）に成形したものと推定される。図上半部ではしっかりとした角を有するL字形であるが、下半部ではやや丸まってくる。側面・底面は、ケズリによって面取りされている。用途は不明であるが、建築部材（部位不明）が候補の一つにあげられる。現存長109.6cm、幅4.7cm、厚さ4.1cmである。木取りは柾目、樹種はサクラ属である。（図版204-3/整理番号433/No347/ST2-440）

70は用途不明の棒状の板材である。上面・背面・側面は丁寧なケズリ加工が施されている。右側面は垂直面が形成され、比較的長いスパンで工具が動かされていた工程が把握できる。左側面

は上半部と下半部にかけてケズリが施され、やや尖った断面形が形成されている。下端面は側面に対して直交しない。端面は、工具の刃を押し当てて切断したような痕跡と推測される。何らかの意図により、ケズリによる面取りとは異なる方法が選択されたようである。上端は欠損し、現存長67.4cm、幅4.5cm、厚さ1.9cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。機具等の部材が候補として考えられる。（図版210-1/整理番号625/No463/ST2-1099）

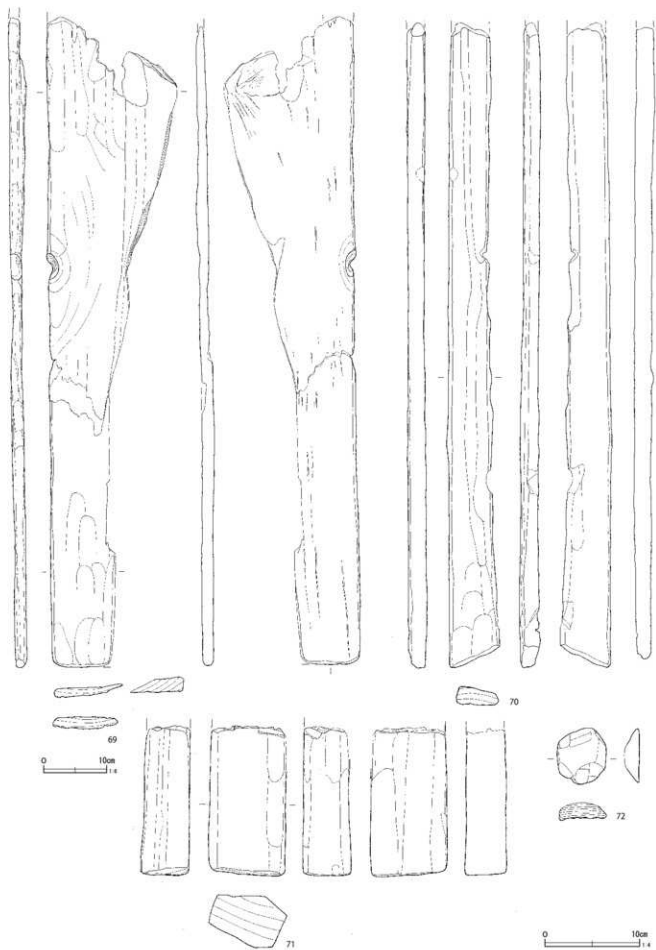
71は角材で、本来は長尺の建築部材と推定される。長手方向の各面にはケズリ加工が施され、断面形は長方形に近い六角形を呈している。梁桁材などが考えられるものの、部位は特定できない。上端は工具痕の粗い二次的な切断面と見ることもでき、何らかの意図を持った再加工と思われる。現存長15.8cm、幅8.1cm、厚さ4.7cmである。木取りは板目、樹種はスギである。（図版209-2/整理番号423/No453/ST2-798）

72は、半球状の木片である。上面の周囲には工具によるケズリ痕が残るが、頂部は磨耗もしくは剝離した状態で、ケズリ痕はみられない。背面は木材を削り取った際の痕跡と酷似した状態で、粗い面を残す。木製品加工段階の剥片ではなく、竪柱の先端部など木製品の一部分が剝離した木片と思われる。長さ5.9cm、幅5.0cm、厚さ1.8cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。（図版211-2/整理番号343-1/No489/ST2-1156）

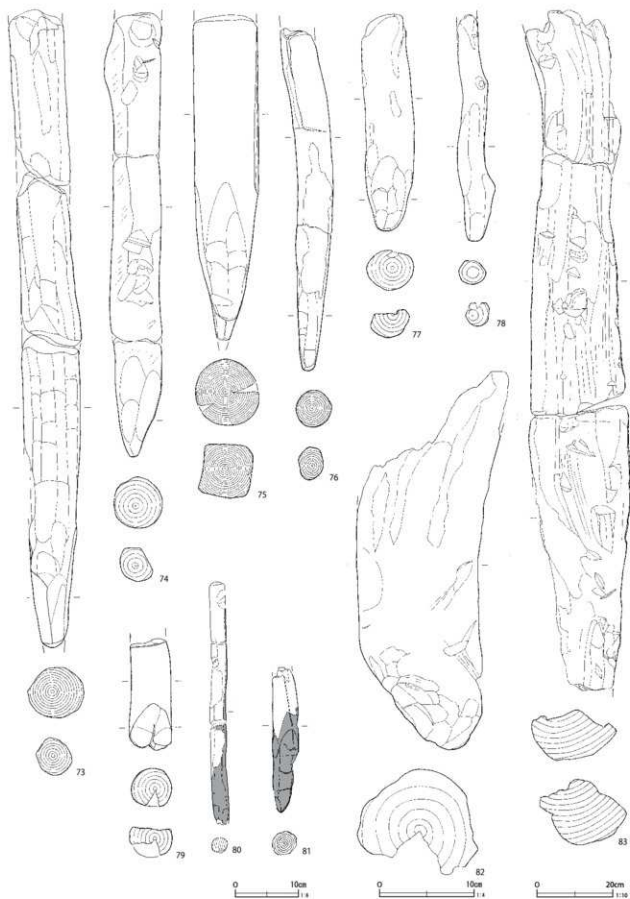
73～81は杭である。

73はほぼ全面に表面加工が残るため、建築部材の柱材などが転用されたものと推定される。磨滅が激しく杭先は丸まり、加工痕の稜も崩れ、鋭利さに欠ける。現存長101.3cm、幅9.0cm、厚さ8.1cmである。木取りは芯持丸木、樹種はスダジイである。（図版210-3/整理番号524/No501/ST2-460）

74は表面が黒色化した芯持丸木で、先端の杭先



第289图 第4号清跡第7地点出土遺物(9)



第290图 第4号沟第7地点出土物(10)

加工は変色後に施されている。恐らくは、建築部材の柱材等の丸太部材が転用されたものと推定される。加工は半面のみに3工程が行われている。上端は欠損する。現存長70.6cm、幅7.7cm、厚さ8.2cmである。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版211-1/整理番号644/No502/ST2-594)

75は先端の杭先加工が4面分割され、断面形が方形となっている。先端は欠損する。上端面には工具痕はみられず、完存もしくは折損と推定される。現存長51.8cm、幅10.0cm、厚さ10.6cmである。木取りは丸木、樹種はサクラ属である。(図版210-4/整理番号642/No333/ST2-578)

76はやや彎曲する芯持丸木に杭先加工が施されている。杭先加工は半面のみに4工程が行われている。表面には、一部剥離した箇所がある。上端は欠損し、現存長54.4cm、幅3.9cm、厚さ5.7cmである。樹種はウコギ属である。(図版211-4/整理番号588/No500/ST2-463)

77は杭先加工が一面からのみ施され、左側面に補助的なケズリ加工が行われている。上端は欠損し、現存長34.4cm、幅6.1~7.5cm、厚さ6.4cmである。芯持丸木で、樹種はクワ属である。(図版209-4/整理番号404/No457/ST2-444)

78は枝材などの細い芯持丸木の先端に、杭先加工が施されている。杭先加工は上面・両側面の3面に行われ、下面は無調整である。上端は欠損し、現存長35.9cm、幅3.7~4.3cm、厚さ3.7cmである。一部、樹皮が残存している。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版210-5/整理番号781-1/No320/ST2-561)

79は杭先の加工が一面からで、背面は欠損する。現存長17.8cm、幅6.3~6.8cm、厚さ6.0cmである。木取りは芯持丸木、樹種はコナラ属コナラ節である。(図版211-3/整理番号464/No332/ST2-434)

80は表面部の丁寧な仕上げ状態や太さなどが

ら、鋤・鉋などの農具等の柄を転用したものと推定される。先端には杭先加工が施され、加工後に焼き入れて硬化されている。先端部を欠損し、現存長38.4cm、幅2.5cm、厚さ2.4cmである。芯無削出、樹種はイチイガシである。(図版211-5/整理番号367/No477/ST2-1136)

81は枝材など細い芯持丸木の先端に杭先加工が施されている。加工は3面に分割され、加工後には強度を増すために焼き入れを行っている。上端は欠損し、現存長23.0cm、幅3.8cm、厚さ3.7cmである。樹種は同定していない。(図版211-6/整理番号716)

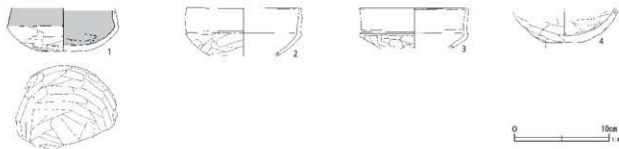
82は、径12.7cmほどもある太い芯持ち丸木で、先端が尖る。工具痕は、上方部の一部に粗い加工面がみられるものの、全体的には平滑な加工面である。材の太さや先端の尖る形状から伐採材や柱材・杭等の用途が考えられるが、加工痕が伐採時の刃物痕か杭先状の加工に伴うものか判断することは困難である。現存長40.2cmで、樹種はエノキ属である。(図版205-2/整理番号449/No368/ST2-1163)

83は半割り材で、背面には樹皮が残存する。割り面部には粗い工具痕が残されているが、加工や何らかの用途で使用されていた痕跡はみられない原材と思われる。現存長178.3cm、幅22.4~23.1cm、厚さ13.1~17.1cmである。樹種はエノキ属である。(図版205-3/整理番号387・621・857/No313/ST2-982・956)

第4号溝跡出土地点不明遺物 (第291~294図)

第291~294図は、第4号溝跡から出土した一括遺物で、地点を明確に示すことができないものである。特に、木製品については、遺物の取り上げ作業から遺物整理作業に至るまで大型水槽に保管したが、その際に、個々の遺物の取り上げNoが不明となり、出土地点が明確にできなくなってしまった一群である。

第291図1~4は、土師器である。1は赤彩さ



第291図 第4号溝跡地点不明出土遺物(1)

第91表 第4号溝跡地点不明出土遺物観察表(第291図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(12.1)	4.5		E H I J K	50	普通	に染い 橙	坏身模倣 赤彩(平底)		
2	土師器	坏	(12.1)	5.1		A C H	30	普通	に染い 橙	坏蓋模倣		
3	土師器	坏	11.5	4.3		A H I	45	普通	に染い 橙	北武蔵型坏蓋模倣		152-4
4	土師器	小型甕		3.6	4.0	C E H I K	60	普通	に染い 橙	底部へラケズリ		

れた坏身模倣坏、2・3は坏蓋模倣坏、4は平底の碗である。いずれも、銭塚・城敷Ⅳ期古段階に相当する。

第292図5～第294図23は木製品である。

5・6は農具の竪杵である。いずれも芯持丸木材から削り出されたもので、搦部のみの残存である。

5は、搦部から握部へ移行する肩部には稜を持つ。側面部にはケズリが施されているが、工具痕は不明瞭である。先端部および背面部は欠損する。現存長20.2cm、幅7.1cm、厚さ6.1cmである。樹種はツバキ属である。(図版212-1/整理番号822/ST2-565)

6は、握部を造り出した加工痕は、磨滅が激しく、加工単位が把握できない。搦部端部は欠損し、使用状況も不明である。現存長23.9cm、幅7.4cm、厚さ6.9cmである。樹種はツバキ属である。(図版212-4/整理番号10/ST2-399)

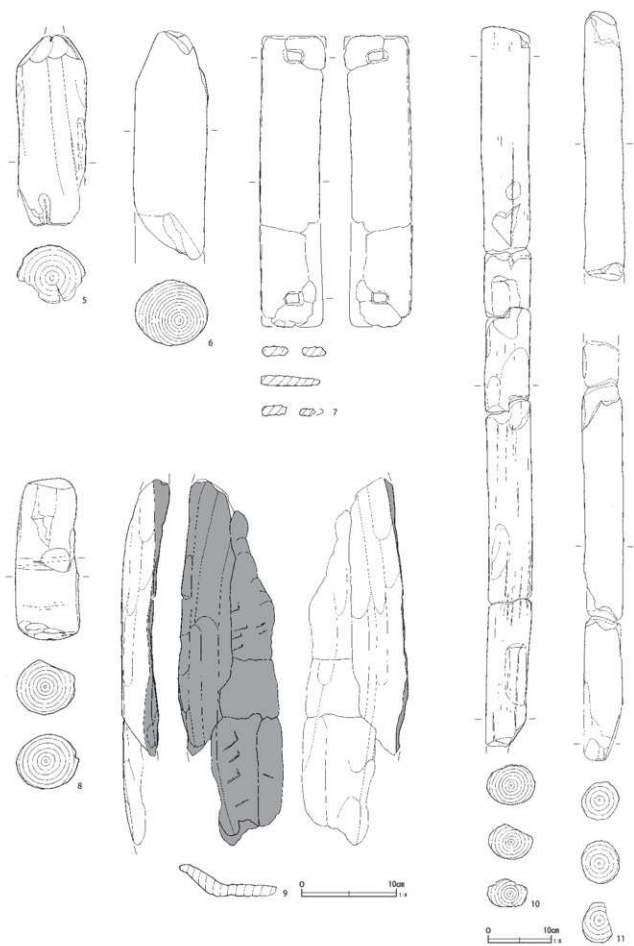
7は、長さ30.8cm、幅6.2～6.7cm、厚さ1.1～1.2cmの方形の板材である。両端には1cm×1.5cmほどの方形の貫通孔が穿たれている。用途として、板材を組み立てた指物容器の部材が考えられる。木取りは追柁目、樹種はモミ属である。(図版211-2/整理番号118/ST2-349)

8は、農具の木錘である。上下両端面には切断痕を明瞭に残す。中央付近は浅く抉り、紐のズレを防ぐ工夫が行われている。またこの抉り部を中心に、紐による緊縛痕がみられる。背面には樹皮が残っているため、竪杵・横楯の転用品ではない。長さ17.0cm、幅6.2～6.6cm、厚さ5.9cmである。木取りは芯持丸木、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。(図版212-6/整理番号98/ST2-1182)

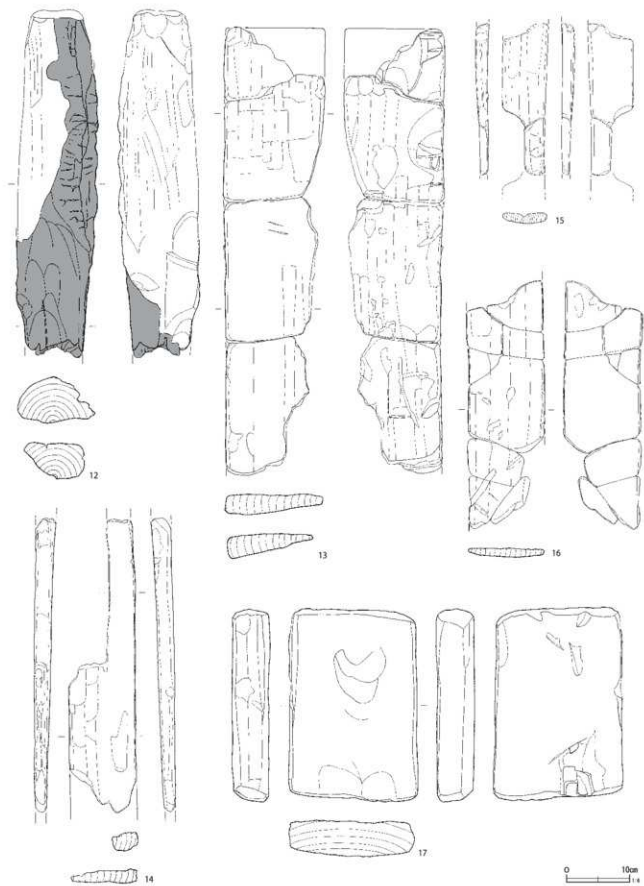
9は、容器の槽もしくは盤である。深さは、槽としては浅く、盤としては深い。半割り材の樹皮側を上面に横木取りした刃物である。内面には、工具の刃当たり痕を残す。縁部の立ち上がりはごく緩い傾斜を持ち、端部は水平に面取られている。背面は割り面が活用された平坦面が形成されている。炭化は上面部のみで、背面部には及んでいないことから、容器内面の焼き入れと推定される。現存長38.8cm、幅10.4cm、厚さ3.5cmである。樹種はケヤキである。(図版213-1/整理番号814/ST2-908)

10～14は建築部材である。

10は芯持丸木材を用いた部材である。上部部に人為的な切断痕や折損したような状況がみられないため問題も残るが、太さも加味すると、垂木と推定される。下部部には欠き込みがみられる。



第292图 第4号满迹地点不明出土遗物(2)



第293组 第4号沟迹地点不明出土物(3)

現存長103.2cm、幅6.3~7.7cm、厚さ4.5~6.3cmである。樹種はサカキである。(図版213-3/整理番号807/ST2-550)

11は垂木である。先端部には有頭棒状加工痕が残るが、頭部は欠損する。直接接合しない2つのパーツで、現存長108.3cm以上(65.4+42.9cm)、幅6.0cm、厚さ6.7cmである。表面には樹皮が残存する。木取りは芯持丸木、樹種はコナラ属クスギ節である。(図版215-1/整理番号663/ST2-897)

12は、半割り材を用いた柱材と思われる。図下半部では樹皮側面を削って平坦面を形成し、断面形が長方形を呈している。また、被熱によって表面が炭化しているために明瞭ではないが、右側面には欠き込み状に抉られた部分が残る。背面には要所に加工が施されるのみで、基本的には割り面が残されている。現存長55.3cm、幅9.6~12.2cm、厚さ5.7~7.3cmである。樹種はサカキである。(図版213-2/整理番号267/ST2-639)

13は板材で、みかん割り材の両割り面を平滑に加工し、樹皮側面には面取りを行っている。ごく一部が残った上端面は斜めに面を持ち、擦痕がみられる。現存長69.8cm、幅13.6~15.6cm、厚さ3.2~3.9cmである。樹種はイチイガシである。(図版215-4/整理番号279/ST2-398)

14は板材である。みかん割り材の各面にケズリを施したのもで、板の左右の厚さが異なる。図上半部には方形の欠き込みが形成されている。部位の特定は困難であるが、開口部の榫・蹴放し等が候補に挙げられる。現存長46.4cm、幅10.5cm、厚さ2.2~2.8cmである。樹種はモミ属である。(図版214-4/整理番号23/ST2-1170)

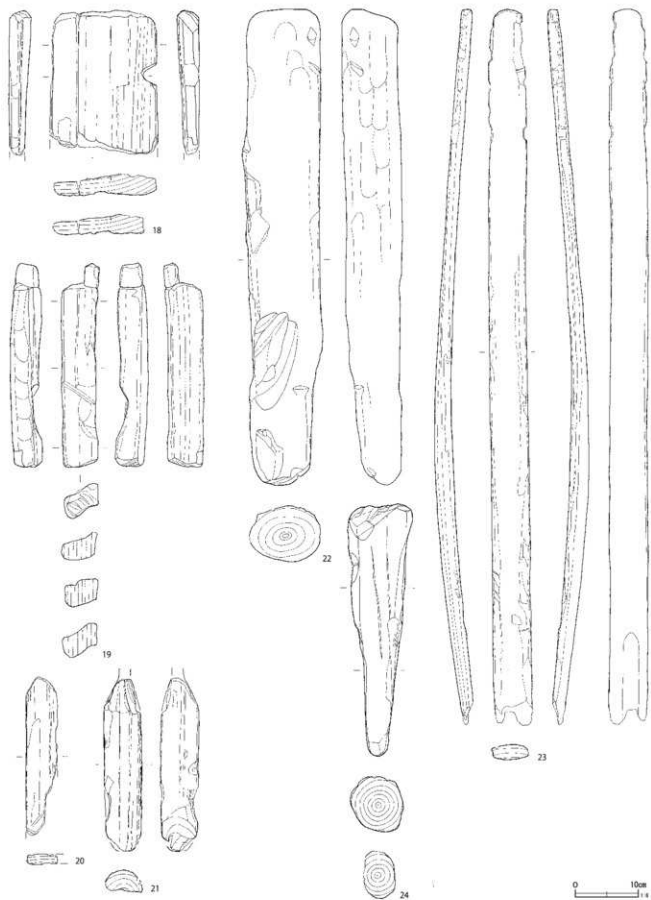
15は、板材である。比較的幅の狭い長手の板材で、欠き込みがみられる。用途は不明であるが、建築部材もしくは機具などの部材と思われる板材である。現存長23.6cm、幅7.0cm、厚さ1.8cmである。木取りは芯持割り出しで、樹種はエゴノキ属

である。(図版212-5/整理番号591-3/No154/ST2-454)

16は、用途不明の板材である。上面には平坦面を強く意識した深いケズリ加工が施され、工具痕の端に段差が生じている。一方、背面の加工は緩く、削りも浅い。そのため、緩やかな弧を描いている。側面部は部分的に面取りが行われているが、きれいな面は形成されていない。このように、用途の確定は困難であるが、正面観のはっきりした板材である。現存長39.2cm、幅12.2cm、厚さ1.5cmである。木取りは追柂目、樹種はムクロジである。(図版214-16/整理番号837/ST2-567)

17は、平面30.8cm×28.8cm、幅19.8cm、厚さ5.8cmの長方形の厚い板材である。板目材の樹皮側を上面として、丁寧な平面が形成されている。ただし、中央部には抉り込まれたように深く入り込んだ工具痕も観察される。左側面には平滑な垂直面が形成されている。右側面は上下に分けてケズリが施されているため、中央部が外側に突き出す。背面には積極的な面加工は行われていないため、表裏がハッキリとした板材である。下端隅には深く剥離したような痕跡が残り、本来存在していた出納状の突起部が折損した可能性も考えられる。建築部材とすると、ひとつの部材として捉えることはできない。板の厚みから、床板材・開口部材・横架材の転用とも考えられるが、上下端に二次的な切断痕を確認することは困難である。ほかには、鋤・鎌の未成品(原材)なども候補とできるが、側面部の丁寧な面取りの必要がなく、説明に窮する。そのため、用途不明の板材として報告する。樹種はモミ属である。(図版215-3/整理番号170/ST2-680)

18は板材である。長手の建築部材が折損したものと推定されるが、部位は不明である。各面にケズリ痕が観察される一方で、表面の剥離も目立つ。右側面には、長さ3.3cm、深さ2.0cmの小規模な抉り込みがみられる。現存長22.9cm、幅16.3cm、



第294图 第4号满迹地点不明出土遗物(4)

厚さ3.2～3.4cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。(図版212-3/整理番号105/ST2-906)

19は用途不明品である。棒状の割り材を断面L字形に加工し、先端に出納を有する建築部材を転用したものと推定される。加工痕の状況から判断すると、転用時に図下端部を切断し、側面には欠き込み状の挟りが入れている。転用後の用途については、何らかの部材として利用されていたものと想定される。現存長32.2cm、幅5.9～6.2cm、厚さ3.6～3.8cmである。樹種はムクロジである。(図版214-2/整理番号281-1/ST2-1138)

20は用途不明の板材である。上面はケズリ加工によって平滑に仕上げられている。一方、背面は基本無調整で、製材時の凹凸が残されている。側面は丁寧に面取りされている。上下ともに折損と思われる。現存長24.9cm、幅4.9cm、厚さ1.6cmである。大きさ等から指物容器や器具などの部材が候補として考えられる。木取りは板目、樹種はモミ属である。(図版216-20/整理番号456/ST2-799)

21は、農具の堅杵が転用された杭である。半截もしくは半割した堅杵の搦部の端部に杭先加工を施したものである。加工は割れ面側から行われている。転用前の堅杵は径が細いもので、芯持丸木材から握部が削り出されている。搦部から握部に移行する肩部には、比較的しっかりとした稜が形成されている。現存長27.2cm、幅6.0cm、厚さ3.6cmである。樹種はツバキ属である。(図版216-2/整理番号213/ST2-344)

22は用途不明の、建築部材の柱材転用品である。

下端部が二次的に切断されたもので、ほかに柱材として加工された本来の面が残されている。特に、右側面には面取りされたケズリ痕が観察できる。下端付近の左側面には欠き込み状の挟りがみられる。きわめて雑な加工で、本来の仕口加工か、転用に伴うものかを判断することは困難である。現存長75.3cm、幅11.3cm、厚さ8.8cmである。木取りは芯持丸木、樹種はサカキである。(図版215-2/整理番号235/ST2-604)

23は幅が狭く長い板状部材で、用途は不明である。上端部は摩耗が激しい。両側面部の対峙する位置には、長さ1.5～3.2cm、深さ0.3～0.5cmほどの挟り込みが、それぞれ4ヶ所ずつみられる。下端部は二股に分かれているが、加工痕や調整方法の観察が困難である。形状的には用途を考える上でのヒントになる可能性が高く、偶然の形状とは捉えにくい。また、木材の樹皮側に弓状に反りかえっている。現存112.7cm、幅5.9cm、厚さ2.5cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。用途としては、物差しや器具・調製品の部材等が候補にあげられる。(図版216-3/整理番号77/ST2-601)

24は杭である。芯持丸木の一面のみが平坦に削られた建築部材の柱材を切断し、杭先加工が施された転用杭である。上端の切断面には粗い工具痕がこのころ。杭先加工は両側面側に行われ、上面には柱材の加工面、下面には無調整面が残されている。現存長39.5cm、直径10.5cmである。樹種はヌルデである。(図版214-3/整理番号598/ST2-893)

報告書抄録

ふりがな	しろしきいせき							
書名	城敷遺跡Ⅱ							
副書名	高坂駅東口第二特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第382集							
編著者名	山本 靖							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1 TEL. 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2011(平成23)年8月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろしきいせき 城敷遺跡 (第1・2・3次)	さいたまけんひがししまつやまし 埼玉県東松山市 おとあざひがしかきか ほんら 大字高坂347番地 ほか 1他	11212	370	36°00'24"	140°15'38"	20030408) 20030430 20030801) 20040324 20040408) 20050331 20050401) 20060331 20080916) 20081031	22.300	土地区画 整理
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
城敷遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 84軒	土師器 須恵器 石製 模造品 鉄製品 石製品 木製 品	陶邑産・東海産の初期須恵器出 土。 大溝跡から多量の土器・木製品 が出土。 石製模造品と滑石製白玉製作剥 片の集中地点2箇所発見。 掘立柱建物跡と同時代の建築部 材が大溝跡から出土。			
			掘立柱建物跡 13棟					
			柱穴列 1列					
			土壇 9基					
			溝跡 1条					
			大溝跡 1条4地点					
			滑石製品集中地点 2箇所					
		中・近世	溝跡 2条	板碑 磁器 陶器				
		時期不明	土壇 23基					
			溝跡 9条					
			ピット 多数					

要 約

城敷遺跡は、埼玉県東松山市高坂に位置する。都幾川右岸の自然堤防上に立地し、標高は19m 前後である。北側に隣接する銭塚遺跡とは、同一の遺跡と捉えられる。また東方約500m に所在する反町遺跡は有機的な関連をもっていた遺跡で、城敷・銭塚・反町の3遺跡でひとつの遺跡群が構成されていたと考えられる。

城敷遺跡は、古墳時代前期と古墳時代中期後半～古墳時代後期初頭の二つの時期に栄えた集落である。集落の中を大溝（河川流路）が蛇行して流れており、大溝には、堰状施設や護岸施設によって水位や流路を制御し、水辺に昇降するための階段状施設などが設けられていた。大溝内からは、多量の土器や木製品とともに祭祀の跡も発見され、集落と大溝が一体となって機能していたことが判明した。出土した木製の農具は、日常的に木の道具が使われていたことを伝えている。また、重厚な扉板や建築部材が数多く発見され、大規模な建造物の存在を予想させる。

特筆されるのは、古墳時代中期後半以降の集落に伴う、2箇所の滑石製品集中地点が発見されたことである。剣形品・有孔門板・白玉とともに、未成品や製作途上の欠損品・剥片が2,000点以上も発見されている。また、8軒の住居跡からも同様の製作途上の欠損品・剥片が多数出土しており、この時期の滑石製品の工房跡として重要な例と言える。

古墳時代の土器には、陶邑産と東海産と推定される初期須恵器が多く含まれている。中には、破碎されたような状態で出土したものがあり、何らかの儀式に用いられたと考えられる。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第382集

城 敷 遺 跡 II

高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ
(第1分冊)

平成23年8月25日 印刷

平成23年8月30日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1

電話 0493-39-3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／株式会社 文化新聞社